

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第97集

# 五庵Ⅰ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# 五庵 I 遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査





土壙出土の赤彩土器とカラス貝



逆茂木をもつ陥し穴状遺構





色調の異なる内面黒色処理坏



土葬墓出土の定盤

## 序

本県は遺跡の宝庫といわれるほど、縄文時代文化を中心とする数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しております。これら先人たちの残した文化財を保護し、保存していくことは我々県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本県は広大な面積を有し、その大部分が山地であります。現代生活を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発、特にその基幹となる道路など交通網整備は、県民の切実な願いでもあります。

このように、保護保存と開発という相反する事業の調和のとれた行政施策が今日的課題となってきております。

当文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行ない、その記録を残す措置をとって参りました。

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う関連遺跡の発掘調査として、昭和59年度に行った浄法寺町五庵Ⅰ遺跡の調査結果をまとめたものであります。

調査の結果、縄文時代、平安時代の集落や土坑、陥し穴状遺構などの生活の跡、江戸時代の土葬墓などが発見されました。殊にも平安時代の住居跡は多数発見され、その多くが焼失したもので、屋根材や床材と思われる炭化材が確認されております。また陥し穴状遺構にはいくつかのタイプのあることも判明しました。これらの貴重な資料は当地方の歴史解明に大いに役立つものと考えます。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解と愛護の一助になれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成に御援助・御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所、浄法寺町、浄法寺町教育委員会をはじめ関係各位に心から感謝するとともに、今後の御指導、御協力をお願い申し上げます。

昭和60年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中 村 直



## 例 言

1. 本報告書は、岩手県二戸郡浄法寺町大字駒ヶ嶺字五庵2ほかにある五庵Ⅰ遺跡の発掘調査結果を取録したものである。
2. 本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道八戸線の建設に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、(財)岩手県埋蔵文化財センターが実施した。

3. 本遺跡の岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号と略号は次のとおりである。

遺跡番号 J E 46—0151 遺跡略号 G A I—84

4. 発掘調査に際しては浄法寺町、浄法寺町教育委員会の御協力をいただいた。
5. 次の方々に分析、鑑定、保存処理を依頼した。

石質鑑定	佐藤二郎(岩手県立大船渡農業高校教諭)
樹種鑑定	早坂松治郎(岩手県木炭協会)
炭化穀類	佐藤敏也(国分寺市文化財専門委員)
炭化種子	松谷暁子(城西歯科大学講師)
人骨の鑑定	野坂洋一郎(岩手医科大学教授)
火山灰の蛍光X線分析	三辻利一(奈良教育大学教授)
火山灰の鉱物組成分析	井上克弘(岩手大学教授)
胎土の分析	三辻利一(奈良教育大学教授)
放射性炭素年代測定	木越邦彦(学習院大学教授)
炭化木材の保存処理	赤沼英男(岩手県立博物館学芸調査員)

6. 発掘調査、室内整理にあたり、次の方々から指導、助言をいただき、資料提供を受けた。

宮本長二郎	(奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部)
光谷拓実	(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター)
熊谷太郎	(秋田県立埋蔵文化財センター)
高松俊雄	(𠂇郡山市埋文発掘調査事業団)
宮沢寛	(横浜市埋蔵文化財調査委員会)
中村裕	(浄法寺町教育委員会)
福田友之	(青森県教育庁文化課)
工藤大	(青森県埋蔵文化財調査センター)
成田成治	(青森県埋蔵文化財調査センター)



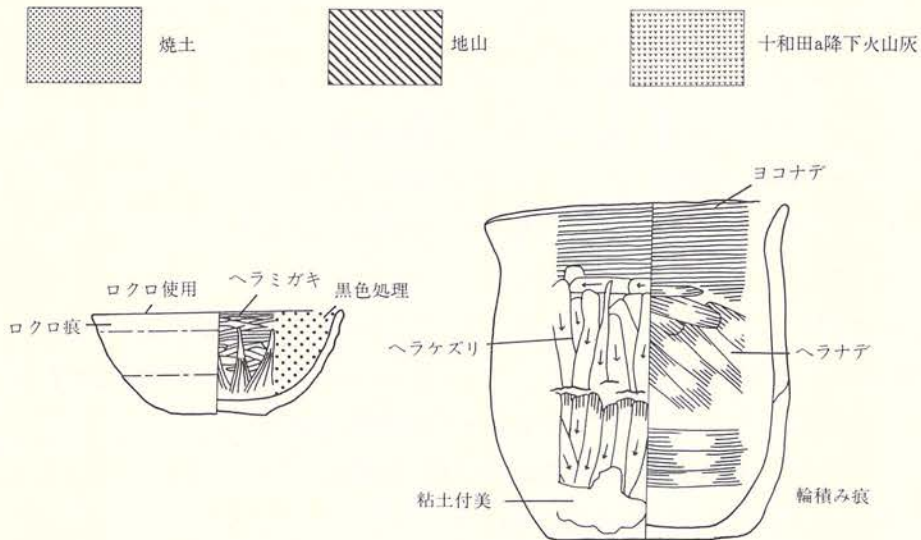
沢田 邦久 (岩手県立博物館)

7. 本報告書の執筆分担は次のとおりである。

I 調査に至る経過	近藤 宗光
II 遺跡の位置と環境	石川 長善
III 調査経過と方法	石川 長喜
IV 縄文時代の遺構と遺物	1 石川 長喜 2~4 渡辺 洋一
V 古代の遺構と遺物	1・2・4 石川 長喜 3 渡辺 洋一
VI 中・近世の遺構と遺物	石川 長喜
VII まとめ	1 の竪穴住居跡、石川長喜 他は渡辺洋一 2 の土壌 渡辺洋一 他は石川長喜 3・4 石川長喜

8. 調査の諸記録と遺物は(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが保管している。

9. 図版中のスクリーン・トーン及びその他の表示は次のとおりである。



# 本文目次

序

例言

I 調査に至る経過	1	V 古代の遺構と遺物	117
II 遺跡の位置と環境	3	1. 竪穴住居跡	117
1. 遺跡の位置	3	2. 焼土遺構	208
2. 遺跡の環境	3	3. 土 壙	212
地 形	3	4. 遺 物	226
地 質	5	VI 中・近世の遺構と遺物	230
基本土層	7	1. 竪穴住居跡	230
周辺の遺跡	10	2. 土 壙	232
III 調査経過と方法	15	3. 土葬墓	234
1. 調査経過	15	4. その他の遺構	249
2. 野外調査	17	5. 遺 物	250
3. 室内整理	20	VII まとめ	367
IV 縄文時代の遺構と遺物	23	1. 縄文時代	367
1. 竪穴住居跡	23	2. 古 代	375
2. 土 壙	34	3. 中・近世	400
3. 陥し穴状遺構	50	4. まとめ	404
4. 遺 物	95		

# 図 版 目 次

第1図 遺跡位置図	2	第9図 VI H20竪穴住居跡柱穴断面	25
第2図 周辺地形図	4	第10図 VII B18竪穴住居跡	26
第3図 地形分類図	6	第11図 VII B18竪穴住居跡出土遺物	28
第4図 基本土層模式図と土性縦断面	8	第12図 VII F22竪穴住居跡	29
第5図 遺跡分布図	12	第13図 VII F22竪穴住居跡出土遺物	30
第6図 粗掘、精査進行状況図	15	第14図 VIII A23竪穴住居跡	32
第7図 地区割図	18	第15図 VIII A23竪穴住居跡出土遺物	33
第8図 VI H20竪穴住居跡	24	第16図 土壙(皿形)	35

第17図	土壙出土遺物(皿形)……………	37	第51図	遺構以外の遺物(石器4)……………	114
第18図	土壙(フラスコ形1)……………	38	第52図	遺構以外の遺物(石器5)……………	115
第19図	土壙(フラスコ形2)……………	40	第53図	I C 4 竪穴住居跡(1)……………	118
第20図	VII H 25-2土壙(フラスコ形3)……	43	第54図	I C 4 竪穴住居跡(2)……………	119
第23図	VII I 24土壙(フラスコ形4)……	45	第55図	I C 4 竪穴住居跡出土遺物(1) ……	121
第24図	土壙(フラスコ形5)……………	47	第56図	I C 4 竪穴住居跡出土遺物(2) ……	122
第25図	陥し穴状遺構(円形1)……………	49	第57図	I C 4 竪穴住居跡出土遺物(3) ……	124
第26図	陥し穴状遺構(円形2)……………	52	第58図	IV G 4 竪穴住居跡……………	125
第27図	陥し穴状遺構(円形3)……………	54	第59図	IV G 4 竪穴住居跡出土遺物(1) ……	127
第28図	陥し穴状遺構(円形4)……………	56	第60図	VI G 4 竪穴住居跡出土遺物(2) ……	128
第29図	陥し穴状遺構(円形5)……………	59	第61図	IV G 7 竪穴住居跡(1)……………	130
第30図	陥し穴状遺構(円形6)……………	62	第62図	IV G 7 竪穴住居跡(2)……………	131
第31図	陥し穴状遺構(円形7)……………	65	第63図	IV G 7 竪穴住居跡出土遺物(1) ……	133
第32図	陥し穴状遺構(溝状1)……………	68	第64図	IV G 7 竪穴住居跡出土遺物(2) ……	134
第33図	陥し穴状遺構(溝状2)……………	71	第65図	IV G 7 竪穴住居跡出土遺物(3) ……	135
第34図	陥し穴状遺構(溝状3)……………	74	第66図	IV G 7 竪穴住居跡出土遺物(4) ……	137
第35図	陥し穴状遺構(溝状4)……………	78	第67図	IV J 2 竪穴住居跡……………	138
第36図	陥し穴状遺構(溝状5)……………	82	第68図	IV J 2 竪穴住居跡出土遺物……………	139
第37図	陥し穴状遺構(溝状6)……………	85	第69図	IV J 2 竪穴住居跡(1)……………	140
第38図	陥し穴状遺構(溝状7)……………	88	第70図	V A 4 竪穴住居跡(2)……………	142
第39図	陥し穴状遺構(長方形1)……………	90	第71図	V A 4 竪穴住居跡出土遺物(1) ……	143
第40図	陥し穴状遺構出土遺物(長方形2) ……	96	第72図	V A 4 竪穴住居跡出土遺物(2) ……	144
第41図	遺構以外の遺物(土器1)……………	97	第73図	V A 4 竪穴住居跡出土遺物(3) ……	145
第42図	遺構以外の遺物(土器2)……………	98	第74図	V A 4 竪穴住居跡……………	147
第43図	遺構以外の遺物(土器3)……………	102	第75図	V H 1 竪穴住居跡出土遺物(1) ……	149
第44図	遺構以外の遺物(土器4)……………	103	第76図	V H 1 竪穴住居跡出土遺物(2) ……	150
第45図	遺構以外の遺物(土器5)……………	104	第77図	VI F 13竪穴住居跡(1)……………	152
第46図	遺構以外の遺物(土器6)……………	105	第78図	VI F 13竪穴住居跡(2)……………	153
第47図	遺構以外の遺物(土器、土製品7) ……	106	第79図	VI F 13竪穴住居跡(3)……………	154
第48図	遺構以外の遺物(石器1)……………	111	第80図	VI F 13竪穴住居跡出土遺物……………	155
第49図	遺構以外の遺物(石器2)……………	112	第81図	VI E 19竪穴住居跡(1)……………	157
第50図	遺構以外の遺物(石器3)……………	113	第82図	VI E 19竪穴住居跡(2)……………	158



第83図	Ⅵ E 19 竪穴住居跡 (3) ……………	159	第115図	Ⅶ G 8 竪穴住居跡 (2) ……………	205
第84図	Ⅵ E 19 竪穴住居跡出土遺物 ……………	160	第116図	Ⅶ G 8 竪穴住居跡出土遺物 ……………	206
第85図	Ⅵ I 16 竪穴住居跡 (1) ……………	162	第117図	焼土遺構と遺物 ……………	209
第86図	Ⅵ I 16 竪穴住居跡 (2) ……………	163	第118図	土塋(ビーカー形1) ……………	213
第87図	Ⅵ I 16 竪穴住居跡出土遺物 (1) ……	165	第119図	土塋(ビーカー形2) ……………	215
第88図	Ⅵ I 16 竪穴住居跡出土遺物 (2) ……	166	第120図	土塋出土遺跡 (1) ……………	217
第89図	Ⅶ A 16 竪穴住居跡 (1) ……………	167	第121図	土塋(ビーカー形3) ……………	220
第90図	Ⅶ A 16 竪穴住居跡 (2) ……………	169	第122図	土塋出土遺物 (2) ……………	222
第91図	Ⅶ A 16 竪穴住居跡 (3) ……………	170	第123図	土塋(ビーカー形4、皿形) ……………	224
第92図	Ⅶ A 16 竪穴住居跡出土遺物 (1) ……	172	第124図	土塋出土遺物 (3) ……………	226
第93図	Ⅶ A 16 竪穴住居跡出土遺物 (2) ……	173	第125図	遺構以外の遺物 (1) ……………	227
第94図	Ⅶ B 21 竪穴住居跡 (1) ……………	175	第126図	遺構以外の遺物 (2) ……………	228
第95図	Ⅶ B 21 竪穴住居跡 (2) ……………	176	第127図	Ⅵ G 5 竪穴住居跡 (1) ……………	231
第96図	Ⅶ B 21 竪穴住居跡 (3) ……………	177	第128図	Ⅶ G 5 竪穴住居跡 (2) ……………	232
第97図	Ⅶ B 21 竪穴住居跡 (4) ……………	178	第129図	土塋・出土遺物 ……………	233
第98図	Ⅶ B 21 竪穴住居跡 (5) ……………	179	第130図	土葬墓配置図 ……………	235
第99図	Ⅶ B 21 竪穴住居跡出土遺物 (1) ……	181	第131図	V G 1-1 土葬墓 ……………	236
第100図	Ⅶ B 21 竪穴住居跡出土遺物 (2) ……	182	第132図	V G 1-2 土葬墓 (1) ……………	238
第101図	Ⅶ B 21 竪穴住居跡出土遺物 (3) ……	183	第133図	V G 1-2 土葬墓 (2) ……………	240
第102図	Ⅶ E 16 竪穴住居跡 (1) ……………	185	第134図	V G 1-3 土葬墓 (1) ……………	242
第103図	Ⅶ E 16 竪穴住居跡 (2) ……………	186	第135図	V G 1-3 土葬墓 (2) ……………	243
第104図	Ⅶ E 16 竪穴住居跡 (3) ……………	187	第136図	V G 1-4 土葬墓 ……………	245
第105図	Ⅶ E 16 竪穴住居跡出土遺物 (1) ……	189	第137図	V G 1-5 土葬墓 ……………	246
第106図	Ⅶ E 16 竪穴住居跡出土遺物 (2) ……	190	第138図	V G 1-6 土葬墓 ……………	248
第107図	Ⅶ F 18 竪穴住居跡 (1) ……………	192	第139図	その他の遺構 ……………	249
第108図	Ⅶ F 18 竪穴住居跡 (2) ……………	193	第142図	竪穴住居跡相関図 ……………	376
第109図	Ⅶ F 18 竪穴住居跡出土遺物 ……	195	第143図	竪穴住居跡の方位 ……………	377
第110図	Ⅶ F 23 竪穴住居跡 (1) ……………	197	第144図	Ⅳ G 7 竪穴住居跡遺物分布図 ……	382
第111図	Ⅶ F 23 竪穴住居跡 (2) ……………	198	第145図	Ⅶ A 16 竪穴住居跡遺物分布図 ……	383
第112図	Ⅶ F 23 竪穴住居跡出土遺物 (1) ……	200	第146図	敷板床模式図 ……………	386
第113図	Ⅶ F 23 竪穴住居跡出土遺物 (2) ……	201	第147図	敷板をもつ住居跡例(模式図) ……	388
第114図	Ⅶ G 8 竪穴住居跡 (1) ……………	204	第148図	カラス具：部分の名称 ……………	406

第149図 各陥し穴状遺構関連グラフ…… 410  
第150図 土壙（平安時代）関連グラフ…… 411

第151図 土壙（平安時代）  
陥し穴状遺構 配列図…… 413

## 写真図版目次

図版 1 調査区全景(空中写真)……………253	図版31 陥し穴状遺構—溝状(10・11・13・14) 283
図版 2 遺構集中区(空中写真)……………254	図版32 陥し穴状遺構—溝状(15~18・28) 284
図版 3 調査前遠景……………255	図版33 陥し穴状遺構—溝状(19~23) ……285
図版 4 現地説明会・人骨取り上げ状況…256	図版34 陥し穴状遺構—溝状(24~30) ……286
図版 5 VI H 20 堅穴住居跡……………257	図版35 陥し穴状遺構—溝状(31~35) ……287
図版 6 VII B 18 堅穴住居跡……………258	図版36 陥し穴状遺構—溝状(36~40) ……288
図版 7 VII F 22 堅穴住居跡……………259	図版37 陥し穴状遺構—長方形(1・2・4) 289
図版 8 VIII A 23 堅穴住居跡……………260	図版38 陥し穴状遺構—長方形(3・5) ……290
図版 9 VI H 20・VII B 18 堅穴住居跡出土遺物 261	図版39 陥し穴状遺構—長方形(6・7) ……291
図版10 VII F 22 堅穴住居跡出土遺物……………262	図版40 土壙(皿形・フラスコ形)出土遺物(1) 292
図版11 VIII A 23 堅穴住居跡出土遺物……………263	図版41 VII H 25—2 土壙出土遺物 (2)……………293
図版12 土壙—皿形(1~4) ……264	図版42 VII H 25—2 土壙出土遺物 (3)……………294
図版13 土壙—皿形(5~7) ……265	図版43 陥し穴状遺構(溝状・長方形) 出土遺物 (4)……………295
図版14 土壙—フラスコ形(1・2・4) ……266	図版44 遺構以外の遺物(土器1) ……296
図版15 土壙—フラスコ形(3・5・6~8) ……267	図版45 遺構以外の遺物(土器2) ……297
図版16 土壙—フラスコ形(9~11) ……268	図版46 遺構以外の遺物(土器3) ……298
図版17 土壙—フラスコ形(12~14) ……269	図版47 遺構以外の遺物(土器4) ……299
図版18 陥し穴状遺構—円形(1~3) ……270	図版48 遺構以外の遺物(土器5) ……300
図版19 陥し穴状遺構—円形(4~6) ……271	図版49 遺構以外の遺物(石器1) ……301
図版20 陥し穴状遺構—円形(7~9) ……272	図版50 遺構以外の遺物(石器2) ……302
図版21 陥し穴状遺構—円形(10~12) ……273	図版51 遺構以外の遺物(石器3) ……303
図版22 陥し穴状遺構—円形(13・14・16) ……274	図版52 遺構以外の遺物(石器4) ……304
図版23 陥し穴状遺構—円形(15・17) ……275	図版53 I C 4 堅穴住居跡……………305
図版24 陥し穴状遺構—円形(18~21) ……276	図版54 IV G 4 堅穴住居跡……………306
図版25 陥し穴状遺構—円形(22~24・26) ……277	図版55 IV G 7 堅穴住居跡……………307
図版26 陥し穴状遺構—円形(25・27・28) ……278	図版56 IV G 7 堅穴住居跡(炭化材) ……308
図版27 陥し穴状遺構—円形(29~31) ……279	図版57 IV J 2 堅穴住居跡……………309
図版28 陥し穴状遺構—円形(32~34) ……280	図版58 V A 4 堅穴住居跡……………310
図版29 陥し穴状遺構—溝状(1~5) ……281	図版59 V H 1 堅穴住居跡……………311
図版30 陥し穴状遺構—溝状(6~9・12) ……282	



図版60	Ⅵ F 13 竪穴住居跡……………312	図版87	Ⅶ G 8 竪穴住居跡出土遺物……………339
図版61	Ⅵ F 13 竪穴住居跡(炭化材)……………313	図版88	焼土遺構……………340
図版62	Ⅵ E 19 竪穴住居跡……………314	図版89	焼土遺構出土遺物……………341
図版63	Ⅵ E 19 竪穴住居跡(炭化材)……………315	図版90	土壌(1～2)……………342
図版64	Ⅵ I 16 竪穴住居跡……………316	図版91	土壌(3～4)……………343
図版65	Ⅶ A 16 竪穴住居跡……………317	図版92	土壌(5～7)……………344
図版66	Ⅶ A 16 竪穴住居跡(炭化材1)……………318	図版93	土壌(8～10)……………345
図版67	Ⅶ A 16 竪穴住居跡(炭化材2)……………319	図版94	土壌(10・12)……………346
図版68	Ⅶ B 21 竪穴住居跡……………320	図版95	土壌(13～14)……………347
図版69	Ⅶ B 21・Ⅶ F 16 竪穴住居跡……………321	図版96	土壌(15～16)……………348
図版70	Ⅶ E 16 竪穴住居跡……………322	図版97	土壌出土遺物(1)……………349
図版71	Ⅶ F 18 竪穴住居跡……………323	図版98	土壌出土遺物(2)……………350
図版72	Ⅶ F 18・Ⅶ F 23 竪穴住居跡……………324	図版99	土壌出土遺物(3)……………351
図版73	Ⅶ F 23 竪穴住居跡……………325	図版100	遺構以外の遺物(土師器・須恵器 砥石)……………352
図版74	Ⅶ G 8 竪穴住居跡……………326	図版101	その他の遺物(炭化穀類・堅果類)……………353
図版75	I C 4 竪穴住居跡出土遺物……………327	図版102	Ⅵ G 5 竪穴住居跡……………354
図版76	Ⅳ G 4 竪穴住居跡出土遺物……………328	図版103	土壌……………355
図版77	Ⅳ G 7 竪穴住居跡出土遺物……………329	図版104	土葬墓(1)……………356
図版78	Ⅳ J 2・Ⅴ A 4 竪穴住居跡 出土遺物……………330	図版105	土葬墓(2)……………357
図版79	Ⅴ H 1 竪穴住居跡出土遺物……………331	図版106	Ⅴ G 1-1 土葬墓出土遺物……………358
図版80	Ⅵ F 13・Ⅶ E 19 竪穴住居跡 出土遺物……………332	図版107	Ⅴ G 1-2 土葬墓出土遺物……………359
図版81	Ⅵ I 16 竪穴住居跡出土遺物……………333	図版108	Ⅴ G 1-2・3 土葬墓出土遺物……………360
図版82	Ⅶ A 16 竪穴住居跡出土遺物……………334	図版109	Ⅴ G 1-3・4 土葬墓出土遺物……………361
図版83	Ⅶ B 21 竪穴住居跡出土遺物……………335	図版110	Ⅴ G 1-6 土葬墓出土遺物……………362
図版84	Ⅶ E 16 竪穴住居跡出土遺物……………336	図版111	その他の遺物(1)……………363
図版85	Ⅶ F 18 竪穴住居跡出土遺物……………337	図版112	その他の遺物(2)……………364
図版86	Ⅶ F 23 竪穴住居跡出土遺物……………338	図版113	その他の遺物(3)……………365
		図版114	土師器……………366

## 表 目 次

周辺の遺跡一覧表	13
V G 1 - 1 土葬墓釘の計測表	235
V G 1 - 2 土葬墓釘の計測表	239
V G 1 - 3 土葬墓釘の計測表	244
V G 1 - 6 土葬墓釘の計測表	247
9 (VII H25-2) 土壙出土カラス貝一覧表	406
土壙(皿形・フラスコ形)一覧表	407
陥し穴状遺構(円形)一覧表	407
陥し穴状遺構(溝状)一覧表	408
陥し穴状遺構(長方形)一覧表	409
土壙(平安時代)一覧表	411

## 付 編 目 次

1. 岩手県内遺跡出土火山灰の蛍光X線分析	415
2. 安代町・浄法寺町における平安遺跡埋土中の火山灰	419
3. 五庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の穀類	425
4. 五庵Ⅰ・Ⅱ遺跡出土の炭化種子について	436
5. 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告	438
6. 浄法寺町五庵Ⅰ遺跡出土人骨の鑑定	440
7. 五庵Ⅰ遺跡出土土器の蛍光X線分析	445

## 付 編 写 真 目 次

五庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の穀類	453
五庵Ⅰ・Ⅱ遺跡出土の炭化種子について	456
浄法寺町五庵Ⅰ遺跡出土人骨の鑑定	460
付図五庵Ⅰ遺跡全体図	

## I 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、二戸郡安代町で青森線と分岐し、青森県八戸市に至る約68kmの高速自動車専用道である。このうち本県にかかわる第7次施行命令区間は約27.6km、第8次施行命令区間は26.7kmである。第7次施行命令区間に所在する遺跡の調査は昭和58年度で全て終了しており、安代町の分岐点から浄法寺町、二戸市を經由して一戸インターチェンジに至る第8次施行命令区間の発掘調査を終了と同時に、八戸線関連の調査は全て終了することとなる。

昭和53年11月に第8次施行命令が出され、その後命令区間の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて、県教育委員会と日本道路公団仙台建設局との間で協議が重ねられた。そのなかで浄法寺町には天台宗の古刹で種々の重要文化財を有する天台寺が存在し、天台寺緑地保全地域となっていることから、路線はこれを避けて設定されることとなった。

県教育委員会文化課では、昭和54年12月に日本道路公団の協力を得て、実施計画路線沿いを500m幅で埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行い、その結果をもとに更に両者で協議を重ねた。昭和56年5月の日本道路公団による路線発表後、文化課では路線敷地内における埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行い、約30の遺跡を確認した。昭和57年度には安代町所在の5遺跡の発掘調査範囲について確認調査を行った。

昭和58年度には安代町内4遺跡の発掘調査が当センターに委託され、湯の沢Ⅲ遺跡、繋沢Ⅱ遺跡、石神Ⅱ遺跡の調査と、関沢口遺跡の粗掘遺構確認調査が行われた。また、同年度中に浄法寺町所在の12遺跡について発掘調査範囲の確認調査が行われた。

昭和59年度には、安代町の2遺跡・関沢口遺跡の継続調査と水神遺跡の調査及び浄法寺町の9遺跡・柿の木平Ⅲ遺跡、五庵Ⅰ遺跡、五庵Ⅱ遺跡、海上Ⅰ遺跡、海上Ⅱ遺跡、大久保遺跡の調査と、沼久保遺跡、桂平遺跡、飛鳥台地Ⅰ遺跡の工事用道路分の調査が委託されて、調査を実施した。このうち、沼久保・桂平・飛鳥台地Ⅰ遺跡の3遺跡は昭和60年度の継続調査となった。また、同年度中には、二戸市と一戸町のそれぞれ6遺跡についての発掘調査範囲の確認調査が行われ、その際に浄法寺町の五庵Ⅲ遺跡・広沖遺跡が新たに追加された。これで浄法寺町の遺跡は従前に確認された田余内Ⅰ・田余内Ⅱ・安比内Ⅰ遺跡を加え14遺跡となり、これらの発掘調査は昭和60年度に行われることとなった。





第1図 遺跡位置図



## Ⅱ 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置

五庵Ⅰ遺跡は浄法寺町役場の南西約3.5km、町立大嶺小中学校の東約500mに位置している。本遺跡の所在する浄法寺町は岩手県の北西部（盛岡市の北方88km）にあたり、北が青森県田子町、北東が二戸市、南東が一戸町、そして、南及び西が安代町に接している。浄法寺町は明治22年に浄法寺村・駒ヶ嶺村・大清水村・漆沢村・御山村の5ヶ村が合併して浄法寺村となり、昭和15年に町制施行によって誕生した町で、五庵Ⅰ遺跡は旧駒ヶ嶺村に属している。「大字駒ヶ嶺」は浄法寺町の南西に位置し、安比川の右岸にその中心があつて、「海上前田」「駒ヶ嶺前田」「桜田」「惣川原田」「樋口」「野田」など田に関連する小字があり、古くから開田事業の行われた地域である。

当遺跡への道順は、主要地方道安代福岡線を浄法寺町方面に向かって、町立大嶺小中学校の前を焼切方向に右折し、駒ヶ嶺公民館の手前を左折する。その後150mほど進んでさらに右折して館部落に至る。遺跡はこの館部落の南側一帯にあつている。

また、五庵Ⅰ遺跡は、国土地理院発行の五万分の1地形図「荒屋」(NK-54-18-16)、2万5千分の1地形図「駒ヶ嶺」(NK-54-18-16-1)の図幅に含まれ、国土基本図(5千分の1)ではJE46に含まれている。北緯40°9′24″、東経141°7′45″付近である。また、平面直角座標(第Ⅹ系)では、X+17,380~17,518m、Y+24,985~25,295mに位置している。

### 2. 遺跡の環境

#### 地形

当遺跡の所在する二戸郡浄法寺町は奥羽山脈北部の東側山間の地にある。町の中央を北東方向に流れる安比川は、稲庭岳(1,078m)を主峯とする西部山地と、七時雨山(1,060m)、田代山(954m)、毛無森(904m)、西岳(1,018m)などの七時雨山山地に2分している。西部山地は稲庭岳を中心に山頂緩斜面を残す山地と、東に傾斜する300~400mの定高性をもつ丘陵地からなり、東縁が馬淵川に達している。七時雨山山地は火山地で、周囲に山麓丘陵が広がり、丘陵を刻む谷が放射状に延びて火山地特有の地形を形成している。

一方、安比川は八幡平山群の比山(1,458m)、高倉山(1,051m)、安比岳(1,458m)などを源とし、安代町荒屋・浄法寺町・二戸市御辺地を経て、一户町鳥越で馬淵川に合流している。浄法寺町は安比川の中流域沿岸地域に位置し、比較的広く連続する谷底平野が形成されている。

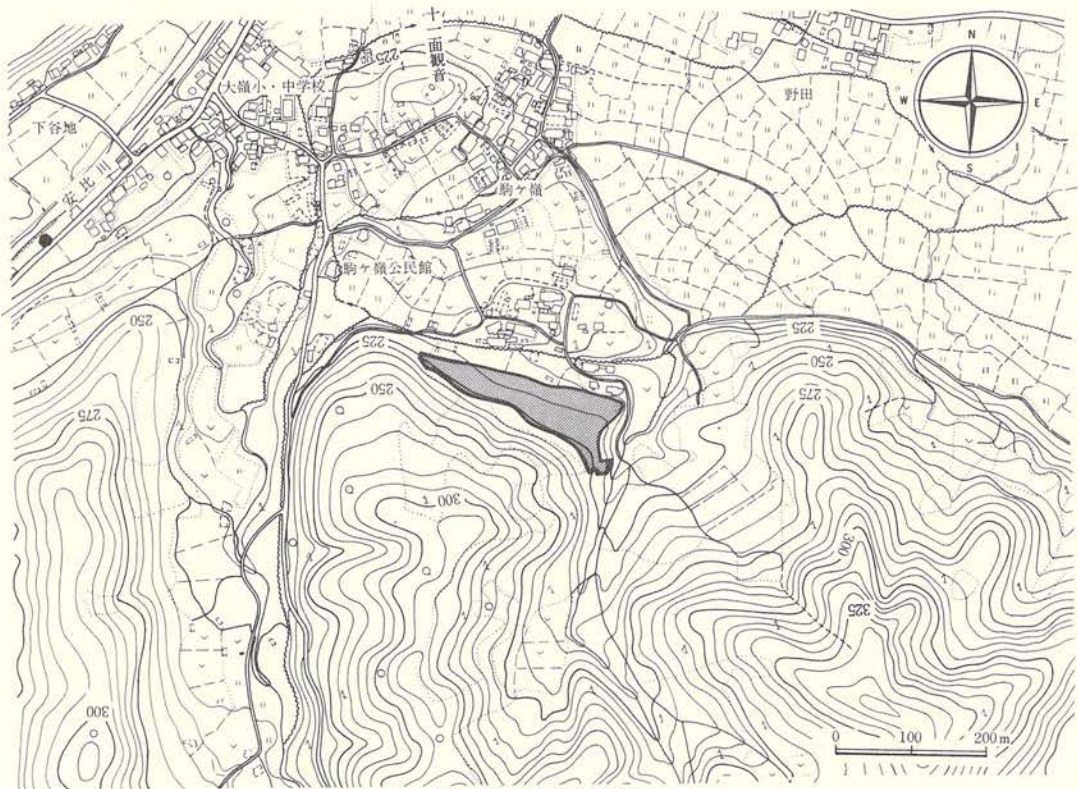
その幅は向田付近で700m、海上付近では600mである。谷底平野は岡本川、多々良沢、大又沢などの安比川支流にも見られるが、幅が狭くその発達はあまり良好ではない。また、丘陵自体がそれほど高くなく扇状地の発達も貧弱である。

安比川沿いには、高位・中位・底位・最下位の4段丘が形成されている（後述）。

当遺跡は七時雨山の山麓丘陵北縁の洪積低位段丘に立地している。遺跡は安比川右岸にあたり、安比川との距離は600mである。その間には谷底平野、最下位段丘が存在し、谷底平野との比高は20~30mである。調査地は標高240~251mの全体的に北に緩く傾斜する斜面（傾斜角約7°）で、三角形をなす。南には丘陵北端（傾斜角約18°）が迫り、西は幅が徐々に狭くなっている。北は30mほどで沢（駒ヶ嶺館の堀跡）となり、東は比高4~11mの段崖で限られる。

調査対象地は二戸郡浄法寺町大字駒ヶ嶺字五庵2、5、6、7、8、9、10-1、14、15、16、17、18、19-1、19-2、20、21、56番地に所在する。東西300m、南北112mで、対象面積が16,114㎡である。調査地内は3段の段状の畑からなっており、各段の斜面上位では削平が進み、斜面下位では逆に流水による堆積が繰り返され盛土状を呈していた。その段差は0.5~1mに達している。ただし、I・II・III区は重機によって造成されたものであり、大きく改変されている。

なお、丘陵北縁の中腹には湧水が2箇所存在し、両者とも現在も水源として使用されている。



第2図 周辺地形図



また、丘陵北縁では小さな開析谷が3箇所認められるが、全て畑地として利用されており、埋没していた。

### 参考文献

- 国土調査、土地分類基本調査「荒屋」 岩手県（1974）  
国土調査、土地分類基本調査「浄法寺」 岩手県（1979）  
佐々木勝 『伝天台寺跡』 浄法寺町教育委員会（1981）  
栃沢満郎 『海上Ⅰ・海上Ⅱ・大久保Ⅰ遺跡発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1985）

### 地質

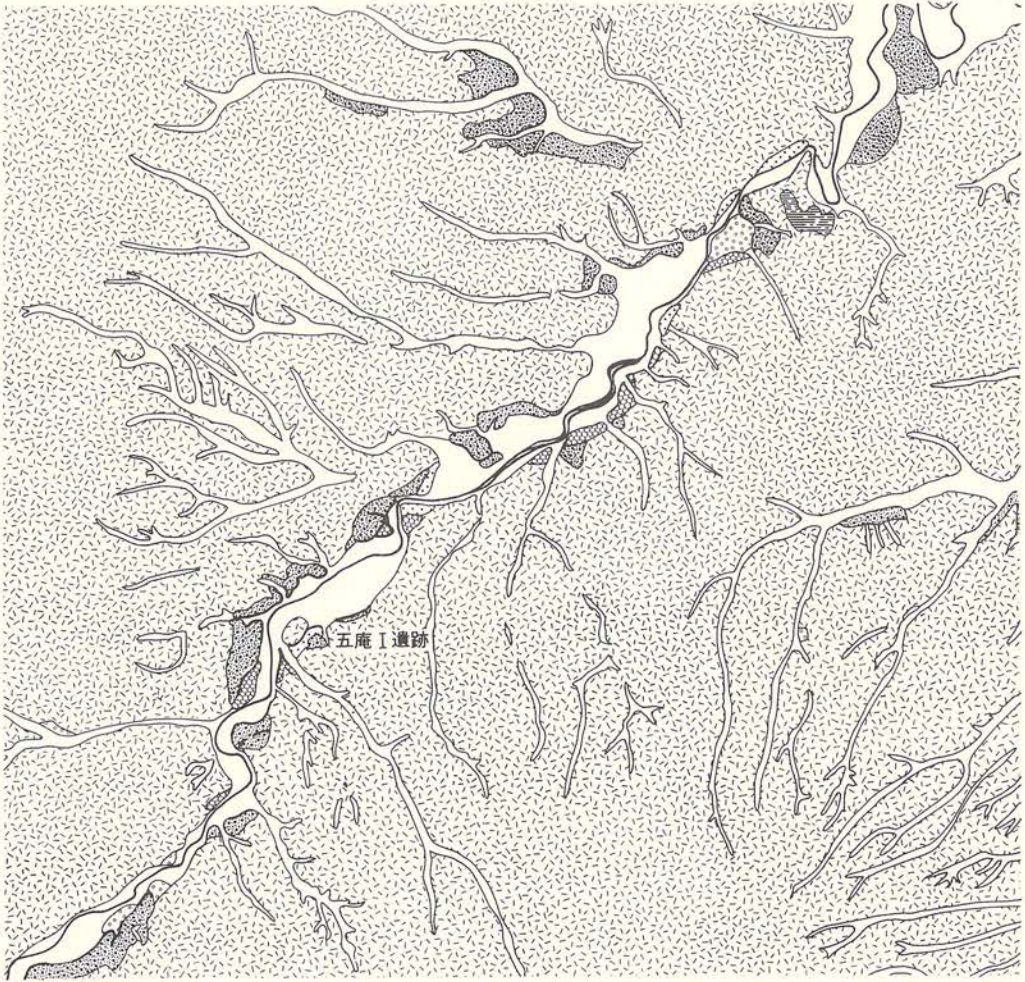
奥羽山脈は新第三紀中新世に起った活発な火山活動（グリーンタフ活動）によって形成され、浄法寺町内の山地及び丘陵地もほぼこの新第三紀層（安山岩質岩石）によって原形が形づくられている。また第四紀の火成活動も活発で、稲底岳周辺に安山岩質岩石（両輝石安山岩）が分布し、火山碎屑物が第三紀層や火成岩を覆って緩やかな地形面を形成している。

一方、安比川には洪積世や沖積世の段丘の発達が見られ、段丘は安比川との比高などから4段に分けられる。高位段丘は土地分類基本調査の地形分類図の砂礫段丘Ⅰで、安比川との比高が80mである。浄法寺町内では越戸付近にのみ存在している。馬淵川中流域の仁佐平段丘（比高<sup>注1)</sup>80m）に対比されるものであろう。

中位段丘は安比川との比高が25～45mである。浄法寺町では上流から下<sup>注2)</sup>藤（比高30m）、柿ノ木平（比高25m）、大清水・下谷地（比高30m）、五庵<sup>注3)</sup>（比高25m）、小泉（比高30m）、大森（比高30m）、飯塚（比高25m）、八幡館・田屋・小池（比高35m）、清水尻（比高40m）、松岡・宮沢<sup>注4)</sup>（比高40m）、漆沢<sup>注5)</sup>（比高40m）、長流部・長渡路（比高45m）付近などである。安比川との比高が上流ほど小さくなっている。地形分類図では柿ノ木平、大清水・下谷地、小泉、長流部・長渡路付近が火山灰砂段丘で、飯塚、八幡館・田屋・小池、清水尻付近が砂礫段丘Ⅱとなっている。

本段丘は安比川上流域のA面<sup>注6)</sup>（比高20～35m）、馬淵川中流域の福岡段丘（比高50m）に対比され、洪積世の低位段丘に相当するとみられる<sup>注7)</sup>。福岡段丘は八戸浮石流凝灰岩に相当する火山灰流凝灰岩の堆積層、シラス台地としての性格をもっている。火山灰流凝灰岩の上位には、基本的に八戸火山灰や、それ以降の火山灰が覆っている。

低位段丘は安比川との比高が15～20mである。浄法寺町内では上流から下谷地下位面（比高15m）、田余内（比高15m）、大森下位面<sup>注8)</sup>（比高20m）、滝見橋（比高20m）、吉田（比高20m）、小池・岩瀨（比高20m）、清水尻下位面<sup>注8)</sup>（比高15m）、飛鳥（比高15m）、名越（比高20m）付近などである。地形分類図では下谷地下位面、田余内、滝見橋付近が火山灰砂段丘で、大森



1 : 50,000 1000m 0 1000 2000 3000



第3図 地形分類図



下位面、清水尻下位面が砂礫段丘Ⅱ、吉田、小池・岩淵、飛鳥、名越付近が砂礫段丘Ⅲとなっている。

本段丘は馬淵川中流域の米沢段丘（比高25m）に対比され、沖積段丘古期面に相当するとみられる。米沢段丘は中礫によって構成され、その上位には南部浮石以降の火山灰が覆っている。<sup>注9)</sup>なお、当段丘に立地する飛鳥台地Ⅰ遺跡では下位に火山灰流凝灰岩を伴っており、洪積低位段丘と捉えられている。<sup>注10)</sup>また、馬淵川中流域の米沢段丘に立地している長瀬B遺跡でも「八戸火山灰ないし八戸浮石層」が「地表下1.5mから8.5mまで7m近く堆積」<sup>注12)</sup>しており、対応するものと推定されるが、今後の検討を待ちたい。

最下位段丘は安比川との比高が5～10mである。上流から駒ヶ嶺（比高5m）、滝見橋下位面（比高10m）、飯塚下位面（比高5m）、御山口西（比高10m）、中前田（比高10m）付近などである。安比川との比高は同程度で、中位段丘、下位段丘に比較して規模が小さい。これらの段丘は地形分類図では駒ヶ嶺、滝見橋下位面付近が火山灰砂段丘、飯塚下位面、御山口西、中前田付近が砂礫段丘Ⅲにそれぞれ分類されているものである。

本段丘は安比川上流域のB面（比高7～11m）、馬淵川中流域の堀野段丘（比高15m）に対比され、沖積新时期段丘に相当するものであろう。

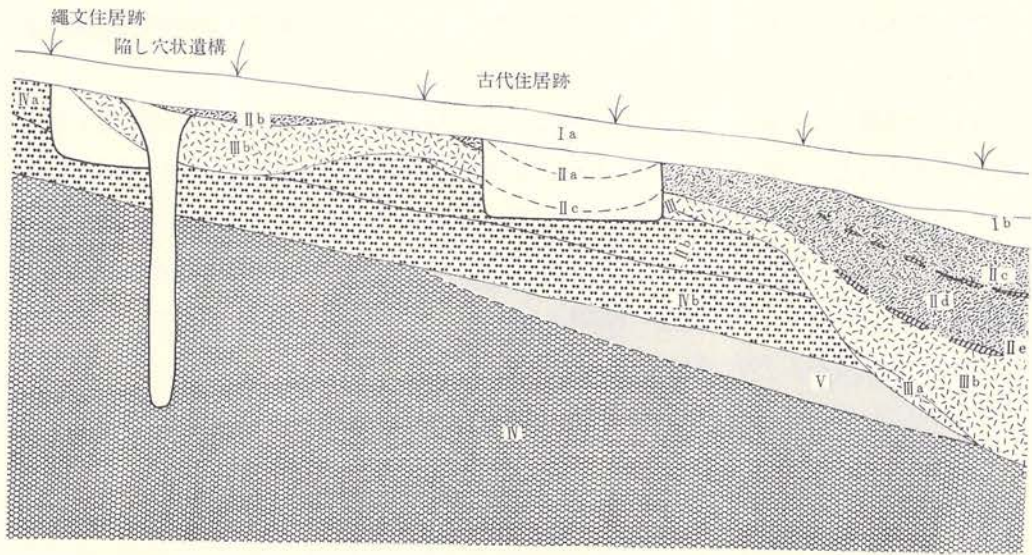
また、安比川や岡本川、多々良沢、大又沢などの支流の谷底平野には沖積層（河床堆積物）が細長く分布している。

### 基本土層

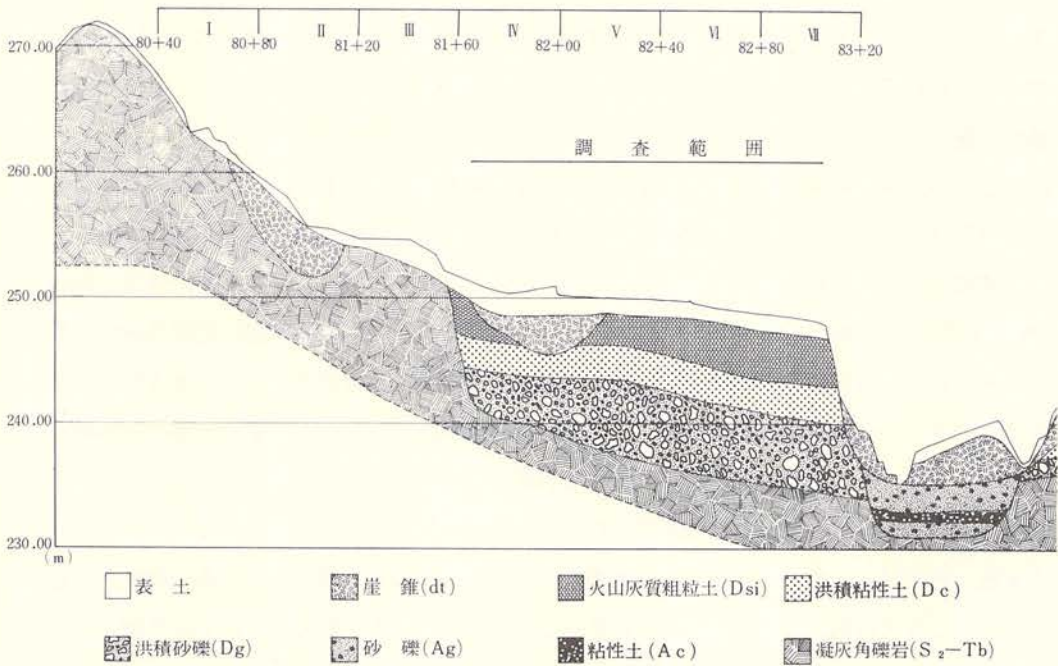
調査地内の地質は日本道路公団仙台建設局の「土性縦断図（第4図）」によると、調査対象地は洪積低位段丘に立地している。基盤は山麓丘陵から続く安山岩主体の凝灰角礫岩である。段丘を構成する洪積砂礫層は厚さが3～5.5mで、地表下7～8mにあつて緩やかに北方に傾斜し、礫層上部は最大40cmの安山岩質礫を混入する砂質まじりのシルトで、下部は凝灰角礫岩の風化部、安山岩質の玉石混りの砂礫層からなっている。この上位には厚さ2.5mの褐灰色の洪積粘性土がのり、さらに層厚2.5～4mの火山灰流凝灰岩が堆積している。また表層は十和田火山を起源とする火山灰やその風化物からなっている。

調査地内の基本土層は次のように分けられる。( )内は層厚を示している。

- I a 層 10Y R  $\frac{3}{5}$ ～10Y R  $\frac{3}{2}$ 暗褐色～黒褐色シルト（15～30cm）、耕作土である。耕作土は常に自然流水による半切半盛状態を呈しており、斜面上位側と下位側では色調、層厚が著しく異なっている。遺物を僅かに含んでいる。
- I b 層 10Y R  $\frac{3}{5}$ 黒色シルト（20cm）、旧表土である。埋没谷や流水による堆積部分に僅か認められる。火山灰起源でサラサラしている。
- II a 層 2.5 Y  $\frac{7}{4}$ 浅黄色細粒火山灰（1、2cmのブロック状）、粉状を呈する。苫小牧火山灰で



基本土層模式図



土性縦断面図

第4図 基本土層模式図と土性縦断面図



縄文時代の陥し穴状遺構（長方形）、平安時代の竪穴住居跡の埋土上位にのみ認められる。前者での層厚は最大5cmである。三辻利一氏の蛍光X線分析、井上克弘、山田一郎氏の鉱物組成の分析によって確認されている（付編参照）。

Ⅱ b 層 7.5 Y R  $\frac{2}{8}$  黒色シルト（20cm）、埋没谷や東区斜面上位の黒色土の厚い部分で検出される。上面が平安時代の遺構検出面である。

Ⅱ c 層 2.5 Y  $\frac{2}{2}$  ~  $\frac{4}{4}$  灰黄色～にぶい黄褐色細粒火山灰（1～2cm）、十和田 a 降下火山灰である。縄文時代の陥し穴状遺構（長方形）では最大15cmであり、平安時代の竪穴住居跡、土壌ではブロック状に点在し、埋没谷には薄層として確認されている。三辻利一氏の蛍光X線分析によって確認されている（付編参照）。

Ⅱ d 層 7.5 Y R  $\frac{2}{8}$  極暗褐色混土（20cm）、黄色浮石、白色の硬い浮石を含んでいる。

Ⅱ e 層 2.5 Y  $\frac{8}{8}$  黄色浮石（10cm）、粒径1～3mmの細かい浮石のブロックで中掬浮石とみられる。埋没谷にブロック状に堆積し、平坦部では確認できない。

平坦面においてはⅡ a、Ⅱ c、Ⅱ e 層は確認されず、Ⅱ b、Ⅱ d 層の区別もはっきりしない。平坦部の黒褐色混土の中には白色の硬い浮石が混入していて十和田 b 降下火山灰も含まれているとみられるが、この中掬浮石が主体となっているようである。

Ⅲ a 層 2.5 Y R  $\frac{4}{8}$  赤褐色浮石層（10cmほどのブロック状）、粒径3～5mmの浮石層で南部浮石層とみられる。厚さ5cmほどのブロック状で、基本的には層状を呈していたものであろうが、場所によっては欠除する部分もある。Ⅲ a' 層は埋没谷の下底部に貼りついていたので、南部浮石層の再堆積層である。最大30cmの厚さに堆積していた。

Ⅲ b 層 7.5 Y R  $\frac{2}{8}$  黒褐色混土（30cm）、南部浮石を多量に含むものである。上位では南部浮石に黒色土が混入し、下位では南部浮石に黄橙色シルトが混入したものである。凹地などに堆積した汚れた南部浮石層である。この層の上面が縄文時代の遺構検出面である。縄文土器、石器が混入している。

Ⅳ a 層 7.5 Y R  $\frac{7}{8}$  黄橙色シルト（30cm）

Ⅳ b 層 10 Y R  $\frac{7}{6}$  明黄褐色シルト（40cm）、Ⅳ a、Ⅳ b 層は八戸火山灰層とみられる。径5cmほどの黄色浮石を含んでいる。最終遺構確認面である。

V 層 暗茶褐色砂層（50cm）。分級されて水性堆積したものである。井上克弘氏によるとシラス起源の砂粒のようである。下位の八戸浮石層とは不整合面で接している。

Ⅵ 層 10 Y R  $\frac{8}{2}$  灰白色火山灰、八戸浮石流火山灰（シラス）とみられる。直径2～4cmの淡黄色の軽石を含んでいる。調査地全域で認められ、段丘の基盤となっている。平安時代の土壌、縄文時代の陥し穴状遺構の底部が達している。

なお、S T A 81+00付近を中心にして幅50m、長さ80m、深さ4mの崖錐が存在し、S T A

81+70～82+20に幅55m、長さ60m、深さ5mの軟質の崩土が存在している。

注(1)各段丘と馬淵川との比高は、当センター高橋与右エ門の『上里遺跡発掘調査報告書Ⅲ、地形と周囲の環境』によった。

注(2)下藤付近は『土地分類基本調査・荒屋』の「地形分類図」では扇状地となっている。しかし、標高265～270mの部分が幅80mにわたって平坦となっており、しかも前面が20mの急崖をなし段丘とみられる。

注(3)五庵付近は『土地分類基本調査・荒屋』の「地形分類図」では山麓地及び他の緩斜面となっている。しかし、段丘崖に駒ヶ嶺館が構築されたこともあってはっきりしないが、標高240～255mの部分が幅200mの平坦地で、前面が5mの崖となって下位面に続いており段丘とみられる。また、当段丘は後述の土性縦断面図に示してある如く中位にシラス層を伴っており、洪積世の低位段丘に相当すると考えられる。

注(4)松岡から宮沢の付近は『土地分類基本調査・浄法寺』の「地形分類図」では丘陵地Ⅰとなっている。しかし、標高225m付近が幅100mにわたって平坦地で、しかも前面が25mの急崖となっており段丘とみられる。

注(5)宮沢から漆沢の付近は『土地分類基本調査・浄法寺』の「地形分類図」では前者同様丘陵地Ⅰとなっている。しかし、標高210～240mの間が最大幅200mにわたって平坦となって連続し、しかも前面が30mの急崖となっており段丘とみられる。

注(6)種市進「遺跡の立地と環境」『上の山Ⅵ遺跡発掘調査報告書』1983

注(7)大池昭二他「馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰」『第四紀研究vo 1.5No.1』1966

高橋与右エ門「地形と周囲の環境」『上里遺跡発掘調査報告書』1983

注(8)大森、清水尻付近は元来同一の砂礫段丘と考えられていたものであるが、沢などを境にして一段低い平坦面が捉えられることから2分した。なお、飛鳥では上位面が存在するようである。

注(9)注(7)高橋与右エ門に同じ

注(10)日本道路公団仙台建設局の「土性縦断面図」によると厚さが11mである。

注(11)飛鳥台地Ⅰ遺跡の調査担当者、三浦謙一の助言による。

注(12)遠藤勝博「遺跡群の環境」『上里遺跡発掘調査報告書』1983

#### 周辺の遺跡

遺跡台帳に登載されている浄法寺町内の遺跡は72遺跡<sup>(注11)</sup>である。このうち安比川流域に62が存在し、全体の85%を占めている。この安比川流域では左岸に所在する遺跡が11遺跡(17.7%)、右岸に所在する遺跡が51遺跡(82.3%)で、右岸の遺跡数が圧倒的に多い。これは東北縦貫自



自動車道が安比川右岸を南西から北東に通過しているため、その関連遺跡の詳細分布調査が実施されたためである。

元来、安比川右岸は七時雨山山麓北縁の北西斜面となっており、遺跡の立地条件はあまり良好ではなく、ある程度地域が限定されている。逆に左岸は陽当りのよい南東斜面となっており遺跡の立地には恵まれている。右岸より多くの遺跡が予想され、今後の分布調査によっては塗り替えられるものと推察される。また、安比川流域以外では低丘陵地が広大な面積を占め、上杉沢遺跡や鏡田遺跡のように大規模遺跡が存在しており、分布調査の実施によっては倍加するものであろう。

ここでは岩手県教育委員会事務局文化課の遺跡台帳をもとに主に安比川流域についてまとめることにする。資料は遺跡台帳を基本とし、それに発掘調査の成果を加味しながら行うことにする。

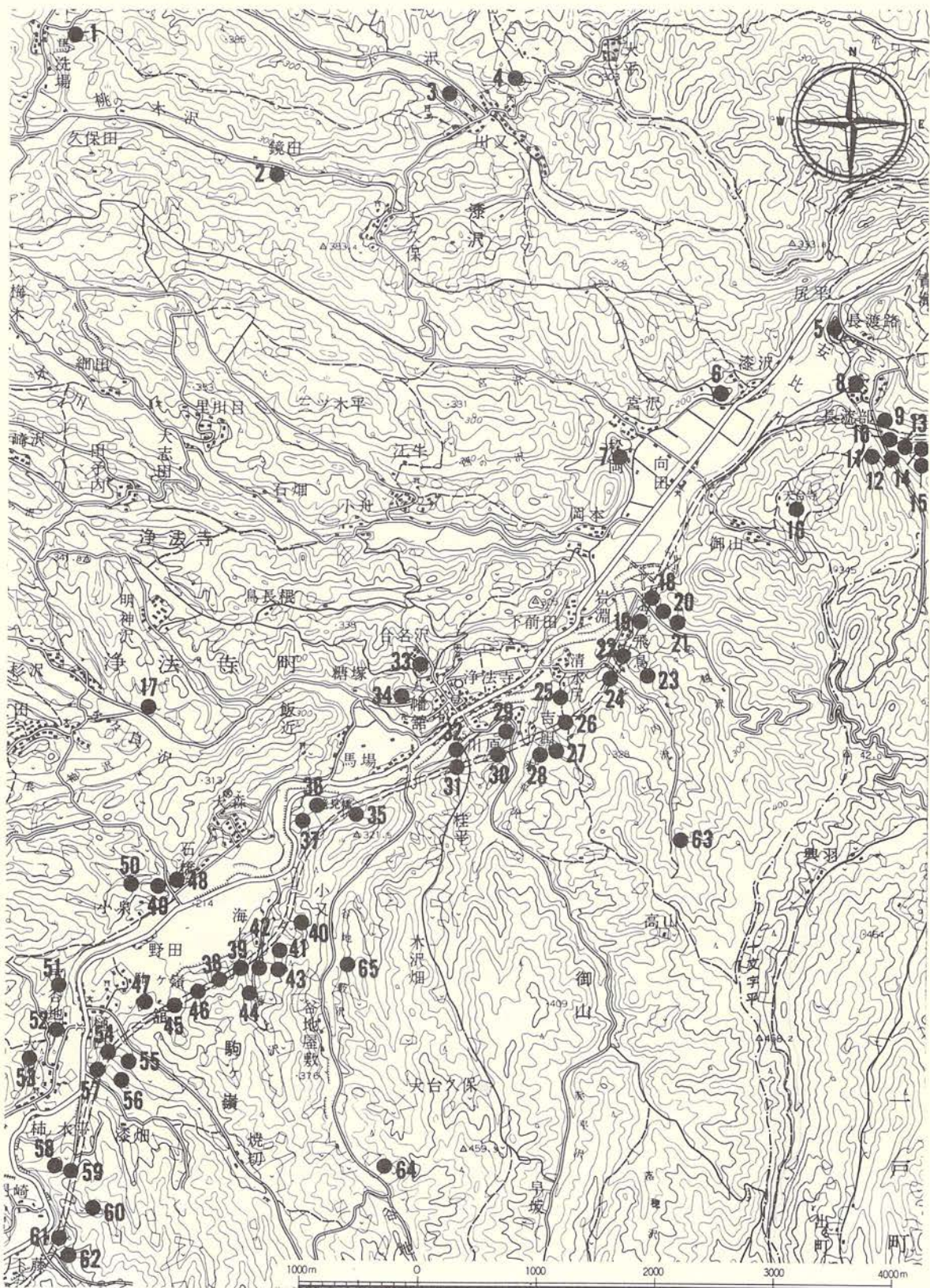
町内の遺跡の種類は散布地44、集落跡14、古墳1、寺跡1、館跡12で圧倒的に散布地が多くなっている(60.3%)。ただし、散布地は調査によって集落となる可能性をもっているものであり、集落と同一の性格のもの<sup>註(2)</sup>とみられる。散布地、集落跡のほとんどは縄文時代に属し、古代に属するのは16遺跡である。古代の遺跡のあり方は縄文時代後・晩期の遺跡に重複するもので、縄文時代との複合遺跡である。古墳は川又古墳で石郭などはなかったようであるが、円墳3基が存在している<sup>註(3)</sup>。また、寺跡1は天台寺跡で、国の重要文化財に指定されている鈍彫手法で著名な聖観音、十一面観音像を擁する天台宗の名刹である。寺伝では神亀5年(728年)行基の創建となっている。古代天台寺の解明のため発掘調査が続けられている。館跡は12であるが、その後の調査によって23と増加している。

さて、対象とする安比川流域の遺跡は遺跡台帳に登録された63遺跡と新たに発掘調査された五庵Ⅲ遺跡、広沖遺跡の65遺跡である。このうち館跡が11遺跡で、縄文時代に属するものが51遺跡、弥生時代が6遺跡、古代が15遺跡である<sup>註(4)</sup>。縄文時代に属する遺跡を時期別に細分すると早期8、前期14、中期9、後期32、晩期22、不明10となり、延べ87遺跡となる。後期が33.7%、晩期が23.2%で、この両者が過半数を占めている。

次に、占地別にみると、丘陵緩斜面が5、中位段丘が43、低位段丘が22、谷底平野が6遺跡となり、中位段丘、低位段丘に立地するものが多い。館はいずれも中位段丘に立地している。また、館跡を除いて、時期別に占地状況をみると、谷底平野の調査例がなく断言できないが、次のような傾向が伺われる。

縄文時代では早期から中期にかけてが丘陵緩斜面から低位段丘にかけて占地し、後期、晩期になると、中位、低位段丘を主体として谷底平野に拡大する傾向があるようである。弥生時代の遺跡は6例と少なく、今のところ丘陵緩斜面、中位、低位段丘が各2遺跡となっている。古





第5図 遺跡分布図



周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	種 別	遺 物 等	No.	遺跡名	種 別	遺 物 等
1	馬洗場	散布地		39	海上Ⅱ	散布地	縄文後期・晩期
2	鏡田	集落跡	土師器	40	Ⅲ	〃	〃
3	川又館	館跡		41	Ⅳ	〃	〃
4	川又古墳	古墳		42	Ⅴ	〃	〃
5	漆沢館	館跡		43	山根	〃	〃
6	長渡路館	〃		44	前谷地	〃	縄文中～晩期・土師器
7	松岡館	〃		45	五庵Ⅰ	集落跡	〃 後～晩期・土師器
8	上野Ⅰ	散布地	縄文前期末	46	Ⅱ	〃	〃 弥生・古代・中近世
9	Ⅱ	〃	縄文	47	駒ヶ嶺館	館跡	
10	Ⅲ	集落跡	〃 前期～後期	48	大森館	〃	
11	Ⅳ	〃	〃 後期	49	小泉館	〃	
12	Ⅴ	〃	〃 〃 ・晩期	50	小泉	散布地	縄文
13	Ⅵ	〃	〃 晩期	51	大清水館	館跡	
14	Ⅶ	散布地	〃	52	下谷地	散布地	縄文後期
15	Ⅷ	〃	〃 後期	53	大清水	〃	〃 後期・石鏃・石剣・土偶
16	天台寺跡	寺院跡		54	田余内Ⅰ	集落跡	〃 後期・晩期・土師・須恵
17	明神沢	散布地	縄文晩期・石鏃	55	Ⅱ	散布地	〃 後期・晩期
18	名越Ⅰ	〃	〃 前～後期・土師器	56	Ⅲ	〃	〃
19	飛鳥台地Ⅰ	集落跡	〃 後期・土師器	57	漆畑	〃	〃 前期末
20	Ⅱ	散布地	〃 ・土師器	58	柿ノ木平館	館跡	空堀・土塁
21	名越Ⅱ	〃	〃 後期	59	柿ノ木平Ⅰ	散布地	縄文後期・晩期
22	安比内Ⅰ	集落跡	〃 後期・晩期・土師	60	Ⅱ	〃	縄文
23	Ⅱ	散布地	〃	61	Ⅲ	〃	〃 中～晩期
24	館	集落跡	〃 後期・晩期	62	Ⅳ	〃	縄文
25	吉田館	館跡・集落跡	〃 中～晩期・堀・土塁	63	飛鳥	〃	〃 後～晩期・石偶
26	大久保Ⅰ	集落跡	〃 後期・晩期・土師器	64	沼久保	〃	〃 中・晩期・石鏃
27	Ⅱ	散布地	〃 前期	65	小又	〃	〃 〃
28	Ⅲ	〃	〃 後期・晩期				
29	大手	集落跡	土師器				
30	桂平Ⅰ	〃	縄文後期・晩期				
31	Ⅱ	散布地	〃				
32	大坊	〃	〃				
33	上外野	集落跡	土師器・須恵器				
34	浄法寺城	館跡					
35	馬場向Ⅰ	散布地	縄文後期				
36	Ⅱ	〃	〃 後期・晩期				
37	Ⅲ	〃	〃 前～中期				
38	海上Ⅰ	〃	〃 後期・晩期・土師				



代においては丘陵緩斜面2、中位段丘5、低位段丘7で、低位段丘が主体となっている。現在までのところ谷底平野からの発見例はないが、より安比川に向って拡大する傾向にあると言えるであろう。

五庵Ⅰ遺跡周辺では南東に沢を隔てて五庵Ⅱ・Ⅲ遺跡、その東方には海上Ⅰ・Ⅱ遺跡がある。一方、大又沢の西方には田余内Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡などがあって、当遺跡は縄文時代早期から晩期、弥生時代、さらには古代の集落など複合遺跡群の中に位置している。また、中世には沢を隔てた北が駒ヶ嶺館となり、沢を隔てた東方には館に関連する遺構群が発見されている。

浄法寺町における発掘調査は大正5年(1961)の赤塚治持氏による天台寺「土踏まず丘」の経塚調査に始まる。その後大正12年(1968)に浄法寺町出身の岩手考古学の先駆者小田島禄郎氏によって鏡田遺跡が調査され、銭瓶平の炭化糞とともに報告されている<sup>(注6)</sup>。また、大正13年(1969)には同氏によって川又古墳が踏査され、紹介されている<sup>(注7)</sup>。

一方、天台寺跡は昭和45年(1970)、47年(1972)に板橋源氏によって予備調査が行われて以来、昭和53年(1978)以降は継続調査され、昭和60年(1985)で第10次調査となっている。

最近では東北縦貫自動車道の関連遺跡調査として、当遺跡など14遺跡が調査され昭和60年(1985)には浄法寺町教育委員会によって上杉沢遺跡が発掘調査されている<sup>(注8)</sup>。

注(1)『全国遺跡地図、岩手県』文化庁

注(2)発掘調査の結果、散布地となっていた上杉沢・海上Ⅰ・Ⅱ・五庵Ⅱ・沼久保の5遺跡から  
竪穴住居跡が検出されている。

注(3)小田島禄郎「県下に於ける古墳の二・三」『岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告書6』  
岩手県教育委員会

注(4)遺跡の中には複合するものがあるが数が合わない。

注(5)赤塚治持、板橋源「天台寺土踏まず丘発掘記」『岩手史学研究31』1959 岩手史学会

注(6)小田島禄郎「県下に於ける竪穴及び「チャシ」に関するもの一」『岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告書4』1924 岩手県教育委員会

注(7)小田島禄郎「県下に於ける古墳の二・三」『岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告書6』  
1926 岩手県教育委員会

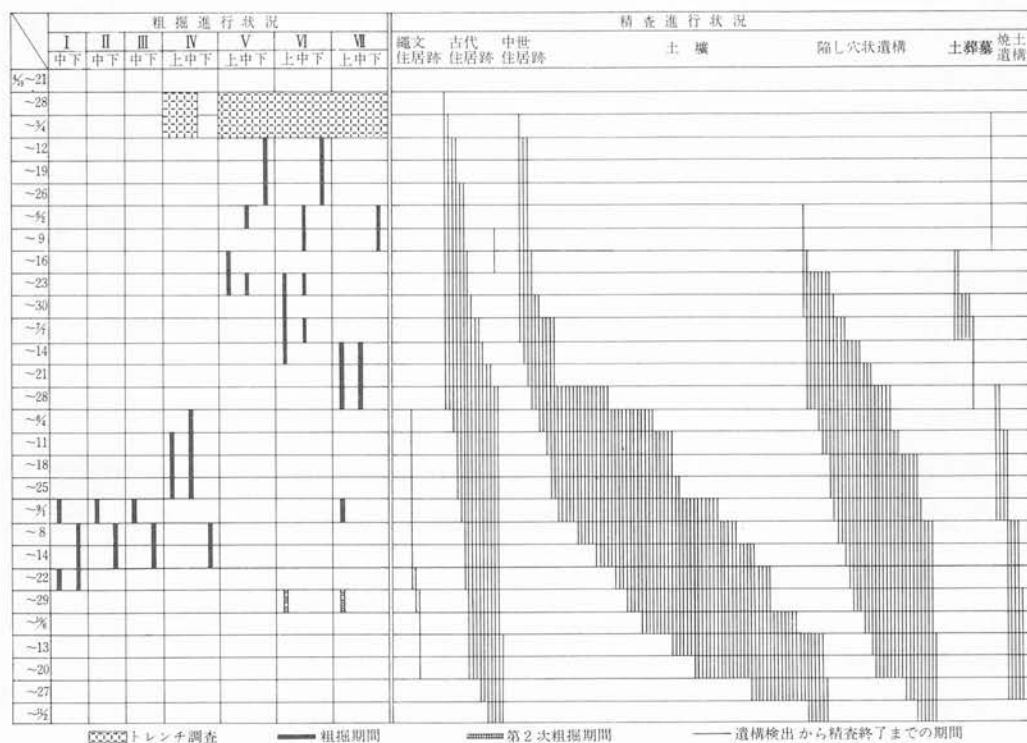
注(8)『わらびて26』1975 岩手県立埋蔵文化財センター

### Ⅲ 調査経過と方法

#### 1. 調査経過

昭和59年は例年のない大雪にみまわれ現場設営が大幅に遅れた。4月中旬でも調査地が北斜面ということもあって一面真白であった。雪融けをまたないで、4月19日にプレハブ建設予定地の除雪作業と雑物撤去を行う。翌20日には季節はずれのどか雪の降りしきる中、器材の搬入を行ったが、トラックが運行不能となり、一時タバコ乾燥小屋に仮収容する。23日、改めて器材を搬入し、現場設営を行う。25日、雪消し作業と平行して調査区の設定を行い、トレンチ(11箇所)を仮設して試掘を開始する。その結果、縄文時代と古代の2時期にわたることが判明し、また、遺構検出面までの深さが浅いこと、地盤が軟弱で重機の走行によっては遺構の破壊が懸念されたことなどのため、人力による粗掘をすることにした。

5月8日からV、Ⅵ区下段の粗掘りに着手し、以下Ⅶ区下段、V、Ⅵ区中段、上段、Ⅶ区中段、上段と進め、7月をもってV、Ⅵ、Ⅶ区の平安時代の粗掘、遺構検出を終了する。その結果、平安時代の竪穴住居跡15、縄文時代の土壌24、陥し穴状遺構16、土葬墓6などを検出し、



第6図 粗掘、精査進行状況図



それぞれ粗掘と平行して精査を行った。なお、土葬墓は6月26日に福蔵寺住職による供養を行った後、本格的に精査を実施し、7月26日で終了した。以下、粗掘の状況、遺構の検出・精査の進行状況は前図のとおりである。

8月27日からは下記のように重機を使用して粗掘を行い、9月いっぱい粗掘を終了した。なお、この中の9月25日から27日まではⅥ、Ⅶ区上段の第2検出面（縄文検出面）の粗掘を実施したものである。

8月27日～29日	Ⅶ区拡張区	土壙・陥し穴を検出
8月30日～31日	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区中段（タバコ畑南側）	陥し穴を検出
9月3日～13日	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区下段（タバコ畑）	焼土・土壙を検出
9月17日～18日	Ⅰ区西部	古代住居跡を検出
9月20日～22日	Ⅰ区西端拡張区	古代住居跡を検出
9月25日～27日	Ⅵ・Ⅶ区上段（第2検出面）	縄文住居跡・土壙・陥し穴を検出

10月からは精査を主体とし、10月11日から調査員2名が増員された。11月1日には全調査を終了し、11月2日現場を撤収する。

この間、8月上旬にはⅦ区南東部の遺構が調査区外に続くことを確認し、南東に約10m拡張し、8月下旬に重機を使用して土壙、陥し穴状遺構などを検出した。9月中旬には調査区西端で、同様に古代の住居跡が調査区外に続いており、約8m拡張した。また、10月中旬にはⅦ区南東端部の急斜面において縄文時代の竪穴住居跡を検出した。この地区については遺構がさらに伸びることが予想され、しかも、調査期間が迫っていることもあって、年を改めて五庵Ⅲ遺跡と平行して調査することになった。

昭和60年度にはⅦ区南東部の926㎡を調査対象地として4月16日から実施した。縄文時代の竪穴住居跡のほか新たに土壙3、焼土遺構2などを発見している。

なお、8月6日と10月11日に空中写真撮影を実施し、10月12日には現地説明会を開催した。また、下記の方々から現地指導を受けたほか、見学、視察に供した。

- 6月30日 岩手大学農学部 井上克弘助教授 火山灰について
  - 7月5日 岩手医科大学歯学部、野坂洋一郎教授、伊藤一三助教授 人骨出土状況の確認
  - 7月19日、20日、26日 岩手医科大学歯学部、伊藤一三助教授 人骨の取り上げ
  - 9月20日 板橋源、草間俊一当センター理事 現地指導
- 視察・見学者
- 4月23日 大嶺小中学校長、浄法寺町教育委員会 中村主事 見学
  - 4月26日 浄法寺町歴史民俗資料館 佐藤基三社会教育指導員 見学
  - 5月30日 浄法寺町教育研究会社会科部会 見学

- 6月2日 大嶺中学校（1・2年生）生徒 見学  
 6月6日 大嶺小学校（5・6年生）生徒 見学  
 6月12日 県教育委員会文化課長 視察  
 7月5、6日 岩手日報二戸支局 取材  
 7月18日 岡本小学校（5・6年生）生徒 見学  
           県教育委員会文化課 遠藤・相原文化財主査 見学  
 8月1日 滝沢村教育委員会 桐生・後藤調査員 見学  
           浄法寺小学校生徒 見学  
 8月6日 八戸市立博物館 佐々木・藤田学芸員 見学  
 8月8日 弘前大学 齊藤利男講師 視察  
 9月28日 浄法寺小学校（6年生）生徒 見学  
 10月4日 滝沢村教育委員会 桐生・後藤調査員 見学  
 10月5日 滝沢村教育委員会 桜井調査員 見学  
 10月11日 （財）千葉県埋蔵文化財センター 根本調査部長補佐・高橋調査班長 見学  
 10月12日 岩手日報二戸支局、河北新聞二戸支局 取材  
 10月20日 文化課 菊地主任文化財主査、遠藤文化財主査、岩手県高速交通対策室 見学  
 10月29日 岩手日報学芸部 取材  
 10月31日 浄法寺町教育長、同文化財保護審議会委員 視察

## 2. 野外調査

### 調査区の設定と遺構の呼称

調査範囲は道路建設用地の北側 $\frac{2}{3}$ ほどで、面積は16.114 $\text{m}^2$ である。東西方向がおおよそ道路中心杭のS T A 80+60からS T A 83+40の300 m、南北方向が最大112 mである。

グリッドの配置は道路中心杭82+00と82+60の2点を基準点として、東西中軸線を設定し、40mを単位とする大区画（西からⅠ～Ⅷ）と、さらに4 mを単位とする小区画（西からA～J）に細分する。これに直交する南北方向は、4 mごとに北から1～28とし中軸線を16とした。グリッド名は4×4 mの最小単位を北西に位置する交点をもって呼称し、上記の組合せによってⅠC 3、ⅦF 18のように命名した。この時基準点82+00はⅤA 16、82+60はⅥF 16である。

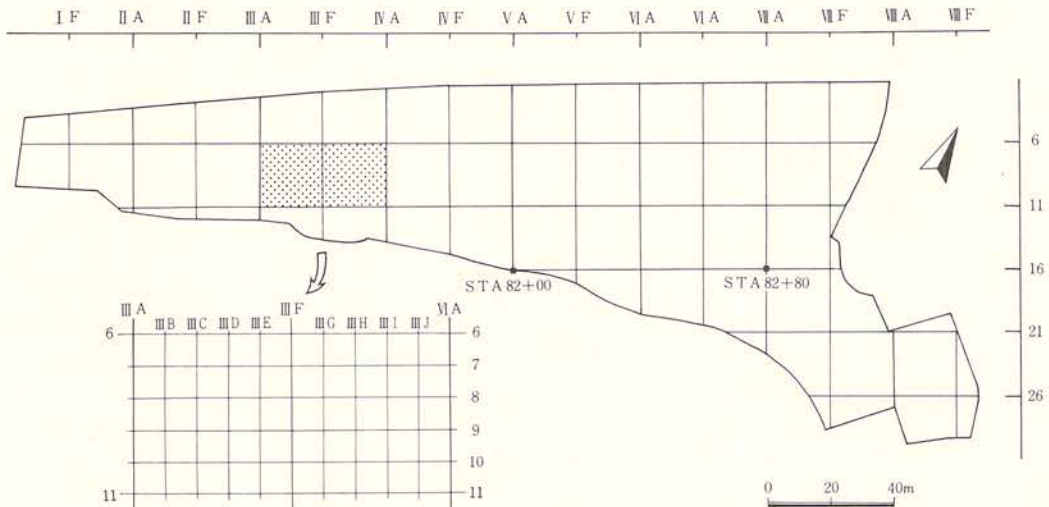
なお、基準点の平面直角座標第Ⅹ系における成果は次のとおりである。

S T A 82+00           (X + 17412, 5335, Y + 25148, 7027, L - 250, 456)

S T A 82+60           (X + 17439, 7486, Y + 25202, 1746, L - 249, 485)

遺構の名称や遺物の取り上げにはグリッド名を冠してⅣG 7 竪穴住居跡、ⅦF 21 土壇、ⅢB





第7図 地区割図

7 陥し穴状遺構、Ⅷ D 27-Ⅱ層のように呼称し、基本的には遺構の北西端のグリッドによって命名している。なお、同一グリッド内に複数の遺構が存在する場合にはグリッド名の次に - 1、- 2、- 3……を付して区別している。以上の他には調査地が広大なため遺構の分布、配置では埋没谷によって西区、中央区、東区と仮称して用い、粗掘、遺構検出では大区画に上・中・下段を付して表している。

#### 粗掘と遺構検出

粗掘に先だって、20m 間隔に等高線に直交するトレンチを11箇所設定し、土層の観察や遺構面の確認、遺構検出面までの深さの把握などを行った。試掘の結果、縄文時代の陥し穴状遺構と古代の竪穴住居跡が検出面を異にして発見され、縄文時代と古代の2時期にわたることが判明した。また、段状の畑は斜面上位が削平によって切土状態を呈し、斜面下位は堆積が繰返されて盛土状態となって自然に形成されたことが明らかとなり、削平地では遺構検出面までの厚さが15cmと薄く、盛土部分では逆に50~80cmと厚くなっていた。

粗掘、遺構検出はⅤ~Ⅶ区については遺物が表面採集されることや、検出面までの深さが浅いこと、古代と縄文時代の2時期にわたっていることなどから人力によることにした。土捨ての関係などからⅤ、Ⅵ区下段から行い、順次上段へと進行した。一方、Ⅰ~Ⅳ区については遺

物の採集も少なく、調査期間の制約、また、重機によって大きく改変されていることなどから、粗掘に重機（パワーシャベル）を使用し、その後、人力による遺構検出を行った。

遺構は古代の竪穴住居跡が苫小牧火山灰や十和田 a 降下火山灰の堆積、焼土、炭化材の検証によって容易に検出できたが、縄文時代の陥し穴状遺構（円形）は識別困難で、検土杖探査によって確認されたものである。

### 遺構の精査

遺構の精査は竪穴住居跡が4分法、土壌、陥し穴状遺構が2分法を原則とした。内部状況の把握などによってはさらに細分し、断面観察を併用しながら掘り進め、必要に応じて断ち割りを加味して行った。また、掘り上げに際しては層位ごとに掘り上げるように努めた。

なお、遺構は構築された状況を示す構築形態、使用状況を示す使用形態、廃棄状況と廃棄後の状況を示す廃棄形態が存在していると捉えられることから、精査にはこの3段階の状況把握に努めることを前提として実施した。<sup>注(1)</sup>具体的には廃棄形態、使用形態、構築形態の順に進め、廃棄形態では主に埋土の観察によって、火災、洪水など被災の有無や人為的な埋戻しなど廃棄の状況と、自然堆積や人為的な破壊など廃棄後の埋没過程の状況を把握し、使用形態では遺物、炭化材の分布、諸施設の配置や構造などの観察によって、生活空間の利用方法や使用状況の復元を試みた。構築形態では主に断ち割り観察によって、構築方法や構築技術、技法の解明に迫るよう努力した。

また、竪穴住居跡では①鍵層となる苫小牧火山灰、十和田 a 降下火山灰の有無と混入堆積状況の確認、②焼失住居跡における炭化材の現状検出の実施、③出土遺物（全点）の地点、高さの記録化、④内部施設の修復・造り替えの把握などに留意し、平安時代の土壌（ピーカー形）では、鍵層となる十和田 a 降下火山灰の確認や倒伏ススキの堆積状況の把握などに注目しながら実施した。土壌・陥し穴状遺構などの埋土では壁の崩落や流入堆積、人為的な投入や埋戻しなど、埋土の供給源の追求観察を行っている。

陥し穴状遺構（円形）では、断面スライス調査による逆茂木の立ち上がりの確認、底面、断ち割りによる逆茂木観察など逆茂木状施設の確認に努力し、陥し穴状遺構（長方形）では、両端に存在する副穴の検証に重点をおいて実施した。

注(1) 構築形態、使用形態、廃棄形態は遺物で言うならば製作時形態、使用形態、廃棄形態に対応するものである。

注(2) 遺構を構築形態、使用形態、廃棄形態を改めて記述すると、今までとは別のことを意図して調査したかのように捉えられるであろうが、これは従来から行われていた埋土の観察、諸施設の状況把握、断ち割り観察などの段階をおった調査を文章化したにすぎない。従って調査方法は特別に新しく開発したのではなく、一般に実施されている方法を活用したものであり、



それらの方法を、より目的意識的に活用することを意図したものである。

### 記録

実測図は縮尺 $\frac{1}{50}$ を原則とするが、土葬墓など状況によっては縮尺 $\frac{1}{10}$ を併用した。平面図の作成にあたっては次の2つの方法を併用した。ひとつは従来から当センターで行っているもので、グリッドに合わせて地面に1m×1mの水糸を張って2人1組で計測、図化する方法である。他は竪穴住居跡については出土遺物を全点記録することと、段階ごとの図化のため、釘落とし作業を省略できて、しかも設定、取りはずしの容易な次の方法によった。

①住居跡の周囲にグリッドに合せた2m間隔の基準点を設定した。基準点には角杭を使用し計測誤差を少なくするため地面近くまで打ち込んだ。

②各基準点から誤差を少なくするため等高線に平行するように基準線を設け、水系とメジャーを張った。この時、基準線の間隔はコンベックスの曲がらない範囲、すなわち、4mグリッドを採用しているなのでその半分の2mとした。

③次に、平行する基準線の間コンベックスを直交させ、平行移動させながら軸線方向を計測した。この場合コンベックスが遺構、遺物の最良の点に合致するように1cm単位の移動を指示した。

④軸線に直交する方向は遺構、遺物の最良の地点とコンベックスとの交点を読み取ることによって行った。

⑤実測にあたっては計測誤差を最小限とするため、計測者を設けず、同一人(実測者)が計測と図化を行った。

⑥遺構の大きさが2mを越す場合には基準線を移動して同様に行った。

高さについてはレベル3台を用いて、標高換算して、1mごとに248m、249m、250mなど一定の高さに固定し、視界範囲のすべてを読み取ることにした。記録はすべて標高換算して図化するように努めた。

写真記録は6×7cm版と35mm版を使用し、フィルムはモノクロームとカラーリバーサルを併用した。各遺構については完掘後の全景と断面撮影を基本とし、検出状況、遺物出土状況、断ち割り状況、部分写真等、適宜使い分けた。なお、8月6日と10月11日には空中写真撮影を行っている。

### 3. 室内整理

室内整理は野外調査に引き続き調査員2名と作業員8名<sup>(注1)</sup>によって昭和59年11月5日から3月30日まで実施した。遺構ごとの整理作業は調査担当者が行うことを原則としたが、佐々木嘉直、佐々木清文両名の担当した遺構については竪穴住居跡と焼土遺構を石川長喜、土壘・陥し穴状

遺構を渡辺洋一がそれぞれ分担した。

室内作業は写真の整理から手がけ、遺構では実測図の点検・合成から、遺物はほとんどのものが野外調査の雨天日などを利用して洗浄・記名まで終了しており、土器の接合、復元から、石器、その他の遺物は仕分け、登録からそれぞれ平行しながら実施した。

整理作業の大多数のものは59年度末日で終了したが、写真図版の作成と事実記載の原稿執筆の一部を次年度に繰越した。そこで60年度の10月11日から10月30日までの間、調査員1名と作業員2名によって実施した。なお、昭和60年度調査分については11月以降五庵Ⅲ遺跡の整理作業として行っている。

注(1) 作業員は11月が3名、12月・1月が8名、2月が7名、3月が8名、3月下旬が9名である。

### 遺構

遺構は実測図の点検・合成、第2原図の作成、トレース、図版作成の順に進めた。今回の整理作業では点検、合成を含めてトレース原図としての第2原図を作成し、執筆のための資料としても活用した。第2原図の作成は基本的には完掘平面図と断面図で、他には掲載しないものを含めて部分図（断ち割り図、遺物分布図）など適宜必要に応じて作成した。特に竪穴住居跡では炭化材の遺存状況が良好なこともあって、炭化材の断面図を付加した炭化材分布図を作成し、掲載している。

図版の作成ではグリッドメッシュを省略し、土壙、陥し穴状遺構では平面図のセクションポイントに合わせて断面図を配置した。また、陥し穴状遺構（円形）では底面下の逆茂木状施設の断面図を遺構断面図に平行移動して同一断面図のように合成した。

### 遺物

遺物は土器が接合、復元、実測（拓本）、トレース、図版作成の順序に行い、石器、その他の遺物は仕分け、登録、実測（計測を含む）、トレース、図版作成の順に実施した。土器は接合後、不足部分を石膏で補填し、鉄製品などは銹を落してから実測している。また、土壙出土の沼貝はパラロイドB72による保存処理を実施し、炭化材の1部はPEG処理を行っている。さらには石器、石製品の材質鑑定、炭化材の樹種鑑定、炭化穀類の分析、鑑定、人骨の分析、鑑定など、例言のように分析、鑑定を依頼している。

遺物の実測は実物大で行い、大多数のものはそのままトレースしている。ただし、大きなものについては適宜縮小して実施している。遺構内出土遺物はできるだけ多く実測するよう努め、拓影ではよく表現できない破片は拓本実測を併用している。また、土器（土師器、須恵器）では調整技法に留意し、剥片石器では刃部の観察を重視し、側面図の作成に心掛けた。剥片石器のトレースでは、特に刃部が丸くならないように注意し、剥離の順序が明確になるよう配慮し



た。

図版の作成にあたっては、できるだけ遺構出土遺物は遺構ごとに、遺構以外の遺物については器種ごとに縮尺率を統一して一括している。また、土器の計測値は図の左上に口径、器高、底径の順に記載し、右上には出土地点を明記している。

### 写真

遺構写真や遺物出土状況写真は現場で撮影したものの中から選択し、トリミングして用いている。遺構は種類ごとにまとめ、全遺構を掲載している。写真図版の作成にあたっては、遺構は原則的に完掘全景と断面写真の組合せとしたが、中には省略したものもある。また、遺物出土状況、内部施設の断ち割り状況など適宜選択して使用している。特に竪穴住居跡においては炭化材の出土状況を重視し、陥し穴状遺構（円形）では逆茂木状施設を多く盛り込んでいる。

遺物は本報告書に掲載するものを主体に1点ずつ撮影したものを使用し、遺構出土遺物を除いてできるだけ器種ごとに縮尺率を統一するように努めた。遺構遺物については遺構の種類ごとに一括し、遺構外遺物は土器、石器、その他の分類に従ってレイアウトしている。なお、竪穴住居跡の出土遺物は住居跡ごとに一葉としたため住居跡ごとには同一縮尺となっているが、住居跡相互では縮尺不同である。

### 執筆分担

事実記載については発掘担当者が行うことを原則とした。執筆分担は渡辺と石川が協議して例言で記したように分担した。

## IV 縄文時代の遺構と遺物

検出された遺構は竪穴住居跡20棟、焼土遺構12基、土壙40基、陥し穴状遺構81基、土葬墓6基、1本柱列1列、溝状遺構1条などである。また、発見された遺物は縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、土製品、石器、石製品、古銭、鉄製品、鉄滓、銅製品、炭化材、木製品、漆製品、炭化穀類、堅果類、人骨、獣骨、貝類などである。

このうち縄文時代に属するものは、遺構では竪穴住居跡4棟、土壙21基、陥し穴状遺構81基などである。なお、焼土遺構については縄文時代のもも含まれていると考えられるが検出面が削平されて縄文時代か古代か識別困難なものがあり、全て古代の遺構と遺物で記述している。また、時期不明なものについては中、近世の遺構と遺物で記述している。

遺物では縄文土器（コンテナ5箱）、土製品3点、石器、石核、剥片、碎片164点、貝類である。掲載したものは縄文土器164点（実測25点、石影139点）、土製品3点（土偶1点、円盤状土製品2点）、石器72点（石鏃3点、石錐1点、石匙2点、搔器類24点、筥状石器2点、楔形石器3点、磨製石斧4点、磨石5点、凹石5点、棒状擦石11点、石皿5点、その他3点）などである。なお、古代の竪穴住居跡の埋土遺物（縄文土器、石器など）については、ここで取り扱っている。

### 1. 竪穴住居跡

#### 1. VI H20竪穴住居跡

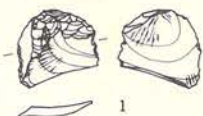
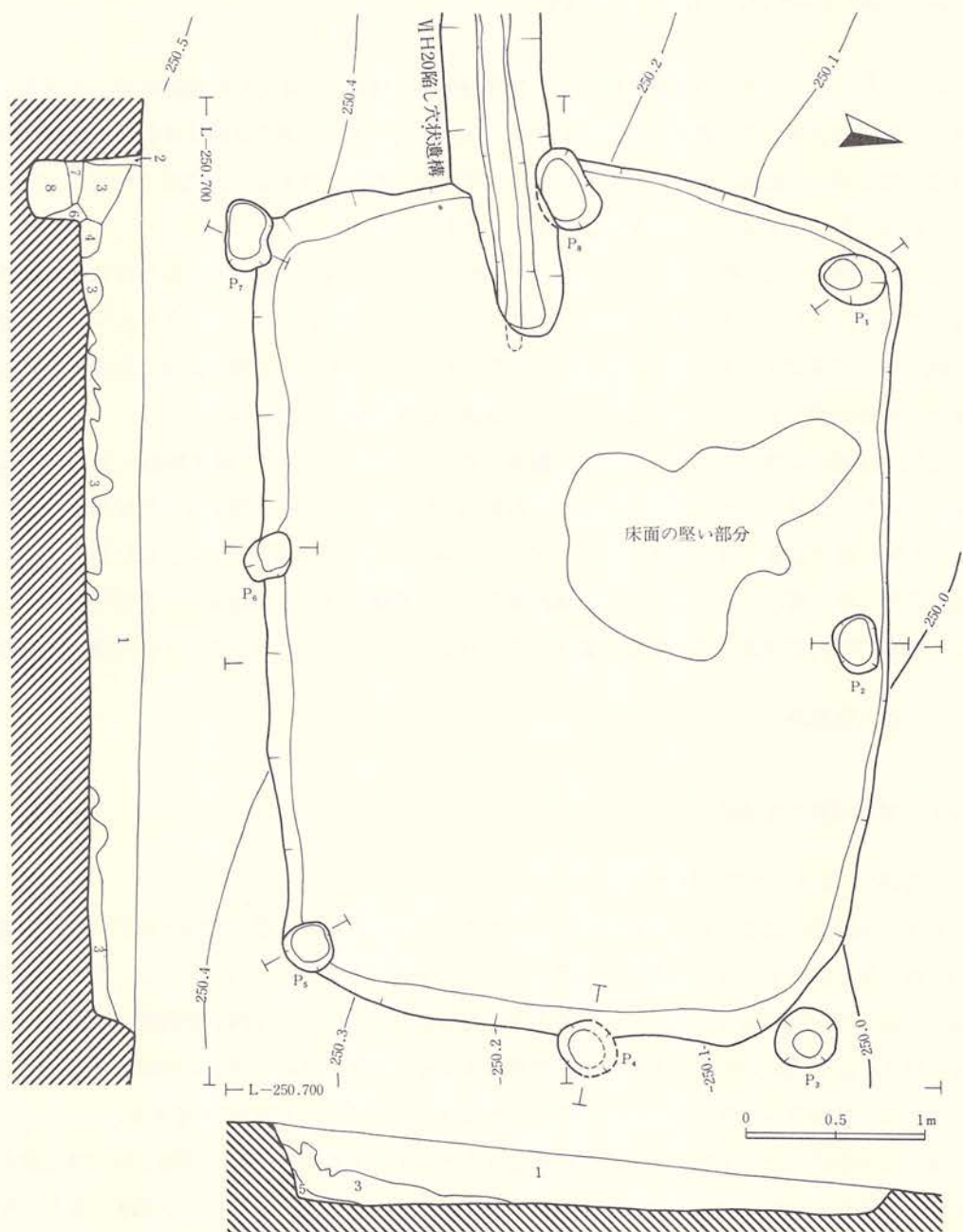
〈遺構〉（第8・9図、図版5）

東区の南端部に位置する。VI H20陥し穴状遺構によって西端の一部が破壊されている。平面形は長方形を基調とするが、西壁、北壁、東壁では中央部が幾分張り出している。また、柱配置では北側列が約50cm東に寄っていて若干歪んだ形となっている。規模は東西方向が南壁4.0m北壁4.2mでほぼ対応し、南北方向では西壁3.4m、東壁2.9mで東壁が50cmほど短くなっている。長軸方向は等高線にほぼ平行し、南壁柱列による方向がN74°Eである。

埋土は黒褐色混土が主体で、壁際に暗褐色混土が若干認められる。壁は斜面上位ではほぼ直に立ち上がり、壁高40cmを計測する。斜面下位においては緩い傾斜をなして不明瞭となり、壁高が15cmと低くなっている。床面は全体的に平坦であるが、緩やかな凹凸をもつ。北西部の一部が堅く踏み締められている。炉は確認されていない。

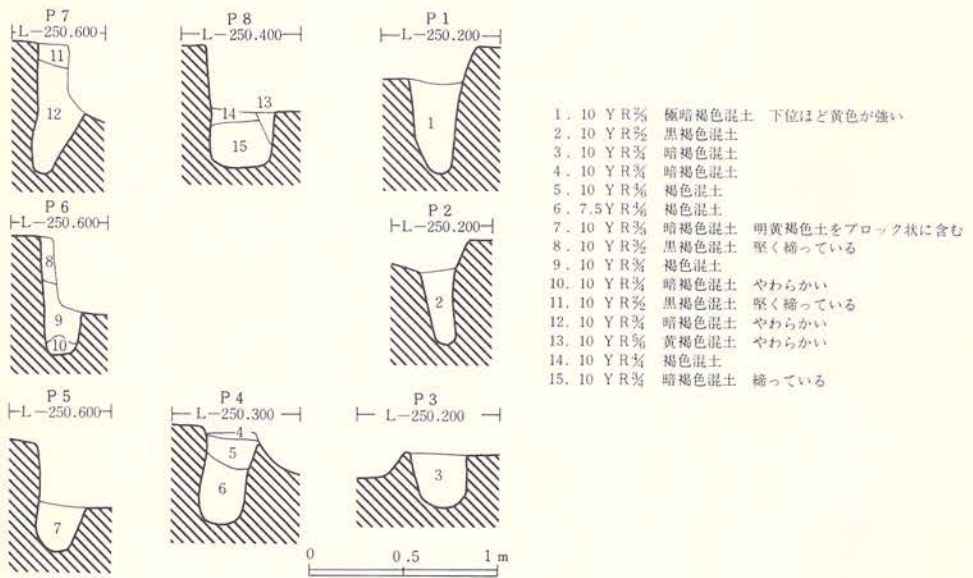
柱穴は四隅とその中間から8個検出された。このうち、北東隅（P3）、南西隅（P7）の2柱穴が壁外に位置し、北西隅（P1）、南東隅（P5）が壁に接している。他のP4、P6、P8





- |             |       |                           |             |        |                   |
|-------------|-------|---------------------------|-------------|--------|-------------------|
| 1. 10 Y R % | 黒褐色混土 | 浮石、南部浮石を含む<br>全体的に縮っている   | 5. 10 Y R % | 明黄褐色混土 |                   |
| 2. 10 Y R % | 褐色混土  | やわらかい                     | 6. 10 Y R % | 黄褐色混土  | やわらかい柱穴(P8)埋土     |
| 3. 10 Y R % | 暗褐色混土 | 黄褐色浮石(径3 cm前後)<br>南部浮石を含む | 7. 10 Y R % | 褐色混土   | 柱穴(P8)埋土          |
| 4. 10 Y R % | 明黄褐色土 |                           | 8. 10 Y R % | 暗褐色混土  | 縮っている<br>柱穴(P8)埋土 |

第8図 VH20竪穴住居跡



第9図 VIH 20竪穴住居跡柱穴断面

の3柱穴は壁際から壁外に及ぶものである。柱穴配置では南壁列のみが直線上に並ぶが、他の西壁列、北壁列、東壁列は中央の柱穴が外に張り出す形となっている。柱穴は28×24～46×26 cmの円形か長方形で、深さは25～52cmである。埋土は褐色～暗褐色混土である。

〈遺物〉(第8図、図版9)

埋土から不定形石器1点が発見されている。左側縁に小さな刃部が形成されている(1)。

## 2. VI B 18竪穴住居跡

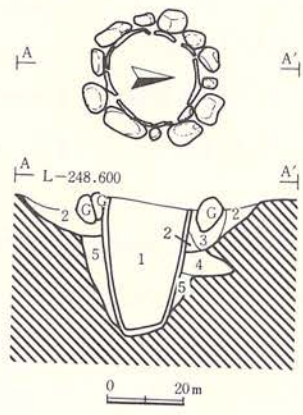
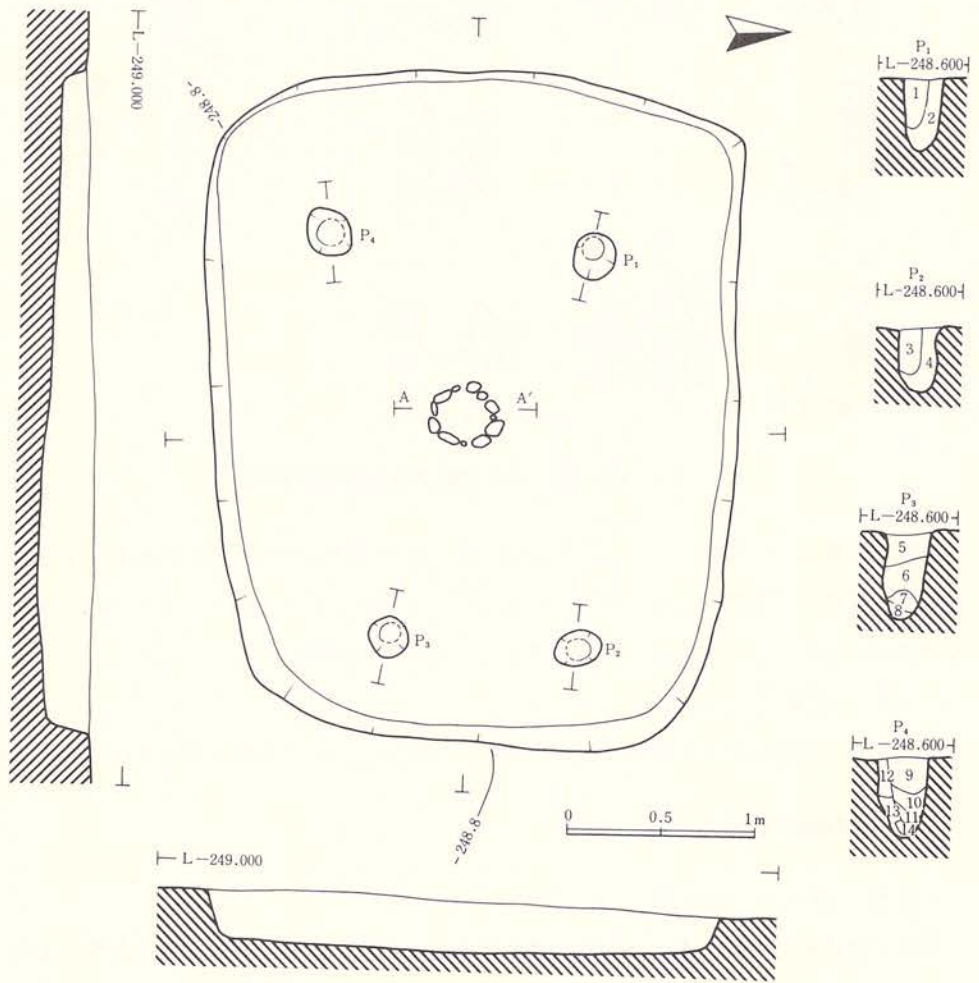
〈遺構〉(第10図、図版6)

東区の南端部に位置する。平面形は隅丸長方形をなす。規模は東西方向が南壁、北壁とも、3.1mで相対応し、南北方向では西壁2.7m、東壁2.0mで、東壁が70cmほど短く若干歪んだ形となっている。長軸方向は等高線にほぼ平行し、北壁によるとN94°Eである。

埋土は炭化物を少量含む黒褐色混土の単層で、堅く締っている。壁はほぼ直に立ち上がり、壁高は25cmを最大とする。床面はほぼ平坦であるが、炉の周辺が幾分窪んでいる。また、柱穴を結んだ内側が堅く踏み締められている。

炉は住居跡の中央部に位置する石囲い埋設土器炉である。炉縁石は大小13個の川原石で構成され、直径24cmの土器に接するように、しかも土器より若干高くなるように配されている。外径は40cmほどである。土器は完形の深鉢形土器を正立位に埋設したもので、埋土は炭化物を含む暗褐色混土であった。なお、土器及び炉縁石は幾分熱変化したものも認められたが、土器内





10 Y R ㉔ 黒褐色混土 白色砂粒、南部浮石を含む。炭化物を僅かに含み、全体的に堅く締っている。西部ほど黄色が強くなる。

- 1. 10 Y R ㉔ 暗褐色混土
- 2. 10 Y R ㉔ 暗褐色混土
- 3. 10 Y R ㉔ 黒褐色混土
- 4. 10 Y R ㉔ 褐色混土
- 5. 10 Y R ㉔ 周辺部の黒色が強い
- 6. 10 Y R ㉔ 褐色混土
- 7. 10 Y R ㉔ 褐色混土
- 8. 10 Y R ㉔ 黄褐色ブロック
- 9. 10 Y R ㉔ 黄褐色混土
- 10. 10 Y R ㉔ 褐色混土
- 11. 10 Y R ㉔ 黒褐色混土
- 12. 10 Y R ㉔ 暗褐色混土
- 13. 10 Y R ㉔ 褐色混土
- 14. 10 Y R ㉔ 黄褐色ブロック

- 注穴土層注記
- 1. 10 Y R ㉔ 黒褐色混土
  - 2. 10 Y R ㉔ 暗褐色混土
  - 3. 10 Y R ㉔ 褐色混土 やわらかい
  - 4. 10 Y R ㉔ 黄褐色混土
  - 5. 10 Y R ㉔ 黒褐色混土
  - 6. 10 Y R ㉔ 黄褐色混土
  - 7. 10 Y R ㉔ 褐色混土
  - 8. 10 Y R ㉔ 黄褐色ブロック
  - 9. 10 Y R ㉔ 黄褐色混土
  - 10. 10 Y R ㉔ 褐色混土
  - 11. 10 Y R ㉔ 黒褐色混土
  - 12. 10 Y R ㉔ 暗褐色混土
  - 13. 10 Y R ㉔ 褐色混土
  - 14. 10 Y R ㉔ 黄褐色ブロック

第10図 VI B18竪穴住居跡

では特に赤変している様子は見られなかった。

炉跡は、土器埋設後、直径60cmほどの浅い土壌を掘り込んで、炉縁石の側縁を上にしてほとんど隙間なく埋設されている。

柱穴は対角線上に4個検出されている。壁から30～70cm内側である。いずれも直径20～25cmの円形をなし、深さは38～52cmである。埋土は黄褐色～暗褐色混土で、P4では造り替えが認められる、なお、柱痕はP1、P2によると直径12cm、13cmである。

#### 〈遺物〉(第11図、図版9)

発見された遺物は炉の埋設土器と住居跡埋土の土器片1点、石器4点、剥片・碎片10点である。1は炉の埋設土器に使用されていた深鉢形土器である。底部から直線的に立ち上がる器形で、口縁部は4個の小さな突起をもつ波状口縁をなす。口縁部文様帯は低い隆起帯によって地文部と区画され、口縁部突起の中間にあたる位置に小突起をもつ。隆起帯には小突起を含めて細かい刺突文が施され、小突起には上下にも刺突されている。また、文様帯は口縁部突起から垂下する隆帯によって4区分され、この隆帯には側面圧痕文が施されている。

口縁部文様帯は側面圧痕文で、口縁部突起から頸部小突起に向かう3条の斜行圧痕と、その間を埋める横位圧痕で幾何学的な文様を構成している。

地文は横回転の綾絡文である、原体の長さは8cmで、ほぼ2cm間隔に4個の結び目をもっている。1/4を1回の施文単位として3段施文されている。口縁部文様帯直下には連続する3個の結び目をもつ細かい綾絡文が巡っている。内面は丁寧に研磨されている。

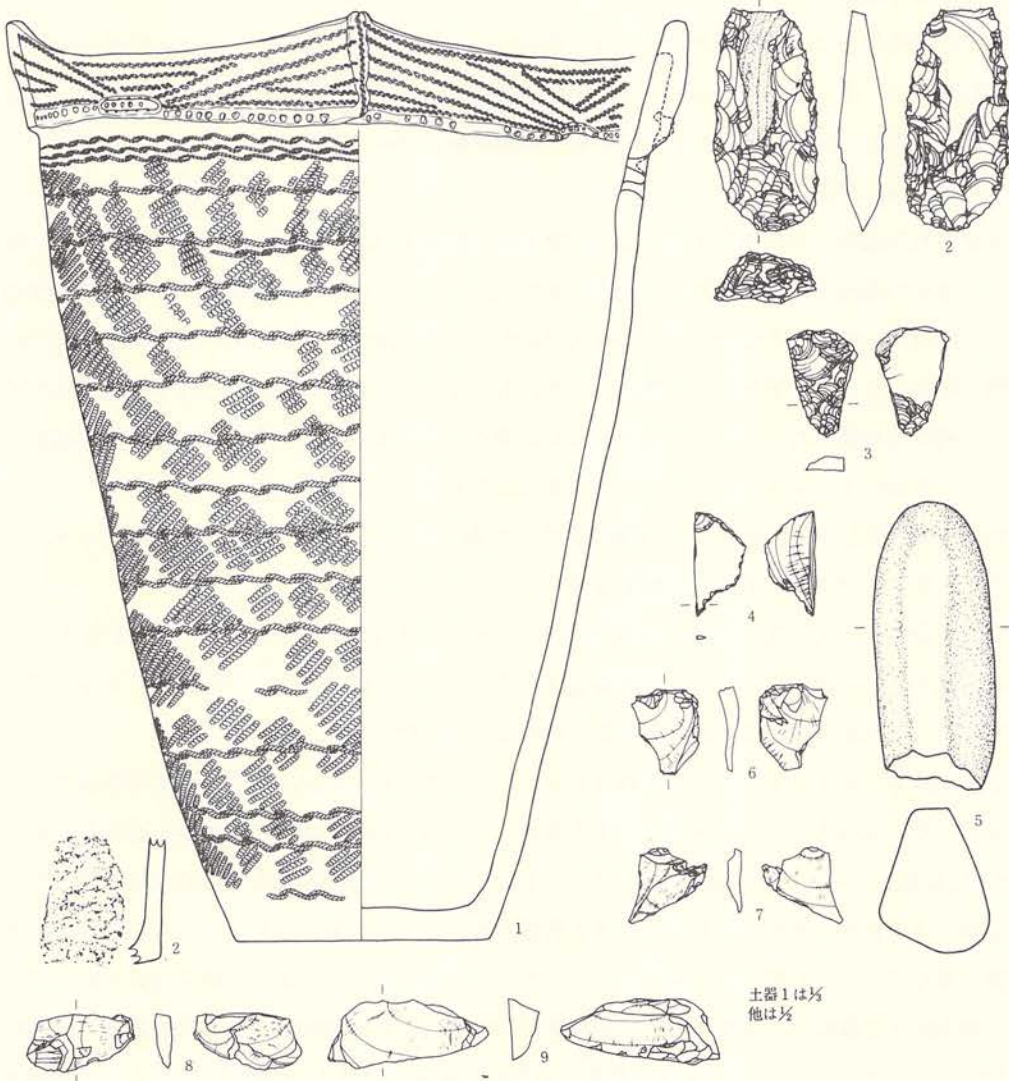
なお、体部下半が二次火熱のため褐色を呈し、口縁部から下約10cmが同様に赤褐色を呈している。また、文様帯の下には補修孔が2孔貫通している。補修孔は内外両面から錐揉みされたもので、貫通しないものが表面に2孔、裏面に1孔存する。2は綾絡文をもつ底部破片である。

石器2は横長剥片を縦位に利用した筥状石器である。断面は蒲鉾形をなし、表面の一部に自然面を残している。基部は薄く幅狭くなっており、刃部は中央に位置し、幾分丸味をもっている。両側縁は直線的で打撃加工され、刃部は押圧剥離による両面加工で、刃部先端から2.5cmの範囲に施されている。加工は裏面が最後に行われ、微細な破砕痕が観察される。なお、刃部加工の中には時間差をもつとみられる剥離痕跡が認められ刃部再成の可能性がある。

3は三角形となるよう両側縁を折断したもので、先端部使用を目的とした石器のようである。基部は自然面を残し加工されていない。4は先端の一部を加工したものである。8・9は剥片で、6・7など8点は碎片である。ほとんど平坦な打面と打瘤をもつものである。

5は小型の棒状擦石である。使用面の幅は1cmで、素材の中では最も狭い部分を使用している。一部欠損している。



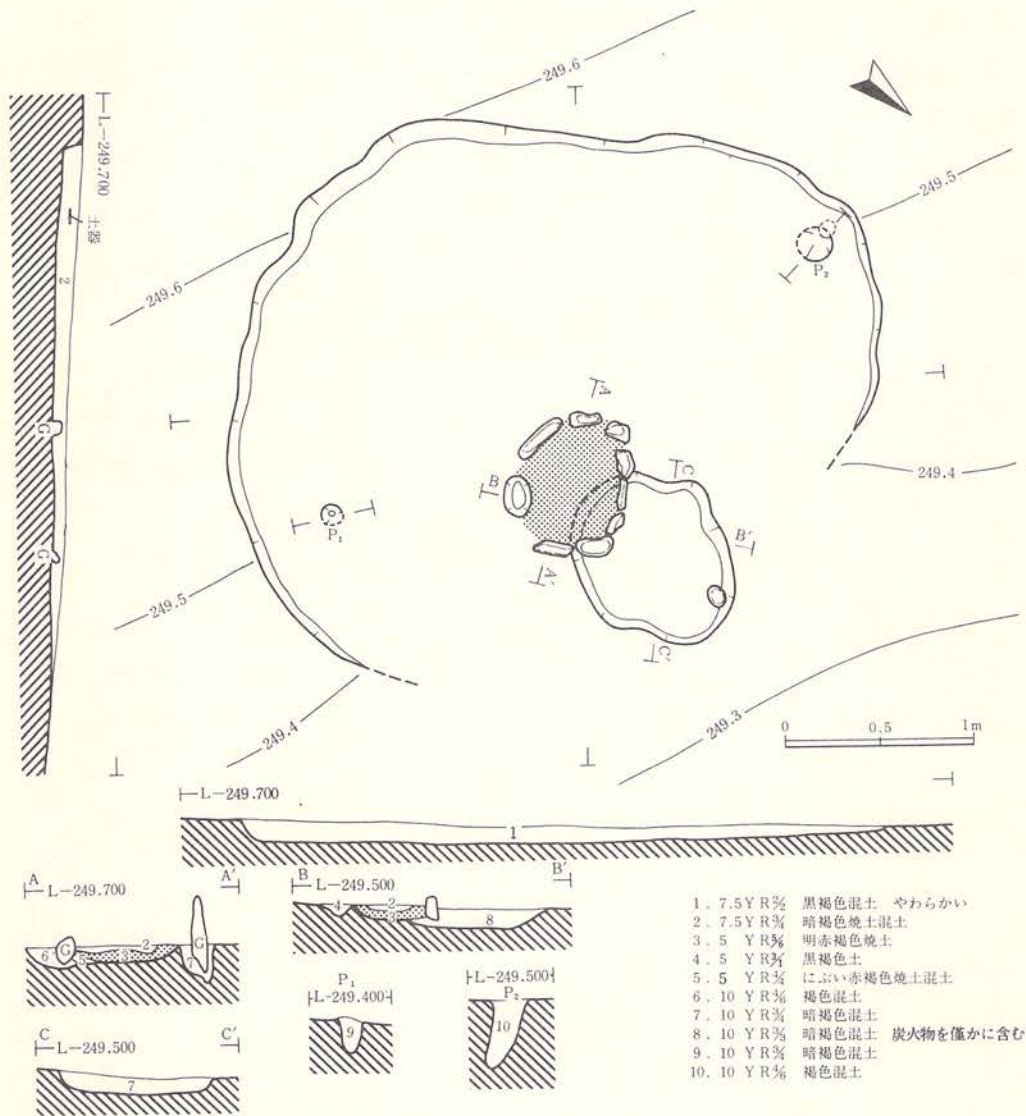


第11図 VII B 18 竪穴住居跡出土遺物

### 3. VII F 22 竪穴住居跡

〈遺構〉(第12図、図版7)

東区の南東部に位置する。VII G 22 土壇(フラスコ状)の南2 mである。北半は削平されていて不明である。平面形は円形を基調とするようであるが若干歪んでいる。規模は東西方向が3.5 m、南北方向は土壇まで含めると3.0 mとなる。



第12図 VII F 22 竪穴住居跡

埋土は黒褐色混土の単層である。床面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。壁高は最大12cmである。

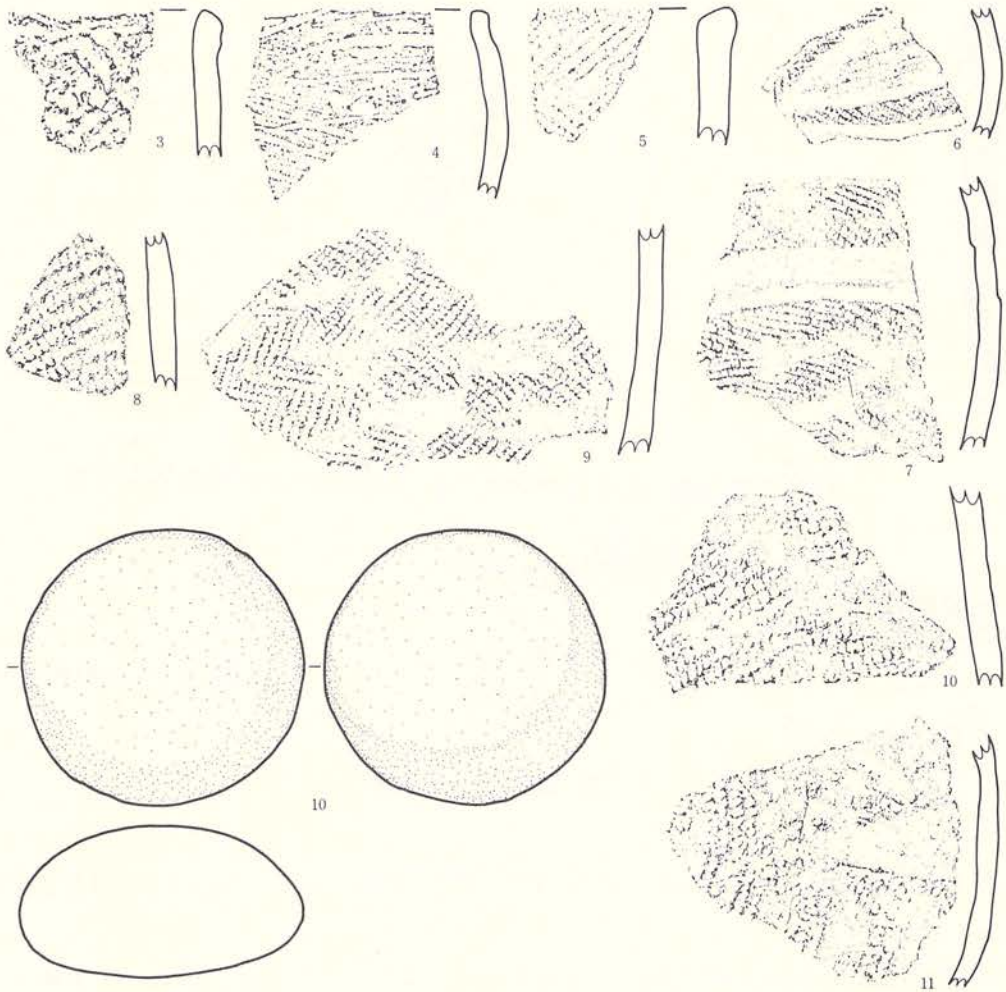
炉は幾分北に片寄るもののほぼ中央に位置する。炉縁石8個からなる石囲い炉で、南側の一部が抜き取られている。本来は、10個前後で構成されていたものと推定される。平面形は外径が東西80cm、南北60cmの長円形をなす。炉縁石はほとんどの場合、側縁を上を設置されているが、東側の1個は高さ28cmの立石となっている。焼土は床面より若干下がって検出され、その



厚さは6cmである。炉跡の構築は炉縁石の大きさに合わせて掘り込んだ穴に埋設されているようである。

柱穴は南西部と北西部の2柱穴である。直径12cm、18cmの円形で、深さは20cm、36cmである。埋土は褐色混土、暗褐色混土である。なお、P2は内側に傾斜するものである。

また、炉跡の南側に重複する形に土壇がある。南端部の上半が炉の構築によって破壊されている。南北90cm、東西68cmの不整な長円形をなし、深さは10cmほどである。埋土は炭化物を少量含む暗褐色混土である。土壇内には北端部に川原石が1個あり、先行する炉跡ではないかと考えられる。



第13図 VII F 22 竪穴住居跡出土遺物

〈遺物〉(第13図、図版10)

発見された遺物は住居跡埋土の縄文土器35点、土師器1点、碎片2点である。土器はいずれも破片で器形の復元できるものはない。

3～5は平縁となる口縁部破片である。3は口唇部外側が斜めに落されている。地文は不鮮明であるが、RL単節斜行縄文とみられる。胎土に繊維が含まれている。4は横位沈線が不規則に引かれ、一部格子状をなす。5は口唇部内側が斜めに落され、幾分肥厚している。羽状縄文の横回転である。

6～11は体部破片である。6、7は帯状の磨消縄文をもつものである。8～11はLR、あるいはRLの単節斜行縄文をもつもので、11は上半に側面圧痕文をもつ。

土師器は甕の細片である。碎片は小さいもので、1点は二次火熱のため剥落が著しい。

#### 4. VIII A 23 竪穴住居跡

〈遺構〉(第14図、図版8)

第2次調査区の西端、急崖の崖上部に位置する。VIII A 24 土城の北50cmで、全体的に風倒木の跡に構築されている。平面形は円形を基調とするようであるが、東半が攪乱や削平されてははっきりしない。規模は南北方向、東西方向とも2.5mまで確認されるが、3m前後の比較的小さな竪穴住居跡のようである。

埋土は極暗褐色土、褐色混土、暗褐色混土で、壁の崩落土がブロック状に堆積している。床面は東方向に若干傾斜しているが、ほぼ平坦である。壁は当住居跡が風倒木の跡に構築されたため壁際には立石2個を立てて土止めとしている。壁高は最大60cmである。

炉は幾分南に片寄るもののほぼ中央に位置する。炉縁石7個からなる石囲い埋設土器炉である。平面形は外径が57×55cmの幾分角ばった円形をなし、炉縁石の内側は若干赤変している。土器は破損しているが完形となる鉢形土器で、炉跡中央部に正立位に埋設されている。埋土は焼土を含む黒褐色土で、土器の上半は2次火熱のため黄橙色を呈している。

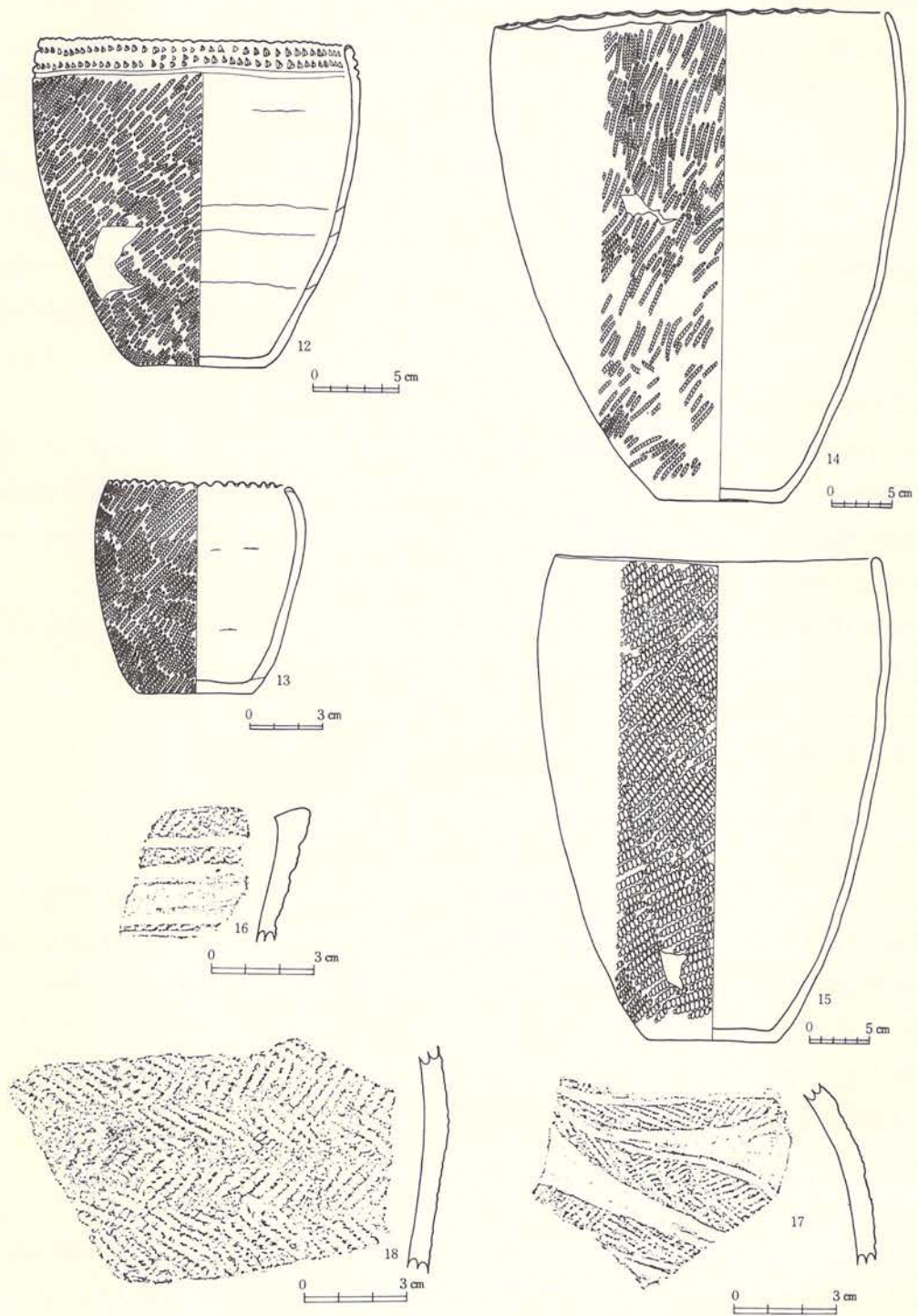
炉跡の構築方法は土器を埋設した後、炉縁石の設置穴を掘り込んで、側縁が上になるように埋設している。

柱穴は北側の2柱穴である。直径27cm、30cmの円形で、深さは25cm、30cmである。埋土は黒褐色土、暗褐色混土である。

炉の北側の床面から横倒し状の深鉢形土器(14)が、南東部の床面から完形の小形鉢形土器(13)が発見されている。埋土上位からは投げ込みとみられる深鉢形土器(15)が出土し、また、炉の周辺の床面からは3点の土器が発見されている。







第15图 VIII A23豎穴住居跡出土遺物



## 〈遺物〉(第15図、図版11)

発見された遺物は完形土器4点、破片7点、碎片1点である。12は炉の埋設土器に利用された鉢形土器で、口唇部に刻み目をもつ。口縁部文様帯は2段の三角形の刺突列と1条の沈線からなり、下半はLR単節斜行縄文が施文されている。なお、口縁部から下11cmが二次火熱のため黄褐色～赤褐色を呈している。

13は住居跡南東部の床面から発見された小型土器である。全面LR単節斜行縄文が横回転され、口唇部には1と同様に刻み目をもっている。14は炉の北側の床面から横倒し状態で発見された深鉢形土器である。器形は底部から開く形をなし、全体的に土圧のため歪んでいる。口縁部は平縁であるが、口唇部が凹んでおり、かすかな波状を呈している。全面にLR単節斜行縄文がやや斑らに横回転施文されている。なお、体部下半は二次火熱のため褐色を呈し、上半には炭化物が付着している。炭化物は厚い部分では3mmである。

15は埋土上位から発見された深鉢形土器である。器形は14に比較すると底径が大きくて、逆に口径が小さくスマートである。口縁部は僅かに内彎ぎみである。全面節の大きいLR単節斜行縄文が横回転されている。口唇部から内面は丁寧に研磨されている。なお、体部下半は二次火熱のため褐色を呈し、上半には炭化物が付着している。

16は口唇部が肥厚する口縁部破片で、帯状の磨消縄文が巡っている。17は同様に三角形の磨消縄文である。18は羽状縄文が施文されている。

## 2. 土 壌

### 1. VI H 16土壌(皿形)(第16図、図版12)

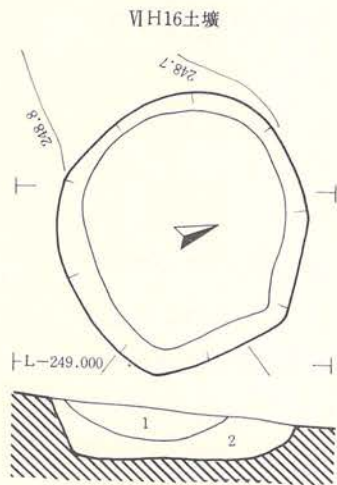
中央区の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.52×1.31m、底部が1.28×1.07mであり、平面形は北西―南東に若干長い不整形である。深さは最大28cmである。壁は、南西壁が底面から直線的に外傾して立ち上がり、北東壁は緩やかに内彎して立ち上がる。断面形は皿形である。底面は平坦である。

埋土は、上位が黒褐色混土、下位が暗褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

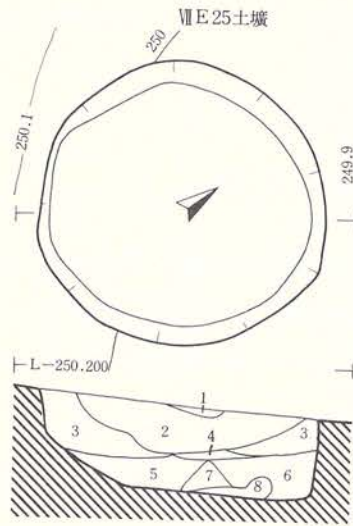
遺物は出土していない。

### 2. VII E 25土壌(皿形)(第16図、図版12)

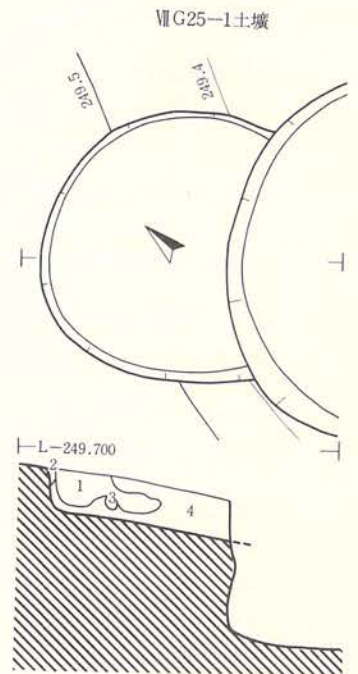
東区東部の斜面上位に位置する。VII E 25陥し穴状遺構を切っている。規模は開口部が1.51m、底部が1.38mであり、平面形は円形である。深さは最大47cmである。底面は南西部分に盛り上がる部分があるが他は平坦である。壁は底面から外反気味に立ち上がる。断面形は皿形である。



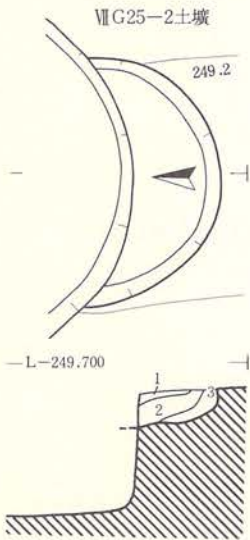
1. 10 Y R% 黒褐色混土
2. 10 Y R% 暗褐色混土



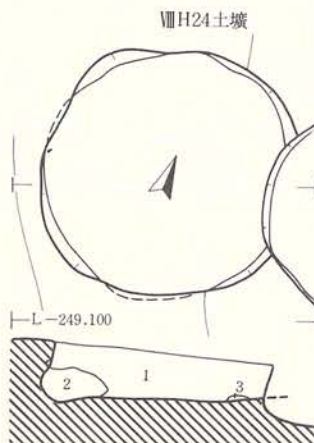
1. 10 Y R% にふい黄橙混土
2. 10 Y R% 暗褐色混土
3. 10 Y R% 黒褐色混土
4. 10 Y R% にふい黄褐色混土
5. 10 Y R% 黄褐色混土
6. 10 Y R% 黒褐色混土
7. 10 Y R% 黄橙混土
8. 10 Y R% 黄褐色混土



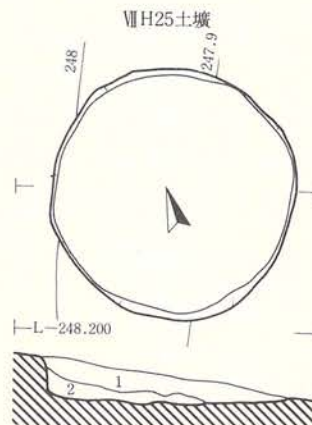
1. 10 Y R% 黒褐色
2. 7.5 Y R% 暗褐色
3. 10 Y R% 褐色
4. 10 Y R% 暗褐色



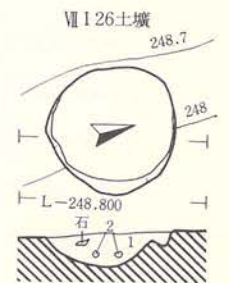
1. 10 Y R% 褐色混土
2. 10 Y R% 暗褐色混土
3. 10 Y R% 黄褐色混土



1. 10 Y R% 黒褐色混土
2. Y R R% 暗褐色混土
3. 10 Y R% 暗褐色混土



1. 10 Y R% 褐色混土
2. 10 Y R% 橙色混土



1. 10 Y R% 褐色混土
2. 10 Y R% にふい黄褐色混土

第16図 土壤(皿形)



埋土は、上位が暗褐色混土、中位が黒褐色混土、下位が黄褐色混土、黒褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

### 3. VII G 25-1 土壙(皿形) (第16図、図版12)

東区東部の斜面上位に位置する。VII G 25土壙によって切られている。残存部分から規模・形状等を推定する。規模は開口部が1.41m、底部が1.34mであり、平面形は円形を基調にすると考えられる。深さは最大22cmである。底面は平坦で斜面下位へ若干傾き、壁面は若干外反する。断面形は皿形である。

埋土は、黒褐色混土・暗褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

### 4. VII G 25-2 土壙(皿形) (第16図、図版12)

東区東部の斜面上位に位置する。VII G 25土壙によって切られている。残存部分から規模・形状を推定する。規模は開口部が1.30m、底部が1.15mであり、平面形は円形を基調にすると考えられる。深さは最大17cmである。底面は平坦で、壁面が若干内彎する。断面形は皿形である。

埋土は、上位は褐色混土・下位は暗褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

### 5. VII H 24土壙(皿形) (第16図、図版13)

東区東部の斜面中位に位置する。VII I 24土壙によって切られている。規模は開口部が1.42×1.28cm・底部が1.32×1.28cmであり、平面形は円形である。底面は平坦で、壁面は一部内彎するものの他は外反する。断面形は皿形である。

埋土は黒褐色混土・暗褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

### 6. VII H 25土壙(皿形) (第16図、図版13)

東区東部の斜面中位に位置する。斜面下位の開口部が削平されて欠失している。規模は開口部が1.29cm・底部が1.25mであり、平面形は円形である。深さは最大22cmである。底面は平坦で、壁面は底面から若干外反する。断面形は皿形である。

埋土は、上位が褐色混土・下位が橙色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

## 7. VII 126土壙(皿形)

〈遺構〉(第16図、図版13)

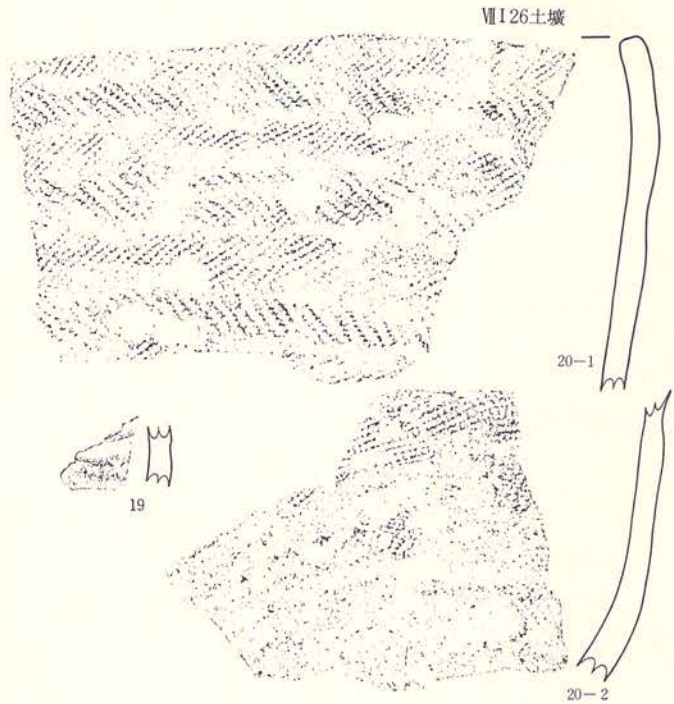
東区東部の斜面中位に位置する。規模は開口部が68cm・底部が65cmであり、平面形は円形である。深さは最大18cmである。底面・壁面とも凹凸する部分があるが、断面形はほぼ皿形である。

埋土は褐色混土で自然堆積状況を示している。

遺物は、縄文土器3点が埋土上位から出土している。

〈遺物〉(第17図、図版40)

19は細片ではっきりしないが、沈線で区画後磨消しているようである。20は深鉢形土器の口縁部で内彎ぎみに納まる平緑である。口縁端部が僅かに把厚し、方形をなす。全面細かり羽状縄文が横回転施文されている。



第17図 土壙出土遺物(皿形)

1. III F 4土壙(フラスコ形)(第18図、図版14)

### 1. III F 4土壙(フラスコ形)(第18図、図版14)

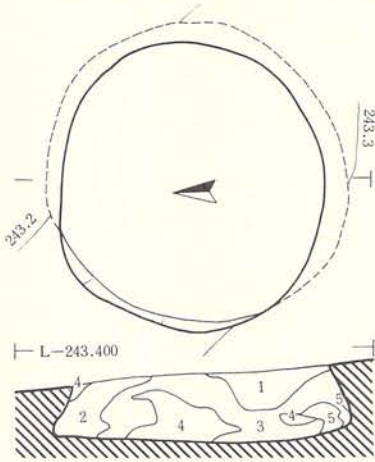
中央区西部の斜面下位に位置する。規模は開口部が1.54×1.40m・底部が1.62×1.55mであり、平面形は円形である。深さは最大38cmである。壁は、北西壁が底面から外反して立ち上がるが、他は底面からオーバーハングして立ち上がる。断面形はフラスコ形が崩れた形である。床面は中央から壁にかけて緩やかな弧状を呈する。

埋土は、上位が黒色～黒褐色混土、下位が暗褐色混土、褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

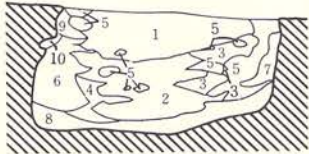
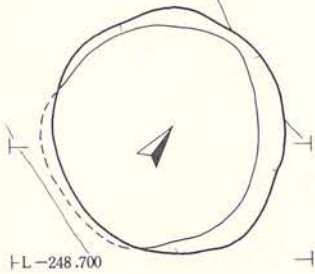
遺物は出土していない。



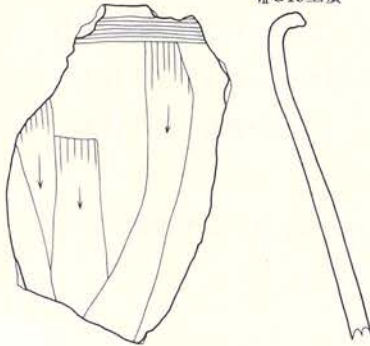
ⅢF4 土壌



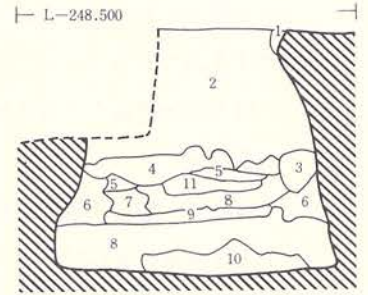
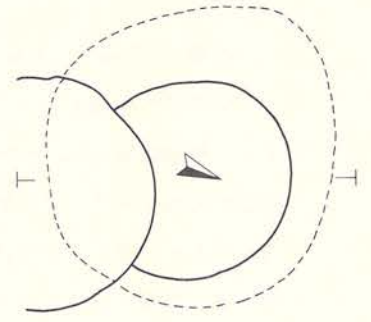
ⅦG19土壌



ⅦG19土壌

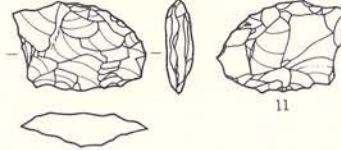


ⅦG18-1土壌



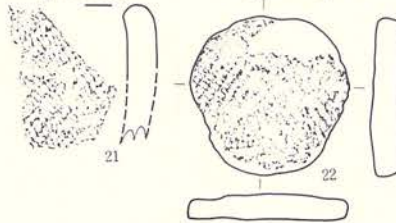
1. 10Y R 弱 黒色混土
2. 10Y R 弱 黒褐色混土
3. 10Y R 弱 黒褐色混土
4. 10Y R 弱 暗褐色混土
5. 10Y R 弱 褐色土

ⅦG18土壌



ⅦG18土壌

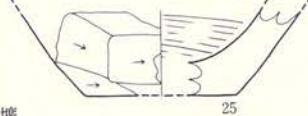
ⅦG18土壌



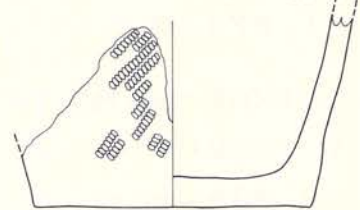
1. 10Y R 弱 褐色混土
2. 10Y R 弱 黄褐色混土
3. 10Y R 弱 黄褐色混土
4. 10Y R 弱 黒褐色混土
5. 10Y R 弱 褐色混土
6. 10Y R 弱 明黄褐色混土
7. 10Y R 弱 褐色混土
8. 10Y R 弱 暗褐色土 しまっている
9. 10Y R 弱 におい暗褐色土 しまったかたい
10. 10Y R 弱 黒褐色土 しまっている
11. 10Y R 弱 黒褐色混土

1. 10Y R 弱 褐色混土
2. 10Y R 弱 黄褐色混土
3. 10Y R 弱 黄褐色混土
4. 10Y R 弱 黒褐色混土
5. 10Y R 弱 褐色混土
6. 10Y R 弱 明黄褐色混土
7. 10Y R 弱 褐色混土
8. 10Y R 弱 暗褐色土 しまっている
9. 10Y R 弱 におい暗褐色土 しまったかたい
10. 10Y R 弱 黒褐色土 しまっている
11. 10Y R 弱 黒褐色混土

ⅦG19土壌



ⅦG19土壌



第18図 土壌 (フラスコ形1)

## 2. VII G 18-1 土壙(フラスコ形)

〈遺構〉(第18図、図版14)

東区東部の斜面中位から上位にかけて位置する。段丘崖の西4mである。南東部分がVII G 19土壙(フラスコ形)に切られている。規模は開口部が1.02m・底部が1.70×1.55cmであり、平面形は、開口部がほぼ円形、底部は西部分が若干長い不整形円形をなす。深さは最大1.30mである。南東壁は底面から20cmほど真っ直ぐ立ち上がり、その後オーバーハングする。他の壁は底面から緩やかにオーバーハングして立ち上がる。断面形はほぼフラスコ形を呈する。

埋土は、下位が黒褐色混土の上に暗褐色混土(8層)がしまった状態で堆積し、上面がほぼ平坦である。中位は、しまつて堅いにふい黄褐色混土、暗褐色混土が中央部に不整形円形に堆積し、壁際には地山の崩落した明黄褐色混土が堆積する。上部に黒褐色混土、褐色混土が堆積する。上位は黄橙色土だけである。以上のことから、下位と上位は人為堆積、中位が自然堆積と推定される。

床面は2面ある。第1面は堆土最下位の床面である。中央から壁にかけて緩やかな弧状を呈する。第2面は8層上面で平坦であり、しまっている。

遺物は縄文土器1点・土製品1点・石器1点が埋土上位から出土している。

〈遺物〉(第18図、図版40)

21は粗製土器の口縁部で、内彎気味に納まる。LR単節斜行縄文が横回転施文されている。22は土器片を利用した円盤状土製品である。周辺部を打ち欠いた後、部分的に磨って調整している。LR単節斜行縄文が縦に回転施文され、表文には炭化物が付着している。

11は上縁及び下縁が交互剥離されており、ピース・エスキューとみられる。

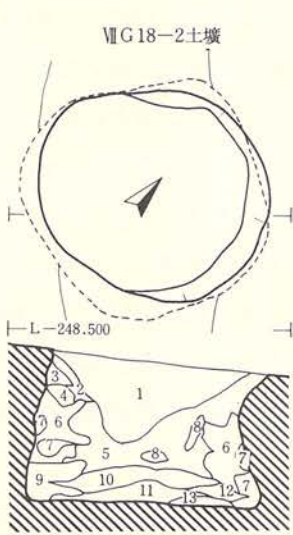
## 3. VII G 18-2 土壙(フラスコ形)(第19図、図版15)

東区東部の斜面中位から上位にかけて位置する。段丘崖の西4mである。規模は開口部が1.25×1.10m・底部が1.35×1.17mであり、平面形は開口部が東一西に若干長い長円形、底部が不整形円形をなす。深さは最大78cmである。南壁は底面からオーバーハングして立ち上がる。北壁は底面からオーバーハングして立ち上がり、上半が外反する。断面形はほぼフラスコ形を呈する。床面は平坦で若干斜面下位に傾斜する。

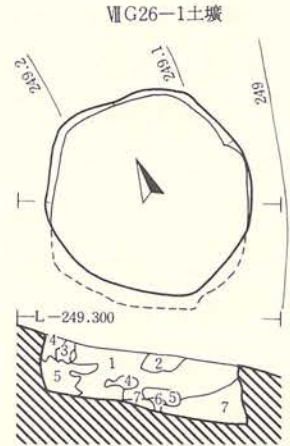
埋土は上位が褐色混土、中位がにふい黄褐色混土と壁際に褐色・明褐色混土、下位は黒褐色、暗褐色混土と壁際に明黄褐色、褐色混土からなり、自然堆積状況をしている。

遺物は出土していない。

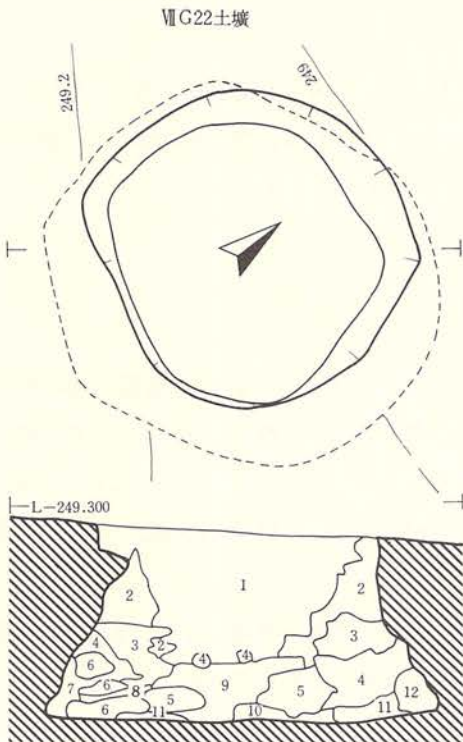




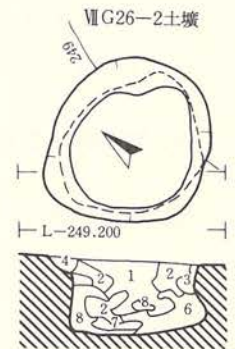
1. 10Y R% 褐色混土
2. 10Y R% にぶい黄褐色混土
3. 10Y R% 暗褐色混土
4. 10Y R% 暗褐色混土
5. 10Y R% にぶい黄褐色混土
6. 10Y R% 褐色混土
7. 10Y R% 明黄褐色混土
8. 10Y R% 黄褐色混土
9. 10Y R% 明黄褐色混土
10. 10Y R% 黑褐色混土
11. 10Y R% 暗褐色混土
12. 10Y R% 褐色混土
13. 10Y R% 黄褐色混土



1. 10Y R% 黑褐色混土
2. 10Y R% 褐色混土
3. 10Y R% 黑褐色混土
4. 10Y R% 褐色混土
5. 10Y R% 褐色混土
6. 10Y R% 暗褐色混土
7. 10Y R% にぶい黄褐色混土



1. 10Y R% 黑褐色混土
2. 10Y R% 暗褐色混土
3. 10Y R% 黄褐色土
4. 10Y R% 黑褐色混土
5. 10Y R% 褐色混土
6. 10Y R% 明黄色土
7. 10Y R% にぶい黄褐色土
8. 10Y R% 黑褐色混土
9. 10Y R% 黑褐色混土
10. 10Y R% 黑褐色混土
11. 10Y R% 暗褐色混土
12. 10Y R% 暗褐色混土



1. 10Y R% 黑褐色混土
2. 10Y R% 褐色混土
3. 10Y R% 黄褐色混土
4. 10Y R% 暗褐色混土
5. 10Y R% 褐色混土
6. 10Y R% にぶい黄褐色混土
7. 10Y R% にぶい黄褐色混土
8. 10Y R% にぶい黄褐色混土

第19図 土壌 (フラスコ形2)

#### 4. VII G 19土壙(フラスコ形)

〈遺構〉(第18図、図版14)

東区東部の斜面中位から上位にかけて位置する。段丘崖の西4mである。規模は口縁部が1.30m・底部が1.14mであり、平面形は開口部が円形・底部が不整形をなす。深さは最大64cmである。壁面は、南壁が底面からオーバーハングして立ち上がり、他は底面から外反ぎみに立ち上がる。断面形はフラスコ形が崩れた形状を呈する。北西壁はVII G 18土壙を切っている。底面は中央部が若干弧状になるもののほぼ平坦である。

埋土は中央部の上位から下位が黒色～黒褐色混土、壁際にはクサビ状に褐色～黄橙色混土、最下位は黒褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は縄文土器1点・土師器2点が埋土上位から出土している。

〈遺物〉(第18図、図版40)

23は深鉢形土器の底部である。RL単節斜行縄文が縦回転施文されている。底には「1本超え・1本潜り・1本送り」による網代痕をもつ。経糸が1cmと間隔が広く、緯糸は3mmほどである。製作時の置き替えによるものか僅かずつずれて3方向のものが観察できる。

24・25は土師器甕の口縁部と底部である。24は口縁部が短く外折している。口縁部が横ナデ、外面が縦方向のへラケズリ、内面が縦方向のナデ調整である。また外面には炭化物が付着している。25は外面が横方向のへラケズリで、内面は横方向のナデ調整である。

#### 5. VII G 22土壙(フラスコ形)(第19図、図版15)

東区東部の斜面上位にある。規模は開口部が1.68×1.57m・底部が2.06mであり、平面形は不整形である。深さは最大1.02cmである。

壁面は、南壁が底面から直線的に内傾し、上半が外反する。他は底面から直線的に内傾し、上半が緩やかに外反する。南壁は壁面の崩落が認められるものの平坦な床面と共に開口部近くまでオーバーハングする形状を残している。底面は中央から壁にかけて緩やかな弧状を呈する。

埋土は開口部から底面の中心部にU字形に黒褐色混土が堆積し、他は壁面地山崩落土の暗褐色土、黄褐色土、明黄色土等からなる。いずれも自然堆積状況を示す。後者の、断面が二等辺三角形の埋土堆積状況は、崩落しやすい壁面をもつフラスコ形土壙の特徴をよく示している。

遺物は出土していない。

#### 6. VII G 26-1土壙(フラスコ形)(第19図、図版15)

東区東部の斜面中位にある。規模は開口部が1.07m・底部が1.12×1.01mであり、平面形は



開口部が不整形、底部が南西―北東に若干長い長円形をなす。深さは最大30cmであり、削平をうけて浅くなっている。壁面は、南西～南壁にかけては底面からオーバーハングして立ち上がり、他の壁はほぼ真っ直ぐ立ち上がる。断面形はフラスコ形の崩れた形状を呈する。底面は平坦で若干斜面下位に傾斜している。

埋土は、壁際が褐色混土、にぶい黄褐色混土で、他は黒褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 7. VII G 26-2 土壙(フラスコ形) (第19図、図版15)

東区東部の斜面上位に位置する。規模は開口部が88×82cm・底部が76×70cmであり、平面形は不整形をなす。深さは最大38cmであり、削平をうけて残くなっている。壁面は底面からオーバーハングして立ち上がり、上半が緩やかに外反する。断面形はフラスコ形を呈する。底面は中央から壁にかけて緩やかな弧状を呈する。

埋土は壁際ににぶい黄橙色～褐色混土が堆積し、他は黒褐色混土からなる。自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 8. VII G 27 土壙(フラスコ形) (第24図、図版15)

東区東部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.42×1.38m・底部が1.39×1.24mであり、平面形は不整形をなす。深さは最大38cmである。壁は北東壁が底面からオーバーハングして立ち上がり、他の壁はほぼ真っ直ぐ立ち上がる。断面形は上半が削平されたフラスコ形を呈している。底面は平坦である。

埋土は、壁際が褐色・暗褐色混土が堆積し、他は黒褐色混土からなる。自然堆積状況を示している。

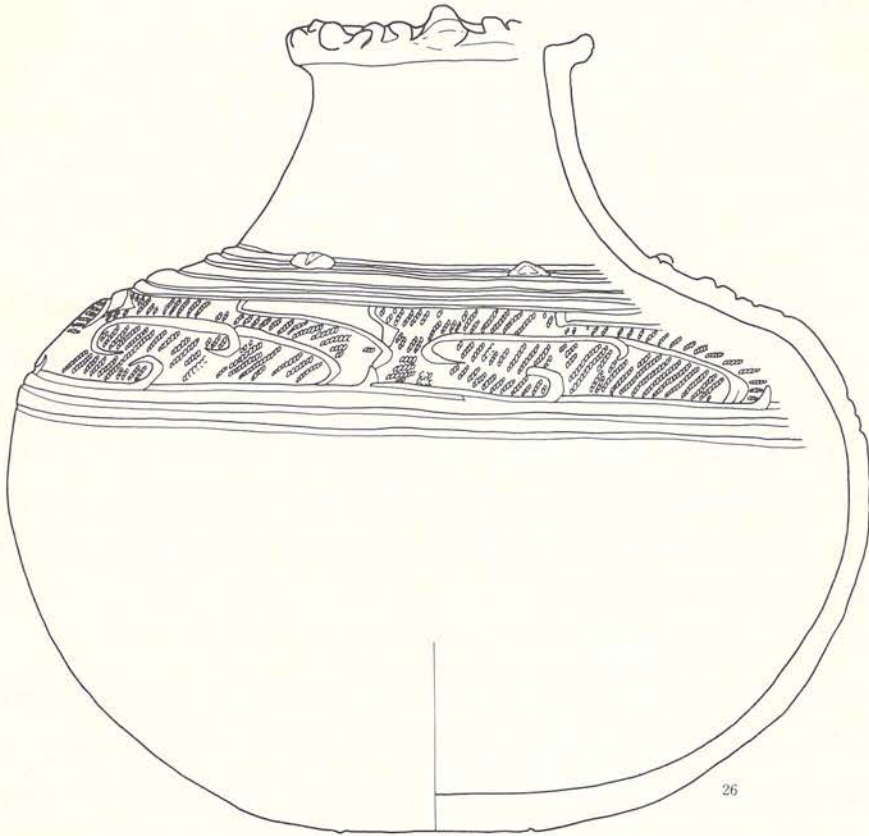
遺物は出土していない。

#### 9. VII H 25-2 土壙(フラスコ形)

〈遺構〉(第20図、図版16)

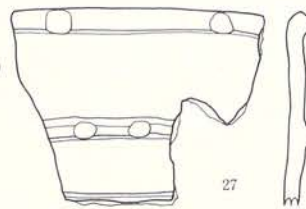
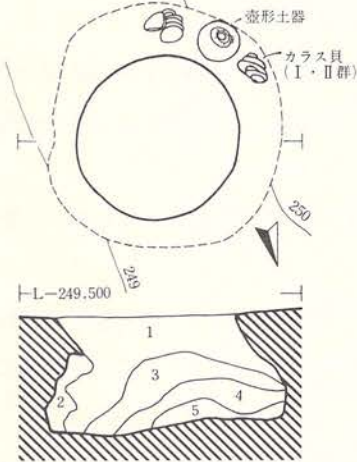
東区東部の斜面中位に位置する。規模は、開口部が径85cm・底部が1.32×1.22mであり、平面形は、開口部が円形、底部が不整形をなす。深さは最大63cmである。

壁は底面から20cm程ほぼ真っ直ぐ立ち上がり、その後強く内彎する。底面はやや凹凸があるがほぼ平坦である。断面はフラスコ状である。



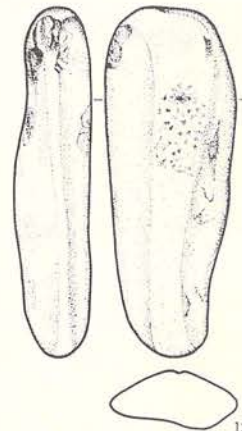
26

ⅦH25-2土城  
カラス貝  
(Ⅲ~Ⅵ群)



27

- 1. 10Y R% 黒褐色混土
- 2. 10Y R% 暗褐色混土
- 3. 10Y R% 黒褐色混土
- 4. 10Y R% 暗褐色混土
- 5. 10Y R% 黒褐色混土



12

第20図 ⅦH25土城(フラス形3)



埋土は黒褐色混土・暗褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は、南西壁際の底面から完型の壺形土器1点・カラス貝37点、埋土上位から縄文土器1点・石器1点が出土している。

完形の土器とカラス貝は底面直上に堆積する炭化粒を少量混入する褐色混土の上に載っている。遺物を捉えるための凹みや台等の施設は確認されていない。

土器は、体部が壁に接し、やや壁側に傾くがほぼ直立する。土器内には遺構埋土と同様の暗褐色混土が充満していた。土器に接する遺構埋土は、土器を赤化した朱の剥落により赤くなっていた。

貝は、壺の北西約8cmに右の貝Ⅰ・Ⅱ群11点・北東約16cmに左の貝Ⅲ～Ⅵ群26点が重ねられて出土した。右の貝はⅠ・Ⅱ群とも表面を上にし、腹縁は南を向く。左の貝は、表面を下にしたⅣ群の上に、表面を斜め上にしたⅢ群が凭れるように載る。両群とも腹縁は南東を向く。更に表面を下にしたⅤ群がⅣ群の北東左部分に凭れる。Ⅵ群は表面を斜め上にしてⅤ群に凭れる。Ⅴ・Ⅵ群とも腹縁は東を向く。いずれの貝も、右殻同士あるいは左殻同士を、大きい貝から小さい貝へと、貝の窩心部に合わせ、入子状に重ねられている。重なる貝の間には遺構埋土と同様の暗褐色混土を挟んでいる。

#### 〈遺物〉(第20—23図、図版41)

26は全面赤色顔料が塗布された完形の壺形土器である。器形は肩の張った偏平な体部をもち、頸部が緩やかに細まって口縁部に至る。口縁部は外方に張り出した後上方に屈曲し、受口状をなす。端部には数個の小突起が配されている。頸部は無文で、頸部下端と肩部にそれぞれ3条の沈線がめぐり、頸部には6分する位置に小さな貼瘤が付されている。肩部と体部最大部の間は沈線によって雲形文が描かれ、磨消されている。地文はLR単節斜行縄文が横回転施文されている。3条の沈線の下半は丁寧に研磨され、底部は基筈底様に削られている。

27は壺形土器?の口縁部破片で、口縁部下と頸部中項に貼瘤をもつ。頸部中項の貼瘤は3条の沈線の間を間隔を短く配している。頸部下位にも沈線が巡っている。沈線、瘤以外は全面研磨されている。

12は棒状の自然石を利用した凹石である。緩い高まりを利用して不規則な小さな凹みが形成されている。

カラス貝は、名に由来する表面の黒色は完全に消滅し、灰白色を呈している。完型の貝はなく、縁辺部が崩れている。特に前縁や後縁が大きく崩れているものもあり、殻皮が部分的に剥落し、白色部分が見えるものもある。1個体の出土はない。

Ⅰ・Ⅱ群は全点左殻である。殻長は、Ⅰ群(3点)が9~13cm、Ⅱ群(8点)が1点(9cm)を除くと11~13cmである。Ⅱ群④~⑧は前縁が著しく崩れる。③の後縁寄りの腹縁近くに1個

の円孔がある。表面で直径3.5cmある。人為的に内面から穿孔したらしく、内面の直径は5mmと表面のそれより大きい。Ⅳ群(15点)は欠失の著しい①と⑨を除く他は左殻である。殻長は3~15cmと幅がある。特に後縁を若干欠失するが残存状況の良い②~⑤は4.5cm・6cm・6.5cm・7cmと小型である。①は欠失部分が多いが、形状からすると最も小型であるらしい。①・⑥・⑧・⑨・⑩は蝶番部分を欠失する。Ⅴ群(4点)は全点右殻、Ⅵ群(3点)は全点左殻である。Ⅴ・Ⅵ群とも蝶番部分を欠失する。殻長は、Ⅴ群が7~11.5cm、Ⅵ群が7~13cmである。Ⅴ群の③・④、Ⅵ群の①は欠失が著しい。

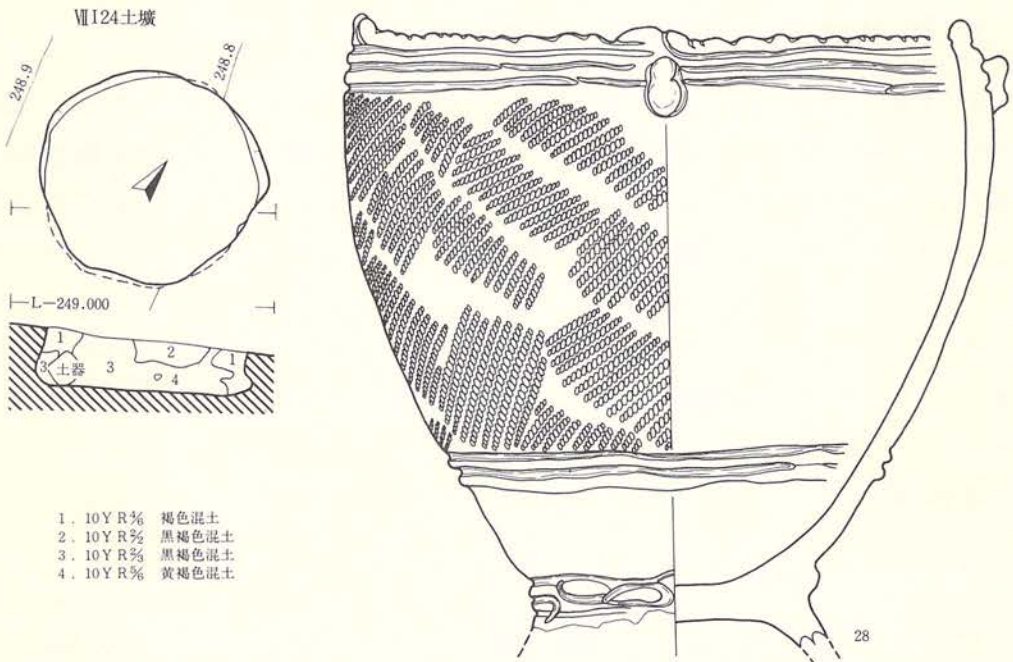
#### 10. ⅦH25-3 土壙(フラスコ形) (第24図、図版16)

東区東部の斜面中位に位置する。南東部分がⅦG25陥し穴状遺構(長方形)によって切られている。

規模は開口部が1.07m・下端が1.10mであり、ほぼ円形をなす。深さは最大37cmである。壁は底面から真っ直ぐ立ち上がる部分もあるが、オーバーハングして立ち上がる。断面形は上半が削平されたフラスコ形を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土・下位が褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。



第23図 ⅦI 24土壙(フラスコ形4)



## 11. VII 24土壙(フラスコ形)

〈遺構〉(第23図、図版16)

東区東部の斜面中位にある。段丘崖の西4mにある。規模は開口部が1.17×1.10m、底部が1.14×1.13mであり、平面形はほぼ円形をなす。深さは最大30cmであり、削平をうけて浅くなっている。壁面は、南半が底面から外反して立ち上がり、北半は底面からほぼ真っ直ぐ立ち上がる。断面形は上半が削平されたフラスコ形を呈する。底面は平坦である。

埋土は黒褐色混土・褐色混土からなり、自然堆積と推定される。

遺物は、縄文土器が北西壁際の底面直上からやや傾いて出土している。

〈遺物〉(第23図、図版40)

28は台の部分に欠損した台付鉢である。器形は高台から緩やかに立ち上がり、最大径を体上部にもち口縁部が幾分内彎している。口縁部にはB形突起を1個もち、口縁端部にB形突起24個を配している。沈線はこのB型突起から発してB型突起で終結し、2条は巡っている。口縁端部には小さな刻みが施されている。下半はLR単節斜行縄文が横回転施文され、腰部には2条の沈線が巡り、下半が無文となる。台接合部には横S字状沈線が施されている。

なお、内外面ともに炭化物が付着し、体部下半は二次加熱のため幾分赤色変化している。

## 12. VII J 24土壙(フラスコ形) (第24図、図版17)

東区東部の斜面中位にある。段丘崖から西4mにある。規模は開口部が1.64×1.23m、底部が1.94×1.86mであり、平面形は開口部が不整形・底部が不整円形をなす。深さは最大86cmである。壁面は北東壁が底面から真っ直ぐ立ち上がり、北西壁は底面から30cm真っ直ぐ立ち上がった後オーバーハングしている。また、南東壁は底面からオーバーハングして立ち上がる。底面は中央から壁にかけて緩やかな弧状を呈し、軟らかい。

埋土は上位に暗褐色混土・明黄褐色混土が堆積し、中位に黒褐色混土、下位ににぶい黄褐色土が堆積し、壁際は壁の崩落土の黄褐色土・にぶい黄橙色土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

## 13. VII J 24-2土壙(フラスコ形) (第24図、図版17)

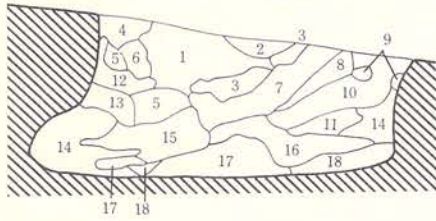
東区東部の斜面中位に位置する。段丘崖の西2mである。規模は開口部が1.27×1.20m、底部が1.40×1.32mであり、平面形は不整円形をなす。深さは最大61cmである。斜面に立地して削平されたことが推測される。壁面はオーバーハングして立ち上がる。断面形はフラスコ形を



ⅦJ24土壌

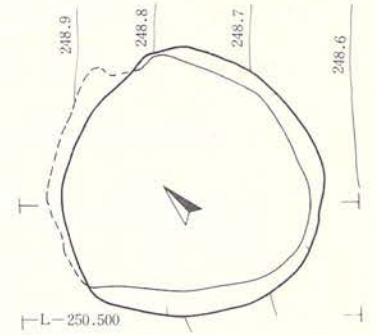


L-249.000

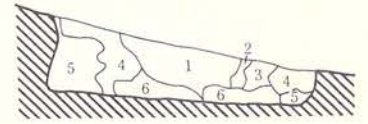


1. 10 Y R % 暗褐色混土
2. 10 Y R % におい黄褐色混土
3. 10 Y R % 明黄褐色混土
4. 10 Y R % 黄褐色土
5. 7.5 Y R % 褐色土
6. 10 Y R % 褐色混土
7. 10 Y R % 黒褐色混土
8. 10 Y R % 暗褐色混土
9. 10 Y R % 黄褐色混土
10. 10 Y R % におい黄褐色混土
11. 10 Y R % 褐色混土
12. 10 Y R % 褐色混土
13. 10 Y R % 褐色混土
14. 10 Y R % におい黄褐色土
15. 7.5 Y R % 黒褐色混土
16. 10 Y R % 褐色混土
17. 10 Y R % におい黄褐色混土
18. 10 Y R % 黄褐色土

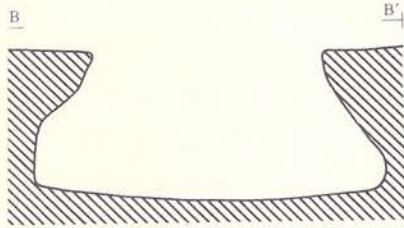
ⅦG27土壌



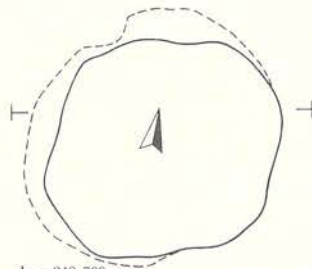
L-250.500



1. 10 Y R % 黒褐色混土
2. 10 Y R % 褐色混土
3. 10 Y R % 黒褐色混土
4. 10 Y R % 暗褐色混土
5. 10 Y R % 褐色混土
6. 10 Y R % 黒褐色混土



ⅦJ24-2土壌

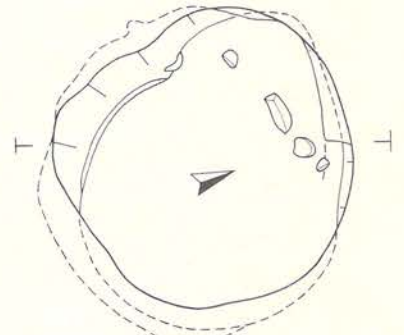


L-248.700

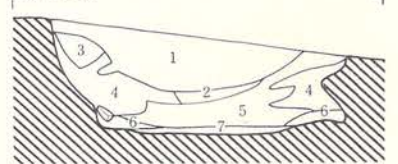


1. 10 Y R % 暗褐色混土
2. 10 Y R % におい黄褐色混土
3. 10 Y R % 褐色混土
4. 10 Y R % におい黄褐色混土
5. 10 Y R % におい黄褐色混土
6. 10 Y R % におい黄褐色混土

ⅦD27土壌

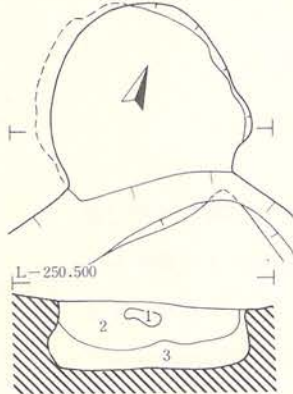


L-243.300



1. 10 Y R % 黒褐色混土
2. 10 Y R % 黒褐色土 砂質が強い
3. 10 Y R % 褐色混土
4. 10 Y R % 黄褐色土 崩落土
5. 10 Y R % 黒色土
6. 10 Y R % におい黄褐色土 粘りがある
7. 10 Y R % 暗褐色混土 粘りがある

ⅦH25-3土壌



L-250.500



1. 10 Y R % 黒褐色混土
2. 10 Y R % 褐色混土
3. 10 Y R % 褐色混土

第24図 土壌(フラスコ形5)

呈する。底面は若干の凹凸があるが、ほぼ平坦である。

埋土は、上位が暗褐色混土・にぶい黄褐色混土、下位がにぶい黄褐色混土・にぶい黄橙色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 14. VIII D 27土壙(フラスコ形) (第24図、図版17)

第2次調査区の東端で、沢に面する崖上に位置する。今回の調査では最東端の遺構である。平面形は1.6×1.5mの円形で、深さは55cmである。南半は大きく開いているが、北半では底部の大きいフラスコ状を呈している。

埋土は黒褐色土・黄褐色土・暗褐色土などからなり、混入物等によって7層に細分できる。このうち黄褐色土は楔形堆積を示しており、壁の崩落土であろう。

遺物は発見されていない。

### 3. 陥し穴状遺構

#### 1. IH 9 陥し穴状遺構(円形) (第25図、図版18)

西区最西端の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.20×1.03m、底部が94×83cmであり、平面形は長軸が北東—南西方向の長円形である。深さは最大1.00mである。南壁が緩やかに内彎して立ち上がり、他の壁は外傾気味に立ち上がる。底面は平坦で副穴はない。形状はピーカー状を呈している。

埋土は、上～中位が黒色混土、下位がにぶい黄橙色混土からなり、自然堆積状況を示している。底部付近では地下水の浸出がみられた。

遺物は出土していない。

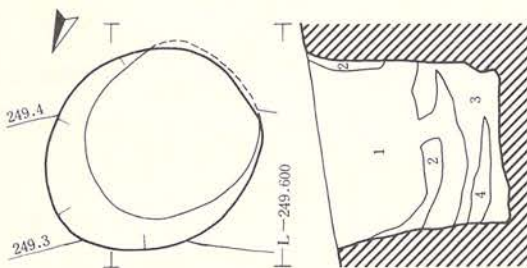
#### 2. IID 4 陥し穴状遺構(円形) (第25図、図版18)

西区の斜面下位に位置する。規模は開口部が92cm、底部が62×50cmであり、平面形は開口部が円形、底部が長方形をなす。深さは最大1.30mである。北西塗は底面から80cmまで緩やかに外反して立ち上がり、上半はさらに外反する。他の壁は、底面から直線的に立ち上がり、上半が外反する。底面は緩やかな弧状を呈し、全体として斜面下位に傾いている。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上位が黒色～黒褐色混土、中位が黒褐色混土、下位がにぶい褐色混土で自然堆積状況を示している。

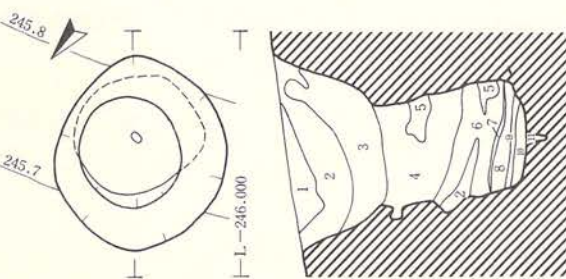


I H 9 陥し穴状遺構



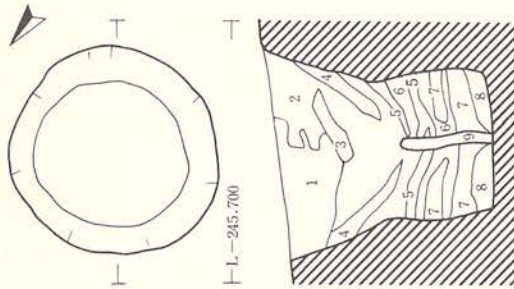
1. 10YR 5% 黒色混土
2. 10YR 5% 黒褐色混土
3. 10YR 5% にぶい黄褐色混土
4. 10YR 5% 黒色混土

II D 4 陥し穴状遺構



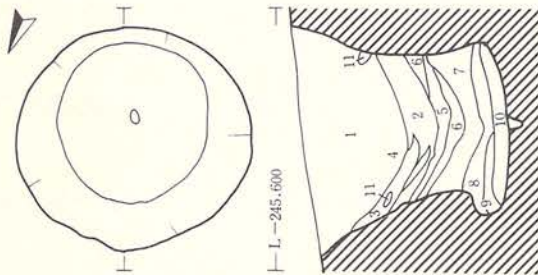
1. 10YR 5% 黒色混土
2. 10YR 5% 黒褐色混土
3. 10YR 5% 暗褐色混土
4. 10YR 5% 黒褐色混土
5. 10YR 5% 褐色混土
6. 10YR 5% にぶい褐色混土
7. 10YR 5% 暗褐色混土
8. 10YR 5% にぶい黄褐色混土
9. 10YR 5% 暗褐色混土
10. 10YR 5% 黒褐色混土
11. 10YR 5% にぶい黄褐色混土

II E 4 陥し穴状遺構



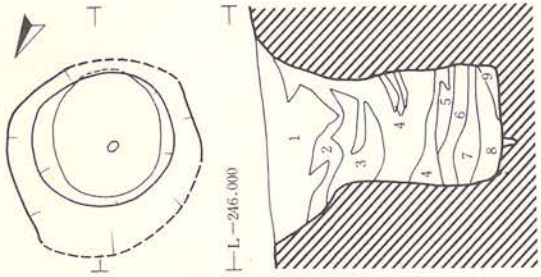
1. 10YR 5% 黒色混土
2. 10YR 5% 黒褐色混土
3. 10YR 5% 暗褐色混土
4. 10YR 5% 褐色混土
5. 10YR 5% 暗褐色混土
6. 10YR 5% 暗褐色混土
7. 10YR 5% 褐色混土
8. 10YR 5% 黒褐色混土
9. 10YR 5% 黒褐色混土

II F 4-1 陥し穴状遺構



1. 10 YR 5% 黒色混土
2. 7.5YR 5% 褐色混土
3. 10 YR 5% 褐色混土
4. 7.5YR 5% 黒褐色混土
5. 7.5YR 5% 暗褐色混土
6. 10 YR 5% 褐色混土
7. 10 YR 5% 褐色混土
8. 10 YR 5% 黒褐色混土
9. 10 YR 5% 黄褐色混土
10. 10 YR 5% 黒褐色混土
11. 10 YR 5% 褐色混土

II F 4-2 陥し穴状遺構



1. 10 YR 5% 黒色混土
2. 10 YR 5% 黒褐色混土
3. 10 YR 5% 黒色混土
4. 10 YR 5% 暗褐色混土
5. 7.5YR 5% 暗褐色混土
6. 7.5YR 5% 黒褐色混土
7. 10 YR 5% 暗褐色混土
8. 7.5YR 5% 黒褐色混土
9. 10 YR 5% 暗黄褐色混土

第25図 陥し穴状遺構(円形1)

底面の中央に副穴が1基ある。平面形は7×4cmの長円形である。深さは10cmで、断面形はV字状を呈する。埋土はにぶい黄褐色混土である。

遺物は出土していない。

### 3. I E 4 陥し穴状遺構(円形) (第25図、図版18)

西区の斜面下位に位置する。規模は開口部が1.11×1.09m、底部が82×77cmであり、平面形は円形をなす。深さは最大1.16mである。壁は底面から60cm前後まで胴張り様となって立ち上がり、上半が外反する。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈している。

埋土は、上位が黒色～黒褐色混土、中位が黒褐色混土、下位が暗褐色混土と褐色混土の互層である。自然堆積状況を示している。

埋土断面には褐色混土の抗痕が観察され、他の埋土と色調、土性が異なる。最大径5cm、最大高49cmで、若干屈曲し、上部先端が丸くなっている。この杭の杭穴は確認できなかった。底部付近には地下水の浸出がみられた。

遺物は出土していない。

### 4. I F 4-1 陥し穴状遺構(円形) (第25図、図版19)

西区の斜面下位に位置する。規模は開口部が1.23×1.20m、底部が85×80cmであり、平面形は円形である。深さは最大1.09mである。北西壁は底面から緩やかに外反して立ち上がり、南東壁は底面から69cmまで内彎気味に立ち上がり、上半が外反している。底面はゆるい弧状を呈する。形状はピーカー状を呈している。北西壁際の底面の一部に凹部分がある。

埋土は、上位が黒色混土、中～下位が黒褐色混土と褐色混土の互層であり、北西壁底面際には黄褐色混土が見られる。自然堆積状況を示している。

底面の中央に副穴が1基ある。平面形は7×5cmの長円形である。深さは7cmで、断面形はV字状を呈している。埋土は褐色混土である。

遺物は出土していない。

### 5. I F 4-2 陥し穴状遺構(円形) (第25図、図版19)

西区の斜面下位に位置する。規模は開口部が1.05×1.00m、底部が66×57cmであり、平面形は、開口部が不整形、底部が円形をなす。深さは最大1.26mである。壁は、底面から88cmまで胴張り様となって立ち上がり、上半が外反する。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈している。

埋土は上～中位が黒色～黒褐色混土であり、下位は暗褐色混土と黒褐色混土の互層からなり、

自然堆積状況を示している。底部付近には地下水の浸出がみられた。

底面の中央に副穴が1基ある。平面形は6×5cmの長円形である。深さは7cmで、断面形はV字状を呈している。埋土は暗褐色混土である。

遺物は出土していない。

#### 6. II G 4 陥し穴状遺構(円形) (第26図、図版19)

西区の斜面下位に位置する。規模は開口部が1.13m×89cm、底部が76cmであり、平面形は、開口部が長円形、底部が円形である。深さは最大1.09mである。北壁は若干外反気味に立ち上がる。南壁は底面から80cmまで胴張り様となって立ち上がって上半が外反する。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上位が黒色～黒褐色混土、中位が暗褐色混土、下位が黒褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。底部付近には地下水の浸出がみられる。

底面の中央南寄りに副穴が1基ある。平面形は6×5cmの長円形である。深さは12cmで、断面形はV字状を呈している。

遺物は出土していない。

#### 7. II H 4 陥し穴状遺構(円形) (第26図、図版20)

西区の斜面下位に位置する。規模は開口部が1.25×1.20m、底部が90×80cmであり、平面形は円形である。深さは最大1.17mである。南壁は底面から55cmまで胴張り様となって立ち上がり、上半が外反する。北壁は底面から91cmまで若干外反気味に立ち上がり、上半がさらに外反する。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上位が黒色～暗褐色混土、中～下位が明黄褐色混土、にぶい黄橙色混土、褐色混土の互層をなし、自然堆積状況を示している。底部付近には地下水の浸出がみられた。

遺物は出土していない。

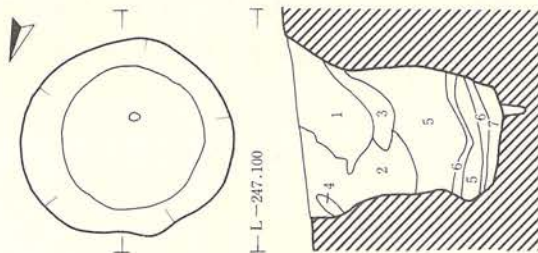
#### 8. II I 3 陥し穴状遺構(円形) (第26図、図版20)

西区の斜面下位に位置する。規模は開口部が1.17×1.00m、底部が73cmであり、平面形は、開口部が長円形、底部が円形である。深さは最大1.10mである。壁は底面から若干外反気味に立ち上がるが、南東壁は直線的に立ち上がる。底面は平坦で斜面下位に若干傾いている。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上～中位が黒色混土、下位が褐色混土、にぶい黄橙色混土、暗褐色混土が互層をなす。自然堆積状況を示している。

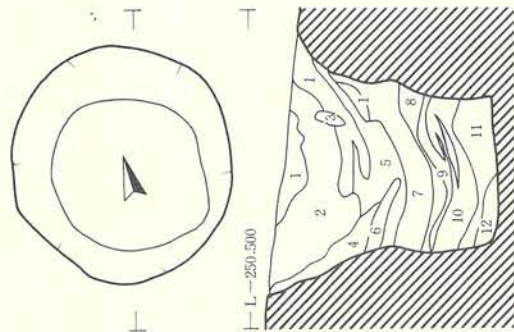


II G 4 陥し穴状遺構



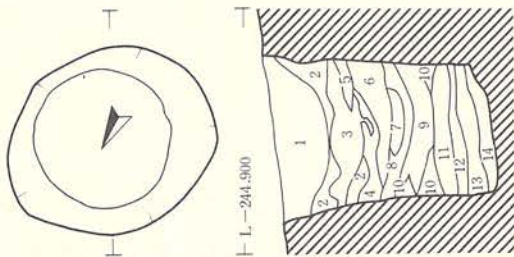
1. 10YR 7/2 黒褐色混土
2. 10YR 7/2 黒色混土
3. 10YR 7/2 黒褐色混土
4. 10YR 7/2 暗褐色混土
5. 10YR 7/2 褐色混土
6. 10YR 7/2 暗褐色混土
7. 10YR 7/2 黒褐色混土

II H 4 陥し穴状遺構



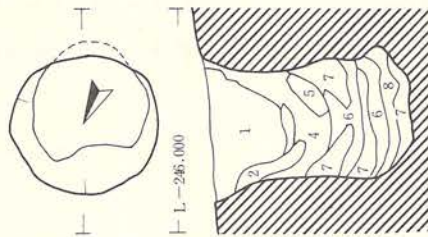
1. 10YR 7/2 黒色混土
2. 10YR 7/2 黒色混土
3. 10YR 7/2 黒色混土
4. 10YR 7/2 暗褐色混土
5. 10YR 7/2 褐色混土
6. 10YR 7/2 褐色混土
7. 10YR 7/2 褐色混土
8. 10YR 7/2 明黄褐色混土
9. 10YR 7/2 黒褐色混土
10. 10YR 7/2 明黄褐色混土
11. 10YR 7/2 暗褐色混土
12. 10YR 7/2 褐色混土

II I 3 陥し穴状遺構



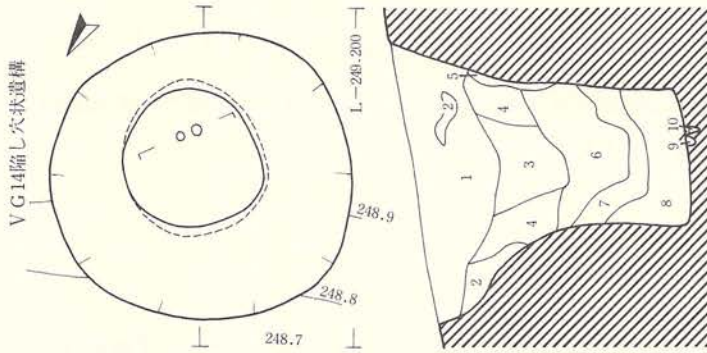
1. 10YR 7/2 黒色混土
2. 10YR 7/2 黒褐色混土
3. 10YR 7/2 黒色混土
4. 10YR 7/2 黒色混土
5. 10YR 7/2 褐色混土
6. 10YR 7/2 褐色混土
7. 10YR 7/2 明黄褐色混土
8. 10YR 7/2 褐色混土
9. 10YR 7/2 褐色混土
10. 10YR 7/2 明黄褐色混土
11. 10YR 7/2 暗褐色混土
12. 10YR 7/2 褐色混土
13. 10YR 7/2 暗褐色混土
14. 10YR 7/2 明黄褐色混土

II I 5 陥し穴状遺構



1. 10YR 7/2 黒褐色混土
2. 10YR 7/2 黒褐色混土
3. 10YR 7/2 褐色混土
4. 10YR 7/2 明黄褐色混土
5. 10YR 7/2 褐色混土
6. 10YR 7/2 褐色混土
7. 10YR 7/2 褐色混土
8. 10YR 7/2 明黄褐色混土

V G 14 陥し穴状遺構



1. 10 YR 7/2 黒色混土
2. 7.5YR 7/2 褐色混土
3. 7.5YR 7/2 暗褐色混土
4. 7.5YR 7/2 暗褐色混土
5. 7.5YR 7/2 明褐色混土
6. 7.5YR 7/2 褐色混土
7. 7.5YR 7/2 褐色混土
8. 10 YR 7/2 褐色混土
9. 10 YR 7/2 褐色混土
10. 10 YR 7/2 明黄褐色混土

第26図 陥し穴状遺構(円形2)

遺物は出土していない。

#### 9. II 15 陥し穴状遺構(円形) (第26図、図版20)

西区の斜面下位に位置する。規模は開口部が81×77cm、底部が60×56cmであり、平面形は、開口部が円形、底部が不整形である。深さは最大1.06mである。壁は、内彎気味に立ち上がり、上半が外反する。底面は中央が平坦で壁際に向かって緩く立ち上がる。形状はピーカー状を呈している。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が褐色混土、にぶい黄褐色混土からなり、下位は黒褐色混土、にぶい黄褐色混土、褐色混土からなる。自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 10. VG 14 陥し穴状遺構(円形) (第26図、図版21)

東区西部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.57×1.51m、底部が81×78cmであり、平面形は円形をなす。深さは最大1.47mである。北西壁は底面から70cmまで、南東壁は底面から86cmまで真っ直ぐに立ち上がり、その後強く外反する。底面は平坦で斜面下位に若干傾いている。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上位が黒色混土、中位が暗褐色混土、下位が褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

底面の中央南東寄りに副穴が2基ある。P 1は、直径4cmの円形で、深さは4cmである。断面形はU字状を呈する。埋土は褐色混土である。P 2は、直径5cmの円形で、深さは8cmである。断面形はV字状を呈する。埋土はにぶい黄褐色混土である。

遺物は出土していない。

#### 11. V 14 陥し穴状遺構(円形) (第27図、図版21)

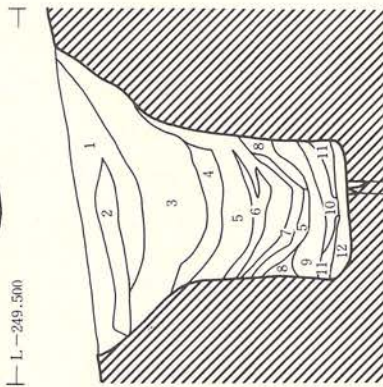
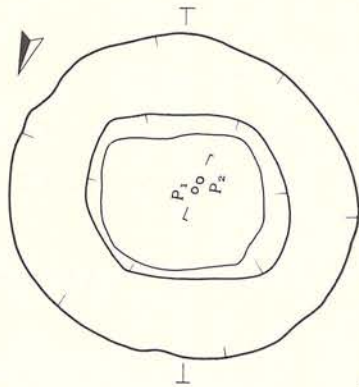
東区西部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.86×1.73m、底部が82×72cmであり、平面形は、開口部が円形、底部が隅丸方形である。深さは最大1.46mである。北西壁は底面から97cmまで、南東壁は底面から1.08mまでほぼ真っ直ぐに立ち上がり、その後強く外反する。底面は中央が平坦で、壁際に緩く立ち上がる。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が褐色混土、下位が暗褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

底面の中央南寄りに副穴が2基ある。P 1は直径3cmの円形で、深さは4cmである。断面形はV字状を呈する。埋土は暗褐色混土である。P 2は直径3cmの円形で、深さは10cmである。

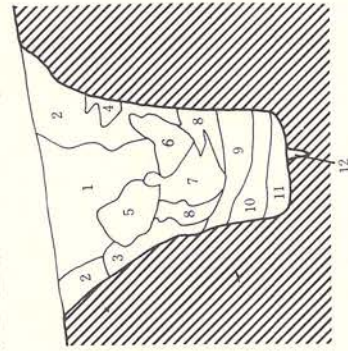
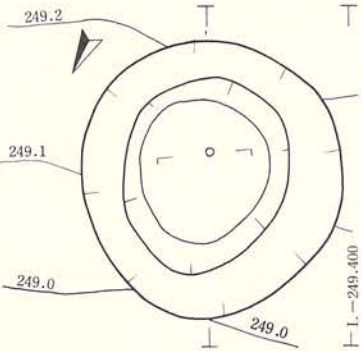


V I 14縮し穴状遺構



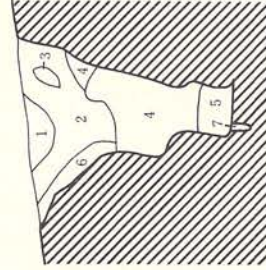
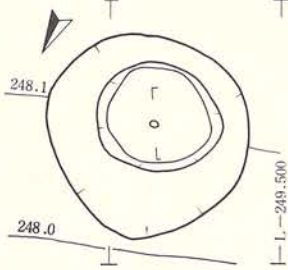
1. 7.5YR 7/2 黒褐色泥土
2. 7.5YR 7/4 褐色泥土
3. 7.5YR 7/4 暗褐色泥土
4. 7.5YR 7/4 極暗褐色泥土
5. 7.5YR 7/4 褐色泥土
6. 7.5YR 7/4 極暗褐色泥土
7. 7.5YR 7/4 暗褐色泥土
8. 7.5YR 7/4 極暗褐色泥土
9. 7.5YR 7/4 暗褐色泥土
10. 7.5YR 7/4 黒褐色泥土
11. 7.5YR 7/4 褐色泥土
12. 10 YR 7/4 暗褐色泥土
13. 10 YR 7/4 暗褐色泥土
14. 10 YR 7/4 褐色泥土

V J 14縮し穴状遺構



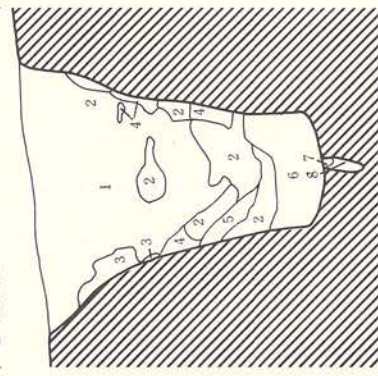
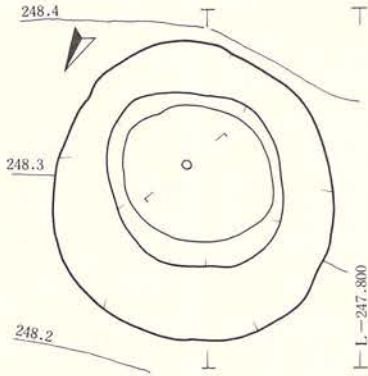
1. 7.5YR 7/2 黒褐色泥土
2. 7.5YR 7/4 極暗褐色泥土
3. 7.5YR 7/4 暗褐色泥土
4. 7.5YR 7/4 褐色泥土
5. 7.5YR 7/4 黒褐色泥土
6. 7.5YR 7/4 暗褐色泥土
7. 7.5YR 7/4 褐色泥土
8. 7.5YR 7/4 暗褐色泥土
9. 7.5YR 7/4 褐色泥土
10. 7.5YR 7/4 暗褐色泥土
11. 7.5YR 7/4 明褐色泥土
12. 7.5YR 7/4 にぶい黄褐色泥土

VI B 15縮し穴状遺構



1. 7.5YR 7/2 黒褐色泥土
2. 7.5YR 7/4 極暗褐色泥土
3. 7.5YR 7/4 褐色泥土
4. 7.5YR 7/4 暗褐色泥土
5. 7.5YR 7/4 褐色泥土
6. 7.5YR 7/4 明褐色泥土
7. 10 YR 7/4 にぶい黄褐色泥土

VI C 14縮し穴状遺構



1. 7.5YR 7/2 黒褐色泥土
2. 7.5YR 7/4 褐色泥土
3. 7.5YR 7/4 暗褐色泥土
4. 7.5YR 7/4 褐色泥土
5. 7.5YR 7/4 暗褐色泥土
6. 7.5YR 7/4 明褐色泥土
7. 10 YR 7/4 暗褐色泥土
8. 10 YR 7/4 にぶい黄褐色泥土

第27図 縮し穴状遺構(円形3)



断面形はV字状を呈する。埋土は暗褐色混土である。両副穴の埋土の色調、土性は酷似している。

遺物は出土していない。

## 12. VJ14陥し穴状遺構(円形) (第27図、図版21)

東区西部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.47×1.4m、底部が79×75cmであり、平面形は長軸が南北方向の長円形である。深さは最大1.32mである。北西壁は底面から63cmまで、南東壁は底面から1.00mまで直線的に立ち上がり、その後強く外反する。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色～極暗褐色混土、中位が暗褐色混土、褐色混土からなり、下位が暗褐色混土、明褐色混土からなる。自然堆積状況を示している。

底面の中央南寄りに副穴が1基ある。直径5cmの円形で、深さは13cmである。断面形はV字状を呈する。埋土はにぶい黄褐色混土である。

遺物は出土していない。

## 13. MB15陥し穴状遺構(円形) (第27図、図版22)

東区西部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.08×1.07m、底部が56×49cmであり、平面形は開口部が不整円、底部が円形である。深さは最大1.12mである。壁は底面から直線的に立ち上がり、上半が外反している。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈している。

埋土は、上位が黒褐色～極暗褐色混土、中位が褐色混土、下位が黒褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

底面の中央に副穴が1基ある。直径4cmの円形で、深さは10cmである。断面形はU字状を呈している。埋土はにぶい黄褐色混土である。

遺物は出土していない。

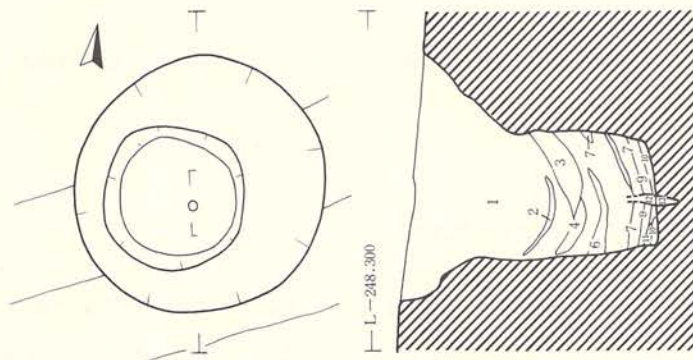
## 14. MC14陥し穴状遺構(円形) (第27図、図版22)

東区西部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.52×1.50m、底部が84×73cmであり、平面形は円形をなす。深さは最大1.56mである。壁は底面から90cmまで緩やかに外反して立ち上がり、上半がさらに外半する。底面は弧状を呈する。断面形はピーカー状を呈している。

埋土は、上～中位が黒褐色～褐色混土、下位が明褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

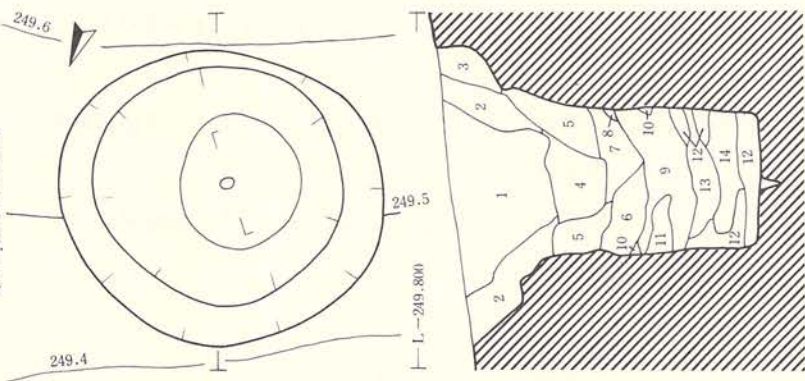
底面の中央東寄りに副穴が1基ある。直径5cmの円形で、深さは21cmである。断面形はU字

VIH14縮し穴状遺構



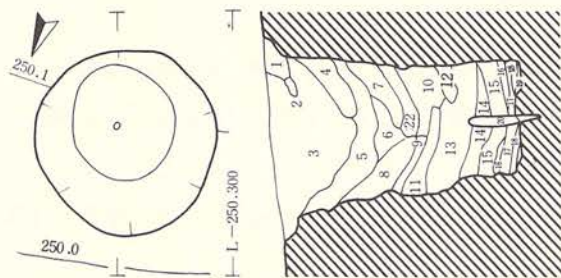
1. 10 YR 5/2 黒褐色泥土
2. 10 YR 5/2 黒褐色泥土
3. 7.5YR 5/2 暗褐色泥土
4. 7.5YR 5/2 褐色泥土
5. 7.5YR 5/2 緑暗褐色泥土
6. 10 YR 5/2 褐色泥土
7. 10 YR 5/2 褐色泥土
8. 7.5YR 5/2 黒褐色泥土
9. 7.5YR 5/2 黒褐色泥土
10. 10 YR 5/2 黒褐色泥土
11. 10 YR 5/2 暗褐色泥土
12. 10 YR 5/2 暗褐色泥土
13. 10 YR 5/2 褐色泥土

VI G17縮し穴状遺構



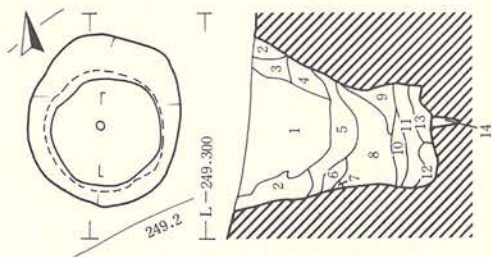
1. 7.5YR 5/2 黒褐色泥土
2. 7.5YR 5/2 黒褐色泥土
3. 7.5YR 5/2 暗褐色泥土
4. 7.5YR 5/2 黒褐色泥土
5. 7.5YR 5/2 暗褐色泥土
6. 7.5YR 5/2 黒褐色泥土
7. 7.5YR 5/2 褐色泥土
8. 10 YR 5/2 褐色泥土
9. 10 YR 5/2 黒褐色泥土
10. 10 YR 5/2 明黄褐色泥土
11. 10 YR 5/2 黄褐色泥土
12. 10 YR 5/2 黄褐色泥土
13. 10 YR 5/2 黄褐色泥土
14. 10 YR 5/2 黒褐色泥土
15. 7.5YR 5/2 に近い褐色泥土

VI F18縮し穴状遺構



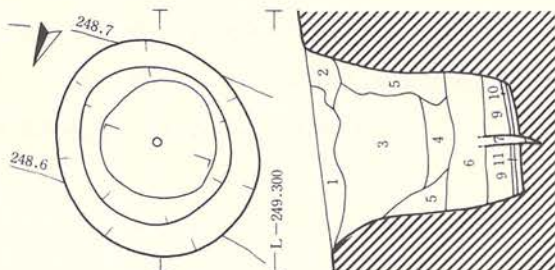
1. 10YR 5/2 褐色泥土
2. 10YR 5/2 黄褐色泥土
3. 10YR 5/2 黒褐色泥土
4. 10YR 5/2 黄褐色泥土
5. 10YR 5/2 暗褐色泥土
6. 10YR 5/2 明黄褐色泥土
7. 10YR 5/2 褐色泥土
8. 10YR 5/2 褐色泥土
9. 10YR 5/2 に近い黄褐色泥土
10. 10YR 5/2 に近い黄褐色泥土
11. 10YR 5/2 に近い黄褐色泥土
12. 10YR 5/2 に近い黄褐色泥土
13. 10YR 5/2 褐色泥土
14. 10YR 5/2 暗褐色泥土
15. 10YR 5/2 暗褐色泥土
16. 10YR 5/2 に近い黄褐色泥土
17. 10YR 5/2 黒褐色泥土
18. 10YR 5/2 暗褐色泥土
19. 10YR 5/2 に近い黄褐色泥土
20. 10YR 5/2 暗褐色泥土
21. 10YR 5/2 褐色泥土
22. 10YR 5/2 暗褐色泥土

VI E16縮し穴状遺構



1. 10 YR 5/2 黒褐色泥土
2. 10 YR 5/2 暗褐色泥土
3. 10 YR 5/2 黒褐色泥土
4. 10 YR 5/2 黒褐色泥土
5. 10 YR 5/2 暗褐色泥土
6. 10 YR 5/2 暗褐色泥土
7. 7.5YR 5/2 暗褐色泥土
8. 10 YR 5/2 黒褐色泥土
9. 10 YR 5/2 暗褐色泥土
10. 7.5YR 5/2 暗褐色泥土
11. 7.5YR 5/2 暗褐色泥土
12. 10 YR 5/2 黒褐色泥土
13. 10 YR 5/2 黒褐色泥土
14. 10 YR 5/2 褐色泥土

VI C15縮し穴状遺構



1. 7.5YR 5/2 暗褐色泥土
2. 7.5YR 5/2 暗褐色泥土
3. 7.5YR 5/2 黒褐色泥土
4. 7.5YR 5/2 暗褐色泥土
5. 10 YR 5/2 暗褐色泥土
6. 10 YR 5/2 褐色泥土
7. 10 YR 5/2 暗褐色泥土
8. 10 YR 5/2 に近い黄褐色泥土
9. 10 YR 5/2 褐色泥土
10. 10 YR 5/2 黒褐色泥土
11. 7.5YR 5/2 褐色泥土

第28図 縮し穴状遺構(円形4)



状を呈する。埋土は、上位が黒褐色混土、下位がにぶい黄褐色混土である。

遺物は出土していない。

#### 15. VI C 15 陥し穴状遺構(円形) (第28図、図版23)

東区西部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.12×1.09m、底部が62cmであり、平面形は円形である。深さは最大1.06mである。壁は底面から75cm前後まで胴張り様となって立ち上がり、上半が外反する。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈している。

埋土は、上～中位上半が黒色混土、暗褐色混土、中位下半が層厚20cmのしまって硬い褐色混土(6層)からなり、下位上半が層厚13cmの褐色混土(9層)、下位下半が層厚2cmの黒褐色混土、層厚2cmの褐色混土からなる。堆積状況は、上～中位上半が自然堆積状況を示し、6層、9層は人為堆積と考えられる。

埋土断面には杭痕が観察され、その痕跡は、埋土の9層上面で検出した。断ち割りの結果、底面は埋土11層下にあり、杭痕は埋土の9、10、11層、そして底面を貫通し、底面下10cmまで達していた。9層上面での杭痕の直径は5cmであり、円形をなしている。長さは底面から上部が20cm、下部が10cmであり、全長は30cmである。杭穴の断面形は細長く鋭いV字状を呈している。埋土は底面下付近までが暗褐色混土、その下がにぶい黄褐色混土である。

遺物は出土していない。

#### 16. VI E 16 陥し穴状遺構(円形) (第28図、図版22)

東区西部の斜面中位に位置する。規模は開口部が91×80cm、底部が63cmであり、平面形が円形をなす。深さは最大1.02mである。南壁は底面から30cmまで、北壁は底面から32cmまで胴張り様に立ち上がり、上半が外反している。底面は若干凹凸があるがほぼ平坦である。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上・中位が黒褐色混土、下位が黒褐色混土、暗褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

底面の中央に副穴が1基ある。直径5cmの円形で、深さは15cmである。断面形はU字状である。埋土は褐色混土である。

遺物は出土していない。

#### 17. VI F 18 陥し穴状遺構(円形) (第28図、図版23)

東区中央部の斜面中位から上位にかけて位置する。規模は開口部が99×94cm、底部が63×55cmであり、平面形は円形をなす。深さは最大1.35mである。北壁は底面から33cmまで外反気味

に立ち上がり、その後一部胴張り様部分もあるが更に外反して立ち上がる。南壁は底面から60cmまで内彎気味に立ち上がり、その後直線的に外傾している。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色～暗褐色混土、中位が明褐色～褐色混土、下位がにぶい黄橙色混土、黒褐色混土からなる。いずれもレンズ状に堆積し、部分的には崩落土が楔状に堆積している。自然堆積状況を示している。

埋土の断面には杭痕が観察され、埋土精査（断ち割り）中に、埋土断面の底面際に直径4cm程の半円形の褐色混土の拡がり、この痕跡から連続して埋土13層下部まで立ち上がる痕跡を確認した。杭痕は全長38cm、最大径5cmであり、先端は丸味を帯び、底面下の下端がV字状を呈している。下端は底面下10cmまで達する。杭穴の埋土は、上位が褐色混土、下位が暗褐色混土である。

遺物は出土していない。

#### 18. VI G17陥し穴状遺構(円形) (第28図、図版24)

東区中央部の斜面中位から上位にかけて位置する。規模は開口部が1.70×1.56m、底部が71×64cmであり、平面形は円形をなす。深さは最大1.66mである。北西壁は底面から1.14mまで、南東壁は底面から1.35mまで、外反気味に立ち上がり、その後強く外反する。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上位が暗褐色～黒褐色混土、中位が黒色～黒褐色混土、下位が黒褐色混土からなり、自然堆積状況を呈している。

底面のほぼ中央に副穴が1基ある。直径7cmの円形で、深さは10cmである。断面形はV字状を呈する。埋土はにぶい褐色混土である。

遺物は出土していない。

#### 19. VI H14陥し穴状遺構(円形) (第28図、図版24)

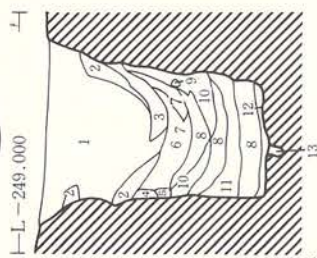
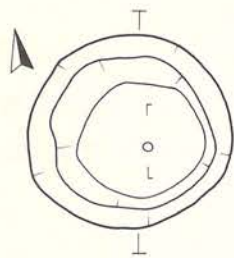
東区中央部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.36×1.29m、底部が66×62cmであり、平面形は円形をなす。深さは最大1.32mである。南壁は底面から96cm、北壁は底面から68cmまで胴張り様に立ち上がり、その後強く外反する。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈している。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が暗褐色～極暗褐色混土、下位が褐色混土、黒褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

埋土の断面には杭痕が観察された。埋土の断ち割り、実測後、残った埋土を上下に細かくス

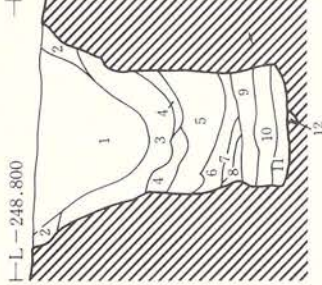
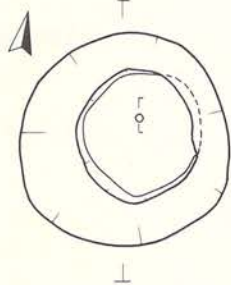


VIH17陥し穴状遺構



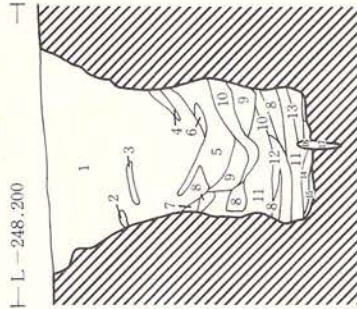
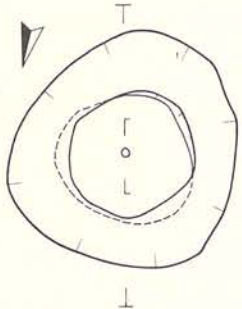
1. 10YR弱 黒色混土
2. 10YR弱 褐色混土
3. 10YR弱 暗褐色混土
4. 10YR弱 褐色混土
5. 10YR弱 褐色混土
6. 10YR弱 暗褐色混土
7. 10YR弱 暗褐色混土
8. 10YR弱 暗褐色混土
9. 10YR弱 暗褐色混土
10. 10YR弱 暗褐色混土
11. 10YR弱 暗褐色混土
12. 10YR弱 暗褐色混土
13. 10YR弱 暗褐色混土

VIH18陥し穴状遺構



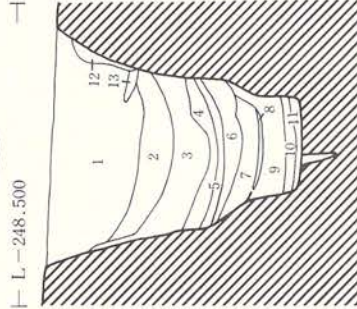
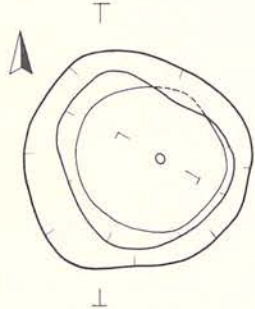
1. 7.5YR弱 黒色混土
2. 10YR弱 暗黒褐色混土
3. 10YR弱 暗褐色混土
4. 7.5YR弱 明褐色混土
5. 7.5YR弱 明褐色混土
6. 10YR弱 明黄褐色混土
7. 7.5YR弱 暗褐色混土
8. 10YR弱 暗褐色混土
9. 10YR弱 暗褐色混土
10. 10YR弱 暗褐色混土
11. 10YR弱 暗褐色混土
12. 10YR弱 暗褐色混土

VII14陥し穴状遺構



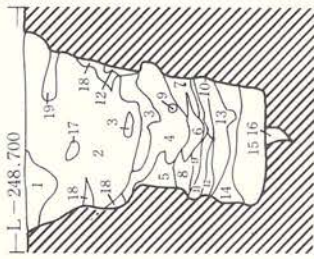
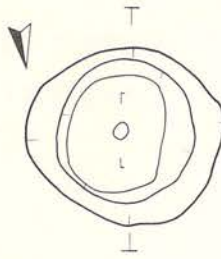
1. 10YR弱 黒色混土
2. 10YR弱 褐色混土
3. 10YR弱 黒褐色混土
4. 10YR弱 黒褐色混土
5. 7.5YR弱 黒褐色混土
6. 10YR弱 黒褐色混土
7. 10YR弱 暗褐色混土
8. 10YR弱 明黄褐色混土
9. 10YR弱 黒褐色混土
10. 7.5YR弱 褐色混土
11. 7.5YR弱 黒色混土
12. 7.5YR弱 黒褐色混土
13. 10YR弱 暗褐色混土
14. 10YR弱 明黄褐色混土
15. 10YR弱 明黄褐色混土
16. 10YR弱 明黄褐色混土
17. 10YR弱 暗褐色混土
18. 10YR弱 暗褐色混土

VII16陥し穴状遺構



1. 10YR弱 黒色混土
2. 7.5YR弱 褐色混土
3. 7.5YR弱 明褐色混土
4. 10YR弱 褐色混土
5. 10YR弱 褐色混土
6. 10YR弱 暗褐色混土
7. 10YR弱 褐色混土
8. 10YR弱 暗褐色混土
9. 10YR弱 暗褐色混土
10. 10YR弱 暗褐色混土
11. 2.5YR弱 褐色混土
12. 7.5YR弱 褐色混土
13. 7.5YR弱 暗褐色混土

VIJ17陥し穴状遺構



1. 10YR弱 黒褐色混土
2. 10YR弱 黒色混土
3. 10YR弱 暗褐色混土
4. 10YR弱 黒褐色混土
5. 10YR弱 黄褐色混土
6. 7.5YR弱 暗褐色混土
7. 10YR弱 褐色混土
8. 10YR弱 褐色混土
9. 7.5YR弱 暗褐色混土
10. 5YR弱 暗赤褐色混土
11. 7.5YR弱 黄褐色混土
12. 10YR弱 黒褐色混土
13. 10YR弱 暗褐色混土
14. 10YR弱 暗褐色混土
15. 10YR弱 暗褐色混土
16. 10YR弱 暗褐色混土
17. 10YR弱 暗褐色混土
18. 10YR弱 褐色混土
19. 7.5YR弱 褐色混土

第29図 陥し穴状遺構(円形5)

ライスし、検出した。先端は明確でないが、全長37m、最大径5cmであり、中端で膨らみ、下端がV字状を呈する。底面下12cmに達している。埋土は、上位が暗褐色混土、下位が褐色混土である。

遺物は出土していない。

#### 20. VI H17陥し穴状遺構(円形) (第29図、図版24)

東区中央部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.09×1.04m、底部が67×61cmであり、平面形は円形をなす。深さは最大1.18mである。南壁が底面から1.01mまで真っ直ぐ立ち上がり、上半が外半する。北壁は底面から88cmまでやや外反気味に立ち上がり、上半が外反している。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上位が黒色混土、中～下位が黒褐色混土と褐色混土が互層をなし、最下位が黒褐色混土からなる。自然堆積状況を示している。

底面の中央に副穴が1基ある。直径4cmの円形で、深さは9cmである。断面形はU字状を呈する。埋土は褐色混土である。

遺物は出土していない。

#### 21. VI H18陥し穴状遺構(円形) (第29図、図版24)

東区東部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.16×1.13m、底部が63×60cmであり、平面形は不整形円形をなす。深さは最大1.32mである。南壁が底面から真っ直ぐ立ち上がった後胴張り様に立ち上がり、そして外反する。北壁は底面から97cmまで内彎気味に立ち上がり、その後外反する。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈している。

埋土は、上～中位が黒色混土、中位が暗褐色混土、明褐色混土からなり、下位が明黄褐色～黄褐色混土、黒褐色混土の互層からなる。自然堆積状況を示している。

底面の中央北寄りに副穴が1基ある。直径4cmの円形で、深さは4cmである。断面形はV字状を呈する。埋土は暗褐色混土である。

遺物は出土していない。

#### 22. VI I 14陥し穴状遺構(円形) (第29図、図版25)

東区中央部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.24×1.17m、底部が73×67cmであり、平面形は、開口部が不整形円形、底部が円形をなす。深さは最大1.42mである。北壁が底面から71cmまで真っ直ぐ立ち上がり、上半が強く外反する。南壁は底面から1.03mまで胴張り様に立ち上がり、上半が外反する。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈している。



埋土は、上～中位上半が黒色混土、中位下半が黒褐色混土からなり、下位が褐色混土、明黄褐色混土、黒褐色混土の互層からなる。自然堆積状況を示している。

埋土の断面には杭痕が観察された。埋土精査（断ち割り）中に、埋土断面際の底面に直径4cm程の半円形の褐色混土の拡がりとし、この痕跡から連続して埋土11層下部まで立ち上がる部分で確認した。杭痕は全長24cm、最大径4cmであり、先端が丸く、下端がV字状を呈する。下端は底面下17cmまで達している。埋土は褐色混土である。

遺物は出土していない。

### 23. VI I 16陥し穴状遺構(円形) (第29図、図版25)

東区中央部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.2×1.1m、底部が83×76cmであり、平面形は、開口部が不整円、底部が円形をなす。深さは最大1.32mである。壁は、底面から90cm前後まで緩やかに外反して立ち上がり、上半がさらに外反する。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈す。

埋土は、上位が黒色混土、中～下位が褐色混土、明褐色混土、褐色混土、暗褐色混土の互層からなり、自然堆積状況を示している。

底面の中央に副穴が1基ある。直径5cmの円形で、深さは18cmである。断面形はV字状を呈する。埋土は浅黄色混土である。

遺物は出土していない。

### 24. VI J 17陥し穴状遺構(円形) (第29図、図版25)

東区中央部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.04m×95cm、底部が61×51cmであり、平面形は開口部が不整円形、底部が長円形をなす。深さは最大1.26mである。北壁が底面から67cmまで内彎して立ち上がり、上半が外反している。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈している。

埋土は、上～中位が黒色～黒褐色混土、中～下位が褐色混土、暗褐色混土、黒色混土の互層からなり、自然堆積状況を示している。

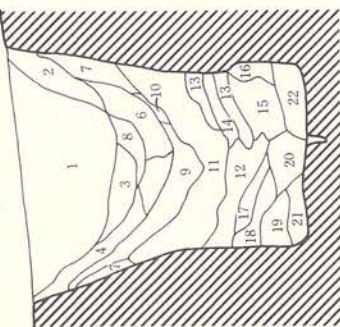
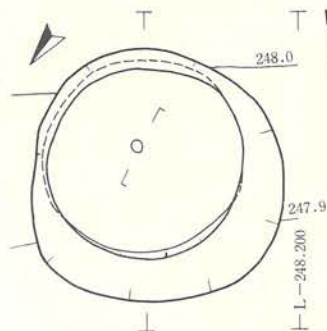
底面の中央に副穴が1基存在する。開口部が9×7cmの長円形で、深さは15cmである。断面形はU字形に近く、埋土は黒色混土の単層である。

遺物は出土していない。

### 25. VII B 13陥し穴状遺構(円形) (第30図、図版26)

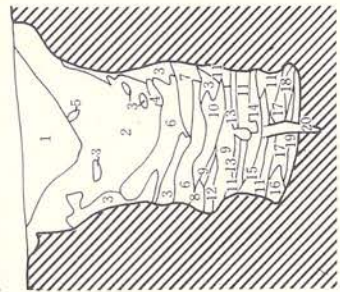
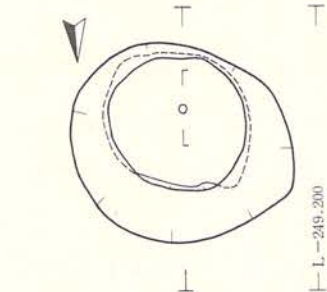
東区中央部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.42×1.32m、底部が1.05×1.02mあり、

ⅢB13陥し穴状遺構



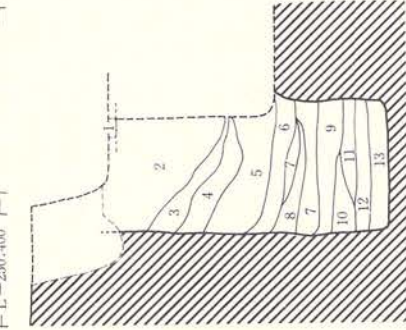
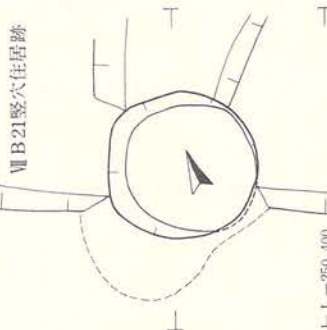
1. 10 YR 7% 黒褐色混土
2. 10 YR 7% 暗褐色混土
3. 10 YR 7% 黒褐色混土
4. 10 YR 7% 黒褐色混土
5. 10 YR 7% 黒褐色混土
6. 10 YR 7% 暗褐色混土
7. 10 YR 7% 暗褐色混土
8. 10 YR 7% 暗褐色混土
9. 7.5YR 7% 暗褐色混土
10. 10 YR 7% 暗褐色混土
11. 7.5YR 7% 褐色混土
12. 10 YR 7% 明黄褐色土
13. 10 YR 7% 暗褐色混土
14. 10 YR 7% 黒褐色混土
15. 10 YR 7% 暗褐色混土
16. 10 YR 7% 暗褐色混土
17. 7.5YR 7% 褐色混土
18. 10 YR 7% 暗褐色混土
19. 7.5YR 7% 褐色混土
20. 7.5YR 7% 褐色混土
21. 10 YR 7% 暗褐色混土
22. 10 YR 7% 暗褐色混土
23. 10 YR 7% 明黄褐色混土

ⅢB20陥し穴状遺構



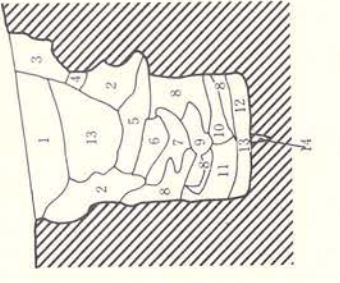
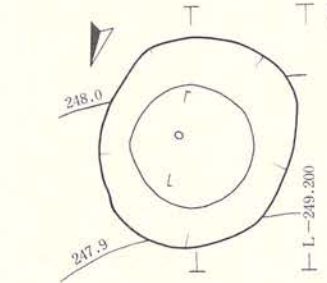
1. 10 YR 7% 黒褐色混土
2. 10 YR 7% 暗褐色混土
3. 10 YR 7% 暗褐色混土
4. 10 YR 7% 暗褐色混土
5. 7.5YR 7% 暗褐色混土
6. 10 YR 7% 暗褐色混土
7. 10 YR 7% 暗褐色混土
8. 10 YR 7% 暗褐色混土
9. 10 YR 7% 暗褐色混土
10. 10 YR 7% 暗褐色混土
11. 10 YR 7% 明黄褐色土
12. 10 YR 7% 暗褐色混土
13. 10 YR 7% 暗褐色混土
14. 10 YR 7% 暗褐色混土
15. 10 YR 7% 暗褐色混土
16. 10 YR 7% 暗褐色混土
17. 10 YR 7% 暗褐色混土
18. 10 YR 7% 暗褐色混土
19. 10 YR 7% 暗褐色混土
20. 10 YR 7% 暗褐色混土

ⅢB21陥し穴状遺構



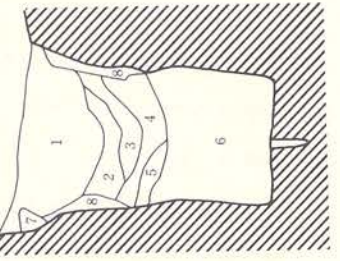
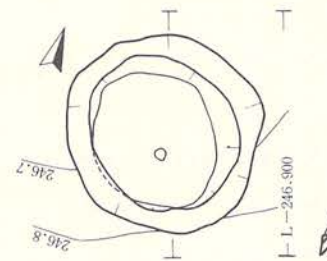
1. 10 YR 7% 暗黄褐色混土
2. 10 YR 7% 黒褐色混土
3. 7.5YR 7% 暗褐色混土
4. 7.5YR 7% 暗褐色混土
5. 7.5YR 7% 暗褐色混土
6. 7.5YR 7% 暗褐色混土
7. 10 YR 7% 暗褐色混土
8. 7.5YR 7% 暗褐色混土
9. 7.5YR 7% 暗褐色混土
10. 10 YR 7% 暗褐色混土
11. 7.5YR 7% 暗褐色混土
12. 10 YR 7% 暗褐色混土
13. 10 YR 7% 黄褐色混土

ⅢC13陥し穴状遺構



1. 10 YR 7% 暗褐色混土
2. 10 YR 7% 暗褐色混土
3. 10 YR 7% 暗褐色混土
4. 10 YR 7% 暗褐色混土
5. 10 YR 7% 暗褐色混土
6. 10 YR 7% 暗褐色混土
7. 10 YR 7% 暗褐色混土
8. 10 YR 7% 暗褐色混土
9. 7.5YR 7% 暗褐色混土
10. 7.5YR 7% 暗褐色混土
11. 10 YR 7% 暗褐色混土
12. 7.5YR 7% 暗褐色混土
13. 10 YR 7% 暗褐色混土
14. 10 YR 7% 暗褐色混土

ⅢD12陥し穴状遺構



1. 10YR 7% 暗褐色混土
2. 10YR 7% 暗褐色混土
3. 10YR 7% 暗褐色混土
4. 10YR 7% 暗褐色混土
5. 10YR 7% 暗褐色混土
6. 10YR 7% 暗褐色混土
7. 10YR 7% 暗褐色混土
8. 10YR 7% 暗褐色混土

第30図 陥し穴状遺構(円形6)



平面形は、開口部が不整形、底部が円形をなす。深さは最大1.55mである。壁は底面から70cmまで真っ直ぐ立ち上がり、上半が緩やかに外反している。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上～中位が黒褐色～暗褐色混土、中～下位が明黄褐色混土、褐色混土、暗褐色混土等の互層からなる。自然堆積状況を示している。

底面の中央に副穴が1基ある。開口部が7×5cmの長円形で、深さは10cmである。断面形はV字状を呈する。埋土は明黄褐色土である。

遺物は出土していない。

#### 26. VII B 20 陥し穴状遺構(円形) (第30図、図版25)

東区東部の斜面中～上位に位置する。規模は開口部が1.17×1.05m、底部が80×71cmであり、平面形は不整形である。深さは最大1.51mである。北壁は底面から1mまで胴張り様部分があるものの外反気味に立ち上がる。南壁は底面から1.00mまで胴張り様に立ち上がり、上半が外反している。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上～中位が黒色混土、下位が黒褐色混土と褐色混土の互層からなり、自然堆積状況を示している。

埋土断面には杭痕が観察された。埋土精査(断ち割り)中に、埋土断面際の底面に直径5cm程の黒褐色混土の拡がり、埋土15層下部で、立ち上がる部分で確認した。

検出した杭痕は、先端が明確でないが、全長28cm、最大径5cmであり、下端がV字状を呈する。底面下11cmまで達する。埋土は黒褐色混土である。

遺物は出土していない。

#### 27. VII B 21 陥し穴状遺構(円形) (第30図、図版26)

東区東部の斜面上位に位置する。VII B 21住居跡及び土壌によって上部が削平されている。規模は検出面で80×78cm、底部が70×68cmであり、検出面及び底部の平面形は円形をなす。深さは最大1.47mである。壁は底面からほぼ真っ直ぐ立ち上がる。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈している。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が赤褐色浮石の多い暗褐色混土からなり、下位がにぶい黄橙～黄褐色混土と黒褐色、暗褐色混土の互層からなる。自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

## 28. VII C 13 陥し穴状遺構(円形) (第30図、図版26)

東区中央部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.14×1.12m、底部が65×62cmであり、平面形は円形をなす。深さは最大1.22mである。北壁が底面から85cmまで外反気味に立ち上がり、その後外反する。南壁は底面から91cmまで内彎気味に立ち上がり、その後外反する。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈している。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が暗褐色混土、黄褐色混土からなり、下位が黒褐色混土、極暗褐色混土からなる。自然堆積状況を示している。

底面の中央南東寄りに副穴が1基ある。直径4cmの円形で、深さは10cmである。断面形はV字状を呈する。埋土はにぶい黄褐色土である。

遺物は出土していない。

## 29. VII D 12 陥し穴状遺構(円形) (第30図、図版27)

東区東部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.06×1.01m、底部が76×66cmであり、平面形は不整円形をなす。深さは最大1.36mである。南壁は底面から1.10mまで緩やかに外反して立ち上がり、その後さらに外反する。北壁は底面から65cmまで胴張り様に立ち上がり、その後外反する。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が黒褐色混土、暗褐色混土、下位が暗褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

底面の中央に副穴が1基ある。直径5cmの円形で、深さは20cmである。断面形はV字状を呈している。

遺物は出土していない。

## 30. VII D 15 陥し穴状遺構(円形) (第31図、図版27)

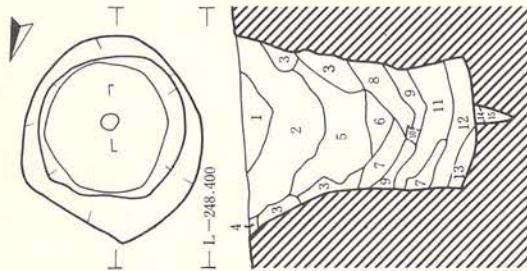
東区東部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.10m×90cm、底部が68×64cmあり、平面形は不整円形をなす。深さは最大1.24mである。北壁は底面から76cmまで外反気味に立ち上がり、その後外反する。南壁は床面から20cmまで内彎気味に立ち上がり、その後緩やかに外反する。底面は中央から壁際にかけて若干弧状を呈する。形状はピーカー状を呈している。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が黒褐色混土と黄褐色混土の互層で、下位が暗褐色混土、黒褐色混土からなる。自然堆積状況を示している。

底面の中央に副穴が1基ある。直径9cmの円形で、深さは20cmである。断面形はV字状を呈する。埋土は、上位が黒褐色混土、下位がにぶい黄褐色混土からなっている。

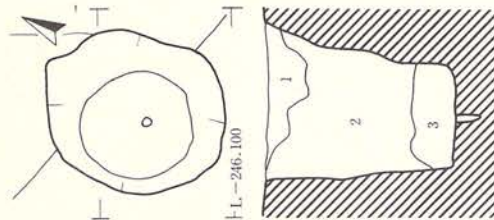


ⅢD15陥し穴状遺構



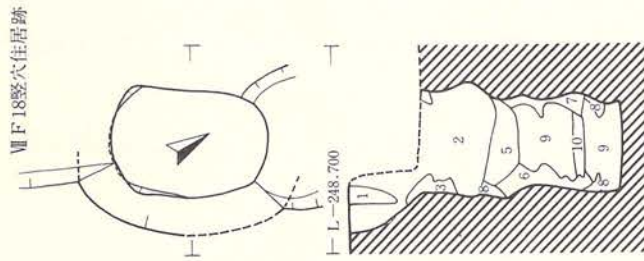
1. 10YR 5% 黒褐色泥土
2. 10YR 4% 黒褐色泥土
3. 10YR 3% 褐色泥土
4. 10YR 3% 黒褐色泥土
5. 10YR 3% 黒褐色泥土
6. 10YR 2% 黒褐色泥土
7. 10YR 2% 黒褐色泥土
8. 10YR 2% 黒褐色泥土
9. 10YR 2% 黒褐色泥土
10. 10YR 2% 黒褐色泥土
11. 10YR 2% 暗褐色泥土
12. 10YR 2% 黒褐色泥土
13. 10YR 2% 黒褐色泥土
14. 10YR 2% 黒褐色泥土
15. 10YR 2% におい、黄褐色泥土

ⅢF10陥し穴状遺構



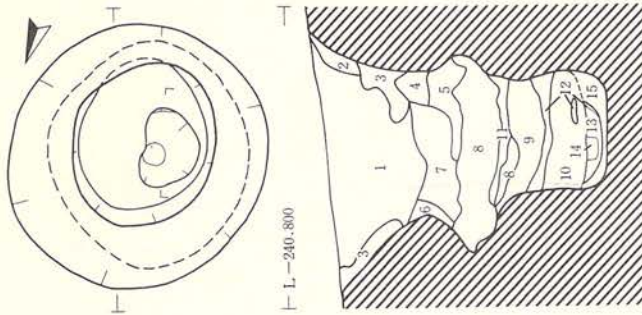
1. 10YR 5% 暗褐色泥土
2. 10YR 5% 褐色泥土
3. 10YR 5% 暗褐色泥土

ⅢG18陥し穴状遺構



1. 10 YR 5% 黒褐色泥土
2. 10 YR 5% 褐色泥土
3. 10 YR 5% 黄褐色土
4. 10 YR 5% 黄褐色土
5. 7.5YR 5% 明褐色土
6. 10 YR 5% 黄褐色土
7. 7.5YR 5% 明黄褐色土
8. 10 YR 5% 黄褐色土
9. 10 YR 5% 黄褐色泥土
10. 10 YR 5% 黄褐色泥土

ⅢI2陥し穴状遺構



1. 7.5YR 5% 黒褐色泥土
2. 7.5YR 5% 褐色泥土
3. 7.5YR 5% 明褐色泥土
4. 10 YR 5% 暗褐色泥土
5. 7.5YR 5% 褐色泥土
6. 10 YR 5% 褐色泥土
7. 7.5YR 5% 暗褐色泥土
8. 10 YR 5% 黒褐色泥土
9. 10 YR 5% 褐色泥土硬い
10. 10 YR 5% 暗褐色泥土
11. 10 YR 5% 黄褐色泥土
12. 10 YR 5% におい、黄褐色質土
13. 7.5YR 5% 黒褐色泥土
14. 7.5YR 5% 黒褐色泥土
15. 7.5YR 5% 黒褐色泥土

第31図 陥し穴状遺構(円形7)

遺物は出土していない。

### 31. VII E 14 陥し穴状遺構(円形) (第31図、図版27)

東区東部の斜面中位に位置する。規模は開口部が1.13×1.07m、底部が73×68cmであり、平面形は不整形円形をなす。深さは最大1.45mである。北壁は底面から93cmまで緩やかに外反して立ち上がり、上半がさらに外反する。南壁は底面から1.08mまで2段の胴張り様に立ち上がり、その後外反する。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が黒褐色、暗褐色混土と褐色、明褐色混土の互層からなり、下位が黒褐色、暗褐色混土からなる。自然堆積状況を示している。

底面の中央に副穴が1基ある。直径5cmの円形で、深さは19cmである。断面形はV字状を呈する。埋土は黄褐色混土である。

遺物は出土していない。

### 32. VII F 10 陥し穴状遺構(円形) (第31図、図版28)

東区東部の斜面中位に位置する。規模は開口部が93×85cm、底部が60×57cmであり、平面形は不整形円形をなす。深さは最大100cmである。壁は底面から緩やかに外反しながら立ち上がる。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈している。

埋土は、上位が暗褐色混土、中位が褐色混土、下位が暗褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

底面の中央に副穴が1基ある。直径4cmの円形で、深さは13cmである。断面形はV字状を呈する。

遺物は出土していない。

### 33. VII G 18 陥し穴状遺構(円形) (第31図、図版28)

東区東部の斜面中位に位置する。段丘崖の西10mにある。東半分はVII F 18 陥し穴住居跡及び土壙5によって切られている。

底部が83×55cmの隅丸長方形をなす。南部分に残る開口部は、底部の形状、上端の崩落部分から楕円形と推定される。深さは最大1.45mである。

壁は、胴張り様部分を除く壁面が、底面から1.05mまでほぼ直線的に立ち上がり、その後外反する。底面は平坦である。形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上位が褐色混土、中～下位が明黄褐色、黄褐色土からなり、自然堆積状況を示している。中、下位の埋土は汚れが少なく、かつ性状が近似することから短時間に堆積したと考え



られる。

遺物は出土していない。

#### 34. VII 1 2 陥し穴状遺構(円形) (第31図、図版28)

東区東部の斜面下位に位置する。段丘崖の西6mにある。規模は開口部が1.44×1.40m、底部が80×68cmであり、平面形はほぼ円形である。深さは最大1.52mである。壁は底面から高さ50cmまではほぼ真っ直ぐ立ち上がり、中端では砂質の地山の崩落によって凹むが、そこから上位は外反して立ち上がる。外反の度合は斜面下位が強く、斜面上位は緩やかである。底面は平坦で、断面形は崩落部分を除きピーカー状である。

埋土は、上位が黒褐色混土、暗褐色混土、中位上半の8層が黒褐色混土の地山崩落土(砂質土)でさらさらしており、中位下半がしまった黒褐色混土(9層)・地山崩落土のにぶい黄褐色砂質土(12層)である。下位上半が暗褐色混土(10層)・下位下半が黒褐色混土(15層)である。

埋土の15層上面に直径42cmの不整な半円で皿状をなす副穴1がある。深さは最大8cmである。底面の上3cmである。埋土は黒褐色混土で自然堆積状況を示している。

更に、この副穴1の中に、直径12cm・深さ6cmの円筒状の副穴2がある。副穴2の底面は副穴1の底面から2cm上にある。埋土は黒色混土である。

以上のことから、副穴1は15層が堆積した段階でつくられたと考えられる。その後副穴1及び15層の上半を切って10層下位を底面とする時期があったと推定される。副穴2は、10層下位の底面を掘り込むか突き刺した痕跡と考えられる。

遺物は出土していない。

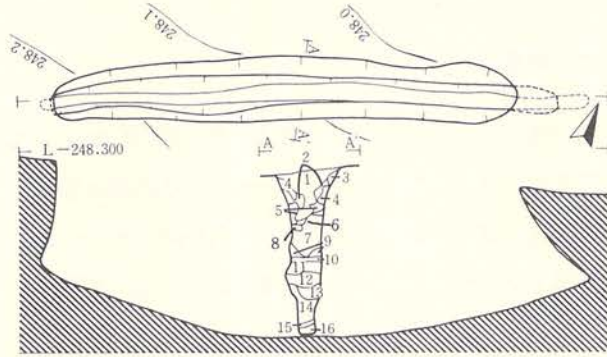
#### 1. II J 10 陥し穴状遺構(溝状) (第32図、図版29)

西区東部の斜面中位に位置する。長軸方向はN-65°-Eで、等高線に並行している。規模は開口部が3.69m×52cm、中端が4.03m×22cm、底部が4.37m×13cmである。平面形は開口部が細長い溝状、底部が幅の狭い帯状をなし、北西方向へ若干弧状に曲る。深さは最大1.28mである。

長軸断面形では、底面中央から壁際までは強い弧状をなす。壁面は西壁が底面から内彎し、その後真っ直ぐ立ち上がる。東壁は底面から内彎しながら立ち上がる。短軸断面形は、一部胴張り様の部分があるものの、平坦な底面から北壁は82cm、南壁は1.08mの中端まで外反気味に立ち上がり、中端から更に外反する幅の狭いU字状を呈する。

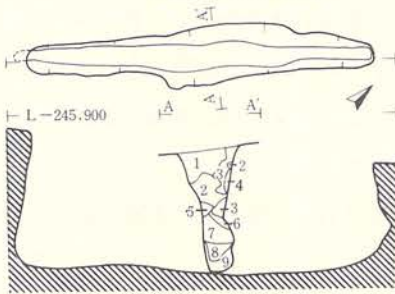
埋土は、上位が黒色混土、中位が褐色混土からなり、下位が暗褐色混土・にぶい黄色混土・

II J 10 陥し穴状遺構



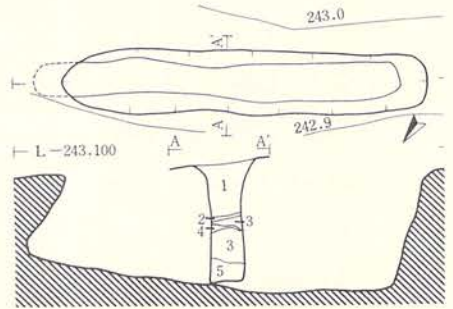
1. 7.5YR<sup>1</sup>/4 黒色混土
2. 10 YR<sup>2</sup>/4 黒褐色混土
3. 7.5YR<sup>3</sup>/4 褐色混土
4. 7.5YR<sup>4</sup>/4 暗褐色混土
5. 7.5YR<sup>5</sup>/4 暗褐色混土
6. 10 YR<sup>6</sup>/4 黒褐色混土
7. 7.5YR<sup>7</sup>/4 褐色混土
8. 2.5YR<sup>8</sup>/4 黄褐色混土
9. 2.5YR<sup>9</sup>/4 におい赤褐色混土
10. 10 YR<sup>10</sup>/4 黒色混土
11. 10 YR<sup>11</sup>/4 暗褐色混土
12. 10 YR<sup>12</sup>/4 黒色混土
13. 10 YR<sup>13</sup>/4 暗褐色混土
14. 2.5YR<sup>14</sup>/4 におい赤褐色混土
15. 10 YR<sup>15</sup>/4 褐色土
16. 10 YR<sup>16</sup>/4 褐色土

III B 7 陥し穴状遺構

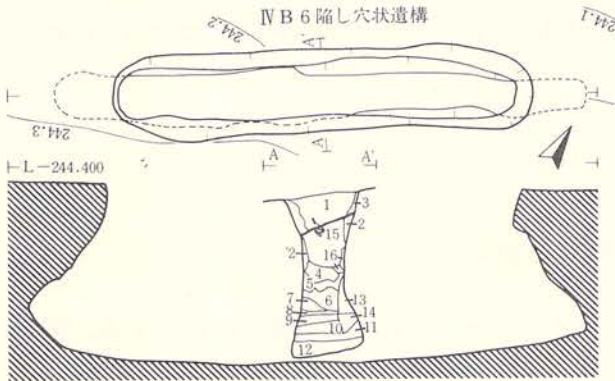


1. 10 YR<sup>1</sup>/4 黒色混土
  2. 10 YR<sup>2</sup>/4 黒褐色混土
  3. 10 YR<sup>3</sup>/4 黒褐色混土
  4. 10 YR<sup>4</sup>/4 褐色混土
  5. 10 YR<sup>5</sup>/4 明黄褐色混土
  6. 7.5YR<sup>6</sup>/4 褐色混土
  7. 10 YR<sup>7</sup>/4 黒褐色混土
  8. 7.5YR<sup>8</sup>/4 褐色混土
  9. 10 YR<sup>9</sup>/4 におい黄橙色土
1. 10YR<sup>1</sup>/4 黒褐色混土
  2. 10YR<sup>2</sup>/4 褐色混土
  3. 10YR<sup>3</sup>/4 黒褐色混土
  4. 10YR<sup>4</sup>/4 におい黄褐色混土
  5. 10YR<sup>5</sup>/4 明黄褐色混土

IV A 3 陥し穴状遺構

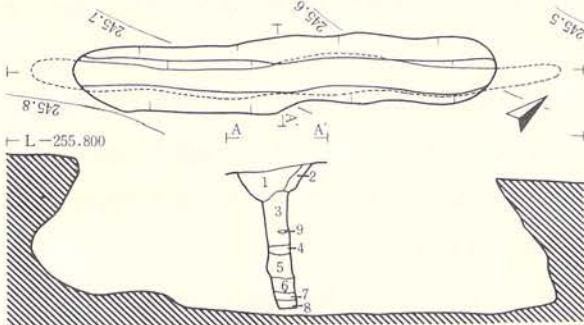


IV B 6 陥し穴状遺構



1. 10YR<sup>1</sup>/4 黒褐色混土
2. 10YR<sup>2</sup>/4 褐色混土
3. 5 YR<sup>3</sup>/4 赤褐色混土
4. 10YR<sup>4</sup>/4 暗褐色混土
5. 10YR<sup>5</sup>/4 褐色混土
6. 10YR<sup>6</sup>/4 黒褐色混土
7. 10YR<sup>7</sup>/4 明黄褐色混土
8. 10YR<sup>8</sup>/4 におい黄褐色混土
9. 10YR<sup>9</sup>/4 明黄褐色混土
10. 10YR<sup>10</sup>/4 におい黄橙色混土
11. 10YR<sup>11</sup>/4 におい黄褐色混土
12. 10YR<sup>12</sup>/4 におい黄橙色混土
13. 10YR<sup>13</sup>/4 明黄褐色混土
14. 10YR<sup>14</sup>/4 黒褐色混土
15. 10YR<sup>15</sup>/4 明黄褐色混土
16. 10YR<sup>16</sup>/4 明黄褐色混土

IV B 9 陥し穴状遺構



1. 10 YR<sup>1</sup>/4 黒褐色混土
2. 10 YR<sup>2</sup>/4 暗褐色混土
3. 10 YR<sup>3</sup>/4 黒褐色混土
4. 10 YR<sup>4</sup>/4 褐色混土
5. 7.5YR<sup>5</sup>/4 褐色混土
6. 10 YR<sup>6</sup>/4 におい黄褐色混土
7. 10 YR<sup>7</sup>/4 褐色混土
8. 10 YR<sup>8</sup>/4 におい黄褐色混土
9. 10 YR<sup>9</sup>/4 褐色混土

第32図 陥し穴状遺構(溝状1)



褐色混土からなる。自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

## 2. III B 7 陥し穴状遺構(溝状) (第32図、図版29)

西区東部の斜面下～中位に位置する。長軸方向はN-42°-Eで、等高線に斜めに交差している。規模は開口部が2.77m×46cm、底部が2.87m×19cmであり、平面形は開口部が細長い溝状、底部が長軸両端で幅が狭くなる帯状をなす。深さは最大98cmである。

長軸断面形では、底面はほぼ平坦であり、南西壁が底面から緩やかに内彎しながら立ち上がり、北東壁は底面から胴張り様に立ち上がり、その後内彎しながら立ち上がる。短軸断面形は一部の北壁下半部に胴張り様の部分があるものの、平坦な底面から60cmの中端まで外反気味に立ち上がり、中端から更に外反するY字状を呈する。

埋土は上位が黒色～黒褐色混土、中位が黒褐色混土を含む明黄褐色～褐色混土からなり、下位が褐色～にぶい黄橙色混土からなる。自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

## 3. IV A 3 陥し穴状遺構(溝状) (第32図、図版29)

中央区西部の斜面下位にある。長軸方向はN-56°-Eで、等高線に並行している。規模は開口部が2.93m×48cm、底部が2.92m×24cmであり、平面形は溝状をなす。深さは最大92cmである。

長軸断面形では、南西側の底面が平坦、北東側の底面が壁面に向かって緩やかに外反する。北東壁は底面から内彎し、南東壁は外反しながら立ち上がる。短軸断面形は、平坦な底面から北西壁が84cm、南東壁が84cmの中端まで真っ直ぐ立ち上がり、中端から外反するU字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が黒色混土・にぶい黄褐色混土、下位が明黄褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

## 4. IV B 6 陥し穴状遺構(溝状) (第32図、図版29)

中央区西部の斜面下位に位置する。長軸方向はN-57°-Eで、等高線に並行している。規模は開口部が3.34m×65cm、中端が3.17m×48cm、底部が4.24m×38cmである。平面形は、一部短軸幅が中端より下端が広い部分をもつ溝状をなす。深さは最大1.26mである。

長軸断面形では、底面中央から壁際までが若干弧状をなす。壁は底面から内彎しながら立ち

上がり、中端から緩やかに外反する。短軸断面形は、ほぼ平坦な底面から南東壁は35cm、北西壁は38cmの高さまで内彎し、そこから南東壁が底面から98cm、北西壁が77cmの中端まで真っ直ぐ立ち上がり、中端から外反する形状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が褐色混土・暗褐色混土からなり、下位が明黄褐色混土・にぶい黄橙色混土からなる。自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 5. IV B 9 陥し穴状遺構(溝状) (第32図、図版29)

中央区西部の斜面下～中位に位置する。長軸方向はN-39°-Eで、等高線に斜めに交差している。規模は開口部が3.36m×56cm、中端が30cm、底部が4.22m×23cmである。平面形は、開口部が溝状、底部が帯状をなす。深さは最大1.14mである。

長軸断面形では、底面は北西端で段をなす部分があるものの、ほぼ平坦である。壁面は底面から内彎して立ち上がる。短軸断面形は平坦な底面から90cmの中端まで北西壁は外反して、南東壁は内彎して立ち上がり、中端から外反するY字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が褐色混土、下位がにぶい黄橙色混土・褐色混土からなり自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 6. IV C 7 陥し穴状遺構(溝状) (第33図、図版30)

中央区西部の斜面下位に位置する。長軸方向はN-56°-Eで、等高線に並行する。規模は開口部が3.89m×57cm、底部が4.07m×21cmであり、平面形は開口部が溝状・底部が帯状をなす。深さは最大1.02mである。

長軸断面形では、底面が北東壁面に向かって緩やかに上がる。南西壁は底面から真っ直ぐ立ち上がり、北東壁は底面から真っ直ぐ立ち上がり、その後中端まで内彎し、中端から真っ直ぐ立ち上がる。短軸断面形は、平坦な底面から北西壁は緩やかに外反して立ち上がり、南東壁は底面から72cmの中端まで真っ直ぐに立ち上がり、その後外反するV字状を呈する。

埋土は、上位が黒色～黒褐色混土、中位が褐色混土、下位が黒褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

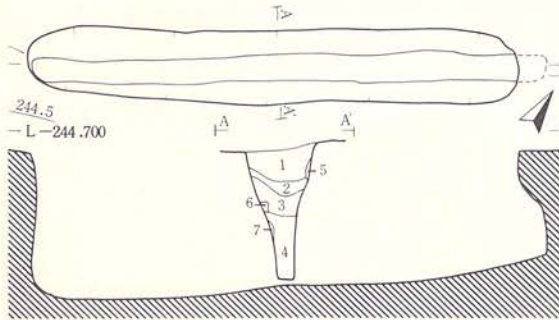
遺物は出土していない。

#### 7. IV E 9 陥し穴状遺構(溝状) (第33図、図版30)

中央区西部の斜面下～中位に位置する。長軸方向はN-12°-Eで、等高線に直交する。規模

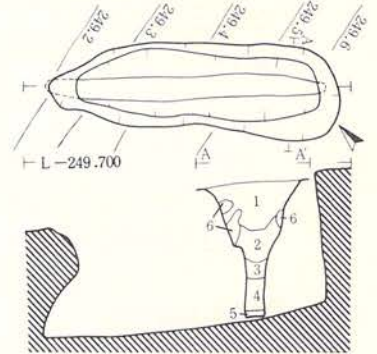


IV C 7 陥し穴状遺構



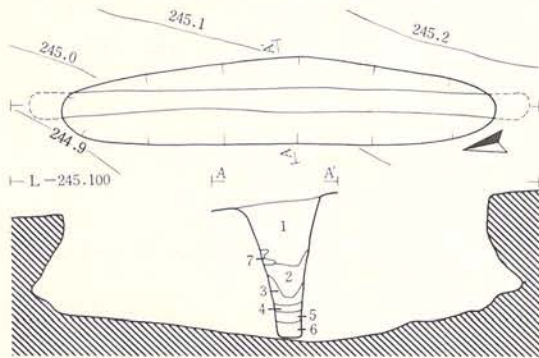
1. 10YR 5/2 黒褐色混土
2. 10YR 5/2 暗褐色混土
3. 10YR 5/2 褐色混土
4. 10YR 5/2 黒褐色土
5. 10YR 5/2 褐色土
6. 10YR 5/2 明黄褐色土
7. 10YR 5/2 にぶい黄橙色土

IV J 13 陥し穴状遺構



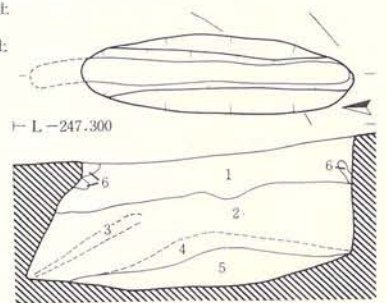
1. 10YR 5/2 黒褐色混土
2. 10YR 5/2 褐色混土
3. 10YR 5/2 褐色混土
4. 10YR 5/2 褐色混土
5. 10YR 5/2 褐色混土
6. 10YR 5/2 褐色混土

IV E 9 陥し穴状遺構



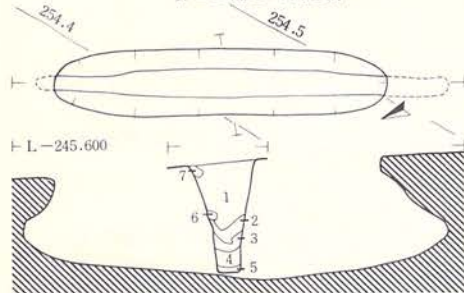
1. 10YR 5/2 黒褐色混土
2. 10YR 5/2 褐色混土
3. 10YR 5/2 にぶい黄褐色混土
4. 10YR 5/2 褐色混土
5. 10YR 5/2 にぶい黄褐色混土
6. 10YR 5/2 灰黄褐色混土
7. 10YR 5/2 明黄褐色混土

V A 11-1 陥し穴状遺構



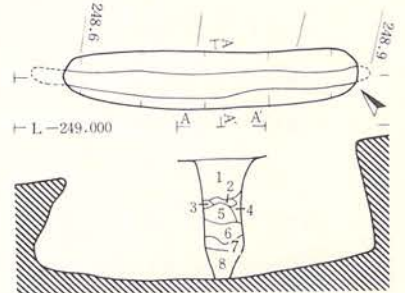
1. 10YR 5/2 黒褐色混土
2. 10YR 5/2 黒褐色混土
3. 10YR 5/2 褐色混土
4. 10YR 5/2 暗褐色混土
5. 10YR 5/2 黒褐色混土
6. 10YR 5/2 褐色混土

IV E 10 陥し穴状遺構



1. 10YR 5/2 黒褐色混土
2. 10YR 5/2 明黄褐色混土
3. 10YR 5/2 にぶい黄褐色混土
4. 10YR 5/2 暗褐色混土
5. 10YR 5/2 にぶい黄褐色混土
6. 10YR 5/2 にぶい黄褐色混土
7. 10YR 5/2 褐色土

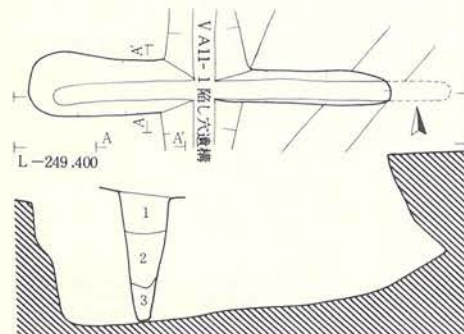
V A 13 陥し穴状遺構



1. 10YR 5/2 黒褐色混土
2. 10YR 5/2 黒褐色混土
3. 10YR 5/2 黒褐色混土

1. 10YR 5/2 黒褐色混土
2. 10YR 5/2 黒色混土
3. 10YR 5/2 褐色混土
4. 10YR 5/2 黒褐色混土
5. 10YR 5/2 褐色混土
6. 10YR 5/2 黒褐色混土
7. 10YR 5/2 黒褐色混土
8. 10YR 5/2 明黄褐色土

V A 11-2 陥し穴状遺構



第33図 陥し穴状遺構(溝状2)

は開口部が3.44m×70cm、底部が3.97m×20cmであり、平面形は、開口部が溝状、底部が帯状をなす。深さは最大1.08mである。

長軸断面形では、底面は中央部から壁際まで弧状をなす。壁は底面から内彎し、中端から真っ直ぐ立ち上がる。短軸断面形は、平坦な底面から直線的に外反しながら立ち上がるV字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が褐色混土、下位がにぶい黄橙色混土・灰黄褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 8. IV E 10 陥し穴状遺構(溝状) (第33図、図版30)

中央区西部の斜面下～中位に位置する。長軸方向はN-23°-Eで、等高線に直交する。規模は開口部が2.65m×52cm、底部が3.29m×22cmであり、平面形は、開口部が溝状、底部が帯状をなす。深さは最大88cmである。

長軸断面形では、底面は中央から壁際まで緩やかな弧状をなす。壁は底面から内彎しながら立ち上がる。短軸断面形は、平坦な底面から外反しながら立ち上がるV字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が明黄褐色～にぶい黄褐色混土、上位が暗褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 9. IV J 13 陥し穴状遺構(溝状) (第33図、図版30)

中央区東部の斜面中位に位置する。長軸方向はN-49°-Wで、等高線に斜めに交叉している。規模は開口部が2.30m×63cm、中端が1.93m×49cm、底部が2.24m×17cmである。平面形は、開口部が長楕円形、底部が帯状をなす。深さは最大1.08mである。

長軸断面形では、底面は緩やかな弧状をしながら南東壁に向かって上がる。北西壁が底面から内彎しながら立ち上がり、中端から外反する。南東壁は若干内彎しながら立ち上がる。短軸断面形は、底面から58cmの高さまでは真っ直ぐ立ち上がり、その後外反するY字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が褐色混土、下位が褐色・暗褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 10. VA 11-1 陥し穴状遺構(溝状) (第33図、図版30)

中央区東部の斜面中位に位置する。長軸方向はN-2°-Eで、等高線に直交する。規模は開口部が2.12m×62cm、中端短軸幅が28cm、底部が2.52m×16cmである。平面形は、開口部が長



楕円形、中端が溝状、底部が帯状をなす。深さは最大1.03mである。

長軸断面形では、底面は中央から壁際までは緩やかな弧状となる。北壁は底面から内彎しながら立ち上がり、南壁は若干外反気味に立ち上がる。短軸断面形は、平坦な底面から若干外反気味に立ち上がり、開口部近くで更に外反するY字状を呈する。

埋土は、上・中位が黒褐色混土、下位が暗褐色混土・黒褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### V A 11-2 陥し穴状遺構(溝状) (第33図、図版31)

中央区東部の斜面中位に位置する。長軸方向はN-88°-Wで、等高線に斜めに交叉している。規模は開口部が2.87m×43cm、底部が3.15m×15cmであり、平面形は、開口部が溝状、底部が帯状をなす。深さは最大1.01mである。

長軸断面形では、底面は西側がほぼ平坦で、東側が弧状に壁際に上がる。西壁は底面から、途中段がつくものの外反しながら立ち上がり、東壁は内彎しながら立ち上がる。短軸断面形は、平坦な底面から直線的に外反して立ち上がるV字状を呈する。

埋土は、上位が黒色混土、中・下位が黒褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 12. V A 13 陥し穴状遺構(溝状) (第33図、図版30)

中央区東部の斜面中位に位置する。長軸方向がN-49°-Wで、等高線に斜めに交叉している。規模は開口部が2.35m×46cm、底部が2.70m×19cmである。平面形は、開口部が溝状、底部が帯状をなし、南西方向へ若干弧状に曲がっている。深さは最大94cmである。

長軸断面形は、底面が壁際まで若干弧状をなし、壁が底面から内彎しながら立ち上がる。短軸断面形は、一部底面近くで胴張り様部分が認められるが、大部分は平坦な底面から若干外反気味に立ち上がり、開口部近くで外反する幅の狭いU字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色～黒色混土、中位が褐色混土、下位が黒褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

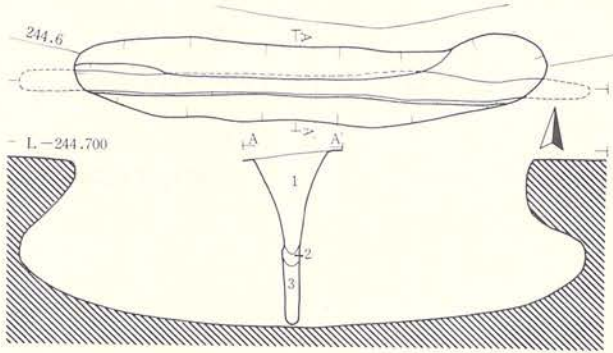
遺物は出土していない。

#### 13. V B 7 陥し穴状遺構(溝状) (第34図、図版31)

中央区東部の斜面下位に位置する。長軸方向はN-86°-Eで、等高線に並行している。規模は開口部が3.66m×59cm、中端が3.57m×14cm、底部が4.54m×16cmである。平面形は、開口



VB 7 陥し穴状遺構

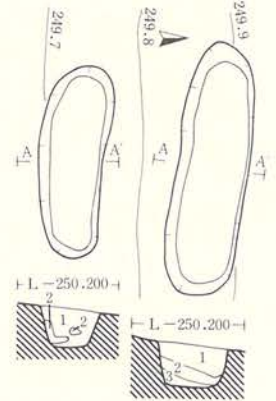


- 1. 10YR 5/1 黒褐色泥土
- 2. 10YR 5/2 褐色泥土
- 3. 10YR 5/3 暗褐色泥土

- 1. 10YR 5/1 黒褐色泥土
- 2. 10YR 5/2 褐色泥土

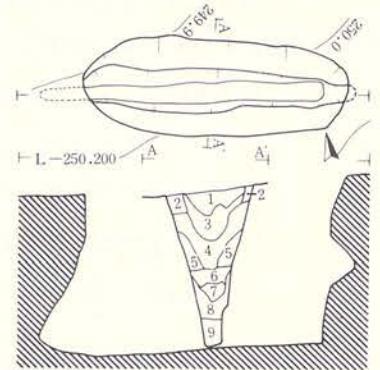
- 1. 10YR 5/1 黒褐色泥土
- 2. 10YR 5/2 褐色泥土
- 3. 10YR 5/3 暗褐色泥土

VH 19 陥し穴状遺構 MH 18 陥し穴状遺構

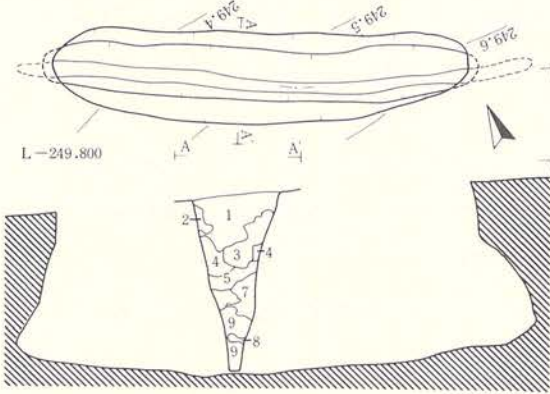


- 1. 7.5YR 5/1 黒褐色泥土
- 2. 5 YR 5/1 赤褐色泥土
- 3. 7.5YR 5/2 褐色泥土
- 4. 10 YR 5/2 褐色泥土
- 5. 7.5YR 5/3 明褐色泥土
- 6. 10 YR 5/4 褐色泥土
- 7. 7.5YR 5/4 明褐色泥土
- 8. 10 YR 5/5 褐色土
- 9. 10 YR 5/6 黒褐色泥土

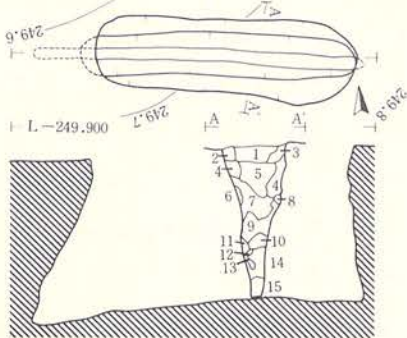
V J 16 陥し穴状遺構



VB 14 陥し穴状遺構



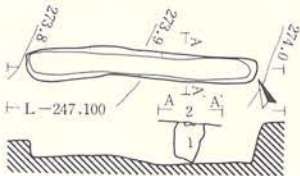
V J 15 陥し穴状遺構



- 1. 10YR 5/1 黒褐色泥土
- 2. 10YR 5/2 黒褐色泥土
- 3. 10YR 5/3 褐色泥土
- 4. 10YR 5/4 暗褐色泥土
- 5. 10YR 5/5 黒褐色泥土
- 6. 10YR 5/6 黄褐色泥土
- 7. 10YR 5/7 暗褐色泥土
- 8. 10YR 5/8 暗褐色泥土
- 9. 10YR 5/9 褐色泥土
- 10. 10YR 5/10 褐色泥土
- 11. 10YR 5/11 黄褐色泥土
- 12. 10YR 5/12 褐色泥土
- 13. 10YR 5/13 褐色泥土
- 14. 10YR 5/14 褐色泥土
- 15. 10YR 5/15 暗褐色泥土

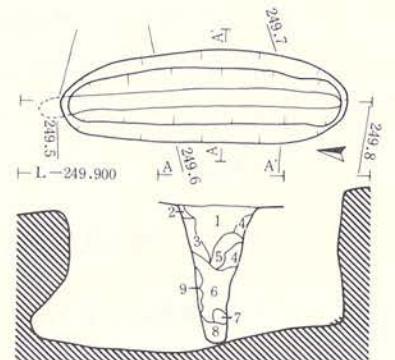
- 1. 7.5YR 5/1 黒褐色泥土
- 2. 10 YR 5/2 暗褐色泥土
- 3. 10 YR 5/3 黒褐色泥土
- 4. 10 YR 5/4 褐色泥土
- 5. 10 YR 5/5 褐色泥土
- 6. 10 YR 5/6 黄褐色泥土
- 7. 10 YR 5/7 黄褐色泥土
- 8. 10 YR 5/8 褐色泥土
- 9. 10 YR 5/9 暗褐色泥土

VA 11 陥し穴状遺構



- 1. 7.5YR 5/2 褐色泥土
- 2. 7.5YR 5/1 黒褐色泥土

VE 17 陥し穴状遺構



- 1. 7.5YR 5/1 黒褐色泥土
- 2. 7.5YR 5/2 褐色泥土
- 3. 10 YR 5/2 褐色泥土
- 4. 10 YR 5/3 暗褐色泥土
- 5. 10 YR 5/4 黒褐色泥土
- 6. 10 YR 5/5 褐色泥土
- 7. 10 YR 5/6 黒褐色泥土
- 8. 10 YR 5/7 褐色泥土
- 9. 10 YR 5/8 明黄褐色泥土

第34図 陥し穴状遺構(溝状 3)

部が溝状、底部が帯状をなす。深さは最大1.34mである。

長軸断面形は、底部が中央から壁際まで弧状を呈し、壁が底面から内彎し、中端から真っ直ぐ立ち上がる。短軸断面形は、U字形の底面から84cmの中端まで真っ直ぐ立ち上がり、中端から外反するY字状を呈する。

埋土は、上～中位が黒褐色混土、中位が黒色混土、下位が暗褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 14. VB14陥し穴状遺構(溝状)(第34図、図版31)

中央区東部の斜面中位に位置する。長軸方向はN-63°-Wで、等高線に斜めに交叉している。規模は開口部が3.30m×72cm、中端は3.45m×40cm、底部が4.10m×10cmである。平面形は、開口部が南西方向へ若干弧状をなす溝状、底部が南西方向へ弧状を呈する帯状をなす。深さは最大1.38mである。

長軸断面形は、底面が中央から壁際まで緩やかな弧状をなし、壁が底面から内彎しながら立ち上がる形状を呈する。短軸断面形は、平坦な底面から外反しながら立ち上がるV字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土・褐色混土・中位が明褐色混土・褐色混土、下位が黒褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 15. VJ15陥し穴状遺構(溝状)(第34図、図版32)

東区西部の斜面中～上位に位置する。長軸方向はN-84°-Wで、等高線に並行している。規模は開口部が2.08m×57cm、中端が2.18m×35cm、底部が2.69m×9cmである。平面形は、開口部が長楕円形、中端が溝状、底部が幅の狭い帯状を呈する。深さは最大1.20mである。

長軸断面形では、底面は東側に平坦な部分があるものの、西側は壁際に次第に下がる形状を呈する。壁は内彎気味に立ち上がり、上端近くで外反する。短軸断面形は、北壁は底面から60cmの中端までは胴張り様に立ち上がり中端から外反し、南壁は上半部の一部で胴張り様部分をもつものの底面から緩やかに外反しながら立ち上がるV字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色～暗褐色混土、中位が暗褐色混土、下位が暗褐色混土・褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。



#### 16. VJ16陥し穴状遺構(溝状) (第34図、図版32)

東区西部の斜面中～上位に位置する。長軸方向はN-84°-Wで、等高線に並行している。規模は開口部が2.06m×76cm、中端が1.88m×36cm、底部が2.52m×16cmである。平面形は、開口部が長楕円形、中端が溝状、底部が幅の狭い帯状をなす。深さは最大1.23mである。

長軸断面形では、底面は西側に若干下がる部分があるものの、ほぼ平坦である。西壁は底面から内彎し、中端から真っ直ぐ立ち上がり、東壁は途中凹部分があるものの底面から外反しながら立ち上がる。短軸断面形は、底面から64cmに中端部分をもつものの、全体としては平坦な底面から緩やかに立ち上がるV字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色～暗褐色混土、中位が褐色混土・黄褐色混土、下位が暗褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 17. VI A11陥し穴状遺構(溝状) (第34図、図版31)

東区西部の斜面中位に位置する。長軸方向はN-67°-Wで、等高線に斜めに交叉している。規模は開口部が1.83m×22cm、底部が1.73m×14cmあり、平面形は帯状である。深さは最大30cmである。上半部分は削平されている。

長軸断面形では、底面は若干凹凸があり、壁面は底面から外反しながら立ち上がる。短軸断面形は、底面から外反しながら立ち上がるU字状を呈する。

埋土は褐色混土である。

遺物は出土していない。

#### 18. VI E17陥し穴状遺構(溝状) (第34図、図版31)

東区中央部の斜面中～上位に位置する。長軸方向はN-8°-Wで、等高線に直交する。規模は開口部が2.27m×74cm、中端が2.15m×45cm、底部が2.38m×14cmである。平面形は、開口部が長楕円形、底部が幅の狭い帯状をなす。深さは最大1.10mである。

長軸断面形では、底面は緩やかな凹凸をもつ。北壁は底面から内彎した後、真っ直ぐ立ち上がり、開口部近くで外反する。南壁は底面から内彎気味に立ち上がり、中端で外反する。短軸断面形は、U字状の底面から西壁は外反しながら立ち上がり、東壁は底面から48cm真っ直ぐ立ち上がり、その後外反するV字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土・褐色混土・中位が褐色混土、下位が黒褐色混土からなり自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 19. VIH18陥し穴状遺構(溝状) (第34図、図版33)

東区中央部の斜面中～上位に位置する。長軸方向はN-80°-Wで、等高線に並行している。規模は開口部が2.00m×56cm、底部が1.88m×45cmであり、平面形は長楕円形をなす。深さは最大33cmと浅くなっている。

長軸断面形では、底面は平坦で、壁面は底面から外反しながら立ち上がる。短軸断面形は底面が平坦で、壁面は底面から外反しながら立ち上がるピーカー状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、下位が褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 20. VIH19陥し穴状遺構(溝状) (第34図、図版33)

東区中央部の斜面中～上位に位置する。長軸方向はN-83°-Wで、等高線に並行している。規模は開口部が1.53m×50cm、底部が1.37m×38cmであり、平面形は長楕円形をなす。深さは最大30cmと浅くなっている。

長軸断面形では、底面は平坦で、壁面は底面から外反しながら立ち上がる。短軸断面形は、底面が平坦で、壁面は底面から外反しながら立ち上がるピーカー状を呈する。

埋土は、黒褐色混土・褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 21. VIH20陥し穴状遺構(溝状) (第35図、図版33)

中央区の斜面上位に位置する。長軸方向はN-75°-Eで、等高線に並行している。VIH20縄文前代竪穴住居跡の西壁及び床面を切って構築している。

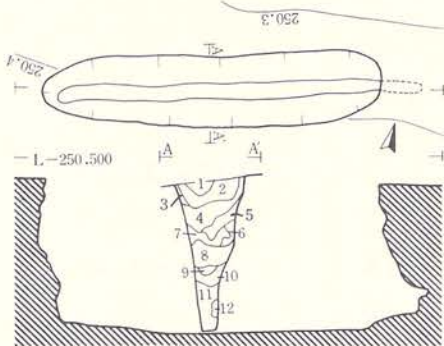
規模は開口部が2.58m×55cm、底部が2.89m×11cmであり、平面形は、開口部が溝状、底部が幅の狭い帯状をなす。深さは最大1.20mである。長軸断面形は、平坦な底面から、西壁は外傾し、東壁は内傾しながら立ち上がる。短軸断面形は、平坦な底面から、北壁は直線的に外傾し、南壁は高さ40cmまで真っ直ぐ立ち上がり、その後外傾する。V字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が明黄褐色混土、暗褐色混土、下位が暗褐色混土からなり自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

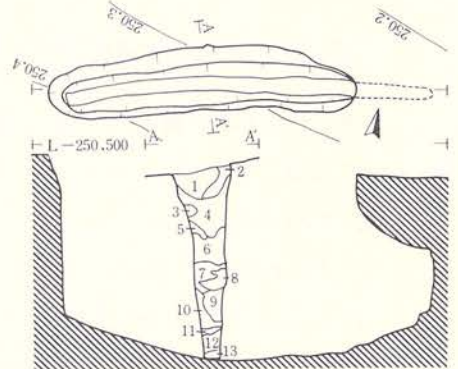


VI H 20 陥し穴状遺構



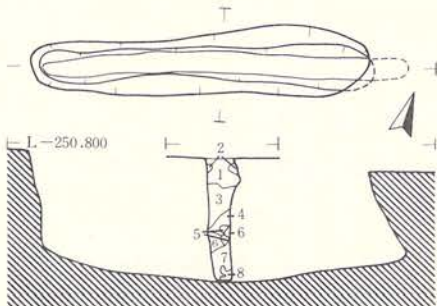
1. 10 YR 5/2 黒色混土
2. 10 YR 5/2 黒褐色混土
3. 7.5 YR 5/4 褐色混土
4. 10 YR 5/2 黒褐色混土
5. 10 YR 5/2 黒褐色混土
6. 10 YR 5/2 黄褐色混土
7. 10 YR 5/2 褐色混土
8. 10 YR 5/2 暗褐色混土
9. 10 YR 5/2 黒褐色混土
10. 10 YR 5/2 明黄褐色混土
11. 10 YR 5/2 暗褐色混土
12. 10 YR 5/2 黄褐色混土

VI J 21 陥し穴状遺構



1. 10 YR 5/2 黒褐色混土
2. 10 YR 5/2 黒褐色混土
3. 10 YR 5/2 褐色混土
4. 10 YR 5/2 黒褐色混土
5. 10 YR 5/2 暗褐色混土
6. 10 YR 5/2 暗褐色混土
7. 10 YR 5/2 暗褐色混土
8. 10 YR 5/2 暗褐色混土
9. 10 YR 5/2 褐色混土
10. 10 YR 5/2 黄褐色混土
11. 10 YR 5/2 暗褐色混土
12. 10 YR 5/2 褐色混土
13. 10 YR 5/2 暗褐色混土

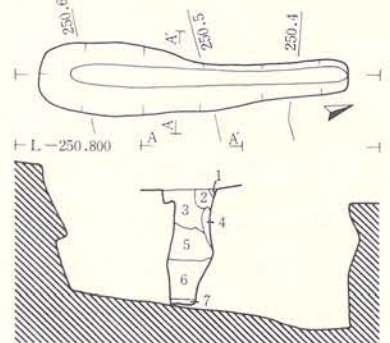
VI H 21 陥し穴状遺構



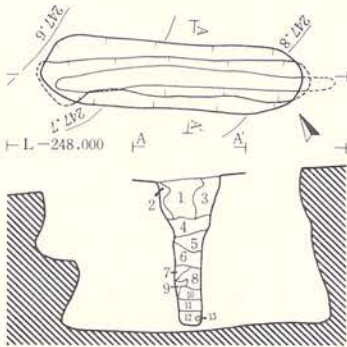
1. 10 YR 5/2 黒褐色混土
2. 10 YR 5/2 褐色混土
3. 10 YR 5/2 褐色混土
4. 10 YR 5/2 暗褐色混土
5. 10 YR 5/2 褐色混土
6. 10 YR 5/2 褐色混土
7. 10 YR 5/2 黄褐色混土
8. 10 YR 5/2 黒褐色混土

1. 10 YR 5/2 褐色混土
2. 10 YR 5/2 黒褐色混土
3. 10 YR 5/2 暗褐色混土
4. 10 YR 5/2 明黄褐色土
5. 10 YR 5/2 褐色混土
6. 10 YR 5/2 明黄褐色土
7. 10 YR 5/2 暗褐色混土

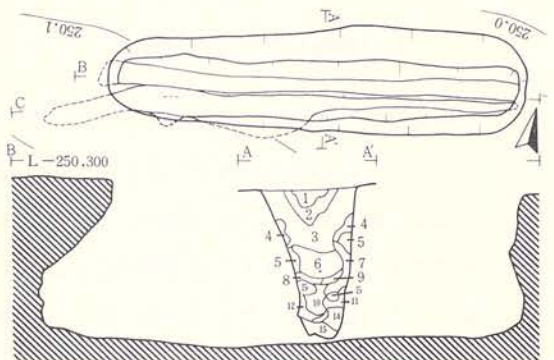
VI B 22 陥し穴状遺構



VI D 23-1 陥し穴状遺構

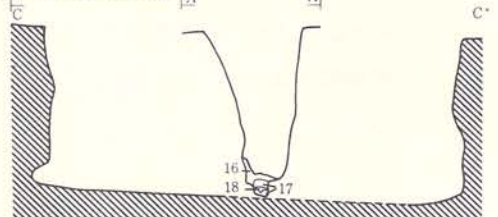


1. 10 YR 5/2 暗褐色混土
2. 10 YR 5/2 褐色混土
3. 10 YR 5/2 褐色混土
4. 10 YR 5/2 褐色混土
5. 10 YR 5/2 黄褐色混土
6. 10 YR 5/2 褐色混土
7. 10 YR 5/2 黄褐色混土
8. 10 YR 5/2 褐色混土
9. 10 YR 5/2 明黄褐色混土
10. 10 YR 5/2 暗褐色混土
11. 10 YR 5/2 褐色混土
12. 10 YR 5/2 暗褐色混土
13. 10 YR 5/2 明黄褐色混土



1. 10 YR 5/2 黒色混土
2. 10 YR 5/2 黒褐色混土
3. 10 YR 5/2 黒褐色混土
4. 10 YR 5/2 暗褐色混土
5. 10 YR 5/2 褐色混土
6. 10 YR 5/2 黒褐色混土
7. 10 YR 5/2 暗褐色混土
8. 10 YR 5/2 黒褐色混土
9. 10 YR 5/2 褐色混土
10. 10 YR 5/2 黒褐色混土
11. 10 YR 5/2 褐色混土
12. 10 YR 5/2 黄褐色混土
13. 10 YR 5/2 黒褐色混土
14. 10 YR 5/2 黄褐色混土
15. 10 YR 5/2 黒褐色混土
16. 10 YR 5/2 明黄褐色混土
17. 10 YR 5/2 黒褐色混土
18. 10 YR 5/2 黄褐色混土

VI D 23-2 陥し穴状遺構



第35図 陥し穴状遺構(溝状4)

## 22. VI H 21 陥し穴状遺構(溝状) (第35図、図版33)

中央区の斜面上位に位置する。長軸方向はN-69°-Eで、等高線に平行している。規模は開口部が2.68m×47cm、中端が2.66m×27cm、底部が2.92m×18cmである。平面形は、開口部は溝状底部は幅の狭い帯状をなす。深さは最大98cmである。

長軸断面形は、弧状を呈する底面から南西壁は緩やかに外反し、北東壁は内傾して立ち上がる。短軸断面形は、平坦な底面から南壁が外傾気味に、北壁が内傾気味に立ち上がる。幅の狭いU字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が暗褐色混土・褐色混土、下位が黄褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

## 23. VI J 21 陥し穴状遺構(溝状) (第35図、図版33)

東区中央部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-75°-Eで、等高線に平行している。規模は開口部が2.44m×50cm、中端が2.33m×32cm、底部が2.92m×11cmである。平面形は、開口部が溝状、底部が幅の狭い帯状をなし、北西方向へ若干弧状に曲がっている。深さは最大1.52cmである。

長軸断面形では、底面は中央から壁際まで弧状を呈する。西壁は底面から若干外反しながら立ち上がり、中端から外反する。東壁は底面から真っ直ぐ立ち上がった後内彎し、中端から真っ直ぐ立ち上がる。短軸断面形は、平坦な底面から外反気味に立ち上がり、開口部近くで若干外反する幅の狭いU字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が暗褐色～褐色混土、下位が黄褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

## 24. VII B 22 陥し穴状遺構(溝状) (第35図、図版34)

東区東部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-17°-Eで、等高線に直交する。規模は開口部が2.45m×45cm、底部が2.21m×15cmであり、平面形は、開口部が一部変形した溝状、底部が幅の狭い帯状をなす。深さは最大91cmである。

長軸断面形は、底面は北側に向かって下がっている。壁面は、南壁は一部段がつく部分があるものの底面から外反しながら立ち上がり、北壁はほぼ真っ直ぐ立ち上がる形状を呈する。短軸断面形は、胴張り様の部分をもつものの、平坦な底面からほぼ真っ直ぐ立ち上がるU字状を呈



する。

埋土は、上位が暗褐色混土、中位が褐色混土、下位が明黄褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 25. VII C 13 陥し穴状遺構(溝状) (第35図、図版34)

東区中央部の斜面中位に位置する。長軸方向はN-62°-Wで、等高線に並行している。規模は開口部が2.08m×52cm、中端が2.18m×30cm、底部が2.22m×17cmである。平面形は、開口部が長楕円形、中端が溝状、底部が幅の狭い帯状をなす。深さは最大1.15mである。

長軸断面形では、底面は平坦で、東壁は内彎し、西壁は内彎した後、凹部分から外反する。短軸断面形は、平坦な底面からはほぼ真っ直ぐ立ち上がり、中端から緩やかに外反する幅の狭いU字状を呈する。

埋土は、上位が暗褐色混土、褐色混土、中位が黄褐色混土、褐色混土、下位が暗褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 26. VII D 23-1 陥し穴状遺構(溝状) (第35図、図版34)

東区東部の斜面中位に位置する。長軸方向はN-82°-Eで、等高線に並行している。底面に段差があり、かつ底面及び中端が南西部分で分岐する部分があり、埋土も異なることで、下位にVII D 23-2 陥し穴状遺構(溝状)を確認している。

規模は開口部が3.25m×80cm、中端が3.17m×47cm、底部が3.80m×20cmである。平面形は開口部が溝状、底部が、南西下端の端部で南西に屈曲した幅の狭い帯状、他は帯状をなす。深さは最大1.20mである。

長軸断面形は、ほぼ平坦な底面から一旦真っ直ぐに立ち上がった後外傾し、中端から真っ直ぐ立ち上がる。短軸断面形は、一部凹凸があるものの、ほぼ平坦な底面から、北壁は外反、南壁は若干外傾しながら立ち上がる。V字状を呈する。

埋土は、上～中位が黒褐色混土、下位が黒褐色混土と黄褐色混土の互層からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

## 27. VII D 23-2 陥し穴状遺構(溝状) (第35図、図版34)

東区東部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-80°-Eで、等高線に並行している。VII D 23-1 陥し穴遺構(溝状)の精査中、底面に黒褐色混土が狭い帯状に広がる部分があり、かつ南西部分で底面及び中端部分を分岐する部分があり、残存する長軸、短軸両断面とも陥し穴遺構(溝状)の特徴を備えていることからVII D 23-2 陥し穴状遺構(溝状)とした。

残存する部分は、下部と長軸断面の南西壁中・下部であり、開口部の規模、形状は不明であるが、残存する部分から推定してVII D 23-1 陥し穴状遺構(溝状)より幅が狭いものと思われ、深さは1.33mを超えないものと思われる。

残存する底部は3.32m×9cmであり、平面形は幅の狭い帯状をなす。長軸断面形は、ほぼ平坦な底面から若干内傾気味に立ち上がり、中端から緩やかに外傾して立ち上がる。下部の短軸断面形は箱薬研堀形を呈する。

埋土は、上位が明黄褐色混土、下位が黒褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。遺物は出土していない。

## 28. VII D 25 陥し穴状遺構(溝状) (第36図、図版32)

東区東部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-54°-Eで、等高線に斜めに交反している。長軸南西端部を残し大半はVII D 24土壌(ピーカー形)によって底部まで切られている。

短軸規模は開口部が19cm、底部が13cmである。残存する長軸規模は開口部が50cm、底部が57cmである。平面形は、開口部が帯状・底部が幅の狭い帯状をなす。深さは最大92cmである。残存する南西部分の長軸方向断面は底面から若干外反気味に立ち上がる。短軸断面形は、平坦な底面から、南壁は直線的に外傾して立ち上がり、北壁は真っ直ぐ立ち上がり、幅の狭いU字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が黒褐色混土、下位が褐色混土、にぶい黄橙色の砂質土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

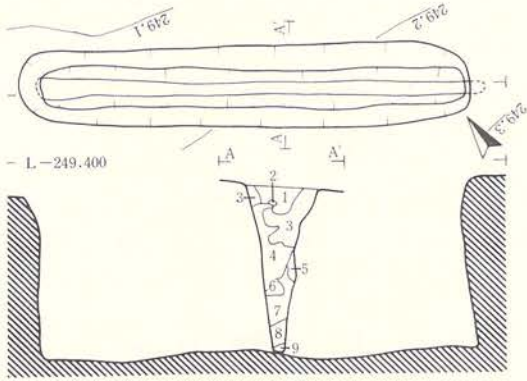
## 29. VII E 11 陥し穴状遺構(溝状) (第36図、図版34)

東区中央部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-86°-Eで、等高線に並行している。規模は開口部が2.05m×40cm、底部が2.10m×13mであり、平面形は、開口部が溝状、底部が幅の狭い帯状をなす。深さは最大で98cmである。

長軸断面形では、底面は平坦である。東壁は底面から内彎し、開口部近くで真っ直ぐ立ち上



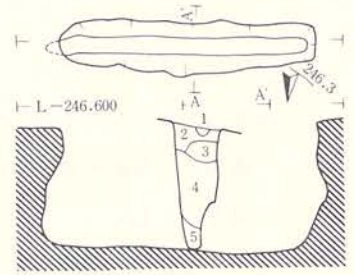
ⅦE20陥し穴状遺構



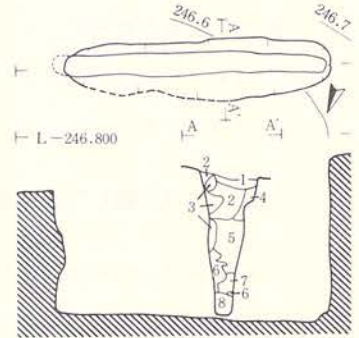
- 1. 10Y R 暗褐色混土
- 2. 10Y R 明黄褐色混土
- 3. 10Y R 黒褐色混土
- 4. 10Y R 暗褐色混土
- 5. 10Y R 褐色混土
- 6. 10Y R 黒褐色混土
- 7. 10Y R 暗褐色混土
- 8. 10Y R 暗褐色混土
- 9. 10Y R にぶい黄褐色混土

- 1. 10Y R 黄褐色混土
- 2. 10Y R 暗褐色混土
- 3. 10Y R 暗褐色混土
- 4. 10Y R にぶい黄褐色混土
- 5. 10Y R 褐色混土

ⅦE11陥し穴状遺構



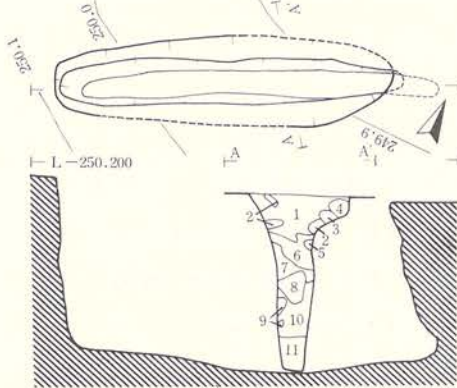
ⅦE12陥し穴状遺構



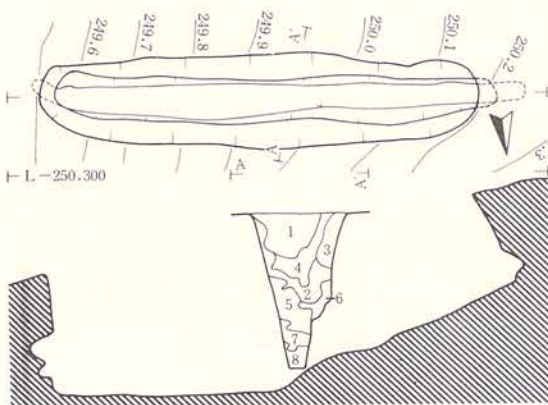
- 1. 10Y R 黒色混土
- 2. 10Y R 黄褐色混土
- 3. 10Y R 黄褐色混土
- 4. 10Y R 褐色混土
- 5. 10Y R 明黄褐色土
- 6. 10Y R 暗褐色混土
- 7. 10Y R 黄褐色混土
- 8. 10Y R 褐色混土
- 9. 10Y R にぶい黄褐色混土
- 10. 10Y R 褐色混土
- 11. 10Y R 明黄褐色混土

- 1. 10Y R 暗褐色混土
- 2. 10Y R 暗褐色混土
- 3. 10Y R 明黄褐色混土
- 4. 10Y R 黄褐色混土
- 5. 10Y R 褐色混土
- 6. 10Y R にぶい黄褐色混土
- 7. 10Y R 暗褐色混土
- 8. 10Y R 褐色混土

ⅦE25陥し穴状遺構



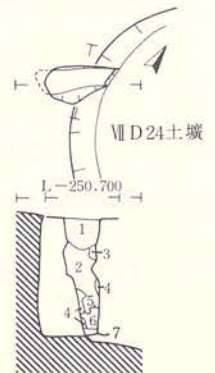
ⅦE26陥し穴状遺構



- 1. 10Y R 黒色混土
- 2. 10Y R 黒褐色混土
- 3. 10Y R 黄褐色混土
- 4. 10Y R 黒褐色混土
- 5. 10Y R 明黄褐色混土
- 6. 10Y R にぶい黄褐色混土
- 7. 10Y R にぶい黄褐色混土
- 8. 10Y R 褐色混土

- 1. 7.5Y R 黒褐色混土
- 2. 10 Y R 暗褐色混土
- 3. 10 Y R 黄褐色混土
- 4. 10 Y R 褐色混土
- 5. 10 Y R 黒褐色混土
- 6. 10 Y R 褐色混土
- 7. 10 Y R にぶい黄褐色混土砂質土

ⅦD25陥し穴状遺構



第36図 陥し穴状遺構(溝状5)

がり、西壁は底面から胴張り様に立ち上がり、開口部近くで真っ直ぐに立ち上がる。短軸断面形は、底面から外反しながら立ち上がるV字状を呈するが、西壁の一部に胴張り様の部分がある。

埋土は、上位が暗褐色混土、中位がにぶい黄褐色混土、下位が褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

### 30. VII E 12 陥し穴状遺構(溝状) (第36図、図版34)

東区中央部の斜面中位に位置する。長軸方向はN-72°-Eで、等高線に斜めに交叉している。規模は開口部が2.07m×50cm、底部が2.17m×17cmであり、平面形は、開口部が溝状、底部が幅の狭い帯状をなす。深さは最大1.10mである。

長軸断面形では、底面は平坦で、壁は若干内彎する部分はあるものの、底面から真っ直ぐに立ち上がる。短軸断面形は、底面から南壁は80cm、北壁は88cmの高さまで若干胴張り様の部分があるものの、ほぼV字状を呈する。

埋土は、上位が暗褐色混土、中位が褐色混土、下位が暗褐色混土、褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

### 31. VII E 20 陥し穴状遺構(溝状) (第36図、図版35)

東区東部の斜面中～上位に位置する。長軸方向はN-55°-Wで、等高線に斜めに交叉している。規模は開口部が3.58m×54cm、中端が3.36m×29cm、底部が3.56m×10cmである。平面形は、開口部が溝状、底部が幅の狭い帯状をなす。深さは最大1.22cmである。

長軸断面形では、底面はほぼ平坦である。北西壁は底面から直線的に立ち上がり、中端で外反する。南東壁は若干内彎し、中端で外反する。短軸断面形は、底面から外反しながら立ち上がるV字状を呈する。

埋土は、上位が暗褐色混土、黒褐色混土、中位が褐色混土、下位が暗褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

### 32. VII E 25 陥し穴状遺構(溝状) (第36図、図版35)

東区東部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-64°-Eで、等高線に斜めに交叉している。開口部の南東部分の一部はVII E 25土壌(皿形)によって切られている。規模は開口部が2.70m



×70cm、中端が2.74m×34cm、底部が2.83m×20cmである。平面形は、開口部が溝状、底部が帯状をなす。深さは最大1.40mである。

長軸断面形は、若干弧状を呈する底面から、南西壁は外反、北東壁は内彎しながら立ち上がる。短軸断面形は、平坦な底面から83cmの中端まで若干外反気味に立ち上がり、中端から更に外反するY字状を呈する。

埋土は上位が黒色混土、中位が黄褐色混土、下位が褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

### 33. VII E 26 陥し穴状遺構(溝状) (第36図、図版35)

東区東部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-80°-Wで、等高線に直交する。規模は開口部が3.52m×75cm、中端が3.52m×33cm、底部が3.92m×18cmである。平面形は、開口部が溝状、底部が帯状をなす。深さは最大1.33mである。

長軸断面形では、底面は東半分が平坦で西半分は22°の角度で直線的に西壁際に立ち上がる。壁は底面から直に立ち上がる。短軸断面形は、平坦な底面から北壁は直線的に外傾し、南壁は底面から40cmの高さまで真っ直ぐ立ち上がった後外反するY字状を呈する。

埋土は、上位が黒色～黒褐色混土、中位がにぶい黄褐色混土、下位が褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

### 34. VII F 17 陥し穴状遺構(溝状) (第37図、図版35)

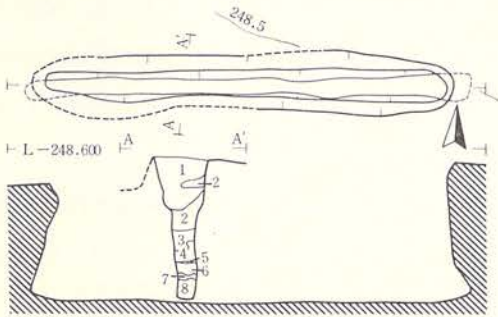
東区東部の斜面中位に位置する。長軸方向はN-85°-Eで、等高線に並行している。開口部の西側はVII E 16平安時代竪穴住居跡によって切られている。推定される開口部の規模が3.35m×50cm残存している中端が3.20m×25cm、底部が3.54m×14cmであり、平面形は、開口部が溝状、底部が幅の狭い帯状をなす。

長軸断面形では、底面は平坦であり、壁面は底面から内彎しながら立ち上がり、開口部近くで外反する。短軸断面形は、平坦な底面からほぼ真っ直ぐ立ち上がり中端で若干外反する。幅の狭いU字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が暗褐色混土、黄褐色混土からなり、下位が黒褐色混土、にぶい黄褐色混土からなる。自然堆積状況を示している。

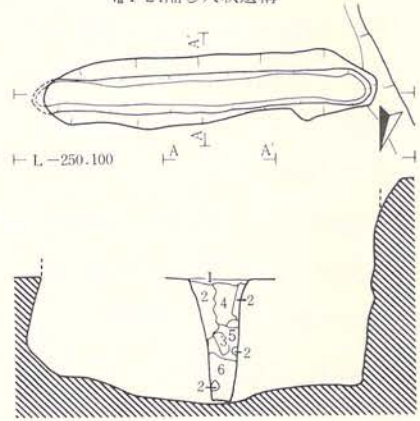
遺物は出土していない。

Ⅶ F17陥し穴状遺構



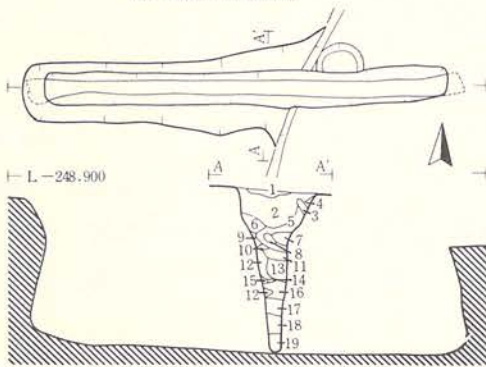
1. 10YR 5/2 黒褐色泥土
2. 10YR 5/2 暗褐色泥土
3. 10YR 5/2 黄褐色泥土
4. 10YR 5/2 褐色泥土
5. 10YR 5/2 黄褐色泥土
6. 10YR 5/2 黒褐色泥土
7. 10YR 5/2 明黄褐色泥土
8. 10YR 5/2 にぶい黄褐色泥土

Ⅶ F24陥し穴状遺構



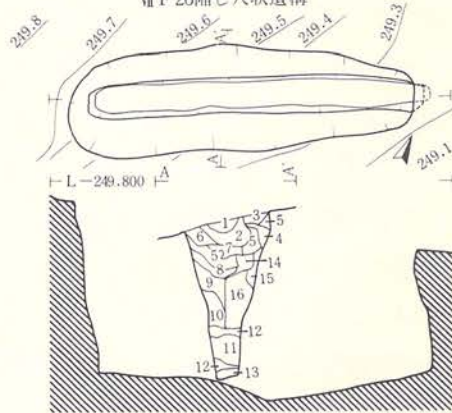
1. 10YR 5/2 暗褐色土
2. 10YR 5/2 黄橙色泥土
3. 10YR 5/2 明黄褐色泥土
4. 10YR 5/2 にぶい黄褐色泥土
5. 10YR 5/2 褐色泥土
6. 10YR 5/2 暗褐色泥土

Ⅶ F18陥し穴状遺構



1. 10 YR 5/2 明黄褐色泥土
2. 10 YR 5/2 黒褐色泥土
3. 10 YR 5/2 褐色泥土
4. 7.5YR 5/2 褐色泥土
5. 10 YR 5/2 暗褐色泥土
6. 10 YR 5/2 黄褐色泥土
7. 10 YR 5/2 褐色泥土
8. 7.5YR 5/2 明褐色泥土
9. 10 YR 5/2 明黄褐色泥土
10. 10 YR 5/2 暗褐色泥土
11. 7.5YR 5/2 明褐色泥土
12. 7.5YR 5/2 暗褐色泥土
13. 10 YR 5/2 黄褐色泥土
14. 10 YR 5/2 黒色土
15. 10 YR 5/2 暗褐色泥土
16. 7.5YR 5/2 褐色泥土
17. 10 YR 5/2 褐色泥土
18. 10 YR 5/2 明黄褐色土
19. 7.5YR 5/2 黒褐色土

Ⅶ F26陥し穴状遺構



1. 10YR 5/2 黒褐色泥土
2. 10YR 5/2 黒褐色泥土
3. 10YR 5/2 暗褐色泥土
4. 10YR 5/2 黄褐色泥土
5. 10YR 5/2 暗褐色泥土
6. 10YR 5/2 暗褐色泥土
7. 10YR 5/2 褐色泥土
8. 10YR 5/2 にぶい黄褐色泥土
9. 10YR 5/2 黄褐色泥土
10. 10YR 5/2 黄褐色泥土
11. 10YR 5/2 にぶい黄褐色泥土
12. 10YR 5/2 黄褐色泥土
13. 10YR 5/2 暗褐色泥土
14. 10YR 5/2 黄褐色泥土
15. 10YR 5/2 褐色泥土
16. 10YR 5/2 にぶい黄褐色泥土

第37図 陥し穴状遺構(溝状6)



### 35. VII F 18 陥し穴状遺構(溝状) (第37図、図版35)

東区東部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-87°-Eで、等高線に並行している。東部分の上部がVII F 18平安時代竪穴住居跡によって切られている。規模は開口部の長軸残存部の長さが2.20m、短軸幅が55cm、中端が3.20m×24cm、底部が3.46m×11cmである。平面形は開口部が推定で溝状、中端が帯状、底部が幅の狭い帯状をなす。深さは最大1.28mである。

長軸断面形では、平坦な底面から西壁、東壁とも内傾して立ち上がり、残存する西壁は中端から外傾する。短軸断面形は、U字状の底面から若干外傾気味に中端まで立ち上がり、中端から更に外傾するY字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が黄褐色混土、褐色混土、下位が明黄褐色混土、黒褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

### 36. VII F 24 陥し穴状遺構(溝状) (第37図、図版36)

東区東部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-77°-Eで、等高線に斜めに交叉している。開口部はVII F 23平安時代竪穴住居跡にもって切られている。

VII F 23住居跡の床面部分での検出規模、形状は2.64m×55cmの溝状をなす。底部は2.64m×20cmであり、平面形は帯状をなす。深さは最大96cmである。長軸断面形では、底面は若干凹凸をもちながら弧状に壁際に立ち上がる。東壁は内彎しながら立ち上がり、西壁は外反しながら立ち上がる。短軸断面形は、平坦な底面から緩やかに外反しながら立ち上がる副の狭いU字状を呈する。

埋土は、最上位が暗褐色混土、上位が明黄褐色～黄橙色混土からなり、中位が褐色混土、下位が暗褐色混土からなる。自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

### 37. VII F 26 陥し穴状遺構(溝状) (第37図、図版36)

東区東部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-65°-Eで、等高線に斜めに交叉している。規模は開口部が2.72m×85cm、中端が2.66m×28cm、底部が2.66m×20cmである。平面形は、開口部が長楕円形、底部が溝状をなす。

長軸断面形は、一部凹部分のある底面から、西壁は外反、東壁はオーバーハングして立ち上がる。短軸断面形は、平坦な底面から、南壁は外反、北壁は底面から27cm真っ直ぐ立ち上がった後外反するV字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、中位が黄褐色～にぶい黄褐色混土からなり、下位が黄褐色混土、暗褐色混土からなる。自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

### 38. VII G 22 陥し穴状遺構(溝状) (第38図、図版36)

東区東部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-60°-Eで、等高線に斜めに交叉している。上部は南西部分の一部を除き、VII G 22土壌(ピーカー形)によって切られている。規模は、推定される開口部が3.50m×72cm、中端が3.40~3.60m×70cm、底部が4.15m×7~22cmである。深さは残存する南西部分で1.52mあり、開口部からの推定深さは最大1.97mである。

平面形は、残存する南西端部の平面形・断面形から推定すると、開口部が長楕円形、中端が溝状と推定される。原状を残す底部は幅の狭い帯状をなし、ほぼ中央から「く」の字状に北西方向へ若干張り出す。

長軸断面形では、底面は、北東部分は強い弧状を呈し、南西部分は南西壁へ直線的に上がる形状をとる。壁は底面から内彎し、上端近くで緩やかに外反する。短軸断面形では、南東壁は底面から40cm、ほぼ真っ直ぐ立ち上がり、その後1.15mの高さまで胴張り様に立ち上がった後外反する。北西壁は底面から1.15mの中端までほぼ直線的に緩やかに外反して立ち上がり、中端で更に外反する。V字状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色～暗褐色混土、中位が明褐色～黄褐色混土、下位がにぶい黄橙色土(6層・地山崩落土)・黒褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

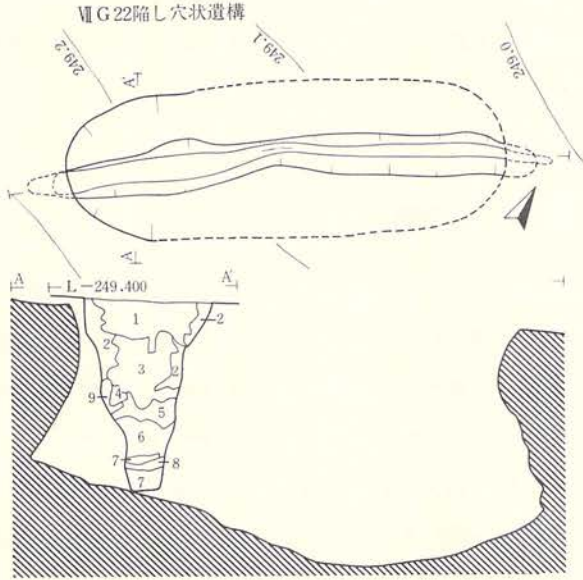
遺物は出土していない。

### 39. VII G 23 陥し穴状遺構(溝状) (第38図、図版36)

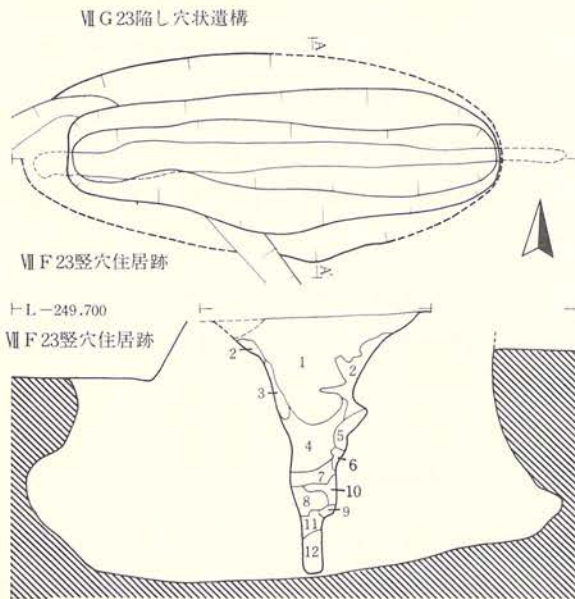
東区東部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-86°-Eで、斜面に並行している。上部の西部分の一部はVII F 23平安時代竪穴住居跡によって切られ、東端部分は検出作業により削平されている。規模は、開口部が推定で3.80×1.62m、中端が3.43×1.08m、底部が4.24m×18cmである。平面形は、開口部が長楕円、中端が溝状、底部が幅の狭い帯状をなす。深さは最大2.03mである。

長軸断面形では、底面は緩やかな弧状を呈する。西壁は緩やかに外反しながら立ち上がり、一時内彎してまた外反する。東壁は内彎して立ち上がる。短軸断面形は、平坦な底面から45cmの高さまでは底面幅と同幅で立ち上がり、その後西壁は1.00m、東壁は88cmまでほぼ真っ直ぐ立ち上がり、後外半するY字状を呈する。

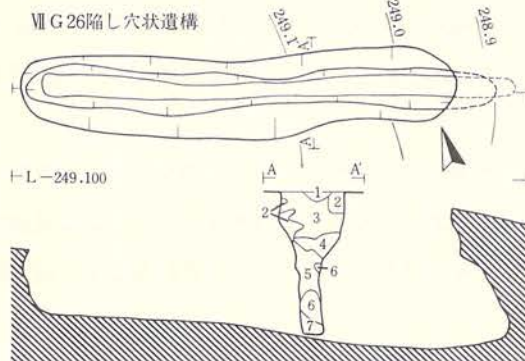
埋土は、上位が黒褐色混土、中位が褐色混土、下位がにぶい黄橙色混土・黒褐色混土からな



1. 10 YR 5 黒褐色混土
2. 10 YR 5 黄褐色混土
3. 7.5 YR 5 明褐色混土
4. 10 YR 5 黄褐色混土
5. 10 YR 5 明黄褐色混土
6. 10 YR 5 におい黄橙色混土
7. 10 YR 5 黒褐色混土
8. 10 YR 5 におい黄橙色混土
9. 10 YR 5 におい黄橙色混土



1. 10 YR 5 黒色混土
2. 7.5 YR 5 明褐色混土
3. 10 YR 5 黄褐色混土
4. 10 YR 5 褐色混土
5. 10 YR 5 黄褐色混土
6. 10 YR 5 明黄褐色混土
7. 10 YR 5 褐色混土
8. 10 YR 5 におい黄褐色混土
9. 10 YR 5 灰黄褐色混土
10. 10 YR 5 におい黄橙色混土
11. 10 YR 5 におい黄橙色混土
12. 7.5 YR 5 におい黄褐色混土



Ⅶ G 26 陥し穴状遺構

1. 10 YR 5 黒褐色土
2. 10 YR 5 褐色土
3. 10 YR 5 褐色土
4. 10 YR 5 におい黄橙色土
5. 10 YR 5 褐色土
6. 10 YR 5 におい黄褐色土
7. 10 YR 5 褐色土



第38図 陥し穴状遺構(溝状7)



り、自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 40. VII G 26 陥し穴状遺構(溝状)

〈遺構〉(第38図、図版36)

東区東部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-74°-Wで、等高線に直交する。上部の西半分はVII G 25土壌(ピーカー形)によって切られている。規模は検出面で3.45m×60cm、中端が3.73m×24cm、底部が3.92m×18cmである。平面形は、開口部が溝状、底部が帯状をなす。深さは最大1.14mである。

長軸断面形では、底面は緩やかな凹凸をもち、壁は西半分は胴張り様に立ち上がり、東半分はオーバーハングして立ち上がる。短軸断面形は平坦な底面から62cmの高さまで真っ直ぐ立ち上がり、その後胴張り様に立ち上がるY字状を呈する。

埋土は、上位が褐色混土・中位がにぶい黄橙色～褐色混土・下位が褐色混土からなり、自然堆積状況を示している。

遺物は縄文土器1点が埋土上位から出土している。

〈遺物〉(第38図、図版43)

29は縄文土器の底部から体部にかけての破片である。底部から緩やかに立ち上がる器形で、体部下端が粗いヘラケズリされている。LR・RL単節斜行縄文が横回転施文されている。

#### 1. III J 11 陥し穴状遺構(長方形)(第39図、図版37)

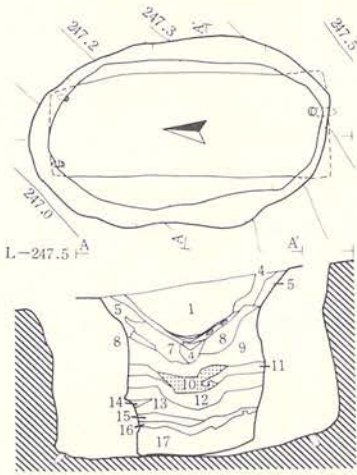
中央区西部の斜面中位に位置する。長軸方向はN-3°-Wで、等高線に直交する。規模は開口部が2.35×1.46m、底部が2.22m×82cmであり、平面形は開口部が小判形、底部が長方形をなす。深さは最大1.36mである。

長軸断面では、北壁が底面から83cmまでほぼ真っ直ぐ立ち上がり、上半が緩やかに外反する。南壁は底面から1.06mまで緩やかに内彎し、上半が緩やかに外反する。短軸断面では、西壁が1.08m、東壁が1.20mまで、ほぼ直線的に立ち上がり、上半が外反する。底面は中央から壁際にかけて弧状を呈し、斜面下位に傾いている。

埋土は、上位が土石流の流入と考えられるにぶい褐色混土、中位上半が苫小牧火山灰、十和田の降下火山灰を混入する灰黄褐色混土、中位下半が黒褐色混土、灰白色の十和田の降下火山灰(10層)、下位が黒褐色混土と黄褐色混土の互層からなる。自然堆積状況を示している。

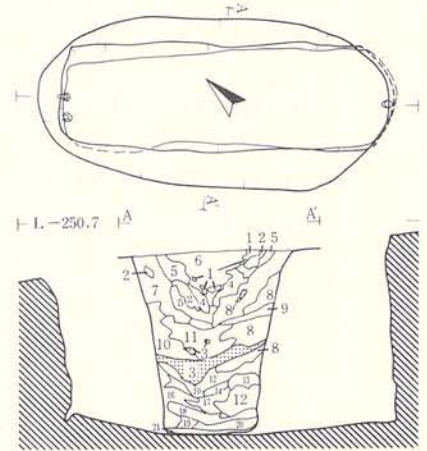
底面の北端部に2基、南端部に1基、副穴がある。P1・P2は直径が4cmの円形で、深さ

III J 11陥し穴状遺構



1. 10YR 5% におい黄褐色土
2. 10YR 5% におい黄褐色土
3. 10YR 5% 黒褐色土
4. 10YR 5% 灰黄褐色土B-Tm
5. 10YR 5% 黒褐色土
6. 10YR 5% 黒色土
7. 10YR 5% 灰黄褐色To-a混土
8. 10YR 5% 灰黄褐色To-a混土
9. 10YR 5% 黒褐色土
10. 10YR 5% 灰白色土To-a
11. 10YR 5% 褐色土
12. 10YR 5% 黒褐色土
13. 10YR 5% におい黄褐色土
14. 10YR 5% におい黄褐色土
15. 10YR 5% 黄褐色土
16. 10YR 5% 黒褐色土
17. 10YR 5% 黄褐色土

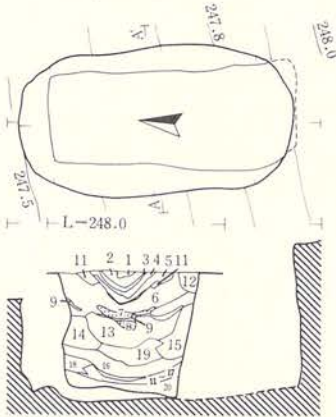
V I 17陥し穴状遺構



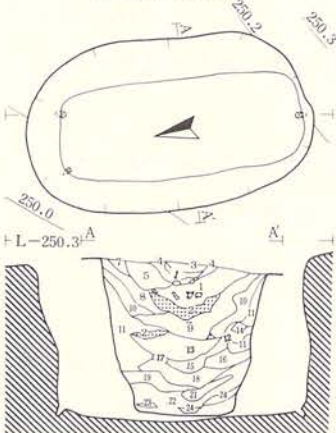
1. 10YR 5% 黒褐色土
2. 10YR 5% 明黄褐色土
3. 10YR 5% 黒色土
4. 10YR 5% におい黄橙土B-Tm
5. 10YR 5% 黒色土
6. 10YR 5% 黒褐色土
7. 10YR 5% 灰白色To-a土
8. 10YR 5% 灰白色To-a土
9. 10YR 5% におい黄橙土
10. 10YR 5% 暗褐色土
11. 10YR 5% 灰黄褐色土
12. 10YR 5% 褐色土
13. 10YR 5% 黒褐色土
14. 10YR 5% 褐色土
15. 10YR 5% 黒褐色土
16. 10YR 5% 黒褐色土
17. 10YR 5% 明黄褐色土
18. 10YR 5% 褐色土
19. 10YR 5% 暗褐色土
20. 10YR 5% におい黄褐色土
21. 10YR 5% 明黄褐色土

1. 2.5Y 5% におい黄色B-Tm
2. 10YR 5% 明黄褐色混土
3. 2.5Y 5% 灰黄色To-a
4. 10YR 5% 黄褐色混土
5. 10YR 5% におい黄褐色混土
6. 10YR 5% 黒褐色混土
7. 10YR 5% 暗褐色混土
8. 7.5YR 5% 褐色混土
9. 10YR 5% 黒褐色混土
10. 7.5YR 5% 褐色混土
11. 7.5YR 5% 暗褐色混土
12. 10YR 5% 褐色混土
13. 10YR 5% 黒褐色混土
14. 10YR 5% 暗褐色混土
15. 10YR 5% 暗褐色混土
16. 10YR 5% 明黄褐色混土
17. 10YR 5% 黒色混土
18. 10YR 5% 暗褐色混土
19. 10YR 5% 褐色混土
20. 10YR 5% 黄褐色混土
21. 10YR 5% 暗褐色混土

IV B 11陥し穴状遺構



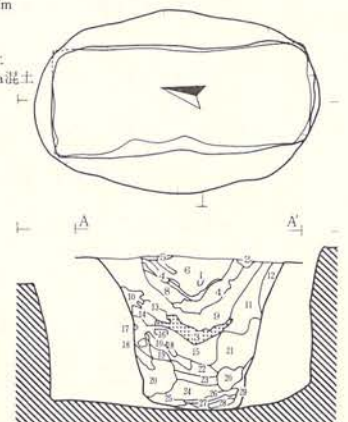
V F 16陥し穴状遺構



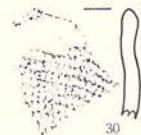
1. 2.5Y 5% におい黄色B-Tm
2. 2.5Y 5% 灰黄色混土To-a
3. 10YR 5% 黒色混土
4. 10YR 5% 灰黄褐色混土
5. 10YR 5% 暗褐色混土
6. 10YR 5% におい黄褐色To-a混土
7. 10YR 5% 暗褐色混土
8. 10YR 5% 暗褐色混土
9. 10YR 5% 黒褐色混土
10. 10YR 5% 褐色混土
11. 10YR 5% 明黄褐色混土
12. 10YR 5% 黒褐色混土
13. 10YR 5% 褐色混土
14. 10YR 5% 褐色混土
15. 10YR 5% 黒褐色混土
16. 10YR 5% 褐色混土
17. 10YR 5% 暗褐色混土
18. 10YR 5% 暗褐色混土
19. 10YR 5% 褐色混土
20. 10YR 5% 黒褐色混土
21. 10YR 5% 褐色混土
22. 10YR 5% 黄褐色混土
23. 10YR 5% 黒褐色混土
24. 10YR 5% 褐色混土

1. 2.5Y 5% におい黄色B-Tm
2. 10YR 5% 明黄褐色混土
3. 2.5Y 5% 灰黄色To-a
4. 2.5Y 5% 黄褐色To-a混土
5. 2.5Y 5% におい黄色To-a混土
6. 2.5Y 5% 暗灰黄色混土
7. 10YR 5% 黒褐色混土
8. 10YR 5% 暗褐色混土
9. 10YR 5% 黒褐色混土
10. 7.5YR 5% 褐色混土
11. 10YR 5% 黒褐色混土
12. 10YR 5% 暗褐色混土
13. 10YR 5% 暗褐色混土
14. 10YR 5% 黒褐色混土
15. 10YR 5% 黒褐色混土
16. 10YR 5% 褐色混土
17. 10YR 5% 黄褐色混土
18. 10YR 5% 暗褐色混土
19. 10YR 5% 褐色混土
20. 10YR 5% 黄褐色混土
21. 10YR 5% 黒褐色混土
22. 10YR 5% 褐色混土
23. 10YR 5% 黒褐色混土
24. 10YR 5% 黒色混土
25. 10YR 5% 黒褐色混土
26. 10YR 5% 黒褐色混土
27. 10YR 5% 黒色混土
28. 10YR 5% 黒褐色混土
29. 10YR 5% 明黄褐色混土

VI A 17陥し穴状遺構



第39図 陥し穴状遺構(長方形1)





は10cmである。断面形は先端がU字状を呈する。P 3は直径7cmの円形で、深さは20cmである。断面形は先端がU字状を呈する。

副穴の底面から開口部に向かう軸線（副穴軸線）と底面との角度は、P 1・P 2が $56^{\circ}$ 、P 3が $64^{\circ}$ である。副穴軸線と長軸との角度は、P 1が $18^{\circ}$ 、他は一致する。

遺物は出土していない。

## 2. VB11陥し穴状遺構(長方形) (第39図、図版37)

中央区西部の斜面中位に位置する。長軸方向はN- $4^{\circ}$ -Wで、等高線に直交する。規模は開口部が $2.18 \times 1.16\text{m}$ 、底部が $1.96 \times 0.72\text{m}$ であり、平面形は開口部が隅丸長方形、底部が長方形をなす。深さは最大1.00mである。

長軸断面では、北壁が底面からほぼ真っ直ぐ、南壁が底面から若干内彎しながら立ち上がる。短軸断面では、西壁が胴張り様の部分はあるが、底面から66cmまで真っ直ぐ立ち上がり、上半が外反している。東壁は底面から直線的に外傾する。底面は平坦で、斜面下位に若干傾いている。

埋土は、上位が黒褐色混土、にぶい黄橙色の苦小牧火山灰、中位上半が灰白色の十和田 a 降下火山灰、中位下半～下位が暗褐色混土、褐色混土からなる。自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

## 3. VF16陥し穴状遺構(長方形) (第39図、図版38)

東区西部の斜面上位に位置する。長軸方向はN- $6^{\circ}$ -Eで、等高線に直交する。規模は開口部が $2.20 \times 1.35\text{m}$ 、底部が $1.94 \times 1.28\text{m}$ であり、平面形は、開口部が小判形、底部が長方形をなす。深さは最大1.20mである。

長軸断面では、北壁が底面から53cmまで真っ直ぐ立ち上がり、上半が外反する。南壁は一部胴張り様部分もあるが、底面から真っ直ぐ立ち上がる。短軸断面では、壁が緩やかに外反する形状を呈する。底面は平坦である。

埋土は、上位上半が黒褐色混土、にぶい黄色の苦小牧火山灰、上位下半がにぶい黄褐色混土、灰黄色の十和田 a の降下火山灰からなり、中位が黒褐色混土、下位が暗褐色混土と黄褐色混土の互層からなる。自然堆積状況を示している。

底面の北端部の壁際に2基、南端部の壁際に1基副穴がある。P 1は直径4cmの円形で、深さは5cmである。断面形はV字状を呈する。P 2は直径4cmの円形で、深さは5cmである。断面形はV字状を呈する。P 3は直径5cmの円形で、深さは8cmである。断面形はU字状を呈する。



副穴の底面から開口部に向かう軸線（副穴軸線）と底面との角度は、P 1、P 2は62°、P 3は44°である。副穴軸線と長軸との角度は、P 1、P 3は6°、P 2は33°である。

遺物は出土していない。

#### 4. V 17陥し穴状遺構（長方形）（第39図、図版37）

東区西部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-41°-Wで、等高線に斜めに交叉している。規模は開口部が2.80×1.33m、中端が2.75m×83cm、底部が2.65m×75cmである。平面形は、開口部が楕円形、底部が南東部分に円みのある長方形をなす。深さは最大1.43mである。長軸断面では、北西壁が緩やかに外反しながら立ち上がり、南東壁は緩やかに外反しながら立ち上がる。短軸断面は、底面から緩やかに外反しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、幾分鍋底状を呈する。

埋土は、上位が黒褐色混土、にぶい黄色の苦小牧火山灰、灰黄色の十和田 a の降下火山灰、中位が暗褐色混土、灰黄色の十和田 a 降下火山灰、下位が暗褐色混土、褐色混土からなる。自然堆積状況を示している。

底面の北西端部壁際に2基、南東端部の壁際に1基、副穴がある。P 1は直径6cmの円形で、深さは6cmである。断面形はV字状を呈する。P 2は直径8cmの円形で、深さは6cmである。断面形はV字状を呈する。P 3は直径4cmの円形で、深さは4cmである。断面形はU字状を呈する。

副穴の底面から開口部に向かう軸線（副穴軸線）と底面との角度は、P 1は54°、P 3は43°である。副穴軸線と長軸とは方向が一致する。

遺物は出土していない。

#### 5. VI A 17陥し穴状遺構（長方形）

〈遺構〉（第39図、図版38）

東区西部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-13°-Wで、等高線に直交する。規模は開口部が2.25×1.40m、底部が2.03m×70cmであり、平面形は、開口部が楕円形、底部が長方形をなす。深さは最大1.20mである。長軸断面は、底面から緩やかに外反しながら立ち上がる。短軸断面は、底面から緩やかに外反して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

埋土は、上位上半が、苦小牧火山灰を混入する暗灰黄色混土、上位下半が十和田 a 降下火山灰を混入する黄褐色混土、中位上半が黒褐色混土、中位下半が灰黄色の十和田 a 降下火山灰、下位が黒褐色混土、褐色混土からなり、自然堆積状況を示す。

遺物は埋土中位（十和田 a 降下火山灰層の直下）から縄文土器が1点発見されている。

〈遺物〉（第39図、図版43）

30は小型土器の口縁部である。波状口縁の頂部で、口縁部には無文帯がめぐっている。下半はLR単節斜行縄文が縦回転施文されている。

#### 6. VII F 19 陥し穴状遺構(長方形) (第40図、図版39)

東区東部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-80°-Wで、等高線に並行している。規模は開口部が2.40×1.60m、底部が1.97×1.50mであり、平面形は小判形に近い。深さは最大72cmである。壁面は、長軸方向、短軸方向とも底面から緩やかに外反しながら立ち上がる。

埋土は、上位が黄褐色混土、十和田 a 降下火山灰が混入する黒褐色土、暗灰黄色の十和田 a 降下火山灰からなり、中位が褐色混土、下位が黄褐色、褐色混土からなる。自然堆積状況を示している。

遺物は出土していない。

#### 7. VII G 25 陥し穴状遺構(長方形)

〈遺構〉(第40図、図版39)

東区東部の斜面上位に位置する。長軸方向はN-34°-Eで、等高線に並行している。規模は開口部が2.70×1.60m、底部が2.32×1.03mであり、平面形は、開口部が小判形、底部は長方形を基調とする。深さは最大1.33mである。長軸断面では、底面から、南西壁は54cm、北東壁は73cmまでは外反気味ではあるがほぼ真っ直ぐ立ち上がり、上半が緩やかに外反する。短軸断面では、底面から南東壁は75cm、北西壁は82cmまではほぼ真っ直ぐ立ち上がり、上半が緩やかに外反する。

埋土は、上～中位中半が、灰オリーブ色の十和田 a 降下火山灰や十和田 a 降下火山灰混入の暗褐色混土に、黄褐色の苫小牧火山灰が3層堆積する。中位が灰オリーブ色の十和田 a 降下火山灰、黒褐色混土、下位が黒褐色混土と黄褐色、褐色混土の互層からなり、自然堆積状況を示している。

底面の北東端部壁際に1基の副穴がある。直径8cmの円形である。深さは12cmで断面形はV字状を呈する。副穴の底面から開口部に向かう軸線(副穴軸線)と底面の角度は32°である。副穴軸線と長軸とは方向が一致する。

遺物は縄文土器5点・石器1点・土師器2点が埋土上位から出土している。

〈遺物〉(第40図、図版43)

31～35が縄文土器である。31は平縁で、口縁端部が内削ぎ状に削られている。口縁部近くと体部の縄文施文部に中央の窪む貼瘤をもつ。下半は沈線で区面された後、無節の斜行縄文が充填されている。32・33は口縁部破片で、両者とも内彎気味である。32はLR節斜行縄文、33は



羽状縄文が施されている。34は底部近くの体部片で、35は体部から底部にかけての破片である。34がL R単節斜行縄文が施文されている。

13は横長剥片の一部を利用した搔器類である。刃部は打撃点の反対側にあつて、尖った部分に微細な剝離痕が観察される。

36・37は土師器の坏である。36はいわゆる赤焼き土器で、ロクロ成形痕が顕著である。37は内面黒色処理されたもので、体部下端と底部がヘラケズリ調整されている。

#### 4. 遺構以外の遺物

遺構以外から出土した遺物は調査対象区の東区東部に集中し、他地区からの出土はわずかである。出土する層はⅠ層とⅡ層上面である。

土器・土製品・石器に大別して以下にその概略を記述する。

##### (1) 土器

出土した土器は縄文土器・弥生土器の2種類である。出土した量はコンテナ7箱である。ほとんどが縄文土器であり、弥生土器は2個体片のみの出土である。ほとんど破片で、器形の判明するものは、縄文土器の台付浅鉢・鉢・深鉢・コップ状土器の4点である。以下7群に市分し記述する。第1群～第Ⅵ群は縄文土器である。

- 第1群土器 早期に層する土器群3類に細分される。
- 第Ⅱ群土器 前期に層する土器群で2類に細分される。
- 第Ⅲ群土器 中期に層する土器群である。
- 第Ⅳ群土器 後期に層する土器群で、2類に細分される。
- 第Ⅴ群土器 晩期に層する土器群で、2類に細分される。
- 第Ⅵ群土器 弥生土器を一括した。
- 第Ⅶ群土器 時期不明の土器を一括した。

##### 第Ⅰ群土器

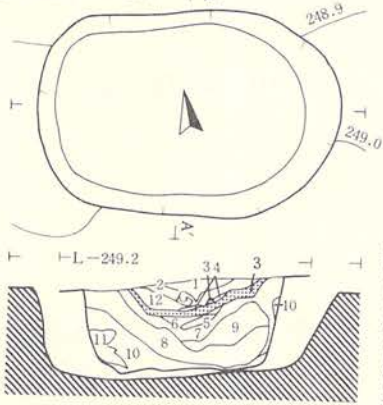
縄文時代早期に層する土器で貝殻文を施文するものと、縄文を施文するものがある。貝殻文を施文するものは更に2区分される。これらの土器は東区東部の斜面中位から出土する。

##### 第1類

54～57の土器片である。沈線で幾作学的文様を割り付けた後、貝殻の腹縁や放射肋を圧痕する。54は山形の口縁部をもつ土器である。口唇部分には貝殻の放射肋を、口縁部では貝殻の腹縁を灰痕する。器裏面口唇部には刻み目を斜めに施文する。丸棒による刺突を55は沈線の屈曲



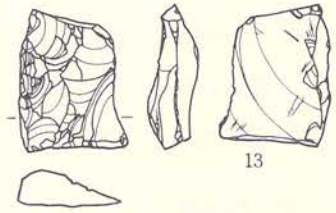
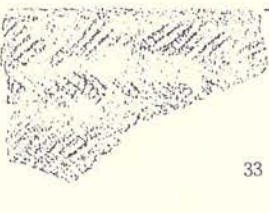
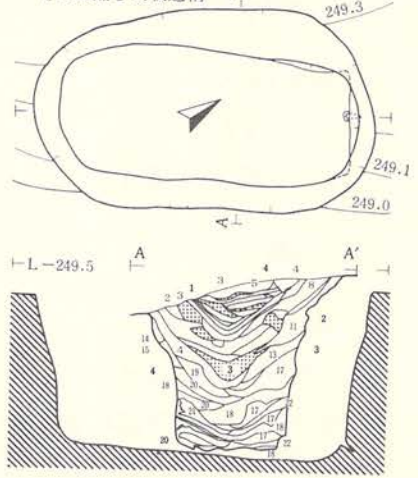
ⅦF 19陥し穴状遺構



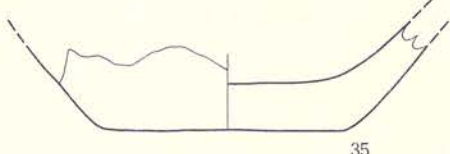
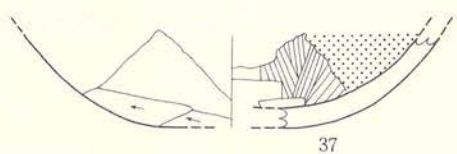
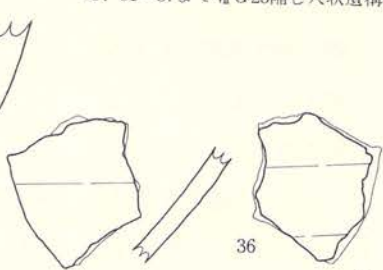
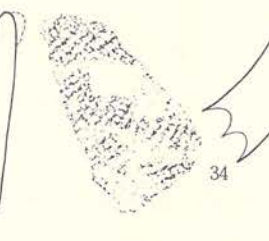
- 1. 10 YR% 黄褐色混土
- 2. 10 YR% 黒褐色To-a混土
- 3. 2.5Y% 暗灰黄色To-a
- 4. 10 YR% 黒色混土
- 5. 7.5YR% 明黄褐色混土
- 6. 7.5YR% 褐色土焼土混土
- 7. 10 YR% 褐色混土
- 8. 10 YR% 黄褐色混土
- 9. 10 YR% 褐色混土
- 10. 10 YR% 黄褐色混土
- 11. 7.5YR% 明褐色混土
- 12. 10 YR% 褐色混土

- 1. 2.5Y% 黄褐色B-Tm
- 2. 10 YR% 明黄褐色混土
- 3. 5 Y% 灰オリーブ色To-a
- 4. 10 YR% 映褐色To-a混土
- 5. 10 YR% 褐色混土
- 6. 10 YR% 黒色混土
- 7. 10 YR% 黒色混土
- 8. 10 YR% 黒褐色混土
- 9. 10 YR% 黒褐色混土
- 10. 7.5YR% 黒褐色混土
- 11. 10 YR% 黒褐色混土
- 12. 10 YR% 黒褐色混土
- 13. 7.5YR% 暗褐色混土
- 14. 10 YR% 黒褐色混土
- 15. 10 YR% 明黄褐色混土
- 16. 7.5YR% 黒褐色混土
- 17. 10 YR% 褐色混土
- 18. 10 YR% 黄褐色混土
- 19. 10 YR% 黒褐色混土
- 20. 10 YR% 褐色混土
- 21. 10 YR% 黒褐色混土
- 22. 10 YR% におい黄褐色混土

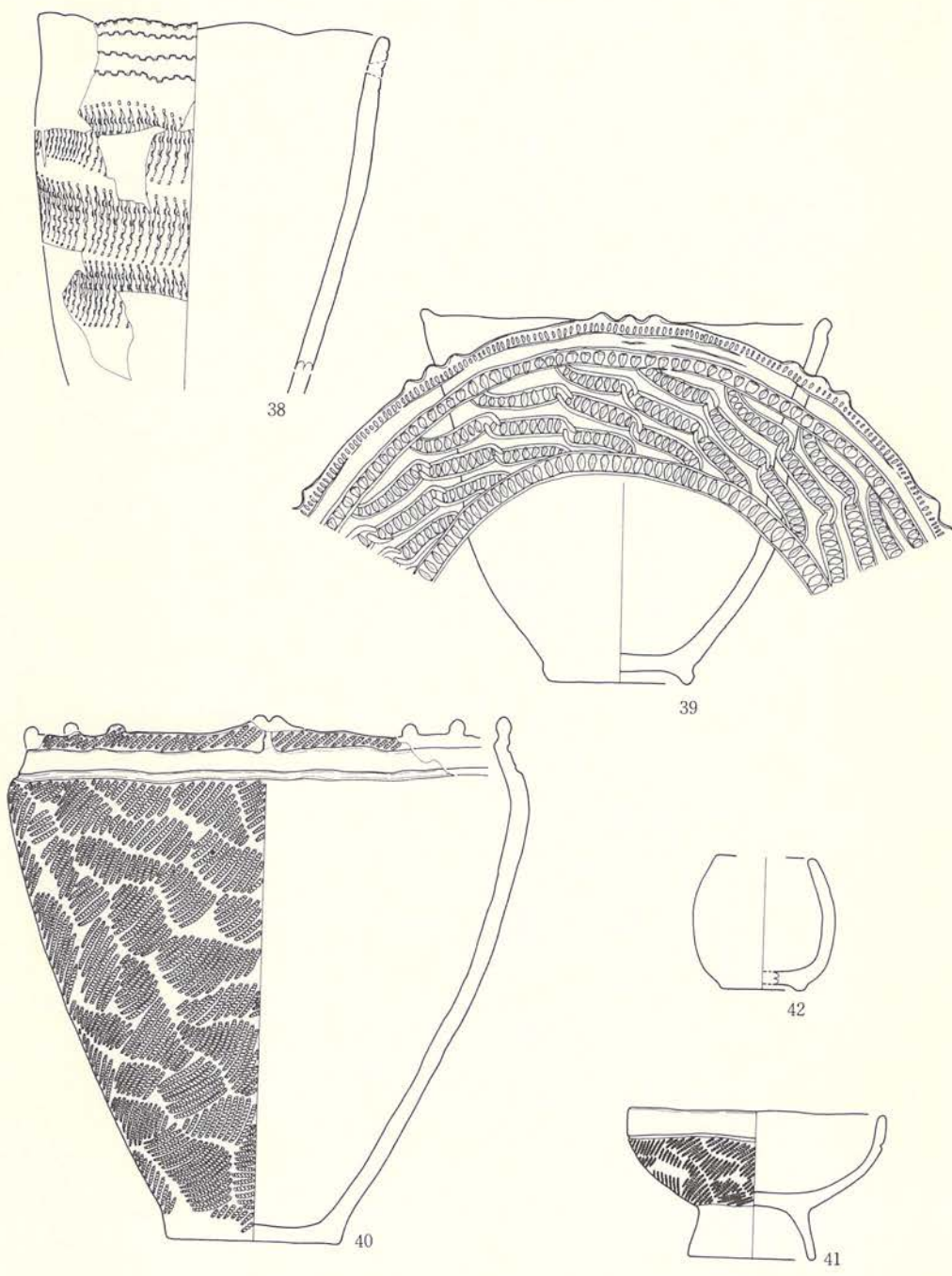
ⅦG 25陥し穴状遺構



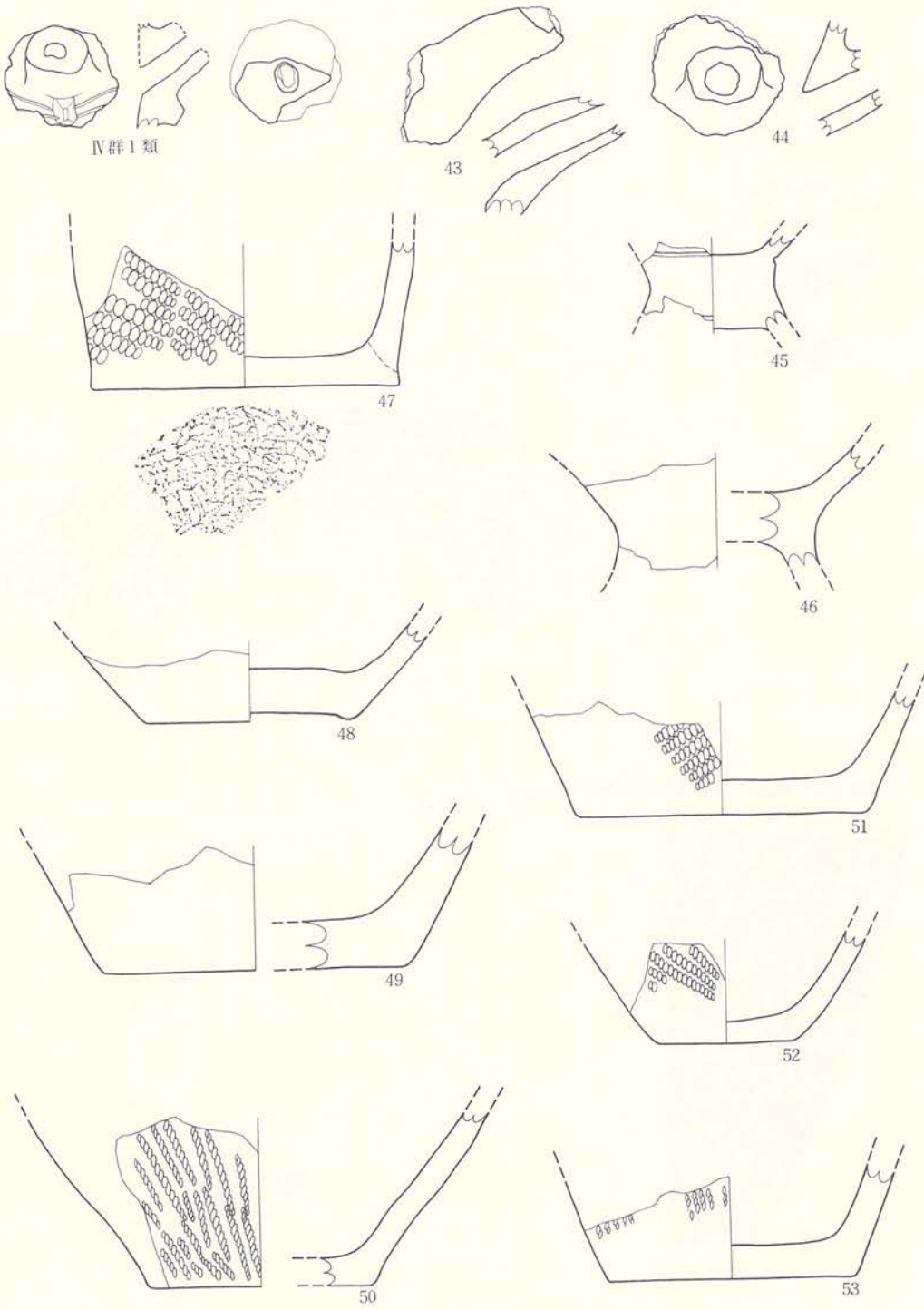
13、31~37までⅦG 25陥し穴状遺構



第40図 陥し穴状遺構、出土遺物(長方形2)



第41図 遺構外の遺物(土器1)



第42図 遺構以外の遺物(土器2)



部の1つに、56は波状沈線の端部に沈線の割り付け後、施文している。57は乳房状の尖底部である。形状・胎土からこの類に層するものと思われる。器形は、乳房状の尖底から内彎ぎみに立ち上がり、ほぼ中央でくびれ、更に内彎ぎみに立ち上がる深鉢形土器と思われる。

### 第2類

2、58～61の土器片である。貝殻の腹縁による連続波状圧痕文や押し引き文等を施文する。38は口縁部～体部上半部である。堆定口径は14.5cm、残存器高は15cmである。口縁部は堆定11個の小山形突起が連続し、緩やかな波状口縁となる。文様は、口唇部上面には貝殻の腹縁による刺突を巡らす。口縁部は貝殻の腹縁による刺突の端部同志が沈線状に連続する施文を三条施こす。体部には貝殻の腹縁による連続波状圧痕文を3段、口縁部に直角に施文する。体部下半は無文でナデの痕跡がある。器形は、体部中半から下は底部に向い円錐状に狭まり、中半から口縁部まではほぼ真っ直ぐ立ち上がり、口縁部は若干外反する深鉢形土器と思われる。58は口縁部片である。若干波状を呈する。文様は貝殻腹縁による押し引き文を横走した後、2条1単位の貝殻条痕を横位あるいは斜めに施文する。59・60は貝殻腹縁による押し引き文を横位・斜位に施文する体部片である。60は尖底部に近い。裏面は煤状の炭化物が付着し黒い。61は本類に層すると思われる尖底部片である。

### 第3類

62は器表に縄文を施文した口縁部片である。口唇部上面及び口縁部には縄文を押圧し、体部及び器裏にはLRの縄文を回転施文している。器形は口縁部で若干外反する形状を呈する。

## 第Ⅱ群土器

縄文時代前期に層する土器で、沈線や撚糸文を施文するものと、押圧縄文・刺突文・撚糸文等を施文する2種類に区分される。

### 第1類

63～81の土器片である。63・64・65は回転押圧縄文を地文とし、その上に沈線を幾何学的に配し、一部では更に沈線の屈曲部、あるいは除中に円形刺突文を付す土器である。63は地文に縦位と横位に沈線を配し、更に口唇部直下に沈線を横走させている口縁部片である。器形はほぼ真っ直ぐである。64は地文に横位・斜位・縦位に沈線を配する体部片である。65は地文に山形の沈線を数段配し、屈曲部、あるいは除中に円形刺突文を付す体部片である。66・67・68～70は撚糸文を横回転押圧する土器片である。70は体部片、他は小波状を呈する口縁部片である。66と67、68～70は各々同一個体である。器形は口縁部分で若干外反ぎみとなる。71、72は体部に撚糸文を縦回転押圧する土器片である。72は波状を呈する口縁部片である。口唇部上面と口縁部には縄文が押圧される。器影は口縁部から外反する。71は口縁部に近い体部片である。縦

長の刺突が横位に並ぶ。器形は口縁部から外反する。73・74は小波状を呈する口縁部片である。同方向の結節縄文の結節部を横回転する。75は異方向の結節縄文の結節部を横回転する口縁部片である。器形は強く内彎する形をとる。76・77は結び目縄文を付す同一個体口縁部片である。口縁部上面を強く撫でている。78は斜行縄文を施文する波状の口縁部片である。78は口縁部に瓜形刺突を施文する平縁の口縁部片である。地文には撚糸文が付され、口縁部には更に網目状撚糸文を付す。器形は口縁部で若干外反する。80は地文にL Rの単節斜縄文を付し、更に綾絡文を縦位に付す体部片である。81はL Rの単節斜縄文を付す尖底部近くの体部片である。

## 第2類

82～94の土器片である。82・83は口縁部片である。口縁部には押圧縄文を4条巡らし、その下に綾絡文を付す。体部は単節の縄文を付す。器形は口縁部で外反する。84は口縁部片である。口唇部上面及び口縁部には押圧縄文を付し、体部にはL Rの単節斜縄文を付す。82は口縁部片である。口縁部から突起部上面に押圧縄文を付し、その下には縦長の刺突を付す。85・86は押圧縄文を横位に付し、その後縦位に付す口縁部片である。87・88・89は口縁部に近い体部片である。体部に羽状縄文を付し、口縁部には半載竹管刺突を付す。90は口縁部に近い体部片である。多載竹管刺突を1段横位に巡らす。その上は押圧縄文を付す。器形は若干外反する。91は口縁部近くの体部片である。口縁部には押圧縄文、体部には木目状撚糸文、その間に円形刺突が1段横位に施文される。92は口縁部近くの体部片である。体部には木目状撚糸文を縦位に付し、間に綾絡文を付す。その上には竹管刺突を横位に一段付す。器形は口縁部で外反する。93は木目状撚糸文を付した体部片である。94は押圧縄文を付した体部片である。

## 第Ⅲ群土器

縄文時代中期に層するものをあげた。95は口縁部に二山の突起を配し、口縁部の下には沈線で区画する部分がある。二山の突起の間及び体部に縄文を押圧している。96～98は口縁部に1個の突起があり、口縁部に単節斜縄文を施文する口縁部片である。99は口唇部に二山の突起を配し、口縁部には単節斜縄文を施文した後、沈線で区画する口縁部片である。100は折り返えしの口縁部をもつ土器である。体部には単節斜縄文(L R)を縦回転施文している。101は隆帯をもつ体部片である。

## 第Ⅳ群土器

縄文時代後期に層する土器で、縄文・櫛目文・撚糸文・沈線文等で文様を構成するものと、所謂瘤付土器とに区分した。



## 第1類

102～122の土器片である。102は折り返えして肥厚した口縁部をもち、網目状撚糸文を施文する。103、104は櫛目文を縦位に施文する土器片である。103は体部片、104は平底の底部片である。105、106は櫛目文を横位に施文する口縁部片である。107は口唇部に突起をもち、口縁部には半載竹管文を横位に施文した後、上下を沈線で区画する。108は連続する指頭圧痕を口縁部にもつ土器片である。単節斜縄文（RL）を横回転施文する。109は横位に調整痕をもつ無文の口縁部片である。110は無節の縄文を縦回転施文する体部片である。111～117は羽状縄文を施文する口縁部片である。118、119は器裏面の口縁部が肥厚する口縁部片である。単節斜縄文（RL）を横回転施文する。120は体部が内彎し、口縁部は外反する鉢形土器片である。単節斜縄文（RL）を横回転施文する。121は沈線曲線文を施文した体部片である。122は長方形の区画文と小さな縦位の突起をもつ

## 第2類

39、123～138の土器片である。所謂瘤付土器に層する。123、124は口縁部片である。単節斜縄文を地文とし、沈線で区画し、貼瘤をもつ。125は壺か注口土器の体部片と思われる。縄文を地文とし、沈線で区画し、貼瘤をもつ。126、127は125と同一個体片である。128は壺か注口土器の体部片と思われる。縄文を地文とし、沈線で区画し、その沈線部分に貼瘤する。129は128と同一個体の口縁部片と思われる。130、131は壺と思われる土器片である。地文に単斜縄文、（LR）を縦回転施文する。130は口縁部で外反する。132は沈線で区画した部分に貼瘤する体部片である。133～135は貼瘤様の突起をもつ口縁部片である。134は口唇部突起と口縁部突起間に沈線を配す。136は磨消縄文である。137、138はこの類に属すると思われる口縁部片である。器形は鉢形土器と思われる。39は鉢形土器である。推定される口径は17.2cm・器高が15.5cm・底径は6cmである。口縁部には3山1対の突起を4組配する。口縁部には篋刻み目が突起部の器表面側を含め巡る。口縁部から体部中半までの文様帯は、篋による沈線で区画後、上下に1段ずつの縦位の篋刻み目を巡らす。間には篋刻み目による右下りの入組帯状文を巡らす。体部下半は無文である。

## 第V群土器

縄文時代晩期に属する。文様は羊歯状文、雲形文、工字文を各々主体とする。

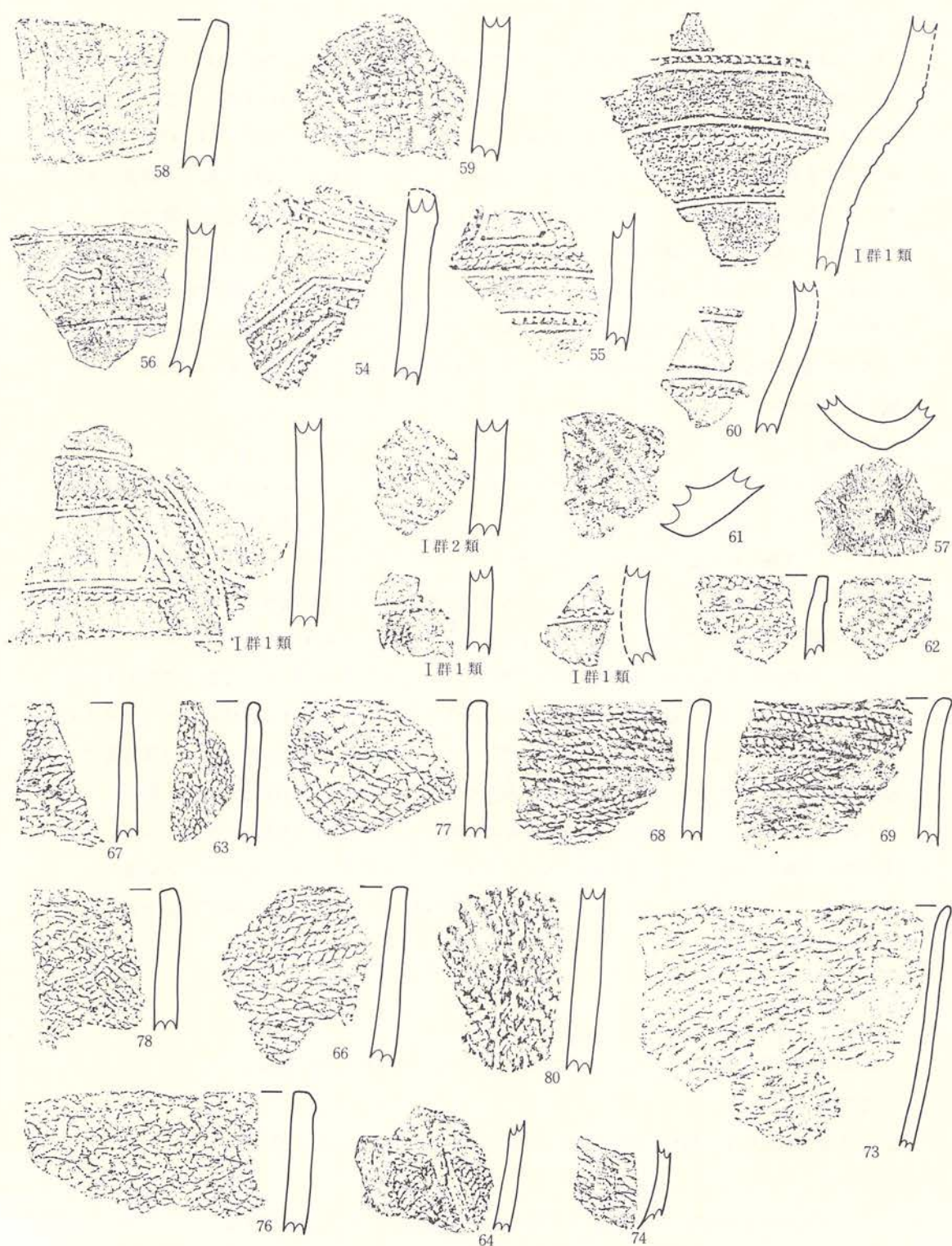
### 第1類

139、140は羊歯状文を施文する口縁部片である。139は深鉢形土器と思われる。

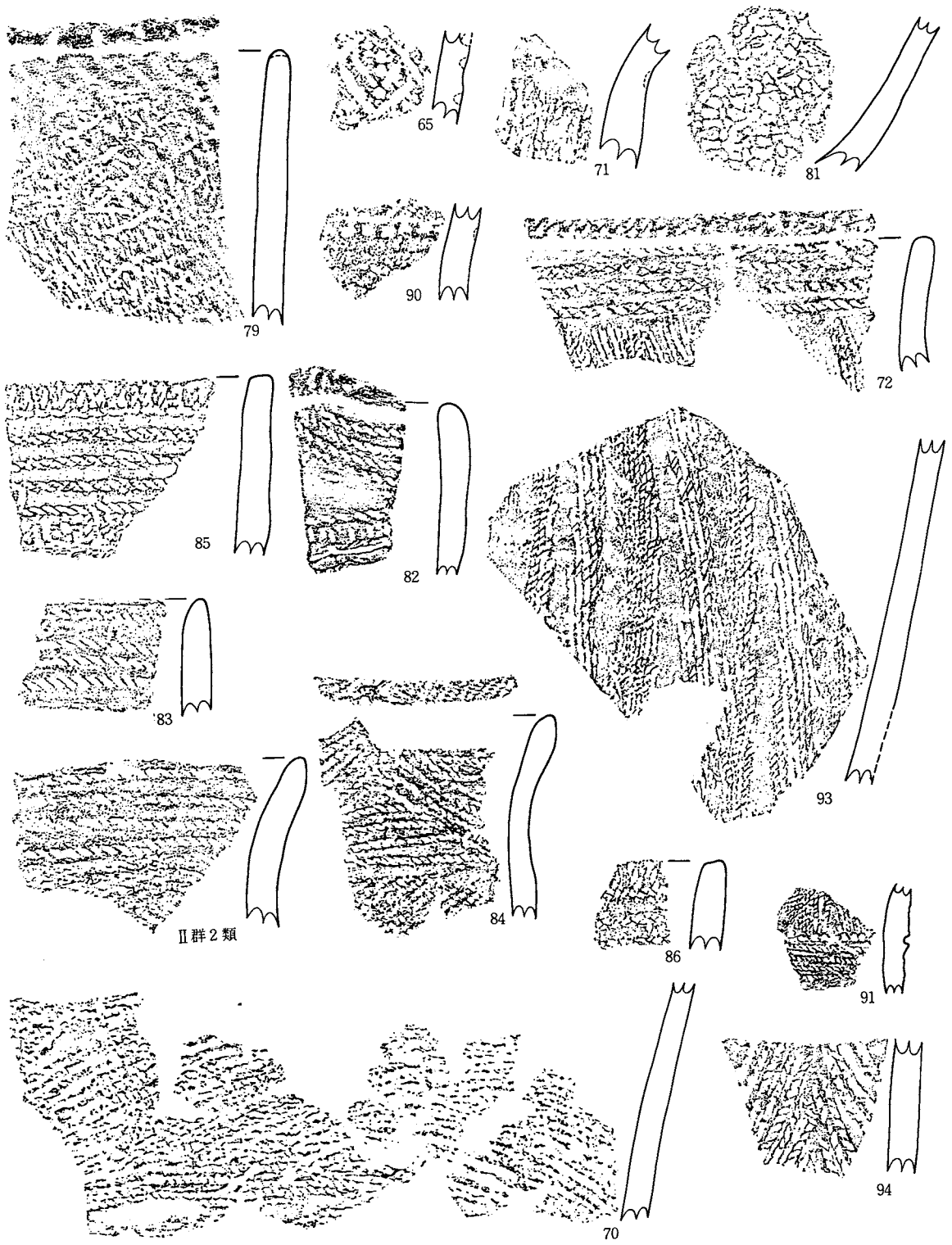
### 第2類

141、142は雲形文を施文する口縁部片である。40は完形の深鉢形土器である。口径が20cm、器高が21cm、底部が7cmある。口唇部に二山の突起を8村巡らす。口縁部及び体部には単節斜縄



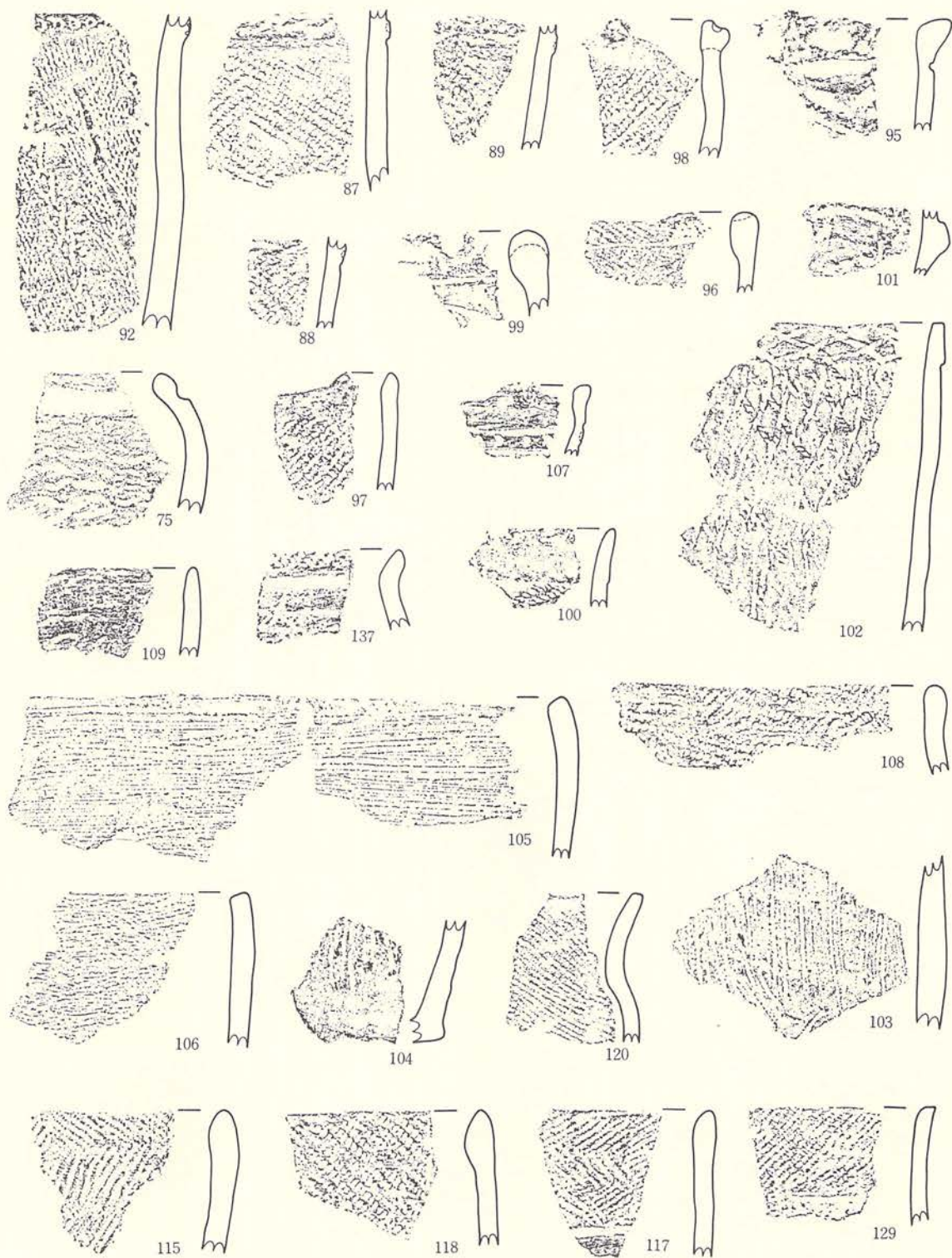


第43図 遺構以外の遺物(土器3)



第44図 遺構外の遺物(土器4)



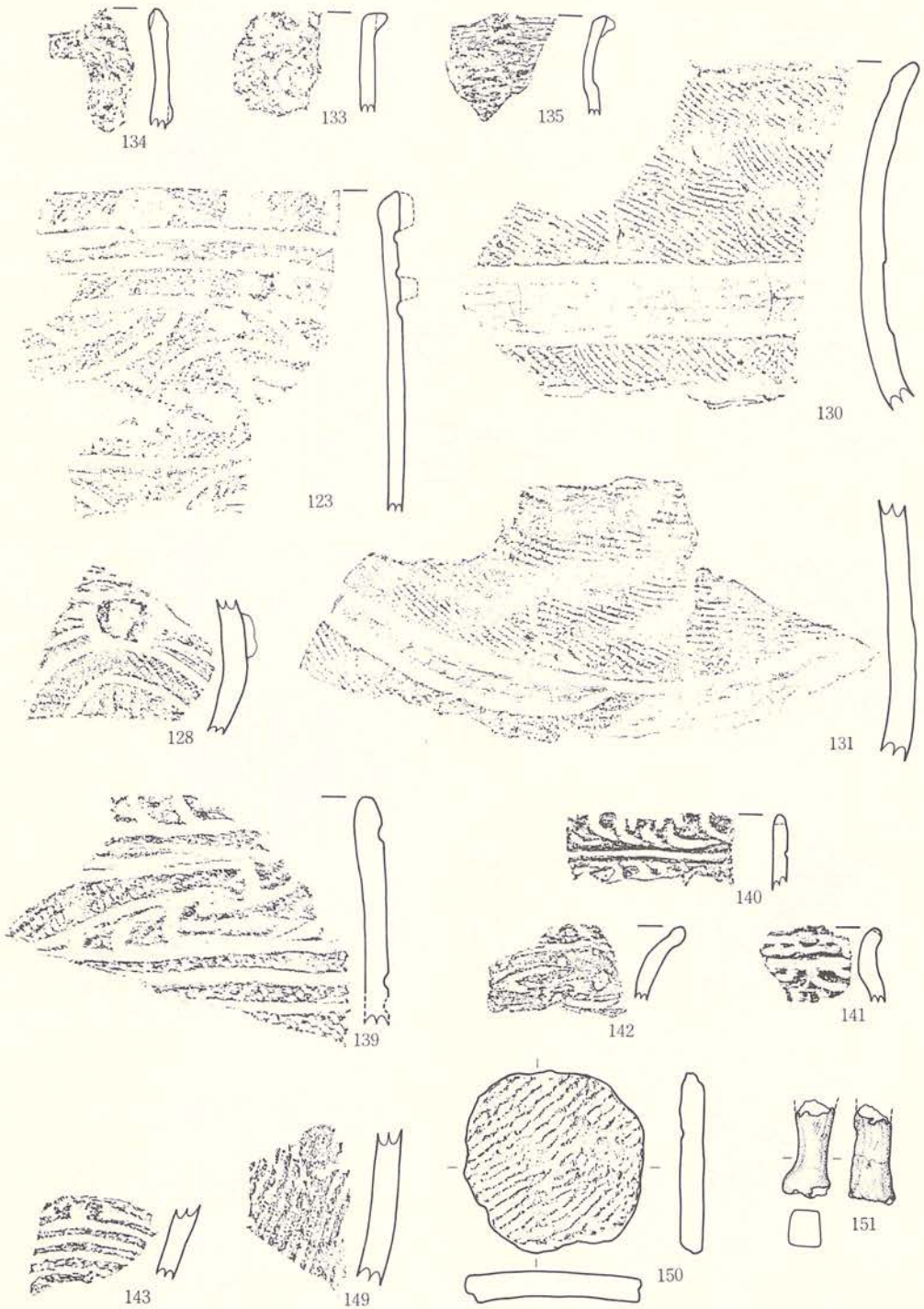


第45図 遺構以外の遺物(土器5)





第46図 遺構外の遺物(土器6)



第47図 遺構以外の遺物(土器、土製品7)

文（LR）を横回転施文する。

### 第3類

143は工字文を施文する口縁部片である。

### 第Ⅵ群土器

弥生時代に属する。3個体片の出土である。144～148は同一個体片で34点細片で出土した。口唇部分は出土していない。推定底部径は約8cmである。口縁部が若干外反する鉢形土器と思われる。文様は口縁部を除く器表面には撚糸文を、口縁部近くは沈線をそれぞれ施文する。144、145、146は口縁部近く、147は体部、148は底部である。149、50は当群に属すると思われる土器片である。149は撚糸文を施文する体部片である。50は底部片である。

### 第Ⅶ群土器

時期不明の土器片をあげる。43・44は注口部分である。45・46は高台片である。47～53はいずれも深鉢形土器の底部である。53は木目状撚糸文を施文する。41は台付浅鉢である。口径が10.8cm、器高が6.3cmある。単節斜縄文（LR）を横回転施文する。42は口径が4.2cm、器高が5.6cmの無文のコップ形土器である。



## (2) 土製品

150は単節斜縄文（LR）が施文された土器片利用の円盤状土製品である。151は土偶の脚部片である。

## (3) 石器

遺構以外から発見された石器は石鏃3点、石錐1点、搔器類21点、筧状石器1点、ピエス・エスキューユ2点、磨製石斧4点、磨石3点、凹石3点、棒状擦石10点、石皿3点、その他の石器3点の54点である。大多数のものは東区上段から発見され、縄文時代の遺構の周辺からの出土である。

### 石鏃

14～16が無茎式の石鏃である。14は基部の抉り込みが大きい凹基で、側縁が彎曲している。15・16はほとんど抉り込みの認められない平基で、両者とも表裏両面に主要剝離面を残している。比較的粗雑な造りである。石質は14が玻璃質流紋岩、16が珪質泥岩、15が凝灰質硬質泥岩である。

### 石錐

17はつまみが大きく、錐部の短い石錐である。錐部は両面から押圧剝離され、断面形は三角である。両面に主要剝離面を残している。石質は凝灰質珪質泥岩である。

### 搔器類

いわゆる搔器的なものと同切削器的なもの、また刃部加工は施されているが破損して器種不明なものを一括した。18は打瘤部につまみをもつ縦形の石匙である。側縁は曲線的で左側縁が大きく彎曲している。刃部は両側縁にあって肉厚な片面加工で、搔器的である。表面の一部に自然面を残している。

19・20は搔器的に刃部が厚く、鈍角をなす片面加工である。19は両側縁が直線的な刃部で、上端が自然面である。20は刃部が彎曲しており、ノッチドスクレパーであろう。

23～28は刃部が薄く、鋭角をなす片面加工、あるいは両面加工で、削器的である。刃部には直線的なもの（24の左側縁、27）も認められるがほとんど彎曲している。23は逆三日月形を呈し、25・26は柳葉形をなしている。27の刃部加工は不規則で、24の右側縁は両面加工である。

21・22は両面加工である。21は先端が尖っており錐として利用されたものかもしれない。22は周縁部が打撃加工によって調整されるが、上、下端部に打撃面を残している。器種は不明であるがここに入れておく。

29～33は剝片の一部を刃部加工したものである。29が左側縁、30、33が右側縁、31が刃部、

32は対辺と両側縁が刃部として利用されている。刃部加工は裏面から施されたものがほとんどであるが、29は裏面に向かって施されている。

34～38は折損している。34は石鏃の基部、36は打製石斧の刃部とも考えられるものである。石質は凝灰質硬質泥岩が7点、珪質泥岩、泥質凝灰岩が各5点、チャート、玻璃質流紋岩が各2点である。

#### 筥状石器

39は小型の筥状石器である。基部は小さく平坦で、側縁は直線的に末広がりとなる。刃部は直線的で先端部から押圧剥離され、側縁の加工は裏面加工が最後で両側から断面三角形に打撃剥離されている。石質は凝灰質珪質泥岩である。

#### ピエス・エスキューユ

40・41はピエス・エスキューユと考えられる。40は4面からなる小型な角柱で、上下両端が直線的に平坦となっている。41はやや大型の剥片で、上端に打撃痕をもち、下端には裏側のみ剥落して直線的である。石質は両者とも玻璃質流泥岩である。

#### その他の石器

42は3方向を折断して長方形に調整したもので、残された部分は鋭角な刃部となっている。石質は凝灰質硬質泥岩である。

43はトランシェ様石器に似ているが、基部は三角形状を呈し先端が尖っている。基部は破損したものではない。表裏両面とも左側面を打面とする剥離加工が加えられており、石核かもしれない。刃部に相当する部分は鋭利であり、微細剥離が認められる。側縁には着柄による摩耗痕等は確認できない。石質は粘板岩である。

44は舟底形石器に似ている石核である。周縁の剥離痕には規則性が認められず、舟底形石器ではないと考えられる。石質は輝緑凝灰質チャートである。

#### 磨製石斧

45～48は定角式磨製石斧である。45が刃部を、47が基部を欠損している。基部は46、48によると側縁が狭まって小さく、側縁は面をもち彎曲している。刃部は一部破損しているが、弧状に曲がる蛤刃である。

仕上げ痕跡はいずれも研磨仕上げとなっているが、45、48は基部近くに敲打成形痕を残している。45は擦切技法を用いて成作されたもので基部が若干傾いている。なお、45は折損後基部を叩き石として転用している。石質は珪質凝灰岩2点、凝灰質チャート、輝石玢岩各1である。

### 磨石・凹石

49～51が磨石、52～54が凹石である。磨石は扁平な川石を利用したもので、49が表裏両面、50が表面の一部、51が残存部全面が使用されている。85は表面が平坦で他は丸味をもっている。凹石は扁平な川石（53、52）と棒状の礫（90）を利用したもので、凹みは前者が中央部に1箇所、後者は複数の小さな凹みが形成されている。なお、86は表面が平滑となっており、磨石としても使用されたものである。

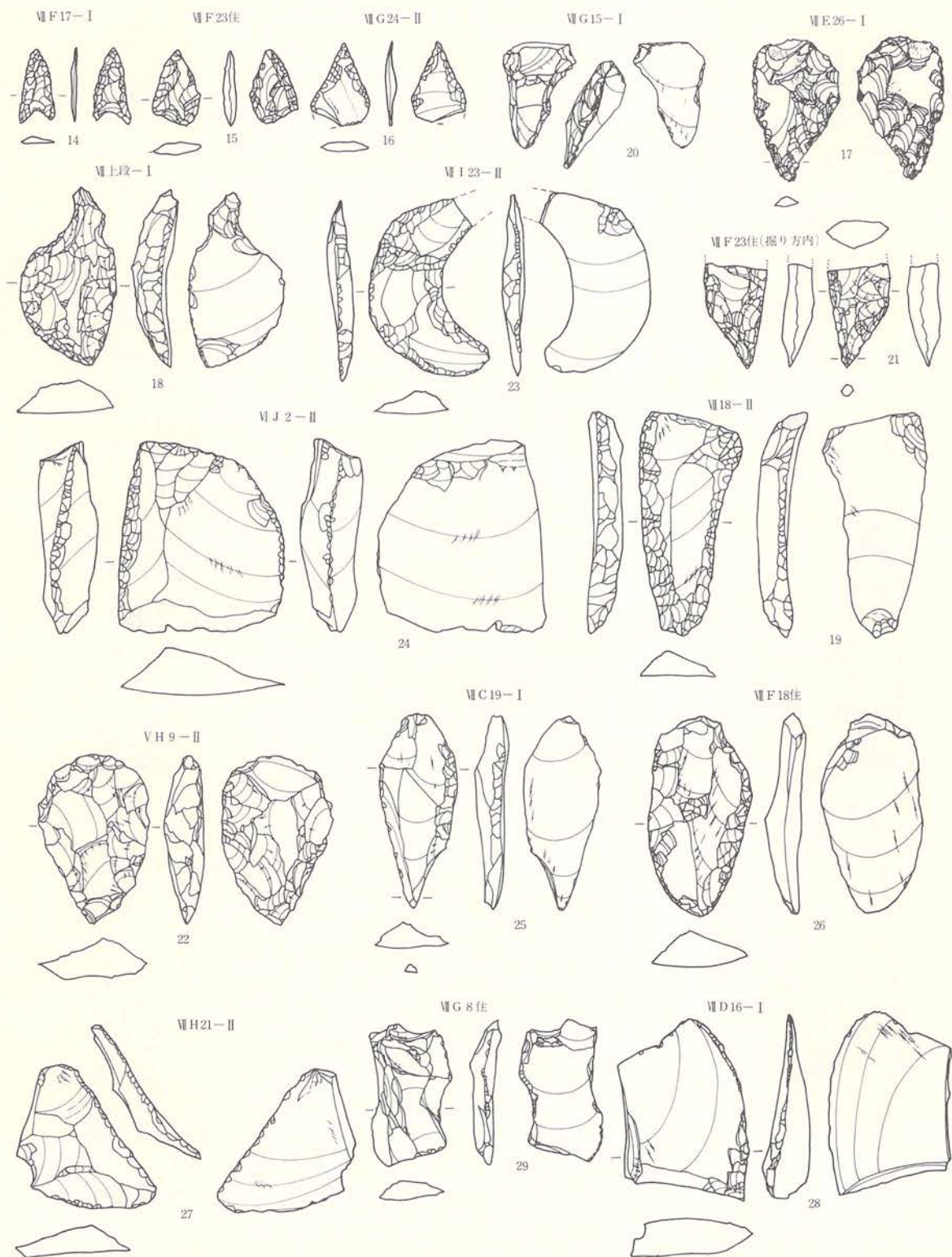
石質は磨石が輝石安山岩2点、両輝石安山岩、珪質細粒砂岩が各1点で、凹石は両者とも両輝石安山岩である。

### 棒状擦石

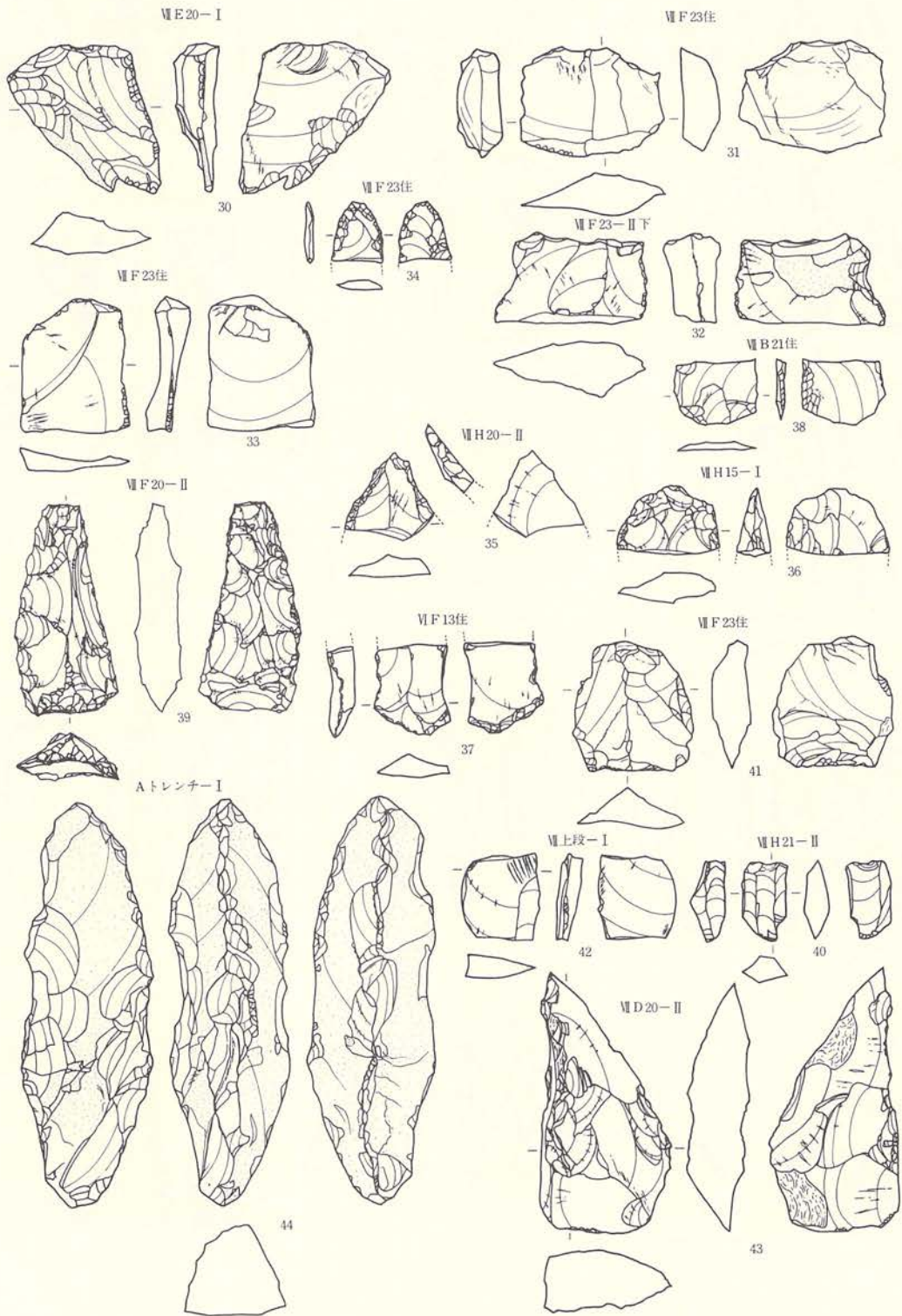
55～64が棒状擦石である。三角柱状の最も狭い部分を使用したもので、2辺を使用したものはない。使用面の幅は0.6～2.5cmで、幅の広い58・56・59・62では縦方向、横方向とも中央部が高くなっている。60・56・55・61は周縁部に敲打痕をもち、他は滑らかである。なお、55は表裏両面が凹石としても使用されている。

石質は輝石安山岩が7点、両輝石安山岩が3点である。



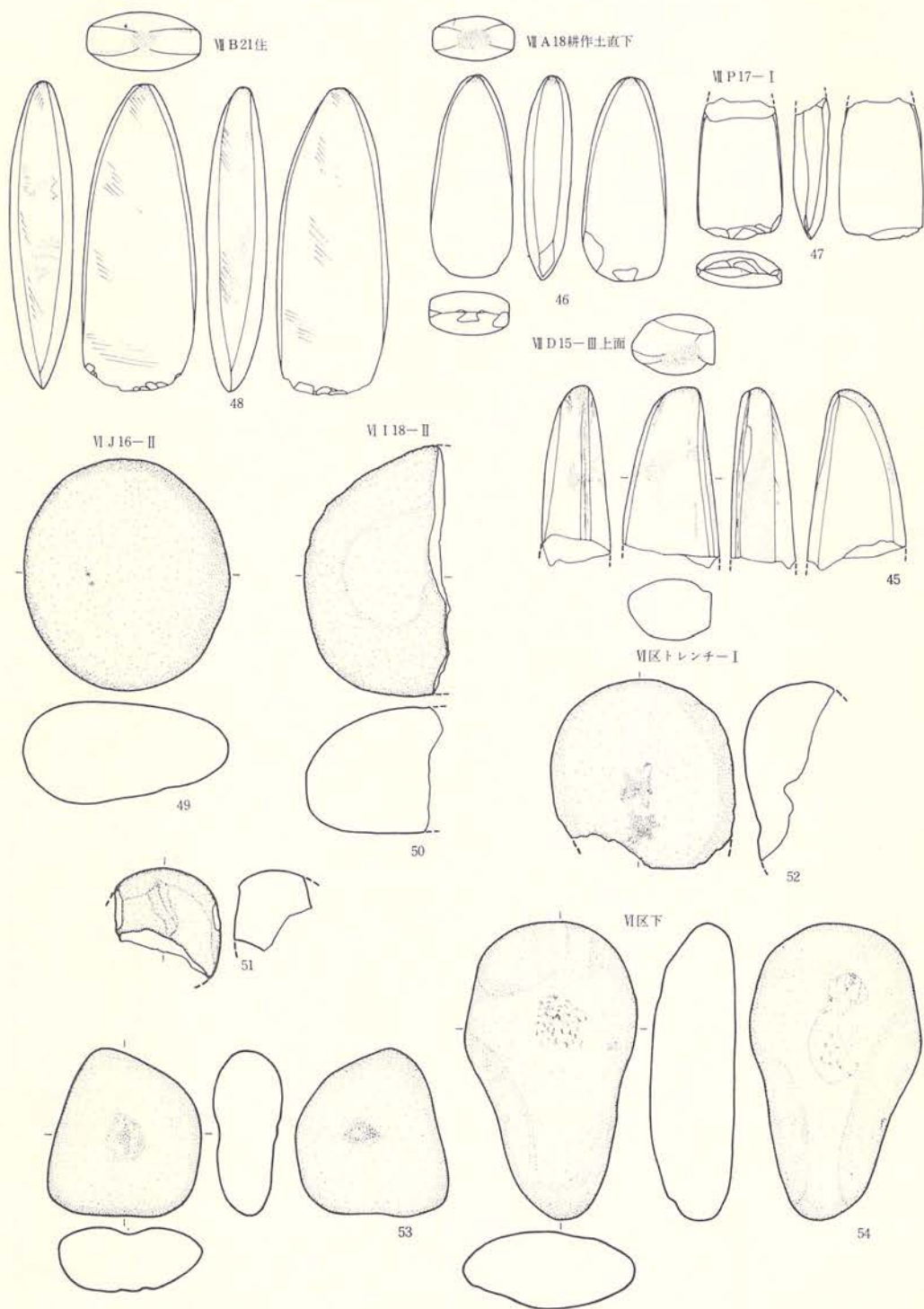


第48図 遺構以外の遺物(石器1)



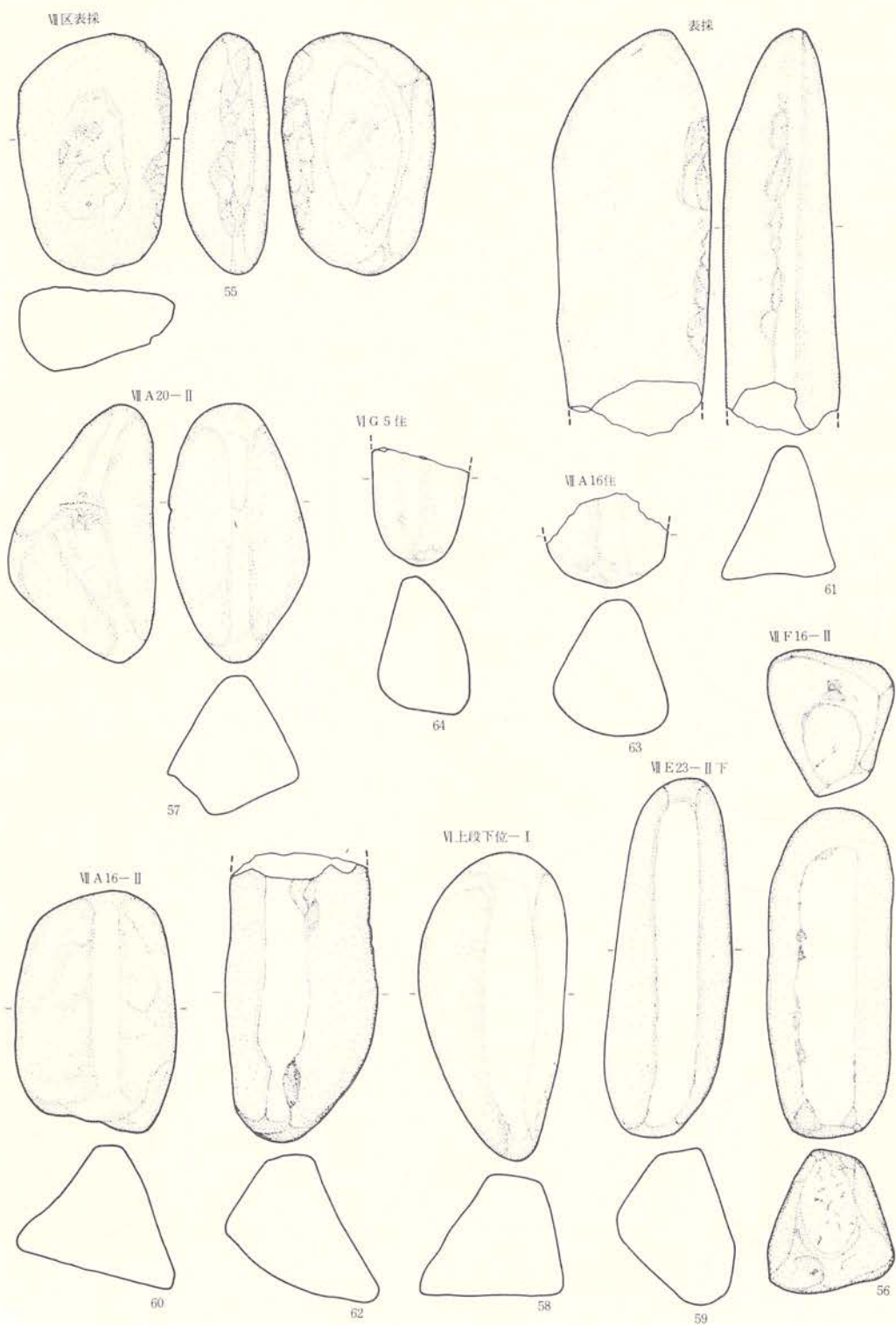
第49図 遺構以外の遺物(石器 2)





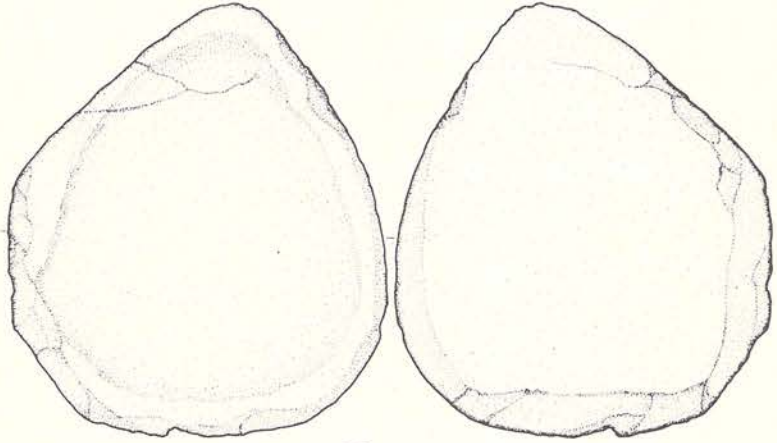
第50図 遺構以外の遺物(石器3)





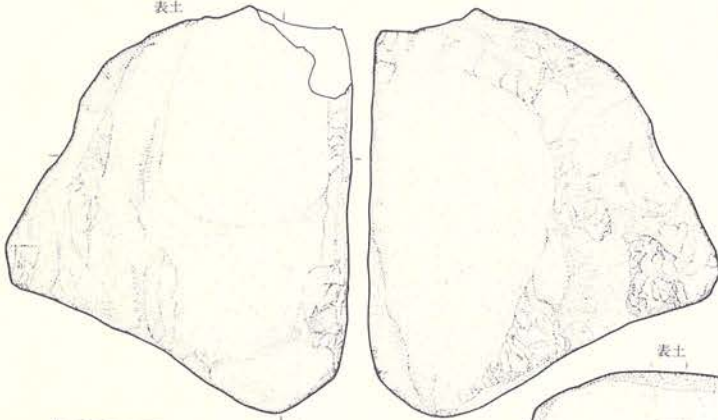
第51図 遺構以外の遺物(石器4)

VA7-II上

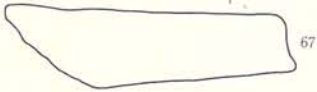


65

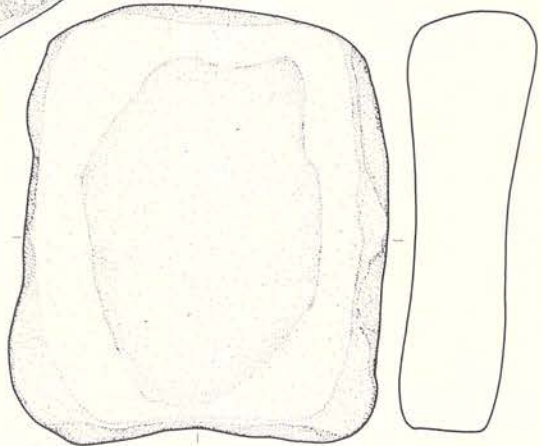
表土



表土



67



66

第52図 遺構以外の遺物(石器5)

## 石皿

65～67が石皿である。65は洋梨形に成形されたもので、周縁部には高さ1 cmほどの縁帯を造り出している。中央部が磨滅して僅かに凹んで滑らかになっている。66は扁平な長方形を呈するもので、中央部が僅かに凹んでいる。67は三角形に近い形をなす扁平なもので、上半部が使用されて磨滅している。

石質は2点が両輝石安山岩、1点が流紋岩である。



## V 古代の遺構と遺物

今回の調査で古代に位置づけられる遺構は竪穴住居跡15棟、焼土遺構12基、土壇16基である。なお、焼土遺構については既に削平されていたこともあって、時期不明なものも含まれている。大方のものが古代の遺構検出面から発見されており、それらをまとめて記述している。

遺物は土師器、須恵器、土製品、石製品、鉄製品、鉄滓、炭化材（柱、敷板、垂木など）、木製品、炭化穀類、堅果類などである。このうち掲載したものは土師器255点、須恵器33点、土製品1点（土鈴）、石製品11点（砥石10点、硯1点）、鉄製品7点（鉄鏃3点、刀子3点、鉄釘1点）、鉄滓2点、木製品2点（箸？1点、皿1点）、炭化穀類（粟、稗）、堅果類（胡桃、栃の実）である。

### 1. 竪穴住居跡

#### 1. IC4 穴住居跡

〈遺構〉（第53・54図、図版53）

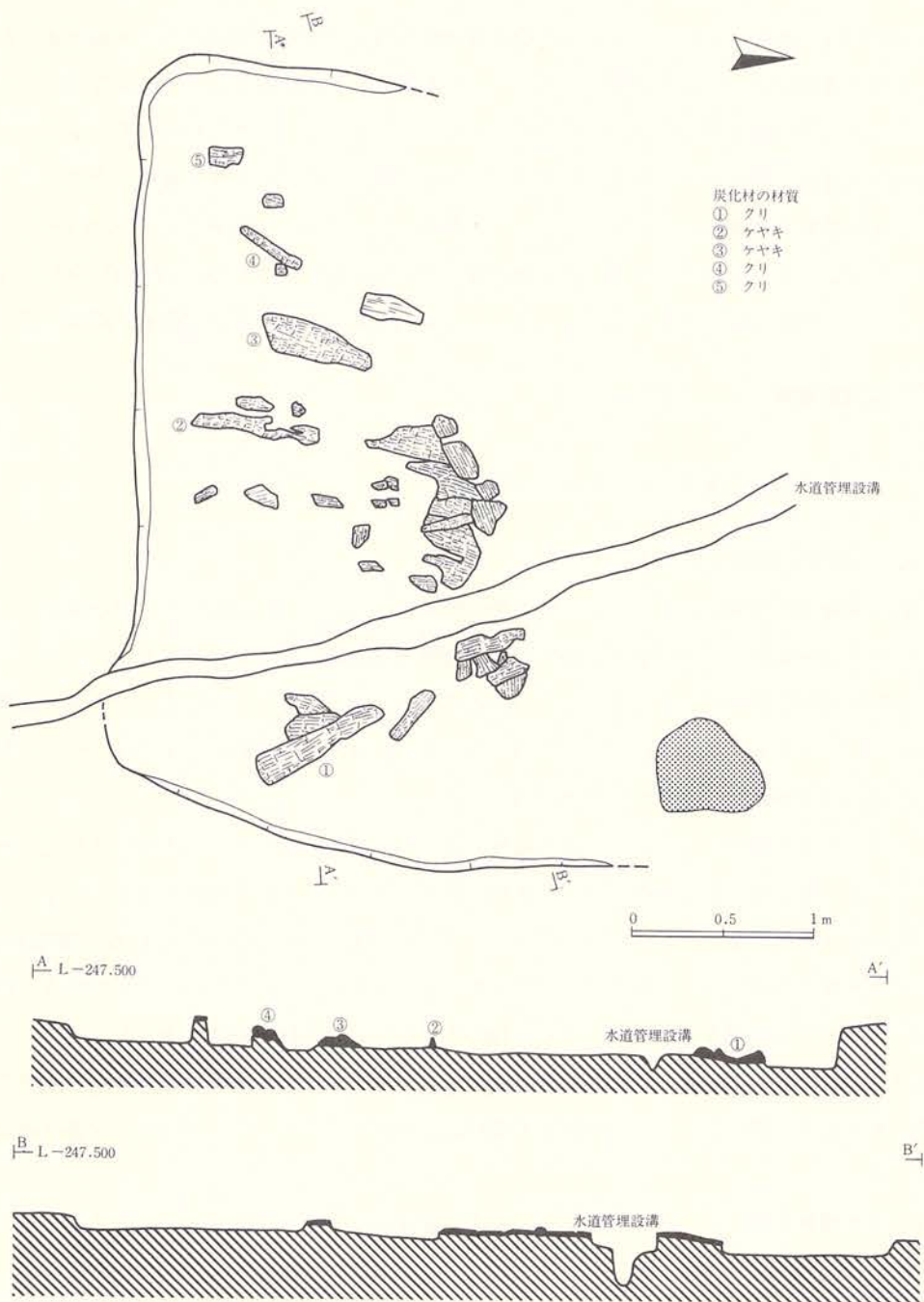
調査対象地の西端部に位置する。1棟単独の検出である。当住居跡は斜面下位が削平されており、また、南東隅から北壁中央にかけては水道管の埋設溝によって破壊されていた。

平面形は方形を基調とするようであるが、北半が削平されてはっきりしない。大きさは東西方向が南壁で3.8m、南北方向はカマドの一部とみられる焼土を含めると3.6mとなる。方向は等高線にほぼ平行し、南壁がN89°Eである。

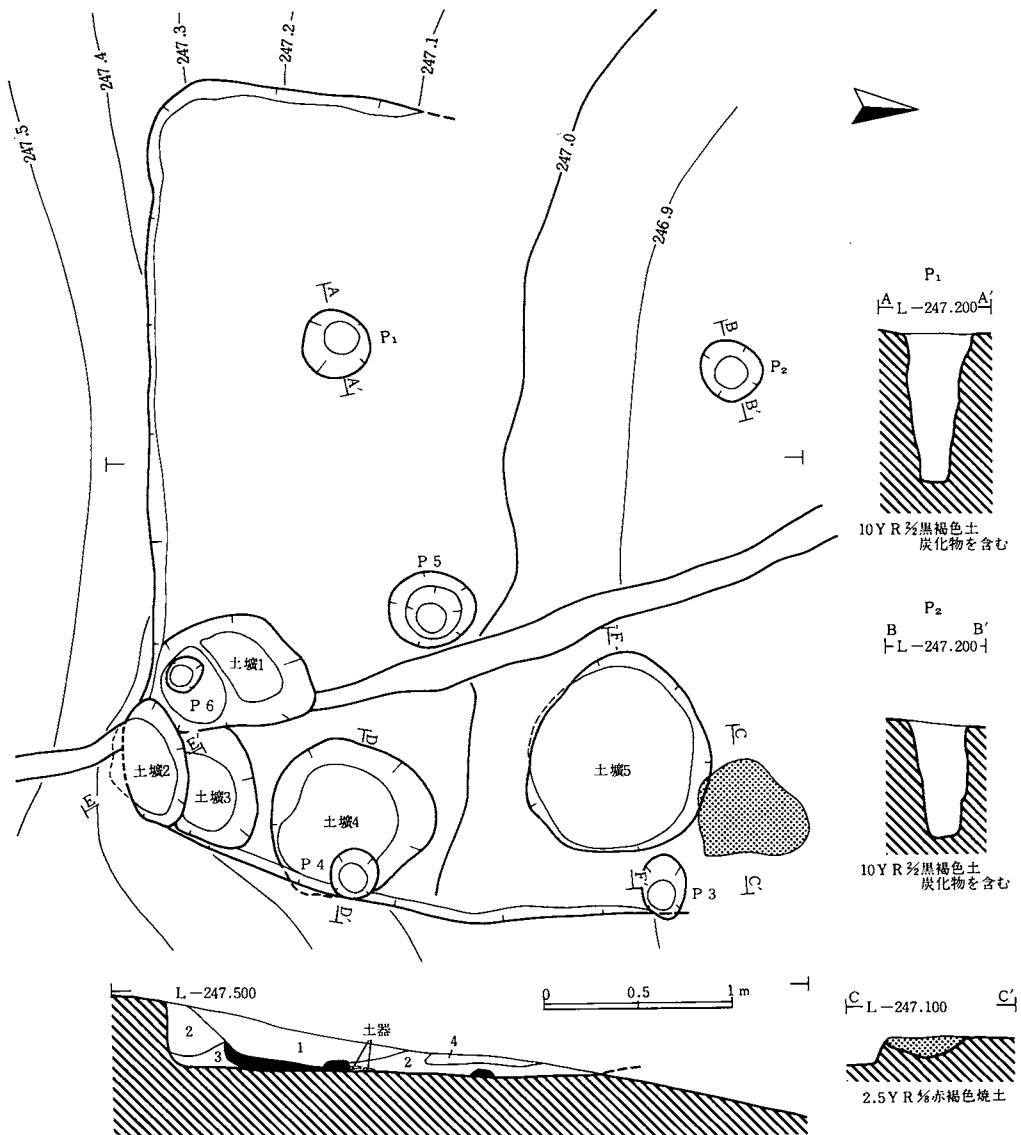
埋土はほとんど黒色土であるが、混入物等によって4層に細分できる。下位には炭化材が含まれている。炭化材の出土状況は削平をまぬがれた南半部によると方射状を呈している。炭化材の断面形は円形あるいは低い長方形をなし、丸太材あるいは板材と考えられる。樹種はクリとケヤキと鑑定されている。炭化材のあり方等から焼失住居跡とみられる。なお床面直上の板材（No.2）の方射性炭素年代測定によると1600±110BP、AD350年であった。

壁はほぼ直に立ち上がり、壁高は最大34cmである。南壁によると直線的であるが、東壁では中央が若干脹らんでいる。また、南西隅と南東隅が幾分脹らむ形となっている。床面はほぼ平坦である。

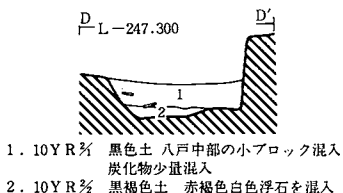
柱穴は6個検出されている。配置等からP1～P4の4柱穴が支柱穴とみられる。東側列が壁に接し、西側列は1.0m、1.2m内側に位置している。いずれも30cm前後の円形で、深さが68cm、80cmである。埋土も炭化物を含む黒褐色で、他の2柱穴とは異なる。P5、P6も柱穴状ピットであるが、P6は直径20cm、深さ35cmと小さいものである。



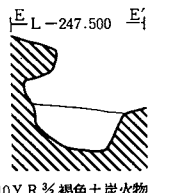
第53図 IC4 竪穴住居跡(1)



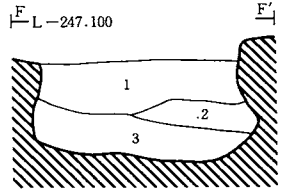
1. 10 Y R 黒色土 砂質火山灰(10 Y R 灰黄褐色)のブロックが混入する
2. 10 Y R 黒色土 炭化材が混入する
3. 10 Y R 黒色土 八戸上部の褐色土粗粒が混入する 赤褐色バミス 2~5mm が 1~2% 混入する
4. 7.5 Y R 褐色土 砂質火山灰が少量混入する



1. 10 Y R 黒色土 八戸中部の小ブロック混入 炭化物少量混入
2. 10 Y R 黒褐色土 赤褐色白色浮石を混入



- 10 Y R 褐色土炭化物 焼土ブロック混入



1. 10 Y R 黒色土 褐色土砂質火山灰(灰白色)の小ブロックが混入
2. 10 Y R 黒褐色土 赤褐色バミス(5mm) 3% 混入
3. 10 Y R 黒色土 灰白色砂質火山灰の小ブロック混入

第54図 I C 4 竪穴住居跡(2)



柱穴一覧表					
深さ	大きさ	埋土	深さ	大きさ	埋土
P 1	80cm	35×35 黒褐色土	P 4	68cm	27×25 黒褐色土
2	80	34×31 黒褐色土	5	65	45×40 黒褐色土
3	68	35×24	6	35	21×17

カマドは上半が削平されて判然としないが、北壁東端に位置する焼土がカマドの燃烧部と推定される。床面下10cmで検出されたものである。焼土は60×54cmの不整な円形をなし、厚さが10cmである。

土壙は大小6基検出された。土壙2は南東隅にあって、底部が壁外に張り出す袋状をなす。68×32cmの長円形で、深さは22cmである。埋土は炭化物、焼土を含む暗褐色土で、土器（4、9、11、12、13、15、18、19、20）を伴っている。土壙3も南東隅に位置する。南半が土壙2によって破壊されているが、70×45cmの長円形と推定される。深さが16cmで、埋土は黒褐色土の単層である。土壙1は土壙2、3の西に隣接している。90×58cmの不整な長円形で、深さは22cmである。底部に緩い段をもち、南が幾分下がっている。中から柱穴状ピット（P6）が検出されている。埋土は黒色土の単層で、土器（7、13、16）が含まれていた。

土壙4は土壙3の北に隣接し、しかも東壁に接している。直径80cmほどの円形で、深さが21cmの浅い皿状をなす。埋土は炭化物を含む黒色土、黒褐色土からなり、土器（2、5、9、10、13、14、15、18）が発見されている。東端部に柱穴（P4）が重複している。

土壙5はカマドとみられる焼土と、柱穴（P3）の前に位置している。1m前後の円筒形（下位が若干フラスコ状をなす）で、深さは69cmである。埋土は黒色土、黒褐色土からなり、上面は貼床状に堅くなっていた。内部から縄文土器数点が発見されており、あるいは縄文時代の土壙かもしれない。

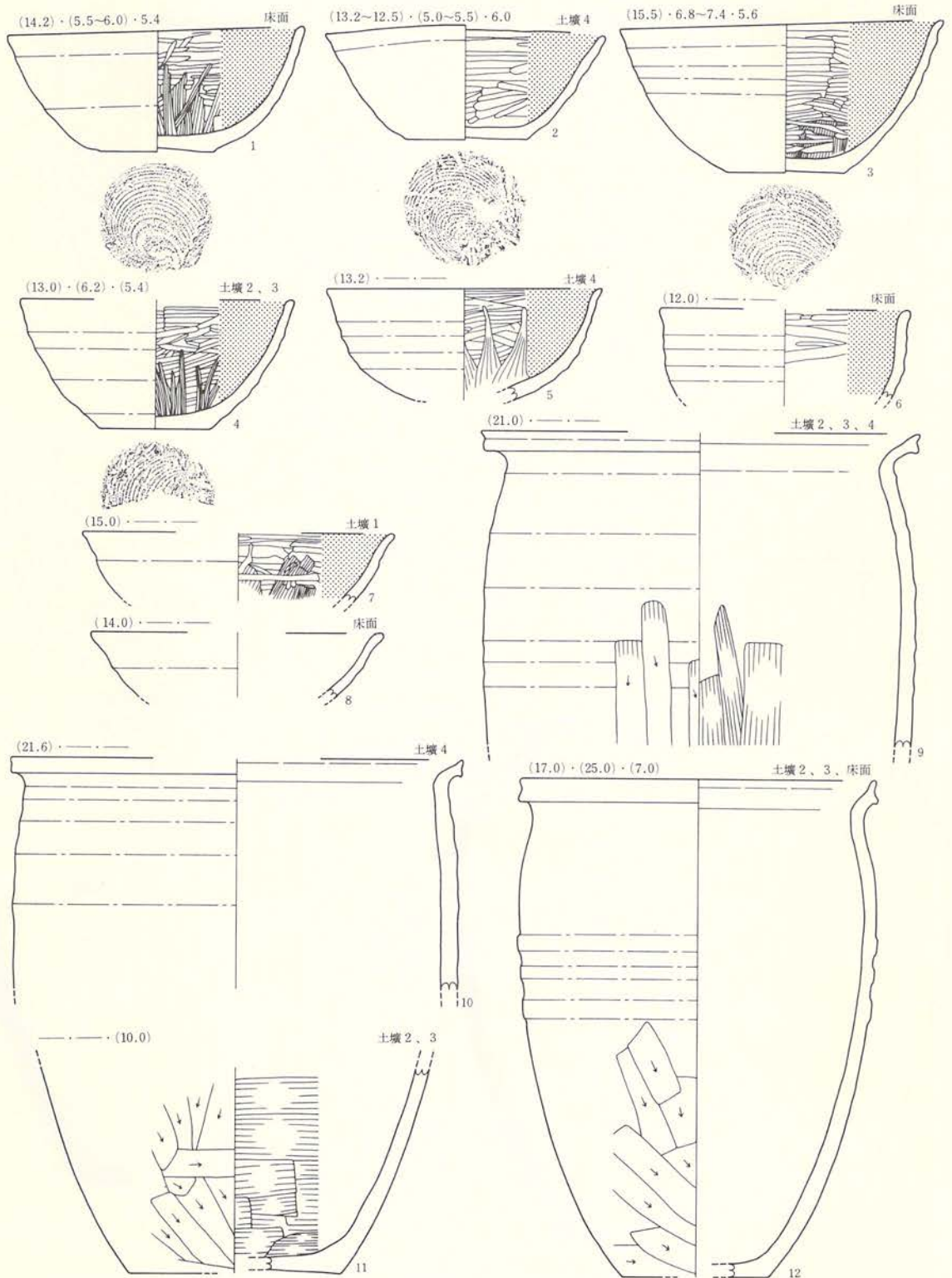
なお、接合資料によると土壙1、土壙2、土壙4の土器が床面土器と接合しており、開口していたものと思われる。

遺物は主に床面及び土壙1～4の埋土から発見されている。比較的南東隅の土壙周辺に集中していた。

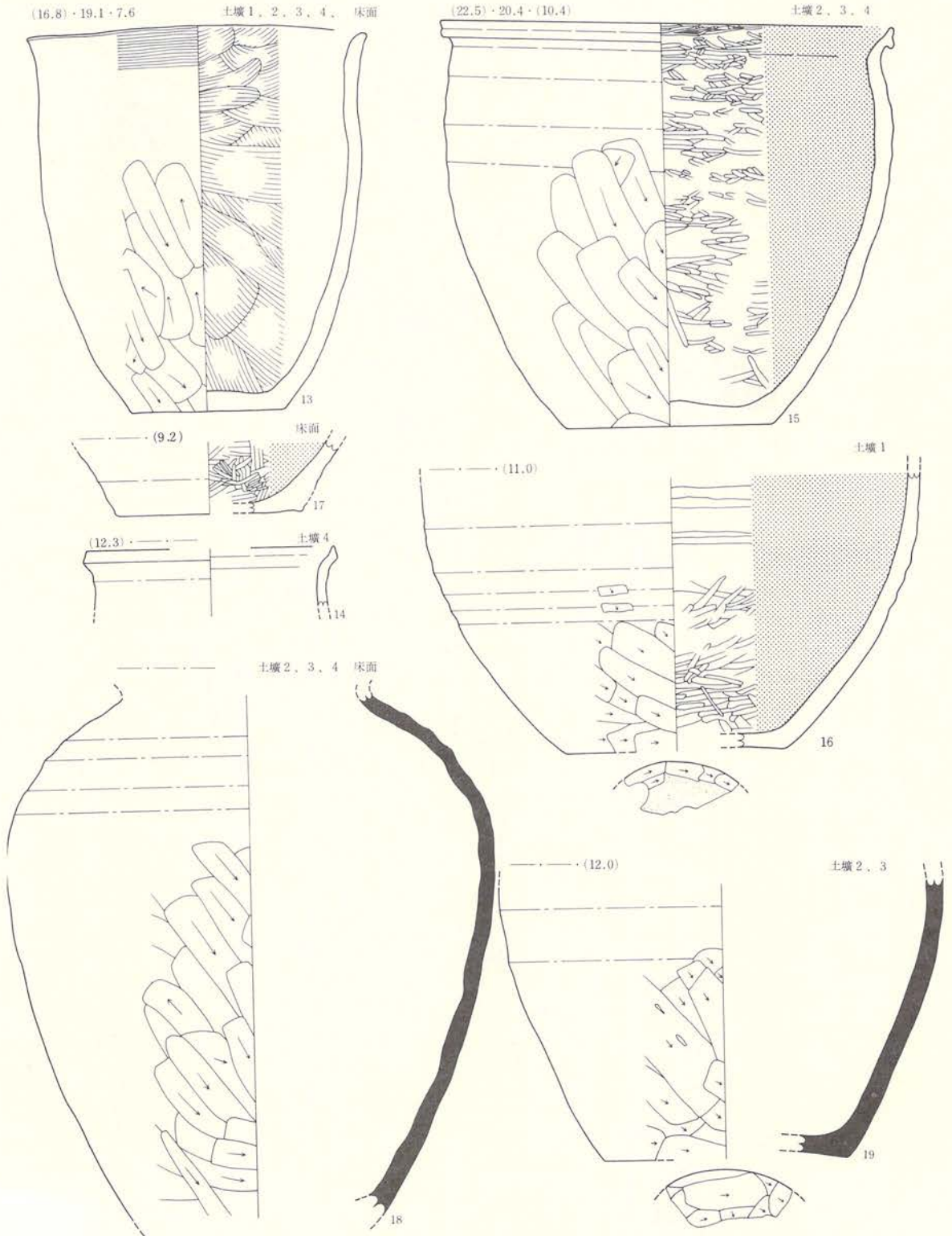
#### 〈遺物〉（第55～57図 図版75）

発見された遺物は土師器156点、須恵器21点である。土師器には坏（100点）、甕（48点）、鉢（8点）があり、須恵器は大甕（13点）、壺とみられるもの（8点）である。このうち掲載したものは土師器17点（1～17）、須恵器5点（18～2）である。須恵器の中の1点は転用碗である。

1～7は内面黒色処理された坏で、器形は底部から緩やかに立ち上がり、口縁部がそのままおさまる。ただし、6は口縁部が直立ぎみに立ち上がり、5～7の3例は口縁端部が外反ぎみである。1～3は幾分歪んでいるが、3は口径、器高、底径が15.5cm、6.8～7.4cm、5.6cm



第55図 I C 4 豎穴住居跡出土遺物(1)



第56圖 I C 4 豎穴住居跡出土遺物(2)



で大型に属する。色調は6が内外面とも黒色を呈し、2は暗赤褐色をなしている。また、二次火熱のため破片の色調の異なるものもある（1、3）。内面のヘラミガキ調整はほとんど上半部が横方向、内底部が方射状である。1、4、5の3点は方射状ミガキが最後に施され、口縁部近くに及んでいる。底部はいずれも回転糸切無調整である。5は体部下半にヘラケズリ調整が施されている。

8は黒色無処理の坏である。以上の他には内外両面に黒色処理の施された坏が含まれている。

9～14は甕である。9、10、12、14、はロクロ成形された甕で、口縁部が外反し、端部が上方に挽き出されて受口状をなす。外面は上半がロクロナデ、下半が縦方向及び斜め方向のヘラケズリ調整で、内面は9が縦方向のナデ調整である。なお、12はロクロ成形痕が顕著であり、9の外面調整はナデのような弱いケズリ調整である。底部はいずれも砂底である。13は非ロクロ成形された甕で、口縁部は緩く外反する。外面下半がヘラケズリ調整されている。以上の他には手づくねによる小型甕とみられる破片がある。

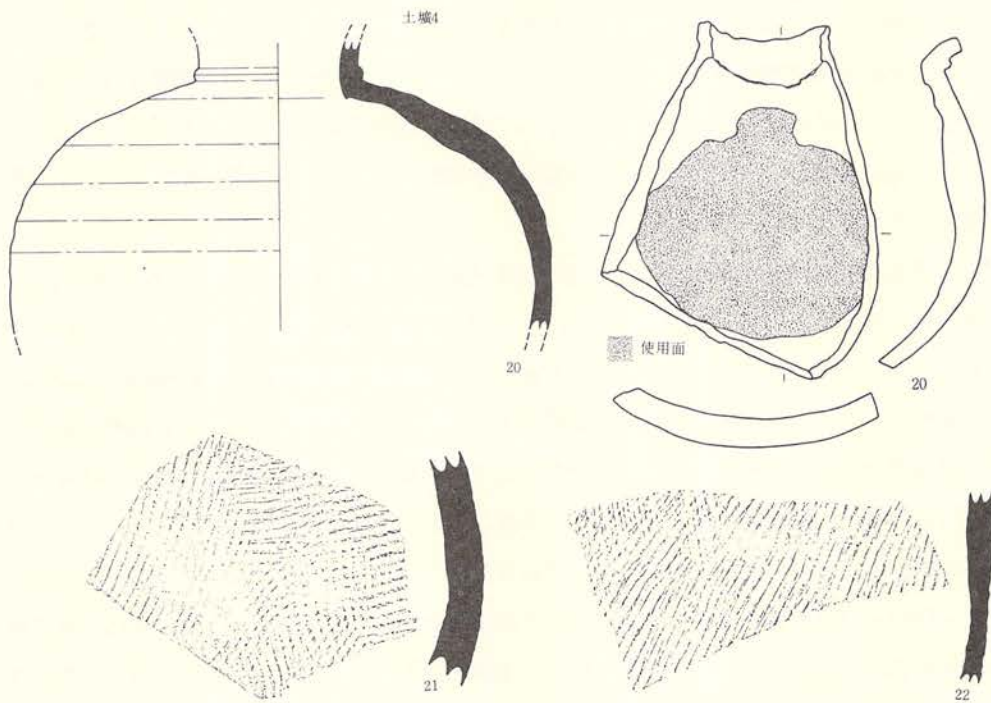
15～17はロクロ成形された鉢である。いずれも内面黒色処理されているが、15は二次火熱のため褐色となっている。口縁部が外反し、端部が上下両端に挽き出されている。外面下半が斜方向のヘラケズリで、内面は丁寧なミガキ調整がなされている。底部は15、16とも砂底である。なお、17は胎土の中ほどで膚分れ現象がみられ、底部の切り損じのためか、回転糸切後、粘土を加えて再成形している。以上の他には埴とみられる口縁部破片がある。ロクロ成形で口縁部が外反してそのままおさまる。

18、19は須恵器壺とみられるものである。18によると頸部と底部がほぼ等しく、体部の上部に最大径をもち、肩部がなで肩で、下半が直線的に小さくなる器形をなす。上半はロクロ成形で、下半が斜め方向のヘラケズリ調整である。底部もヘラケズリ調整されている。胎土には砂粒を多く含んでおり、器壁がザラザラしている。

20は長頸壺の肩部破片を利用した転用硯である。器形はなで肩で、頸部下端に環状の段が付いている。体部の最大部から下がロクロ回転を利用したヘラケズリ調整が施されている。胎土は僅かに砂粒を含むが木目が細かく、しっとりとしている。破片の大きさが13.5×11cmで、内面には9×9cmの研磨面が認められる。研磨面によると元来この大きさで硯として使用されたものようである。

21、22は大型甕の体部破片である。平行線上、あるいは斜格子状の叩き目痕をもつ。胎土は18、19と同様に砂粒を多く含んでいる。

注 ロクロを用いないで成形された土器を「非ロクロ成形」と呼ぶことにする。



第57図 I C 4 竪穴住居跡出土遺物(3)

## 2. IV G 4 竪穴住居跡

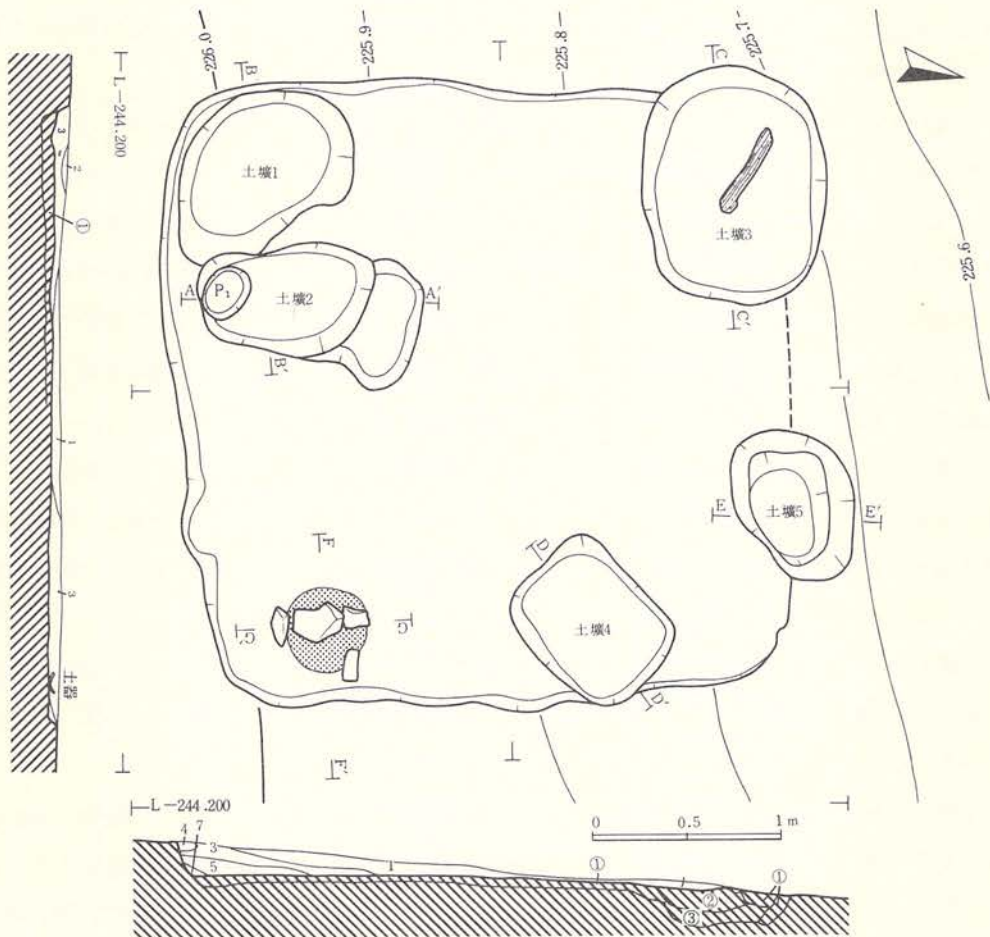
〈遺構〉(第58図、図版54)

中央区北部に位置する。平面形は東西方向3.15m、南北方向(北半は削平のため掘り方範囲による)3.2mの方角を基調とする。西壁による方向は $N7^{\circ}W$ である。

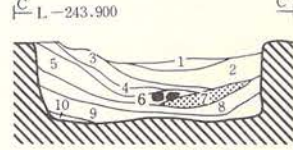
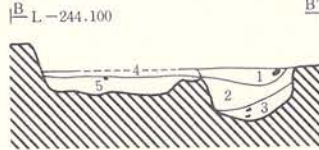
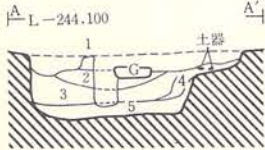
埋土は上位が苫小牧火山灰を含む灰黄褐色混土で、中・下位が黒褐色混土、暗褐色混土である。全体的に炭化物、焼土が混入している。壁はほぼ直に立ち上がり、壁高は22cmを最大とする。いずれも直線状をなすが、南壁の東壁寄りでは柱穴様の張り出しをもち、北西隅、北壁が大きく張り出している。なお、壁は焼土化した状態で検出されており、焼失住居と思われる。なお、苫小牧火山灰についてはX線分析によって確認されている(付編参照)。床は若干凹凸あるもののほぼ平坦で、カマドの前面が堅く踏みかためられている。床面は全面にわたって暗褐色ブロック混土によって貼床されている。

柱穴はP1を検出したのみである。南壁の北20cm、西壁の東80cmの位置にある。28×23cmの円形で、深さは57cmである。埋土は褐色砂質混土である。

カマドは東壁南端に位置する。上半が削平されてははっきりしないが、燃焼部とみられる焼土



- |                              |                            |
|------------------------------|----------------------------|
| 1. 10 Y R 5/6 灰黄褐色混土 B-Tmを含む | 6. 10 Y R 5/6 褐色混土         |
| 2. 10 Y R 5/6 褐色焼土炭化物混土      | 7. 10 Y R 5/6 にぶい黄褐色混土     |
| 3. 10 Y R 5/6 黒褐色混土          | ① 10 Y R 5/6 暗褐色ブロック混土     |
| 4. 明黄褐色ブロック                  | ② 10 Y R 5/6 褐色焼土混土、炭化物を含む |
| 5. 10 Y R 5/6 暗褐色混土          | ③ 10 Y R 5/6 黒褐色混土         |



- |                                 |
|---------------------------------|
| 1. 10 Y R 5/6 暗褐色混土 やわらかい炭化物を含む |
| 2. 10 Y R 5/6 暗褐色混土 焼土を含む       |
| 3. 10 Y R 5/6 黒褐色混土 灰白色火山灰を含む   |
| 4. 5 Y R 5/6 明赤褐色焼土混土 50%       |
| 5. 10 Y R 5/6 明黄褐色土             |

- |  |
|--|
| 1. 10 Y R 5/6 暗褐色混土 やわらかい炭化物を含む          |
| 2. 7.5 Y R 5/6 暗褐色混土 炭化物、焼土粒を含む          |
| 3. 7.5 Y R 5/6 極暗褐色混土 灰白色火山灰を含む          |
| 4. 10 Y R 5/6 暗褐色焼土混土 炭化物を含む             |
| 5. 10 Y R 5/6 褐色混土 ブロック状混土(30%)灰白色火山灰を含む |

- |                             |
|-----------------------------|
| 1. 2.5 Y R 5/6 にぶい黄色火山灰     |
| 2. 10 Y R 5/6 黒色土 灰白色火山灰を含む |
| 3. 7.5 Y R 5/6 暗褐色混土        |
| 4. 10 Y R 5/6 黒褐色混土         |
| 5. 10 Y R 5/6 黄褐色混土         |
| 6. 10 Y R 5/6 黒褐色混土 炭化材を含む  |
| 7. 7.5 Y R 5/6 明褐色焼土        |
| 8. 10 Y R 5/6 黒褐色混土         |
| 9. 10 Y R 5/6 明黄褐色混土 50-80% |
| 10. 5 Y R 5/6 赤褐色浮石         |

④ 10 Y R 5/6 暗褐色混土焼土 炭化物を含む

第58図 IV G 4 竪穴住居跡



と芯材に使用されたと考えられる礫が散在している。燃焼部は壁の内側10cmにあって、遺存する芯材（礫）によると幅30cmほどのようである。焼土は直径45cmほどの円形で、厚さが20cmである。堅く焼きしまっている。焼土の下には掘り込みをもっている。なお、煙道部は削平されて存在の有無を含めて不明である。

土壌は大小5基検出されている。土壌1は南西隅に接するもので、コーナーに添って「L」字状に折れている。東西、南北とも90cmで、深さが14cmの浅い皿状をなす。埋土は暗褐色焼土混土（炭化物を含む）、褐色ブロック状混土で、人為的に埋め戻されている。土壌2はその東に接し、1.2×0.6mの長方形をなす。北端が浅く、深さ10cmほどで底部が90×60cmの土壌となる。長軸方向が南壁に対して直角となっている。深さは33cmで、底面は平坦である。埋土は暗褐色混土、黒褐色混土、明赤褐色焼土混土、明黄褐色土等からなる。なお、当土壌は土壌1の一部を破壊して構築されており、また、南端部には柱穴（P1）が重複している。

土壌3は北西隅に位置し、西壁及び北壁が20cm張り出している。1.25×1.0mの長方形で、深さが42cmである。底部は平坦で、壁が直に立ち上がっている。埋土はにぶい黄色火山灰、暗褐色混土、黒褐色混土など10層に細分できる。中には炭化材や焼土が投げ込まれている。炭化材は直径5cm、長さ50cmの丸太材である。材はケヤキと鑑定されている。

土壌4は東壁に接している。平面形は80×55cmの長方形で、深さは23cmである。長軸方向は東壁に対し50度西に傾いている。埋土は焼土、炭化物を含む暗褐色混土の単層である。底には凹凸があり、あるいは掘り方の一部かもしれない。

土壌5は北壁のやや東寄りに位置している。北半が壁外に張り出している。平面形は80×65cmの不整な長円形で、深さが35cmで、断面形が楕円状をなす。埋土は褐色～暗褐色混土で、焼土、炭化物を含み、上面は明黄褐色土によって貼床されている。上位から土器（27、36、42、43）が発見されている。

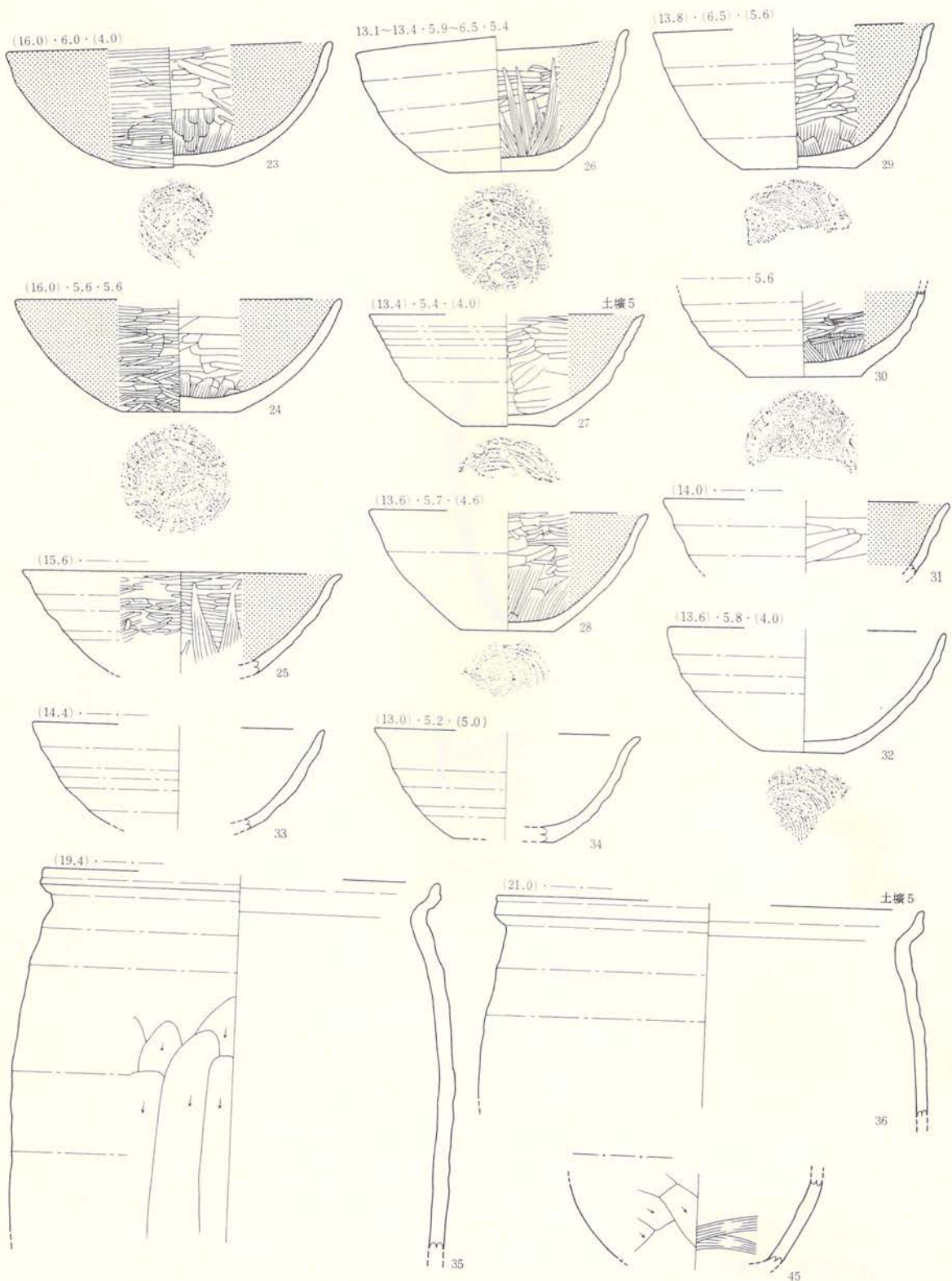
遺物は北半が削平されていることもあって、南半に多くみられる。特にカマド周辺と土壌2、土壌5の周辺に集中している。

#### 〈遺物〉（第59・60図、図版76）

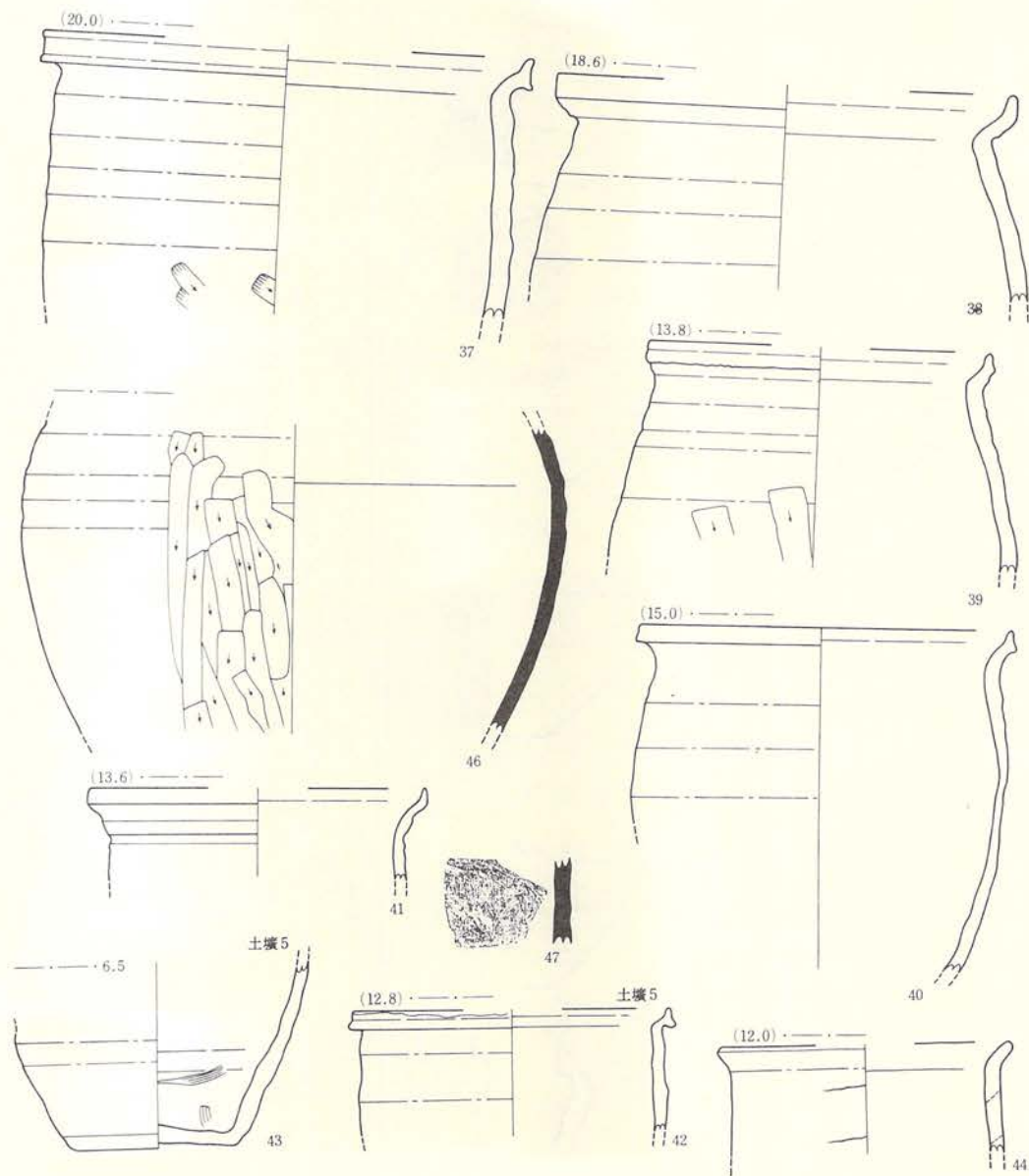
発見された遺物は土師器107点、須恵器2点である。土師器には坏（33点）、甕（74点）があり、須恵器には壺（2点）がある。このうち掲載したものは土師器23点（23～45）、須恵器2点（46、47）である。

23、24は内外両面とも黒色処理された坏で、器形は底部から内彎しながら立ち上がり、口縁部がそのまま納まる。内外面とも丁寧にヘラミガキ調整されている。底部は23が回転糸切後、周縁部がミガキ調整され、直径4.0cmと極めて小さい。24は回転ヘラ切である。

25～31の7点は内面黒色処理された坏である。口縁端部がいずれも外反し、幾分尖りぎみで



第59圖 IV G 4 豎穴住居跡出土遺物 (1)



第60図 IV G 4 竪穴住居跡出土遺物(2)

ある。内面のヘラミガキ調整は上半が横方向、内底部が方射状を基調とする。25、26は方射状ミガキ調整が口縁部近くまで達している。また25は外面にも丁寧なヘラミガキ調整が施されている。底部はいずれも回転糸切無調整で、ベタ高台に近いものが含まれている(27、28、30)。26の周縁部は摩滅している。色調は灰白色～褐色～暗褐色などで、二次火熱のため破片によっ



て色調の異なるものがある(26)。

32~34は黒色無処理の坏である。口縁部形態には外反するもの(34)と、そのまま納まるもの(32、33)とがある。底部は回転糸切無調整である。

以上の他には赤褐色を呈するが、内外面ともヘラミガキ調整された坏や、同様に褐色を呈する内面ヘラミガキ調整された坏がある。

35~45は甕である。35~43の9点はロクロ成形された甕で、器形は口縁部が外反し、端部が上方に挽き出されて受口状をなす。37、42はさらに下方へも挽き出されて角ばっている。38はやや肉厚で、口唇部に丸味をもっている。反対に41、42は肉薄で、後者は灰白色を呈している。外面は上半がロクロ成形で、下半が縦方向のヘラケズリ調整である。なお、43は中型甕とみられるが、体部下端までロクロ成形されている。40の外面には一部炭化物が付着している。この土器には二次焼成のため色調の異なる部分もあり、全く炭化物の認められない部分もある。

44、45は非ロクロ成形された甕である。44によると口縁部は短く外折してそのまま納まる器形をなし、外面の輪積痕が顕著である。45は底部近くの破片で、外面が斜め方向の粗いヘラケズリ調整である。

46は須恵器壺とみられる肩部から体部破片である。体部の最大部から下半が縦方向のヘラケズリ調整されている。器壁が5mmと薄く、胎土には砂粒を僅かに含み、器表面では鉄の吹き出しが観察できる。色調は青灰色で、焼成は良好で堅緻である。47は内外面とも無文で、色調は淡い青灰色で、胎土に砂粒を少量含んでいる。

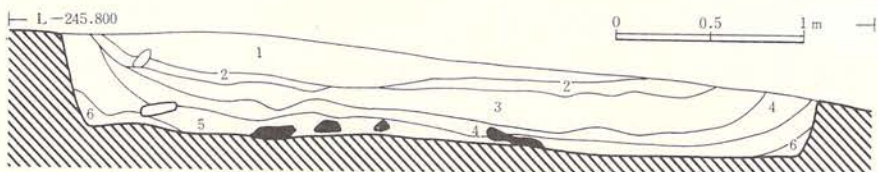
### 3. IV G 7 竪穴住居跡

〈遺構〉(第61・62図、図版55・56)

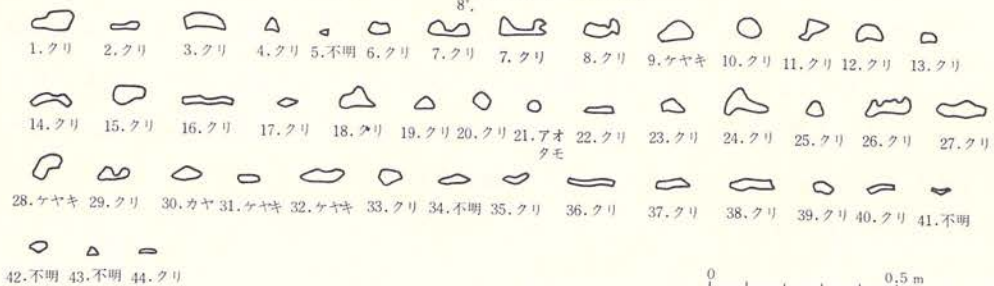
中央区の北部に位置する。IV G 4 竪穴住居跡の南6mにあたる。平面形はほぼ方形で、大きさは南北が3.7m、東西は南壁が3.65m、北壁が3.95mで若干北壁が長くなっている。方向は西壁がN14°W、東壁がN9°Wである。

埋土は黒色土(上層)、明黄褐色砂質土(中層)、黒褐色混土(下層)に大別され、混入物などによってさらに6層に細分できる。いずれも自然堆積で、中層は洪水などによって流入堆積したものと考えられる。埋土下位には十和田a降下火山灰がブロック状に含まれている。また、炭化材、焼土を大量に含んでいる。焼失住居と推定される。なお、十和田a降下火山灰については蛍光X線分析によって確認されている(付編参照)。

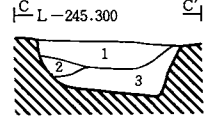
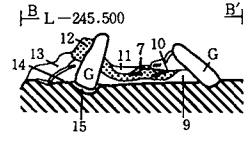
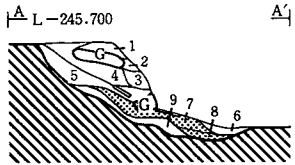
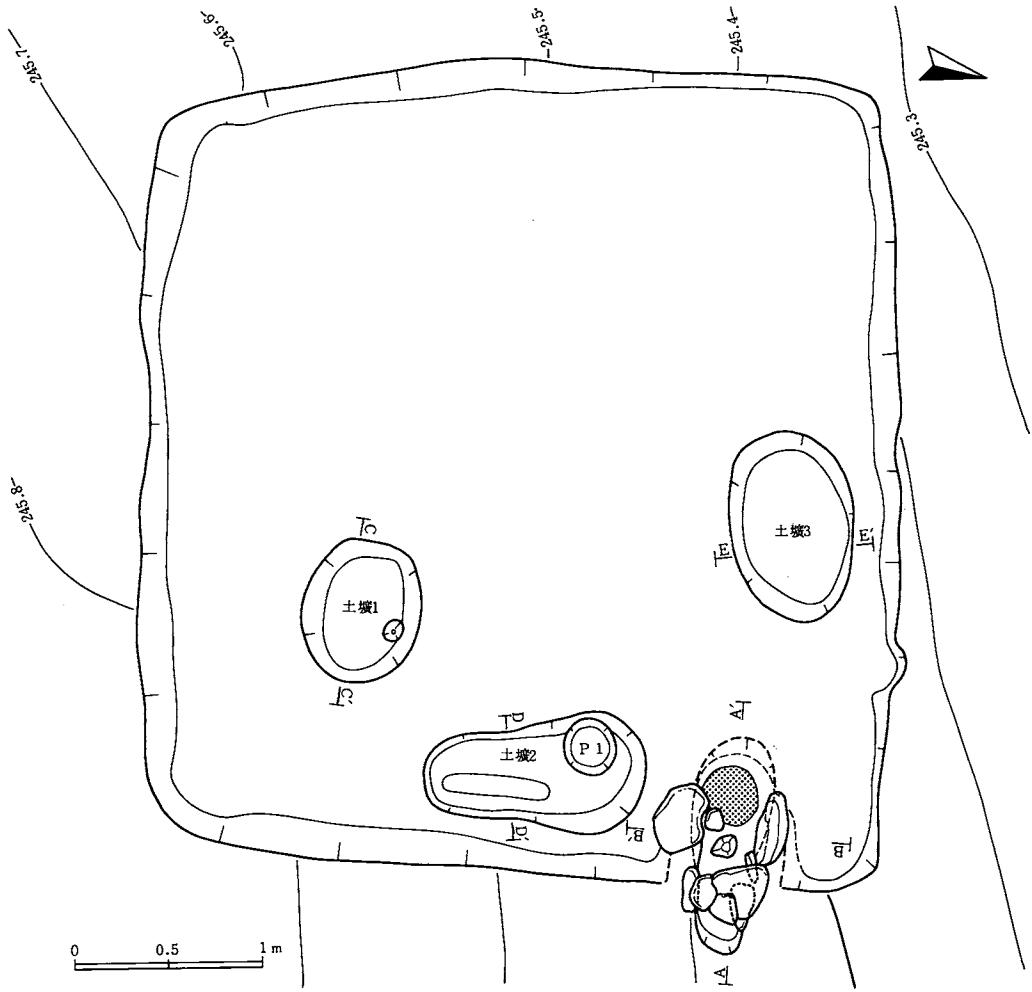
炭化材は全体的に方射状を呈している。断面形は円形あるいは薄い長方形で、丸太材、板材とみられるものである。材は44点のうち、クリが33点、ケヤキが4点、アオタモ1点、カヤ1点、不明5点と鑑定された。なお、床面直上の丸太材(No.27)の方射性炭素年代測定の結果は



- 1. 10 YR% 黒色土
- 2. 10 YR% に近い黄褐色土
- 3. 10 YR% 明黄褐色砂質土
- 4. 10 YR% 黒褐色混土 炭化物焼土を含む B-Tmをブロック状に含む
- 5. 7.5 YR% 黒褐色焼土混土 炭化物を含む B-Tmをブロック状に含む
- 6. 7.5 YR% 暗褐色混土

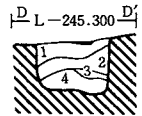


第61図 IV G 7 竪穴住居跡(1)

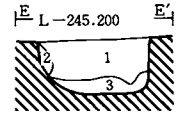


- 1. 10 YR 2/4 にふい黄橙色粘土 暗褐色混土
- 2. 10 YR 2/4 暗褐色混土
- 3. 2.5 YR 2/4 にふい黄色粘土混土
- 4. 10 YR 2/4 にふい黄褐色混土 機土炭化物白色粘土混土
- 5. 7.5 YR 2/4 黒褐色混土 炭化物を含む
- 6. 7.5 YR 2/4 褐色焼土混土
- 7. 7.5 YR 2/4 橙色焼土混土
- 8. 5 YR 2/4 明赤褐色焼土
- 9. 7.5 YR 2/4 暗褐色焼土混土
- 10. 10 YR 2/4 暗褐色焼土混土
- 11. 2.5 YR 2/4 灰黄色粘土ブロック
- 12. 5 YR 2/4 明赤褐色焼土
- 13. 7.5 YR 2/4 褐色焼土混土
- 14. 7.5 YR 2/4 褐色焼土混土 粘土を含む
- 15. 10 YR 2/4 暗褐色混土

- 1. 10 YR 2/4 暗褐色混土60%
  - 2. 10 YR 2/4 褐色混土 80%
  - 3. 10 YR 2/4 黒褐色混土40%
- 全体に堅く 締っている



- 1. 10 YR 2/4 褐色混土80%
- 2. 10 YR 2/4 黒褐色混土20%
- 3. 10 YR 2/4 明黄褐色混土90%
- 4. 10 YR 2/4 褐色混土80%



- 1. 5 YR 2/4 暗赤褐色焼土混土40%
- 2. 10 YR 2/4 褐色混土
- 3. 10 YR 2/4 暗褐色混土

第62図 NG 7 竖穴住居跡 (2)



1600±180BP、AD350年であった。

壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり、壁高が48cmと幾分高くなっている。各壁はいずれも直線的であるが、北壁の東壁よりではIVG4 竪穴住居跡と同様の柱穴様の張り出しをもつ。中から土器(58)が発見されている。床面は若干凹凸あるもののほぼ平坦である。

柱穴はP1を検出したのみである。カマドの南側で、東壁の西40cmの位置である。直径30cmほどの円形で、深さは36cmである。土壌2の底面からの深さは8cmである。埋土は暗褐色混土で、土器58、72が混入していた。

カマドは東壁北端に位置する。天井石の一部が崩落して周辺に散在しているが、ほぼ原形を保っている。側壁及び天井石に礫を多用するものである。総延長が1.1mで、壁外部分が35cmである。燃烧部は壁の内側50cmにあって若干凹んでいる。焼土は直径30cmの円形で、厚さ8cmが堅く焼けている。側壁は礫とシルトからなり、礫が内傾している。幅は50cmである。中央には支脚として礫が置かれている。天井石は煙道部の1個が原位置を保っている。煙道は急激に立ち上がるもので、そのまま納まる。煙道の両側には燃烧部と同様に礫が使用されている。カマド内を含めて周辺から多量の土器が発見されている。

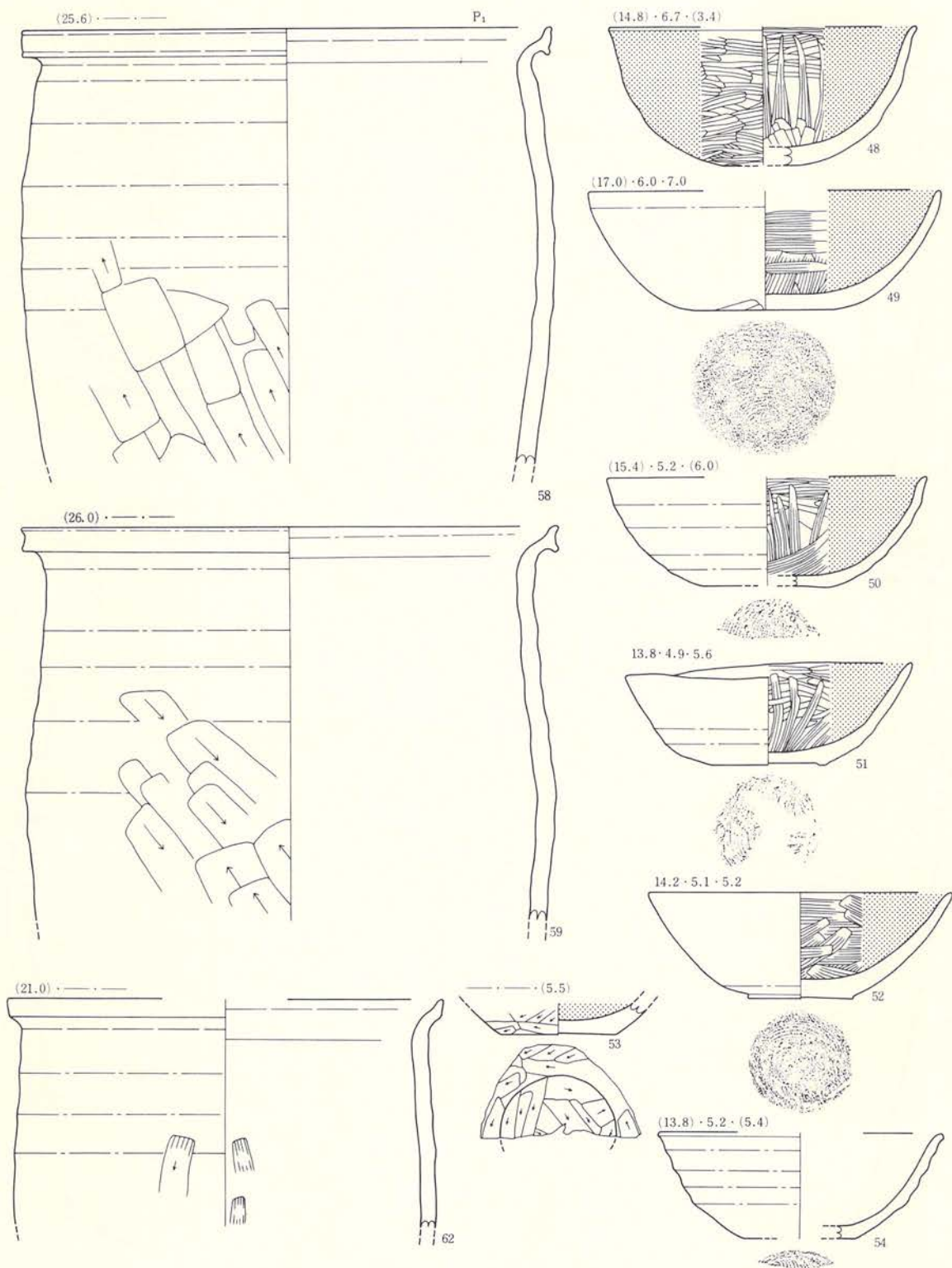
土壌は3基検出されている。土壌1は南壁、東壁の内側65cm、75cmで、住居跡の南東部に位置する。平面形は75×53cmの長円形で、深さが28cmである。埋土は暗褐色混土、褐色混土、黒褐色混土である。全体的に堅く締っており、人為的に埋め戻されたと考えられる。なお、土壌の北側に小ピットを伴っている。土壌2はカマドの南で、東壁に平行する。南北1.5m、東西64cmの北側が大きい長円形で、深さは30cmである。埋土は褐色、黒褐色、明黄褐色混土など4層からなり、上面に南北58cm、東西12cmの炭化物が層をなしていた。また、土壌北西部に柱穴が重複している。上面から土器(61)が発見されている。

土壌3はカマドの西80cmで、北壁の南15cmである。平面形は100×65cmの長円形で、長軸方向が北壁に平行している。深さは30cmで、埋土は暗褐色焼土混土、褐色混土、暗褐色混土からなる。この中では焼土混土が主体をなしており、埋め戻されたときみられる。土器(57、61、72)が出土している。

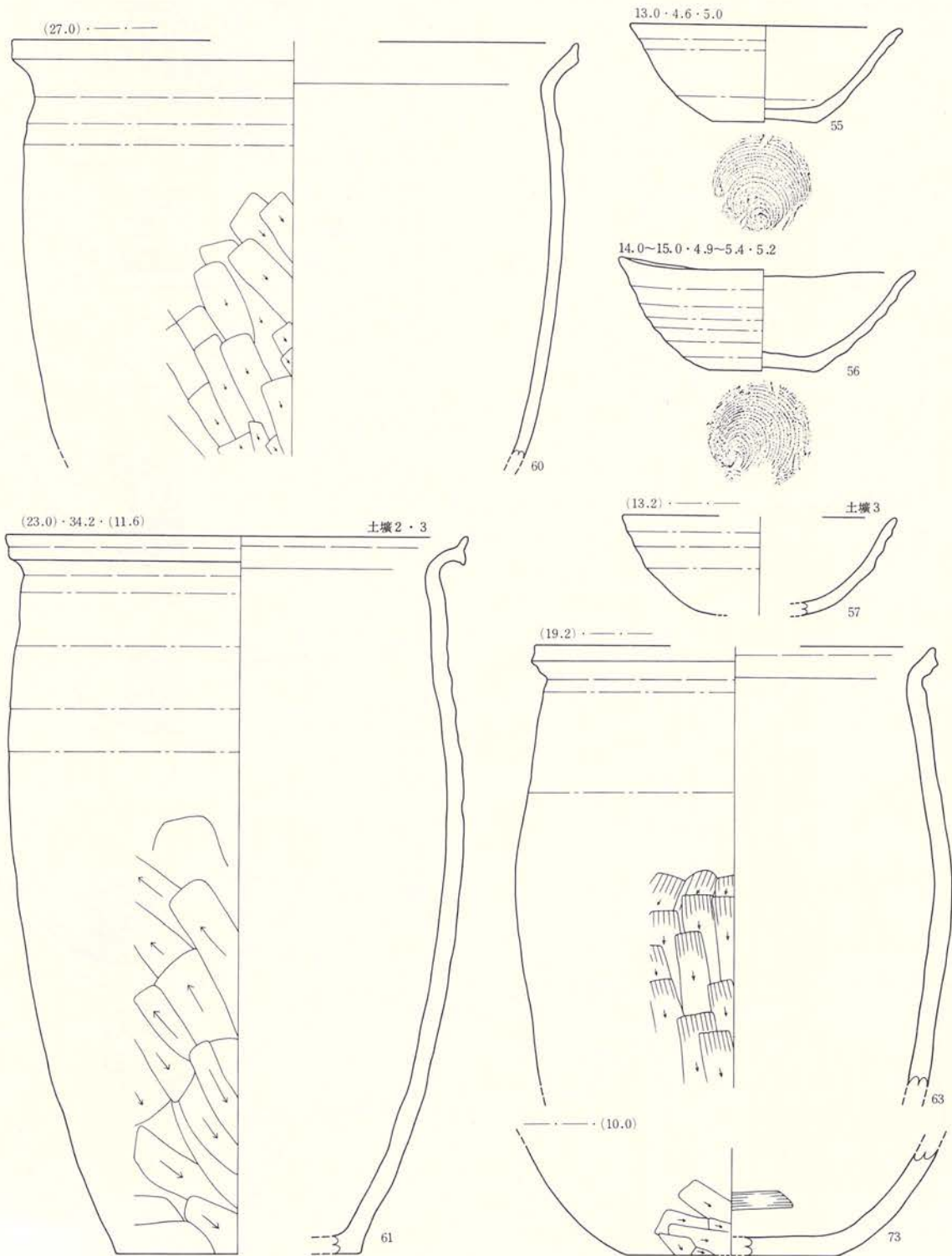
遺物は主にカマド周辺と土壌3の周辺から発見されている。器種別にみると、北壁側に坏が点在し、カマド周辺では甕が密集している。

〈遺物〉(第63～66図 図版77・101)

発見された遺物は土師器98点、須恵器6点、それに鉄鏃1点、硯1点、炭化穀類である。土師器には坏(26点)、甕(70点)、鉢(1点)があり、須恵器には大甕(4点)、壺(2点)がある。このうち掲載したものは土師器27点(48～74)、須恵器3点(75～77)、鉄鏃(78)、硯(79)である。

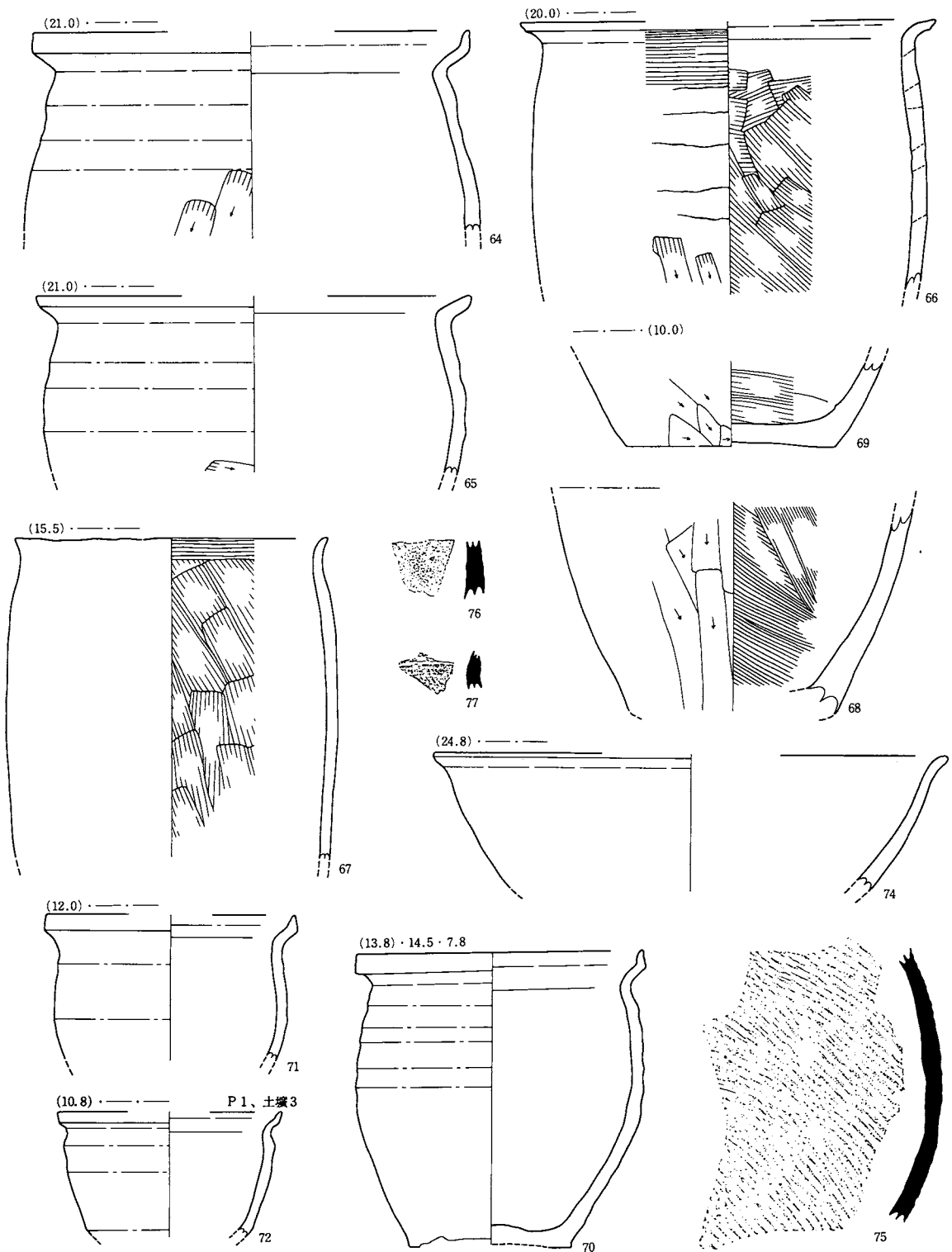


第63图 IV G 7 竖穴住居跡出土遺物(1)



第64圖 IV G 7 豎穴住居跡出土遺物(2)





第65圖 IV G 7 豎穴住居跡出土遺物 (3)

48は内外両面とも黒色処理された坏である。全体的に見込みが深く、碗に近い形をなす。器形は底部から内彎しながら立ち上がり、口縁端部が僅かに外反する。内外面とも丁寧なヘラミガキ調整され、内面の方射状ミガキ調整が口縁部近くまで及んでいる。底は一部しか遺存していないが、直径4cmほどと小さい。器壁は底部から徐々に薄くなって口縁端部に至る。

49～53は内面黒色処理された坏である。口縁部がそのまま納まるもの(49、51、52)と、口縁端部が外反するもの(50)とがある。内面のヘラミガキ調整は上半が横方向、内底部が方射状を基調とする。50、51は方射状ミガキ調整が口縁部付近まで及び、52は斜方向のミガキ調整である。底部の切り離しは50～52が回転糸切無調整で、49～53が回転糸切後ヘラケズリ調整されている。なお、49は器高の割に口径、底径がともに大きく、他のものと趣を異にし、51の内面には底部と体部との間に調整による段が付いている。また、52の底部は付高台のように僅かに高まりをもち、53の内面は二次火熱のためか褐色となっている。

54～57は黒色無処理の坏である。いずれも若干歪んでおり、口縁部は端部が外反ぎみである。器壁はロクロ成形痕が顕著で、底部は回転糸切無調整である。

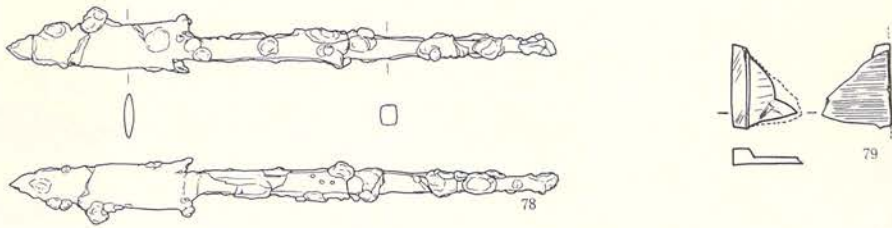
58～72は甕である。58～66、70～72がロクロ成形された甕で、58～66が大型甕である。このうち58～60は推定口径が25.6～27cmで特に大きい。70～72は中型、小型甕である。口縁部形態には外反して端部が上下両方に挽き出されたもの(58、59、61)、端部が上方に挽き出されて受口状をなすもの(62、64、70～72)、外反して端部上方が細まるもの(65、66)がある。外面は上半がロクロナデ、下半が斜方向のヘラケズリ調整である。しかし、62～64、66は弱いケズリ調整で、内面は62、66が斜方向のヘラナデである。70は前述の如く中型甕であるが、体部下端までロクロ成形されている。底部は61では砂底である。69はロクロ成形された大型甕の底部とみられるが底はヘラナデされたものかはっきりしない。なお、66は積上げ痕が顕著であり、59、65は一部炭化物が付着している。

67、68は非ロクロ成形された甕である。67は口縁部が僅かに外反する中型甕で、口縁部が横ナデ、内面はヘラナデ調整である。68は底部近くの破片で、外面が縦方向の粗いヘラケズリ調整である。

73は底部から緩やかに立ち上るもので、鉢の底部と考えられる。74はロクロ成形された埴の口縁部破片とみられる。体部が緩く内彎し、口縁部が緩やかに外反している。

75は須恵器大甕の体部破片である。外面は平行線状の叩き目痕をもち、内面には円礫による当具痕跡とみられる凹凸がある。胎土は砂粒を含んでザラザラするが、焼成は良好で堅緻である。色調は青灰色をなし、胎土中央部は灰白色を呈している。76、77は壺とみられる細片で、前者が体部、後者は頸部下端である。胎土等は75に酷似している。

78は完形の鉄鏝である。全長は14.6cmで、茎の長さが5.6cmである。身の長さは4.9cmで、



第66図 IV G 7 竪穴住居跡出土遺物(4)

箆被ぎまでの長さが9.0 cmである。比較的身の幅が狭い平根で、腹袂形となって僅かに逆刺が付いている。

79は硯の海の部分とみられる。石材は粘板岩である。

以上の他には粒状の炭化穀類がある。佐藤敏也、松谷暁子両氏の鑑定によるとアワであった。

#### 4. IV J 2 竪穴住居跡

〈遺構〉(第67図、図版57)

中央区の北部に位置する。V A 4 竪穴住居跡の北西4 mである。平面形は北半が削平されていて判然としないが、方形を基調とするようである。大きさは貼床範囲によると東西方向が2.2 m 南北方向が2.3 mである。方向は西壁によるとN40° Wである。

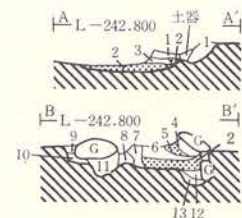
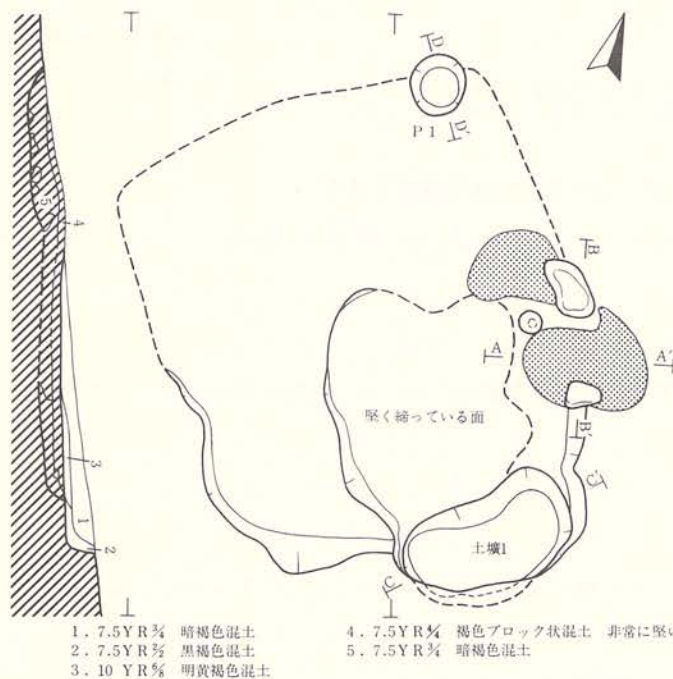
埋土は暗褐色混土、黒褐色混土で、壁際に明黄褐色混土が僅か認められる。壁はやや直に立ち上がり、壁高は14 cmである。床面は南半分を残すのみであるが、カマドの前面が幾分凹み、堅く踏み締められている。ほぼ全域にわたって褐色ブロック混土が貼床されている。

柱穴はP 1を検出したのみである。北東隅近くに位置し、幾分壁外に張りだしている。30×28 cmの円形で、深さは39 cm(推定床面からの深さ)である。埋土は暗褐色混土、明黄褐色混土である。

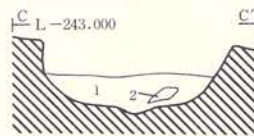
カマドは東壁の南部に位置する。上半が削平されて側壁、天井部については不明である。総延長は70 cmで、壁外部分は30 cmほどである。燃烧部が一部壁外に及ぶもので、中央先端部近くには小型甕形土器が伏せてあり、支脚と考えられる。ただ土器は煙道先端近くに位置しており、本来の煙道はかなり長かったものと推定される。燃烧部の幅は40 cmで、焼土は48×39 cmの円形で、厚さは5 cmである。側壁は遺存していないが煙道部分では礫が使用されている。両側とも斜面下位に倒れている。煙道は壁外20 cmほどで急激に立ち上がる。

土壙は大小3基発見されている。土壙1は南壁中央に位置し、ほとんど壁外に出ている。平面形は93×50 cmの長円形で、深さは18 cmである。長軸方向が南壁に平行している。底は鍋底状をなし、壁側が袋状となっている。埋土は暗褐色焼土混土の単層で、人為的に埋め戻されてい

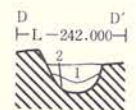
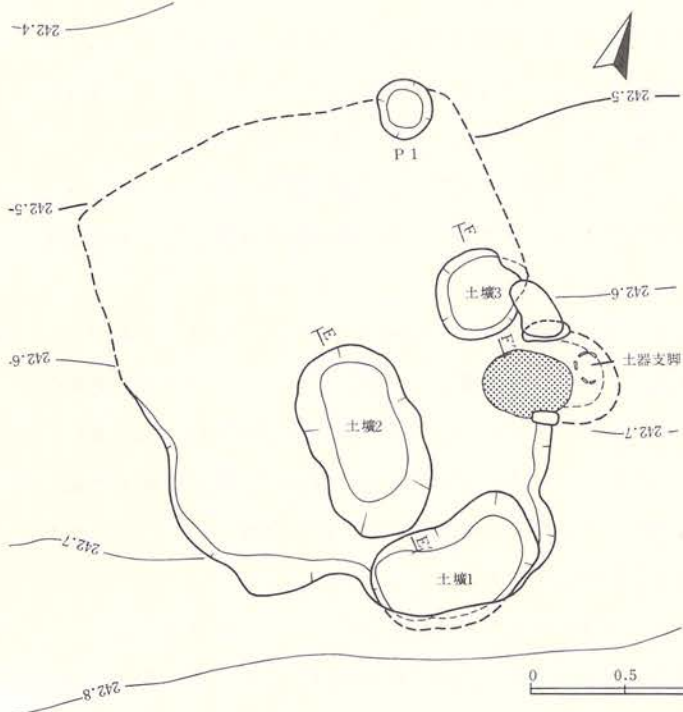




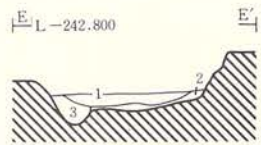
1. 7.5YR 褐色泥土 bcを含む
2. 2.5YR 明赤褐色焼土
3. 10 YR 黄褐色泥土
4. 7.5YR 暗褐色泥土 b-To-aを含む
5. 5 YR 明赤褐色焼土
6. 7.5YR 極暗褐色泥土 bcを含む
7. 10 YR 黄橙色シルトブロック
8. 10 YR 黒褐色泥土 下位にbを含む
9. 10 YR におい、褐色泥土
10. 10 YR 暗褐色泥土
11. 10 YR 暗褐色泥土
12. 7.5YR 暗褐色泥土 bを含む
13. 10 YR 黄褐色泥土 bを含む



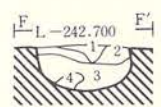
1. 5 YR 暗赤褐色焼土泥土
2. 10 YR 黄褐色ブロック



1. 7.5YR 暗褐色泥土
2. 10 YR 明黄褐色土

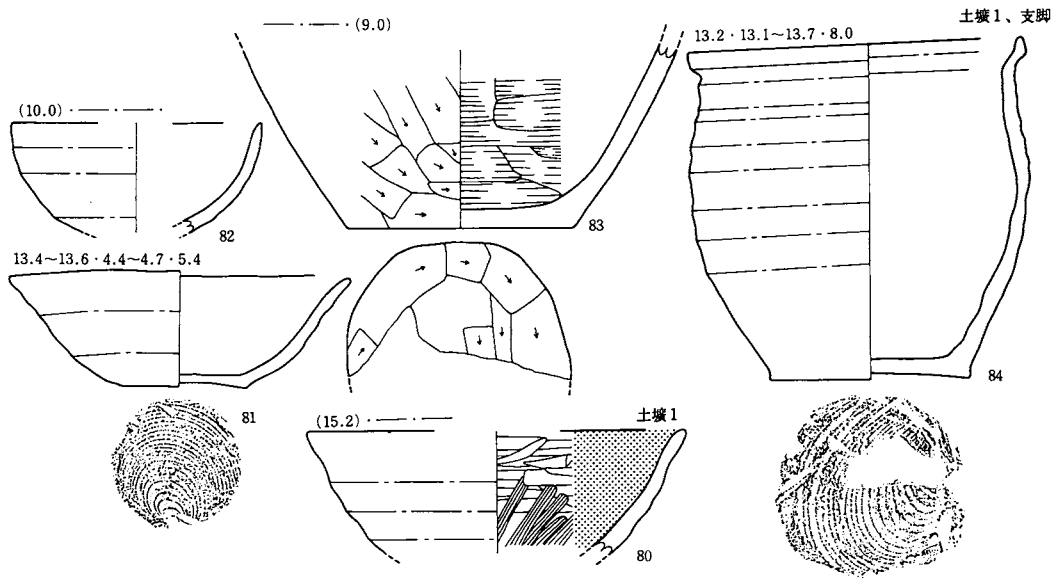


1. 7.5YR 極暗褐色泥土 cを含む
2. 10 YR 暗褐色泥土 50%
3. 10 YR 褐色泥土



1. 5 YR 赤褐色焼土泥土 cを含む
2. 7.5YR 暗褐色泥土 bcを若干含む
3. 7.5YR 極暗褐色泥土 bがブロック状混入
4. 10 YR 明黄褐色ブロック

第67図 IVJ2 竪穴住居跡



第68図 IV J 2 竪穴住居跡出土遺物

る。中から土器（80、84）が発見されている。

土壌2は南半部の中央に位置する。南北1.06m、東西60cmの南北に長い長円形で、深さが14cmである。底には凹凸があり、埋土は炭化物を含む暗褐色混土などである。上面は褐色ブロック混土で堅く締っている。土壌3はカマドの北側に隣接している。直径50cmほどの円形で、深さは24cmである。埋土は暗褐色～極暗褐色混土で、上位には赤褐色焼土混土が覆っていた。

遺物は上半が削平されていたこともあって、それほど多いものではない。カマド周辺と土壌2の埋土から発見されている。

〈遺物〉（第68図、図版78）

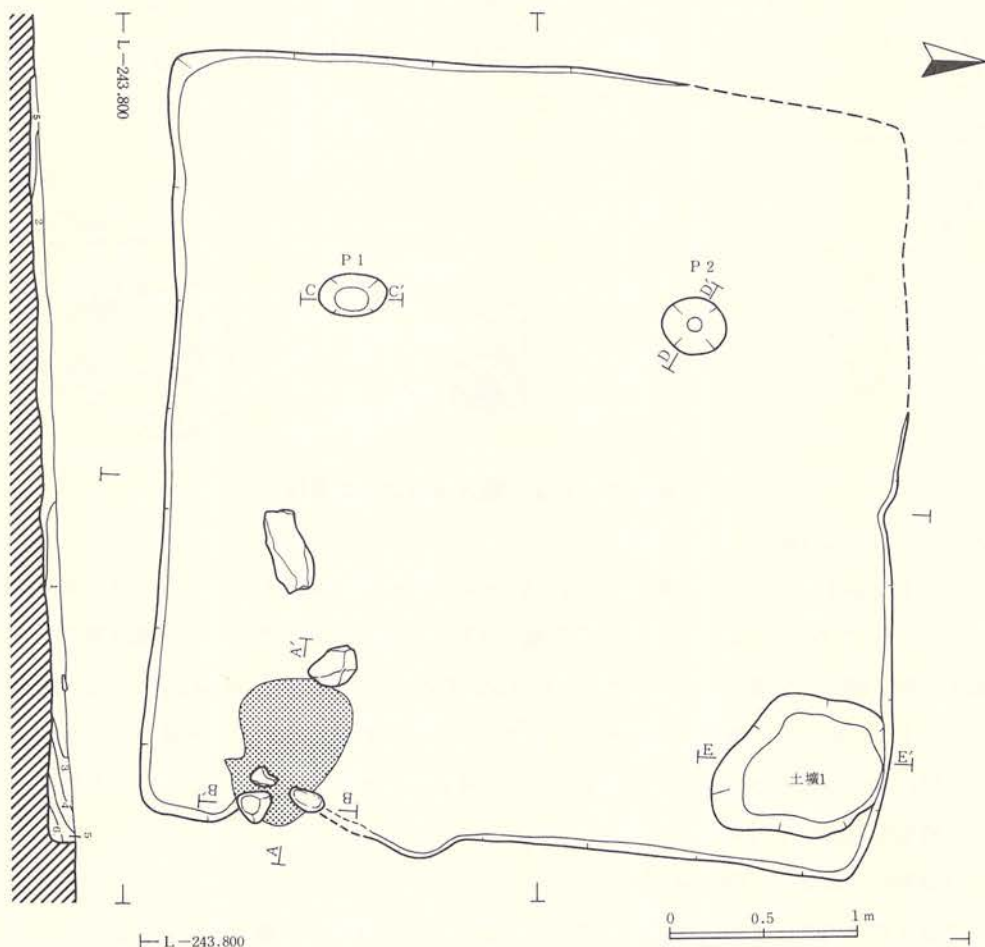
発見された遺物は土師器（25点）である。器種は坏（10点）と甕（15点）である。このうち掲載した遺物は80～84の5点である。

80は内面黒色処理された坏で、口縁部がそのまま納まる器形をなす。内面に横方向及び方射状のヘラミガキ調整が施されている。破片によっては色調が異なっている。

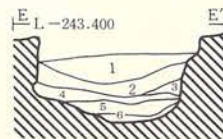
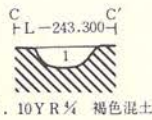
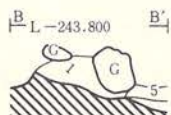
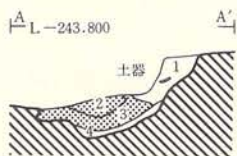
81、82は黒色無処理の坏である。81は完形品であるが、若干歪んでいる。口縁部は外反ぎみで、底は回転糸切無調整である。二次火熱のため所々色調が異なる。82は内彎する口縁部破片で、小型の坏とみられる。あるいは小型の鉢となるものであるかもしれない。

83はロクロ成形されたと思われる甕の底部破片である。外面が斜方向、下端は横方向のヘラケズリ調整で、内面は横方向のヘラナデ調整である。底部もヘラケズリ調整されている。

84はロクロ成形された中型甕である。口縁部は短く外折し、端部が上方に挽き出されて受口状をなす。内外面ともロクロ成形痕のみである。底は回転糸切無調整である。



- |                      |                     |                                     |
|----------------------|---------------------|-------------------------------------|
| 1. 7.5 YR 5/6 黒褐色混土  | 火山灰(To-a?)をブロック状に含む | 5. 10 YR 5/6 褐色混土(ブロック状混土) 堅く締っている  |
| 2. 10 YR 5/6 にぶい褐色混土 | 火山灰(To-a?)を含む       | 6. 7.5 YR 5/6 極暗褐色混土 火山灰(To-a?)粒を含む |
| 3. 7.5 YR 5/6 暗褐色混土  | やわらかい               | 7. 10 YR 5/6 暗褐色混土 黄色土がブロック状に混入する   |
| 4. 7.5 YR 5/6 黒褐色混土  | 炭化物、焼土を混入する         | 8.                                  |



- |     |         |                  |
|-----|---------|------------------|
| 大きさ | 深さ      | 埋土               |
| P 1 | 37×23cm | 11cm 褐色混土        |
| P 2 | 34×31cm | 27cm 暗褐色混土、黒褐色混土 |

- |                      |
|----------------------|
| 1. 5 YR 5/6 赤褐色焼土混土  |
| 2. 7.5 YR 5/6 橙色焼土   |
| 3. 5 YR 5/6 明赤褐色焼土   |
| 4. 5 YR 5/6 暗赤褐色焼土混土 |
| 5. 10 YR 5/6 黄褐色土    |

- |                      |
|----------------------|
| 1. 10 YR 5/6 褐色混土    |
| 2. 10 YR 5/6 暗褐色混土   |
| 3. 2.5 YR 5/6 浅黄色火山灰 |
| 4. 7.5 YR 5/6 黒褐色土   |
| 5. 10 YR 5/6 暗褐色混土   |
| 6. 10 YR 5/6 黄褐色混土   |

第69図 VA 4 竖穴住居跡(1)



## 5. VA 4 竪穴住居跡

〈遺構〉（第69～70図、図版58）

中央区の北部に位置する。IV J 2 竪穴住居跡の南東4 mである。全体的に削平されており、北半では床面も削平されていた。平面形は南北3.8 m、東西3.8～4.0 mの方形をなす。方向は西壁によるとN3° Eである。

埋土は十和田 a 降下火山灰を含む黒褐色混土、にぶい褐色混土、暗褐色混土などからなる。壁はほぼ直に立ち上がり、壁高は20 cmを最大とする。各壁とも直線的である。床面は平坦で、全体的に褐色ブロック混土が貼床されている。

柱穴は西側列（P 1、P 2）の2柱穴を検出したのみである。南、北壁の内側70 cm、1.0 mで、西壁内側1.1 mに位置している。平面形は35～30 cmの長円形、円形で、深さは11 cm、27 cmである。埋土は褐色混土、暗褐色混土、黒褐色混土である。

カマドは東壁南端部に位置している。上半が削平されて側壁、天井部については不明である。焼土と礫が散在するのみである。焼土混土は80×60 cmの不整な長円形をなす。礫は壁際と住居跡内部に散在している。燃焼部は壁の内側20 cmで、焼土は直径60 cmほどの円形で、厚さが最大18 cmである。側壁には礫を使用しているようであるが、いずれも原位置を保っていない。煙道は壁の部分で立ち上がるようであるがはっきりしない。

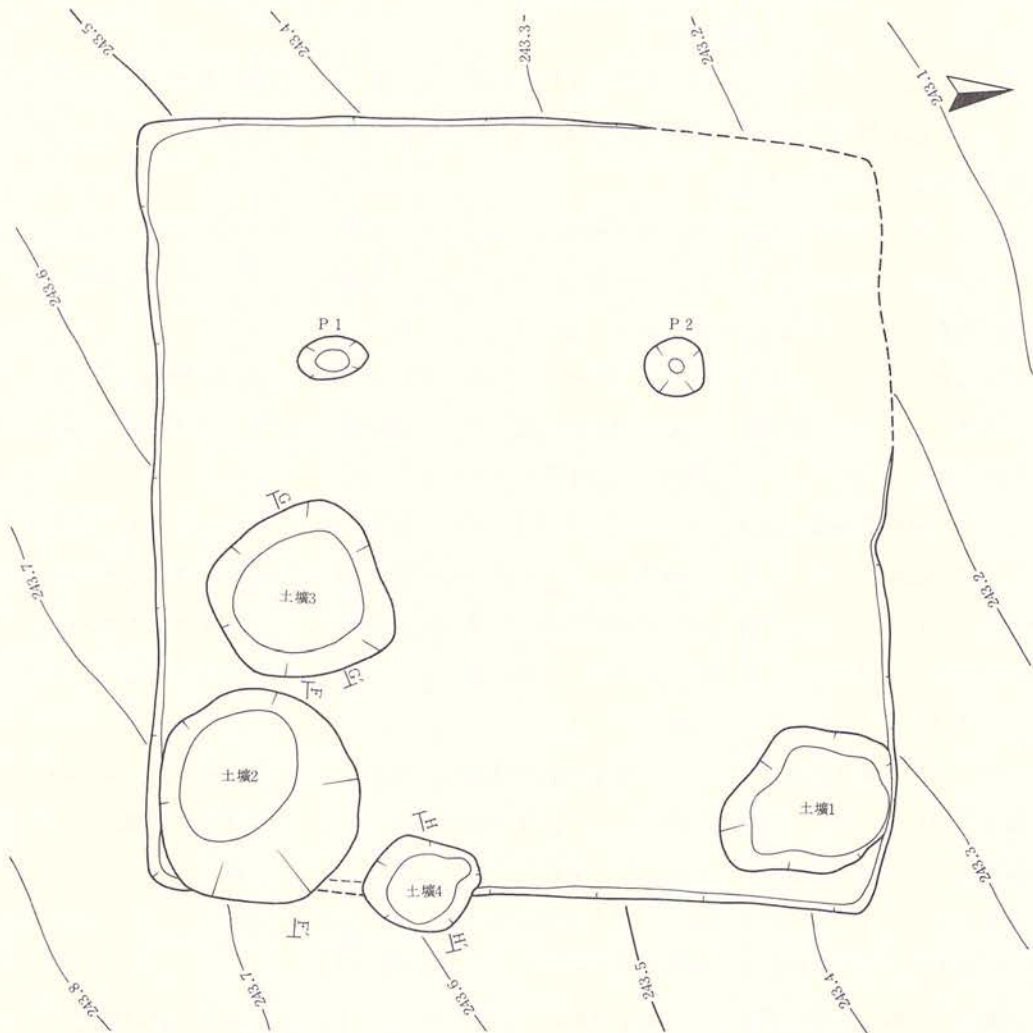
土壌は大小4基発見されている。土壌1は北東隅近くに位置している。平面形は90×75 cmの不整な長円形で、深さが43 cmである。床面には幾分凹凸がある。埋土は黄褐色、暗褐色、黒褐色混土など6層からなる。いずれもレンズ状堆積を示し、やわらかい。土壌2はカマドの直下に位置する。1.12×1.07 mの円形で、深さが37 cmである。底部が狭く播鉢状をなす。埋土は上半が黒色土系、下半が明黄褐色混土などの褐色混土が主体をなす。

土壌3は土壌2の西に隣接し、平面形は80 cmの方形に近い。深さは25 cm、埋土は褐色混土などで、上位には褐色混土が貼床されている。人為的に埋め戻されたものと考えられる。土壌4はカマドの北に位置し、東半が壁外に張り出している。直径55 cmほどの円形で深さは25 cmである。埋土は土器、焼土を含む暗褐色混土などで7層に細分できる。

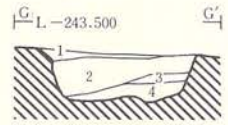
遺物はカマドの前に多数集中している。

〈遺物〉（第71～73図、図版78）

発見された遺物は土師器75点、須恵器34点、縄文土器2点である。縄文土器は後期とみられる体部破片である。土師器には坏（16点）と甕（59点）があり、須恵器には大甕（20点）、壺（12点）、甕（2点）がある。このうち掲載した遺物は土師器16点（85～100）、須恵器5点（101



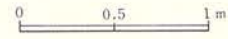
1. 10Y R 黄褐色土
2. 10Y R 黑色土
3. 10Y R 黒褐色砂質土
4. 10Y R 灰黄褐色火山灰To-a?
5. 10Y R 褐色ブロック混土50%
6. 10Y R 明黄褐色ブロック
7. 10Y R ぶい黄橙色砂質土



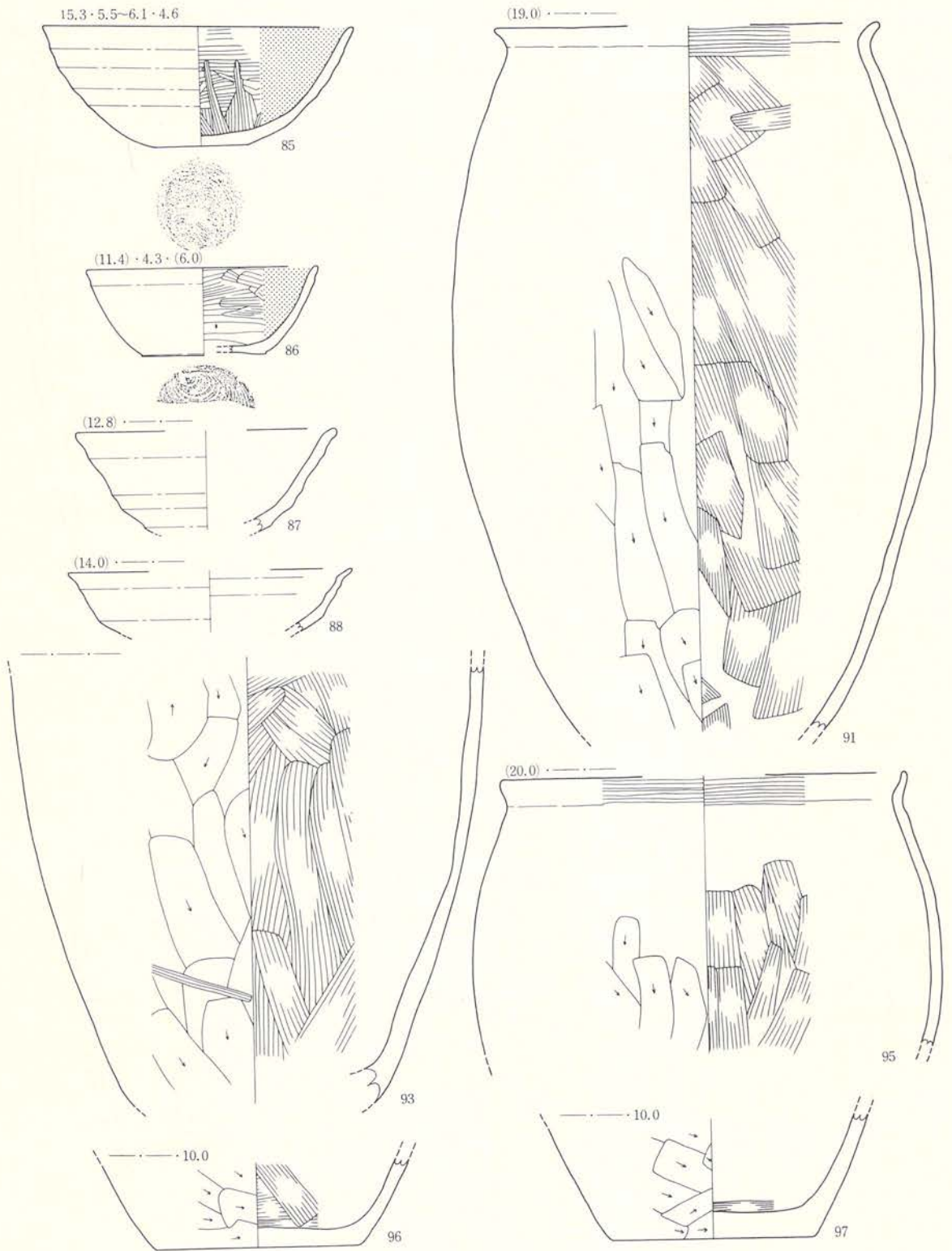
1. 10Y R 褐色混土、粘床
2. 10Y R 褐色混土(ブロック状)
3. 10Y R 明黄褐色混土90%
4. 10Y R 黄褐色混土



1. 7.5Y R 暗褐色混土
2. 7.5Y R 褐色焼土混土
3. 7.5Y R 明褐色混土 bを含む
4. 5 Y R 明赤褐色焼土
5. 10 Y R 褐色ブロック
6. 10 Y R 暗褐色混土
7. 7.5Y R 褐色焼土混土

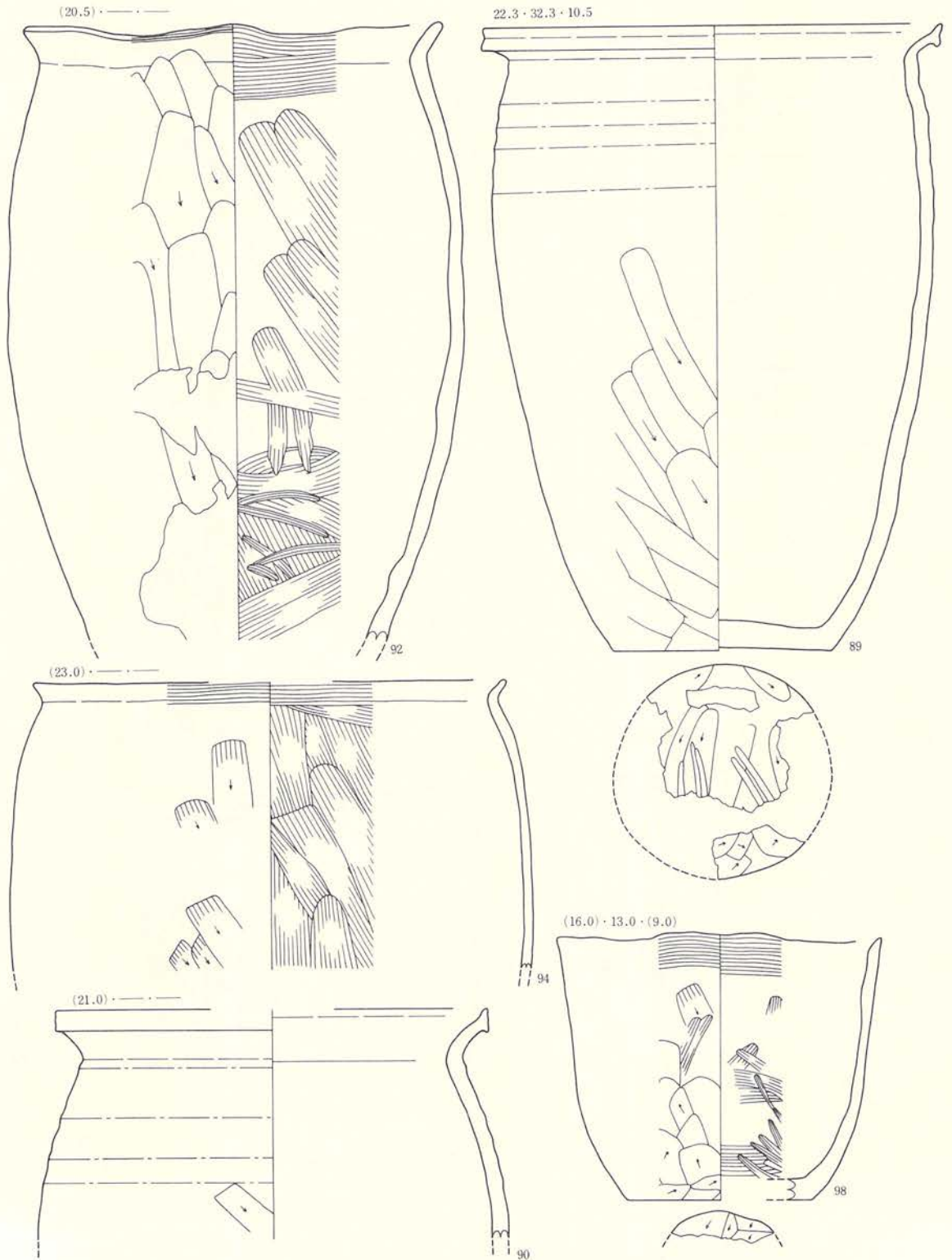


第70図 V A 4 竪穴住居跡(2)

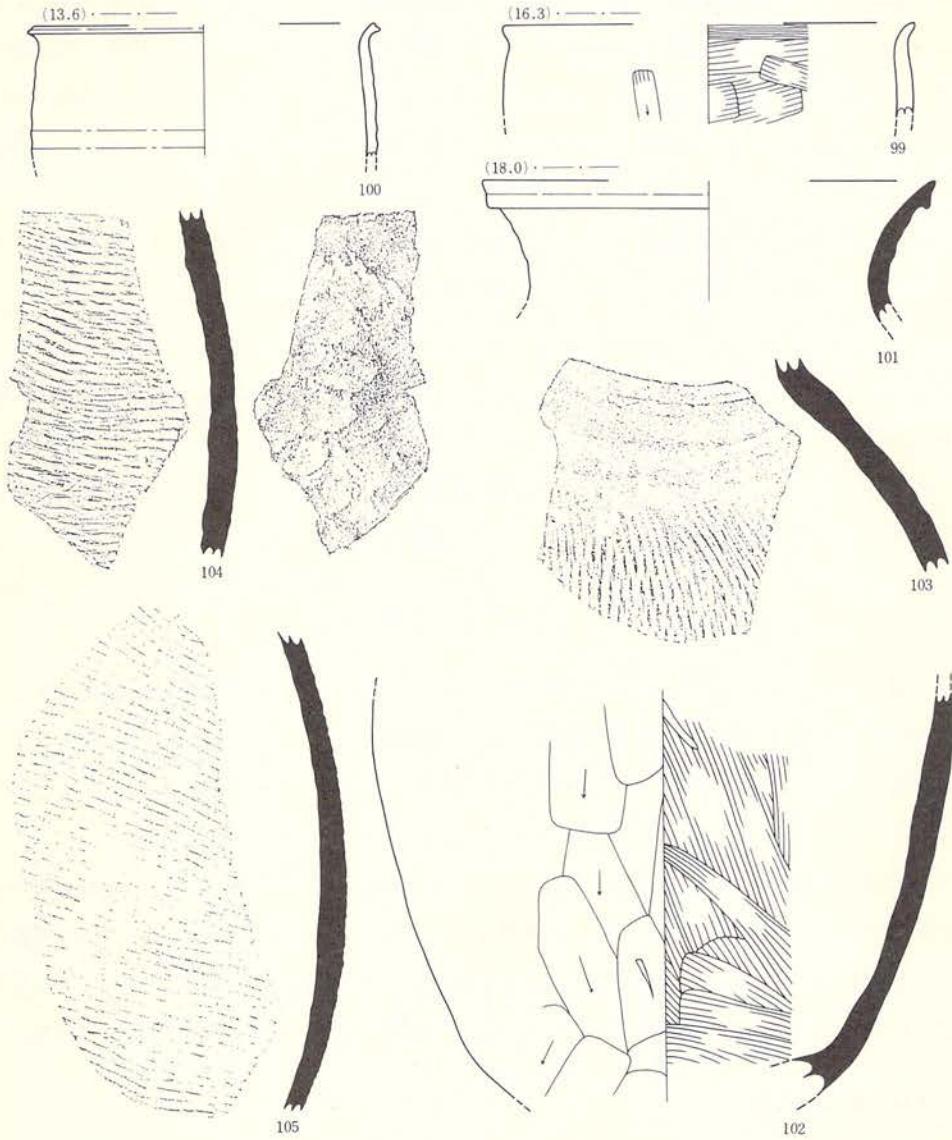


第71図 V A 4 豎穴住居跡出土遺物(1)





第72図 V A 4 竖穴住居跡出土遺物 (2)



第73図 V A 4 竪穴住居跡出土遺物(3)

～ 105) である。

85、86は内面黒色処理された坏である。85は底径が4.6cmと小さく、大きく開く形をなし、86は全体的に小さい。口縁部は両者ともそのまま納まる形をなす。内面のヘラミガキ調整は前者が方射状ミガキが口縁部近くまで及び、後者は横方向のミガキである。底部は両者とも回転糸切無調整である。なお、85は体部下端がヘラケズリ調整されているようである。

87、88は黒色無処理の坏である。両者とも口縁端部が外反ぎみである。外面にロクロ成形痕が明瞭に残っている。以上の他には内外両面黒色処理された坏の体部破片が1点含まれている。

89～100が甕である。89、90、100がロクロ成形された甕で、前2者が大型甕で、後者が中型甕である。89、90は口縁部が外反して端部が上方に挽き出されて受口状をなし、100は短く外反する。外面は上半がロクロ成形で、下半が斜方向のヘラケズリ調整である。底部は89ではヘラケズリ調整されている。

91～95、98、99の7点は非ロクロ成形された甕である。91～93は体部中ほどに最大径をもつ長胴甕で、口縁部が短く外反する。口縁部内側が横ナデされ、外面が縦方向の粗いヘラケズリ調整で、内面は縦あるいは斜方向の粗いヘラナデ調整である。器壁は体部下半から底部にかけて厚くなり、92では体部下半に粘土が貼付されている。94、95もほぼ同様の甕であるが、口縁部の内外両面が横ナデされている。

98、99は中型甕である。器形は98によると底部から緩く開きながら立ち上がり、鉢形に近い形状をなす。口縁部が直行しそのまま納まり、波状口縁ぎみである。99は僅かに外反している。外面が縦方向、下端が横方向のヘラケズリで、底部に近いものほどケズリ調整が大きい。底部はヘラケズリ調整である。

101は緩やかに外反する須恵器壺の口縁部である。焼成はやや不良で、色調が暗褐色を呈し、胎土中央部が灰白色をなす。102は色調が灰褐色を呈することから須恵器甕としたが、器形、調整等が91～93に酷似しており、あるいは土師器甕かもしれない。外面が粗いヘラケズリ、内面は粗いヘラナデ調整である。器厚は0.3～1.1cmとバラツキが大きい。

103～105は大甕の肩部、体部破片である。103、104は同一個体とみられ、外面に平行線状の叩き目痕をもつ。焼成はやや不良で、色調が褐色～灰白色をなす。胎土に細かい白色砂粒が混入している。105は外面が平行線状の叩き目痕、内面は円礫による当具痕跡とみられる凹凸が認められる。焼成は良好で燻色をなす。胎土には前者同様に細かい砂粒を含んでいる。

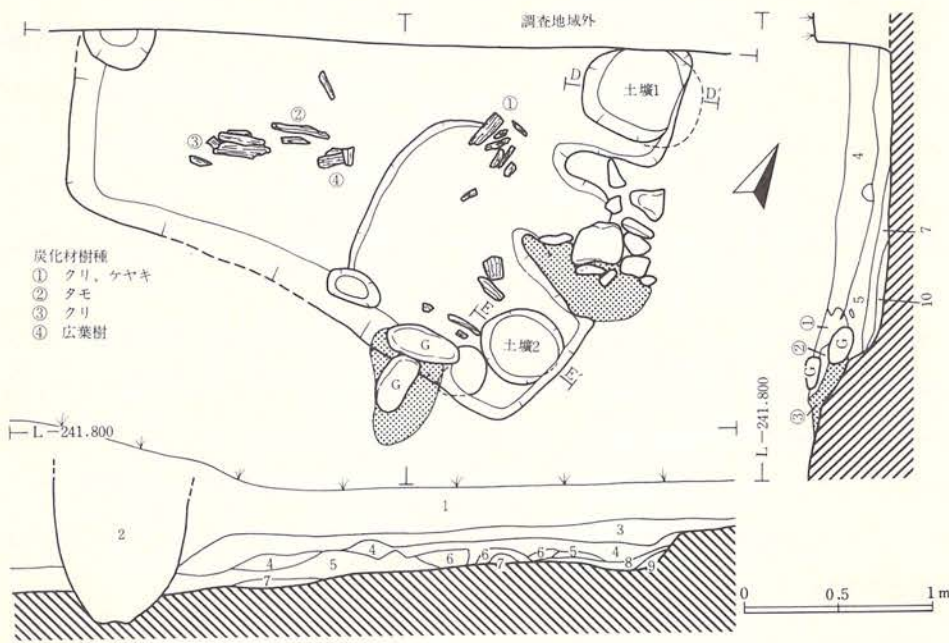
## 6. V H 1 竪穴住居跡

〈遺構〉（第74図、図版59）

中央部北端に位置する。西には隣接して近世の土葬墓があり、南西10mにはIV J 2 竪穴住居跡、V A 4 竪穴住居跡がある。また北西部には後世の攪乱によって一部破壊された部分がある。平面形は北半が調査地域外に続いているためはっきりしないが、方形を基調とするとみられる。大きさは南壁によると2.6mと小型である。方向は南壁ではN80°～90°Eである。

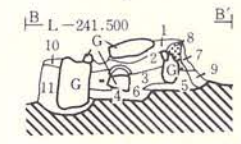
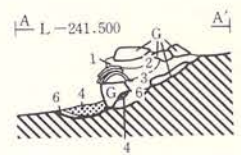
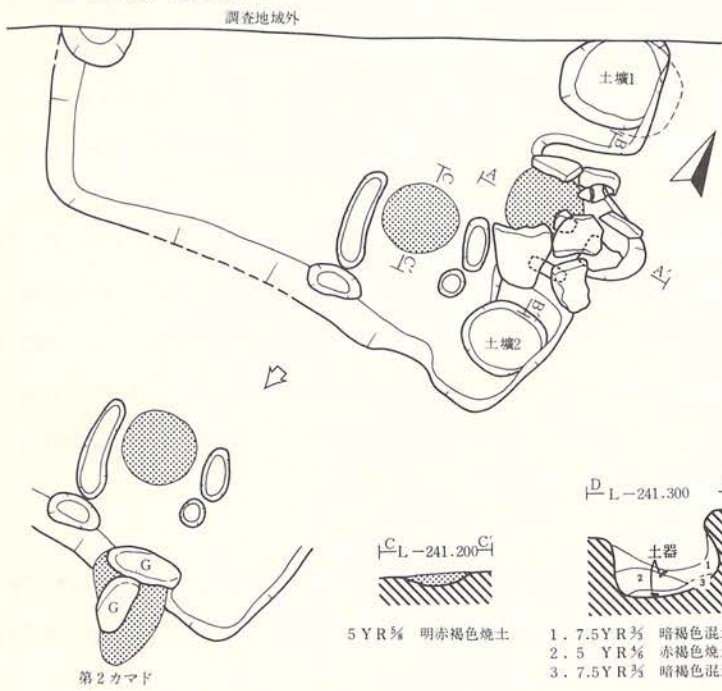
埋土は黒褐色混土が主体となるが、壁際には僅か褐色混土が認められる。埋土中位から下位にかけて十和田 a 降下火山灰が粒状、ブロック状に混入し、また下位には焼土、炭化材が大量





- 炭化材樹種  
 ① クリ、ケヤキ  
 ② タモ  
 ③ クリ  
 ④ 広葉樹

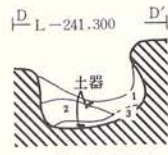
- |                                      |                           |
|--------------------------------------|---------------------------|
| 1. 10 YR 5/1 黒色土 耕作土 やわらかい           | 8. 10 YR 5/2 黒褐色土         |
| 2. 10 YR 5/1 黒色土 非常にやわらかい 攪乱         | 9. 10 YR 5/2 黒褐色泥土 炭化物を含む |
| 3. 10 YR 5/2 黒褐色土 締っている 耕作土          | 10. 7.5 YR 5/4 暗褐色泥土      |
| 4. 7.5 YR 5/2 黒褐色泥土 焼土を含む To-aを含む    | ① 7.5 YR 5/4 褐色泥土         |
| 5. 7.5 YR 5/2 黒褐色泥土 焼土炭化物を含む To-aを含む | ② 7.5 YR 5/2 褐色泥土 焼土を含む   |
| 6. 10 YR 5/4 褐色泥土 焼土を含む              | ③ 5 YR 5/1 赤褐色焼土          |
| 7. 7.5 YR 5/2 黒褐色泥土                  |                           |



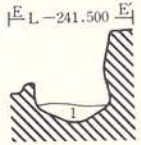
- |                         |
|-------------------------|
| 1. 10 YR 5/2 暗褐色泥土 bを含む |
| 2. 10 YR 5/2 黒褐色泥土      |
| 3. 7.5 YR 5/2 極暗褐色焼土泥土  |
| 4. 5 YR 5/1 明赤褐色焼土      |
| 5. 7.5 YR 5/2 暗褐色焼土泥土   |
| 6. 5 YR 5/1 黒褐色焼土泥土     |
| 7. 10 YR 5/4 明黄褐色土      |
| 8. 5 YR 5/1 明赤褐色焼土      |
| 9. 10 YR 5/2 黒褐色泥土      |
| 10. 7.5 YR 5/2 褐色焼土泥土   |
| 11. 7.5 YR 5/2 暗褐色泥土    |



- |                 |
|-----------------|
| 5 YR 5/1 明赤褐色焼土 |
|-----------------|



- |                            |
|----------------------------|
| 1. 7.5 YR 5/2 暗褐色泥土 b、cを含む |
| 2. 5 YR 5/1 赤褐色焼土          |
| 3. 7.5 YR 5/2 暗褐色泥土 b、cを含む |



- |                             |
|-----------------------------|
| 1. 5 YR 5/1 に近い赤褐色焼土泥土 cを含む |
|-----------------------------|

第74図 VH1 竪穴住居跡

に含まれている。焼失住居と考えられる。なお、十和田 a 降下火山灰については蛍光X線分析によって確認されている(付編参照)。

炭化材は棒状をなす比較的短いもので、樹種はクリ、ケヤキ、タモ、それに不明広葉樹と鑑定されている。なお、床面出土の丸太材(No.1)の方放射性炭素年代測定の結果によると1270±100BP、AD 680年であった。

壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は最大30cmである。南壁が若干弓なりに外反している。底面は若干凹凸あるもののほぼ平坦である。カマドの前が幾分凹んでいる。全体的に褐色ブロック状混土が貼床されている。柱穴は検出されていない。

カマドは東壁南部(カマド1)と南壁東部(カマド2)の2基がある。カマド2が先行するもので、南壁東部から東壁南部に造り替えられている。カマド1は側壁、天井部とも遺存しており、保存状況は比較的良好である。側壁及び天井部に礫を多用している。総延長は80cmで、壁外部分が20cmである。燃烧部は壁の内側15cmにあり、焼土は直径40cmの円形で、厚さが6cmである。中央に支脚をもつ。支脚は礫の上に坏型土器2個を伏せたもので、坏内部には明赤褐色焼土が充満していた。埋没に伴ってかさ上げされたものと推定される。

側壁は礫とシルトからなり、いずれも礫が内傾している。幅は40cmほどである。天井石は一部側壁の上に乗っているが、破損していて原位置を保っているか不明である。煙道は急激に立ち上がるもので、そのまま納まる。煙道の内側も側壁と同様に礫が使用されている。

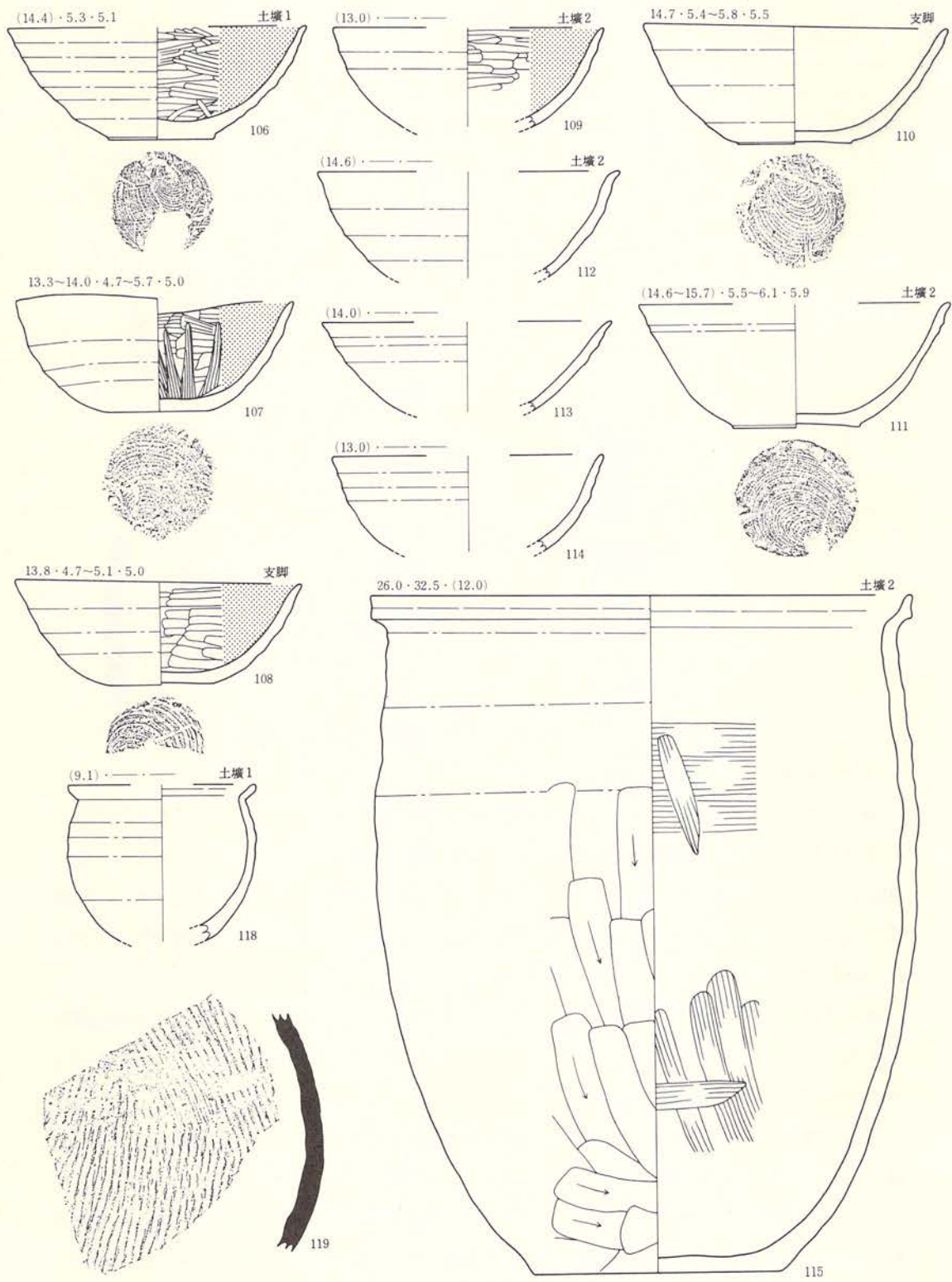
カマド2は燃烧部の一部と煙道の一部を残すのみである。総長1.4mほどで、壁外部分は40cmである。燃烧部は壁の内側40cmにあったようで、焼土は直径40cm、厚さ6cmである。側壁のあった部分には小さな穴が確認されており、芯材を据えた穴と推定される。煙道はゆるやかに立ち上がってそのまま納まる形になっている。なお、煙道部は礫を用いて壁として修復されている。

土壇1はカマド1の北に位置し、一部調査地域外に続いている。直径50cmほどの円形で、深さが30cmである。底部は壁側が張り出して袋状をなしている。埋土は暗褐色混土、赤褐色焼土などで、土器(106、117、118)が含まれていた。全体的に炭化物を含みやわらかい。土壇2はカマド1の南に位置し、南東隅近くにあたる。直径40cmほどの円形で、深さが20cmである。土壇1の反対側にあつて、ひとまわり小さなものである。埋土にはふい赤褐色混土の単層で、埋土上位から土器(109、111、112、115)が発見されている。

#### 〈遺物〉(第75・76 図、図版79)

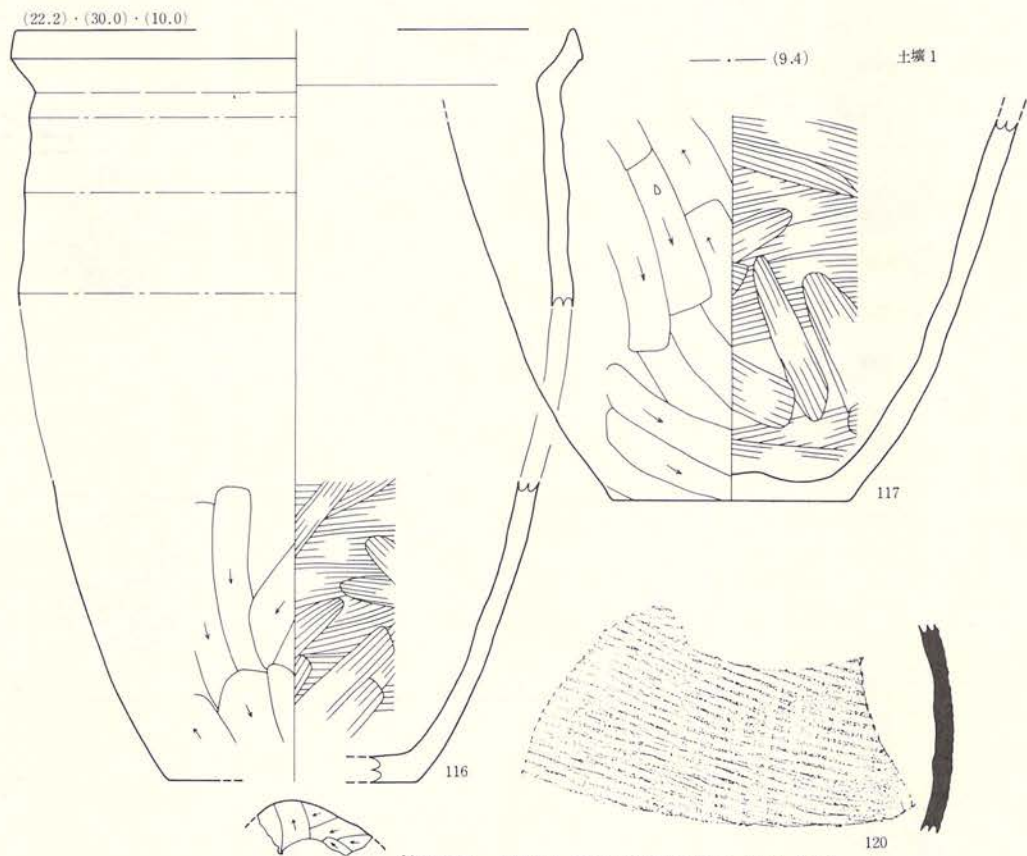
発見された遺物は土師器67点、須恵器5点、それに縄文土器3点である。土師器には坏(26点)と甕(41点)があり、須恵器は大甕のみである。このうち掲載した土器は土師器14点(106





第75図 V H I 竖穴住居跡出土遺物(1)





第76図 V H I 竪穴住居跡出土遺物(2)

～ 118)、須恵器2点 ( 119、 120) である。

106～109 は内面黒色処理された坏であるが、107～109は二次火熱のため内面の黒色が消滅して褐色を呈していた。口縁部はいずれも外反ぎみで、外面のロクロ成形痕がやや顕著である。内面のヘラミガキ調整は上半が横方向、内底部が方射状を基調とし、107は方射状ミガキが口縁部近くまで達している。底部は回転糸切無調整である。なお、106の底部はベタ高台に近く、105は内底部が摩滅している。また107は全体的に大きく歪んでいる。

110～114は黒色無処理の坏である。いずれも口縁端部が外反ぎみで、底部は回転糸切無調整である。110、111は両者ともベタ底に近く、大きく歪んでいる。なお、110は底に2～3mmの厚さに粘土を加えて再度切り離している。

115～118が甕である。115～117がロクロ成形された甕で、115、116が大型甕に属する。115は器高の割には口径、底径が共に大きく、どっしりとした安定感がある。大型甕は口縁部が短く外反し、端部が上方に挽き出されている。外面下半は縦方向の粗いヘラケズリで、内面は縦及び横方向のヘラナデ調整である。底部は116によるとヘラケズリ調整されている。117は大型甕の底部である。底部は砂底で、調整技法は前者と同様である。

118は小型甕で、体部が球形を呈し、口縁部が短く外折している。破片によって色調が異なる。

119、120は須恵器大甕の体部破片である。同一個体とみられる。外面が平行線状の叩き目痕をもち、内面は円礫による当具痕の凹凸が観察される。焼成は良好で堅緻である。色調は灰黒色であるが、胎土中央部が黄褐色を呈している。胎土には細かい白色砂粒等を含み、器壁がザラザラしている。

## 7. VI F 13 竪穴住居跡

〈遺構〉（第77～79図、図版60・61）

東区の中央の斜面中位から上位にかけて位置する。平面形は南北3.2m、東西3.3～3.5mの方形をなす。方向は西壁によるとN18°Eである。

埋土は上位が黒色土、中位がにぶい黄褐色混土、下位が褐色焼土混土などである。中位には十和田a降下火山灰が粒状、ブロック状に混入し、下位には炭化材が大量に含まれている。

炭化材は住居跡のほぼ全域に散在している。このうち南西部では厚さ2～4cmの板材5枚が南壁に対して直角に並んでいる。板材は幅が17～36cmで、長さが25～94cmである。最大のものでは94×30cm、厚さ4cmである。また、南西部でも対応する形に南北方向をなす板材がある。この材には8×5cmのほぞ穴が掘られており、その下には根太が渡してある。これらのものは平行に並んでおり、しかも根太の上に渡してあって、敷板と考えられる。

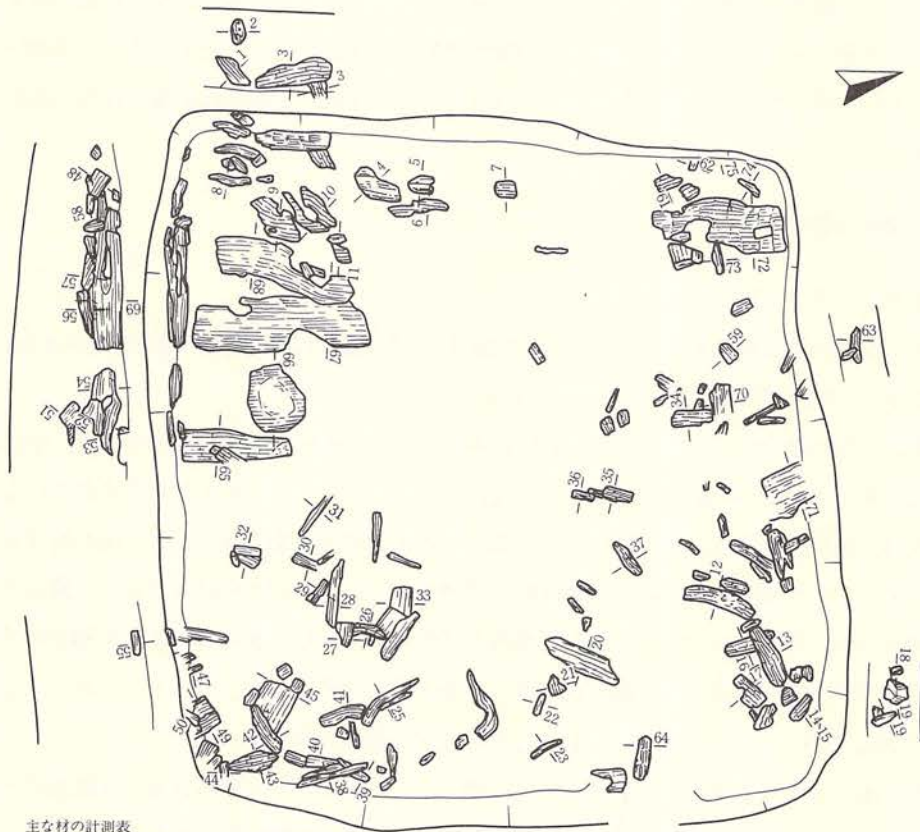
以上の他には壁から斜めに傾斜する板材（49、71）などがある。壁材あるいは屋根材と考えられる。また、南壁西半、西壁南端部では、壁に立て掛けた状態で壁に平行する板材、丸太材が検出されている。最大のもので幅15cm、長さ85cm、厚さが8cmである。さらに、小さな丸太材が住居跡東半を中心に散在している。

樹種は75例のうち、クリが54点、ケヤキが10点、アオタモが2点、シロタモが1点、カヤ1点、不明広葉樹5点、不明針葉樹2点と鑑定された。なお床面出土の丸太材（No20）の方射性炭素の年代測定の結果によると1080±100BP、AD870年であった。

壁は上半が崩落しているものの下半はほぼ直に立ち上がる。壁高は最大60cmである。四壁とも直線的である。床面はほぼ平坦で、北半に貼床が認められる。なお、北壁の内側15cm、20cmには礫が据えられている。

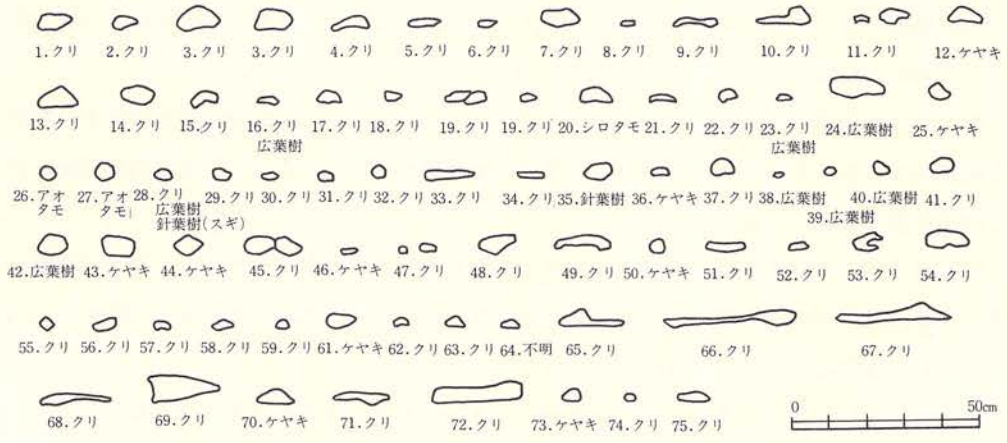
住穴はP1、P2を検出したのみである。両者とも壁のほぼ中間にあって、P1は南壁に隣接し、P2は西壁の内側45cmに位置している。直径24cm、15cmの円形で、深さが15cm、22cmである。埋土は褐色混土、黒褐色混土である。

カマドは東壁北部に位置している。折損した天井石を原位置にとどめ、保存状況は良好であ



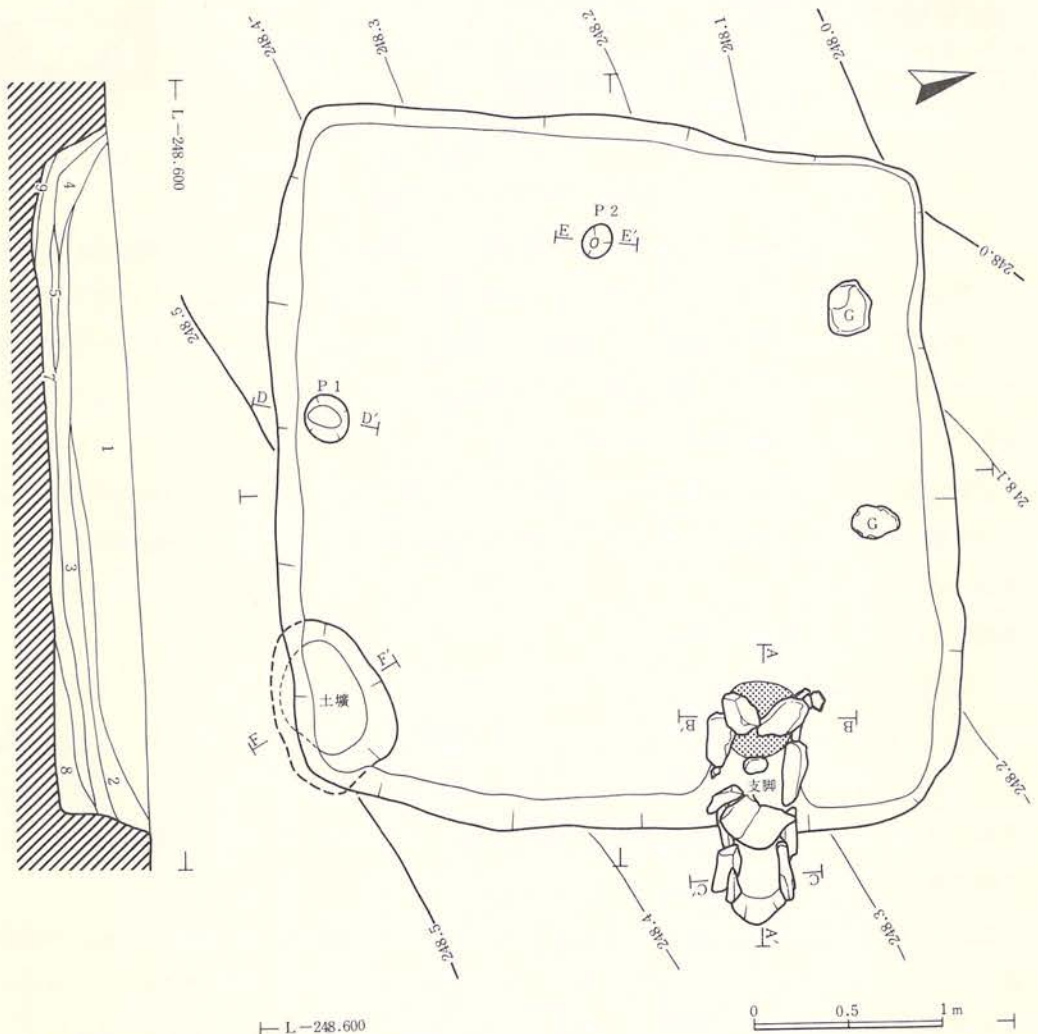
主な材の計測表

長さcm	幅cm	厚さcm	長さ	幅	厚さ		
3	42	14	6	68	75	20	3
9	25	17	2	69	85	15	8
20	45	13	3	71	21	22	3
49	16	18	3	72	68	25	4
65	58	17	4				
66	31	36	4				
67	94	30	4				



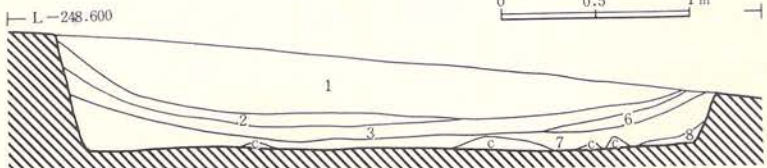
第77図 VI-F13竪穴住居跡(1)





柱穴一覽表

大きさ	深さ	埋土
P 1	24×24cm	15cm 褐色混土
P 2	16×14cm	22cm 黒褐色混土

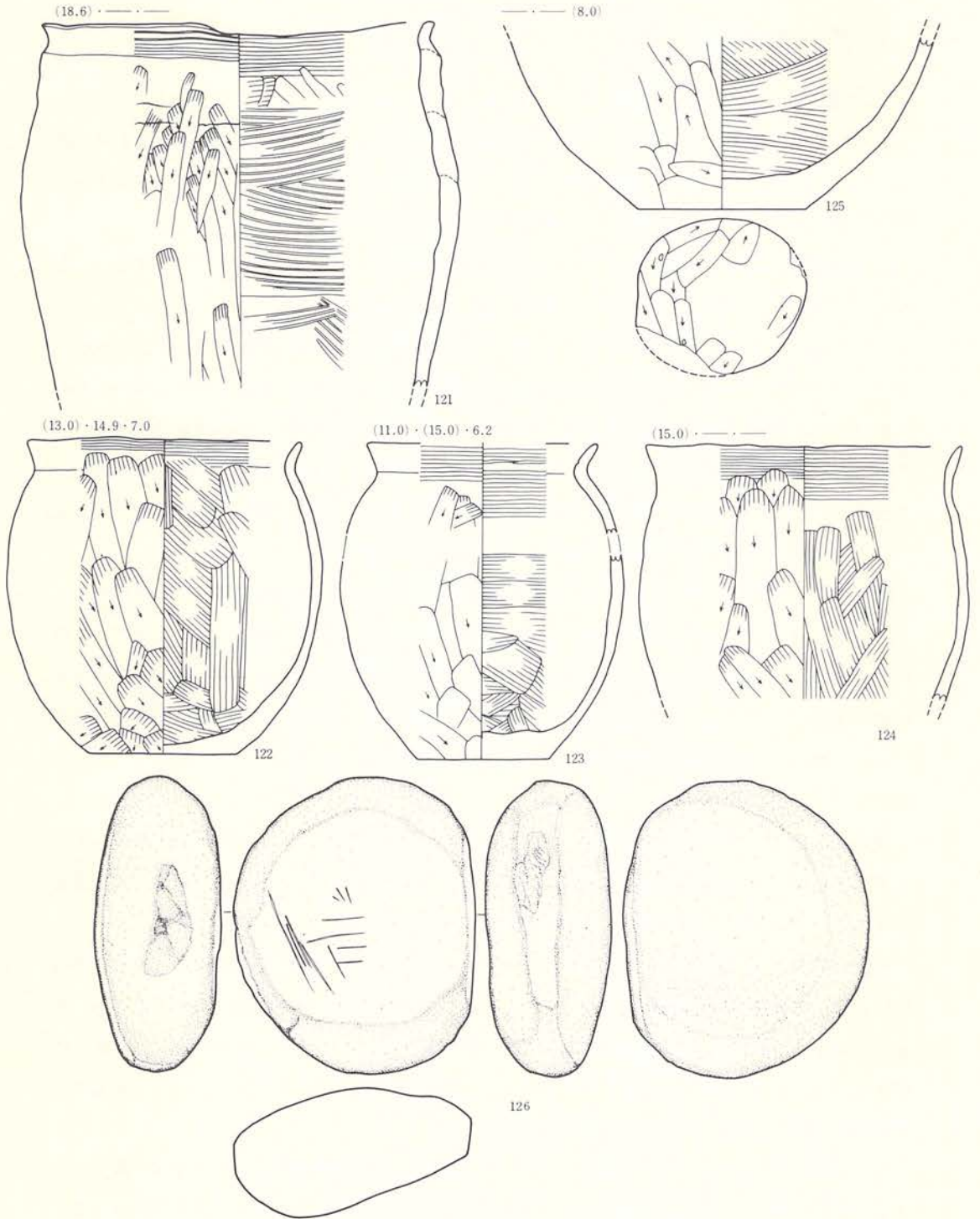


1. 10 Y R 5/6 黒色土
2. 7.5 Y R 5/6 ~ 10 Y R 5/6 褐色~にぶい黄褐色混土 To-aを含む
3. 10 Y R 5/6 ~ 10 Y R 5/6 にぶい黄橙色~暗褐色混土
4. 10 Y R 5/6 にぶい黄橙色
5. 7.5 Y R 5/6 黒色土
6. 10 Y R 5/6 にぶい黄橙色 To-aを含む
7. 7.5 Y R 5/6 褐色焼土混土 下位にCブロックを含む、また層状に堆積している部分もある  
焼土化している部分もある
8. 10 Y R 5/6 褐色混土
9. 10 Y R 5/6 明黄褐色混土

第78図 VI F 13 竖穴住居跡 (2)



のようである。使用面は幅が1.3cm、長さが5.5cmである。表裏両面も使用されて摩耗している。



第80図 VI F 13 竪穴住居跡出土遺物



石材は流紋岩である。

## 8. VI E 19 堅穴住居跡

〈遺構〉（第81～83図、図版62・63）

東区中央の南端部に位置する。平面形は北半が削平されていて判然としないが、方形を基調とするようである。規模は東西方向が4.7m、南北方向はカマドの燃焼部とみられる焼土を含めると4.4mである。方向は南壁によるとN77°Wである。

埋土は黒褐色混土、黄褐色混土、明赤褐色焼土、暗褐色混土等からなり、中位には焼土が最大8cmの層となっており、その下には炭化材が大量に含まれていた。

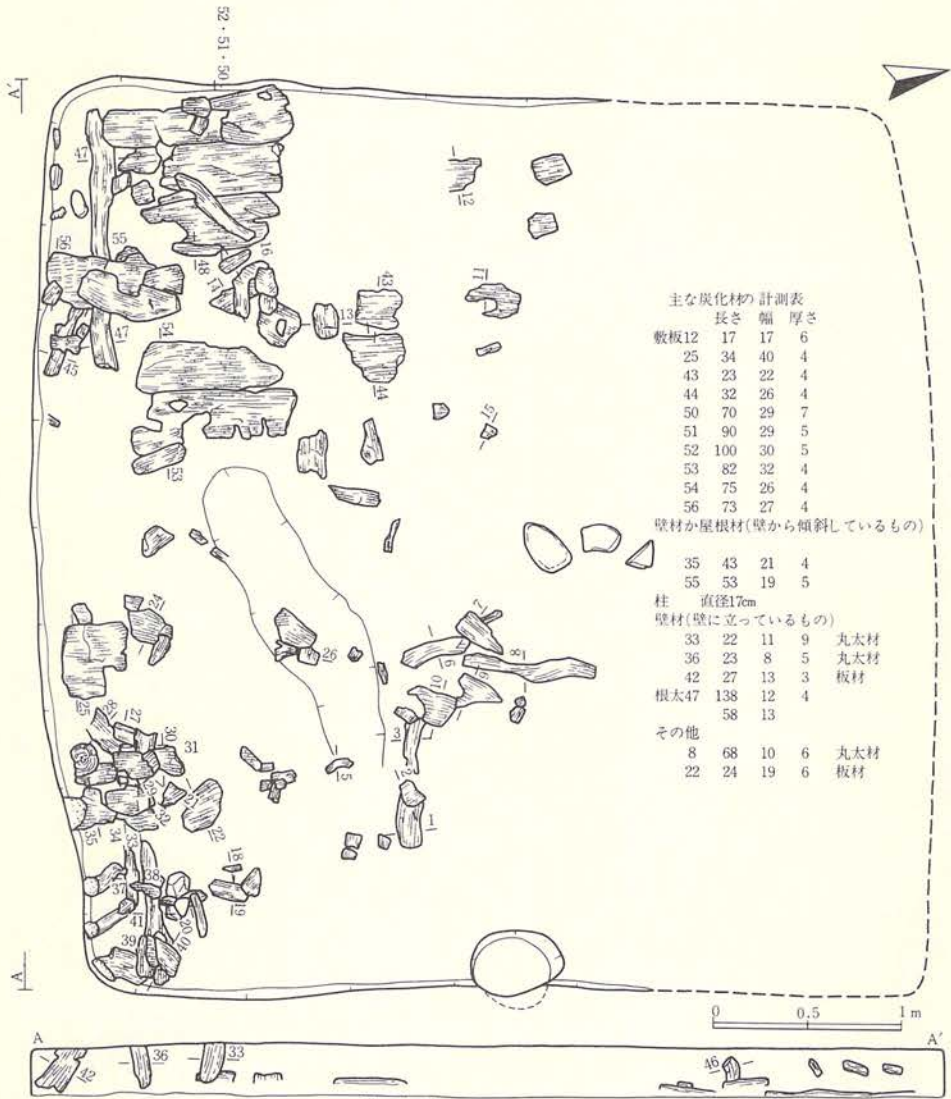
炭化材は削平されていることもあって南半に集中している。南西部と南東部、それに東部中央の3群に大別される。南西部の炭化材は根太と整然と並んだ板材が主体をなす。幅26～40cmの板材6枚が南壁に対して直角に並んでいる（50～54、56）。長さが70～100cmで、厚さが4～7cmである。幾分離れるが、11、12、43、44も同様の板材で、その続きとみられる。本来の長さは少なくとも2.5mほどであったと推定される。下に根太（47）があり、敷板と考えられる。また、南東部の25も同様の敷かれた板材とみられるものである。

南壁に平行する47、40の下は根太と思われるものである。幅が13cmで厚さは下半が腐植して4cmと薄いが丸太材である。長さは138cm、58cmである。以上の他には壁に立っている板材や丸太材（33、36、42など）、壁から斜めに傾斜している板材（35、55など）などがある。また南東部、東部中央と中心に大小の丸太材が散在している。散在しているものの中には直径17cmの柱材が含まれている。東壁の西方約1mで、南壁の周溝に接している。下には柱穴（P1）が位置している。

炭化材は56点のうち、42点がクリ、1点がシロタモ、2点がクワ、9点が不明広葉樹、1点が不明針葉樹、1点がカヤと鑑定されている。なお、床面出土の丸太材（No.37）は放射性炭素年代測定の結果990±110年BP、AD960年であった。

壁はほぼ直に立ち上がり、壁高が最大22cmである。遺存している西壁、南壁、東壁とも直線的である。なお住居跡は壁にそってめぐる炭化材及び焼土の帯として検出したものである。床面は平坦で、比較的堅く踏み締められていた。中央部には上面が床面と同レベルとなるように礫3個が南北に並べられている。中央南寄りには幅30cm前後、長さ1.5mにわたって攪乱されている。上面が急激に開く浅い土壌の連続である。

柱穴はP1、P2の2柱穴を検出したのみである。P1は東壁の西1.2mで周溝に接し、P2も同様に南壁の北1.5mで周溝に接している。両者とも直径13cm前後で、深さが13cm・37.5cmである。埋土は黄褐色混土である。なお前述の如くP1の上には柱材が検出されている。



主な炭化材の計測表

数	長さ	幅	厚さ
12	17	17	6
25	34	40	4
43	23	22	4
44	32	26	4
50	70	29	7
51	90	29	5
52	100	30	5
53	82	32	4
54	75	26	4
56	73	27	4

壁材か屋根材(壁から傾斜しているもの)

35	43	21	4
55	53	19	5

柱 直径17cm  
壁材(壁に立っているもの)

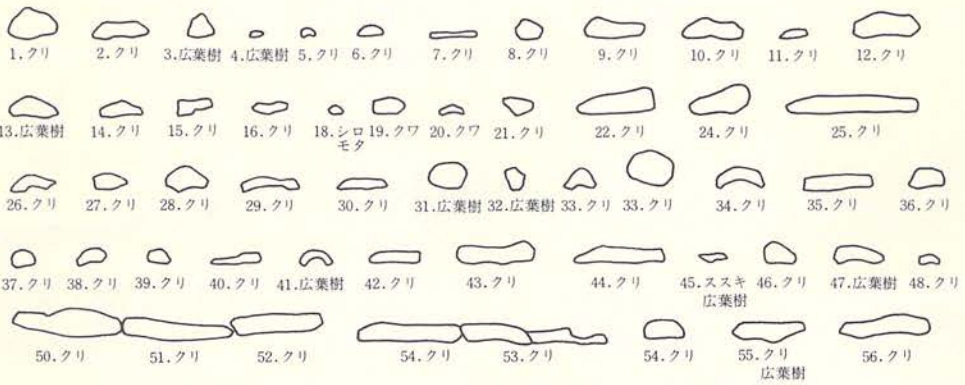
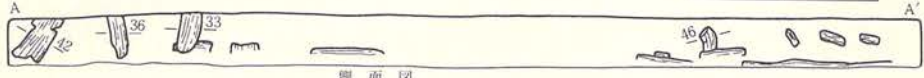
33	22	11	9	丸太材
36	23	8	5	丸太材
42	27	13	3	板材

根太

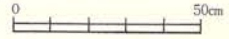
47	138	12	4
58		13	

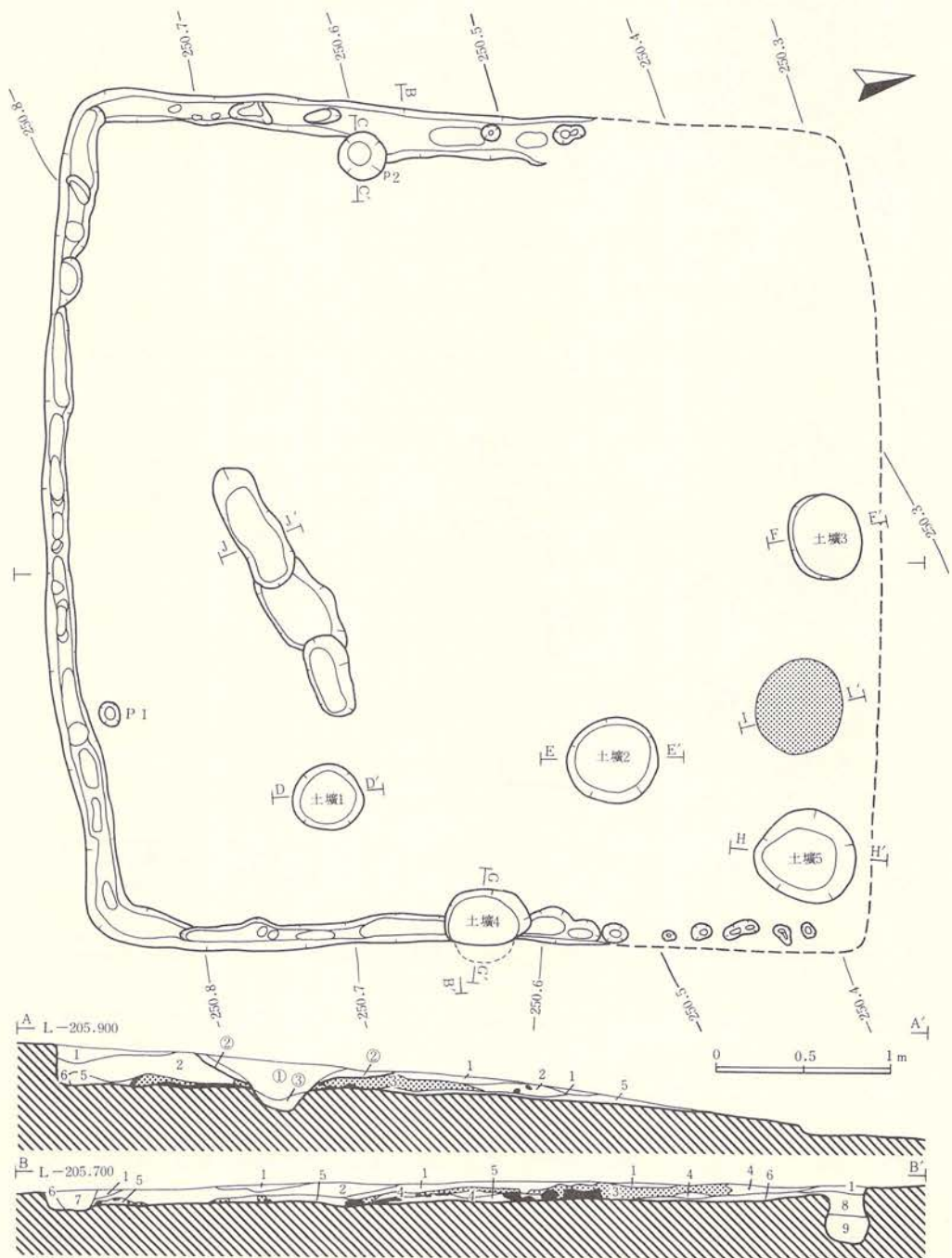
その他

8	68	10	6	丸太材
22	24	19	6	板材



第81図 ME 19 竪穴住居跡(1)

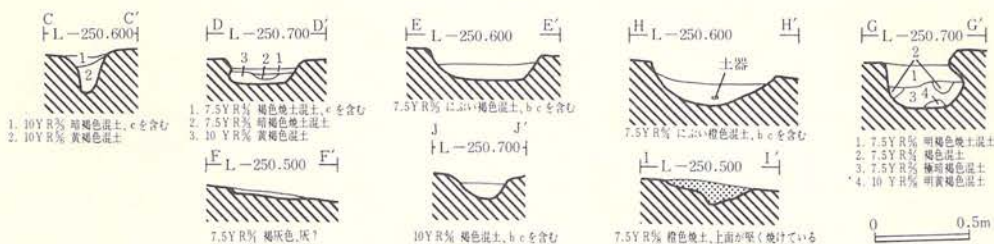




- |                                 |                               |
|---------------------------------|-------------------------------|
| ① 10 Y R 5/6 黄褐色混土 焼土炭化材を含む 攪乱  | 4. 7.5 Y R 5/6 褐色焼土混土         |
| ② 7.5 Y R 5/6 明褐色混土 焼土炭化材を含む 攪乱 | 5. 7.5 Y R 5/6 暗褐色混土 炭化物を含む   |
| ③ 10 Y R 5/6 黄褐色混土 攪乱           | 6. 10 Y R 5/6 にぶい黄褐色混土        |
| 1. 10 Y R 5/6 黒褐色混土             | 7. 10 Y R 5/6 褐色混土 焼土炭化材を含む   |
| 2. 10 Y R 5/6 黄褐色混土 焼土炭化材を含む    | 8. 10 Y R 5/6 黄褐色土 焼土粒若干含む    |
| 3. 5 Y R 5/6 明赤褐色混土 堅い部分がある     | 9. 10 Y R 5/6 にぶい黄褐色混土 炭化物を含む |

第82図 VI E 19 竪穴住居跡 (2)





第83図 ME 19 竪穴住居跡(3)

カマドは削平されて全体については不明であるが、燃烧部の一部とみられる焼土が遺存していた。焼土は北壁東端部にあたり、直径50cmほどの円形で厚さは12cmである。

削平された北半を除いて周溝が検出されている。南壁と東西壁の南半では幅15cm、深さが10cmの溝状を呈し、部分的に小ピット状をなしている。削平された東壁北半では5~10cmの小ピットとして検出されており、本来は小ピットの集合体として溝状をなしていたものかもしれない。

土壌は5個検出されている。土壌1は住居跡南東部で、東壁の西60cm、南壁の北1.1mに位置している。直径40cmで、深さが12cmの浅い皿状をなす。埋土は焼土、炭化物を含む褐色混土等である。土壌2は焼土の南方60cmに位置する直径50cmの浅い皿状(深さ13cm)の土壌である。埋土はにぶい褐色混土の単層である。土壌4は東壁中央に位置する。底部が壁外に続いており、袋状をなす。平面形は48×32cmの長円形で、底部では直径38cmの円形をなす。深さは23cmで、埋土は明褐色焼土混土、極暗褐色混土等である。土器10が出土している。

土壌3はカマドの西に隣接している。直径50cmの浅い皿状をなす。北半が削平されていて痕跡を残すのみである。埋土は灰褐色の灰層?である。土壌5はカマドの東に隣接するもので、土壌3の反対側にあたる。直径50cm、深さ18cmで底部が鍋底状を呈する。埋土はにぶい橙色混土で土器(129、131、134)が含まれていた。

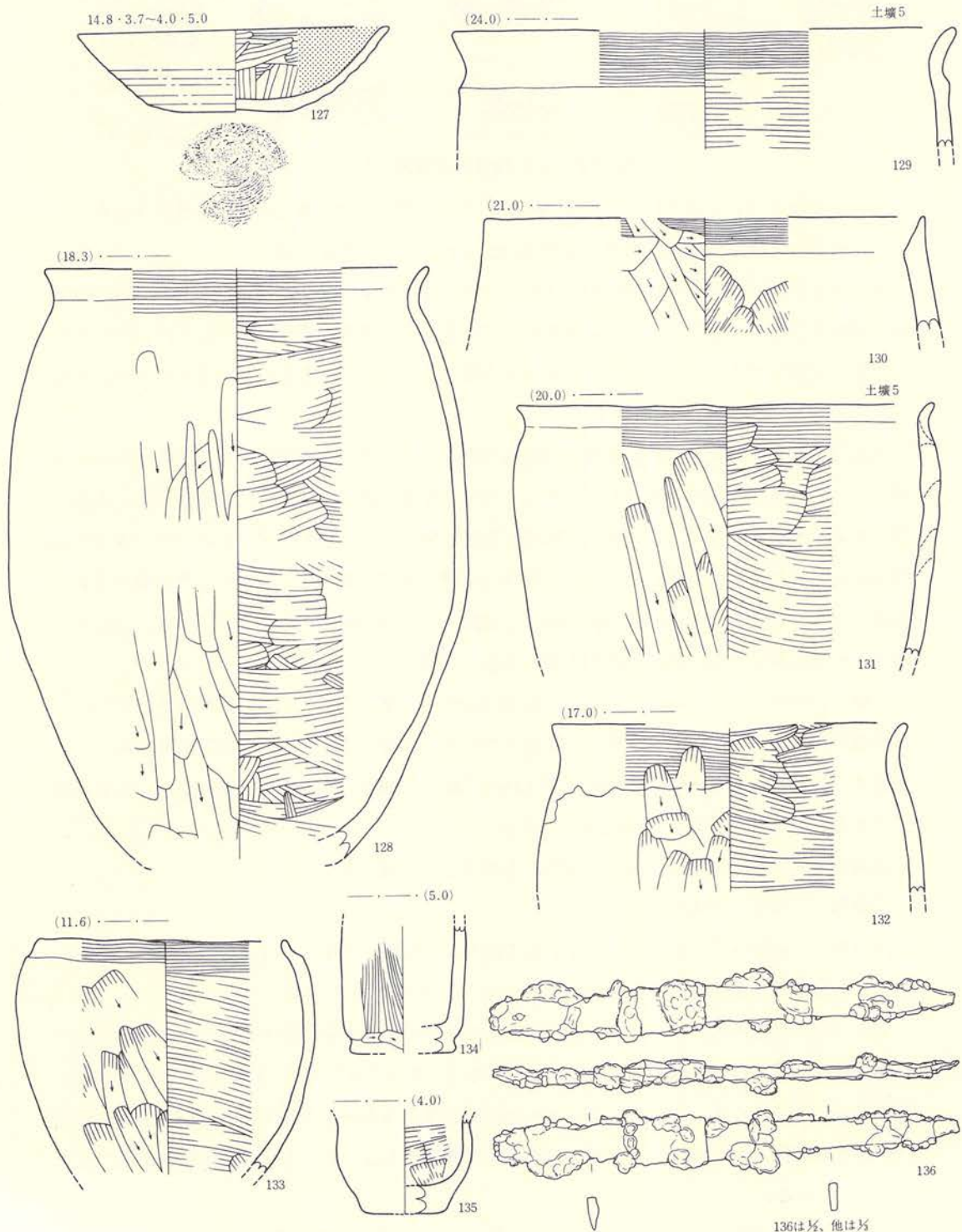
遺物は中央西部の床面と土壌5の埋土から集中して発見されている。

〈遺物〉(84図、図版80・101)

発見された遺物は土師器74点、刀子1点である。土師器には坏(6点)と甕(68点)がある。このうち掲載した遺物は土師器9点(127~135)と刀子(136)である。

127は内面黒色処理された坏であるが、二次火熱のため赤褐色を呈する部分、須恵器のように青灰色をなす部分など破片によって色調が異なる(巻頭写真)。器形は全体的に器高が低く、皿形に近い形状をなす。内面のヘラミガキ調整は上半が横方向、内底部が方射状である。外面はロクロ成形痕がやや顕著で、底部は回転糸切無調整である。以上の他には黒色無処理の破片が含まれている。

128~135は甕である。いずれも非ロクロ成形されたもので、128~132は大型甕に属する。器



第84図 VI E 19 竖穴住居跡出土遺物



形は128によると体部中ほどに最大部をもつ長胴甕である。口縁部形態には外反するもの(128、129、131、132)、直口で内そぎとなるもの(130)がある。131は口縁部の横ナデによって肩部に段が形成されており、中型甕133の大型品とみられる。調整技法は口縁部が横ナデ、外面が縦方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデである。ただし、ヘラケズリ調整は128を除いて弱いものである。

133は中型甕である。体部上半に最大径をもち、全体的に丸味をもった器形をなす。口縁部は内彎しながら立ち上がり、外面が段となって蓋受状をなしている。外面が縦方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデ調整である。

134、135は小型甕である。134は筒形をなし、底部が高台状に高くなっている。外面が縦方向の弱いヘラケズリ調整である。135は体部中央に脹らみをもち、口縁部が外反するものようである。底部は前者同様に高台状に高くなっている。底部は両者とも肉厚である。なお、上記以外にも小型甕の破片が3個体存在する。

136は長さ14.8cm、茎の長さ8.2cmの刀子とみられる。峯区で、区の部分が広がっている。刃部は使い減りによるものか狭くなっている。刃の部分は折損後接合したものようである。

以上の他には炭化した胡桃7点が床面直上から発見されている。数種類のものが混在している。いずれも熱を受けた後割れたものである。中にはネズミによってかじられたものも含まれている。

## 9. VI116竪穴住居跡

〈遺構〉(第85・86図、図版64)

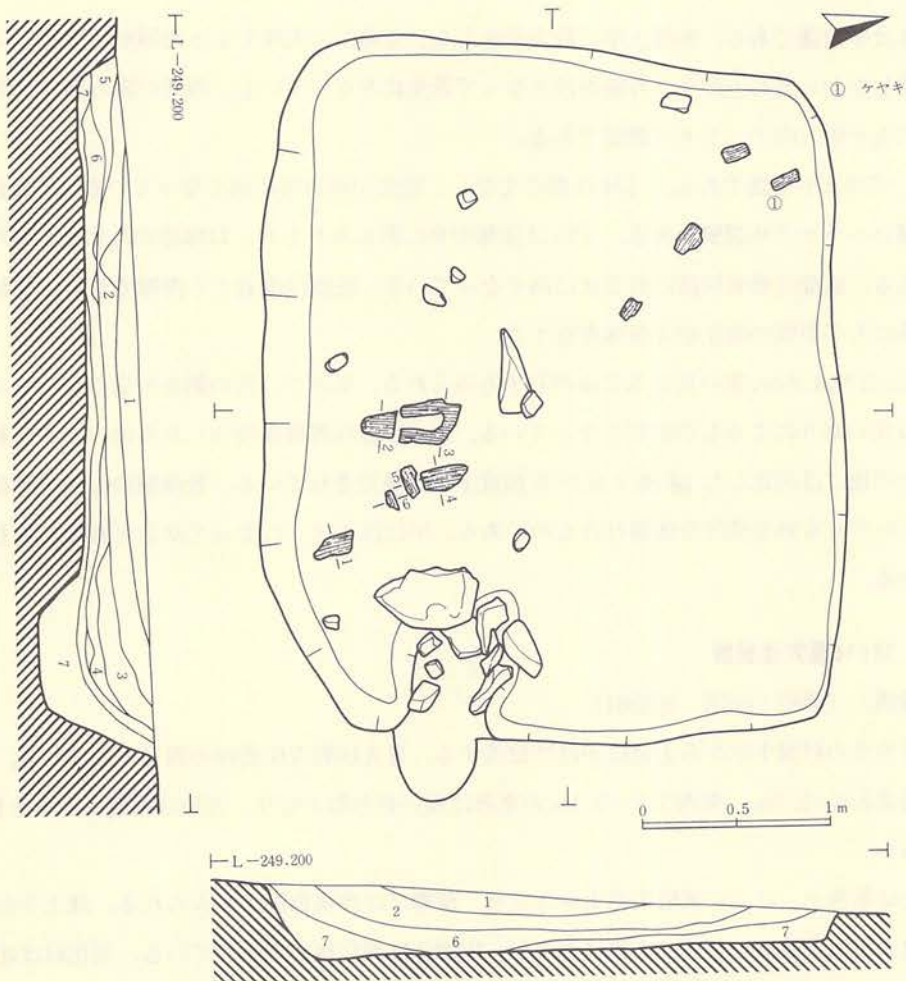
東区中央の斜面中位から上位にかけて位置する。VII A16竪穴住居跡の西方4mである。平面形は南北2.6~2.7m、東西3.2~3.4mの東西に長い長方形となり、方向は西壁によるとN17°Eである。

埋土は黒色土、にぶい黄橙色混土からなり、壁際には黒褐色混土がみられる。埋土下位には苫小牧火山灰が粒状、ブロック状に混入し、床面には炭化材が含まれている。炭化材は北西隅から中央に向かって、またカマド前面においても中央に向かって小さな断片となって検出された。主に厚さ2cmほどのカヤの集まりである。なお、苫小牧火山灰については蛍光X線分析によって確認されている(付編参照)。

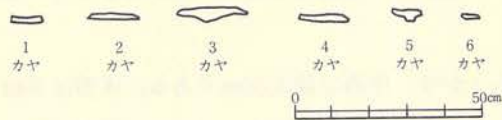
また北東部には灰褐色混土、橙色焼土混土が投げ込まれている。厚さが15cm、8cmである。(写真図版64)

壁はやや直に立ち上がり、壁高は最大28cmである。床面は平坦で、全体的に5~10cmの褐色混土で貼床されているが、比較的らわらかい。柱穴、周溝は検出されていない。

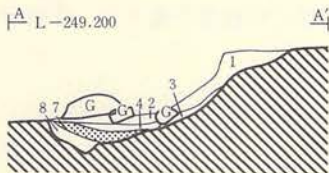
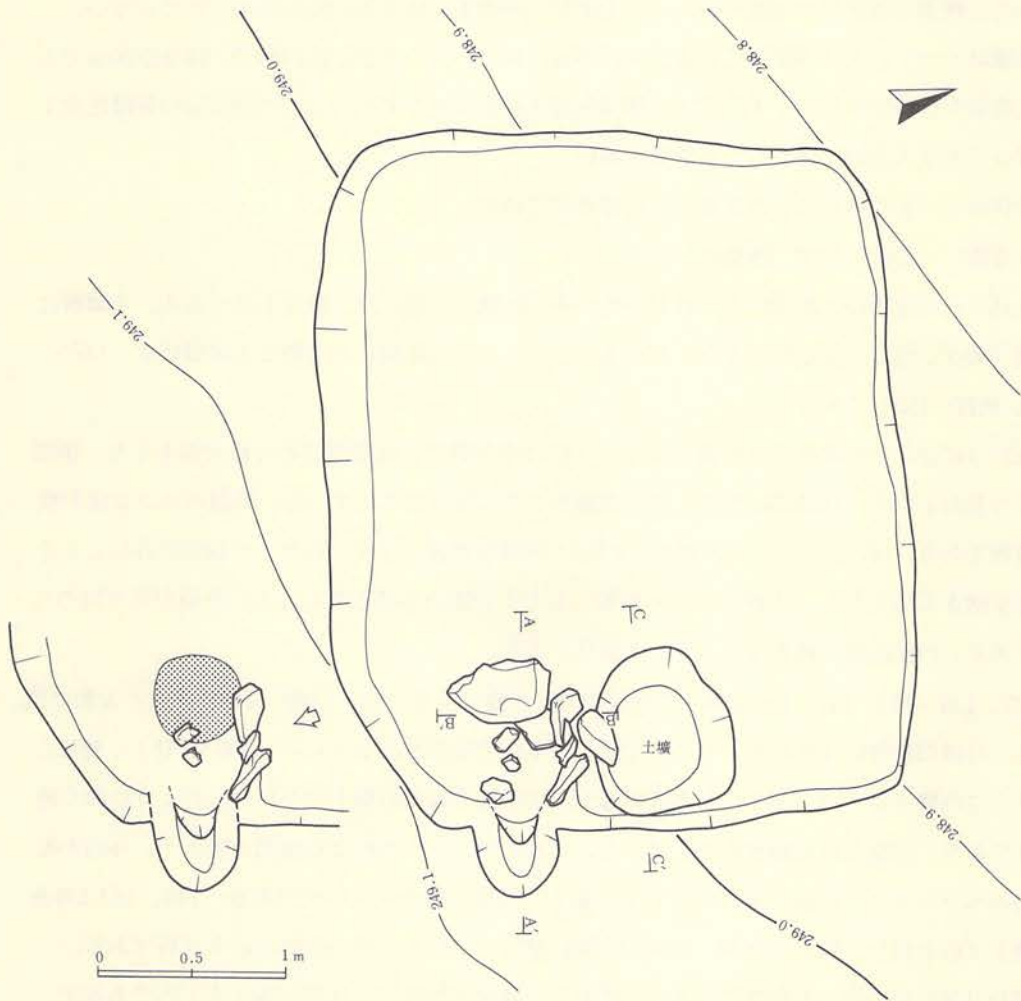




- |               |                       |               |                   |
|---------------|-----------------------|---------------|-------------------|
| 1. 5 YR 5     | 黒褐色砂質土 サラサラするが締っている   | 5. 7.5 YR 3/4 | 暗褐色泥土             |
| 2. 10 YR 3/4  | 黒色 非常にやわらかい 下位ほど黒色が強い | 6. 10 YR 3/4  | にじい黄褐色泥土 苫小牧火山灰混入 |
| 3. 7.5 YR 5/4 | 灰褐色泥土 苫小牧火山灰混入 cを含む   | 7. 5 YR 5/4   | 黒褐色泥土 苫小牧火山灰 cを含む |
| 4. 7.5 YR 5/4 | 橙色焼土泥土                |               |                   |



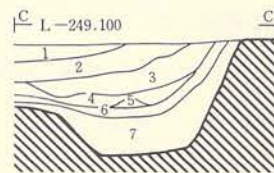
第85図 VI 16 竪穴住居跡 (1)



- 1. 10 YR 5/2 にぶい黄褐色 灰白色火山灰混土
- 2. 10 YR 5/2 褐色焼土混土
- 3. 10 YR 5/2 黒褐色混土
- 4. 7.5 YR 5/2 明褐色焼土混土
- 5. 10 YR 5/2 明黄褐色土
- 6. 10 YR 5/2 灰黄褐色混土



- 7. 5 YR 5/2 明赤褐色焼土
- 8. 7.5 YR 5/2 褐色焼土混土
- 9. 10 YR 5/2 暗褐色混土
- 10. 10 YR 5/2 褐色混土



- 1. 5 YR 5/2 黒褐色砂質土
- 2. 10 YR 5/2 黒色土
- 3. 7.5 YR 5/2 灰褐色混土
- 4. 7.5 YR 5/2 橙褐色焼土混土
- 5. 7.5 YR 5/2 灰褐色混土
- 6. 10 YR 5/2 にぶい黄橙色混土
- 7. 5 YR 5/2 黒褐色混土

第86図 VI 16 竪穴住居跡 (2)

カマドは東壁南部に位置する。天井石は崩落しているが保存状況は良好である。総長 1.15m で、壁外部分が 35cm である。燃烧部は壁の内側 30cm で、焼土は直径 45cm の円形で、厚さが 10cm である。側壁は礫を用いるもので、両側壁とも北に傾いている。天井石は前面と北側に崩落していた。煙道は燃烧部から緩やかに立ち上がり、そのまま納まる。礫は使用されていない。

土壇はカマドの北に隣接している。東西 95cm、南北 75cm の不整な長円形で、深さが 20cm である。底面が広い播鉢状をなす。埋土は黒褐色混土が主体をなすが、上位にはにぶい黄橙色混土が覆っており人為的に埋められた公算が強い。

遺物はカマドを中心にした床面から発見されている。

〈遺物〉（第 87・88 図、図版 81）

発見された遺物は土師器 85 点、鉄釘 1 点、それに縄文土器 6 点、剥片 1 点である。土師器には甕（80 点）、壺（1 点）、鉢（4 点）がある。これらのうち掲載した遺物は土師器 15 点（137～151）、鉄釘（152）である。

143、147 はロクロ成形された甕である。143 は中型甕で、体部中ごろに最大部をもち、頸部をもつ器形をなす。口縁部は外反して、端部が上下に挽き出されている。外面のロクロ成形痕が顕著である。147 は小型甕で全体的には 143 と同様な器形をなす。ただ、口縁部は外反してそのまま納まる形である。138 はロクロ成形された大型甕の体部とみられる。外面が斜方向のヘラケズリ、内面は横、斜方向のヘラナデ調整である。

137、139～142、144～146 は非ロクロ成形された甕である。137、139～142 の 5 点が大型に属する。口縁部形態には外反するもの（137）、外反して端部が細まるもの（139～141）、外反してさらに内彎するもの（142）がある。なお、141 は口縁部の横ナデが決られたように深く施されており、段状又は沈線状をなしている。これらの土器の調整は口縁部が横ナデ、外面が縦方向のヘラケズリ、内面が縦方向（137）、あるいは横方向のヘラナデである。140、142 は外面に積上げ痕を残し、胎土、色調、焼成が非常に酷似している。同一成形を示す資料である。

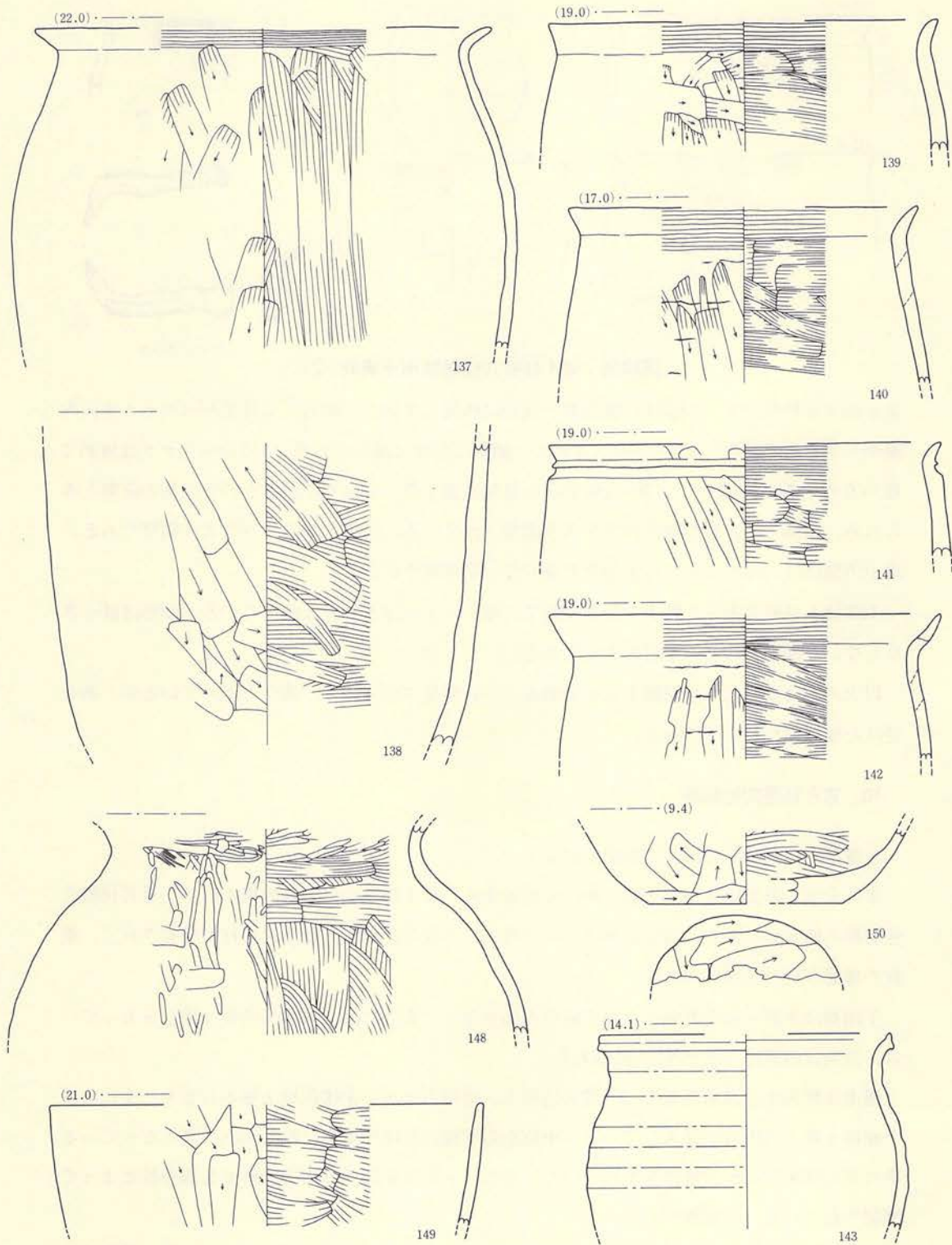
144～146 は中型甕、小型甕である。いずれも口縁部が外反し、端部が細まるものであるが、144、146 は肩部に弱い段をもっている。調整技法は大型甕と同様に口縁部が横ナデ、外面が縦方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデである。

以上の他には、口縁部が外折する破片と、肩部に段をもつて大きく外反する破片がある。

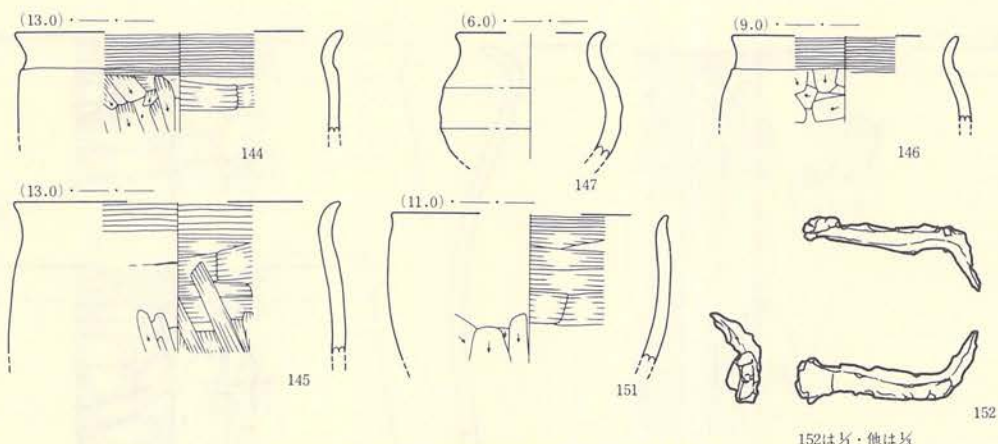
148 は体部が大きく脹らむもので、壺と思われる。口縁部は欠損しているが、頸部から大きく外反するものの様である。頸部から上が横方向、下半が縦方向に細かいヘラミガキ調整されている。内面は肩部以上が横方向、下半が縦方向のヘラナデである。肩部外面には幅 1mm に満たない黒色の線がめぐり、さらに垂下する 1 本が観察される。

149、151 は口縁部に最大径をもち鉢とみられる。149 は器厚が 4mm と均一で、口縁部がその





第87图 VI 16豎穴住居跡出土遺物 (1)



第88図 VI I 16 竪穴住居跡出土遺物(2)

まま納まる形をなす。151は口縁端部が僅かに外反している。両者とも外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。なお149のヘラケズリ調整は全面に及んでおり、151のヘラナデは極めて粗いものである。また、150は底部から急激に薄くなって立ち上がるもので、鉢の底部とみられる。体部下端が横方向にヘラケズリ調整されている。底部もまたヘラケズリ調整である。以上の他には、ほとんど立ち上がりを見せない底部破片がある。

152は1寸釘である。断面方形の和釘で、頭から2cmほどで折れ曲っている。頭部ははっきりしないが両端が広がる平釘のようである。

以上の他には炭化した胡桃1点が床面直上から発見されている。細片となっているが、熱を受けた後に割れたようである。

## 10. VII A 16 竪穴住居跡

〈遺構〉(第89～91図、図版65～67)

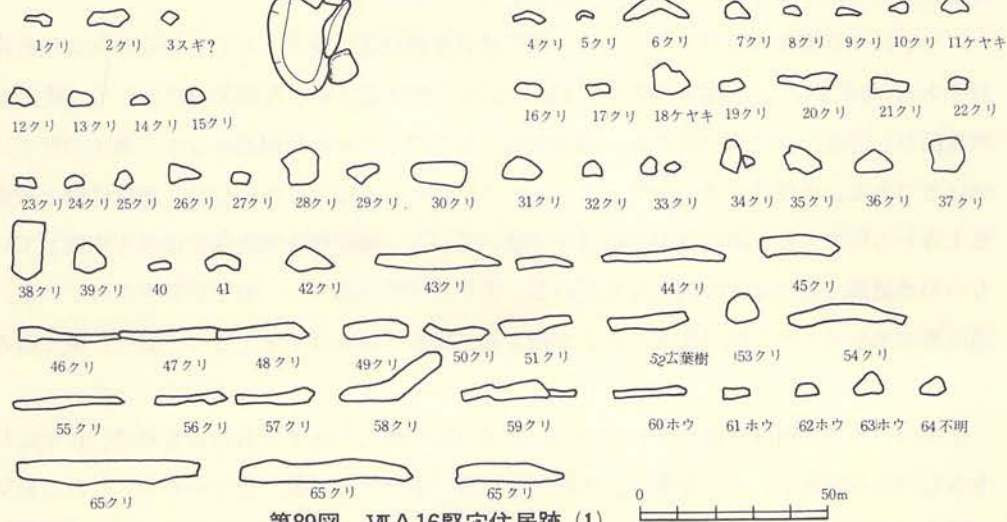
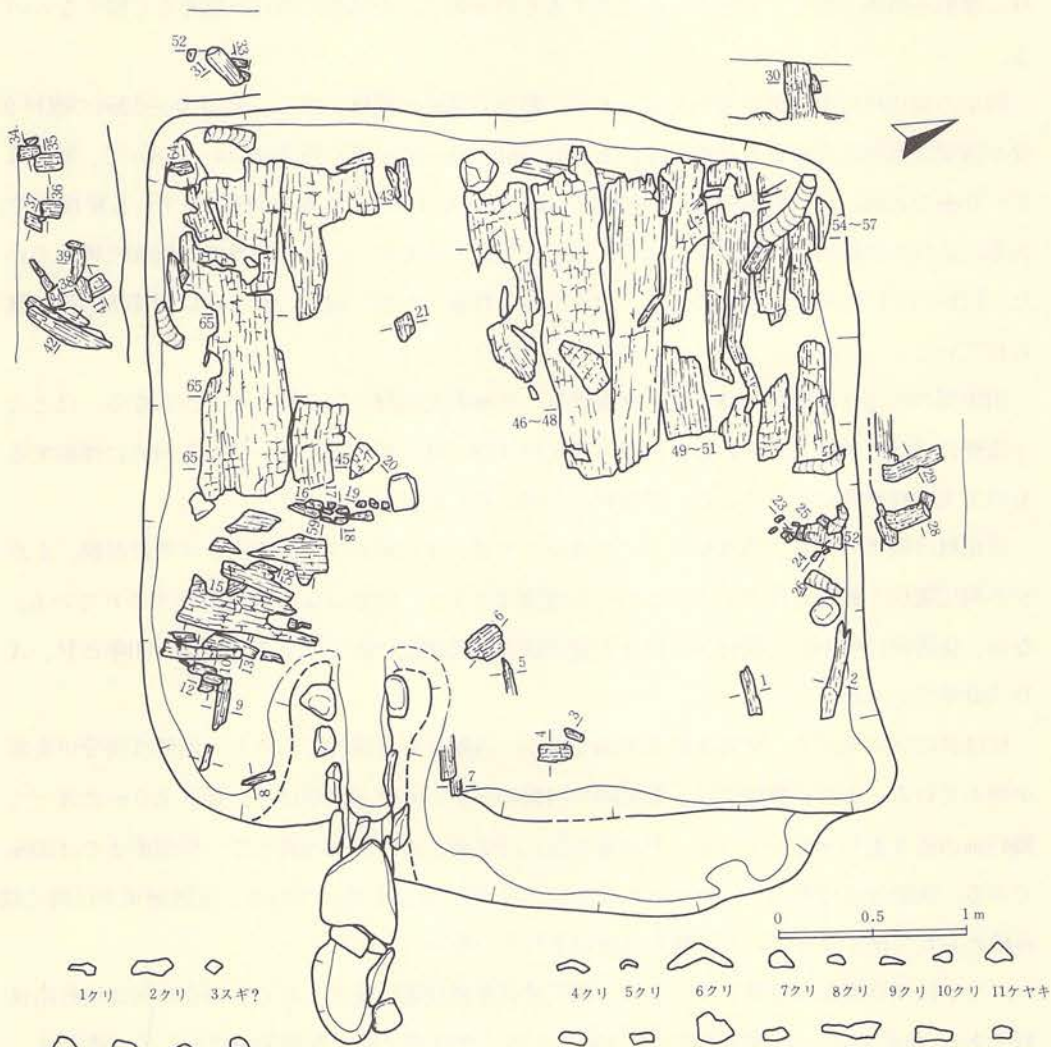
東区中央の斜面中位から上位にかけて位置する。VI I 16 竪穴住居跡の東4mで、VII E 16 竪穴住居跡の西8mである。当住居跡は焼失住居跡で、保存状況の良好な炭化材が発見されて、敷板の確認された住居跡である。

平面形は東西・南北方向とも3.7mの方形をなし、東壁には、幅45cmの張り出しをもっている。方向は西壁によるとN25°Eである。

埋土は黒色土、黒褐色混土、灰黄褐色混土、暗褐色混土、赤褐色焼土等からなり、中位には十和田a降下火山灰が混入している。中位から下位にかけて焼土が最大10cmの層となっている。その下には炭化材が大量に含まれていた。なお、十和田a降下火山灰は蛍光X線分析によって確認されている(付編参照)。

炭化材は床面では住居跡の西半と南東部に集中し、カマドの周辺に散在している。壁際では





第89図 VII A 16 竪穴住居跡 (1)



北西隅、南西隅と北壁中央部、南壁西端に遺存している。いずれも保存状況は良好で、特に板材は原形を留めており、厚さが6cmに達するものがある。全体的に炭化状態をなし堅くなる。

西半の炭化材は中央部が欠失しているが、整然と並んだ板材である。幅が20～52cmの板材9枚が西壁に直角になるように並んでいる(43～51、54～57、65)。長さは1.14～1.8mで、厚さは3～6cmである。最大のものは(65)で幅が52cm、長さが1.8mである。板材はいずれも柃目板である。これらの板材は根太の上では若干脹らんで高まるものの、それ以外では床面に接していた。板材の下には根太が渡してあり、敷板とみられる。なお、根太の真下には周溝状の溝が掘られていた。

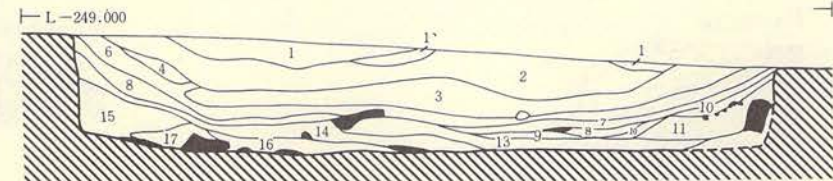
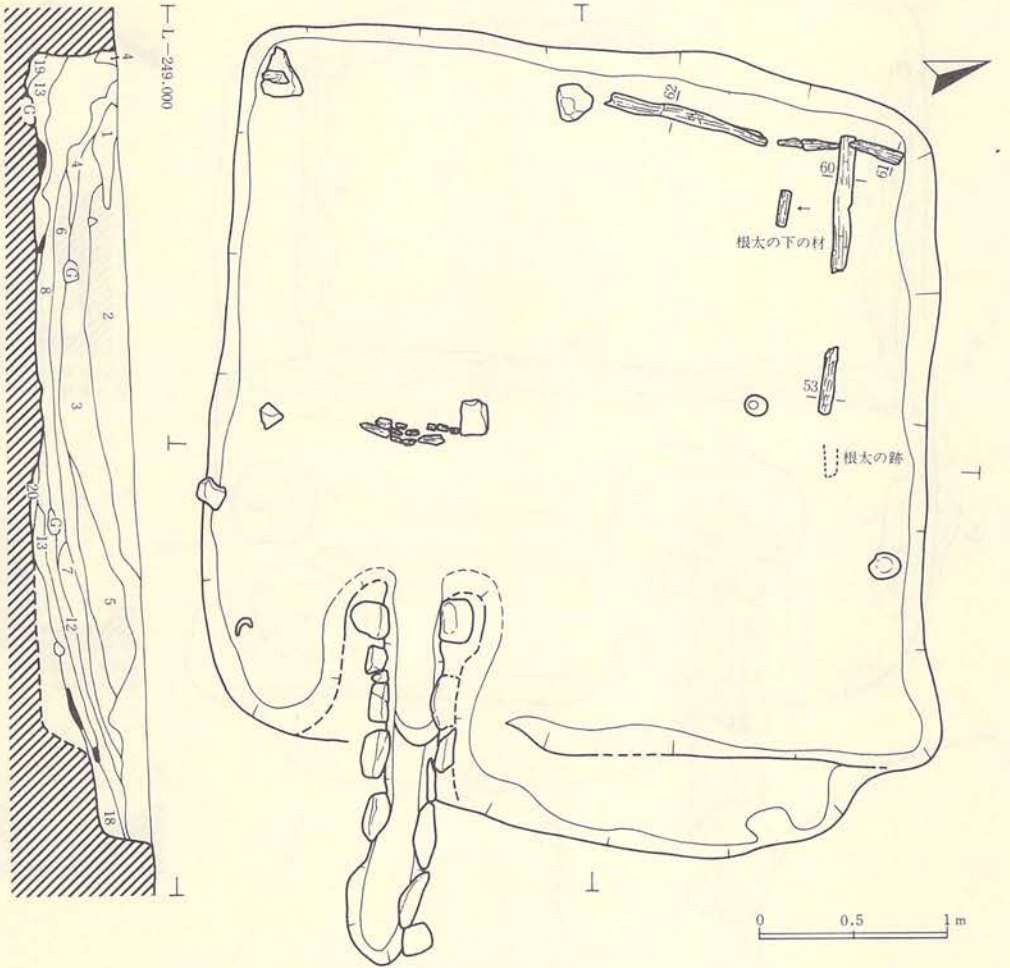
南東部の炭化材は板材(58、59)と直径5、6cmの丸太材(10～15)などからなる。ほとんど南壁にほぼ直角に並んでいる。壁際の炭化材(28～31、42など)は、壁から斜めに傾斜するもので丸太材が多いようである。屋根材の一部かもしれない。

炭化材は64点のうち、55点がクリ、2点がケヤキ、4点がホウ?、1点が不明針葉樹、1点が不明広葉樹と鑑定されている。このうち敷板はクリで、根太にはホウ?が使用されている。なお、住居跡に敷かれた板材(No.21)は放射性炭素年代測定の結果によると1220±90年BP、AD 730年であった。

壁は直に立ち上がり、壁高は最大50cmである。各壁とも直線的であるが、西壁は幾分中央部が脹らんでいる。また、東壁には、北東隅の内側40cmからカマドにかけて、長さ2.0mに渡って幅45cmの張り出しをもっている。その張り出しは床面からは30cmの高さで、検出面までは20cmである。床面はほぼ平坦で、カマドの焼き口部分が12cmほど凹んでいる。住居跡東半は特に踏み締められて堅くなっていた。柱穴は確認されていない。

カマドは東壁南部に位置している。一部天井石を原位置に残すもので、保存状況は比較的良好である。総長2.2mで、壁外部分が1.15mである。燃焼部は壁の内側50cmにあって、焼土は燃焼部から煙道にかけて形成され、幅が20cm、長さが1.1mの長円形をなす。焼土の厚さは6cmほどである。燃焼部は煙道の幅とほぼ同じで、特に広がってはいない。側壁は礫と黄褐色粘土等から構成され、礫は12個で煙道まで続いている。構成礫は燃焼部では若干内傾しているものの煙道部ではほぼ直に据えられている。天井石は壁外部分が一部原位置を保っている。煙道は燃焼部から上り勾配で続きそのまま納まる。焼き口部分は窪地となっており、堅く踏み固められている。

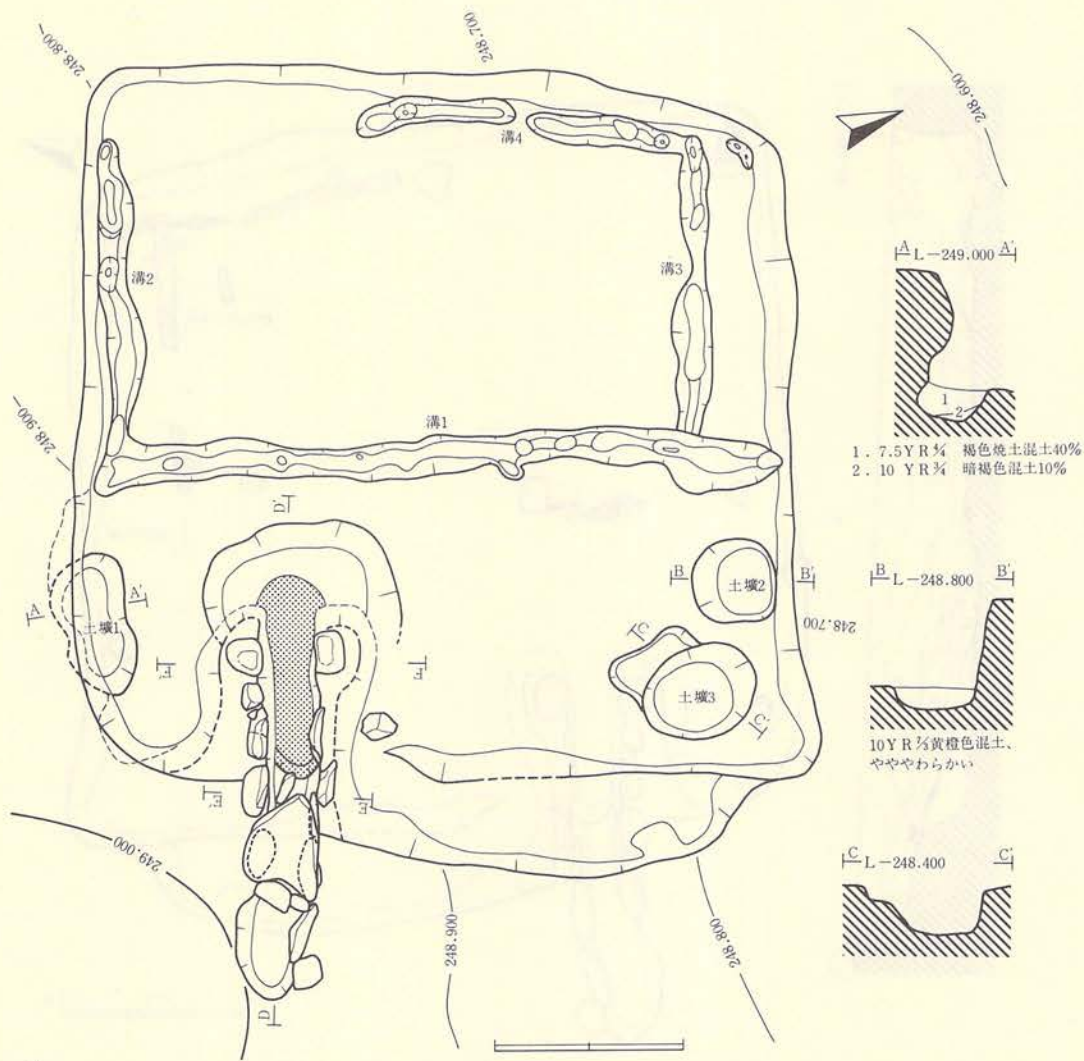
住居跡の西半で周溝が検出されている。前述の如く根太の真下にあたるもので、根太に対応するものとみられる。その配置は、住居跡を東西に2分する位置に溝1があり、これに直交する溝2(南壁際)、溝3(北壁の南30cm)がある。また、溝1に平行する位置に溝4(西壁際)



- |                |                          |                 |                |
|----------------|--------------------------|-----------------|----------------|
| 1. 10 Y R 5/6  | 黒色土                      | 11. 10 Y R 5/6  | 褐色混土           |
| 2. 10 Y R 5/6  | 黒色土焼土 炭化物を含む             | 12. 10 Y R 5/6  | 暗褐色混土 炭化物を含む   |
| 3. 10 Y R 5/6  | 暗褐色混土                    | 13. 5 Y R 5/6   | 赤褐色焼土          |
| 4. 10 Y R 5/6  | 褐色混土                     | 14. 10 Y R 5/6  | 暗褐色焼土混土        |
| 5. 10 Y R 5/6  | 黒褐色混土                    | 15. 10 Y R 5/6  | 暗褐色混土          |
| 6. 10 Y R 5/6  | 暗褐色混土 2.5 Y 5/6黄褐色火山灰を含む | 16. 7.5 Y R 5/6 | 明褐色焼土          |
| 7. 10 Y R 5/6  | 灰黄褐色混土                   | 17. 10 Y R 5/6  | 黒褐色混土 焼土炭化物を含む |
| 8. 10 Y R 5/6  | 暗褐色混土                    | 18. 10 Y R 5/6  | 暗褐色混土          |
| 9. 10 Y R 5/6  | 暗褐色混土焼土 炭化物を含む           | 19. 7.5 Y R 5/6 | 明褐色土           |
| 10. 10 Y R 5/6 | 褐色混土                     | 20. 7.5 Y R 5/6 | 黒褐色混土          |
| 11. 10 Y R 5/6 | 灰黄褐色混土 Ta-a火山灰を含む        |                 |                |

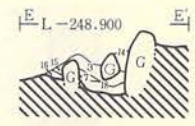
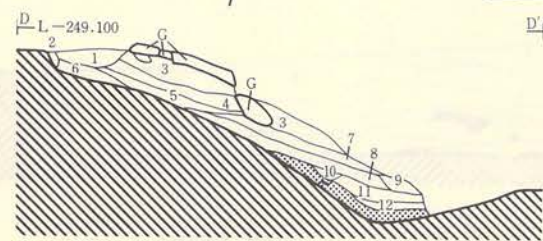
第90図 VII A 16竪穴住居跡 (2)





1. 7.5YR $\frac{7}{4}$  褐色焼土混土40%  
 2. 10YR $\frac{7}{4}$  暗褐色混土10%

10YR $\frac{7}{4}$ 黄橙色混土、  
 やややわらかい



- |                                      |   |
|--------------------------------------|---|
| 1. 10 YR $\frac{7}{4}$ 黒褐色混土         | 10. 10 YR $\frac{7}{4}$ におい黄褐色混土 白色粘土を含む    |
| 2. 10 YR $\frac{7}{4}$ 暗褐色混土         | 11. 10 YR $\frac{7}{4}$ におい黄褐色混土 ab、c、粘土を含む |
| 3. 10 YR $\frac{7}{4}$ におい褐色混土やわらかい  | 12. 10 YR $\frac{7}{4}$ 明黄褐色土               |
| 4. 10 YR $\frac{7}{4}$ におい黄褐色混土やわらかい | 13. 7.5YR $\frac{7}{4}$ 橙色焼土                |
| 5. 10 YR $\frac{7}{4}$ 黒褐色混土         | 14. 10 YR $\frac{7}{4}$ 黒褐色混土               |
| 6. 7.5YR $\frac{7}{4}$ 黒褐色混土:bを含む    | 15. 2.5YR $\frac{7}{4}$ におい黄色土              |
| 7. 10 YR $\frac{7}{4}$ 褐色混土          | 16. 10 YR $\frac{7}{4}$ 黒褐色混土               |
| 8. 10 YR $\frac{7}{4}$ におい黄褐色混土      | 17. 2.5YR $\frac{7}{4}$ 灰黄色土 To-aを含む        |
| 9. 10 YR $\frac{7}{4}$ におい黄褐色粘土      | 18. 10 YR $\frac{7}{4}$ 黒褐色混土 炭屑            |
|                                      | 19. 10 YR $\frac{7}{4}$ 暗褐色混土 堅い            |
|                                      | 20. 2.5Y $\frac{7}{4}$ 浅黄色粘土                |
|                                      | 21. 10 YR $\frac{7}{4}$ 褐色混土 白色粘土を含む        |
|                                      | 22. 10 YR $\frac{7}{4}$ 黒褐色混土               |
|                                      | 23. 10 YR $\frac{7}{4}$ 褐色焼土混土              |
|                                      | 24. 10 YR $\frac{7}{4}$ 暗褐色混土上に炭化物層をもつ      |
|                                      | 25. 10 YR $\frac{7}{4}$ 黒褐色土                |
|                                      | 26. 10 YR $\frac{7}{4}$ 褐色混土                |
|                                      | 27. 10 YR $\frac{7}{4}$ におい黄褐色土 To-aを含む     |

第91図 VIIA16竪穴住居跡 (3)



がある。ただし、溝4は北半1.8mのみである。

溝の幅は10~30cmで、深さは5cm内外である。底面は凹凸が著しく一定ではない。埋土は非常に柔らかい暗褐色混土の単層である。溝の中には煤の付着、帯状の焦付きや焼土化など根太の痕跡をそのまま示す部分も認められ、溝のまま存在したものようである。

土壌は北東部と南東部で、対応する形に3個検出されている。土壌1は南壁東部に位置し、カマドの南にあたっている。底部が壁側に張り出して袋状をなし、平面形は76×20cmの不整な長円形をなし、底部では55×25cmのダルマ形をなす。深さは18cmで、埋土は褐色焼土混土で、人為的に埋められている。

土壌2は、東壁の西0.8mで北壁に接している。土壌1の西半に対応している。直径45cmほどの円形で、深さが12cmである。埋土は黄橙色混土の単層でやわらかい。土壌3は北東隅に位置する。62×50cmの長円形で、深さは24cmである。埋土は暗褐色混土の単層である。内側に不整形な段を伴っている。

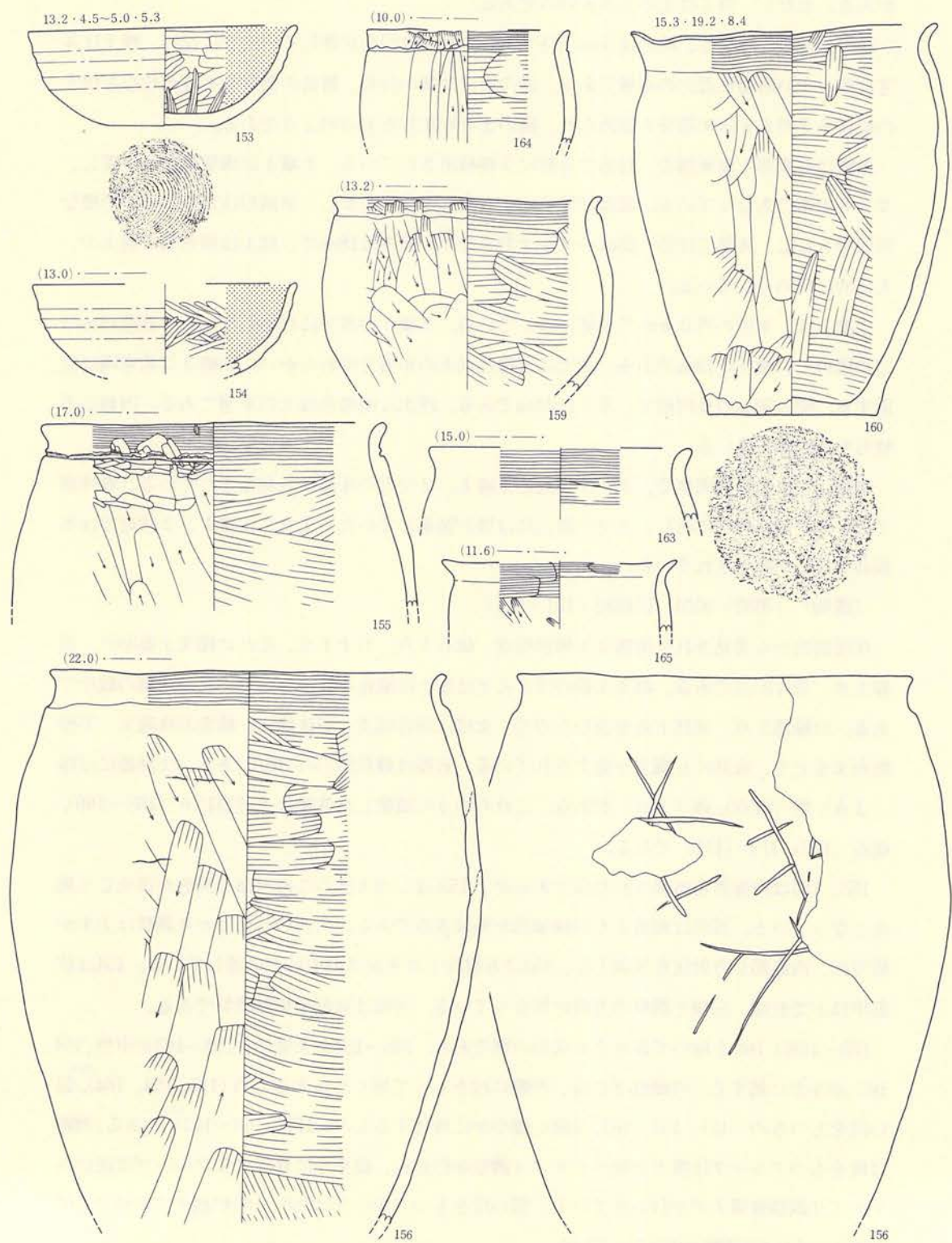
遺物は主に住居跡東半で、カマド周辺と土壌1、2付近の床面から発見されている。器種別では、北壁側に坏が点在し、カマド周辺には甕が密集していた。また、土壌1、2付近では木製品と砥石が発見されている。

〈遺物〉（第92・93図、図版82・101・113）

住居跡内から発見された遺物は土師器85点、砥石1点、刀子1点、それに縄文土器38点、石器1点、碎片2点である。縄文土器のほとんどは胎土に繊維を含むもので、前期前葉の破片である。口縁部2点、底部1点を含むもので、文様は斜行縄文、羽状縄文、結束羽状縄文、不整擦糸文などで、底部にも縄文が施文されている。石器は棒状擦石(51図63)ある。土師器には坏(3点)、甕(81点)、鉢(1点)がある。これらのうち掲載した遺物は土師器17点(153~169)、砥石(170)、刀子(171)である。

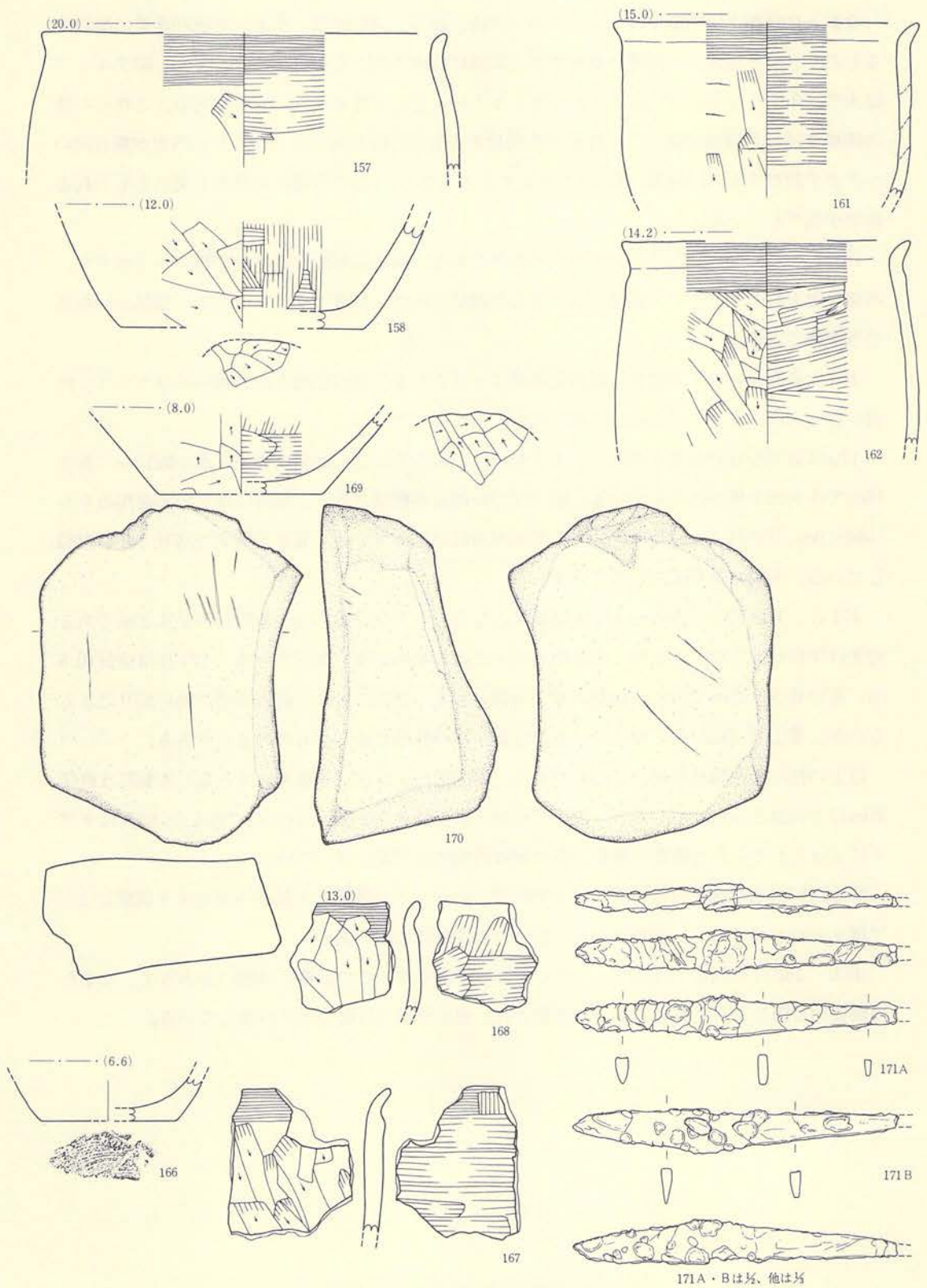
153、154は内面黒色処理された坏であるが、153は二次火燃のため内面の黒色が消失して褐色となっている。器形は両者とも口縁端部が外反ぎみである。内面のヘラミガキ調整は上半が横方向、内底部が方射状を基調とし、153は方射状ミガキが体部中ほどに達している。154は体部中ほどで右傾、左傾と調整の方向が異なっている。底部は回転糸切無調整である。

155~168は166を除いて非ロクロ成形の甕である。155~157が大型で、159~163が中型、164、165が小型に属する。口縁部下には、明瞭に段をもって短く外反するもの(155、159、164)、弱い段をもつもの(155、165、167、168)、緩やかに外反するもの(157、160~163)<sup>(注2)</sup>がある。明瞭に段をもつグループは横ナデ後ヘラケズリ調整が行われ、緩やかに外反するグループは逆にヘラケズリ調整後横ナデが行われている。弱い段をもつグループは156、165が横ナデが後で、167、168がヘラケズリ調整が後となっている。



第92图 VII A 16竖穴住居跡出土遺物(1)





第93図 VIIA 16 竪穴住居跡出土遺物(2)



なお、口縁部下に明瞭な段をもつグループは、器形、調整技法、胎土、焼成が非常に酷似するもので、同一地域で、同時に成形され、同時に焼成されたものであろう。また、同グループは大型、中型、小型と分けることができ、1セットとして捉えられる資料である。これらの甕の調整技法は口縁部が横ナデ、外面は強弱はあるものの縦方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデ調整である。底部は160が木葉底である。なお、156の体部には絵とも文字ともとれる線刻が施されている。

158は大型甕の底部で、166は中型甕の底部である。前者は外面が斜方向の粗いヘラケズリ、内面は縦方向のヘラナデ、底部がヘラケズリ調整であり、後者はロクロ成形で、底部が回転糸切無調整である。

169は底部から大きく開き、鉢の底部破片とみられる。外面が縦方向の粗いヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデである。底部は粗いヘラケズリである。

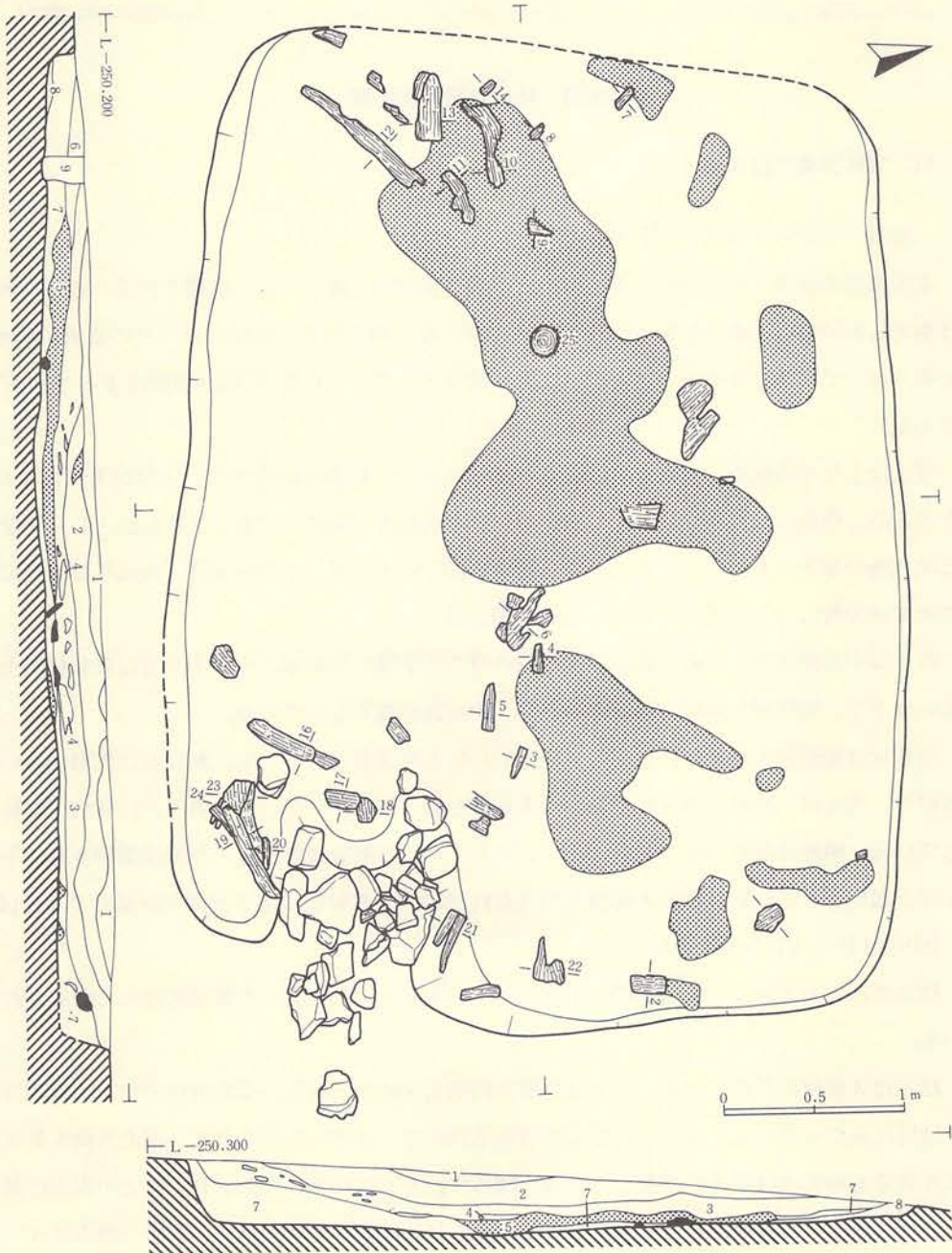
170は扁平な石の表裏と側面の3面を利用した砥石である。砥面は表裏2面が幅10cm、長さ16cmで中央部が僅かに凹んでいる。縦方向の使用痕が観察される。側面は横方向の使用痕をもつ幅6.0cm、長さ11.0cmで縦方向に対して三日月状に凹んでいる。ⅦF23竪穴住居跡241に酷似している。石材は両輝石安山岩である。

171 A、Bは刀子である。171 Aは峯区となるもので全長10.6cm、茎の長さが4.2cmである。切先は峯側が丸くなっており、刃は使い減りによるものか狭くなっている。171 Bは全長10.5cm、茎の長さ6.2cmである。切先は峯、刃側とも丸くなっており、前者同様に使い減りによるものか、茎より刃幅が狭くなっている。なお、区の部分で継いだものようである。

以上の他には木製品と炭化した胡桃1点、栃の実の皮1点が発見されている。木製品は直径20cmほどの皿とみられるものと、箸状(6×5mm、長さ3.9cm)のものである。胡桃はネズミによってかじられた痕跡を残し、栃の実の内側にシブ皮が付いている。

注(1) 164は実測図では段がそれほど明瞭でないが、これは横ナデ後のヘラケズリ調整によって埋まったものであり、本来は大きく抉られた沈線状の段である。

注(2) 162は実測図では段をもっているようであるが、この土器には凹凸があって、たまたま断面の位置によって有段のように図化され、他の部分では緩やかに外反している。



- |                        |  |                        |                 |
|------------------------|--|------------------------|-----------------|
| 1. 10 YR $\frac{1}{2}$ | 黒色土                                      | 6. 5 YR $\frac{5}{6}$  | 暗赤褐色焼土 炭化物を含む   |
| 2. 10 YR $\frac{3}{4}$ | 黒褐色土 To-a火山灰粒を含む                         | 7. 7.5YR $\frac{2}{6}$ | 黒褐色混土 焼土、炭化物を含む |
| 3. 10 YR $\frac{4}{4}$ | にぶい黄褐色混土 To-a火山灰を粒状、ブロック状を含む<br>下位は焼土混土状 | 8. 10 YR $\frac{3}{4}$ | にぶい黄褐色混土 火山灰を含む |
| 4. 2.5YR $\frac{1}{4}$ | 浅黄色火山灰ブロック Tm                            | 9. 7.5YR $\frac{2}{6}$ | 黒褐色土 非常にやわらかい   |
| 5. 7.5YR $\frac{3}{4}$ | 極暗褐色混土                                   |                        |                 |

第94図 VII B21 竪穴住居跡(1)





第95図 VII B 21 堅穴住居跡 (2)

## 11. VII B 21 堅穴住居跡

〈遺構〉 (第94~98図、図版68・69)

東区東部の斜面上位に位置する。南壁の一部がVII B 22土壌によって破壊されている。平面形は南北3.8~3.9m、東西4.9~5.3mの東西に長い長方形をなす。東壁はカマドの北側が45cmほど張り出している。カマドの造り替えに伴う拡張とも考えられる。方向は西壁によるとN21°Eである。

埋土は上位が黒褐色混土、中位がにぶい黄褐色混土、暗赤褐色焼土で、下位が黒褐色混土などである。中位には苫小牧火山灰、十和田 a 降下火山灰が粒状、ブロック状に混入し、下位には炭化物や焼土が大量に含まれている。なお、苫小牧火山灰、十和田 a 降下火山灰については蛍光X線分析によって確認されている(付編参照)。

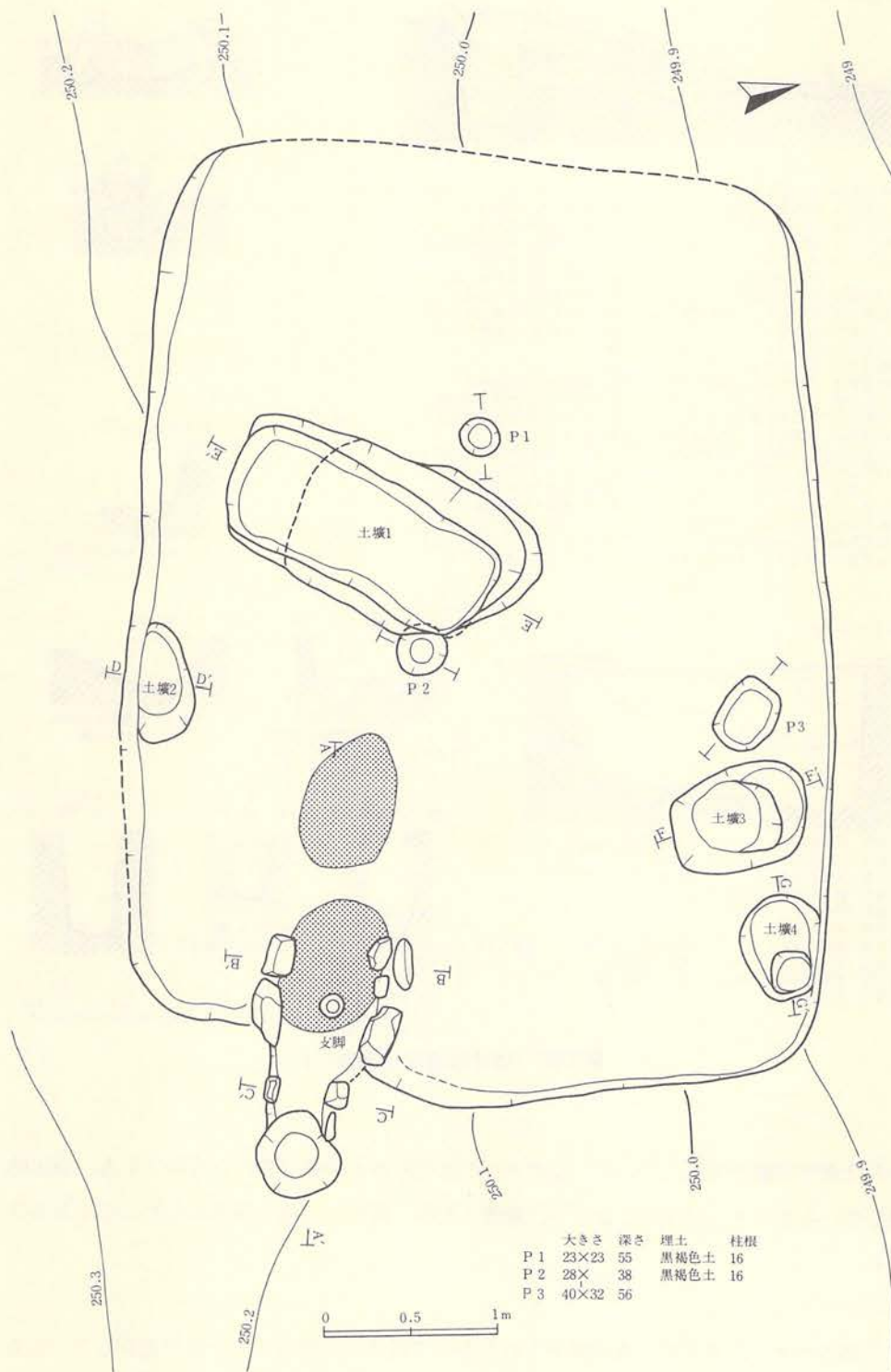
焼土は中央部で多く認められ、最大12cmの厚さに堆積している。そのあり方は炭化材の上あるいは下で、炭化材と同様に周縁部が高く、中央部が低くなっていた。

炭化材は南西部と南東部に遺存し、全体的には方射状をなしている。断面形は円形か薄い長方形で、丸太材、板材とみられるものである。なお、25は柱材で、この真下には柱穴1が位置している。樹種は22点のうちケヤキ5点、タモ1点、不明針葉樹4点、不明広葉樹3点、不明5点と鑑定されている。なお床面出土の丸太材(No.9)の方射性炭素年代測定結果によると1480±100年BP、AD 740年であった。

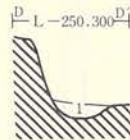
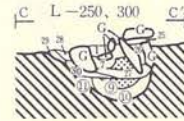
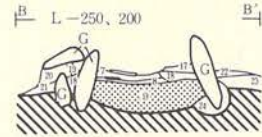
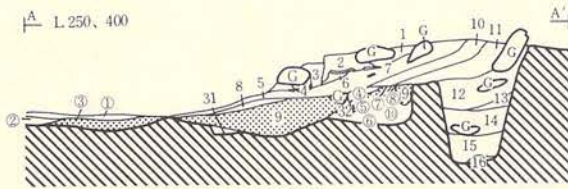
壁は直に立ち上がり、壁高は最大34cmである。床面は平坦で北半が黄褐色混土で貼床されている。

柱穴は3個検出されている。P1は西壁の内側1.5mに位置し、南北方向の中央、東西方向では1/3にあたっている。また、P2はその東1.0mで、ほぼ中央にあたり、南北方向も若干南に片寄るもののほぼ中央に位置している。棟持柱と考えられる。なお、P1はこの真上に炭化した柱材が立った状態で載っていたものである。P3は北壁の南30cmで、東壁の西1.8mに位置している。平面形は前2者が23cm、28cmの円形で、深さは55cm、38cmである。埋土は黒褐色土、柱根は両者とも16cmである。後者は40×32cmの長方形であるが、住居跡の方向とは一致していない。深さは56cmである。



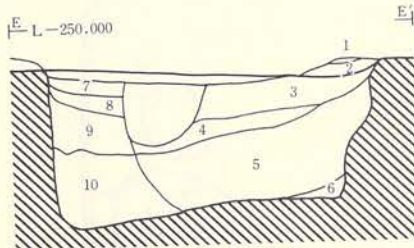


第96図 VII B 21 竪穴住居跡 (3)

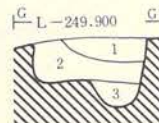


1. 7.5YR% 褐色焼土混土  
C、土器を含む

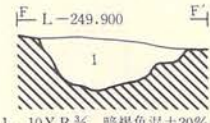
- |                          |                         |
|--------------------------|-------------------------|
| 1. 10 YR% 明黄褐色土          | 23. 2.5Y% 黄色混土 焼土炭化物を含む |
| 2. 7.5YR% 明褐色粘土混土        | 24. 10 YR% 褐色混土、堅い      |
| 3. 10 YR% に、い黄褐色混土       | 25. 10 YR% 褐色混土         |
| 4. 10 YR% 褐灰色土           | 26. 7.5YR% 暗褐色焼土混土      |
| 5. 2.5Y% 灰黄色粘土           | 27. 10 YR% 黒色混土         |
| 6. 灰白色粘土混土               | 28. 7.5YR% 褐色焼土混土       |
| 7. 7.5YR% 褐色焼土混土         | 29. 10 YR% 黒褐色混土        |
| 8. 10 BG% 青灰色焼土、非常に堅い    | 30. 7.5YR% 暗褐色焼土混土      |
| 9. 5 YR% 橙色焼土            | 31. 5 YR% 褐色焼土混土        |
| 10. 10 YR% 黒色混土          | 32.                     |
| 11. 10 YR% 黒褐色混土         | 33.                     |
| 12. 10 YR% 黒褐色混土 To-aを含む | ① 10 YR% 黒褐色混土          |
| 13. 5 YR% 赤褐色焼土混土        | ② 7.5YR% 暗褐色焼土混土        |
| 14. 7.5YR% 極暗褐色焼土混土      | ③ 5 YR% 明赤褐色焼土          |
| 15. 10 YR% 黒褐色混土 To-aを含む | ④ 10 YR% 黒色混土           |
| 16. 10 YR% 灰黄褐色土 To-aを含む | ⑤ 5 YR% 明赤褐色焼土          |
| 17. 2.5Y% に、い黄色粘土        | ⑥ 7.5YR% 黒色混土           |
| 18. 10 YR% 褐色焼土混土        | ⑦ 5 YR% 明赤褐色焼土          |
| 19. 10 YR% 黒色土           | ⑧ 7.5YR% 黒色混土           |
| 20. 10 YR% 暗褐色混土、炭化物を含む  | ⑨ 5 YR% 明赤褐色焼土          |
| 21. 10 YR% に、い黄褐色混土      | ⑩ 5 YR% 赤褐色焼土混土         |
| 22. 10 YR% 褐色混土、炭化物を含む   | ⑪ 10 YR% 黒褐色混土          |



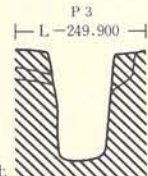
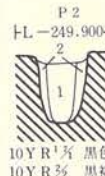
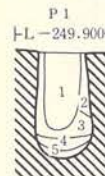
- |                      |                  |
|----------------------|------------------|
| 1. 10 YR% 黒褐色混土      | To-aを含む } 貼床     |
| 2. 10 YR% 黄褐色混土      | To-aを含む }        |
| 3. 10 YR% 黒褐色混土      | To-aをブロック状に含む }  |
| 4. 10 YR% 黄褐色ブロック状混土 |                  |
| 5. 10 YR% 褐色ブロック状混土  |                  |
| 6. 10 YR% 褐色混土       |                  |
| 7. 7.5YR% 黒褐色混土      | 明黄褐色土をブロック状に混入する |
| 8. 7.5YR% 黒褐色混土      | 南部浮石を含む          |
| 9. 10 YR% 黄褐色ブロック混土  | 上位にTmを含む         |
| 10. 10 YR% 明黄褐色混土    |                  |



1. 10YR% 黄褐色混土80%  
2. 10YR% 暗褐色混土10%  
3. 10YR% 黒褐色混土5%

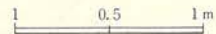


1. 10YR% 暗褐色混土20%  
上部のみ堅い



1. 10YR% 黒褐色土  
2. 10YR% 暗褐色土  
3. 10YR% 黒褐色土  
4. 10YR% 暗褐色混土  
5. 10YR% 暗褐色土

1. 10YR% 黒色土  
2. 10YR% 黒褐色混土

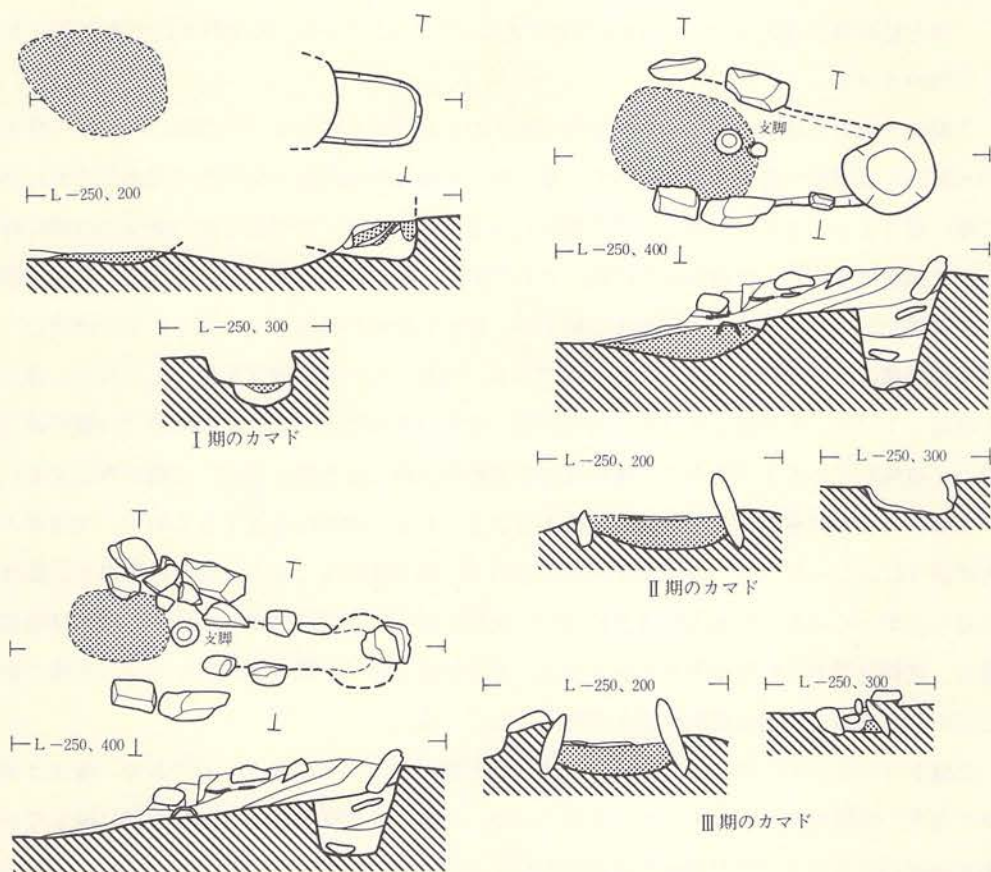


第97図 VII B21 竪穴住居跡 (4)

カマドは東壁南部に位置している。このカマドは造り替えの確認されたものである。全体的に移動しているものと、同位置において、側壁、支脚、煙出しの造り替えられた少なくとも3期である。

#### 1期のカマド

2・3期のカマドによって、既に削平されたもので燃烧部と煙出しの一部が遺存していたものである。全体的に2・3期のカマドの50cm内側にあたり、長さ2.0mほどで、燃烧部は壁の



第98図 VII B 21 竪穴住居跡 (5)

内側約 1.0 m に位置している。焼土は 80×50cm の長円形で、厚さは 5 cm である。煙道は幅が 30 cm で、焼土からの長さは 1.35m と推測される。このうち先端部 45cm が遺存しており、煙出しに向って若干下り勾配となっている。煙出しはそのまま直に立ち上がるものようである。

#### 2 期のカマド

第96図に示したのが 2 期のカマドである。全体的には燃燒部が広く、煙道、煙出しが狭くなる形状である。総長 1.8 m で壁外部分が 95cm である。燃燒部は東壁の内側にあつて幅は 50cm と推定される。焼土は 76×50cm の長円形で厚さは 15cm である。側壁は礫と黄褐色混土等を用いて構築している。煙道は緩い上り勾配で、直径 50cm ほどの煙出しに続いている。煙出しは当初深さ 65cm の土壙であったが、使用に伴って埋没したとみられ、少なくとも 3 回以上にわたって礫が崩落、堆積したと推定される。燃燒部中央のやや上位に支脚がある。礫を用いた支脚が先行するようである。



(注) 礫を用いた支脚については、焼土範囲からはずれていることもあって、天井石の崩落と見る向きもある。ここでは中央部にあたっていることから一応支脚と捉えることにする。

### 3期のカマド

3期のカマドは基本的には2期のカマドをそのまま踏襲している。燃焼部は同位置で、焼土は53×35cmの長円形で若干小さくなっている。焼土上面は20cmほどの青灰色の還元化された非常に堅い層となっており、強力な火熱を使用したと推定される。側壁は2期の側壁の内側に礫を入れて構築している。煙道も内側に礫を入れており、幅が20cmと狭くなっている。底面は燃焼部から緩やかに立ち上がり、そのまま納まる。煙出しの最終段階には土壌が完全に埋没して、煙道先端部に扁平な礫を立てかけたのみである。天井石は一部原位置を保っているが、ほとんど崩落している。天井部は灰白色、明褐色粘土を用いて構築しており、最終的には甕の破片を用いて補修しているようである。燃焼部の中央やや上位には2期と同様に支脚が存在する。

土壌は大小4期検出されている。土壌1はP1、P2の中間に位置するもので、住居跡の中央南寄りにあたっている。160×65cmの長方形で、深さは80cmである。底部は平坦で、壁は直に立ち上がっている。長軸方向はN43°Eで、南壁に対して65度西に傾いている。埋土は黒褐色混土、黄褐色混土、褐色混土などからなり、上位には十和田a降下火山灰がブロック状に混入していた。なお、上面は黄褐色混土で貼床されている。

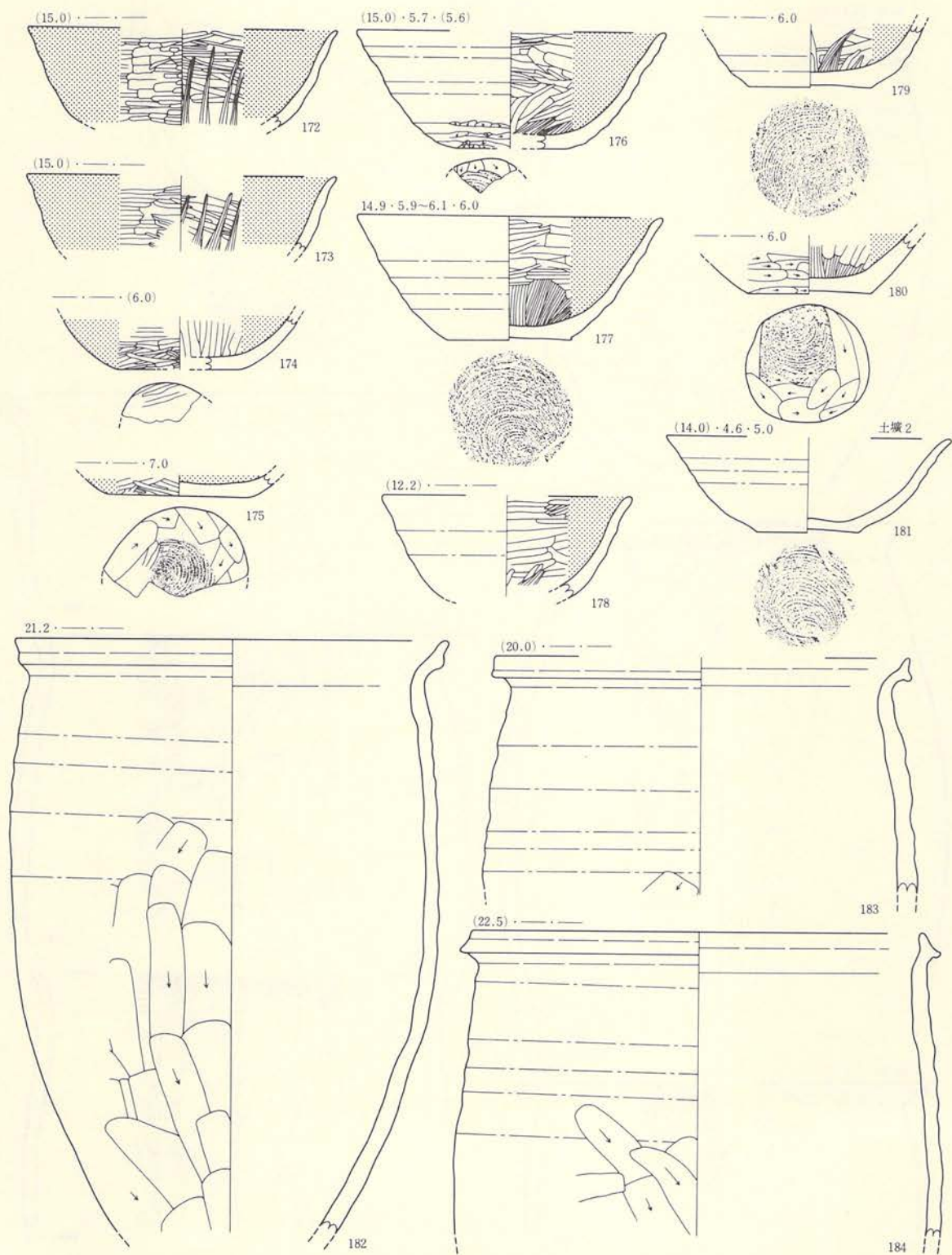
土壌2は南壁中央に接している。67×30cmの不整な長円形で深さが7cmである。埋土は褐色焼土混土の単層で土器(181)が含まれていた。土壌3は東壁の西1.2mで北壁に接している。80×60cmの長円形で深さが26cmの擂鉢状をなす。埋土は暗褐色混土の単層で石斧及び土器(194)が発見されている。土壌4は東北隅近くに位置する。60×48cmの長円形で東側に柱穴状の土壌をもつ。深さは22cmで、柱穴状土壌は最大36cmである。埋土は黄褐色混土、暗褐色混土、黒褐色混土で埋土上位から土器(190、194)が発見されている。

遺物は主にカマドを中心とした床面と土壌2、3、4から発見されている。

#### 〈遺物〉(第99～101図、図版83)

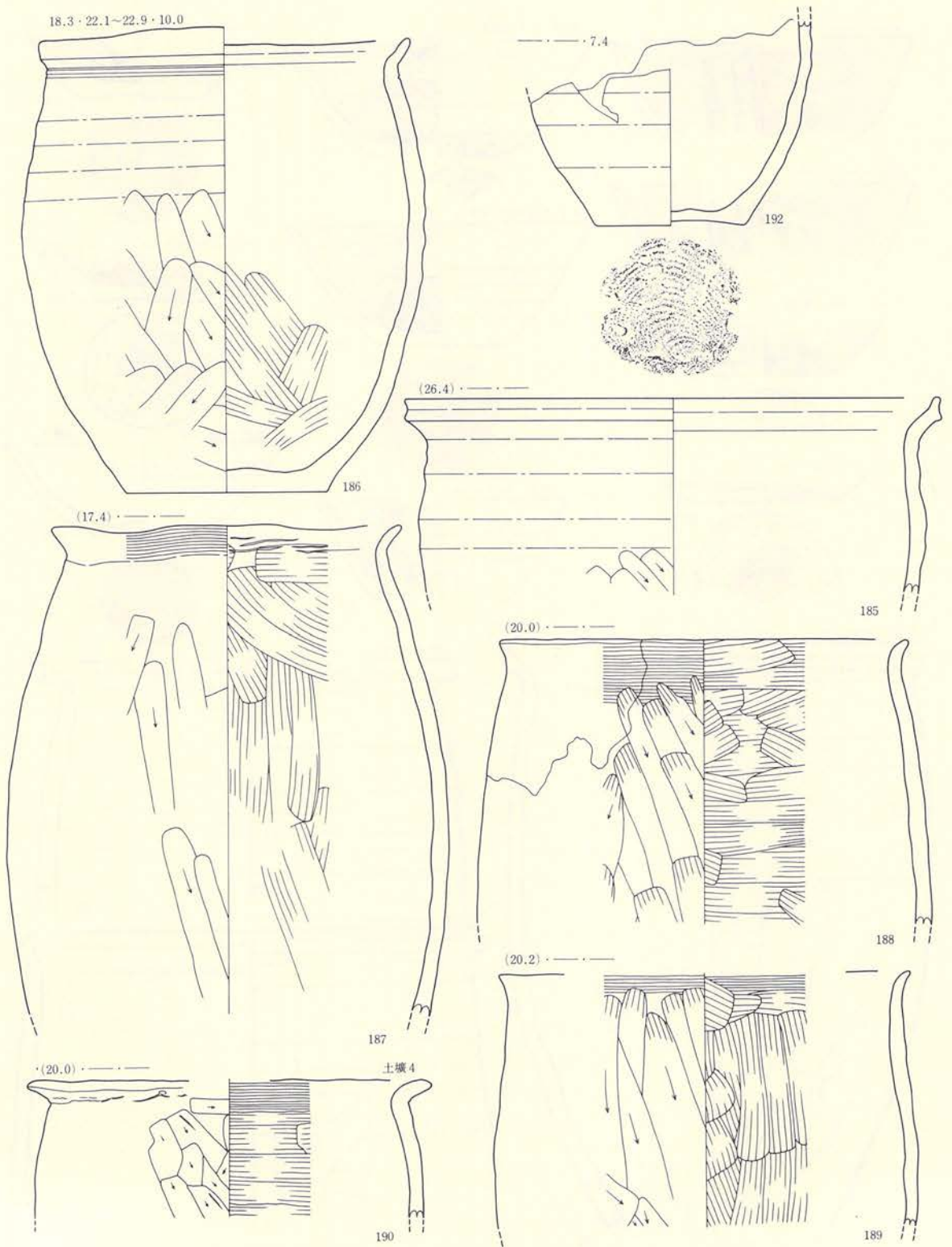
発見された遺物は土師器267点、それに縄文土器49点、石器1点である。縄文土器はほとんど繊維を含むもので、前期前葉の破片である。中には内外両面に縄文の施文された早期未葉の土器片が含まれている。また、縄文施文後押し引き沈線をもつもの、縄文施文後沈線と刺突を交互にもつものなどが混入している。石器は搔器類(49図38)、磨製石斧(50図48)である。土師器には坏(60点)、甕(204点)、鉢(3点)があり、このうち掲載したものは23点(172～194)である。

172～175は内外両面に黒色処理された坏である。ただし、172、174は二次加熱のためか黒色が消滅して褐色を呈していた。器形は口縁部が外反し細まる。いずれも内外面とも丁寧にヘラミガキ調整され、外面が横方向、内面は上半が横方向、内底部が方射状ミガキである。方射状



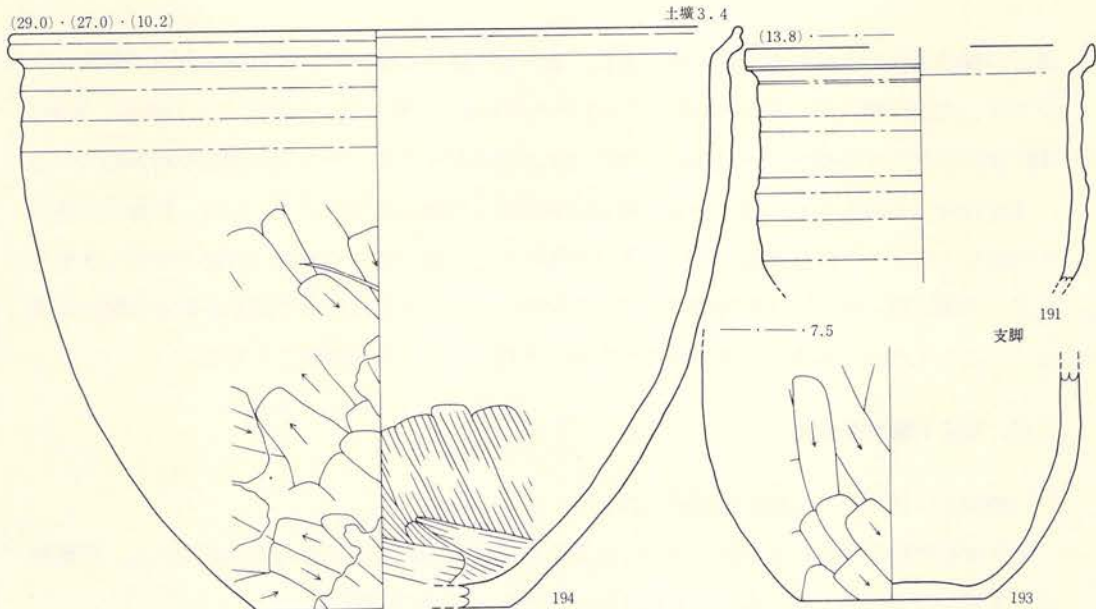
第99图 VII B 21竖穴住居跡出土遺物(1)





第100图 VII B 21 竖穴住居跡出土遺物(2)





第101図 VII B 21 罌穴住居跡出土遺物(3)

ミガキは口縁部近くまで達している。底部は175によると回転糸切後周縁部がヘラケズリ調整されている。

176～180は内面黒色処理された坏である。器形は底部から内彎しながら立ち上がり、口縁部が外反ぎみにそのまま納まるもの(176、177)と、外反するもの(178)がある。内面の調整は上半が横方向、内底部が方射状ヘラミガキである。底部は回転糸切無調整のもの(177、179)と、糸切後周縁部をヘラケズリ調整されたもの(176、180)とがある。177は底部周縁部が磨減しており、180は体部下端が手持ちヘラケズリ調整されている。

181は黒色無処理の坏である。器形は底部から内彎しながら立ち上がり、口縁部が外反している。底部は回転糸切無調整である。

182～193は甕で、182～186、191～193がロクロ成形されている。182～186が大型で、191～193が中型甕である。器形は上半部に体部最大径をもつ長胴甕で、口縁部が外反し、口縁端部は上方(182、191)、あるいは上下両方(183～185)に挽き出されて受口状をなす。186は外反後、弱く内彎するもので、頸部に細い沈線が巡っている。調整は外面下半がヘラケズリで、内面が斜方向のヘラナデである。底部は砂底(186)と、回転糸切無調整(192)である。なお、192の底部には2箇所に小さな刺突痕をもつ。刺突の方向はほぼ逆方向である。193は底部から丸味をもって立ち上がる。支脚として利用され、非常に脆くなっている。以上の他には短かく外折する口縁部破片がある。

187～190は非ロクロ成形の大型甕である。器形は体部中央に最大部をもつ長胴甕で、口縁部が短かく外反するもの(187)、僅かに外反するもの(188、189)、強く外折するもの(190)があ

る。口縁端部はいずれも細まるものである。調整は口縁部が横ナデ、外面が縦方向の弱いヘラケズリ、内面が横方向（188、189）のヘラナデである。190は粗いヘラケズリである。なお、187はヘラケズリ後横ナデが施され、188～190は逆に横ナデ後ヘラケズリ調整が行われている。

194はロクロ成形された鉢である。器形は底部から内彎しながら立ち上がり、口縁部が短かく外折し、弱く上方に挽き出されている。縁帯中央に沈線が巡っている。外面下半がヘラケズリで、内面が横、あるいは斜方向のヘラナデ調整である。底部は砂底である。以上の他にはほとんど立ち上がりを示さない底部破片がある。底部はヘラケズリ調整でである。

## 12. VII E 16 竪穴住居跡

〈遺構〉（第102～104図、図版69・70）

東区東部の斜面中位から上位にかけて位置する。VII F 18 竪穴住居跡の西5mである。平面形は、1辺が3.8mの方形である。方向は西壁によるとN39°Wである。

埋土は上位が黒褐色混土、中、下位が暗褐色混土である。中位から下位にかけて十和田a降下火山灰が粒状、ブロック状に混入している。十和田a降下火山灰は上下に分かれている。また、西壁中央部には中位から下位にかけて明黄褐色土が投入されており、南壁中央部では中位に焼土が混入していた。

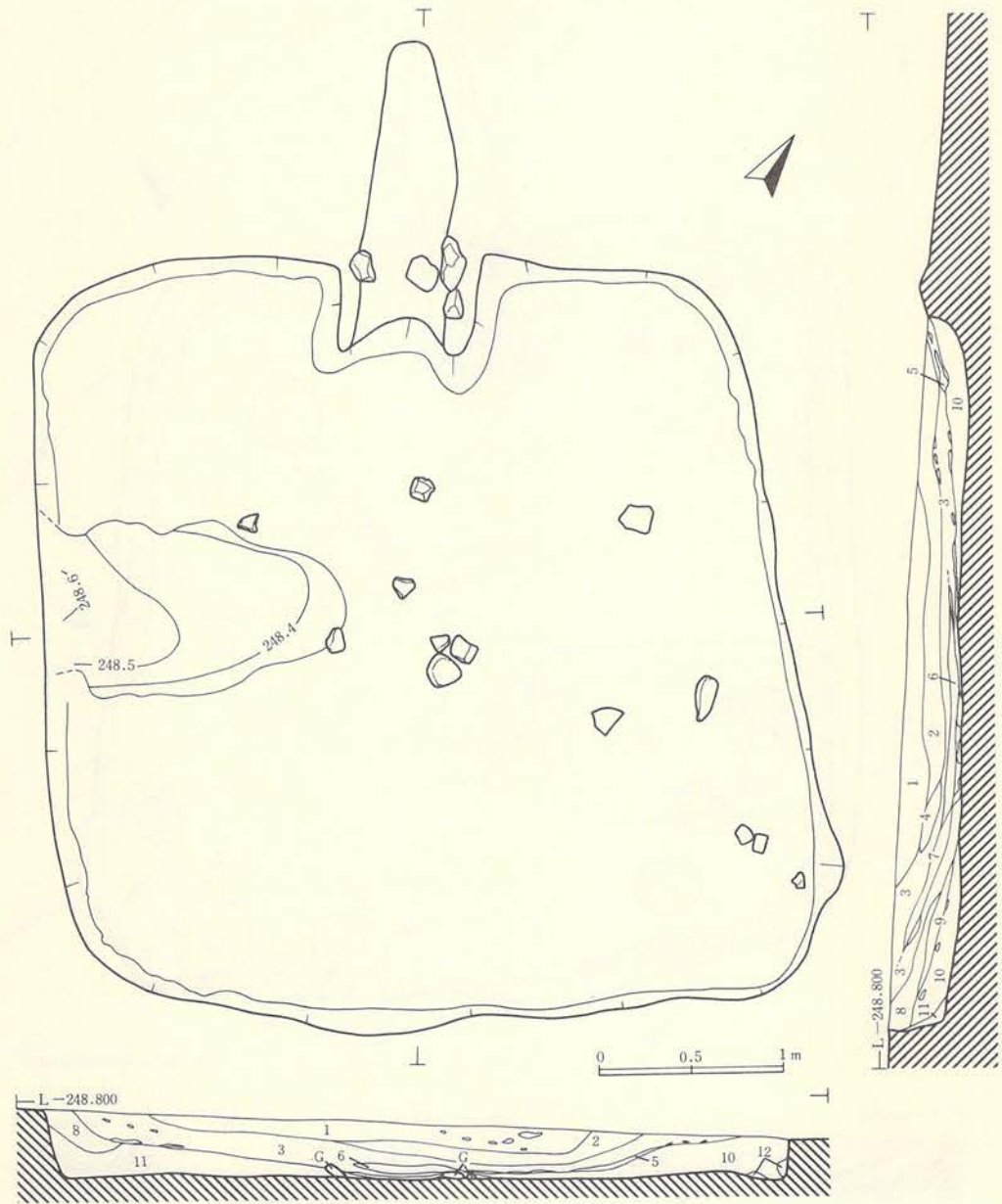
壁は直に立ち上がり壁高は最大36cmである。各壁とも直線的である。床面はほぼ平坦で、北半部では堅く踏み締まっている。カマド、土壙1と東壁1.8m、南壁2.4mを除いて周溝が検出されている。幅は10～15cmで、深さが3～8cmの小ピットの連続である。東壁はカマド2の前面にあたっており、南壁は土壙があってはっきりしないが、土壙2.4の断面では確認されており、本来は全周していたものとみられる。

柱穴は南西隅、南東隅、北東隅の各隅近くから3個検出<sup>注</sup>されている。P1が南壁、西壁の内側20cm、60cm、P2が南壁、東壁の内側70cm、20cm、P3が東壁、北壁の内側60cmである。直径が25～39cmの円形で、深さは30cm、37cmである。埋土は褐色混土、暗褐色焼土混土などで、P3では土器（198）が含まれていた。P2はカマド2の前に位置することもあって焼土が含まれている。

（注）P1は深さが7.0cmと浅く、柱穴かどうか疑問であるが、配置から一応柱穴に含めておく。

カマドは2基確認されている。先行するものをカマド2として記述する。カマド1は北壁中央に位置している。上半が削平されており、天井部については不明である。なお、燃焼部の焼土及び煙道によると、造り替えられた可能性が強い。総長2.1mで、壁外部分が1.2mである。燃焼部は壁の内側30cmにあり、焼土は直径55cm（下位）の円形で、厚さは下位が3cm、上位が5cmで、全体で8cmである。側壁は礫と黄橙色土を用いて築いているが、燃焼部では崩壊し、

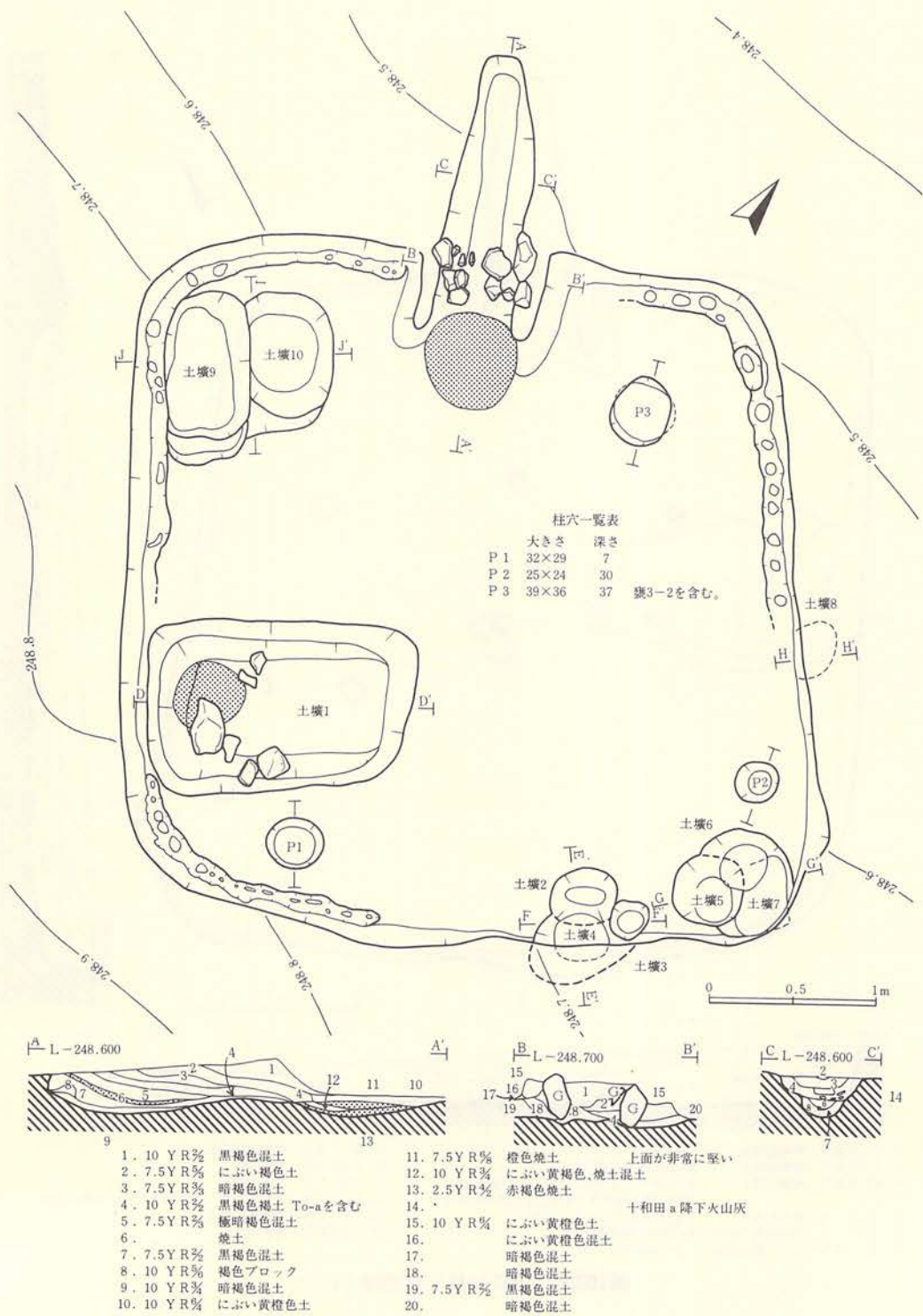




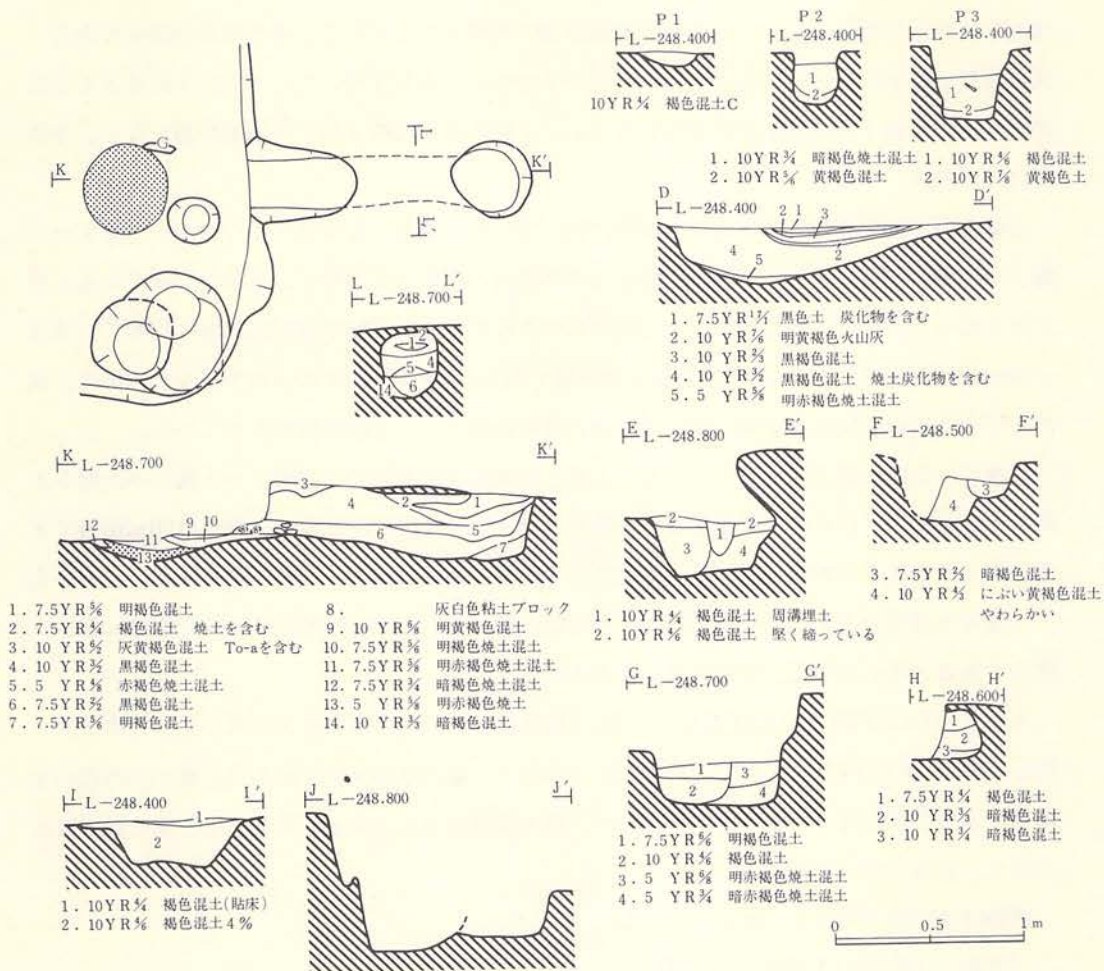
- |              |          |                      |               |               |
|--------------|----------|----------------------|---------------|---------------|
| 1. 7.5 Y R ㉔ | 黒褐色混土    | To-aを含む              | 7.5 Y R ㉔     | 明褐色焼土混土       |
| 2. 7.5 Y R ㉔ | 暗褐色混土    | B-Tmを粒状に混入する         | 8. 7.5 Y R ㉔  | 暗褐色混土         |
| 3. 10 Y R ㉔  | 黒褐色混土    | B-Tmをブロック状に含む、炭化物を含む | 9. 7.5 Y R ㉔  | 黒褐色混土         |
| 4. 2.5 Y ㉔   | 黄色火山灰    | 下位に火山灰が多く層状をなす部分もある  | 10. 7.5 Y R ㉔ | 暗褐色混土         |
| 5. 2.5 Y ㉔   | 明黄褐色火山灰  | To-a火山灰ブロック、砂質       | 11. 7.5 Y R ㉔ | 明黄褐色混土        |
| 6. 10 Y R ㉔  | にぶい黄褐色混土 | B-Tmの粉状火山灰           | 12. 7.5 Y R ㉔ | 褐色混土          |
|              |          | B-Tmを含む              |               | B-Tmをブロック状に含む |

第102図 VII E 16 竪穴住居跡 (1)





第103図 VII E 16 竪穴住居跡(2)



第104図 VII E 16 竖穴住居跡(3)

黄橙色土のみが散乱していた。礫は壁際の4個のみが遺存していた。礫の上面はトラクターなどによって破碎されている。遺存していた礫は幾分外傾きみである。煙道は先行するものは幅が25cmで、底面は燃焼部から幾分上がり煙出しに向かって若干の下り勾配となっている。他は幅が50cmで、燃焼部から緩やかに立ち上がりそのまま納まる。煙出しは両者とも掘り込み等は認められなくそのまま緩やかに立ち上がっている。

カマド2は東壁南部に位置している。総長2.3mで壁外部分が1.5mである。燃焼部は壁の内側40cmで、焼土は直径45cmの円形で厚さが6cmである。側壁は既に破壊されていた。煙道は直径30cmほどで削ぎである。底面は燃焼部から幾分上がり、煙出しに向かって若干下り勾配である。煙出しはそのまま直に立ち上がる。



土壙は大小10基検出されている。土壙1は南壁の内側50cmで、西壁に接している。長軸方向は西壁に対して直角になっている。平面形は160×100cmの長方形で、深さは最大28cmである。底は西側の焼土部分が一番低く、東に向かって緩やかに立ち上がっている。埋土はほとんど黒褐色混土で、最下部に焼土が形成されている。上位には十和田 a 降下火山灰が層をなし、全体的に礫が混入している。

土壙2～4は東壁の内側1mで、南壁に接している。3基とも重複するもので、土壙4→土壙2→土壙3の順に新しくなる。土壙2は40×34cmの不整な長円形で、深さが32cmである。柱穴状をなす。埋土は暗褐色混土で、上面は貼床されていた。土壙3は24×22cmの円形で、深さが18cmの柱穴状をなす。埋土で褐色混土の単層である。土壙4は60×40cmの不整な長円形で、底部が壁外に続いて袋状をなす。埋土はにぶい黄褐色混土で、上面は貼床されている。

土壙5～7は北東隅に位置している。3基とも重複するもので、土壙7→土壙6→土壙5と新しくなる。いずれも40～55cmほどの円形を基調とする柱穴状の土壙で、深さは28cm前後である。埋土は土壙7が明赤褐色、暗赤褐色焼土混土で、他は明褐色、褐色土で焼土を含んでいる。

土壙8は南壁の北1.6mの東壁に構築されている。壁に穿たれた奥行24cm最大径32cmほどの横穴である。埋土は褐色、暗褐色混土である。

土壙9、10は北西隅近くに位置している。土壙9は86×52cmの南北に長い長方形で、西壁に接している。深さは40cmで、埋土は褐色混土である。土壙10は74×55?cmの長円形で、西端が土壙9によって切られている。深さは25cmで、埋土は褐色混土である。両者とも上面に貼床されており、底面が平坦である。

遺物は住居跡の周辺部に散在している。

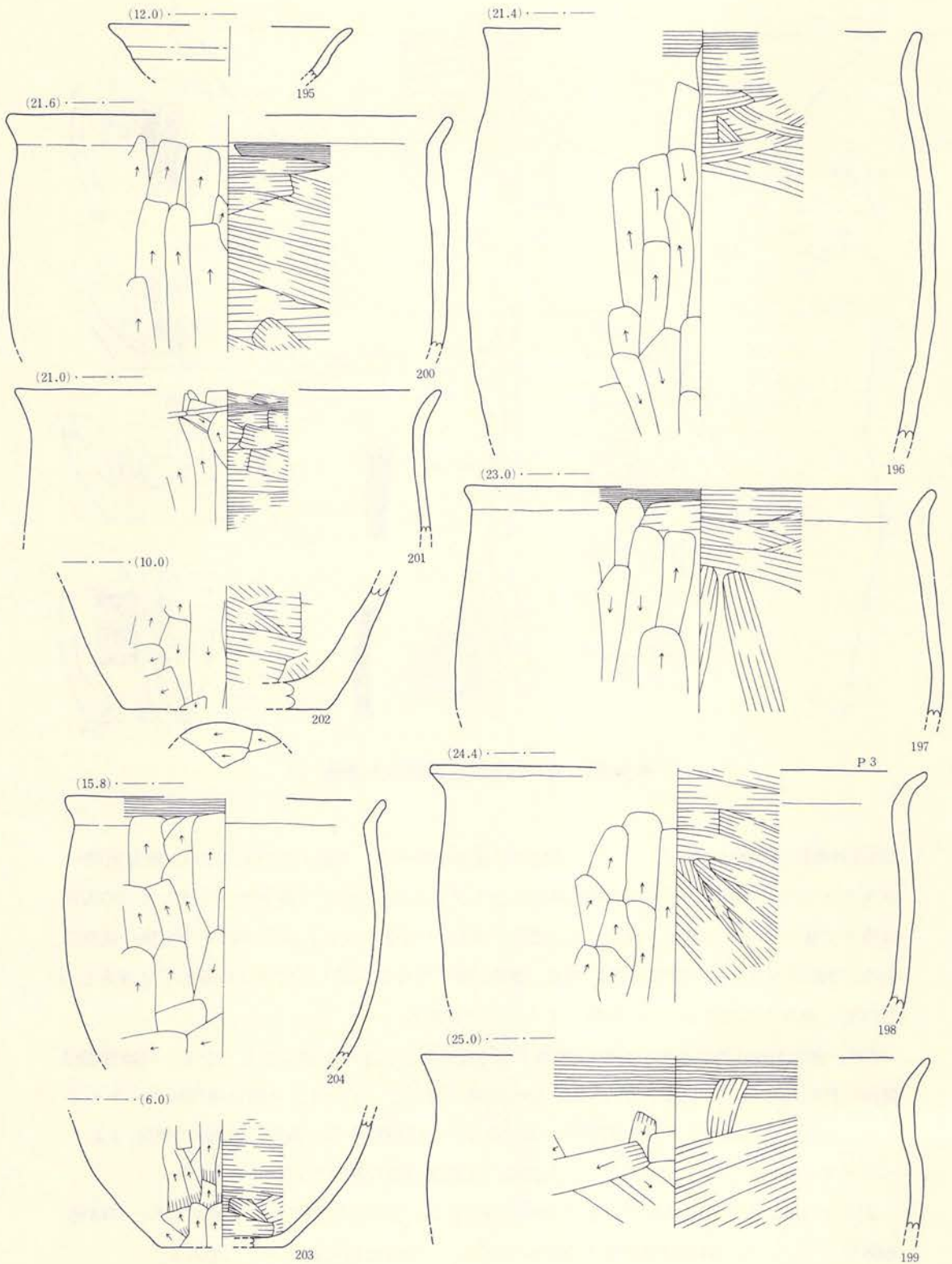
〈遺物〉(第105・106図、図版84)

発見された遺物は土師器154点、須恵器3点、それに縄文土器14点である。縄文土器はほとんど繊維を含むもので、早期末葉から前期初頭のものともみられる。中には早期の貝殻文が2点含まれている。土師器には坏(4点)、甕(151点)、埴(1点)、甑?(1点)、皿(1点)があり、須恵器は大甕(3点)である。これらのうち掲載したものは土師器18点(195～212)、須恵器2点(213、214)である。なお、甕の中にはⅦF23竪穴住居跡の埋土出土遺物と接合するものがある。

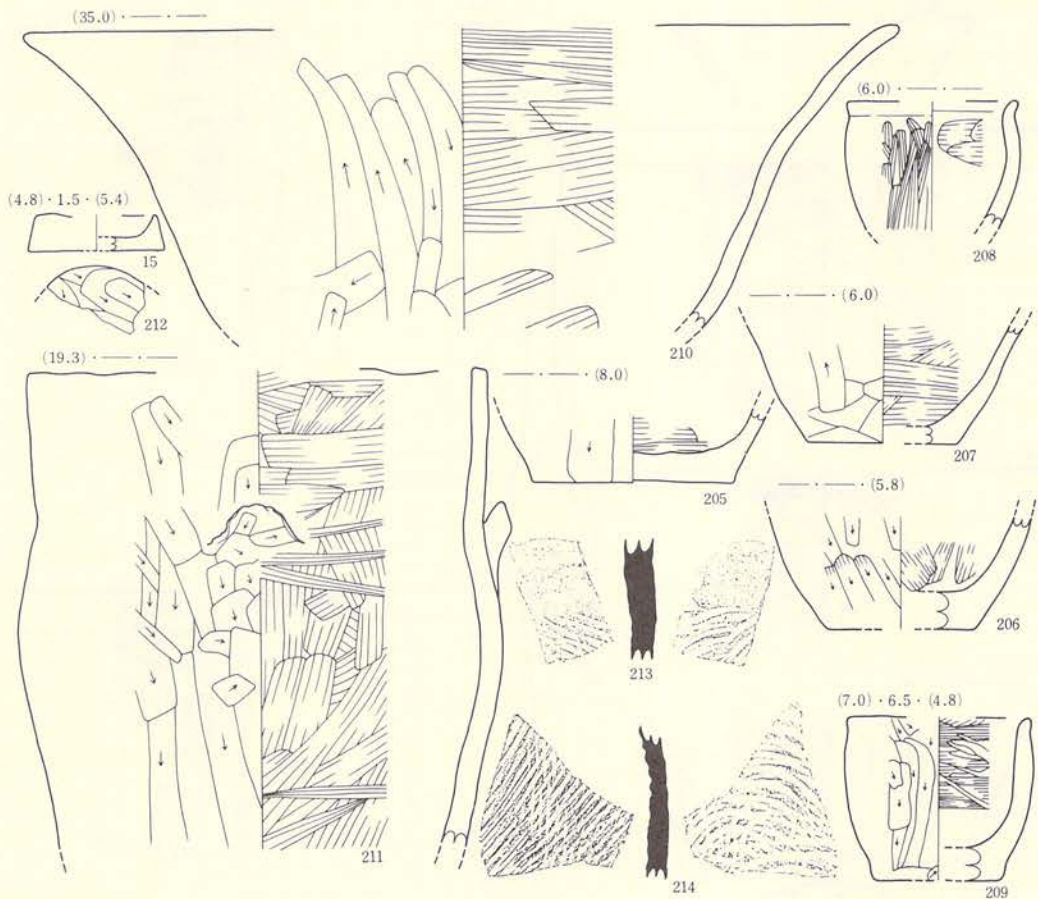
195は黒色無処理の坏である。口縁端部が外反する破片で、ロクロ成形痕が明瞭である。この他には内外両面が黒色処理された1点と、内面黒色処理された2点がある。

196～209は甕である。いずれも非ロクロ成形されたもので、ロクロ成形されたものは破片を含めて1点もない。196～203が大型甕で、204～207が中型甕である。口縁部形態には弱く外反するもの(196、199、201)と、短く外反するもの(197、198、200、204)がある。なお、200、





第105图 VII E 16竖穴住居跡出土遺物(1)



第106図 VII E 16 竪穴住居跡出土遺物(2)

204は外面に炭化物が付着している。調整は口縁部が横ナデ、外面が斜方向(199)、縦方向のヘラケズリで内面が縦方向(197)、横方向のヘラナデである。なお、199を除いてほとんどのものは横ナデ後ヘラケズリ調整されている。202、203が大型甕の底部、205～207が中型甕の底部である。202がヘラケズリ調整、203、205、206が無文である。以上の他には口縁部下に段をもつものや、大きく外反するもの、外折するものなどがある。

208、209は小型甕である。器形は体部下端で段をなし、上半が直に立ち上がる。口縁端部は僅かに外反している。全体的に肉厚で、特に底部は厚くなっている。外面は縦方向のヘラケズリで、内面は横方向のヘラナデ調整であるが全体的に粗雑な成形である。底部は209によるとヘラケズリされているようである。以上の他には同様の破片が12点存在する。

210は口縁部が大きく外反するもので塼とみられる。器形は体部下半に丸味をもち、口縁部が外反して、いる。調整は外面縦方向のヘラケズリ、内面は横方向ヘラナデである。



外面に積上げ痕を残し、炭化物が付着している。

211は口縁部下6cmに耳をもつもので甑とみられる。器形は耳の僅か下に最大径をもち、口縁部が直行し、そのまま納まる。耳は幅が3cm、長さが2cmほどで、器壁に添うように貼付されている。調整は甑と同様であるが、内面は上部が横方向、下半が縦方向のヘラナデである。

212は端部を摘まみ上げた程度の小型皿である。底部から直に立ち上がり、口縁部は尖りぎみで三角形に近い。底部は平底で、ヘラケズリ調整されている。

213、214は須恵器大甕の肩部破片、体部破片である。同一個体とみられ、外面が平行線状の叩き目痕、内面が青海波文で強く押捺されている。色調は青灰色で焼成は良好である。胎土は緻密で若干白色砂粒を含んでいる。

### 13. VII F 18 竪穴住居跡

〈遺構〉（第107・108図、図版71・72）

東区東部の斜面中位から上位にかけて位置する。段丘崖の西7mである。平面形は東西3.4m、南北3.7mの方形をなし、方向は東壁によるとN19°Eである。住居跡中央部から南壁西部にかけて溝状遺構によって破壊されている。

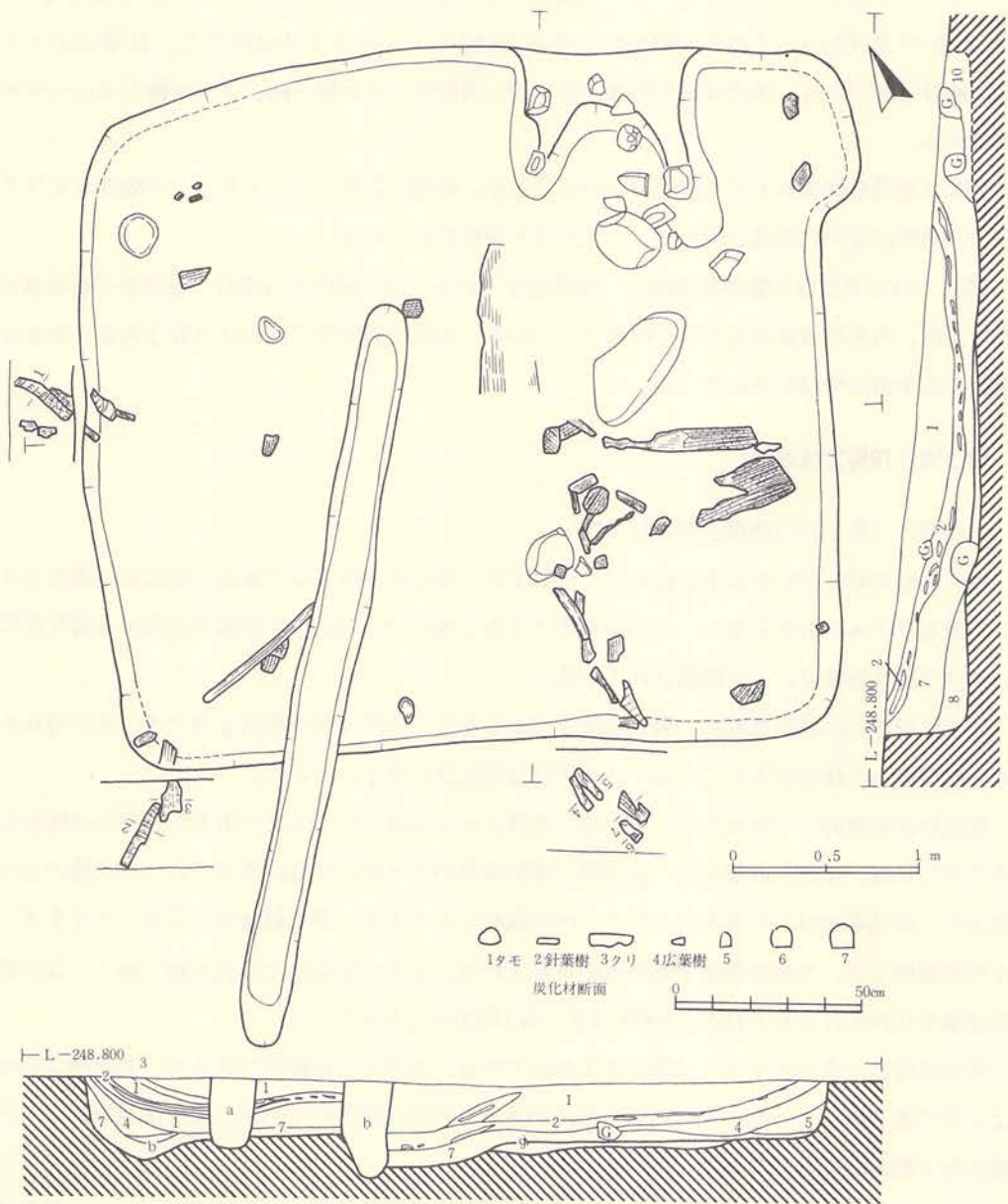
埋土は全体的に黒褐色混土、黒色混土などからなり、中位には十和田a降下火山灰が層状あるいはブロック状に混入している。その下には炭化材が含まれていた。

炭化材は全体的に方射状をなしている。直径3～6cmほどの丸太材であるが、中には板材も含まれている。また、西壁中央、南西隅、南壁東部の3ヶ所には壁に添って立った状態のものがある。直径6cmほどの丸太材、厚さ3cmの板材などである。炭化材はタモ1点、クリ1点、不明針葉樹1点、不明広葉樹1点と鑑定されている。なお、床面出土の丸太材（No.1）は方射性炭素年代測定によると1120±100年BP、AD830年であった。

壁はほぼ直に立ち上がり、壁高は最大44cmである。各壁とも直線的であるが、北東隅は15cmほど東に張り出している。床面は若干凹凸があるもののほぼ平坦である。中央部及びカマド前面が堅く踏み締められていた。

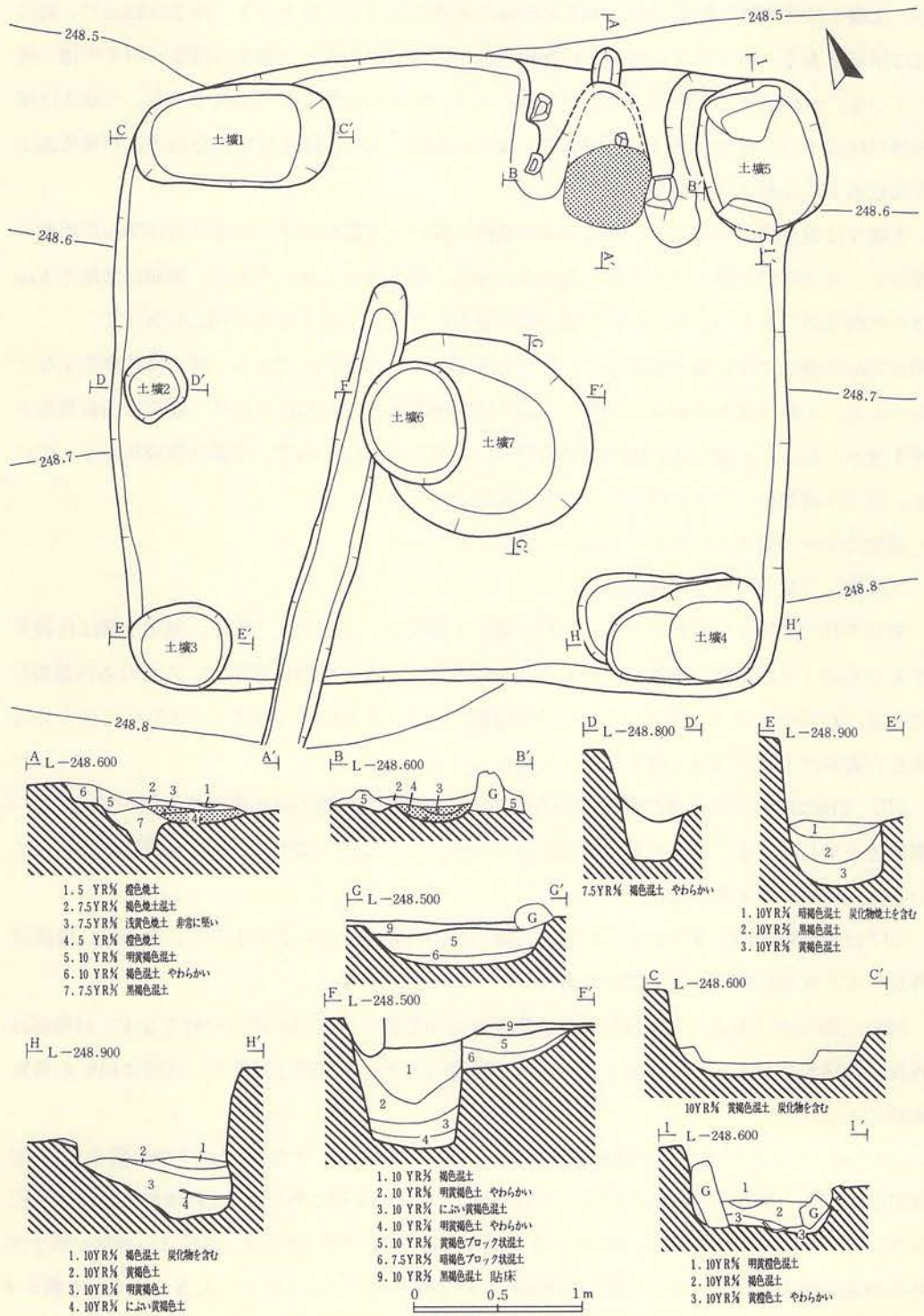
カマドは北壁の東部に位置する。天井石が散乱し、煙道、煙出しが削平されていて、保存状況はあまりよくない。長さ1.1m、壁外部分は僅か13cmである。燃焼部は壁の内側40cmにあって、焼土は直径50cmの円形をなす。焼土の厚さは10cmで、上面が堅くなっていた。側壁は主に明黄褐色混土等からなり、芯材として礫が3個使用されている。抜き取り穴などは確認されず元来芯材をあまり多用するものではなかったようである。天井石はカマド内や、カマド東の土壌5に崩落していた。煙道は削平されて遺存しないが、燃焼部からそのまま緩やかに立ち上





- |              |         |                   |              |                       |
|--------------|---------|-------------------|--------------|-----------------------|
| 1. 7.5 Y R ㉔ | 黒褐色混土   | B-Tmを含む、炭化物を含む    | 8. 10 Y R ㉔  | 褐色混土                  |
| 2. 10 Y R ㉔  | 黒色混土    | Tmを層状、ブロック状、粒状に含む | 9. 10 Y R ㉔  | 黒褐色混土、炭化物を含む、強く締まっている |
| 3. 5 Y R ㉔   | 灰白色火山灰  |                   | 10. 10 Y R ㉔ | 明黄褐色土、強く締まっている、カマド側壁  |
| 4. 10 Y R ㉔  | 褐色混土    | 焼土、炭化物を含む         |              |                       |
| 5. 10 Y R ㉔  | 暗褐色混土   |                   |              |                       |
| 6. 7.5 Y R ㉔ | 暗褐色焼土混土 |                   |              |                       |
| 7. 7.5 Y R ㉔ | 極暗褐色混土  |                   |              |                       |

第107図 VII F 18竪穴住居跡(1)



第108図 VII F 18 竖穴住居跡(2)



がるものようである。

土壙は大小7基検出している。このうち土壙2～4は配置等から柱穴ともみられるものである。土壙1は北東隅に位置する。118×60cmの東西に長い長方形をなす。深さは28cmで、底はほぼ平坦である。埋土は炭化物を含む黄褐色混土の単層である。土壙2は西壁の中央内側に接している。直径38cmの円形で、深さが30cmである。埋土は褐色混土の単層である。土壙3は南西隅に位置する。直径50cmほどの円形で、深さが36cmである。埋土は暗褐色混土、黒褐色混土、黄褐色混土の3層に分かれている。

土壙4は南東隅に位置する。90×58cmの東西に長い長方形をなす。底部は直径50cmの円形の部分と、その西側の緩く立ち上がる部分からなる。深さは最大48cmである。西側には深さ4cmほどの張り出しをもつ。埋土は褐色混土等4層からなる。土壙5は北東隅に位置する。90×75cmの南北に長い長方形をなす。深さは28cmで、底部は平坦である。埋土は黄橙色土などからなる。土壙6は70×60cmの円形で、深さが78cmである。底部は平坦で、埋土は明黄褐色土等4層からなる。土壙7は130?×115の円形である。深さは25cmで、底部は鍋底状をなしている。埋土は黄褐色、暗褐色混土で、上面が貼床されていた。

遺物はカマド周辺と中央部の床面から発見されている。

〈遺物〉（第109図、図版85）

発見された遺物は土師器86点と、それに縄文土器32点、石器1点である。縄文土器は貝殻文をもつもの（早期中葉）、繊維を含むもの（前期中葉）、それに後期に属するとみられる体部破片である。石器は搔器（48図26）である。土師器には坏（15点）、甕（71点）があり、このうち掲載した資料は土師器11点（215～224）である。

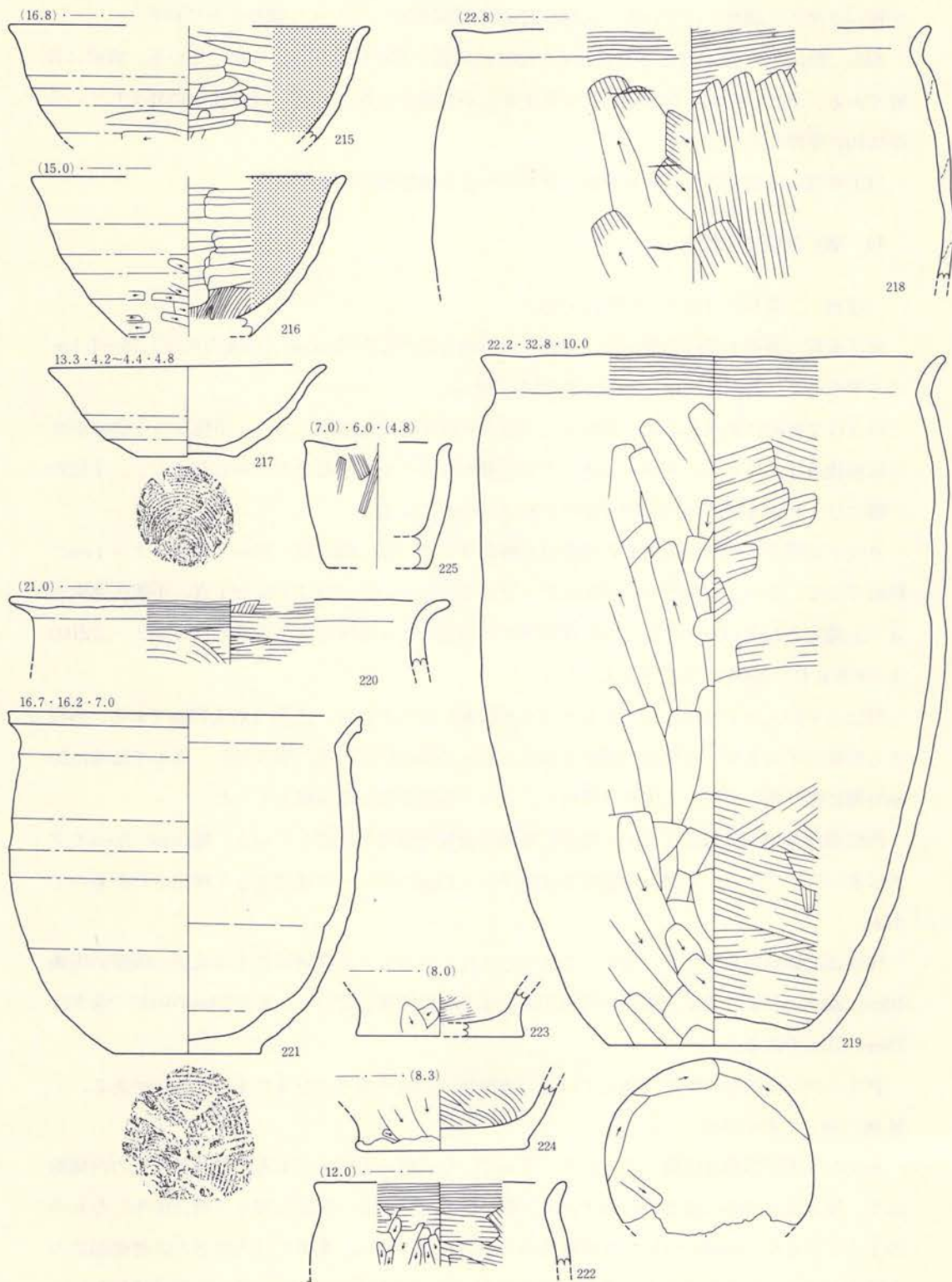
215、216は内面黒色処理された坏であるが、216は二次火熱のため内面の黒色が消滅して一部褐色を呈している。両者とも口縁部が僅かに外反し、体部下端にヘラケズリ調整が施されている。内面のミガキ調整は横方向である。

217は黒色無処理の坏である。底部から緩やかに内彎しながら立ち上がり、その後口縁部が外反する。底部は回転糸切無調整である。

218～225は甕である。221はロクロ成形された中型甕で、体部が脹らむ形をなす。口縁部は外反後口縁端部が上方に挽き出されている。外面のロクロ成形痕は顕著で、底部は回転糸切無調整である。

221を除いた7点が非ロクロ成形された甕である。218～220が大型、221が中型に属する。器形は219によると体部上部に最大径をもつ長胴甕で、口縁部が緩く外反する。口縁部形態には上記以外に短く外反するもの（218、222）、大きく外反するもの（220）がある。調整は口縁部が横ナデ、外面が縦方向のヘラケズリ、内面が横方向（218は縦方向）のヘラナデである。いずれも横ナデ





第109图 VII F 18竖穴住居跡出土遺物

テ後へラケズリ調整されている。底部は219では周縁部がへラケズリ調整されている。

223、224は中型甕の底部とみられる。224は体部下端が僅か外方に突出している。底部は砂底である。225は底部から直線的に立ち上がる小型甕である。底部下端が僅かに外反している。全体的に粗雑な造りである。

以上の他には塙とみられる直線的に立ち上がる口縁部破片がある。

#### 14. VII F 23 竪穴住居跡

〈遺構〉（第110・111図、図版72・73）

東区東部の斜面上位に位置する。平面形は東西方向が3.7～3.85m、南北方向が3.75～4.1mの方形をなす。方向は北壁によるとN44°Wである。

埋土は全体的に黒褐色混土、黒色土で下位の壁際が暗褐色混土である。中位から下位にかけては植物遺体（ススキ）を含む黒色土と白色砂粒を多く含む黒褐色混土が互層をなし、下位の一部には十和田 a 降下火山灰がブロック状に含まれている。

カマド前面と南東部の床面から炭化材が確認されている。幅が12～16cm、厚さが2～4cmの板材である。1～3は南壁の内側50cmで、ほぼ平行している。材はクリが1点、不明広葉樹が3点と鑑定されている。なお、放射性炭素年代測定によると床面出土の丸太材（No.3）は2100±110年BP、150年BCであった。

壁は上半が大きく崩落しているものの下半は直に立ち上がる。壁高は最大75cmである。各壁とも直線的であるが、西壁中央部が1mにわたって10cmほど内側に張り出し、南半では逆に20cm外側に張り出している。床面は平坦で、カマド前面が堅く踏み締っていた。

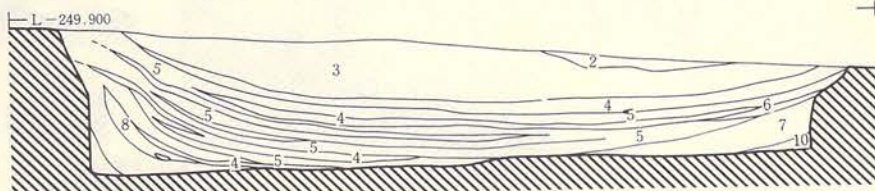
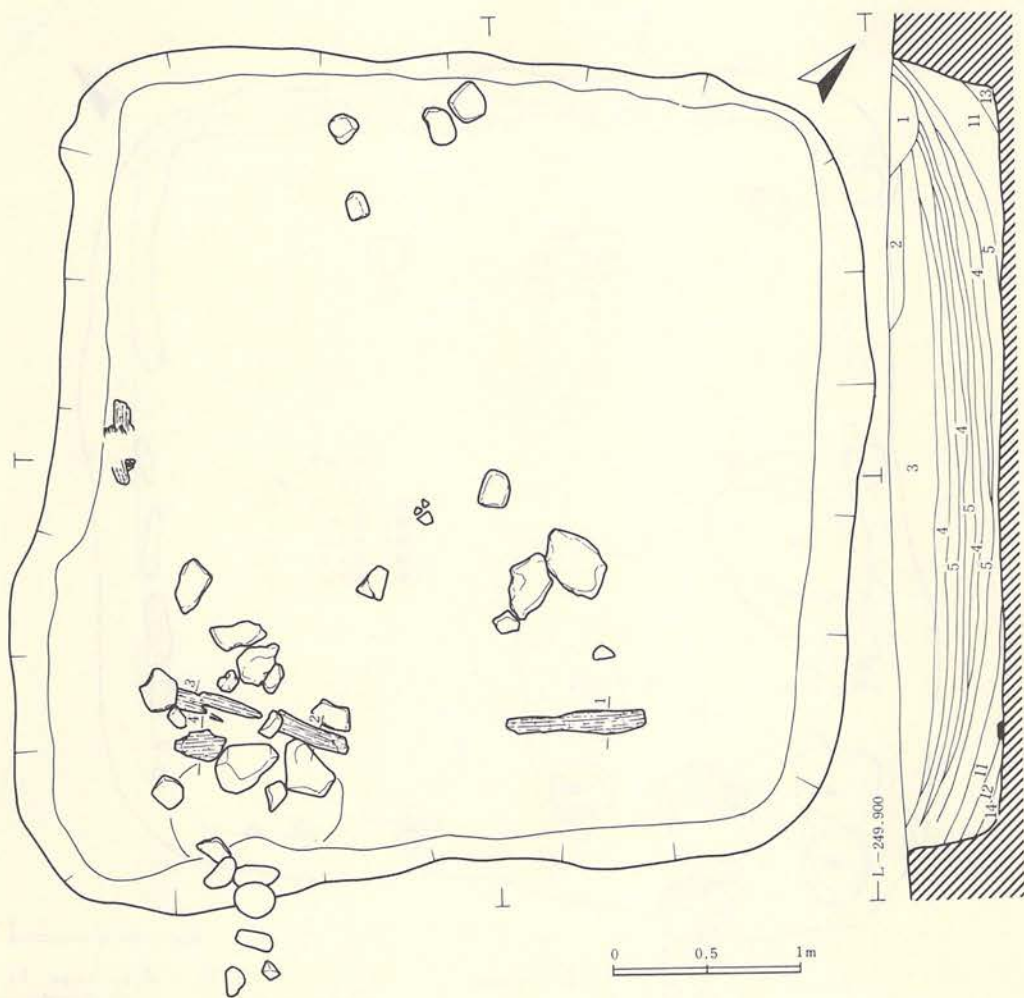
西壁南部及び南壁西部（カマド部分）を除く全域で周溝を確認している。幅は10～20cmで深さは8cmほどである。東壁、南壁際では直径8～15cmのピットの連続として検出されたものである。

柱穴は北側列の2柱穴と、西壁の3柱穴の5柱穴である。北側列のP1は北壁、西壁の内側40cm、28cm、P2は北壁、東壁の内側70cm、1.2mに位置している。直径20cmの円形で深さは18cm、21cmである。

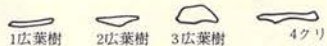
P3～P5は西壁の壁外に接している。直径15～23cmで深さはP4によると50cmである。外側に向かって若干外傾している。

カマドは南壁西部に位置する。長さ1.5mで、壁外部分が65cmである。燃烧部は壁の内側30cmで、焼土は直径30cmほどの円形である。厚さは5cmである。側壁は礫を芯材に使用したもののようであるが、西側については設置穴のみが遺存していた。東側では内傾ぎみに燃烧部にのみ認められた。天井石はカマド周辺に散乱している。煙道は壁面、天井部とも礫で構築されて



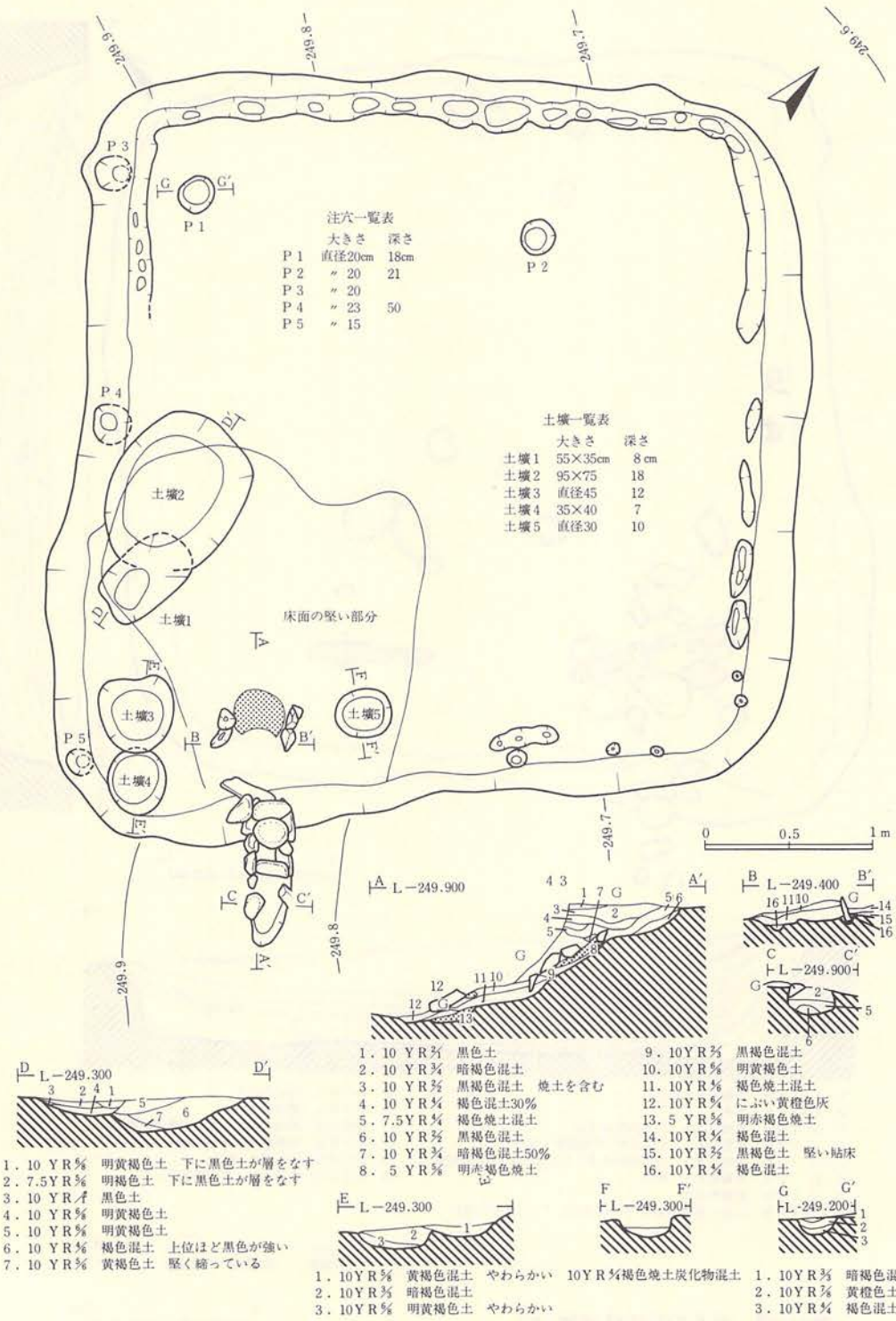


- |                 |                           |                 |                  |
|-----------------|---------------------------|-----------------|------------------|
| 1. 7.5 Y R 5/10 | 黒褐色焼土混土                   | 9. 10 Y R 5/10  | 暗褐色混土            |
| 2. 7.5 Y R 5/10 | 黒色土                       | 10. 10 Y R 5/10 | 褐色混土             |
| 3. 10 Y R 5/10  | 黒褐色混土 白色砂粒を含む             | 11. 10 Y R 5/10 | 黒褐色混土 上位の黒色が強くなる |
| 4. 10 Y R 5/10  | 黒色混土 白色砂粒、植物遺体を含む         | 12. 10 Y R 5/10 | 暗褐色ブロック状混土 50%   |
| 5. 10 Y R 5/10  | 黒褐色混土 白色砂粒を多く含む部分もある、砂質混土 | 13. 10 Y R 5/10 | 褐色混土 40%         |
| 6. 10 Y R 5/10  | 暗褐色混土 砂質                  | 14. 10 Y R 5/10 | 黒褐色土 炭化物を含む      |
| 7. 10 Y R 5/10  | 暗褐色混土                     |                 |                  |
| 8. 10 Y R 5/10  | にぶい黄褐色混土 To-aを粒状、ブロック状に含む |                 |                  |



第110図 VII F 23 竪穴住居跡(1)





第111図 VII F 23 竖穴住居跡 (2)

いる。幅は内径が25cmほどで底面は燃焼部から急激に立ち上がり、煙出しの手前で、一旦緩やかにになり、そのまま立ち上がるものである。煙出しはそのまま納まるもので、特にピット等は認められない。

土壌はカマドの周辺で5基検出されている。土壌1、2は南壁の内側1mで、西壁に接している。重複するもので土壌1が土壌2の南半を破壊している。土壌1は55×35cmの長円形で、深さが8cmである。長軸方向がN10°Eで西壁から47°東に偏っている。埋土は明黄褐色土など3層である。土壌2は95×75cmの長円形で、深さは18cmである。長軸方向がN6°Wで土壌1同様に西壁から32°東に偏っている。埋土は褐色混土等3層からなる。両者とも浅い皿状をなしている。

土壌4は南西隅に位置し、土壌3がその北に接している。土壌4が新しい。土壌5は南壁の北30cmでカマドの東20cmに位置する。土壌3とはカマドを中心にして反対側にあっている。これらの土壌は直径30～45cmの円形で、深さが7～12cmの浅い皿状をなしている。埋土は黄褐色混土、暗褐色混土、黄橙色土などからなり、土壌5では燃土、炭化物が混入している。

遺物はカマド周辺と住居跡南東部の床面から発見されている。

〈遺物〉（第112・113図、図版86・101・112）

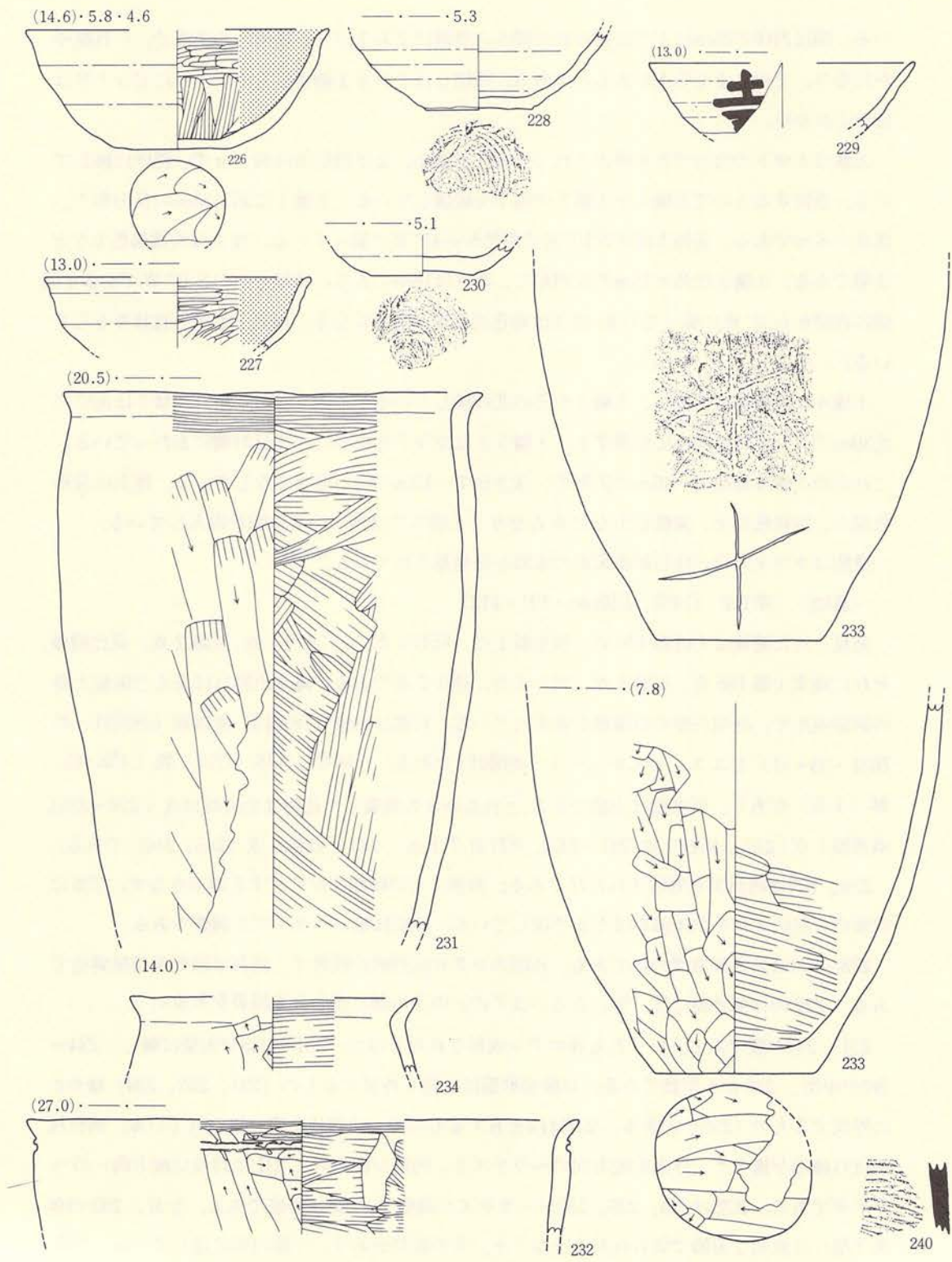
発見された遺物は土師器176点、須恵器1点、砥石3点、火打石？1点、鉄鏝2点、炭化穀類、それに縄文土器186点、石器6点、剥片5点、碎片7点である。縄文土器はほとんど粗製土器の胴部破片で、晩期の壺の口縁部が含まれている。石器は石鏝（48図15）、搔器類（48図21・49図31・33・34）、ピエス・エスキューユ（49図41）である。土師器には坏（17点）、甕（158点）、鉢（1点）があり、須恵器は大甕である。これらのうち掲載した遺物は土師器14点（226～239）、須恵器1点（240）、砥石3点（241～243）、火打石？1点（244）、鉄鏝2点（245、246）である。

226、227は内面黒色処理された坏である。両者とも口縁端部が外反する器形をなす。226は内面の方射状ミカキが体部中ほどまで達している。底部は粗いヘラケズリ調整である。

228～230は黒色無処理の坏である。外面のロクロ成形痕が顕著で、底部は回転糸切無調整である。229の体部外面には「寺」あるいは「吉」の上半部と思われる墨書がある。

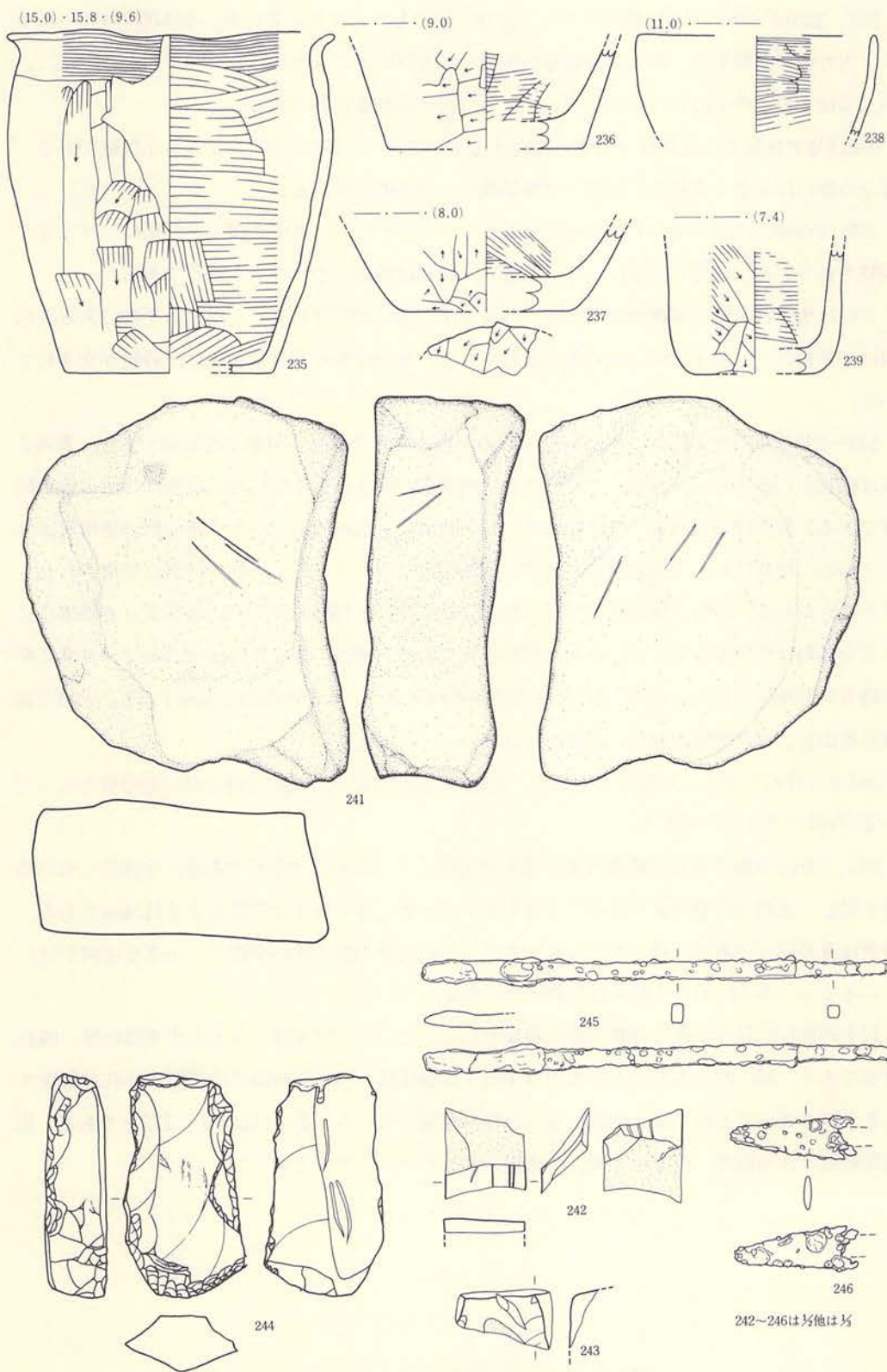
231～239が甕である。いずれも非ロクロ成形されたもので、231～233が大型に属し、234～247が中型、239が小型甕である。口縁部形態には短く外反するもの（231、232、234）緩やかに外反するもの（235）がある。232は段を有するもので、沈線状に深く挟られている。調整技法は口縁部が横ナデ、外面が縦方向のヘラケズリ、内面が横方向（231は斜及び縦方向）のヘラナデである。底部は233、235、237がヘラケズリ調整で、236は砂底である。なお、233の体部下端には鋭利な刃物で切られたような「十」字の線刻があり、一部内面に達している。内面では対応する位置に「メ」が記されている。





第112图 VII F 23竖穴住居跡出土遺物 (1)





第113図 VII F 23竪穴住居跡出土遺物(2)

231、235はヘラケズリ後横ナデされており、他のものとは異っている。全体的プロポーシオン、内外面の調整手法、胎土、焼成等が類似しており同時に成形されたものであろう。また、同土器は大型、中型に分けられ、セットとして捉えられる資料である。

236はⅦE16竪穴住居跡埋土遺物と接合するものであり、239は筒形を呈する小型甕である。以上の他にはロクロ成形された甕の口縁部破片、体部破片がある。

238は直線的に開きながら立ち上がるもので鉢と思われる。器壁が薄く、外面はヘラミガキ調整されているようであるがはっきりしない。内面は横方向のヘラナデ調整である。

240は須恵器大甕の体部破片である。外面は平行線状の叩き目痕で、内面は平滑である。色調は淡黄褐色で、胎土中央が灰白色を呈している。焼成はやや不良で胎土には砂粒が含まれている。

241～243は砥石である。241は扁平な石の表裏と側面の3面を利用したものである。表裏2面は幅13cm、長さ17cmにわたって使用され、中央部が僅かに凹んでいる。斜方向の使用痕が観察できる。側面は幅6.0cm、長さ15cmで三日月状に中央部が凹んでいる。横方向の使用痕が付いている。砥面に対して横方向が平坦で、使用方向に凹んでいる。刃物の研磨に使用されたものと考えられる。形状、使用状況がⅦA16竪穴住居跡170に酷似している。後2者とも破損していて全体形は不明である。242は4面使用されており、砥面の幅は1.5cm～2.5cmで、表裏2面に縦方向の擦痕が認められる。243は3面使用されており、砥面の幅は2.5cmである。石質は両輝石安山岩、凝灰質硬質泥岩、泥質凝灰岩——・——である。

244は火打石と考えられるものである。7.0～3.5cm、厚さが1.8cmで周辺部に敲打痕をもっている。石質はチャートである。

245、246は鉄鎌である。前者は茎が僅かに欠損しているがほぼ完形である。全体的に細い棒状を呈し、先端部が鑿のように平らで薄くなっている。身の長さは筥被きまで11.4cmである。後者は身の部分のみで、長さが3.5cmである。比較的身の幅の狭い平根で、小さな逆刺が付いているようである。ⅥG7竪穴住居跡の78に酷似している。

以上の他には鉄滓2点と塊状の炭化穀類が出土している。鉄滓は2点とも中央部が厚い碗形鉄滓である。鍛冶滓とみられる。表面は平坦で熔融状態を示し、断面では粗鬆な小孔が観察される。厚さ3cmのものでは3回以上重った状況を呈している。重さは235g、175gである。炭化穀類は佐藤敏也、松谷暁子両氏の鑑定によるとヒエ、アワであった。



## 15. VI G 8 竪穴住居跡

〈遺構〉(第114・115図、図版74)

東区東部の斜面中央に位置し、段丘崖の西3mにあたる。東半が木根によって破壊されている。平面形は東西方向が3.5~3.9m、南北方向が4.1~4.2mの方形である。方向は西壁によるとN5°Wである。

埋土は上位が黒色土、黒褐色土で、中位が褐色混土、暗褐色混土、下位がにぶい黄褐色混土で、周縁部では暗褐色混土などである。中位から下位にかけて十和田a降下火山灰が層状、あるいはブロック状に混入し、下位には炭化材、焼土が含まれている。

炭化材は南西隅と中央部の床面に散在している。直径6~13cmの丸太材、あるいは半裁された丸太材である。材はケヤキ1点、アサダ1点、不明広葉樹4点と鑑定された。なお、丸太材(No.4)は放射性炭素年代測定の結果によると30±130年BP、AD1920年であった。これについては木越教授の「大気中の<sup>14</sup>C濃度変動によるくるいを考慮すると200±100BP程度のものである可能性が強い。」というコメントをいただいている。それにしても年代差が大きい。

壁は直に立ち上がり、壁高は最大30cmである。各壁とも直線的で、床面はほぼ平坦である。北壁と西壁の大部分で周溝を確認している。幅は15~20cm、深さは5~11cmである。底面には直径8cmほどのピットが連続している。

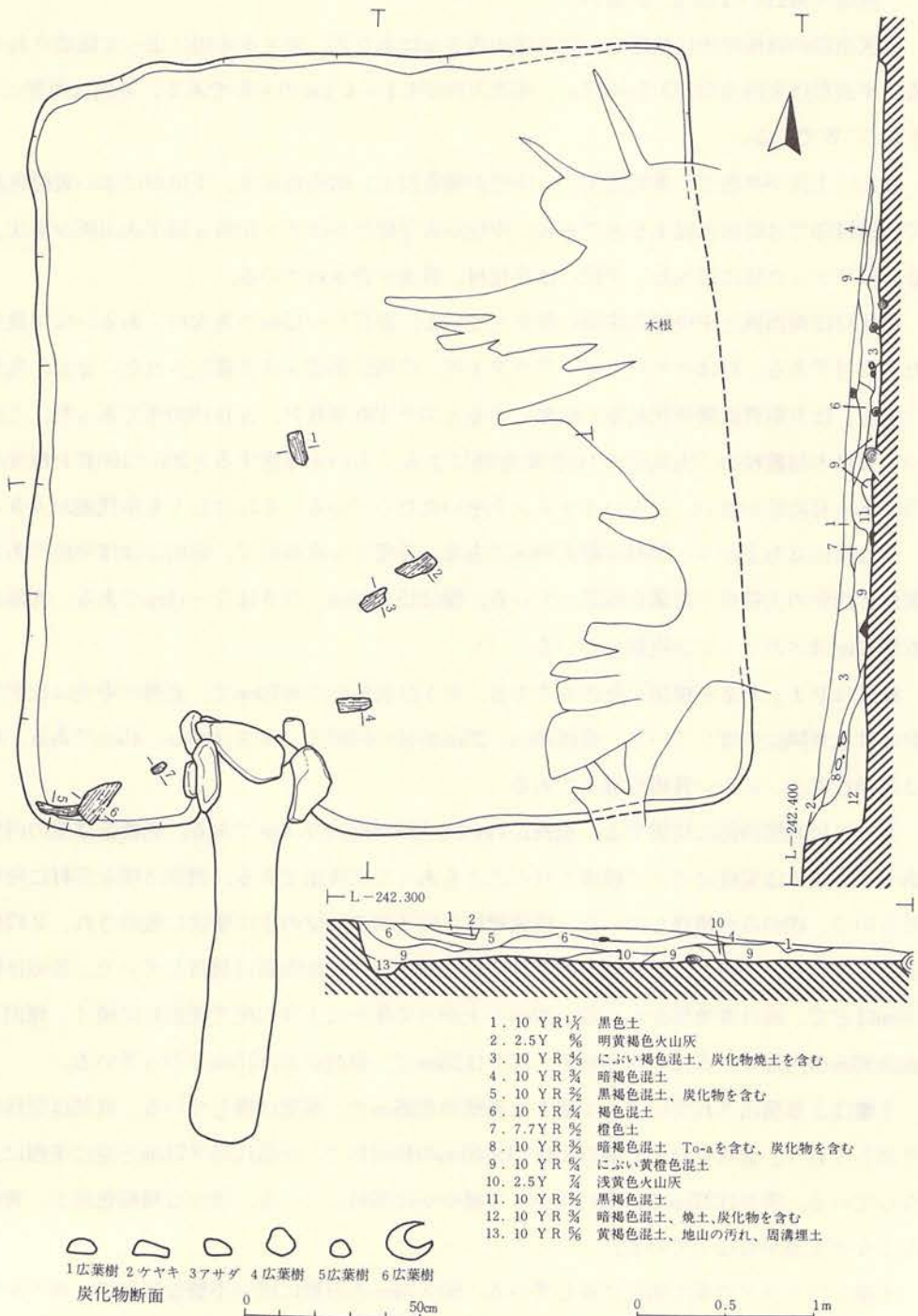
柱穴はP1、P2を検出したのみである。P1は北壁の内側70cmで、東西の中央に位置する。P2は北東隅に位置している。直径20cm、25cm前後の円形で、深さは28cm、45cmである。埋土は黒褐色混土、にぶい黄褐色混土である。

カマドは南壁西部に位置する。総長2.4mで、壁外部分が1.8mである。燃焼部は壁の内側にあって、焼土は電柱によって破壊されたこともあって未検出である。側壁は礫を芯材に使用したもので、礫のみが遺存していた。構成礫は片側2個の縦位の上に横位に敷設され、2段構造となっている。その上に天井石が配されているが、天井石は内側に崩落していた。煙道は幅が36cmほどで、底は燃焼部から一段(20cm)上がって僅かに上り勾配で煙出しに続く。煙出しは直径35cmの円形で、直に立ち上がる。深さは33cmで、煙道からは15cm下がっている。

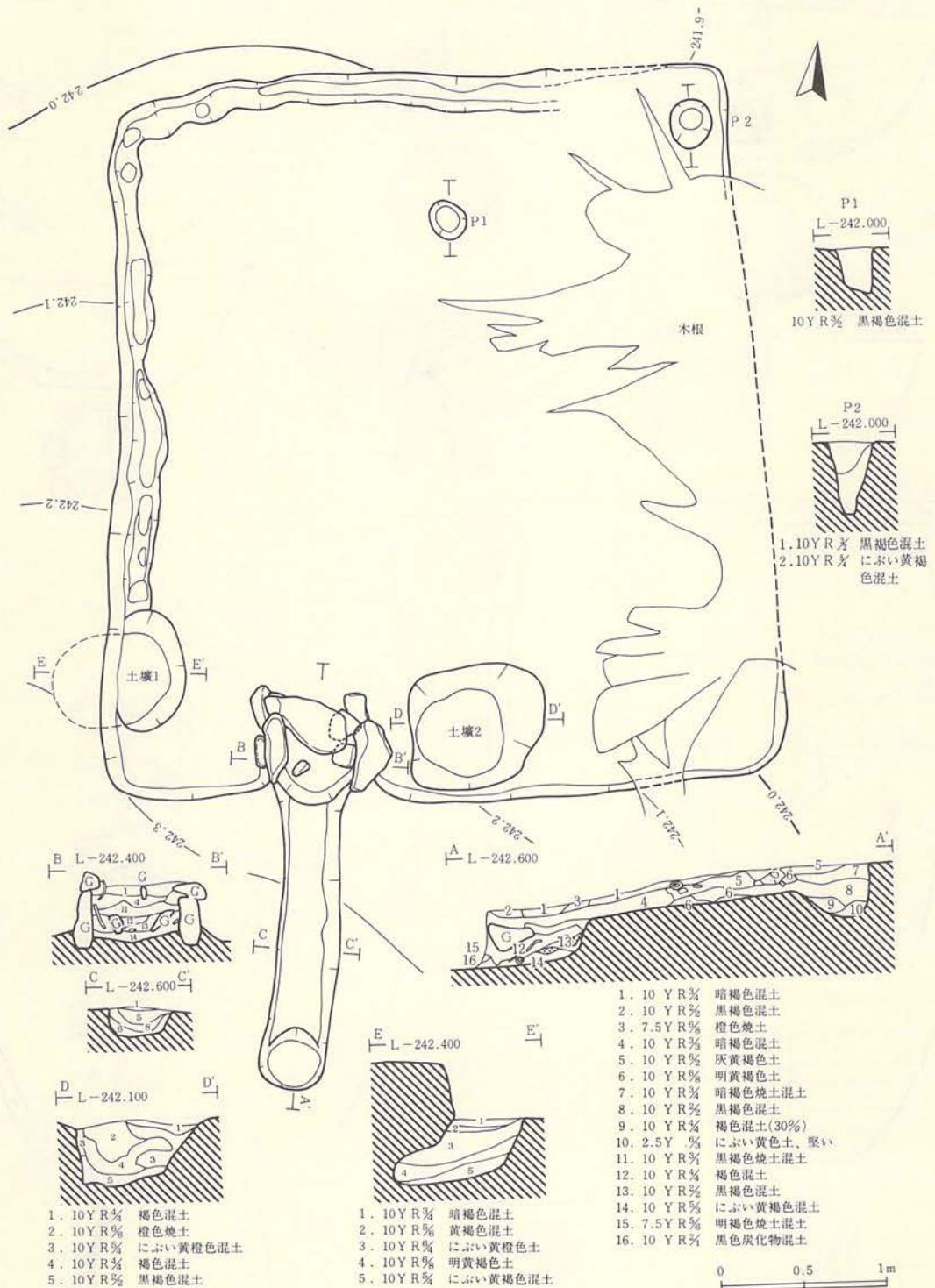
土壙は2基検出されている。土壙1は南壁の北35cmで、西壁に接している。底部は壁外に張り出しており、袋状をなす。開口部は73×40cmの長円形で、底部は55×71cmと逆に東西に長くなっている。深さは37cmで、奥に向かって緩やかに傾斜している。埋土は暗褐色混土、黄褐色混土など5層からなっている。

土壙2はカマドの東で南壁に接している。80×74cmの方形に近い不整な円形で、深さが38cm

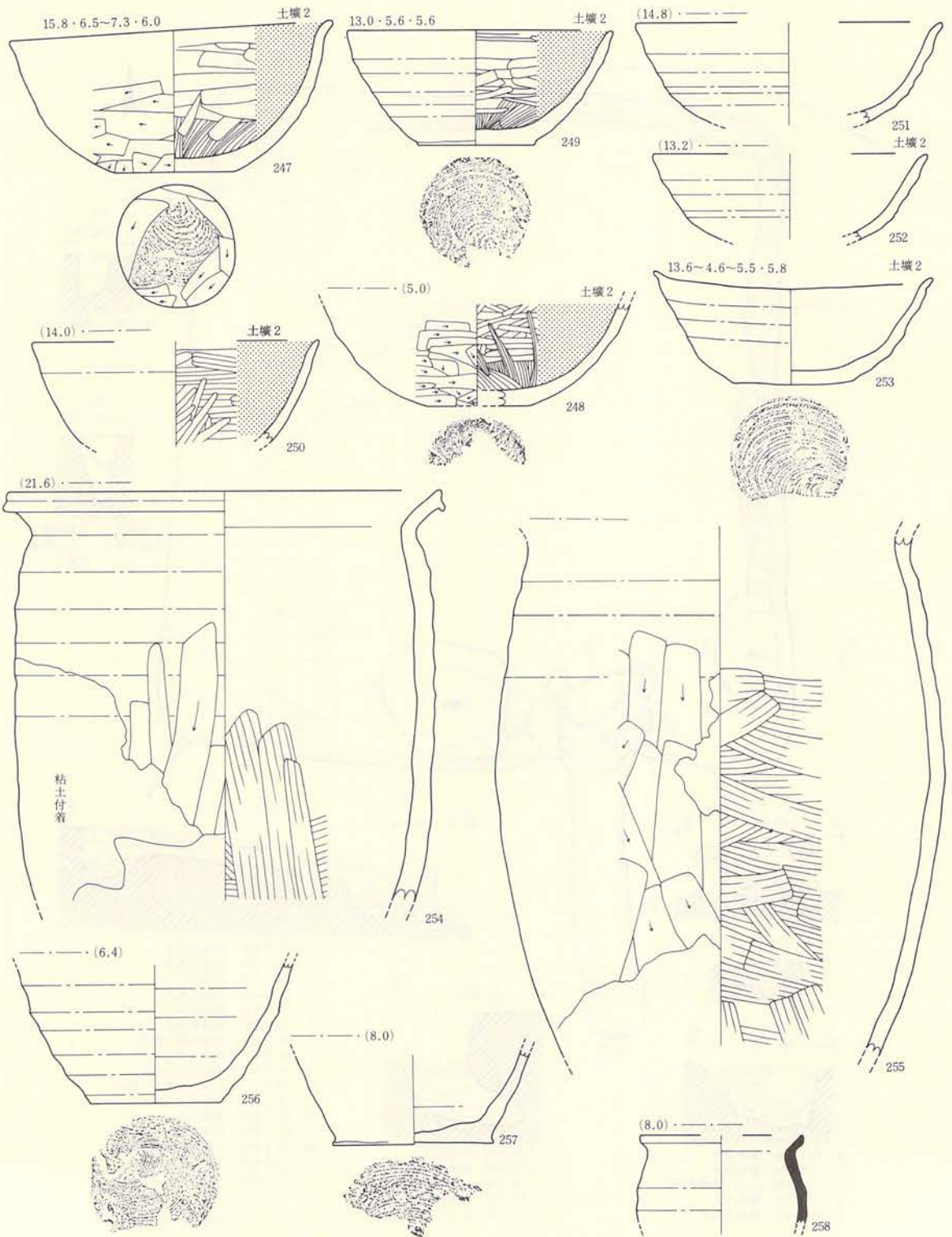




第114図 VII G 8 竪穴住居跡(1)



第115図 VII G 8 竪穴住居跡(2)



第116図 VII 8 竖穴住居跡出土遺物



である。埋土は褐色混土、橙色混土、黒褐色混土など5層に細分される。埋土から247~250、252、253の6点が出土している。

遺物は主にカマド周辺と、土壙2の埋土から発見されている。

〈遺物〉(第116図、図版87)

発見された遺物は土師器60点、須恵器1点、それに縄文土器5点、石器1点である。縄文土器は後期あるいは晩期の体部破片で、石器は搔器(48図29)である。土師器には坏(11点)と甕(49点)があり、須恵器は小型壺(1点)である。このうち掲載したものは土師器11点(247~257)、須恵器1点(258)である。

247~250は内面黒色処理された坏であるが、250と247、248の一部が二次火熱のため内面の黒色が消滅して褐色あるいは赤褐色を呈している。器形は底部から内彎しながら立ち上がるもので、口縁部には外反するもの(247)と、そのまま納まるもの(249、250)とがある。247、248は体部下半がヘラケズリ調整されており、247によると口径が15.8cmで大型に属している。底部は回転糸切後、周縁部がヘラケズリ調整されている。249は回転糸切無調整である。なお、248の内面調整は方射状ミガキが体部中ほどまで達している。

251~253は黒色無処理の坏である。いずれも口縁部が外反ぎみである。外面のロクロ成形痕が明瞭で、底部は回転糸切無調整である。

254~257は甕で、いずれもロクロ成形されたものである。254、255は大甕で、口縁部が外反し、端部が下方に挽き出されて縁帯となっている。外面が縦方向のヘラケズリで、内面は縦方向(254)、横方向(255)のヘラナデ調整である。256、257は中型甕の底部で、体部下端までロクロ成形されている。外面はロクロ成形痕が顕著で、底部は回転糸切無調整である。

258は須恵器の小型壺である。口縁部が「く」の字状に屈折している。

## 2. 焼土遺構

### 1. IH7 焼土遺構

〈遺構〉（第117図、図版88）

西区中央の斜面中位に位置している。30×24cmの不整形のもの、18×4cmの小さなものの2つからなるものである。焼土は赤褐色を呈し、厚さが3cmである。周辺から関連する遺構は検出されていない。

〈遺物〉（第117図、図版89）

近くから外面に平行線状の叩き目文をもつ須恵器大甕（259）の体部破片が発見されている。内外面とも暗青灰褐色を呈し、器表面がザラザラしている。

### 2. IJ7 焼土遺構

〈遺構〉（第117図、図版88）

西区中央の斜面中位に位置している。63×40cmほどの不整な三角形をなすもので、近接して礫が1個存在する。焼土は中央部が凹んで上部が黄橙色焼土混土に覆われている。色調は赤褐色を呈し、厚さは4cmである。礫の下には小さな掘り込みをもっている。

〈遺物〉（第117図、図版89）

周辺から、土師器17点、須恵器2点が発見されている。土師器坏には内外両面黒色処理を施したものの2点、内面黒色処理を施したものの10点、黒色無処理のもの3点がある。

260は外面が一部褐色を呈しているが、本来は両面とも黒色処理されたものとみられる。やや大ぶりの坏で内外面とも丁寧にヘラミガキ調整され、底部はヘラケズリ調整されている。261は内面黒色処理された坏である。甕はロクロ成形の口縁部と体部破片である。

須恵器は甕の体部破片（262、263）である。外面に平行線状の叩き目文をもつ。

### 3. IIA9 焼土遺構

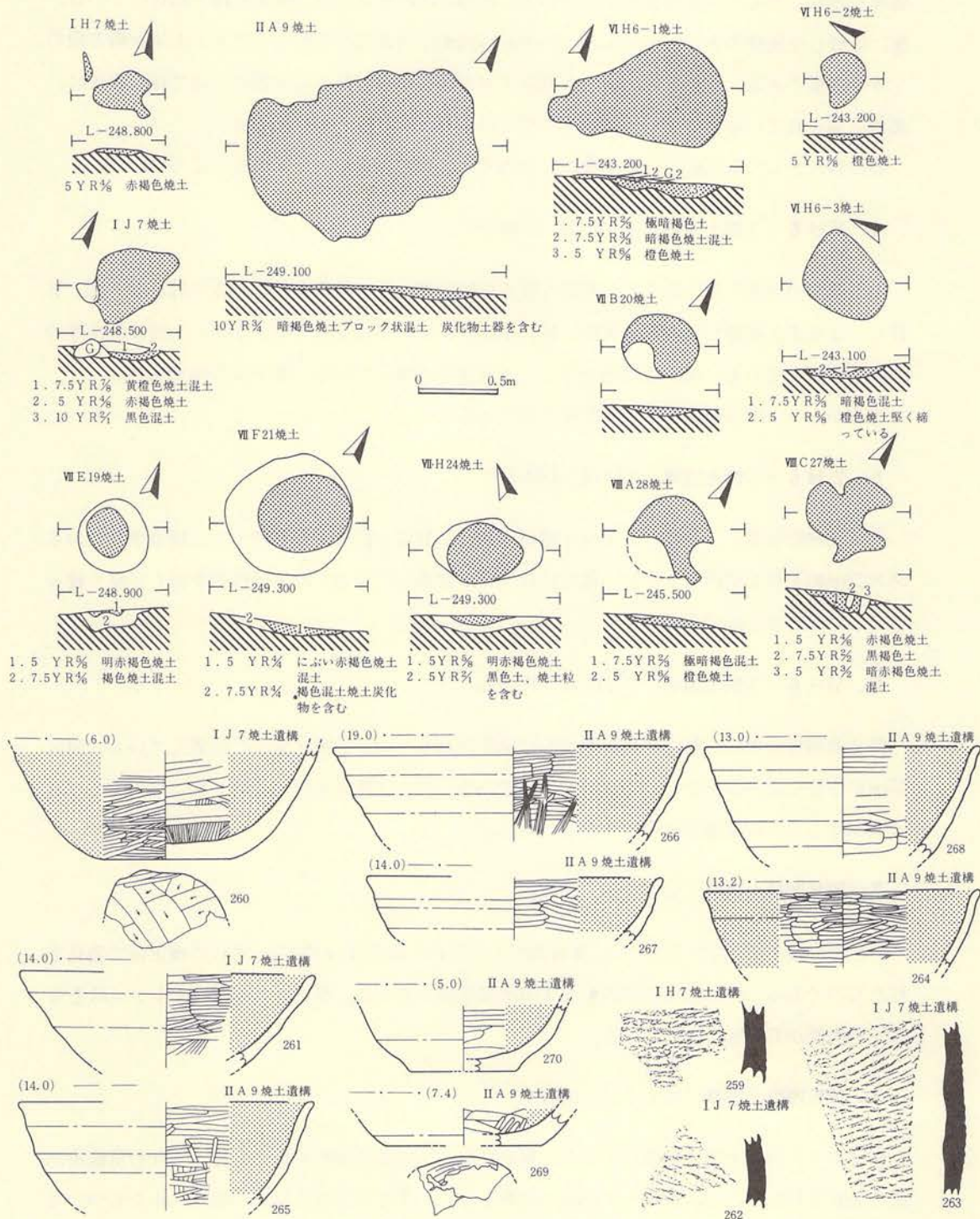
〈遺構〉（第117図、図版88）

西区中央の斜面中位に位置している。暗褐色の焼土混土の広がりである。東西に長い1.45×0.95mの不整な長円形をなすもので、厚さは6cmほどである。

〈遺物〉（第117図、図版89）

周辺から土師器27点、(坏25点、甕2点)が発見されている。坏には、内外面とも黒色処理されたもの（4点）と内面のみ黒色処理されたもの（21点）とがある。264は前者の例で、内外面





第117図 焼土遺構と遺物



とも丁寧な横方向のミガキ調整である。265～270は後者の例で、269は2次火熱のため、黒色処理が消滅したものか赤褐色をなしている。底部には回転糸切後、粘土を薄く貼付けている。他に比較して底径の大きい坏である。いずれも内面は内底部が方射状ミガキ、上半が横方向のミガキ調整である。このうち265は方射状ミガキ調整が内底部から上部にかけて笹の葉状に、最後に施されている。他のものは上半の横方向ミガキが最後となっている。

甕は砂底をもつ底部破片（小型甕か）と内外面にロクロ成形痕をもつものである。

#### 4. VI H 6 - 1 焼土遺構（第117図、図版88）

東区北部の斜面下位に位置し、VI G 5 竪穴住居跡埋土上に構築されている。VI H 6 - 2、VI H 6 - 3 焼土と隣接している。東西に長い113×63cmの不整な楕円形をなす。上面は耕作等のため削平されている。焼土は橙色を呈し、上面が強く締っている。厚さは8cmである。

周辺から、土師器甕破片2点が発見されている。

#### 5. VI H 6 - 2 焼土遺構（117図、図版88）

東区北部に位置し、VI H 6 - 1 焼土遺構と同様にVI G 5 竪穴住居跡埋土上に構築されている。36×27cmの不整な楕円形をなし、周辺には焼土が散乱していた。焼土は橙色を呈し、強く締っている。厚さは3cmである。

#### 6. VI H 6 - 3 焼土遺構（第117図、図版88）

前2者同様にVI G 5 竪穴住居跡埋土上に構築されたもので、東区北部に位置している。54×45cmの不整な長円形をなし、中央部が凹んでいる。焼土は橙色を呈し、強く締っている。厚さは5cmほどで、周縁部がやや厚くなっている。

#### 7. VII B 20 焼土遺構（第117図、図版88）

東区中央の斜面上位に位置する。VII B 22 竪穴住居跡の北約4mである。古代の検出面で発見されたものである。48×42cmの円形をなす明赤褐色焼土である。厚さは4cmほどでレンズ状をなし、中央部が若干厚くなっている。

#### 8. VII E 19 焼土遺構（第117図、図版88）

東区中央の斜面上位に位置している。VII E 16 竪穴住居跡の南約4mである。古代の遺構検出面で発見されたものである。30×25cmの円形をなし、下に褐色焼土混土の掘り込みをもつ。焼土は明赤褐色を呈し、厚さが3cmである。周縁部の厚さが幾分厚くなっている。

#### 9. VII F 21焼土遺構 (第 117 図、図版88)

東区東部の斜面上位に位置する。VII F 18 竪穴住居跡の南約 4 m である。古代の遺構検出面で発見されたものであるが、削平のため縄文時代の検出面ともなっており、どちらに帰属するか不明である。焼土はにぶい赤褐色の焼土混土が 65×50cm の円形に広がるものである。厚さは 7 cm ほどで、レンズ状に中央部が厚くなっている。下には褐色混土の掘り込みをもっている。

#### 10. VII H 24焼土遺構 (第 117 図、図版88)

東区南東端部の斜面上位に位置している。VII F 23 竪穴住居跡の東約 3 m である。検出面は削平されて、古代と縄文時代の両時代の検出面となっており、どちらとも判断できない。焼土は 40×38cm の円形で、厚さが 6 cm である。上面は削平されているが、レンズ状をなす。色調は明赤褐色を呈し、上面が堅く締っている。下位には黒色土の掘り込みが伴っている。

#### 11. VIII A 28焼土遺構 (第 117 図)

第 2 次調査区西端に位置している。南半をサブトレンチによって破壊されているが、平面形は直径 55cm の円形に近いものと思われる。焼土は橙色を呈し、上面が明赤褐色をなして堅くなっていた。厚さは 6 cm ほどでレンズ状に中央部が厚くなっている。

#### 12. VIII C 27焼土遺構 (第 117 図)

第 2 次調査区中央の斜面中位から上位にかけて位置している。VIII A 28 焼土遺構の北 10m である。直径は 60×52cm ほどであるが、出入りがあって不整な形状をなしている。色調は赤褐色を呈し、厚さは最大 14cm である。近くから縄文土器 5 点が発見されている。粗製土器の破片である。

ただし、検出面は十和田 a 降下火山灰とみられる灰白色火山灰の上位の黒色土であり、縄文時代の焼土遺構ではない。



### 3. 土壙

#### 1. IVG13土壙（第118図、図版90）

中央区南部の斜面上位に位置する。平面形は北東—南西方向に長い円形を呈し、開口部が3.2×2.6m、底部が3.0×1.8mである。底部に近いほど長幅比が大きい。深さは1.2mであり断面の形状はピーカー状となる。

埋土は黒色土を主体とする。上位ではススキとみられる植物からなる4層の薄い黒色混土が堆積し、中位には十和田 a 降下火山灰が10cmほどの層を形成している。また、下位には崩落したと思われる明褐色混土がブロック状に混在する。いずれも自然堆積による埋土とみなされる。

壁は底部から直線的に立ち上がり、崩落した北側は上半で外反する。底部はほぼ平坦である。が、全体に自然地形に沿って傾斜している。底面では伏流水があって軟弱である。

遺物は出土していない。

#### 2. VIID24土壙（第118図、図版90）

東区東部の斜面上位に位置する。開口部の径は2.20m、底部では1.98×1.85mをはかり、円形を呈する。深さは最大1.00mである。VIID24陥し穴状遺構を切り、これより新しい。

壁は、斜面下位の南西側では平坦な底面から直に立ち上がり中央部から緩やかに外反するが、斜面上位の北東側では底面から緩やかに外反し、断面の形状はやや不整なピーカー状を呈する。

埋土は、最上位に暗褐色混土、上位にススキからなる黒色混土、中位に褐色混土と黒褐色混土、そして十和田 a 降下火山灰の小ブロック、下位に明褐色～褐色混土が堆積する。いずれも自然堆積とみなされる。

底面全体には、炭化したススキ、丸木、焼土が散乱し、ススキは特に西～南壁際や中央東寄りに集中している。なお、床面出土の丸木の方射性炭素年代測定結果によると、1100±100年BP、AD 850年であった。

遺物は自然遺物以外に出土していない。

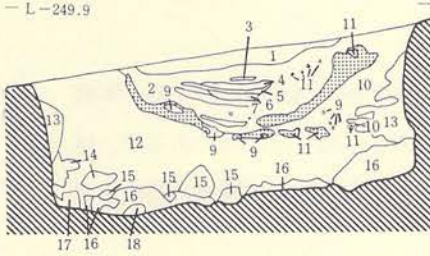
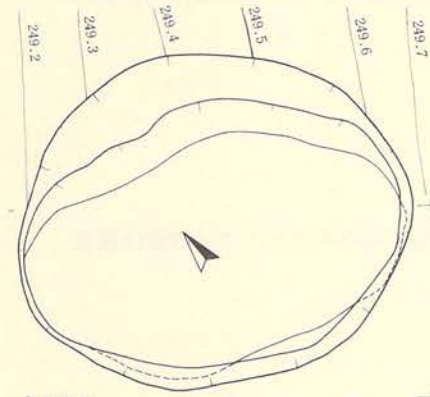
#### 3. VIIE26土壙

〈遺構〉（第118図、図版91）

東区東部の斜面上位に位置する。東西方向に若干長い円形をなし、開口部は2.80×2.60m、底部では2.38×2.10mである。深さは最大1.25mである。壁は、東側では底面から直に立ち上がり、西側では直線的に外反して立ち上がるが断面の形状はピーカー形である。

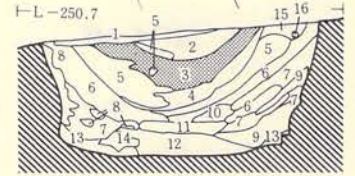
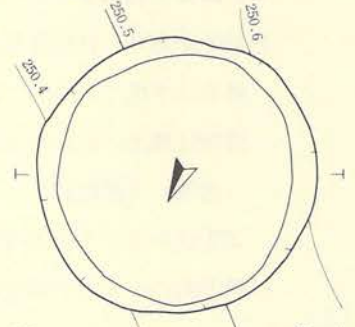


IV G13土壤



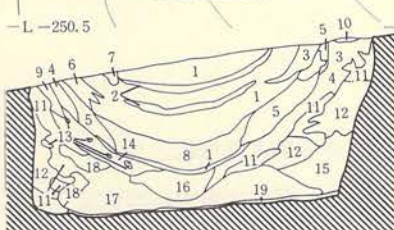
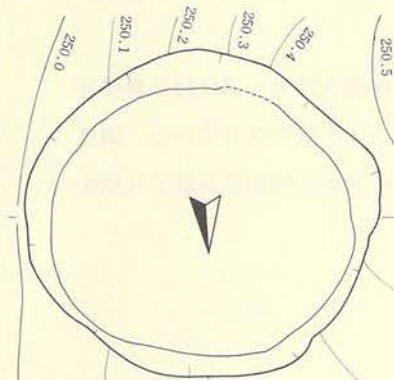
1. 10 YR1 灰 黑色混土
2. 7.5 YR 灰 黑色混土
3. 10 YR1 灰 黑色混土
4. 10 YR1 灰 黑色混土
5. 10 YR1 灰 黑色混土
6. 10 YR1 灰 黑色混土
7. 10 YR1 灰 黑色混土
8. 10 YR1 灰 黑色混土
9. 10 YR 灰 におい黄橙混土
10. 10 YR1 灰 灰白色土 To-a混土
11. 10 YR1 灰 灰白色 To-a
12. 7.5 YR 灰 黑色混土
13. 7.5 YR 灰 褐色混土
14. 7.5 YR 灰 明褐色混土
15. 7.5 YR 灰 黑褐色混土
16. 10 YR 灰 明褐色混土
17. 7.5 YR 灰 暗褐色混土
18. 10 YR 灰 黄橙色混土

VII D24土壤



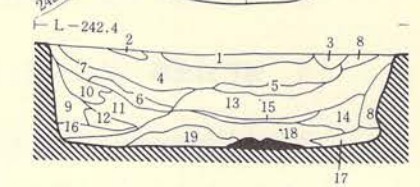
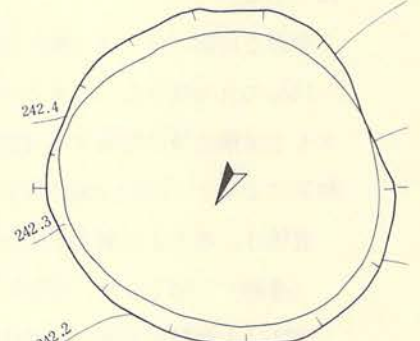
1. 7.5 YR 灰 暗褐色混土
2. 10 YR 灰 黑色混土
3. 10 YR1 灰 黑色混土
4. 10 YR 灰 黑色混土
5. 10 YR 灰 褐色混土
6. 7.5 YR 灰 黑褐色混土
7. 7.5 YR 灰 褐色混土
8. 7.5 YR 灰 明褐色混土
9. 10 YR 灰 明黄褐色混土
10. 10 YR 灰 黑褐色混土
11. 10 YR 灰 黑褐色混土
12. 10 YR 灰 褐色混土
13. 10 YR 灰 黑褐色混土
14. 10 YR 灰 黑褐色混土
15. 10 YR 灰 暗褐色混土
16. 10 YR 灰 灰黄褐色土 To-a

VII E26土壤



1. 10 YR1 灰 黑色混土
2. 10 YR 灰 黑色混土
3. 10 YR 灰 黑褐色混土
4. 10 YR 灰 におい黄褐色混土
5. 10 YR 灰 暗褐色混土
6. 10 YR 灰 黑色混土
7. 10 YR 灰 黑褐色混土
8. 10 YR 灰 黑褐色混土
9. 10 YR 灰 黑褐色混土
10. 10 YR 灰 暗褐色混土
11. 7.5 YR 灰 暗褐色混土
12. 7.5 YR 灰 褐色混土
13. 10 YR 灰 灰黄褐色 To-a
14. 10 YR 灰 におい黄褐色混土
15. 10 YR 灰 明黄褐色混土
16. 10 YR 灰 黑褐色混土
17. 10 YR 灰 におい黄褐色混土
18. 10 YR 灰 褐色混土
19. 7.5 YR 灰 黑褐色混土

VII F8土壤



1. 10 YR1 灰 黑色混土
2. 10 YR 灰 褐色混土
3. 10 YR 灰 明黄褐色混土
4. 10 YR 灰 暗褐色混土
5. 10 YR 灰 黄褐色混土
6. 10 YR 灰 黄褐色混土
7. 10 YR 灰 黑褐色混土
8. 10 YR 灰 黑褐色混土
9. 10 YR 灰 におい黄橙混土
10. 10 YR 灰 におい黄橙混土
11. 10 YR 灰 におい黄橙混土
12. 10 YR 灰 におい黄橙混土
13. 10 YR 灰 褐色混土
14. 10 YR 灰 暗褐色混土
15. 10 YR 灰 褐色混土
16. 10 YR 灰 明黄褐色土
17. 10 YR 灰 明黄褐色土
18. 10 YR 灰 におい黄橙混土
19. 10 YR 灰 におい黄褐色混土

第118図 土壤(ビーカー形1)

埋土は、上～中にススキからなる黒色～黒褐色混土と黒褐色混土の間層がレンズ状に堆積し中位には十和田 a 降下火山灰がブロック状に混入するにふい黄褐色混土、下位にはにふい黄褐色混土があり、自然堆積の状況を呈する。

底面は平坦であるが、若干斜面下位に傾斜している。

遺物は埋土上位から土師器片が出土している。

〈遺物〉（図版97）

271 はロクロ不使用の土師器甕の体部破片である。外面が縦方向のヘラケズリ、内面は横及び斜方向のヘラナデ調整である。

#### 4. VII F 8 土壙

〈遺構〉（第 118 図、図版91）

東区東部の斜面中位にあたり、段丘崖の西10mに位置する。東北東～西南西に若干長い不整形円形をなし、開口部の径は2.7×2.6m、底部の径2.5×2.3mである。深さは75cmであるが、埋土上位の堆積状況や検出面の状況から後世の削平を受けていると推定される。断面の形状は底面から壁が緩やかに外反するピーカー状を呈する。

埋土は上位にススキを含む黒色混土と褐色混土、中位に褐色～にふい黄橙色混土があり、下位ではにふい黄褐色混土、炭化した草木等からなる。下層の植物遺体を除き自然堆積による埋没である。

平坦な底面には、中央部に炭化した木や植物が散乱した状態で検出される。炭化材は直径8～12cmの丸木状をなし、タモが含まれている。植物はススキの集合体と鑑定されている。両者とも上屋構造等に関連する可能性もあげられる。なお、床面出土の丸木の放射性炭素年代測定結果によると、850±100年BP、AD1100年であった。

遺物は、埋土上位層出土の土師器1点である。

〈遺物〉（第 120 図、図版97）

272 は土師器小型甕の底部破片である。調整は不明である。

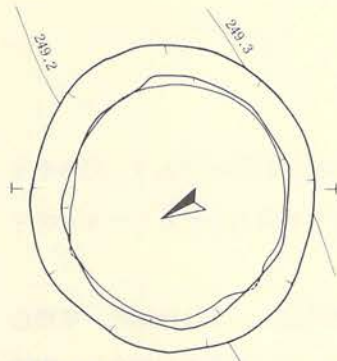
#### 5. VII F 21 土壙（第 119 図、図版92）

東区東部の斜面中位から上位にかけて位置する。平面形は、底部が若干隅丸方形形状となるがほぼ円形を呈する。開口部の径は2.44m、底部では1.87×1.68mである。深さは最大1.35mである。断面の形状は、平坦な底面から壁が直に立ち上がり、その後緩やかに外反するピーカー状である。

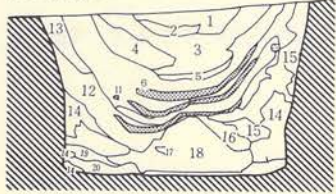
埋土は、上位にススキを含む黒色混土、中位には小ブロックの十和田 a 降下火山灰を含む暗



Ⅶ F21 土壌

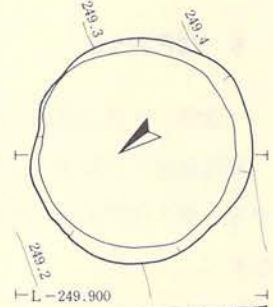


┆L-249.400

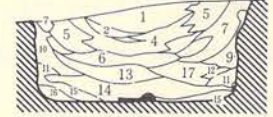


1. 10 YR % 黒色混土
2. 10 YR % 黒色混土
3. 10 YR1 % 黒色混土
4. 10 YR % 黒色混土
5. 10 YR % 褐色混土
6. 10 YR % 暗褐色混土
7. 10 YR1 % 黒色混土
8. 10 YR % にぶい黄橙混土
9. 10 YR % 褐色混土
10. 10 YR % 暗褐色混土
11. 7.5 YR % 黄褐色 To-a
12. 10 YR % 黒褐色混土
13. 10 YR % 黒褐色混土
14. 7.5 YR % 黄褐色混土
15. 10 YR % 褐色混土
16. 10 YR % 黒褐色
17. 10 YR % 黒色混土
18. 10 YR % にぶい黄褐色混土
19. 10 YR % 黒褐色混土
20. 10 YR % 黒褐色混土

Ⅶ F22 土壌

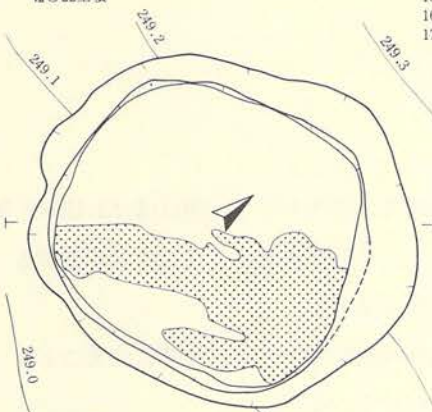


┆L-249.900

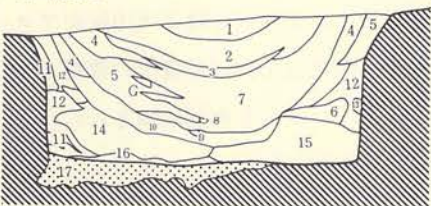


1. 10 YR % 黒色混土
2. 10 YR % 暗褐色混土
3. 10 YR % 黒色混土
4. 10 YR % 黒色混土
5. 10 YR % 黄褐色混土
6. 10 YR % 褐色混土
7. 10 YR % 暗褐色混土
8. 10 YR % 黒褐色混土
9. 10 YR % 明褐色混土
10. 7.5 YR % 暗褐色混土
11. 7.5 YR % 明褐色混土
12. 10 YR % 黒褐色混土
13. 10 YR % 褐色混土
14. 10 YR % 暗褐色混土
15. 10 YR % 黒褐色混土
16. 10 YR % 褐色混土
17. 10 YR % 褐色混土

Ⅶ G22 土壌

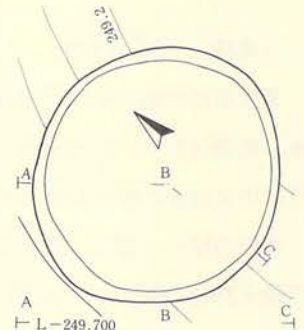


┆L-249.400

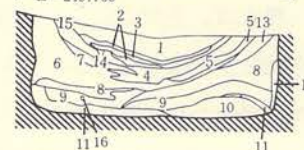


1. 10 YR % にぶい黄橙混土
2. 10 YR1 % 黒色混土
3. 10 YR % 黒褐色混土
4. 10 YR % 褐色混土
5. 10 YR % にぶい黄褐色混土
6. 10 YR % 暗褐色混土
7. 10 YR1 % 黒色混土
8. 10 YR % 灰黄褐色土 To-a
9. 2.5 YR % オリブ褐色土 B-Tm
10. 10 YR % 黒褐色 B-Tm混土
11. 10 YR % 明褐色混土
12. 10 YR % 黒褐色混土
13. 10 YR % 黄褐色混土
14. 10 YR % 明黄褐色混土
15. 10 YR % 褐色混土
16. 10 YR % 黒褐色混土
17. 10 YR % にぶい黄橙混土

1. 10 YR % 黒色
2. 10 YR1 % 黒色
3. 10 YR % 黒褐色
4. 10 YR % 暗褐色混土
5. 10 YR % 褐色混土
6. 10 YR % 黒褐色混土
7. 10 YR % 黒褐色混土
8. 10 YR % 暗褐色混土
9. 10 YR % にぶい黄褐色混土
10. 10 YR % にぶい黄褐色混土
11. 10 YR % にぶい黄褐色混土
12. 10 YR % 暗褐色混土
13. 10 YR % 暗褐色 To-a混土
14. 10 YR % 黒褐色混土
15. 10 YR % 黒褐色混土
16. 2.5 YR % 黄褐色土



┆L-249.700



第119図 土壌(ピーカー形2)



褐色土、さらにススキが混じる黒色混土であり、下位にはにぶい黄褐色混土がある。いずれも自然堆積の様相を呈する。

遺物は出土していない。

## 6. VII F 22土壙

〈遺構〉（第119図、図版92）

東区東部の斜面中位に位置する。開口部の径は1.80m、底部の径は1.55mであり、円形を呈する。深さは最大80cmである。断面の形状は、底面から壁がほぼ真直立ち上がるピーカー状をなす。

埋土は、上位から中位にかけて少量のススキを含む黒色～暗褐色混土、下位は褐色～暗褐色混土であり、自然堆積の様相を呈する。底面の中央部には直径10～12cmの丸木が散乱し、樹種はエンジュと鑑定された。なお、床面出土の丸木の放射性炭素年代測定結果によると、1140±100年BP、AD 810年であった。

遺物は埋土中位層から縄文土器2点が出土している。

〈遺物〉（第120図、図版97）

273は深鉢の体部破片で、沈線で区画した後磨消している。貼瘤があった可能性がある。地は細かいLR単節斜行縄文である。

## 7. VII G 22土壙

〈遺構〉（第119図）

東区東部の斜面中位に位置する。東西方向にやや長い隅丸形状をなし、開口部は3.15×2.56m、底部は2.30×2.10mである。深さは最大1.18mである。平坦な底部から真直に立ち上がる壁は中央部から緩やかに外反し、断面の形状はピーカー状を呈する。

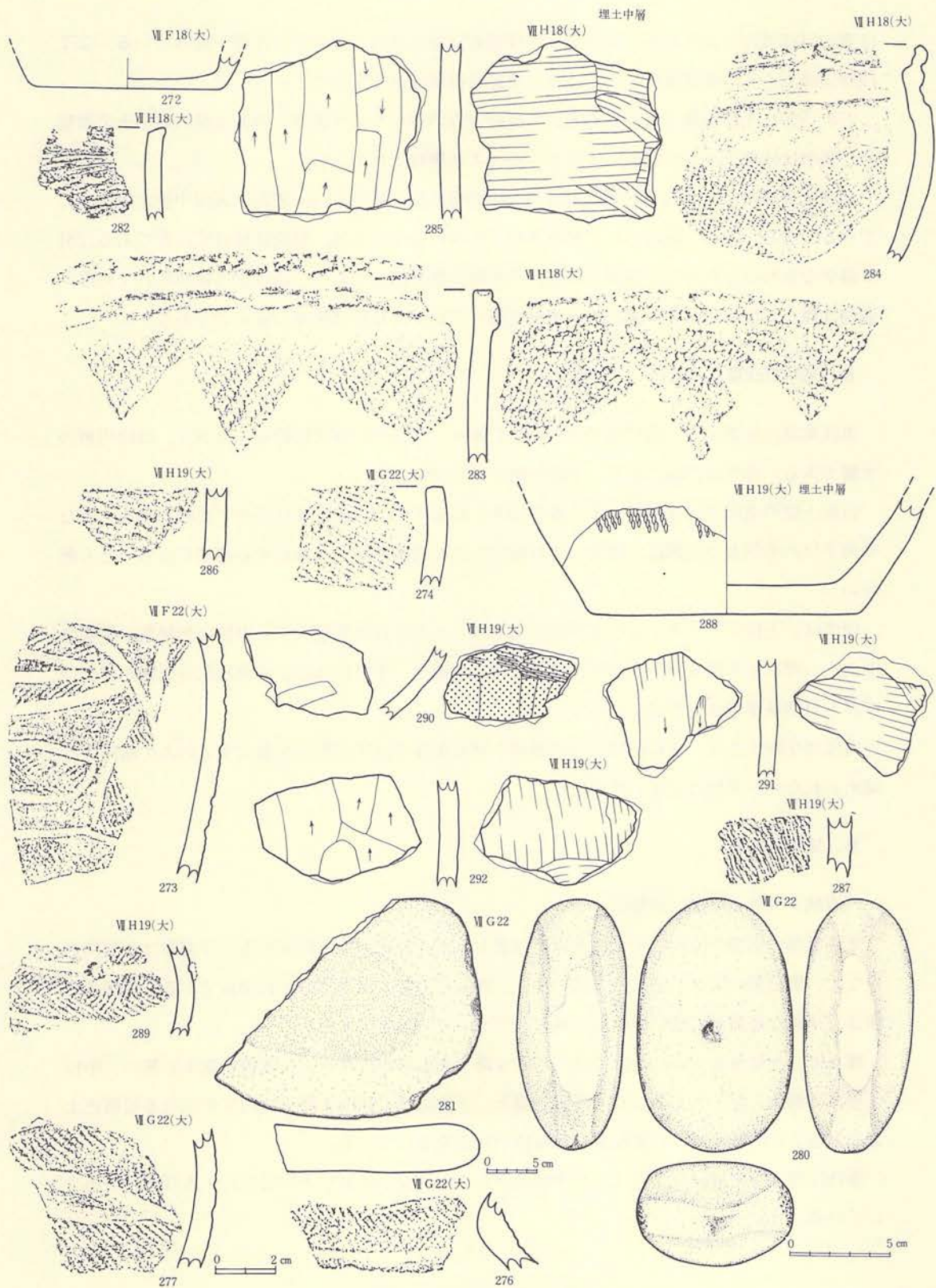
東側の壁の一部は、溝状のVII 22陥し穴遺構を切り、南半の底面ではにぶい黄橙色混土によって最大28cmの深さまで貼床し、西南西～東北東方向に広がっている。

埋土は、上位にはにぶい黄橙色混土、黒色～黒褐色混土、中位には十和田a降下火山灰がブロック状に少量混じるほかススキからなる黒色混土が主体をなす。黒色混土には砂質土の薄層6層が互層をなして堆積する。下位は明黄褐色・褐色の混土である。いずれも自然堆積とみられる。

遺物は縄文土器12点、土師器4点、石器2点である。

〈遺物〉（第120・122図、図版97）

274は断面方形をなす平縁で、無節の斜行縄文が縦回転施文されている。275は壺の口縁部とみられ外反ぎみである。端部内側が肥厚している。器面は無文で丁寧に研がれている。276



第120图 土壙出土遺物(1)



は壺の肩部破片とみられる。羽状縄文が横回転に施文され、その下に沈線が巡っている。277は磨消縄文をもつ体部破片である。RL単節斜行縄文を地文とする。

278、279は土師器甕である。前者が外面縦方向の弱いケズリ調整、内面は横方向のナデ調整で、後者は体部下半から底部にかけてヘラケズリ調整されている。

280は表裏両面が磨石として利用され、両側縁に敲打痕をもつ。また、表面中央が若干凹んでいる。磨石、凹石、敲石として利用されたものようである。石質は輝石安山岩である。281は扁平な自然石を利用した石皿である。中央部が幾分凹んでおり、ほぼ全面使用されている。裏面は僅かではあるが浅い溝状の使用痕を残している。石質は両輝石安山岩である。

#### 8. VII G 25土壙 (第119図、図版93)

東区東部に位置する。開口部では2.10×1.98m、底部で1.98×1.82mをはかり、ほぼ円形の土壙である。深さは73cmであり、上部の削平をうけている。

斜面上位の北西壁はVII G 25-1土壙を切り、斜面下位の南壁はVII G 25-2土壙を切る。また斜面下位の東壁及び底部は、溝状のVII G 26陥し穴状遺構を切り、重複する遺構ではもっとも新しい。

埋土は、上位にススキからなる黒色混土とススキを含む黒褐色混土、中位に黒褐色～暗褐色混土と一部に十和田 a 降下火山灰が混じる暗褐色混土、下位にはにぶい黄褐色混土があり、いずれも自然堆積の状況を呈している。

底部は平坦であり、VII G 26陥し穴状遺構を切る床面では灰白色土が混入するのみで貼床等は認められない。遺物は出土していない。

#### 9. VII H 18土壙

〈遺構〉 (第121図、図版93)

東区東部の斜面中位から上位にかけて位置し、段丘崖の西4mにあたる。平面形は不整円形をなし、開口部の径は3.08m、底部の径は2.40mである。深さは最大1.38mである。断面の形状は、平坦な底面から壁が緩やかに外反してピーカー状を呈する。

埋土は、上位から中位にかけては十和田 a 降下火山灰が混在する灰黄褐色混土が被い、中位下層には倒伏したススキからなる黒褐色混土、下位には十和田 a 降下火山灰が混じる暗褐色土と黒褐色土が堆積する。いずれも自然堆積の様相をなしている。

遺物は埋土上位層から3点(31)、中位層から4点(32)、(34)、下位層から1点(33)が出土している。



〈遺物〉（第120図）

282は口縁部が肥厚するもので、口縁端部が方形をなす。横方向の条痕文をもつ。283は口縁部に隆帯がめぐりその上に横方向から施文された横長の刺突文をもつ。口縁部は平縁で、口縁端部が方形をなし、縄文の上に同様の横長の刺突文が施文されている。下半はLR単節斜行縄文が横回転され、内面も同一原体による縦回転施文されている。284は鉢形土器の口縁部とみられる口唇部に小突起をもち、その下には対となる瘤をもつようであるが一方が剥落している。口唇部には刻みが施され、その下が沈線が2条めぐり磨消されている。下半は細かいLR単節斜行縄文が横回転施文されている。口縁部内側には1条の沈線がめぐっている。

285は土師器甕体部破片である。外面が縦方向のケズリ、内面は横方向のヘラナデ調整である。

## 10. VIIH19土壙

〈遺構〉（第121図版94）

東区東部の斜面中位から上位にかけて位置し、段丘崖からは西7mである。北北東—南南西に若干長い円形をなし、開口部は2.74×2.28m、底部は2.24×2.08mである。深さは最大1.16mである。断面の形状は、平坦な底面から壁が緩やかに外反して立ち上がり、ピーカー状を呈する。

埋土は、上位に十和田a降下火山灰が薄く混じる暗褐色混土、中位に火山灰がブロック状に混じる灰黄褐色土とこの埋土を挟んで倒伏したススキからなる黒色混土、下位ににぶい黄褐色混土が堆積する。共に自然堆積と解される。

底面の斜面下位にあたる南壁寄りからは小土壙が確認される。東西に僅かに長い円形をなし、開口部の径は50×46cm、底部の径は36×32cmである。深さは46cmである。底部は平坦となり、壁は南南西側にややオーバーハングし、北北東側では緩やかに外反するが、断面の形状は円筒状に近い。

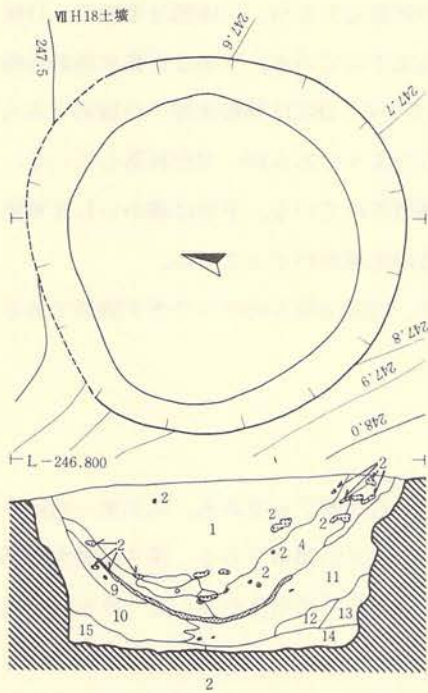
小土壙の埋土は、にぶい黄褐色土の崩落した小ブロックが混じる黒褐色土の単層である。直上の土壙底部を被う締りのある埋土と異なり、柔らかくしまりが無い。

遺物は埋土の上位層から12点、中位層から6点出土している。

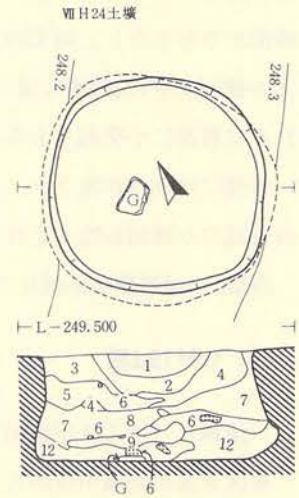
〈遺物〉（第120図、図版92）

286は沈線状の条痕文をもつ。287は無節縄文の撚りもどしである。288は撚糸文が縦方向に施文された底部破片である。289は壺の肩部破片とみられ、沈線で区画された磨消縄文で沈線上に貼瘤をもつ。地文は細かい羽状縄文である。以上の他にはLR単節斜行縄文が内外両面に施文されたものがある。

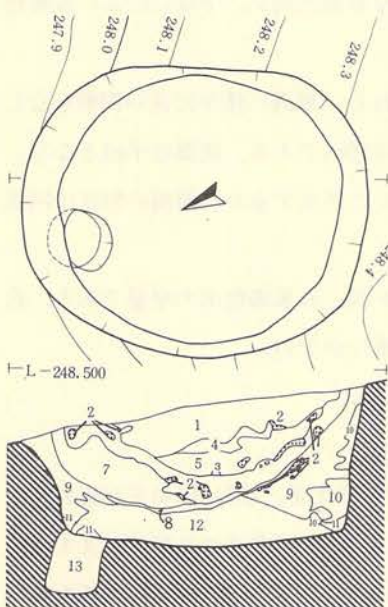
290～292は土師器である。291～292が甕の体部破片で、両者とも外面が縦方向のヘラケズリ、



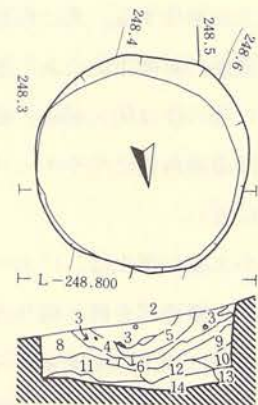
1. 10 Y R% 灰黄褐色土 To-a混土
2. 10 Y R% 灰黄褐色土 To-a
3. 10 Y R% 灰黄褐色混土
4. 10 Y R% 黄褐色混土
5. 10 Y R% 黑褐色土 To-a混土
6. 10 Y R% 黑褐色土 To-a混土
7. 10 Y R% 黑褐色混土
8. 1.7 Y R1. 黑色土 To-a混土
9. 10 Y R% 暗褐色土 To-a混土
10. 10 Y R% 褐色土 To-a混土
11. 7.5 Y R% 黑褐色混土
12. 10 Y R% 明褐色混土
13. 10 Y R% 明褐色混土
14. 10 Y R% 黑褐色混土
15. 10 Y R% 黑褐色混土



1. 10 Y R% 暗褐色混土
2. 10 Y R% 褐色混土
3. 10 Y R% 暗褐色混土
4. 10 Y R% 黄褐色混土
5. 10 Y R% 暗褐色 To-a混土
6. 2.5 Y R% 暗灰黄 To-a
7. 7.5 Y R% 極暗褐色混土
8. 7.5 Y R% 橙褐色土混土
9. 7.5 Y R% 褐色混土
10. 10 Y R% 褐色混土
11. 10 Y R% 黑褐色土 To-a混土
12. 10 Y R% 黄褐色混土



1. 10 Y R% 暗褐色土 To-a混土
2. 10 Y R% 灰黄褐色 To-a
3. 2.5 Y R% オリーブ褐色 B-Tm
4. 10 Y R% 暗褐色 To-a混土
5. 10 Y R% 暗褐色 To-a混土
6. 10 Y R% 灰黄褐色混土
7. 10 Y R% におい黄褐色混土
8. 10 Y R1. 黑色混土
9. 10 Y R% 黑褐色混土
10. 10 Y R% 明黄褐色混土
11. 10 Y R% におい黄褐色混土
12. 10 Y R% におい黄褐色混土
13. 10 Y R% 黑褐色混土



1. 10 Y R% 黑褐色混土
2. 10 Y R% におい黄褐色混土
3. 2.5 Y R% 黄褐色 To-a
4. 10 Y R% 暗褐色 To-a混土
5. 10 Y R% 暗褐色混土
6. 10 Y R% におい黄褐色混土
7. 10 Y R% 黄褐色混土
8. 10 Y R% 黄褐色混土
9. 10 Y R% 明黄褐色混土
10. 10 Y R% 褐色混土
11. 10 Y R% におい黄褐色混土
12. 10 Y R% 褐色混土
13. 10 Y R% 暗褐色混土
14. 10 Y R% 黑褐色混土

第121図 土壌(ピーカー形3)



内面は横方向及び縦方向のナデ調整である。290は内面黒色処理を施した坏体部破片である。内面は丁寧にミガキ調整されている。

## 11. VIIH24土壙

〈遺構〉（第121図、図版93）

東区東部の斜面中位に位置する。南西―北東にやや長い隅丸方形をなし、開口部は1.88×1.72cm、底部は1.96×1.79mである。深さは85cmである。

壁は底面から若干オーバーハングして立ち上がり、開口部にかけては緩やかに外反する。断面の形状はフラスコ状を呈し、他の土壙と異なる。

埋土は、上位を暗褐色～黄褐色混土が被い、1～2層の間には倒伏したススキを含む黒色混土がある。中位には極暗褐色混土や十和田a降下火山灰の散在する暗褐色混土、下位には黄褐色混土、十和田a降下火山灰が混じる暗褐色混土であり、後者には小ブロックの焼土が含まれる。投げ込まれたと考えられる焼土以外は自然堆積とみなされる。

遺物は縄文土器3点、土師器3点、石器3点である。

〈遺物〉（第122図、293～295は図版98図 296、297は図版99）

293は平縁な口縁部破片で、無節の斜行縄文が施文されている。294は土師器小型甕で肩部に小さな段をもち、口縁部が外反する。外面は口縁部が横ナデ、下半が縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のナデ調整である。

295は縦長剥片を利用した石匙である。打瘤部に簡単な剥離を加えた程度をつまみをもつ。刃部は両側縁にあって、鋭利な薄造りな部分と搔器的な肉厚な部分とがある。1辺は直線的で他方は曲線となっている。対辺は使用によるものか、不規則な剥落痕が観察される。石質は泥質凝灰岩である。

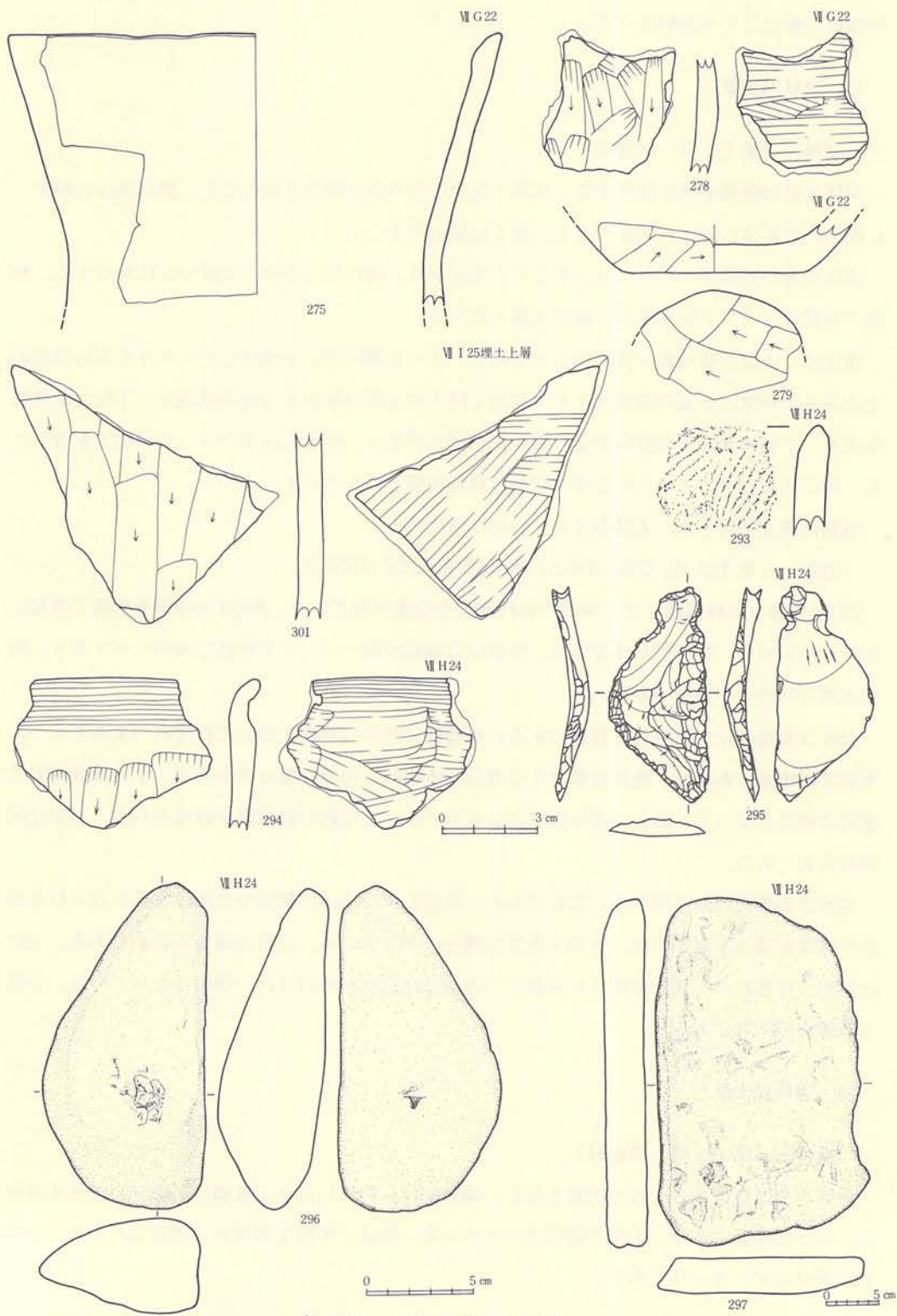
296は表裏両面が使用された凹石である。直径2.5～3.0cmの範囲が使用によるとみられる黒色を呈する部分が観察され、その中央部が僅かに凹んでいる。石質は輝石安山岩である。297は扁平な自然石の上面を使用した石皿である。ほぼ全面が使用され、平滑となっている。石質は両輝石安山岩である。

## 12. VIIH26土壙

〈遺構〉（第121図、図版94）

東区東部に位置する。ほぼ円形を呈し、開口部は1.73×1.77m、底部は1.68×1.56mをはかる。深さは60cmであり、上部の削平をうけている。壁は、平坦な底面から真直立ち上がり、断面の形状はピーカー状である。





第122図 土壙出土遺物(2)

埋土は、上位のススキが互層に入る黒褐色混土、中位に十和田 a 降下火山灰が小ブロック状または斑に散在する暗褐色～にぶい黄褐色混土、下位はにぶい黄褐色～褐色混土と黒褐色混土である。いずれも自然堆積と解される。

遺物は縄文土器 8 点である。

〈遺物〉（第 124 図、図版 99）

298 は羽状縄文横回転施文され、299 は 0 段多条の単節斜行縄文が施文された体部破片である。300 は小型小器の底部近くの体部破片で R L 単節斜行縄文が横回転施文されている。

### 13. VII | 25 土壙

〈遺構〉（第 123 図、図版 95）

東区東部の斜面上位に位置する。南北方向にやや長い不整な円形を呈する。開口部は 2.32 × 2.12 m、底部は 1.72 × 1.61 m であり、深さは最大 98 cm である。

壁の下端はオーバーハングする部分があるが、中央部から開口部にかけて緩やかに外反し、断面の形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上位に黒色～黒褐色混土、中位に暗褐色、黒褐色混土、下位には黒褐色、褐色混土があり、十和田 a 降下火山灰は上位層に散在し、中位層では小ブロック状をなして混入する。いずれも自然堆積の様相をなしている。

底面は平坦であり、比較的しまりがある。中央部には 3 ヶ所の焼土があり、付近に黒褐色混土が広がる。南側の焼土は床面直上にあって厚さ 4 cm をはかり、他は 2 ～ 3 cm の厚さで床面に形成される。共にしまりがあるが、短い時間の焼成と推定される。

遺物は埋土上位層から出土する土師器 4 点である。

〈遺物〉（第 122 図、図版 99）

301 は土師器製の体部破片である。外面が縦方向のヘラケズリ、内面は横方向、斜方向のナデ調整されている。

### 14. VII | 26 土壙

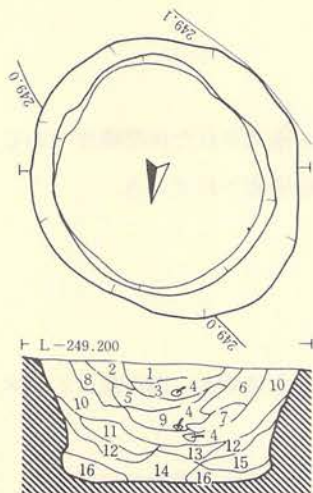
〈遺構〉（第 123 図、図版 95）

東区東部の斜面上位に位置する。開口部の径が 2.25 m、底部の径が 1.81 m の円形をなし、深さは最大 1.11 m である。壁は底面から緩やかに外反して立ち上がり、断面の形状はピーカー状を呈する。

埋土は、上位を褐色混土が被うほか、中位にかけてはススキからなる黒色～黒褐色混土である。中位から下位にかけては十和田 a 降下火山灰がブロック状に混入するにぶい黄褐色混土で

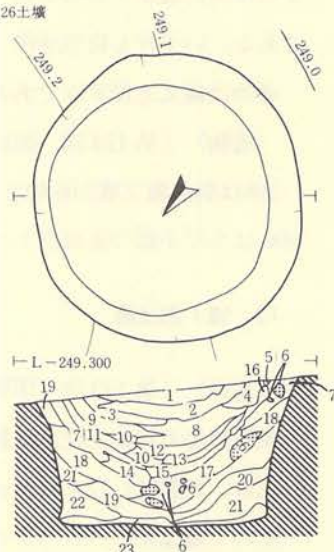


Ⅶ I 25土壤



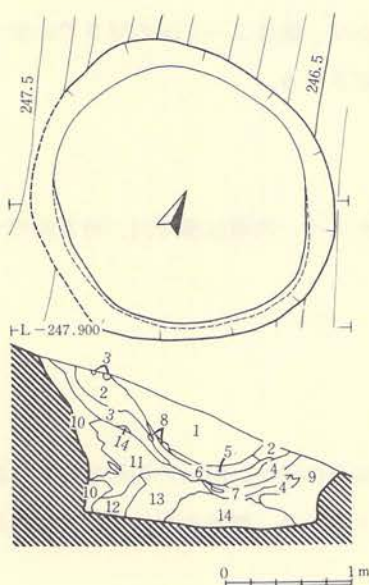
1. 10 Y R% 黒色混土
2. 10 Y R% 黒褐色混土
3. 10 Y R% 黒褐色 To-a混土
4. 2.5 Y % 暗灰黄色 To-a
5. 10 Y R% 黒褐色混土
6. 10 Y R% 暗褐色混土
7. 10 Y R% 褐色混土
8. 10 Y R% 黒褐色混土
9. 10 Y R% 暗褐色混土
10. 10 Y R% 黒褐色混土
11. 10 Y R% 黄褐色混土
12. 10 Y R% 黒褐色混土
13. 10 Y R% 黒褐色混土
14. 10 Y R% 褐色混土
15. 10 Y R% 黒褐色混土
16. 10 Y R% 黒褐色混土

Ⅶ I 26土壤



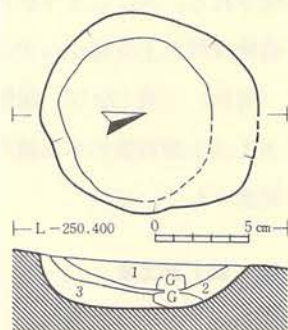
1. 10 Y R% 黒褐色混土
2. 10 Y R% 褐色混土
3. 10 Y R% 黒褐色混土
4. 10 Y R% 暗褐色混土
5. 10 Y R% 褐色混土
6. 2.5 Y % 黄褐色 To-a
7. 10 Y R% 灰黄褐色混土
8. 10 Y R% 黒色混土
9. 10 Y R% 黒褐色混土
10. 10 Y R% 黒褐色混土
11. 10 Y R% 黒褐色混土
12. 10 Y R% 黒褐色混土
13. 10 Y R% 黒褐色混土
14. 10 Y R% 黒褐色混土
15. 10 Y R% にぶい黄褐色 To-a混土
16. 10 Y R% 褐色混土
17. 10 Y R% にぶい黄褐色 To-a混土
18. 10 Y R% 褐色混土
19. 10 Y R% 暗褐色混土
20. 10 Y R% 黄褐色混土
21. 10 Y R% 明黄褐色混土
22. 10 Y R% 黄褐色混土
23. 10 Y R% 黒褐色混土

Ⅶ A 24土壤



1. 10 Y R% 黒色混土
2. 10 Y R% にぶい黄褐色混土
3. 10 Y R% 黄褐色混土
4. 10 Y R% にぶい黄褐色混土
5. 10 Y R% 黒褐色混土
6. 10 Y R% 黒色混土
7. 10 Y R% 黒色混土
8. 10 Y R% 黄褐色混土
9. 10 Y R% 明褐色土
10. 10 Y R% にぶい黄褐色土
11. 10 Y R% 褐色混土
12. 10 Y R% 黄褐色混土
13. 10 Y R% にぶい黄褐色混土
14. 10 Y R% 明黄褐色混土

Ⅶ B 22土壤



1. 7.5 Y R% 黒色混土
2. 7.5 Y R% 褐色 B-Tm混土
3. 7.5 Y R% 褐色 To-a混土

第123図 土壤(ビーカー形4・皿形)



あり、下位は明黄褐色～黄褐色混土となる。十和田 a 降下火山灰が埋土下位に及んでいるのはⅦH24土壙の埋土に共通する。自然堆積による埋没と解される。

遺物は埋土上位層から縄文土器5点、土師器3点が発見されている。

〈遺物〉（第124図、図版99）

縄文土器はLR単節斜行縄文の体部片5点である。302～304は土師器で、302はロクロ成形された甕である。303はロクロ不使用の甕で、下端が急激に肥厚しており底部近くの体部破片と推定される。外面が縦及び斜方向のヘラケズリで、内面は斜方向のナデ調整である。304は小型土器の底部破片で、底が器壁に比較して肉厚である。外面から底部にかけて縦方向のケズリで内面は粗雑なナデ調整である。

#### 15. ⅧA 24土壙（第123図、図版96）

東区東部の段丘崖に続く斜面上部に位置する。開口部は2.50×2.30m、底部は2.18×2.02mをはかり、不整な円形を呈する。深さは最大1.12m、最も浅い斜面下位では52cmである。

壁は斜面上位の南西～西側が崩落しているが底面から直に立ち上がり、中央部から緩やかに外反し、断面の形状はピーカー状である。

埋土は、上位から中位にかけてススキからなる黒色混土が被い、壁際から下位にかけてはにぶい黄橙色～明褐色土が厚層をなす。後者は壁の崩落土であり、いずれも自然堆積である。

底面は、斜面上位では斜面に沿って若干傾斜しているが、斜面下位ではほぼ平坦となる。

遺物は出土していない。

#### 16. ⅦB 22土壙

〈遺構〉（第123図、図版96）

東区東部の斜面上位に位置する。平安時代のⅦB21堅穴住居跡南壁の一部を切る。

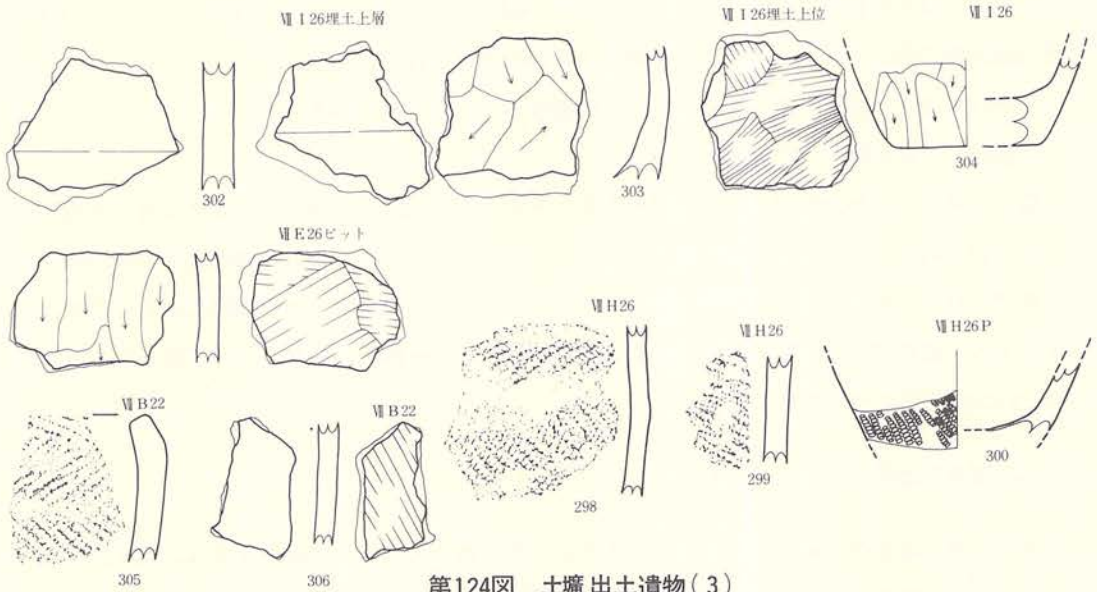
開口部は1.17×1.05m、底部では92×80cmをはかり、平面形は開口部が南北方向に長い円形をなし、底部では円形である。本来は円形の土壙と考えられる。深さは最大25cmである。断面の形状は、浅い鍋底状を呈する。

埋土は、上位の黒色混土、下位では十和田 a 降下火山灰が散在する褐色混土であり、自然堆積の状況をなしている。礫が混入している。

埋土から縄文土器2点、土師器1点が発見されている。

〈遺物〉（第124図、図版99）

305は口縁端部が方形となる縄文土器である。幾分内彎ぎみで、羽状縄文が横回転施文されている。306は土師器甕の体部破片とみられ、外面が縦方向のヘラケズリ、内面が斜方向のへ



第124図 土壙出土遺物(3)

ラナデ調整されている。

#### 4. 遺構以外の遺物

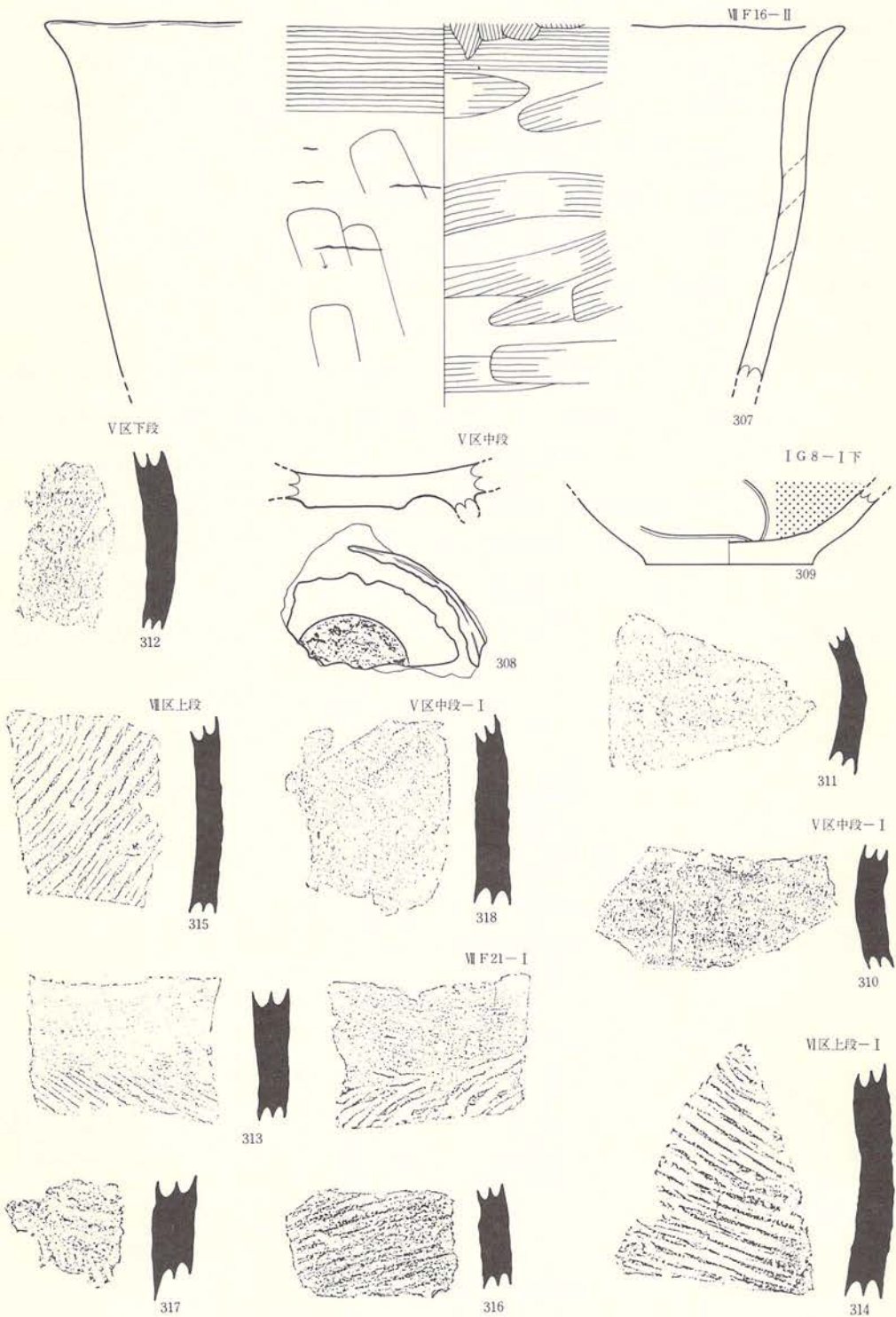
古代に属する遺構以外の遺物は土師器 957 点、須恵器 11 点、土製品 3 点、石製品 5 点である。

##### (1) 土師器 (第125図、図版100)

土師器はいずれも破片で、器形の復元できるものはない。これらのあり方は、I区16点、IV区39点、V区60点、VI区199点、VII区590点、VIII区43点で、西区に僅か散在するほかは東区に集中している。中でもVI区、VII区に密集しており、竪立住居跡の分布にほぼ対応している。

器種は坏(129点、13.5%)と甕(828点、86.5%)で、圧倒的に甕が多くなっている。坏には①内外両面とも黒色処理されたもの(7点、5.4%)、②内面黒色処理されたもの(86点、66.7%)、③黒色無処理のもの(36点、29.7%)とがあり、②が大多数を占めている。

①は口縁部がそのまま納まる器形で、内外両面とも丁寧にヘラミガキ調整されている。②は口縁部形態がそのまま納まるものと、端部の外反するものがある。器壁は薄いものと、やや厚めのものとが混在し、底部は比較的肥厚するものが多いようである。内面の調整技法は内底部が方射状、口縁部が横方向のヘラミガキである。中には内底部の方射状ミガキが後から施され、口縁部近くまで達するものが含まれている。また、外面も同様にヘラミガキされたものが含まれている。色調は内面から口縁部外側が黒色を呈し、体部外面から底部にかけてが褐色～暗褐色である。しかし、309のように二次火熱のため、内面の黒色が消滅し赤褐色を呈するものが散見される。



第125図 遺構以外の遺物(1)



なお、309は内底部に焼成前に施された線刻をもっている。また、308は底部の周縁部が2・3mm蛇の目状に低くなっており、回転糸切後周辺部をつまみ出して高台としたようである。

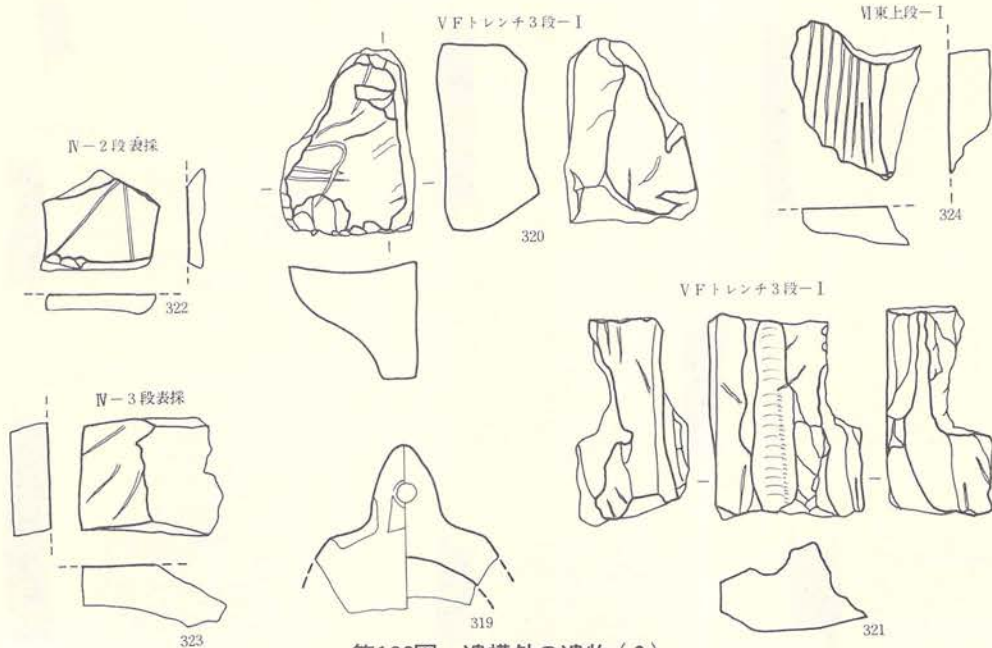
③は口縁端部の外反するものが多いようである。器壁のロクロ成形痕が顕著である。

甕は、口縁部形態がロクロ成形されたものと、非ロクロ成形のものがあり、後者が多い。底部では砂底が比較的多く目に付く。体部破片では外面縦方向の粗いヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ調整されたものが多く、体部下半の肥厚するものが混在している。器壁は厚いものと薄く堅緻なものがあり、色調は暗褐色～褐色～灰白色を呈し、焼成は良好である。胎土には砂粒を含み、調整による移動が明瞭である。

## (2) 須恵器 (第125図、図版100)

須恵器はⅣ～Ⅷ区の古代の住居跡の周辺から採集されている。いずれも細片であるが、坏は含まれていない。310～312は内外面にロクロ成形痕をもつ壺の肩部及び体部と思われる破片である。色調は青灰色で、胎土には白色砂粒を含んでいる。焼成は良好で堅緻である。

313～318は大甕の体部破片である。318を除き外面に平行線状の叩き目痕をもっている。316、317は弱い叩き目痕で、313は叩き締め後ロクロナデ調整されている。318は外面が斜方向にヘラケズリされている。色調は313、315が青灰色を呈し、314、318が淡灰白色を呈し軟質である。316、317は胎土が赤褐色を呈し、半焼成とみられる。なお、313は内面にも半月状の叩き目を



第126図 遺構外の遺物(2)

もっている。

(3) 土製品 (第126図、図版100)

土製品は土鈴と羽口である。319は土鈴の上半部である。全体に手つくね成形によるものである。つまみの中央部に2mmほどの小さな穴が貫通している。器壁はつまみ近くが厚く、側面部では急激に薄くなっている。色調は淡褐色を呈し、胎土には混入物が少なく、水されたものようである。焼成は良好である。

羽口は直径7.5cmで、内径2.0cmである。外面に縦方向の溝が形成され、先端部が徐々に薄くなり、鋳滓が付着している。火熱を受けて非常に脆くなっている。

(4) 石製品 (126図、図版100)

石製品は砥石5点である。320は表裏2面に凹面となる砥面をもつもので、残存部の砥面の幅は2.5cmである。321は2.5cmほどの角柱状を呈するが、各々の面の中央部が溝状に磨滅して複雑な形となっている。表面と右側面の溝は幅、深さとも8mm前後で、断面形がU字状をなす。細い丸鑿状のものを研いだ痕のようである。また、平坦な面4面を砥面として利用している。砥面の幅は1cm前後と狭い。322～324は砥石の一部であり、砥面は平滑である。石質は320～322が珪質細粒砂岩であり、324が両輝石安山岩である。

## VI 中・近世の遺構と遺物

今回の調査で中・近世に位置づけられる遺構は竪穴住居跡1棟、土壇2基、土葬墓6基である。なお、時期不明の1本柱列と溝状遺構についてはここで記述することにする。

遺物は陶磁器、古銭、鉄製品、銅製品、漆製品、炭化穀類、人骨、獣骨などである。このうち掲載した遺物は古銭20点（寛永通寶）、鉄製品118点（鉄斧、鑿？、鉄釘110点、金具6点）、銅製品2点（煙管）、漆製品4点（漆被膜、定盤）、炭化穀類（麦？）、人骨（6体）である。

### 1. 竪穴住居跡

#### VI G 5 竪穴住居跡（第127・128図、図版101・102）

東区の中央に位置する。駒ヶ嶺館の南堀（沢）の南70mにあたる。埋土上位にはVI H 6-1、VI H 6-2、VI H 6-3 焼土遺構が構築されている。

平面形は長方形を基調とするが、西壁の北半が若干内側に折れ曲っている。規模は東西方向が5.1m（南壁）、南北方向が3.9m（西壁）と推定される。なお、北壁と東壁は既に削平されていた。

埋土は白色砂粒、焼土を含む黒褐色混土の単層である。床面はほぼ平坦でP11、P12の東側と、P8の北西部から焼土が検出された。焼土は壁側が高く、中央部に向って傾斜している。焼失に伴う焼土と推定される。壁は比較的急激に立ち上がり、壁高は16cmを最大とする。

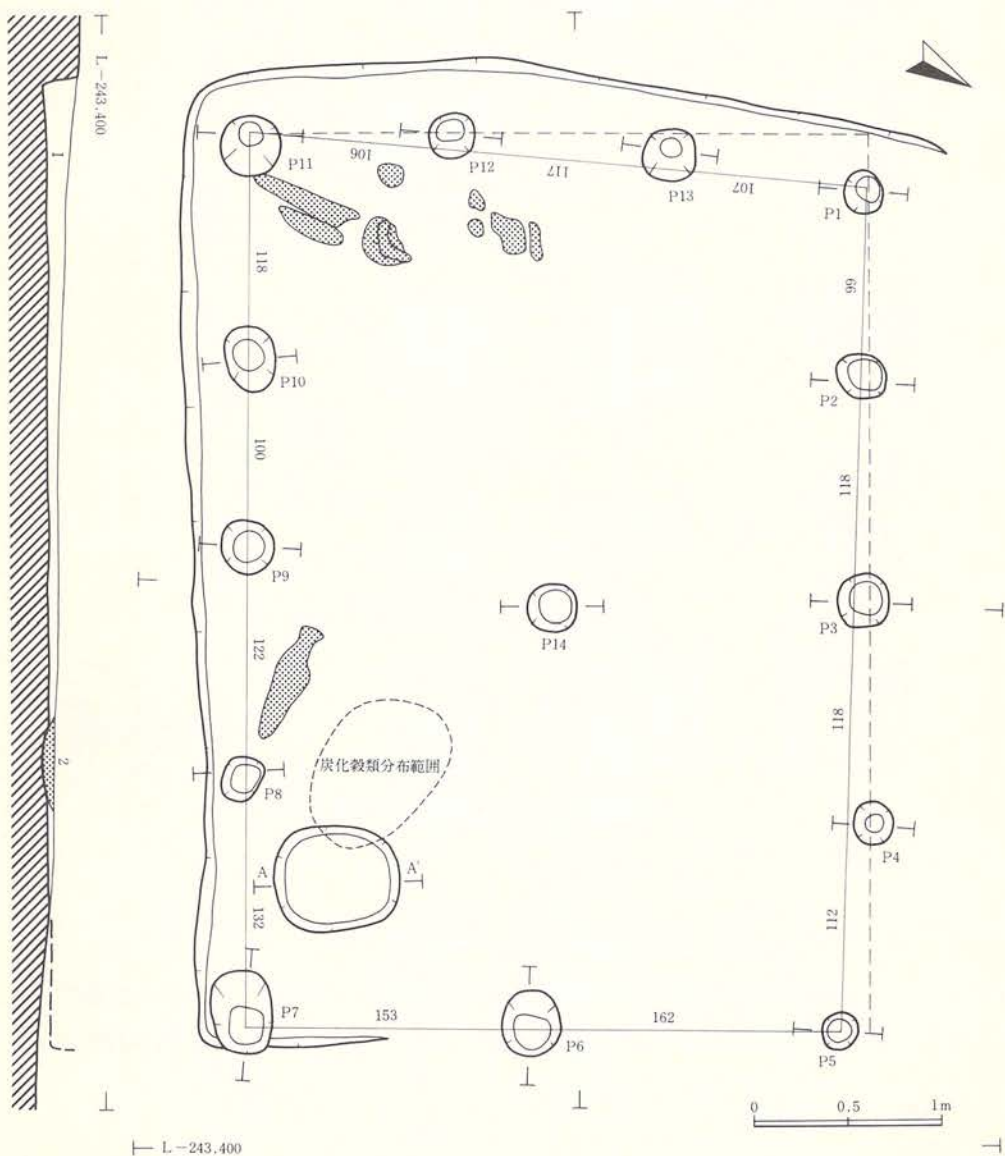
柱穴は壁際の13個と中央の1個の14個である。桁行4間、梁行は西側列が3間、東側列が2間の東西棟である。規模は4.75×3.3mであるが、北西隅柱（P1）が30cm東に寄り、北東隅柱（P5）が15cm南に片寄っている。桁行方向は南側列によるとN63°Eである。柱間は桁行が南側列が西から118cm、100cm、132cmで、北側列が99cm、118cm、112cmで、平均118cm、112cmである。梁間は西側列が南から106cm、117cm、107cmで平均110cmの3間、東側列は135cm、162cmで平均157.5cmの2間となっている。

柱穴は21×19cm～43×31cmの円形か長円形で、深さは18～68cmである。棟持柱に相当するP6、P14が60cmと深くなっている。埋土は黒褐色混土で、P7からは炭化穀類が発見されている。柱痕はP11、P13によると直径10cm、12cmである。

竪穴住居跡の南東隅近くには68×56cmの隅丸長方形の土壇がある。深さが12cmの皿状をなす浅いものである。埋土は焼土、炭化物を含む黒褐色混土である。

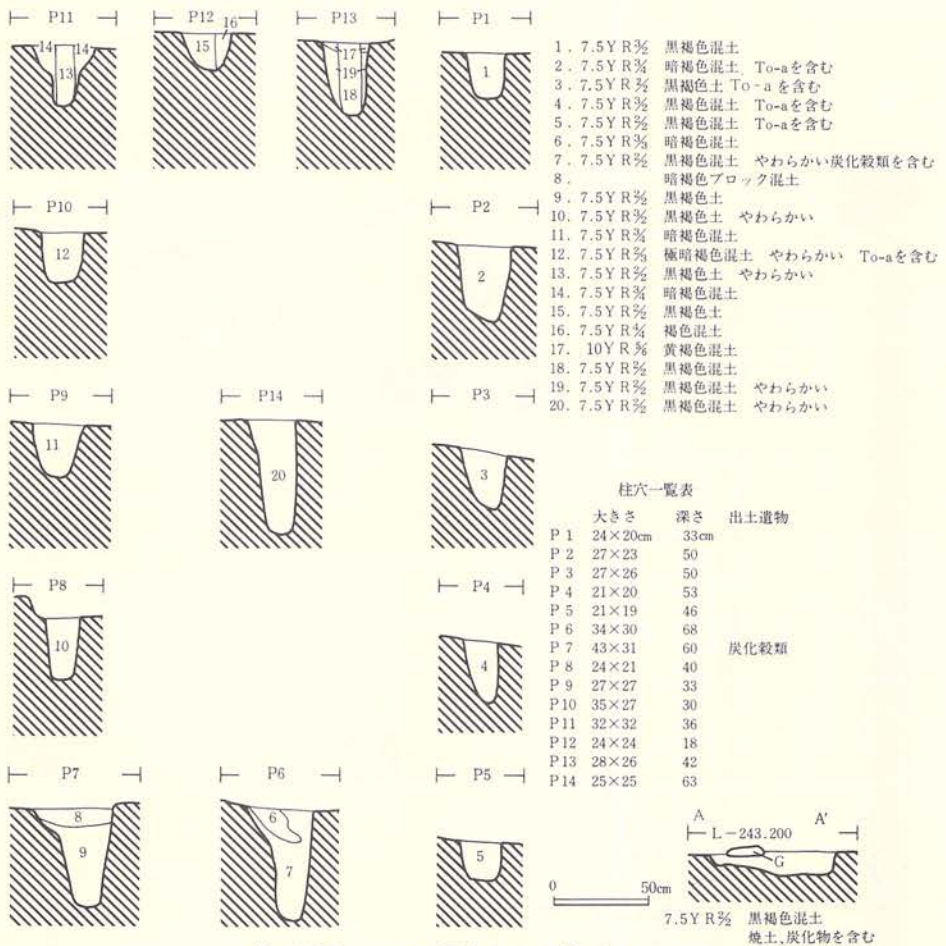
発見された遺物は床面（土壇の西側）とP7埋土の炭化穀類と、埋土の土師器8点、縄文土





- 1. 7.5 Y R ㉔ 黒褐色混土 白色砂粒、焼土を含む
- 2. 5 Y R ㉔ 橙色焼土 強く締っている、VI H6-4焼土遺構
- 3. 5 Y R ㉔ 橙色焼土 強く締っている、VI H6-1焼土遺構
- 4. 7.5 Y R ㉔ 黒褐色土 To-aを含む、やわらかい、P3埋土

第127図 VI G 5 竪穴住居跡(1)



第128図 VI G 5 竪穴住居跡(2)

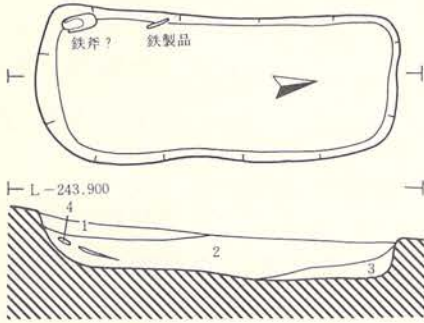
器3点、石器1点である。炭化穀類は佐藤敏也氏の鑑定によるとオオムギ、ムギであるという。土器はいずれも細片で器形の判明するものはない。土師器では甕が7点、内外黒色処理を施した埴1点がある。縄文土器のうち1点は繊維を含むものである。石器は棒状擦石(51図64)である。

## 2. 土壙

### 1. VIII B 28土壙 (第129図・図版103)

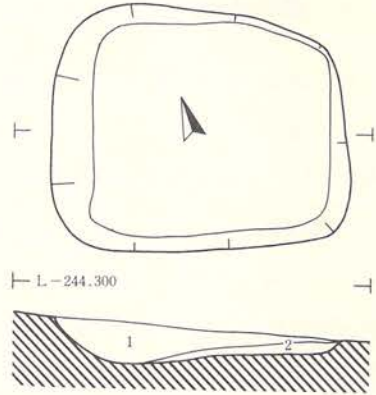
第2次調査区の中央、斜面中位に位置する。VIII C 27土壙の南約2 mである。平面形は1.54×1.32mの隅の丸い長方形である。長軸方向はN62°Wである。深さは20cmほどで、浅い皿状の土壙である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は比較的平坦である。埋土は十和田 a 降下火山灰を

VIII C 27 土坑

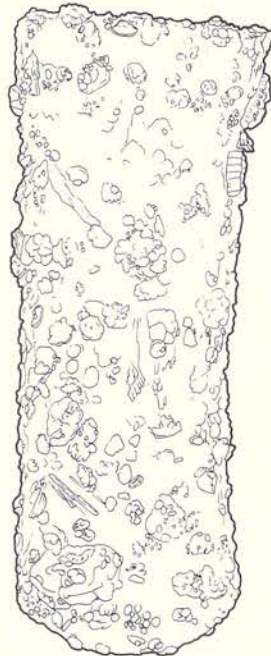
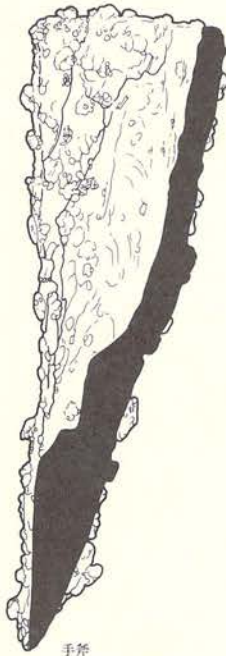
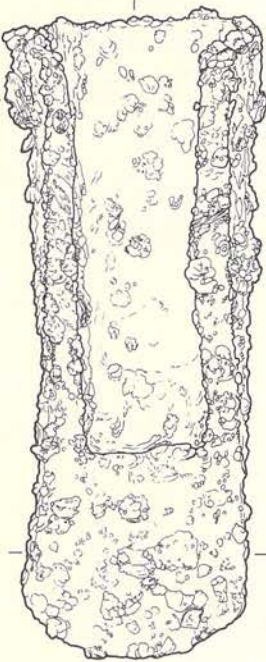
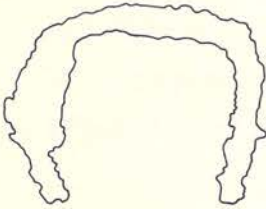


1. 10 Y R 弱 黒褐色混土 To-a粒を含む
2. 10 Y R 弱 黒褐色混土 炭化物を含む
3. 10 Y R 弱 黒褐色混土 2より黒色が強い
4. 灰オリーブ褐色 To-a火山灰

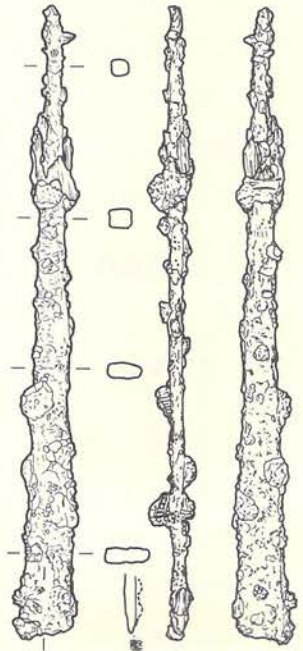
VIII B 28 土坑



1. 10 Y R 弱 黒褐色混土 To-aを僅かに含む  
所によっては焼土、炭化物を含んでいる。
2. 7.5 Y R 弱 黒色土



VIII C 27 土坑



第129図 土坑・出土遺物



含む黒色土で、焼土、炭化物の含有によって2層に細分できる。

遺物は発見されていない。

## 2. VII C 27土壙 (第129図、図版103)

第2次調査区の中央、斜面中位に位置する。平面形は1.9m×75cmの長方形で、深さは20cmほどである。長軸方向はN10°Eで、ほぼ南北方向をなす。埋土はほとんど黒褐色であるが、十和田a降下火山灰等の混入によって3層に細分できる。

土壙西壁際から手斧と鑿と思われる鉄製品が出土している。手斧は北西隅の底面から17cm上った所に刃先を下方に向け、柄があったならばコーナー部分で折れ曲る状態をなしていた鑿と思われる鉄製品は手斧の約30cm北側で、同様に底面から4cm上った所に刃を下にして、北に若干傾いているが立った状態で発見された。

1は長さが17cmの手斧とみられるものである。刃の幅は6cmで、僅かに末広がりとなっている。刃部が丸くなっていて、しかも内側が直で、外側が彎曲しており、抉りものに使用された手斧と考えられる。着柄部は刃部の反対側から見ると、内側があいた「コ」の字状をなし、内径4.5×4.5cmの方形となっている。長さは11cmで、全体の $\frac{2}{3}$ ほどである。先端部には、段が形成されており、中に納って止まるようになっている。

2は全長16.7cmの鑿と考えられる鉄製品である。基部は断面方形で、長さが4.7cm、全体の $\frac{1}{2}$ 弱である。幅は刃部が1.2cmで最大をなし、徐々に狭って基部先端部に続く。厚さは茎端部(鍔の艶被き部分)が一番厚く(7mm)、刃部先端及び基部先端に向って薄くなっている。茎端部には一部木質部が付着している。刃部は錆のためはっきりしないが片刃のようである。

形状等から土葬墓が考えられるが、鉄釘などは発見されていない。遺物が底面から浮いた状態で、しかも立った状態で発見されたことは、埋設段階に立てかけたことを物語っており、もし土葬墓ならば木棺を伴っていたであろうと推定される。

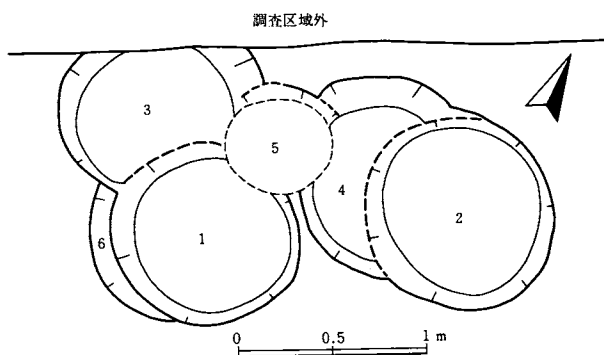
## 3. 土葬墓

### 1. VG 1-1土葬墓

〈遺構〉(第131図、図版104)

平面形は94×100cmの円形で、深さが54cmである。VG 1-3土葬墓、VG 1-6土葬墓を破壊しており、埋土上位にはVG 1-5土葬墓が構築されていた。埋土は暗褐色混土で、底面が堅く締まっている。VG 1-6土葬墓のほぼ直上に位置することもあって黄褐色混土が6~7cm貼床されている。

人骨は土壌の東寄りから0.5mほどの方形に検出されている。比較的保存状況は良好で、頭蓋骨が背盤の反対側の南にあって、両膝に接し、背骨は大腿骨の反対側に位置して側臥屈葬状態をなす。鑑定によると、推定年齢40～50才代の女性で、身長は150cm前後であった。



第130図 土葬墓配置図

埋土から鉄釘と定盤が発見されている。鉄釘は土壌西側から比較的多く検出されている。頭部を西にしており、東向きに打たれたものようである。しかし、必ずしも木棺内に限定されたものではなく、むしろ棺外に散在している状況である。あるいはVG1-3、VG1-6土葬墓に伴うものが混入したものかもしれない。

定盤は土壌東端から中央部にかけて、斜めに落ちた状態をなす。中央部では大腿骨の直上に接し、東端には2個の鉄釘をもち、裏面が下向きになっている。

また、土壌、南東部の底面には20×10cmの範囲に砂が置かれていた。

なお、人骨の出土状況から60cm前後の箱棺が推定され、座棺を後へ横倒しに埋葬した形を呈している。

〈遺物〉（第131図、図版106・113）

遺物は鉄釘19点と定盤である。釘はいずれも腐蝕しているが、ほとんど木質部が付着している。頭部は若干幅広となってL字状に折れ曲っている。大きさから①2.7cm前後（9分）、②3.5cm前後（1寸）、③5cm前後（2寸）の3種類に分けられる。

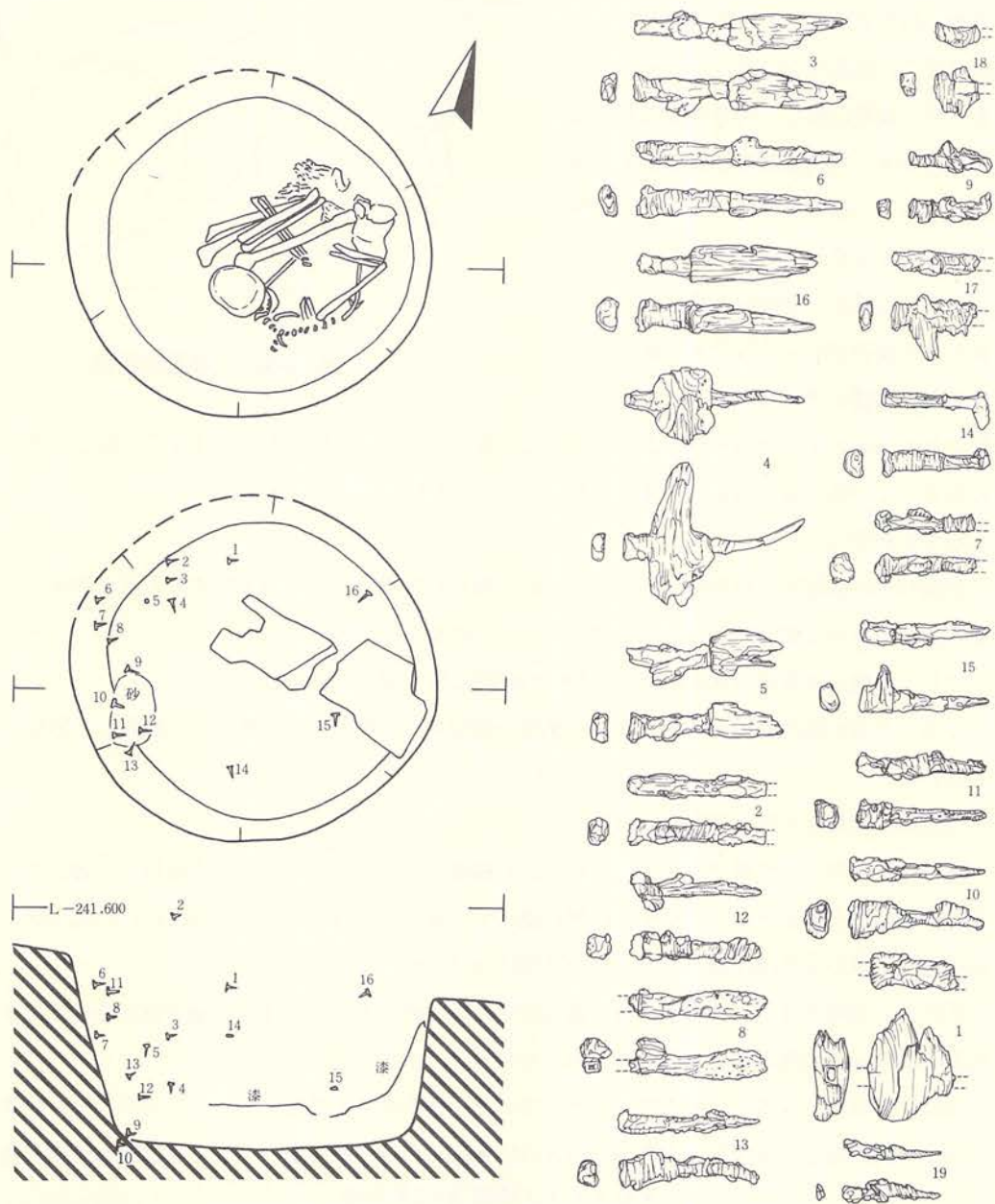
①は9、19の2点で、19の木質部の繊維方向は横方向である。9は2.3cmで折れ曲っており、0.7cm、1.6cmの方向の異なる板材をとめたものようである。

②は10、11など6点で、南西部に集中していた。遺存する木質部の繊維の方向は、すべて横の同一方向である。頭部側の木質部の長さは0.9cm、1.7cmであった。なお、14は3cmで折れ曲

VG1-1土葬墓、釘の計測表

( )は残存部の長さ

No.	長さ	木質部の方向	頭部側木質部の長さ	備考	No.	長さ	木質部の方向	頭部側木質部の長さ	備考
1	(2.3)	?	—		11	3.5	同	—	
2	(3.8)	同方向	—		12	3.5	同	0.9	
3	5.8	異	2.7		13	3.8	同	—	
4	約5.2	異	2.4		14	約3.5	同	1.7	3cmで折れ曲っている
5	4.2	異	2.4		15	3.5	同	0.9	
6	5.6	異	2.5		16	4.9	異	1.6	
7	(2.6)	異	1.8		17	(2.4)	?	—	
8	(3.8)	?	—		18	(1.2)	?	—	
9	約2.7	異	0.6		19	2.7	同	1.4	
10	3.7	同	0.6						



第131図 VG 1-1 土葬墓

っており、1.7cm、1.3cmの方向の異なる板材を止めたものようである。これらの釘はVG 1-3 土葬墓出土の釘に類似している。同土葬墓に伴うものかもしれない。

③は3、6など10点で北西部に集中していた。大多数のものは木質部の遺存状況が良好で、



鉄の観察できる部分は頭部の一部分のみである。繊維の同一方向（横方向）のものが2例、異方向（横方向、縦方向）のものが5例であった。頭部側の材の厚さは1.6cm、1.8cmが各1例、2.4～2.7cmが6例であり、5、6分の板材と、8・9分の角材を用いたものようである。これらはVG1-6土葬墓出土の釘に似ている。

定盤は長さが45cm、幅が最大15cmの漆被膜である。表面は赤色漆が付着し、裏面には木質部の繊維が縦走している。漆は何回にもわたって塗られたようで薄く剥れやすく小さな凹凸があって均一ではなく、玉状に盛り上っている部分もみられる。また、表面は赤漆のみではなく黒色漆の部分も認められる。端部には長さ1cmほどの小さな鉄釘が打たれており、漆塗りの作業台（定盤と呼ばれる）として利用されたものようである。

## 2. VG1-2土葬墓

〈遺構〉（第132図、図版104・105）

平面形は104×100cmの円形で、深さは80cmである。VG1-4土葬墓の東半を破壊して構築されている。埋土は黄橙色ブロック混土で、棺内の推定される部分は極暗褐色混土である。なお、埋土にはVG1-4土葬墓のものとみられる四肢骨が3ヶ所に散在していた。また、「頭石」と呼ばれる扁平な石が投入されている。

人骨は、四肢骨の上に頭蓋骨が乗った形となって発見されている。頭蓋骨、四肢骨は保存状況が良好であるが、他については不明である。下肢骨は胡坐の恰好をなし、腕は胸で合掌する形となっており、座棺と推定される。鑑定の結果、推定年齢40才代の男性で、身長は154cm前後であった。

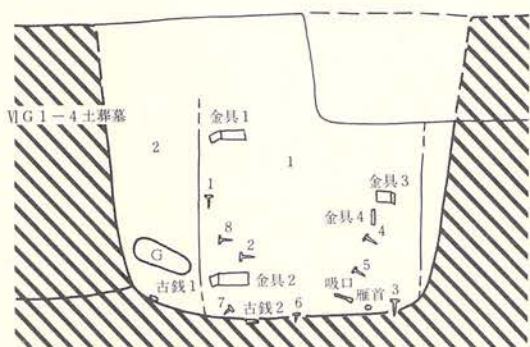
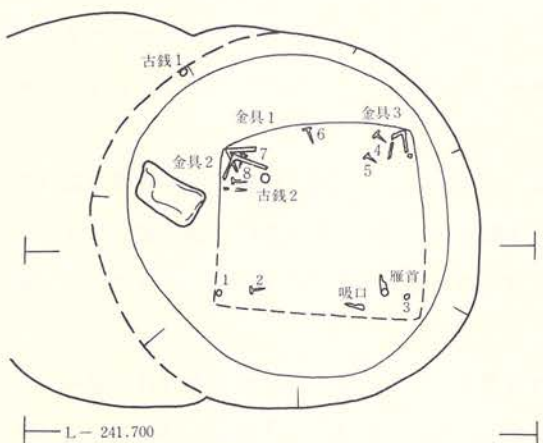
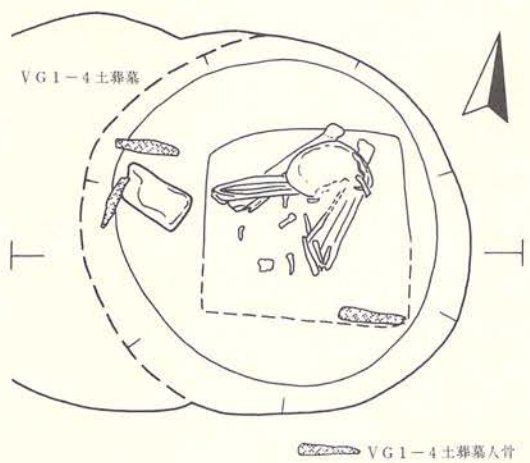
埋土、床面から鉄釘、金具、煙管、古銭が発見されている。鉄釘は箱棺の周辺部に散在し、金具は北東隅と北西隅の2ヶ所から検出している。古銭は北西部、煙管は南東部からの発見である。レベル的には金具は1が底面から45cm、3が30cm、1が10cm上にあり、古銭、煙管は底面近くである。

なお、木棺は50cm前後の方形とみられ、幾分土壌の東方に片寄っている。高さは50cmまで確認されている。

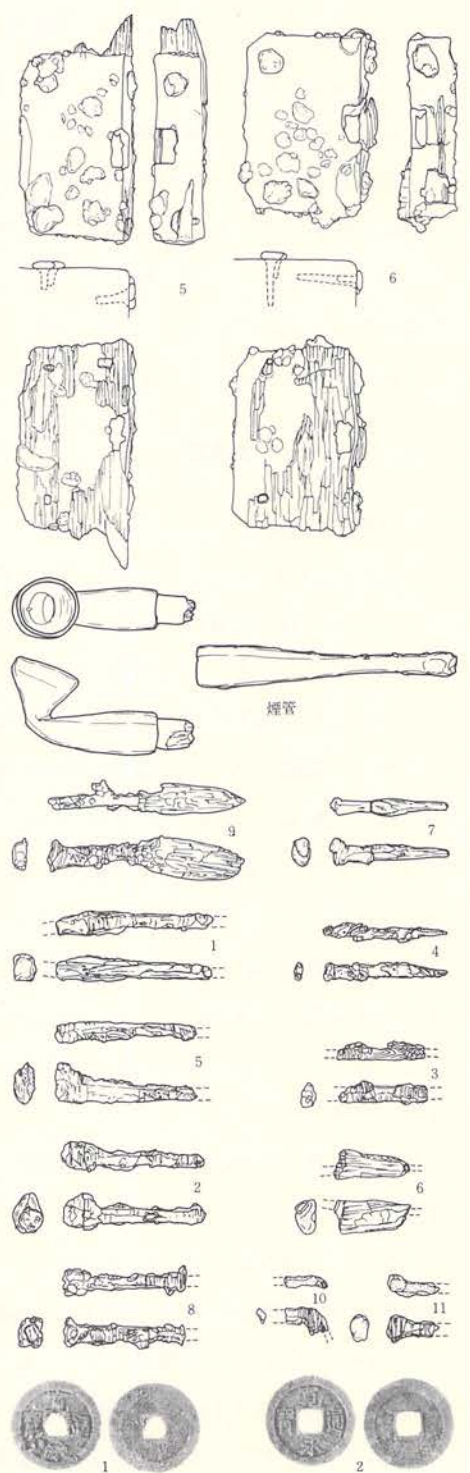
〈遺物〉（第132・133図、図版107・108・112・113）

発見された遺物は釘16点、金具6点、古銭2点、煙管である。釘は腐蝕しているが、木質部が付着している。頭部は若干幅広となり、L字状に折れ曲っている。大きさから①2.4cm前後（8分）、②3.3～3.7cm（1寸？）、③5cm前後（2寸？）の3種類に分けられる。

①は12～16など7点で、北西隅、北東隅の金具近くから発見されている。繊維の方向はいずれも同一方向である。折れ曲っている16によると板材の厚さは1.2cmである。金具に用いられ



- 1 7.5Y R 7.5 極暗褐色混土20%
- 2 7.5Y R 7.5 黄橙色ブロック状混土80%下位は層状をなす。



第132図 VG1-2 土葬墓(1)

たものようである。ちなみに大小の金具には少なくとも38本以上の釘が使用されている。

②は2・4・7など5点、③は9など4点である。両者とも四隅から発見されており、隅に使用されたものようである。木質部の繊維方向は1～4が同方向で、7～9が異方向である。頭部側の材の厚さは0.7cmが1例、1.1cmが2例、2.2cm、2.3cmが各1例であり、棺箱には3～4分の板材と、8分の板材か角材を用いたようである。

V G 1 - 2 土葬墓釘の計測表

( ) は残存部の長さ

	長さ	木質部の方向	頭部側 木質部の長さ	備考		長さ	木質部の方向	頭部側 木質部の長さ	備考
1	(4.1)	同?	—		9	5.1	異	2.2	
2	3.7	同	0.7		10	(2.0)	?	—	
3	(3.7)	同	1.1		11	(1.4)	?	—	
4	3.3	同	—		12	2.3	同	—	
5	(2.4)	?	—		13	2.5	同	—	
6	(1.2)	?	—		14	2.4	同	—	
7	3.2	異	1.1		15	約2.4	同	—	
8	(3.3)	異	2.3		16	約2.8	同	—	

金具は北西隅から1・2・5・6、北東隅から3・4が発見されている。1・2は幅4.2cm、長さ18.3cmの薄い鉄板を1.2cm、8.0cm、9.1cmにそれぞれ直角に折り曲げている。一方の端部に肘金具が取り付け、他端は隅が丸くなっていた。肘金具は金具中央に幅7mm、高さ1.5cmに取り付け軸は直径5mmほどで、金具取り付け面から4～7mmせり出している。肘金具は鉄板の下に長さ4.7cm、幅1.0～2.0cmと徐々に狭まり、しかも薄くなる舌とともに釘12本によって固定されている。なお、裏面には木質部の繊維が縦方向に走っている。また、2の表面には麻と考えられる布が付着している。

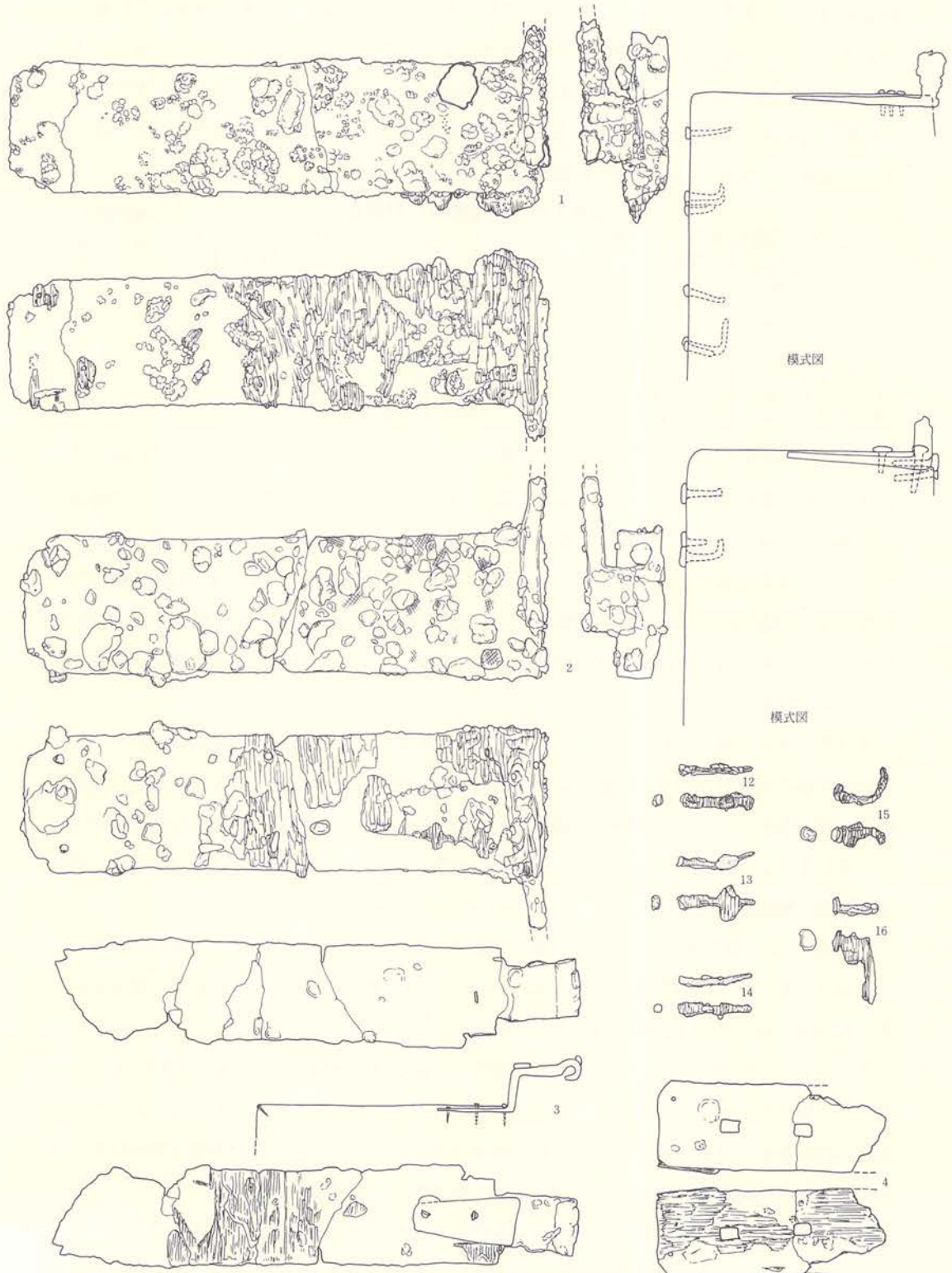
3は幅3.0cm、残存の長さ14.3cmの薄い板材を7.8cm、6.5cmに直角に折り曲げられている。一端中央部に壺金具が取り付け面から約1cmせり出して取り付けられている。壺金具は前者同様に、薄い鉄板の下に長さ3.3cm、幅が1.4～0.9cmと徐々に狭って、しかも薄くなる舌とともに釘5本以上によって接合されている。壺は鉄板を巻いたもので、直径が3mmほどである。裏面は木質部の繊維が縦方向に並んでいる。材の厚さは1.2cmほどである。

4は幅2.7cm、遺存する長さ7.1cmの薄い鉄板である。中央部に肘金具が取り付けられていたと推定される5×4mmの方形の穴が2孔あいていた。板材は2本以上の釘によって固定され、裏面の繊維は他と異なり、横方向に走っている。

5、6は幅が4.8cm、長さが4.2cmの薄い板材を3.0cm、1.2cm幅に直角に折り曲げたものである。折り曲げた中央部には壺金具が入っていたと推定される9×5mmの方形の穴があいていた。各辺の内側8mmには計4本の釘が打たれて固定されていた。裏面の木質部の繊維方向は縦である。この2例は幅が近似することから1・2に対応する壺金具と推定される。

なお、これらの金具は丁番の肘金具、壺金具とみられるが、必ずしも対応する位置にはなく、棺箱の隅金具として転用されたものようである。





第133图 VG1 - 2 土葬墓 (2)

古銭は俗に新寛永と呼ばれ寛文8年(1668)以降に鑄造された貨幣である。その中でも享保年間(1716~36)に仙台藩石巻で鑄造されたものに酷似している。

煙管は雁首と吸口からなる。雁首は火皿が漏斗状を呈して大きく、首はそれほど細まらなく直線的である。火皿と首部との間が吸口側に折れ曲っている。羅宇竹のまわりには和紙が巻かれている。吸口は緩やかに細まってから端部が若干太くなっている。端部は噛まれて変形している。雁首と同様に羅宇竹が遺存していた。

漆被膜は棒状のものと薄い膜状のものがある。両者とも同一個体の一部分とみられる。前者は長さが1.1cm、幅が8mmで、長さは最大5.4cmである。正面とみられる面が僅かに平滑な面をなし、下、裏側は繊維が横方向に走っている。上は粗鬆な小孔が多数観察される。

後者は3.3cm×2.0cmを最大とする。表面には気泡の抜けた痕の凹凸が認められ、裏面は前者同様に植物繊維が観察される。色調は飴色から黒色を呈し、一部赤色部分が混在している。箱のようなものの一部分と推定される。

木片は長さ4.7cm、幅3.5cm、厚さ5mmである。2面が直線となっており棺箱の一部とみられる。

### 3. VG 1-3 土葬墓

〈遺構〉(第134図、図版104・105)

平面形は南端部がVG 1-1土葬墓によって破壊され、北端部も調査地外に続いてはっきりしないが、1.1m前後の円形をなすと思われる。現状は110×76cm以上で、深さは84cmである。東部の埋土上位にはVG 1-5土葬墓が構築されている。埋土は黒褐色混土で、南西部にVG 1-6土葬墓のものとみられる「頭石」が投入されていた。

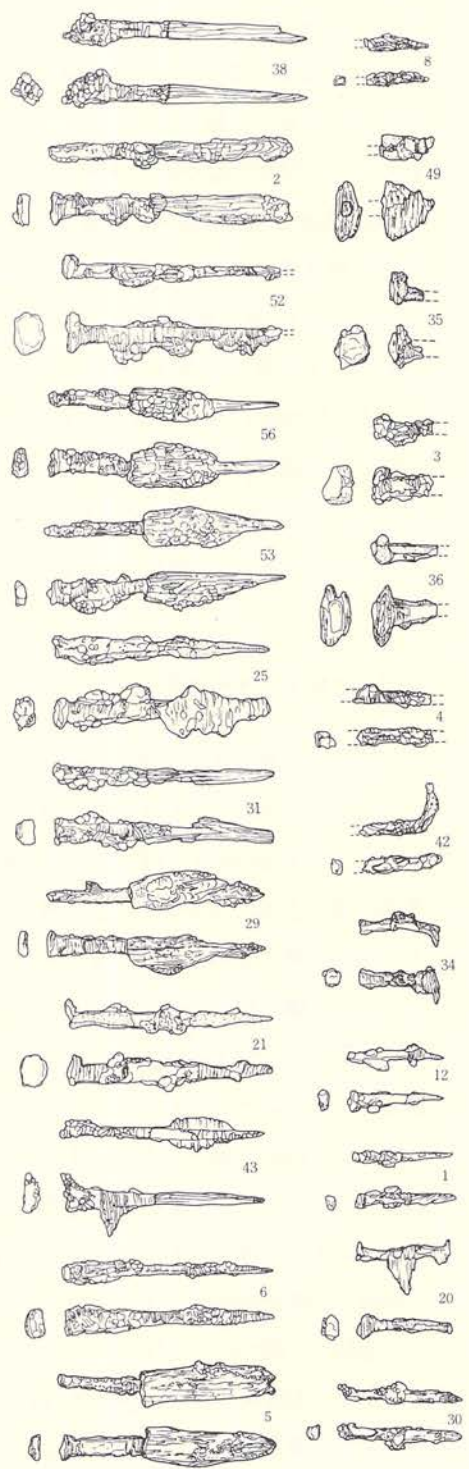
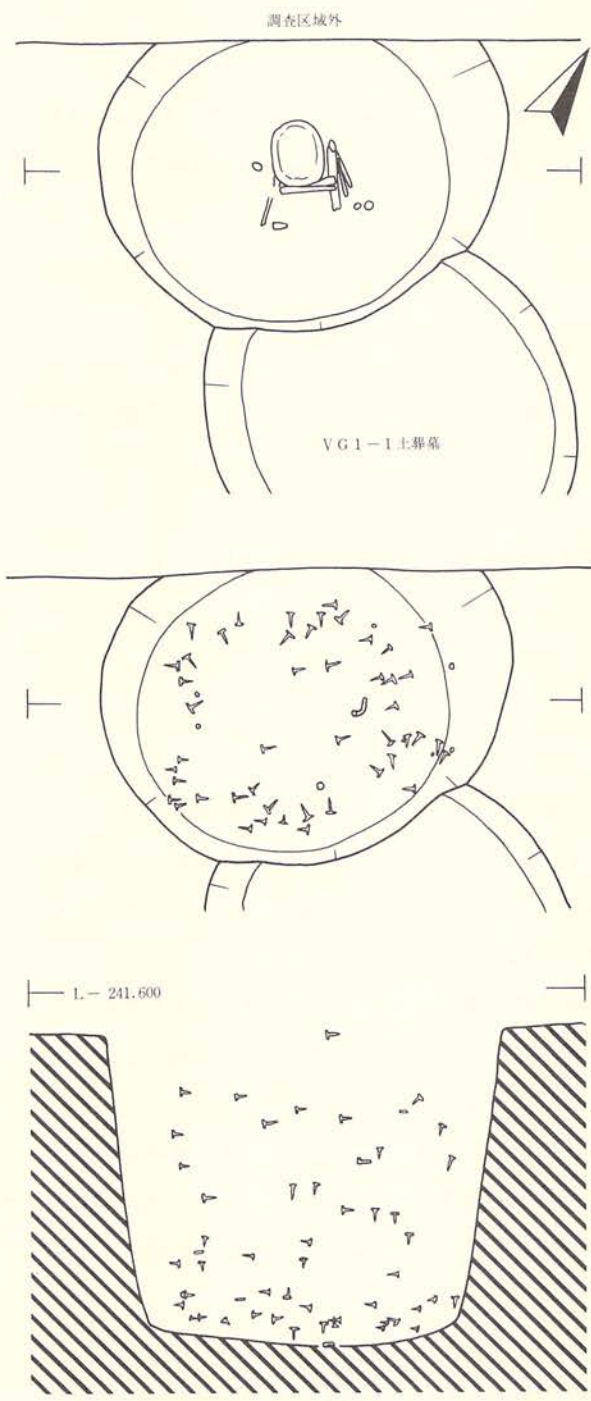
人骨は土壌の中央部に頭蓋骨を上にして検出され、頭蓋骨以外の保存状況はあまり良好ではない。膝を立てた上に頭蓋骨が乗っており座棺とみられる。頭は北向きである。鑑定によると推定年齢40~50才の男性で、身長は144cm前後であった。

埋土から鉄釘、煙管、古銭、それに炭化した木片が発見されている。鉄釘は土壌の周辺部に密集し、レベル的には底面に幾分多くなっているが、ほぼ全域に散在している。古銭はやや南寄りの底面に、煙管はやや東寄り、底面から50cm上位に位置する。また、炭化木材と「頭石」は西部、南西部のかなり上位に位置していた。

〈遺物〉(第134・135図、図版108・109・112・113)

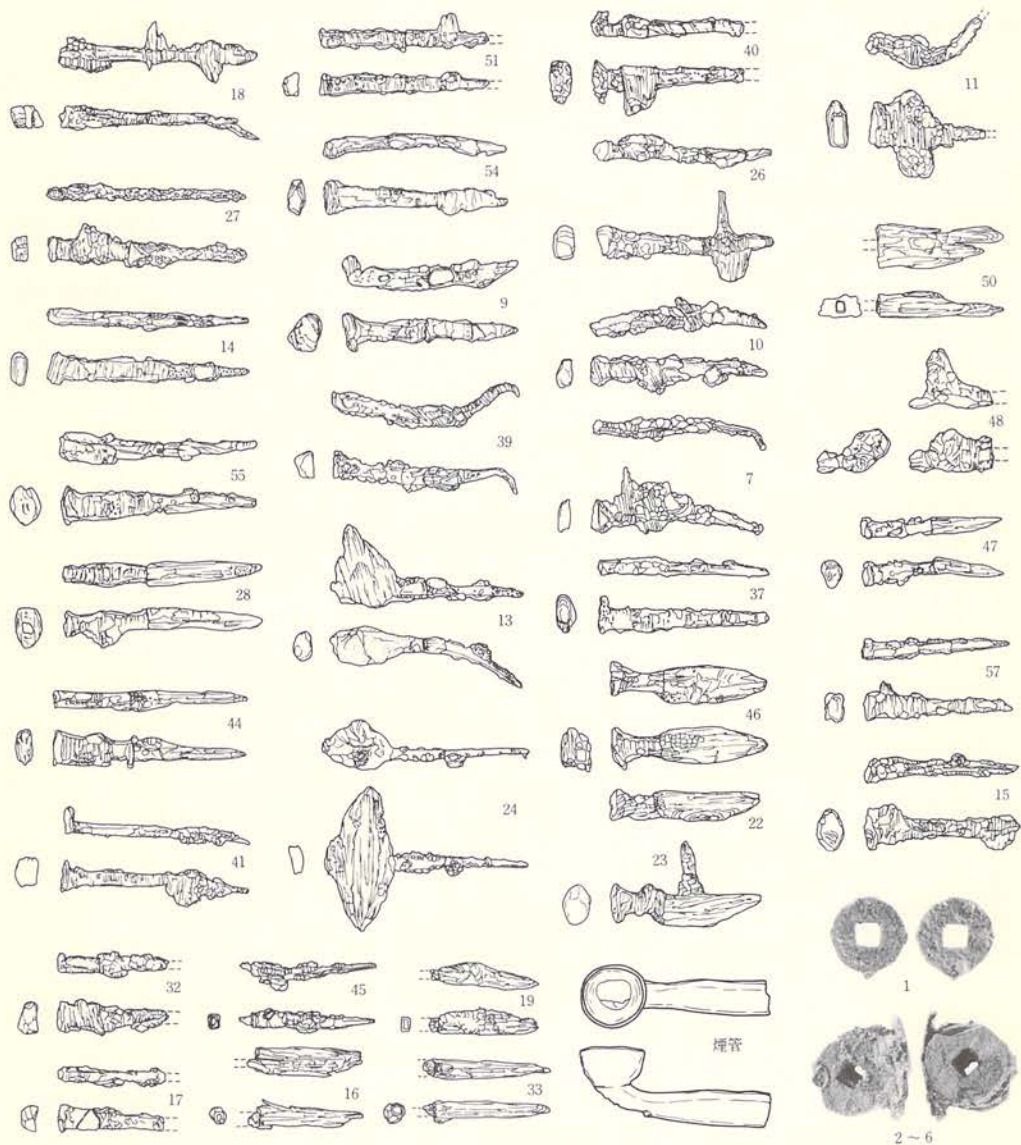
発見された遺物は鉄釘57点、古銭6点、煙管、漆被膜それに炭化木片である。釘はいずれも木質部が付着している。頭部は木質部のためはっきりしないが、若干幅広となってL字状に折れ曲っている。大きさから①2.2~3.3cm(1寸前後)、②3.8~4.1cm(1寸3分前後)、③4.6~





第134图 VG 1-3 土葬墓(1)





第135図 VG 1-3 土葬墓(2)

6.5cm (1寸5分~2寸)の3種類に分けられる。

①は1、20など5点である。繊維の方向は同方向が1例、異方向が4例で頭部側の材の厚さはほとんど1.5cmである。5分の板材を用いている。

②は15、22など5点である。繊維は同方向が2、異方向が3で、材の厚さは1.4~1.9cmで5、6分の板材を用いたようである。なお22、23は2本の釘が頭部から2.0cmで交差しており隅の

部分とみられるものである。

③は2、5など30点で、全体の5強を占める。同方向が15例、異方向が15例で同数である。頭部側の材の厚さは2.0～2.8cmで棺箱に7～9分の材を用いているようである。

古銭は6点とも寛永通寶鉄銭で5点が密着していた。銭名のはっきりしているものでは、文政、天保年間（1818～1844年）に八戸藩葛巻で鑄造されたものに酷似している。麻と思われる布が付着している。目の間隔は5mmに6×8本である。

煙管は雁首のみで、吸口は発見されていない。雁首は火皿が大きく首が直線点である。脂返

VG1-3 土葬墓釘の計測表

( ) は残存部の長さ

No.	長さ	木質部の方向	頭部側木質部の長さ	備考	No.	長さ	木質部の方向	頭部側木質部の長さ	備考
1	2.6	異	1.5		31	5.8	異	2.4	
2	6.4	異	2.8		32	(2.9)	異	1.2	
3	(1.7)	—	—		33	(3.3)	—	—	
4	(2.0)	—	—		34	2.3	同	1.5	
5	5.8	異	2.3		35	(0.9)	—	—	
6	5.5	同	2.0		36	(1.8)	—	—	
7	約5.0	同	2.2		37	4.6	同	—	
8	4.6	異	2.3		38	6.5	異	2.8	
9	4.7	異	2.4		39	約5.6	同	—	
10	(3.5)	同	2.2		40	(4.0)	同	1.7	
11	2.6	異	1.6		41	(5.0)	同	—	
12	5.1	異	2.3		42	(3.0)	—	—	
13	5.4	同	—		43	6.3	異	2.5	
14	4.1	同	—		44	5.1	異	2.1	
15	(3.0)	—	—		45	(3.6)	—	—	
16	(2.7)	同	—		46	4.1	異	1.4	
17	4.8	同	2.3		47	3.8	異	1.8	
18	(2.9)	—	—		48	(2.3)	—	—	
19	約2.8	異	0.8		49	(1.4)	—	—	
20	5.4	同	—		50	(3.4)	—	—	
21	4.0	異	1.9		51	(4.5)	同	2.3	
22	2.2	異	1.9		52	(5.8)	同	—	
23	5.4	同	—		53	6.3	異	2.7	
24	5.8	同	—		54	4.9	同	—	
25	4.7	同	—		55	5.2	異	2.7	
26	5.8	同	2.2		56	6.1	異	2.2	
27	5.3	異	2.2		57	3.9	同	—	
28	5.3	異	2.2						
29	5.8	異	1.5						

しの彎曲が小さく、首の下端部と端部が腐蝕している。

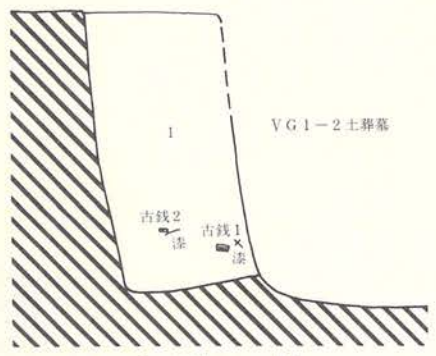
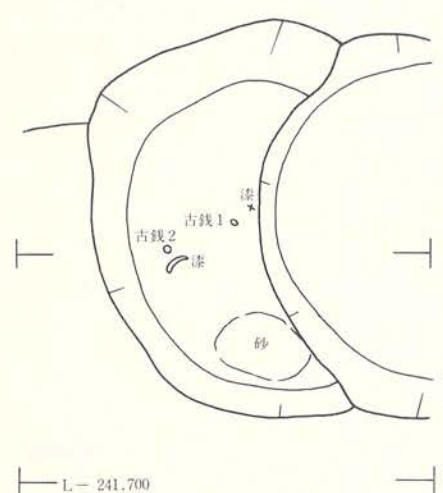
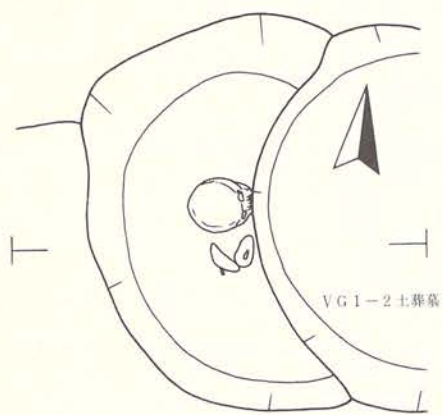
炭化木片は長さ8.8cm、幅5.0cm、厚さ1.7cmで表面が炭化している。加工された痕跡はない。

以上の他には7mm×3mmの漆被膜片が出土している。表面は赤色漆、黒色漆が塗り重ねて凹凸し、裏面は木質部が観察されるVG1-1土葬墓出土の定盤に酷似しており定盤の一部が混入したものと推定される。

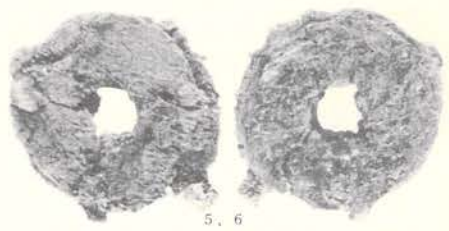
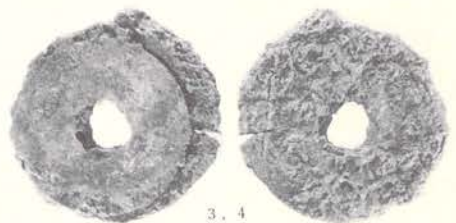
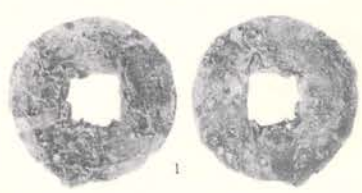
#### 4. VG1-4 土葬墓

〈遺構〉（第136図、図版104・105）

全体形は東半がVG1-2土葬墓によって破壊されていてはっきりしないが、直径1mm前後



1. 7.5YR5 黄橙色ブロック混土



第136図 VG 1-4 土葬墓



の円形をなすと思われる。西部の埋土上位にはVG 1-5 土葬墓が構築されている。埋土は黄橙色ブロック混土で、木棺内とみられる部分が暗褐色混土である。

人骨は頭骨が東向きで最上位にあつて、東半はVG 1-2 土葬墓の構築によって破損している。そして四肢骨の一部はVG 1-2 土葬墓の埋土中に散在していた。人骨は鑑定によると推定年齢40~50才の女性で、身長は非常に小さかったと思われる。

埋土下位から古銭、漆器、数珠玉が発見されている。また、土壙南端部の底面には26×18cmの範囲に砂が置かれていた。

〈遺物〉（第136 図版109・113）

発見された遺物は古銭6点、数珠2点、漆被膜である。古銭は6点とも俗に新寛永と呼ばれている寛文8年（1668）以降に鑄造された貨幣である。中でも4点は鉄銭であり、元文年間（1736~1741）以降に鑄造されたものである。

数珠玉はガラス製2点である。直径4mm、厚さ2mmで中央に1mmの穴があいている。透明な乳白色と黄橙色をなす。漆被膜は6.5×1.2cmを最大にして10片ほどである。同一個体と見られるもので表裏両面とも赤色を呈している。裏面には木質部が付着している。漆器碗の一部ではないかと考えられる。

## 5. VG 1-5 土葬墓

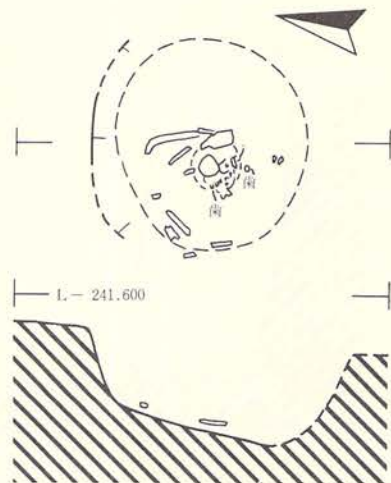
〈遺構〉（第137 図、図版105）

平面形は調査中に掘り過ぎてしまいはっきりしないが、残存部から70cmほどの円形と思われる。深さは20cmほどで、浅い小さなものである。

VG 1-1、1-3、1-4の各土葬墓の埋土上位に構築されていて当土葬墓が新しい。埋土は黒褐色混土である。

人骨は頭骨の一部と下肢骨の一部が遺存するのみで、保存状況は良好とは言えない。四肢骨の中には屈折しているものがあり仰臥屈葬か側臥屈葬とみられる。鑑定の結果6才前後の小児骨である。遺物は発見されていない。

埋土から漆被膜片が30片ほど発見されている。最大3.0×1.7cmである。表面は赤色漆の部分と飴色（生漆か）の部分とがあり平滑となっている。裏面には木質部の付着しているものと、被膜のみ



第137図 VG 1-5 土葬墓

のものとは混在している。V G 1-1 土葬墓の定盤に酷似しており、当土葬墓構築の際に混入したものと推定される。

## 6. V G 1-6 土葬墓

〈遺構〉（第138図、図版105）

上部がV G 1-1 土葬墓に、北西部がV G 1-3 土葬墓に破壊されている。平面形は残存部分から直径105cmの円形をなすと思われる。埋土は黄褐色混土で、上部6、7cmは黄褐色混土が貼床されていた。V G 1-1 土葬墓のほぼ真下にあたり、その差は20cmである。

人骨は、土壌の中央部から50cmの方形に検出された。保存状況は良好で、頭蓋骨が骨盤の上に乗った形をなす。膝は後に倒れ、両腕を前で合掌している。鑑定の結果、推定年齢40才の女性で、身長は145cm前後である。

埋土から鉄釘、古銭が発見されている。鉄釘は方形に並んである。古銭は幾分南寄りからの発見である。なお、南側底面には木棺の跡が酸化鉄の集積となって遺存している。東西44cmである。

〈遺物〉（第138図、図版110）

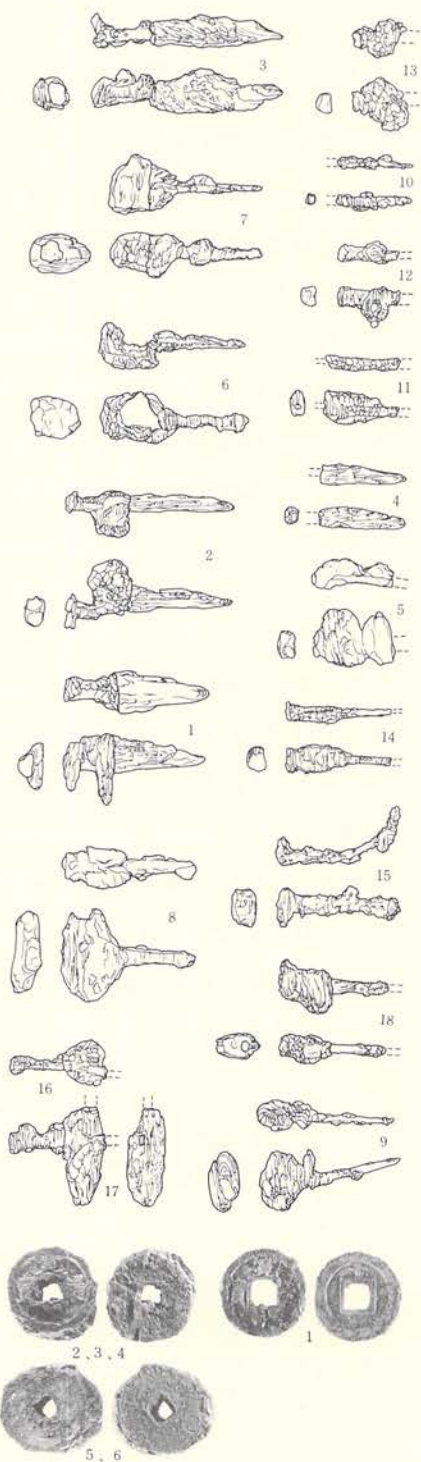
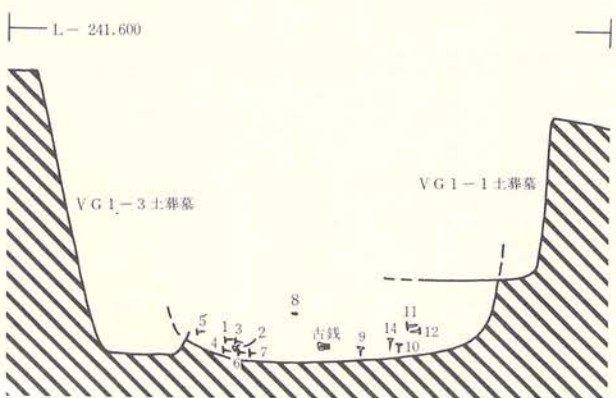
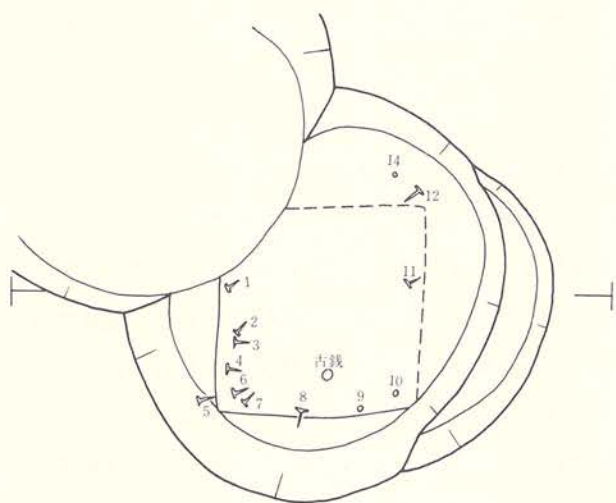
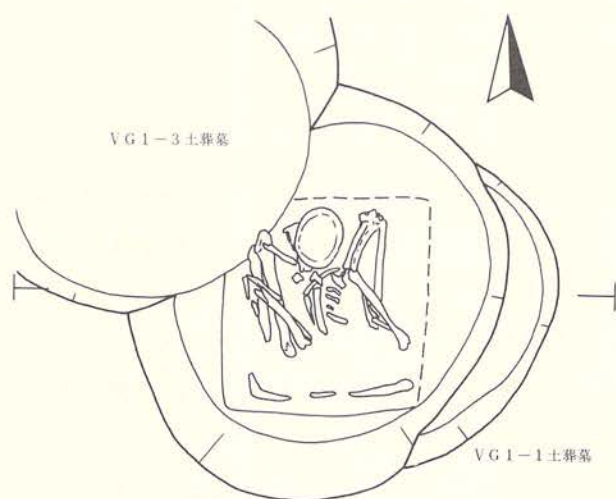
発見された遺物は鉄釘18点、古銭6枚である。釘はいずれも木質部が付着している。頭部は銹と木質部の付着のためはっきりしないが、若干幅広となってL字状に折れ曲っているようである。大きさは3.5~5.2cmで1寸2分~1寸7分とみられる。木質部の繊維方向は同一方向が7例、異方向が6例でほぼ半々である。異方向のものが西辺に偏在する特徴がある。頭部側の材の厚さは1.4~1.8cmであり、棺箱には5、6分の板材を用いたようである。なお、17、18は2本の釘が頭部から2.0~1.8cmで交差しており、隅の部分とみられるものである。

古銭は6点とも寛永通寶鉄銭である。中でも文政・天保年間（1818~1844年）に八戸藩葛巻において鑄造されたものに似ている。

V G 1-6 土葬墓釘の計測表

( )は残存部の長さ

	長さ	木質部の方向	頭部側 木質部の長さ	備考		長さ	木質部の方向	頭部側 木質部の長さ	備考
1	3.8	異	1.4		10	(2.0)	—	—	
2	4.5	異	1.7		11	(2.0)	—	—	
3	5.2	異	1.7		12	(1.7)	—	—	
4	(2.3)	—	—		13	(1.5)	—	—	
5	(2.1)	同?	(1.3)		14	(2.8)	同	1.8	
6	4.0	異	1.6		15	4.0	同	—	
7	4.1	異	1.5		16	(2.7)	同	1.5	} 交差している
8	3.5	同	1.8		17	(2.7)	同	1.5	
9	3.8	同	1.5		18	(2.9)	異	1.4	



第138图 VG 1-6 土葬墓

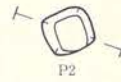
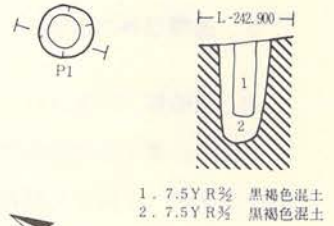


#### 4. その他の遺構

##### 1. VI D 4 1本柱列 (第139図)

東区中央の下段に位置する。中世の竪穴住居跡の西方4mである。東西に並ぶ5本からなる1本柱列で等高線にほぼ平行している。方向はN70°Eである。柱間は東から2.2m、2.0m、1.8m、1.4mであり、一定ではない。対応する柱穴は吟味して精査したが検出されなかった。

柱穴は直径25~35cmの方形か円形で、底部は16cmほどの方形である。基本的には方形に掘られたものようである。深さは42~60cmで、ほぼ一定である。埋土は黒褐色を主体とし褐色土がブロック状に混入している。柱痕はP1、P2によると直径10cm前後の丸柱であった。

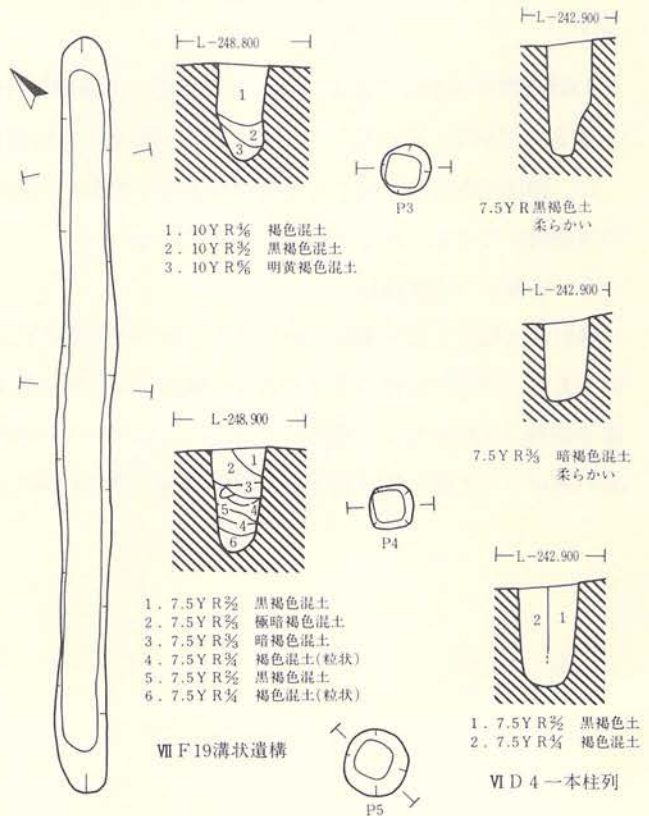


##### 2. VII F 19溝状遺構

(第139図)

東区東端に位置し、平安時代のVII F 18竪穴住居跡を切っている。幅が30cmの溝状をなし、長さは4.0mである。方向はN37°Eで等高線にほぼ直交し、深さが55cmで、横断面形がL字状をなす。壁は両端が若干緩やかになるが、ほぼ直に立ち上がり、底面は地形に沿って北に向って傾斜している。

埋土は褐色、黒褐色など6層からなる。遺物は発見されていない。



第139図 その他の遺構

## 5. 遺構以外の遺物

### (1) 陶磁器 (図版111)

中近世に属する遺構以外の遺物は、陶磁器20点、鉄製品4点である。陶磁器はⅣ区中・下段Ⅵ・Ⅶ区中・上段から発見されたもので、いずれも耕作土からの採集である。時期的には近世中頃から明治時代にかけてのもので、器種には碗、皿、小盃、徳利、甕、播鉢などがある。

1、2は白磁である。1は反りが小さいが、端反りの小皿である。2は小盃の底部とみられる。色調、胎土ともに白色である。3は口縁端部が外反する青磁の小皿で口縁部内側に稜をもつ。色調は淡緑色で、胎土が淡青灰色をなす。4～9は染付である。4が伊万里系染付の端反りの小盃で、内外面ともに唐草文が描かれている。5～9は明治以降の銅板絵付である。5、8、9が碗、6が徳利、7が小鉢である。

10～12は天目茶碗である。10は口縁部がそのまま納まる器形をなす。色調は10が褐色、11が黒色、12が黒褐色を呈している。なお、12は二次火熱のため両面とも剥落している。14は美濃の灰釉小皿で、口縁部が外折した後、端部が内側に折り返されている。色調は褐色～淡緑色である。

13は内彎する小皿である。外面が乳白色、内面が灰白色を呈している。15は灰白色をなし貫入が走っている。磁器化している。16は内外面とも淡褐色を呈する磁器である。

17、18は暗赤褐色を呈する大甕の体部破片である。胎土は赤褐色である。19は須恵質の播鉢の体部破片である。卸し目が密に入っている。

### (2) 鉄製品 (図版111)

鉄製品はⅥ区上段～中段にかけてのⅠ層から採集されたものである。1は長さが3.8cmの和釘である。頭部は切釘のようであり、頭部から急激に細まる形をなしている。2は厚さ5mmの鑄造製品で丸味をもって彎曲している。3は厚さ3mmの鑄造製品の板材である。4は長さ2.7cmの薄いブリキ材を折り曲げて、幅1.8cm、厚さ3mmに加工したものである。

# 写真図版





図版 1 調査区全景(空中写真)



图版 2 遗构集中区(空中写真)



調査前遠景(東から)



調査前遠景(第2調査区)

図版3 調査前遠景





現地説明会

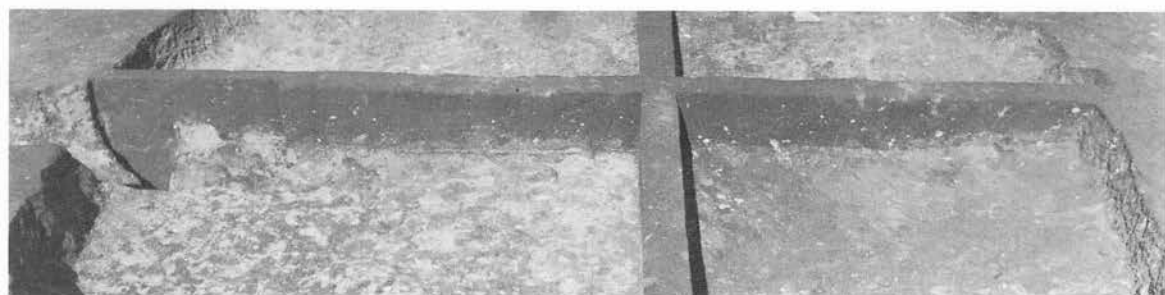


人骨取り上げ状況

図版 4 現地説明会。人骨取り上げ状況



完掘



断面



柱穴断面



柱穴

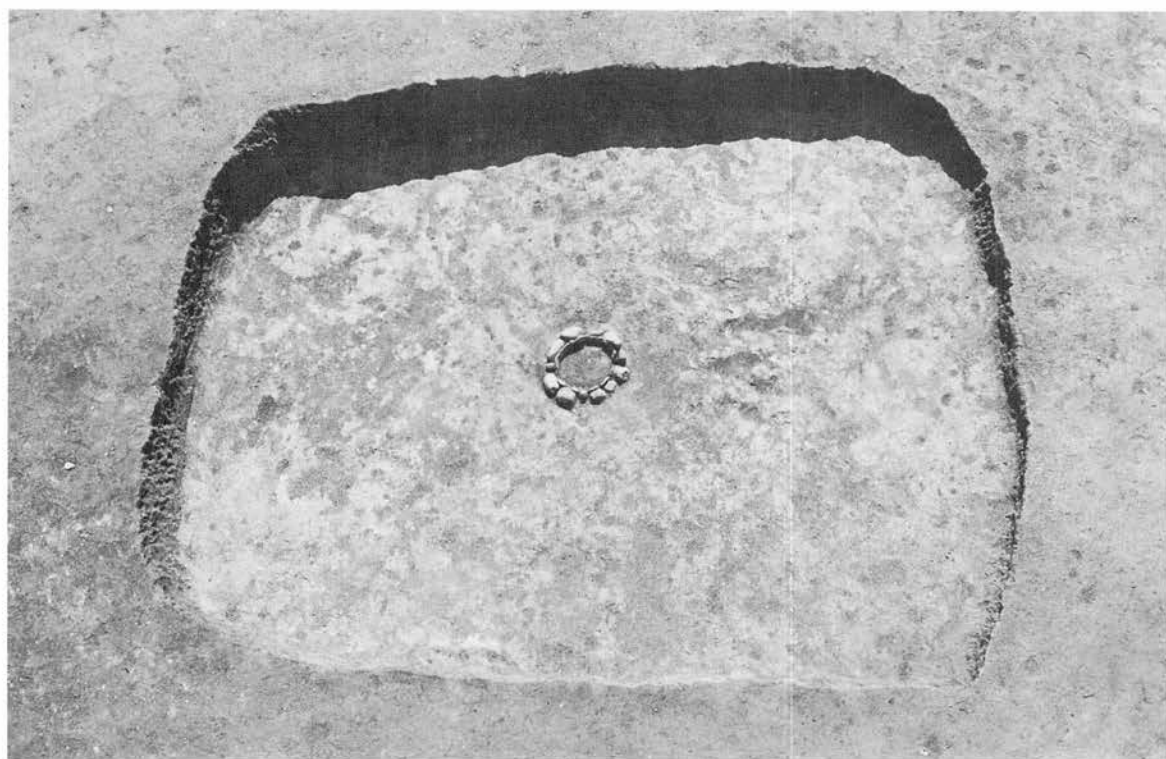


柱穴

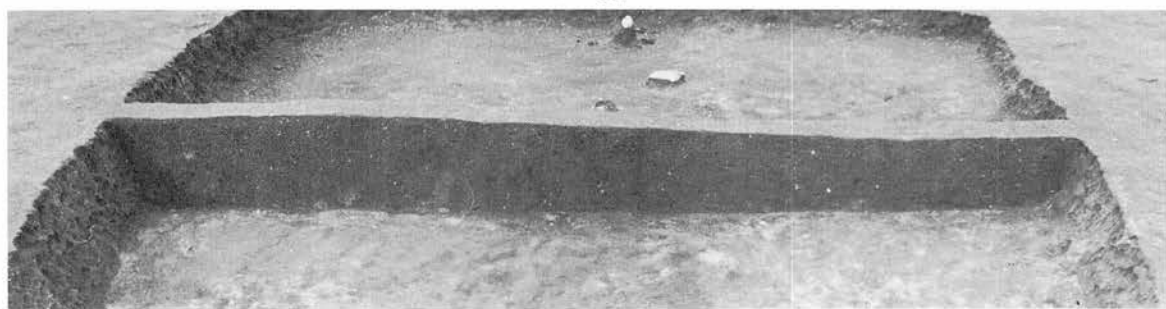


柱穴

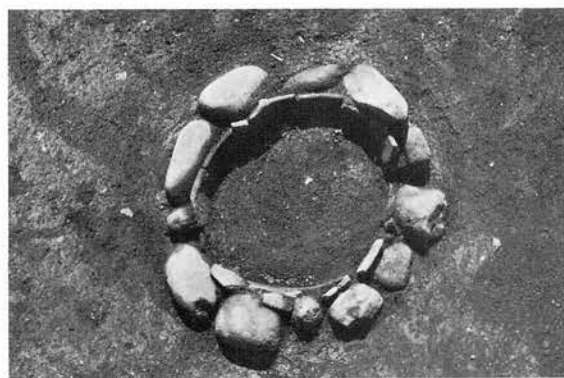
图版 5 VI H20 竖穴住居跡



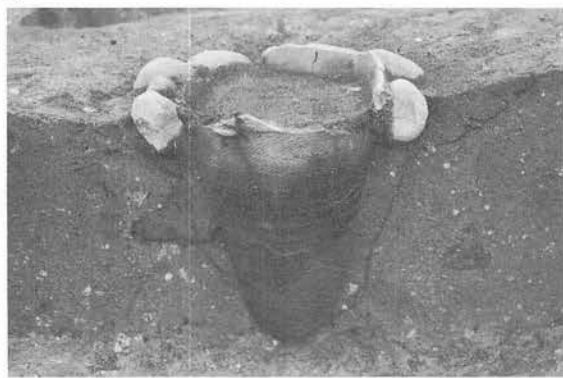
完 掘



断 面



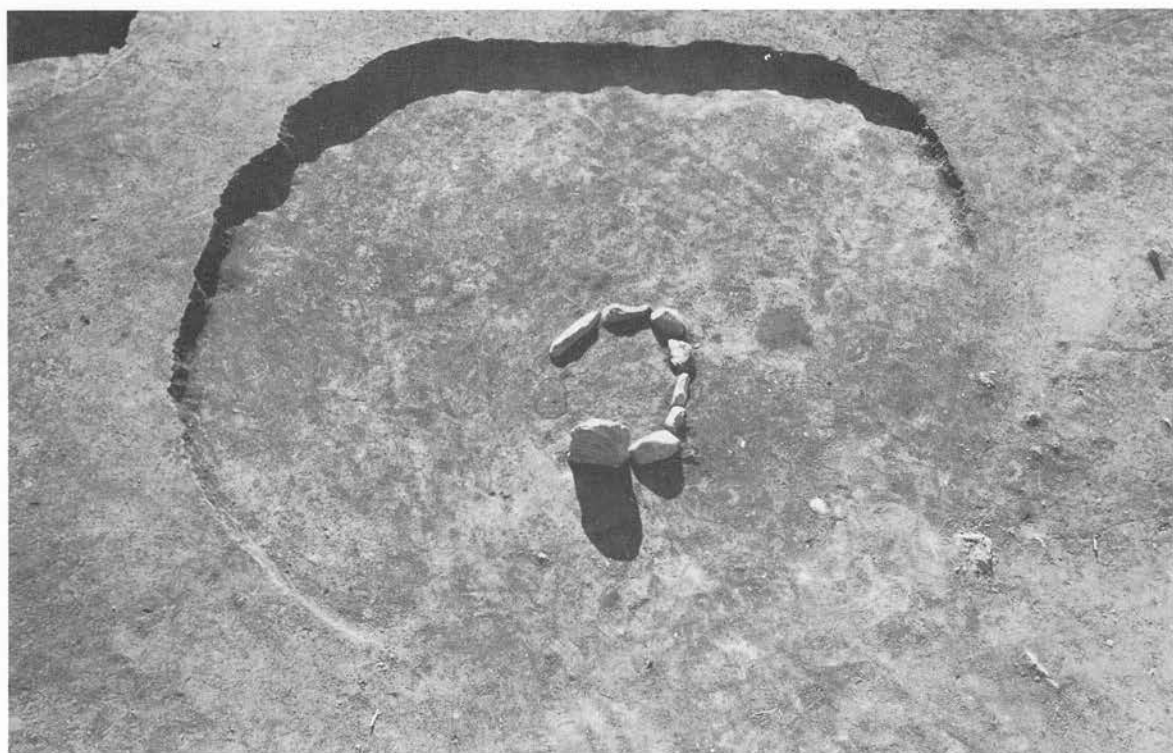
炉 跡



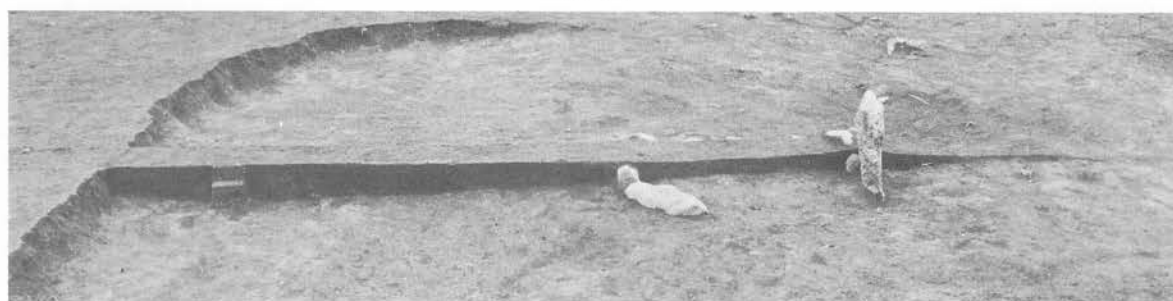
炉 跡 断 面

图版 6 VII B18 竖穴住居跡





完 掘



断 面



炉 跡



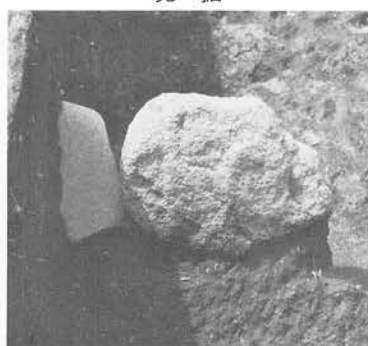
炉 跡 断 面



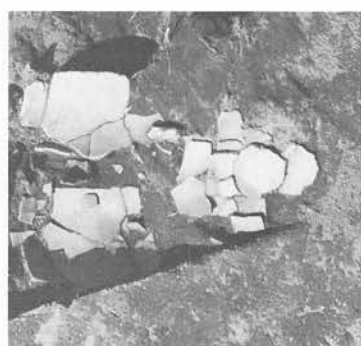
完 掘



炉跡



立石



土器出土状況



炉跡断面

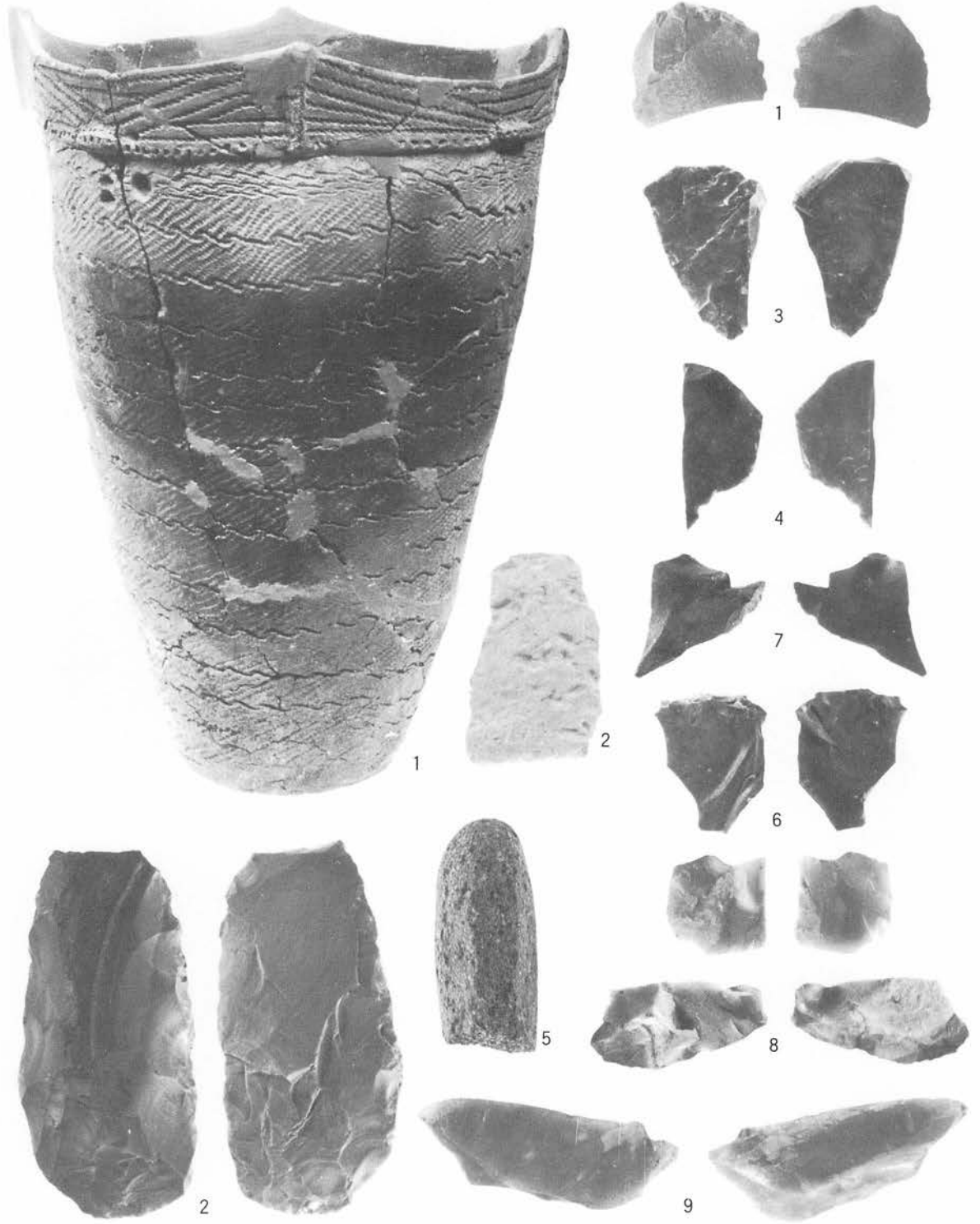


土器出土状況



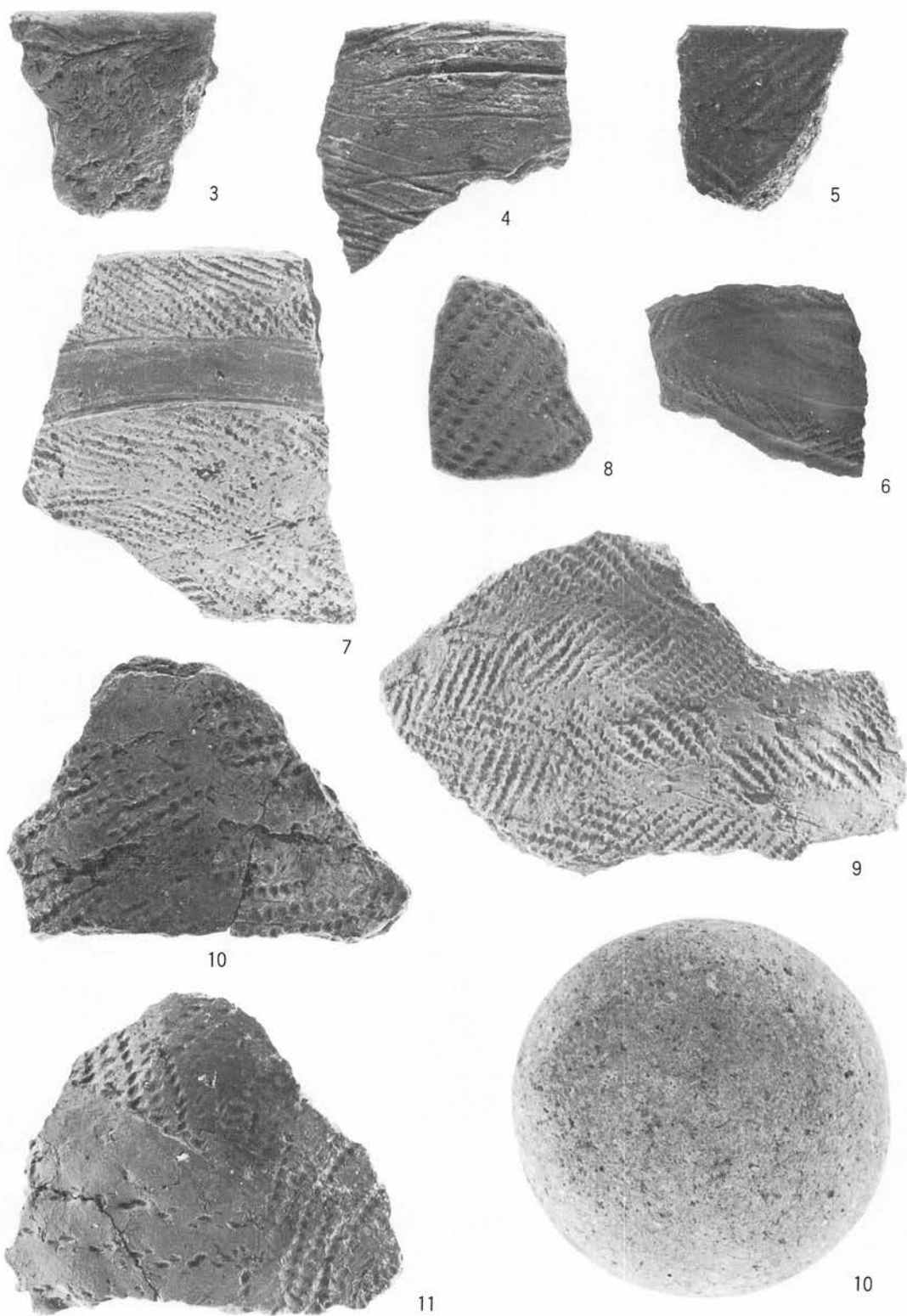
土器出土状況

図版 8 ⅧA23 竖穴住居跡

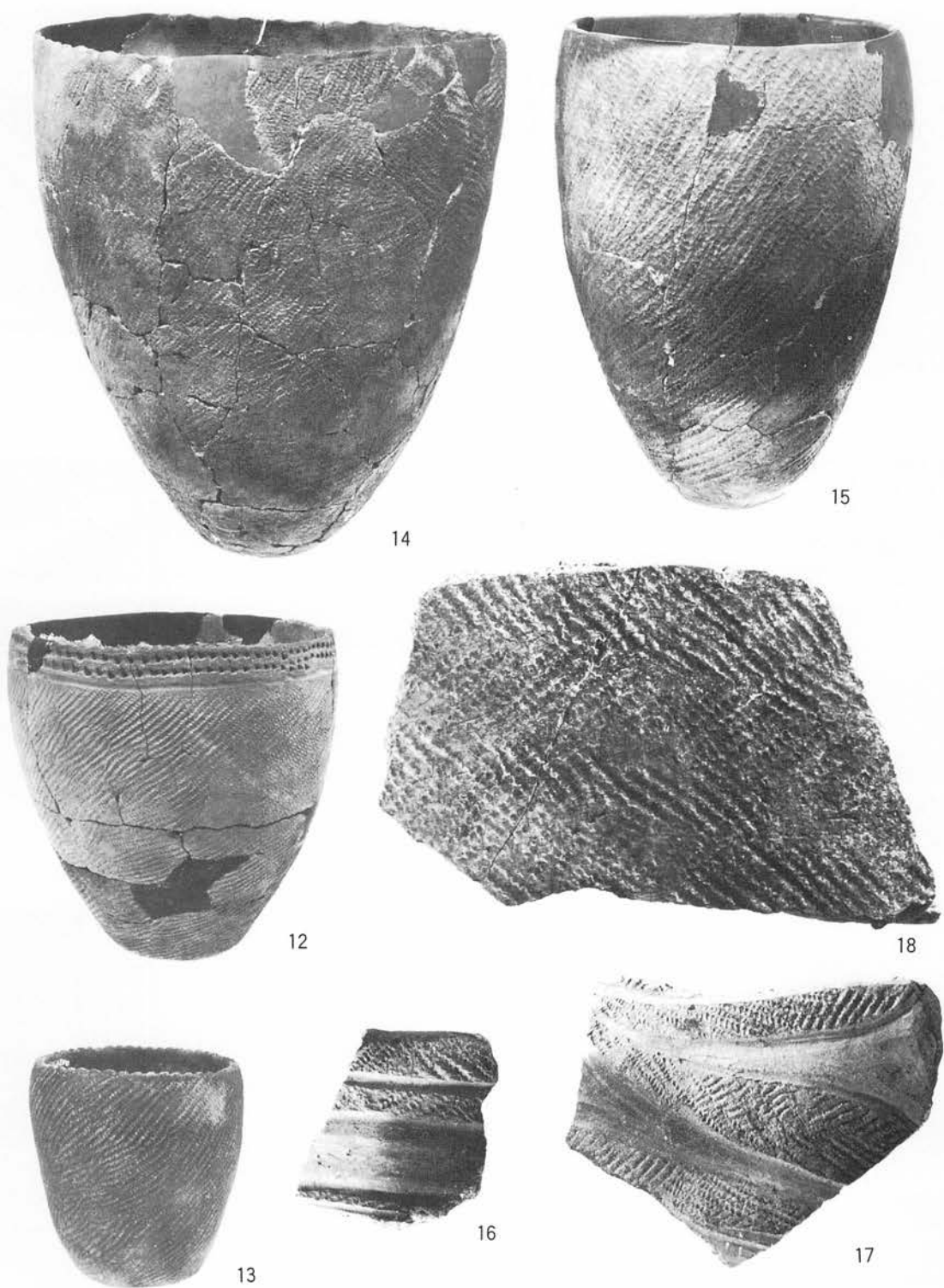


图版9 VIH20·VII B18竖穴住居跡出土遺物

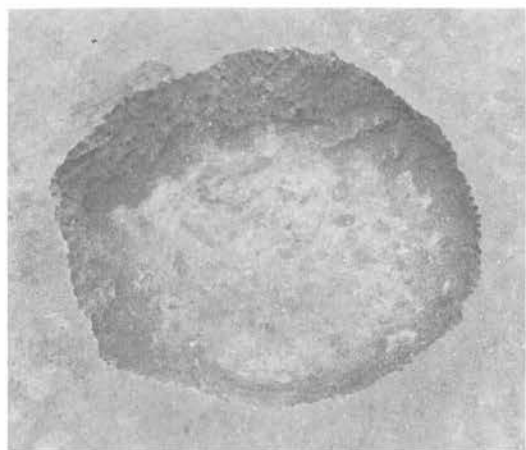




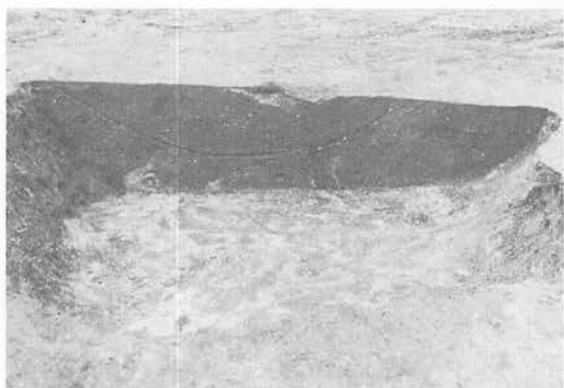
图版10 VII F 22竖穴住居跡出土遺物



图版11 ⅧA 23竖穴住居跡出土遺物



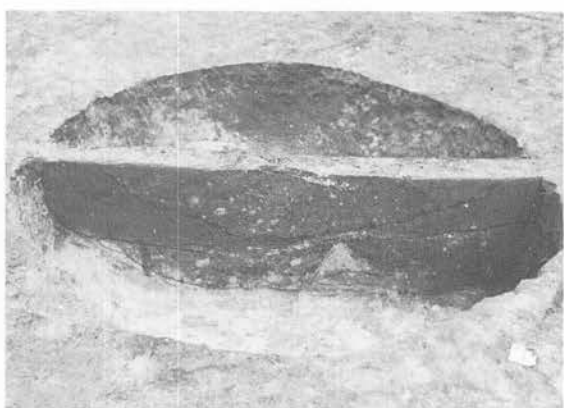
1 VI H16土壤(平面)



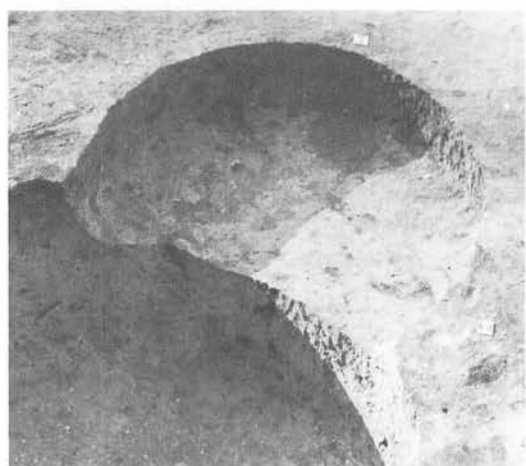
1 VI H16土壤(断面)



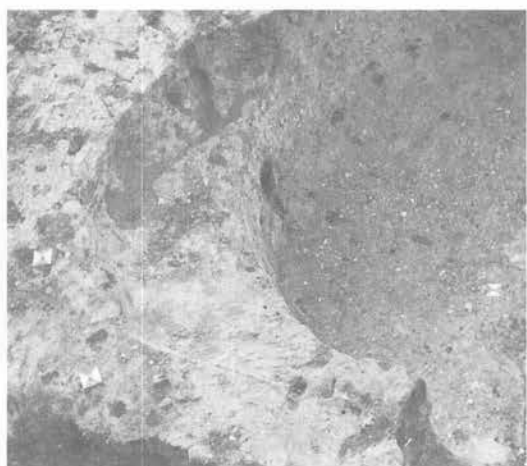
2 VII E25土壤(平面)



2 VII E25土壤(断面)



3 VII G25-1土壤(平面)



4 VII G25-2土壤(平面)

图版12 土壤—皿形(1~4)

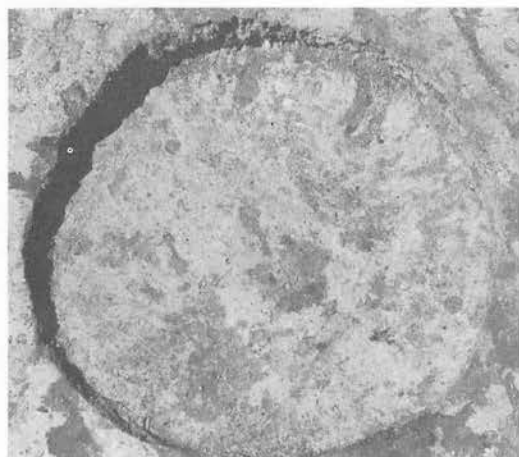




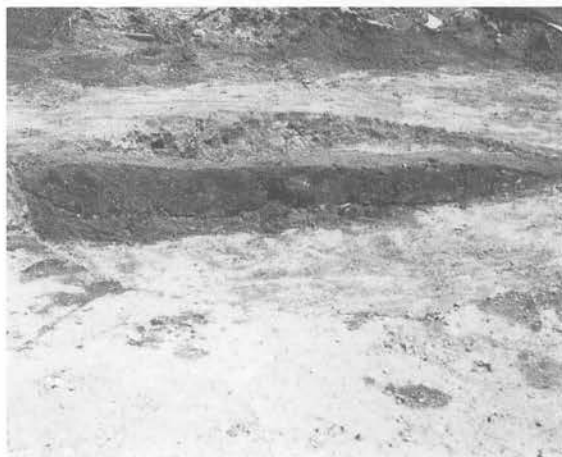
5 VII H24土壤(平面)



5 VII H24土壤(断面)



6 VII H25土壤(平面)



6 VII H25土壤(断面)

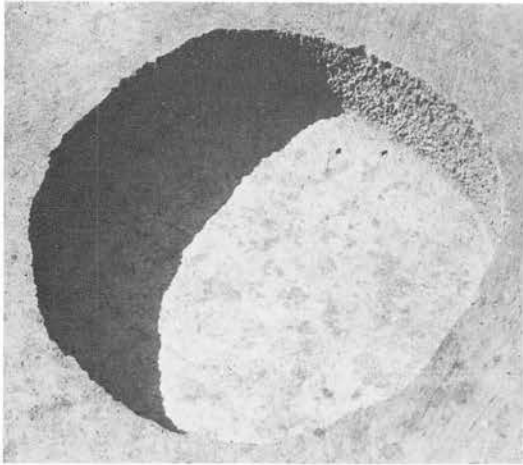


7 VII I 26土壤(平面)

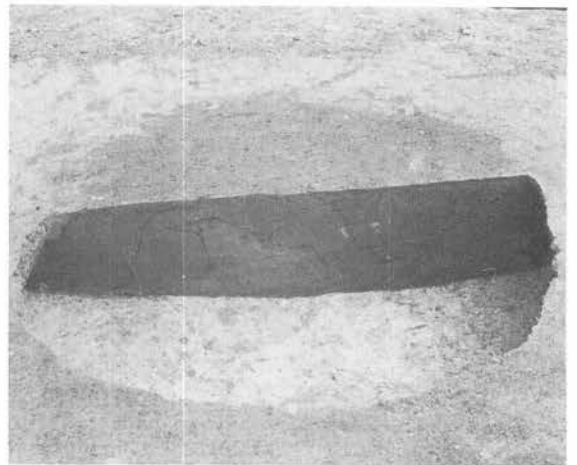


7 VII I 26土壤(断面)

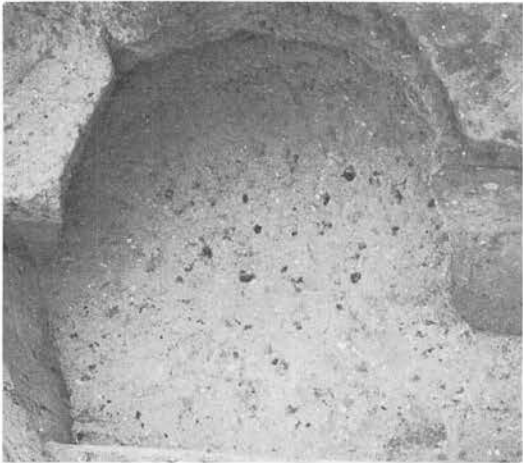
图版13 土壤—皿形(5~7)



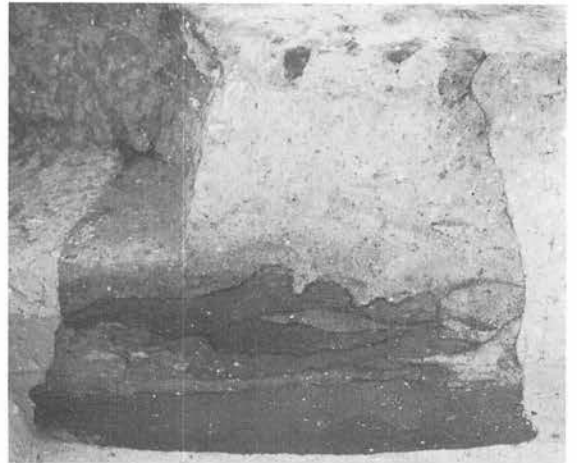
1 III F 4 土壙(平面)



1 III F 4 土壙(断面)



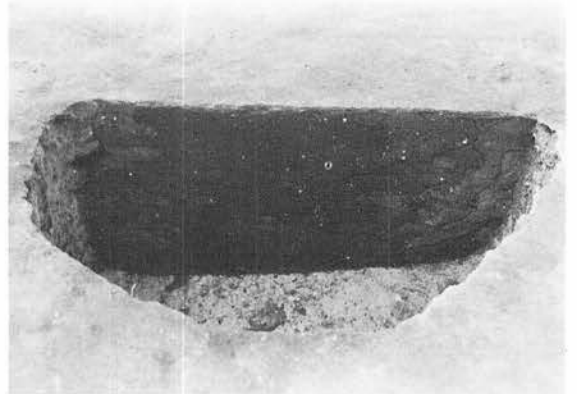
2 VII G 18-1 土壙(平面)



2 VII G 18-1 土壙(断面)



4 VII G 19 土壙(平面)



4 VII G 19 土壙(断面)

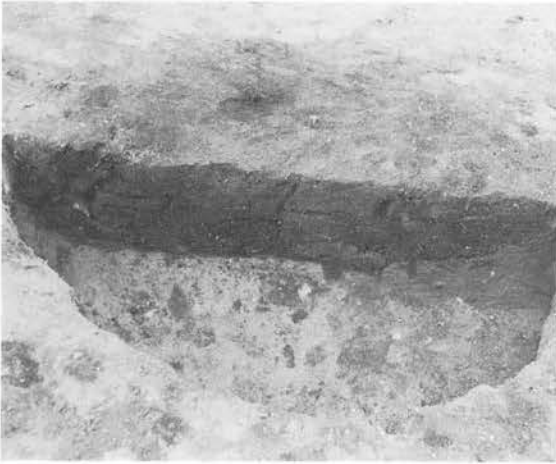
図版14 土壙—フラスコ形(1・2・4)



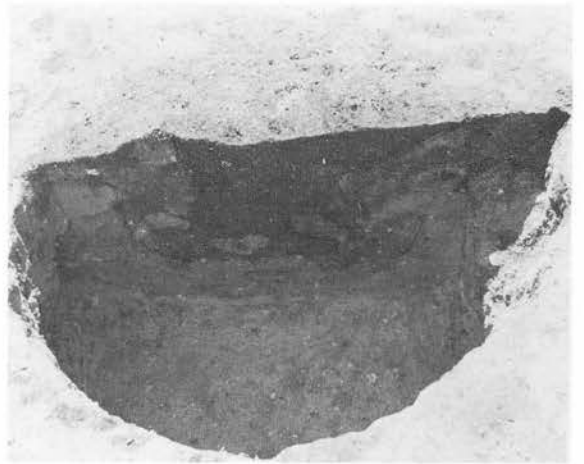
3 VII G18-2土壙(断面)



5 VII G22土壙(断面)



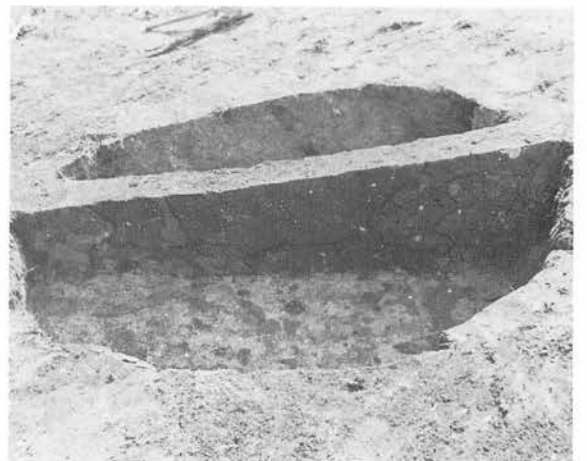
6 VII G26-1土壙(断面)



7 VII G26-2土壙(断面)



8 VII G27土壙(平面)



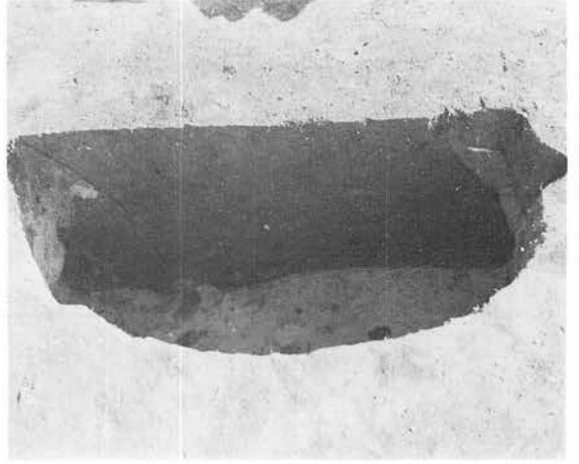
8 VII G27土壙(断面)

図版15 土壙—フラスコ形(3・5・6~8)





9 VII H25-2土壙(平面)



9 VII H25-2土壙(断面)



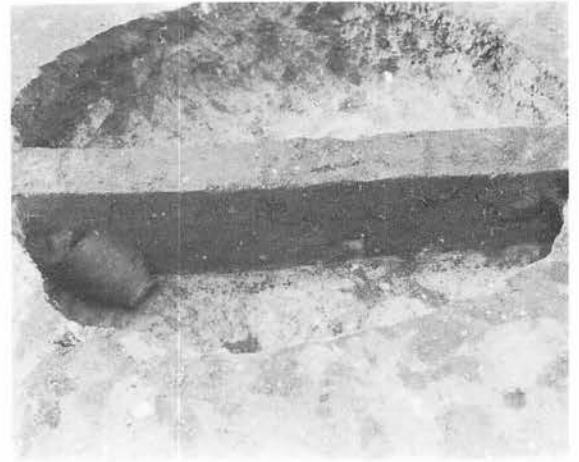
10 VII H25-3土壙(平面)



11 VII H25-3土壙(断面)



11 VII I 24土壙(平面)

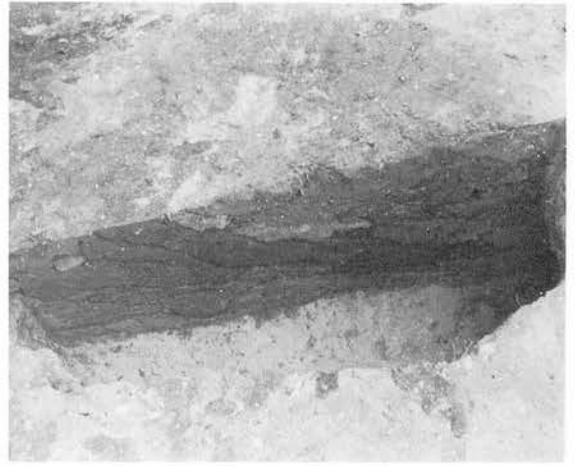


11 VII I 24土壙(断面)

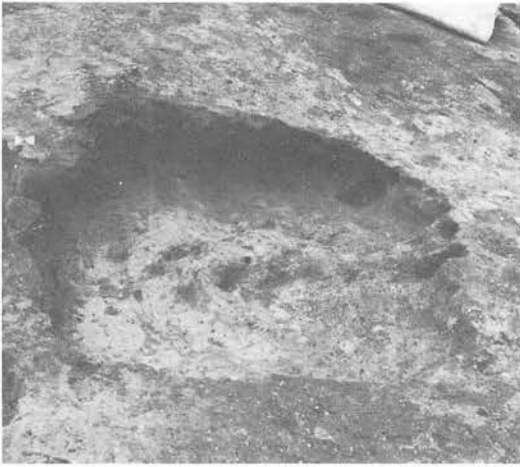
図版16 土壙—フラスコ形(9~11)



12 VII J24土壙(平面)



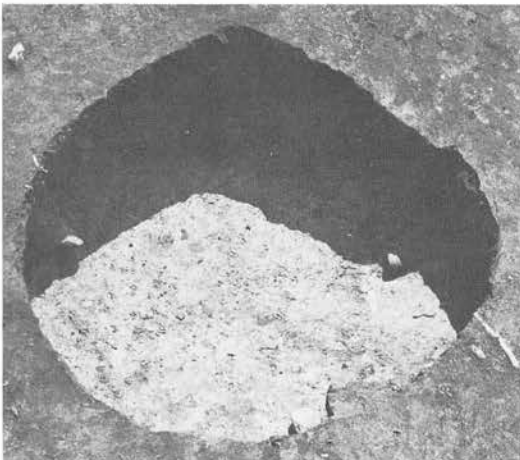
12 VII J24土壙(断面)



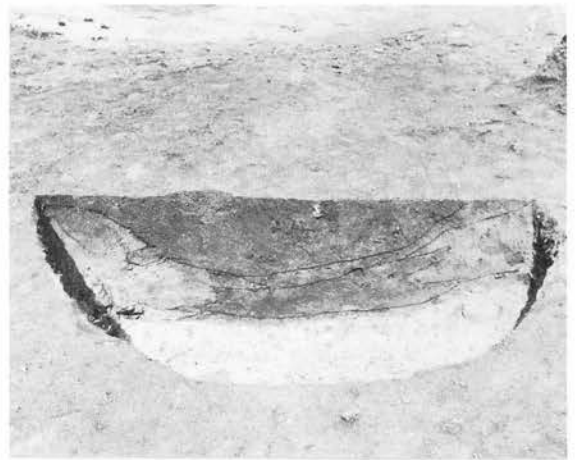
13 VII J24-2土壙(平面)



13 VII J24-2土壙(断面)



14 VIII D27土壙(平面)

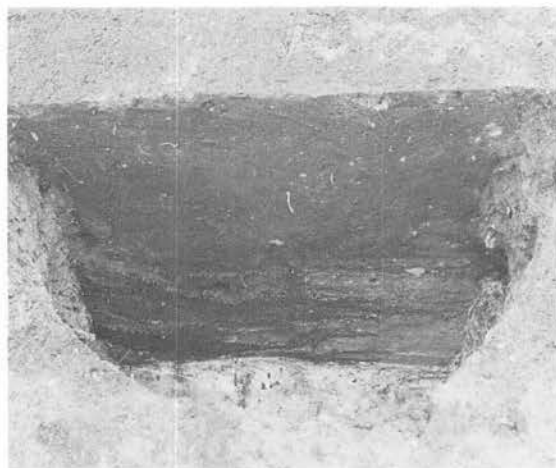


14 VIII D27土壙(断面)

図版17 土壙—フラスコ形(12~14)



1 IH 9 陥し穴(平面)



1 IH 9 陥し穴(断面)



2 IID 4 陥し穴(平面)



2 IID 4 陥し穴(断面)



3 IIE 4 陥し穴(平面)



3 IIE 4 陥し穴(断面)

図版18 陥し穴状遺構一円形(1~3)

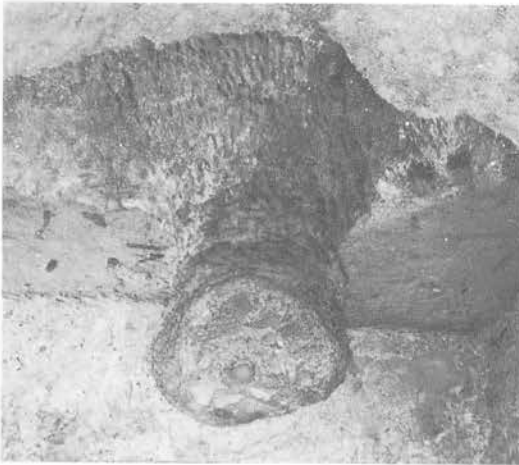




4 II F 4-1 陥し穴(平面)



4 II F 4-1 陥し穴(断面)



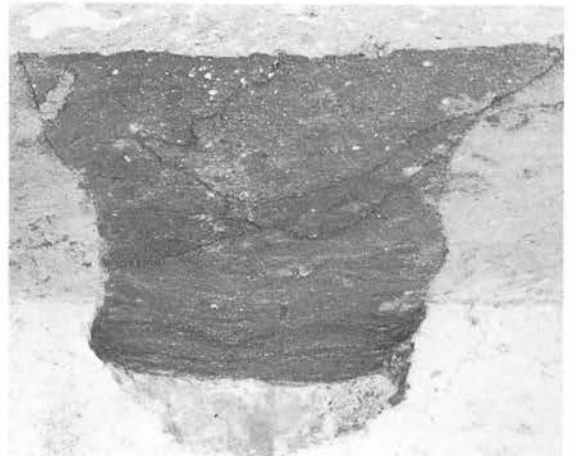
5 II F 4-2 陥し穴(平面)



5 II F 4-2 陥し穴(断面)



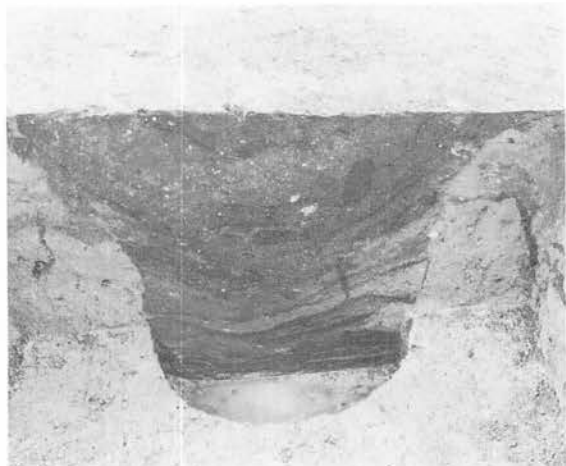
6 II G 4 陥し穴(平面)



6 II G 4 陥し穴(断面)



7 II H 4 陥し穴(平面)



7 II H 4 陥し穴(断面)



8 II I 3 陥し穴(平面)



8 II I 3 陥し穴(断面)



9 II I 5 陥し穴(平面)

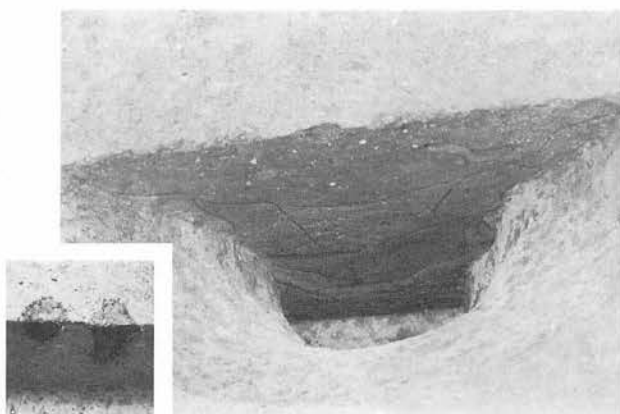


9 II I 5 陥し穴(断面)

図版20 陥し穴状遺構—円形(7~9)



10 VG14陥し穴(平面)

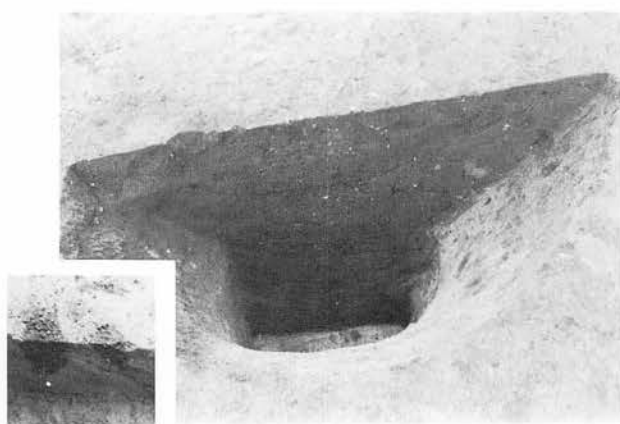


副穴(断面)

10 VG14陥し穴(断面)



11 VI14陥し穴(平面)



副穴(断面)

11 VI14陥し穴(断面)



12 VJ14陥し穴(平面)

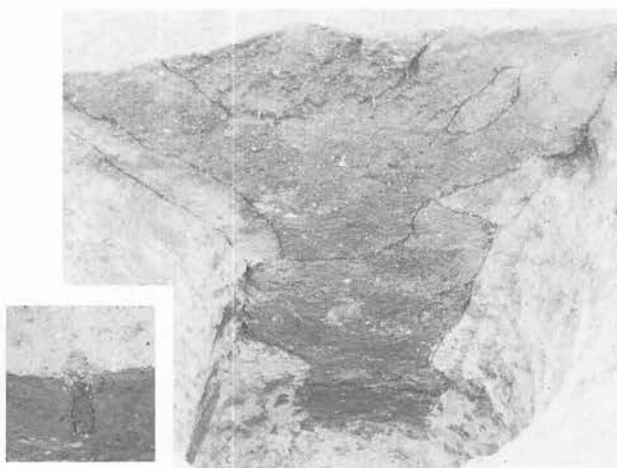


12 VJ14陥し穴(断面)





13 VI B 15陥し穴(平面)

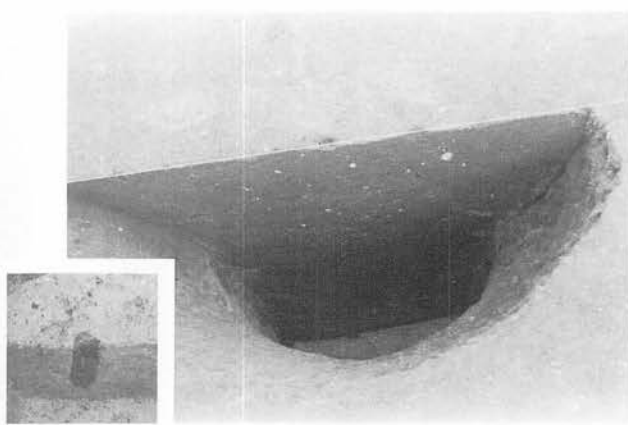


副穴(断面)

13 VI B 15陥し穴(断面)

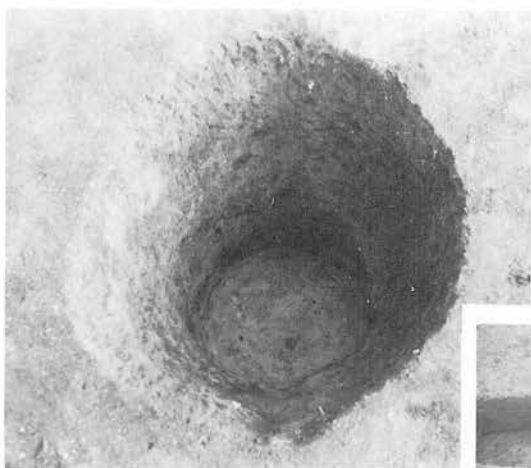


14 VI C 14陥し穴(平面)



副穴(断面)

14 VI C 14陥し穴(断面)



16 VI E 16陥し穴(平面)



副穴(断面)

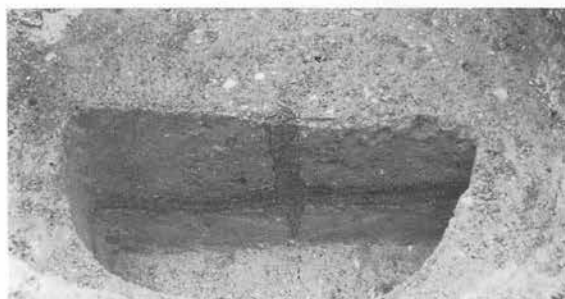
図版22 陥し穴状遺構—円形(13・14・16)



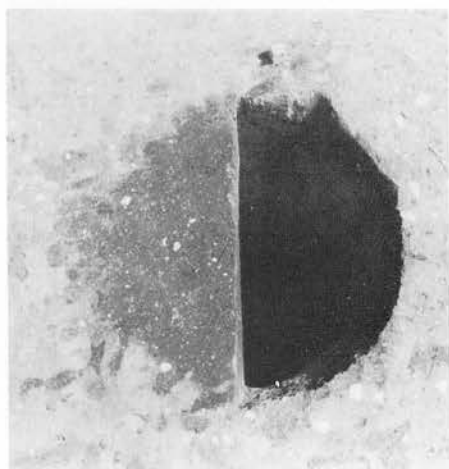
15 VIC15陥し穴(平面)



15 VIC15陥し穴(断面)



15 VIC15陥し穴一杭痕(断面)



17 VIF18陥し穴(半截)



17 VIF18陥し穴(完掘)



17 VIF18陥し穴(断面)

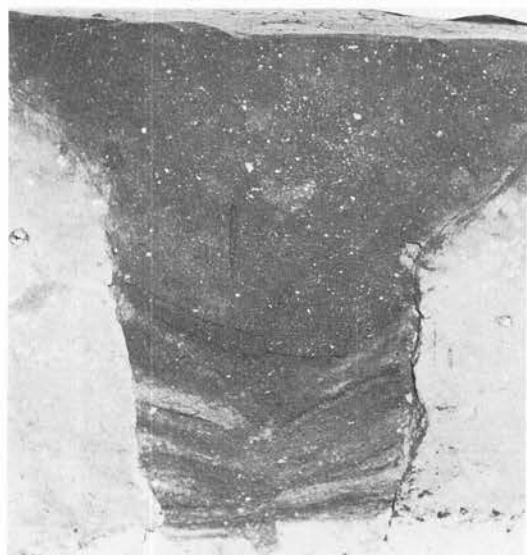
図版23 陥し穴状遺構一円形(15・17)



18 VIG17陥し穴(平面)



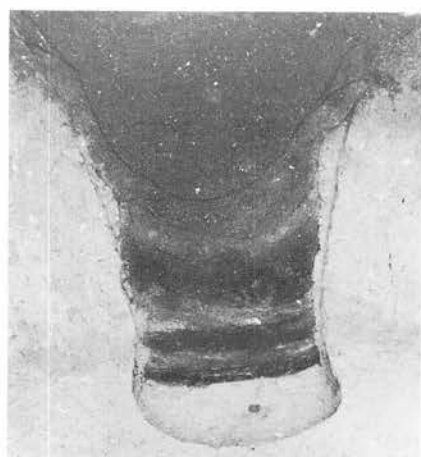
18 VIG17陥し穴(断面)



19 VIH14陥し穴(断面)



20 VIH17陥し穴(断面)



21 VII C18陥し穴(断面)

18 VIG17陥し穴(平面)	18 VIG17陥し穴(断面)
	19 VIH14陥し穴(断面)
20 VIH17陥し穴(断面)	21 VII C18陥し穴(断面)

図版24 陥し穴状遺構—円形(18~21)





26 VII B 20陥し穴(断面)



副穴(断面)



副穴(断面)

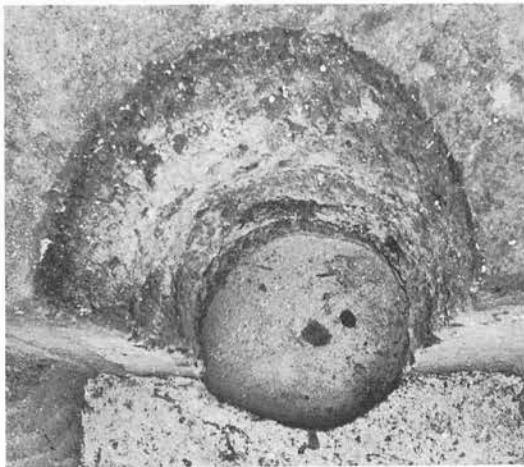
22 VI I 14陥し穴(断面)



23 VI I 16陥し穴(平面)



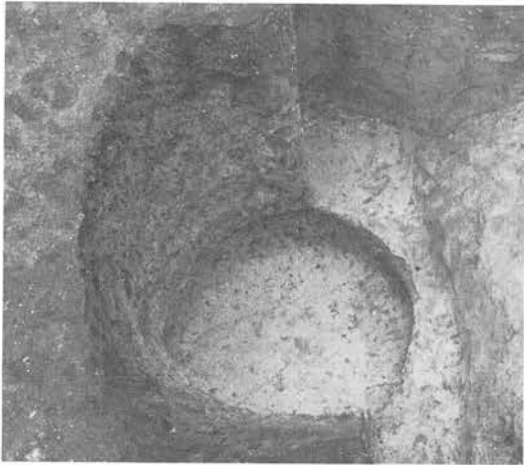
23 VI I 16陥し穴(断面)



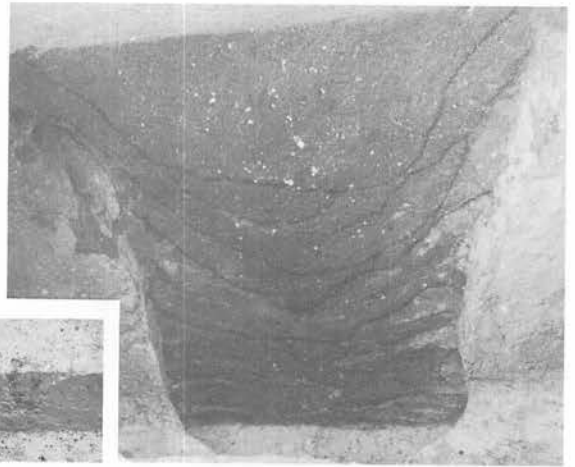
24 VI J 17陥し穴(平面)



24 VI J 17陥し穴(断面)

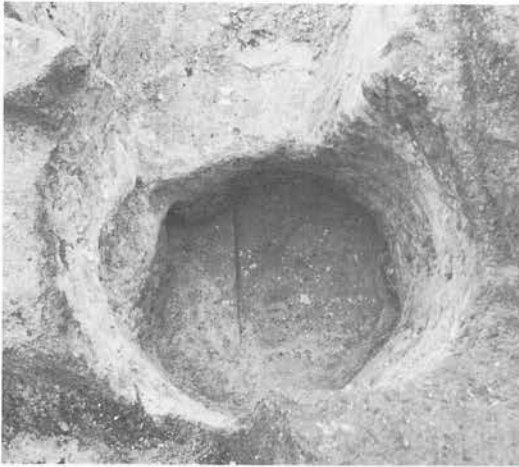


25 VII B13陥し穴(平面)

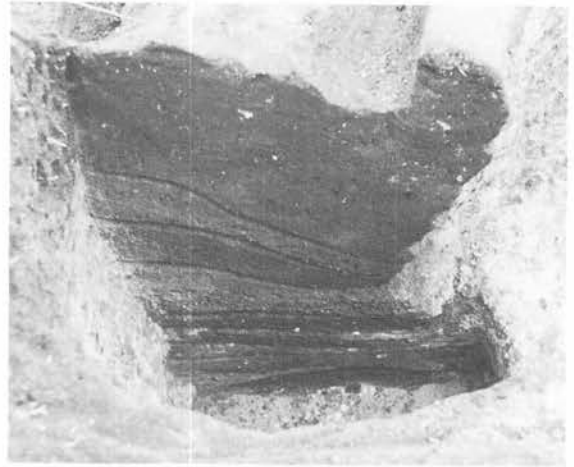


副穴(断面)

25 VII B13陥し穴(断面)



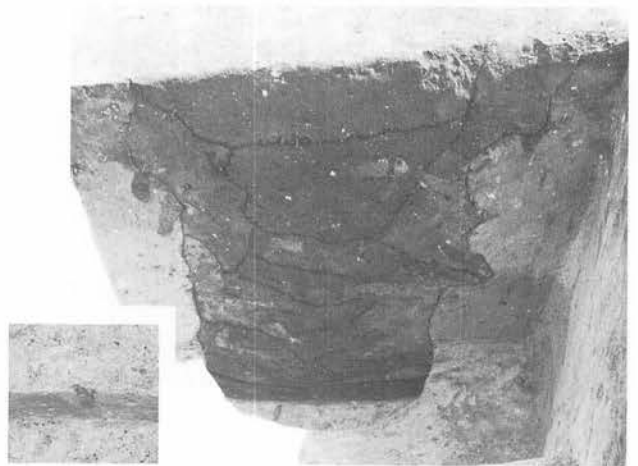
27 VII B21陥し穴(平面)



27 VII B21陥し穴(断面)



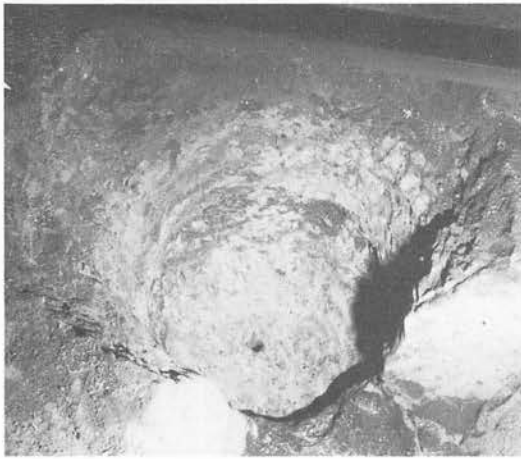
28 VII C13陥し穴(平面)



副穴(断面)

28 VII C13陥し穴(断面)

図版26 陥し穴状遺構—円形(25・27・28)



29 VII D12陥し穴(平面)



29 VII D12陥し穴(断面)



30 VII D15陥し穴(平面)

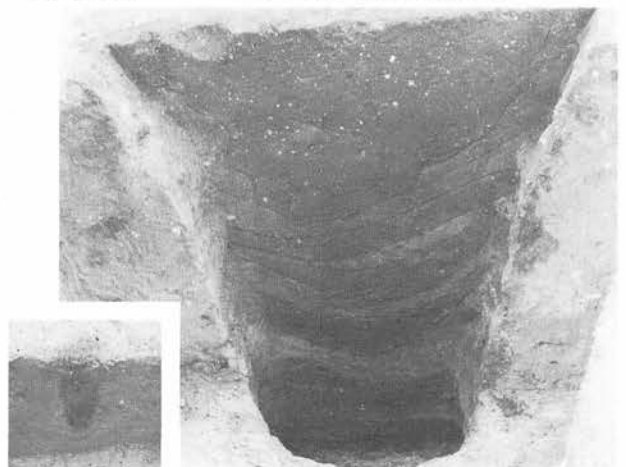


副穴(断面)

30 VII D15陥し穴(断面)



31 VII E14陥し穴(平面)



副穴(断面)

31 VII E14陥し穴(断面)

図版27 陥し穴状遺構一円形(29~31)





32 VII F 10陥し穴(平面)



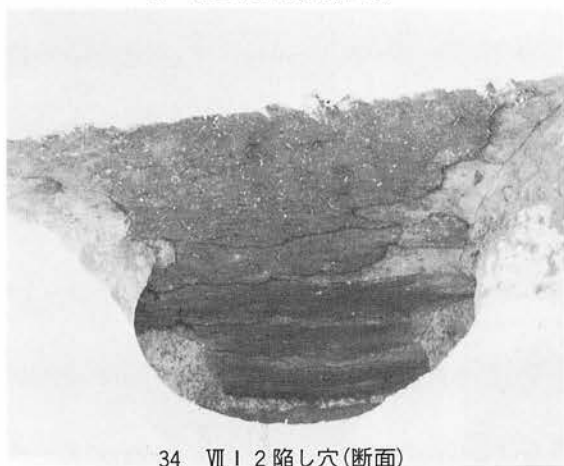
32 VII F 10陥し穴(平面)



33 VII G 18陥し穴(平面)



33 VII G 18陥し穴(断面)

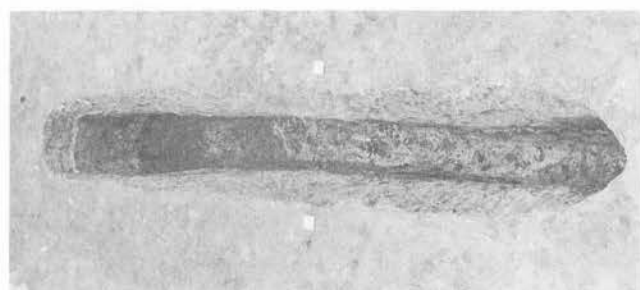
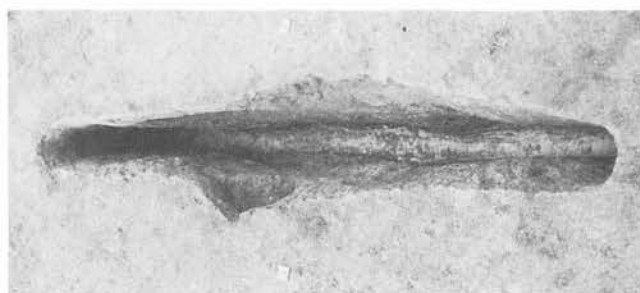


34 VII I 2陥し穴(断面)



34 VII I 2陥し穴—副穴1検出状況

図版28 陥し穴状遺構—円形(32~34)



1 IIJ10陥し穴

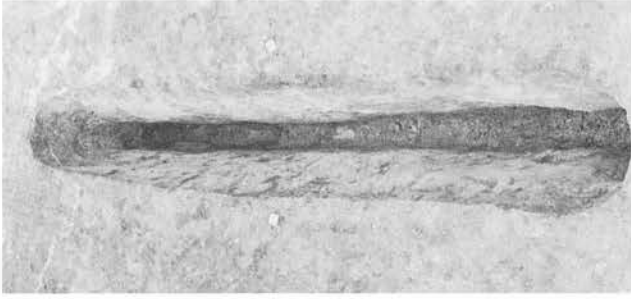
2 III B7陥し穴

3 IV A3陥し穴

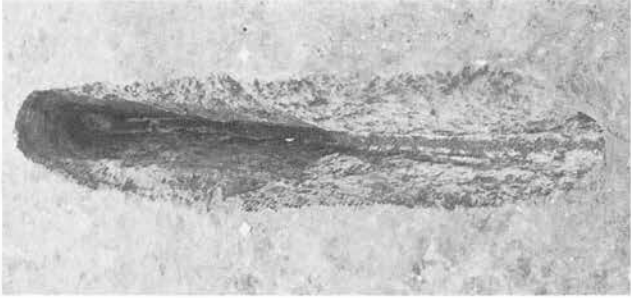
4 IV B6陥し穴

5 IV B9陥し穴

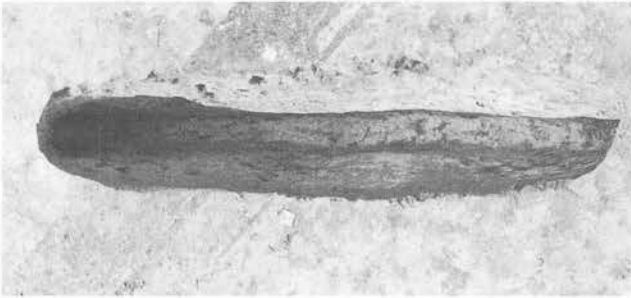
図版29 陥し穴状遺構—溝状(1~5)



6 IV C 7 陥し穴



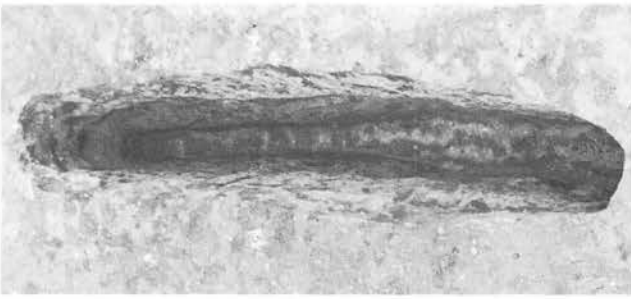
7 IV E 9 陥し穴



8 IV E 10 陥し穴



9 IV J 13 陥し穴

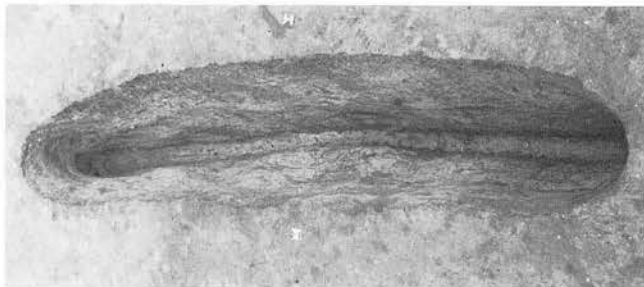


12 V A 13 陥し穴

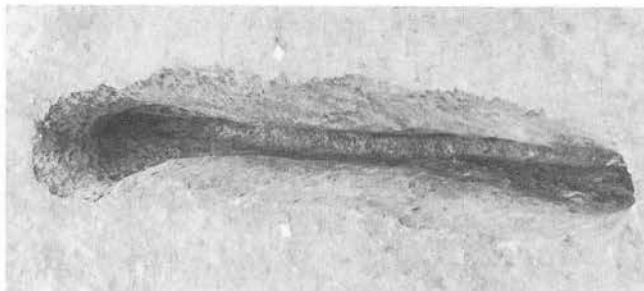


図版30 陥し穴状遺構—溝状(6~9・12)

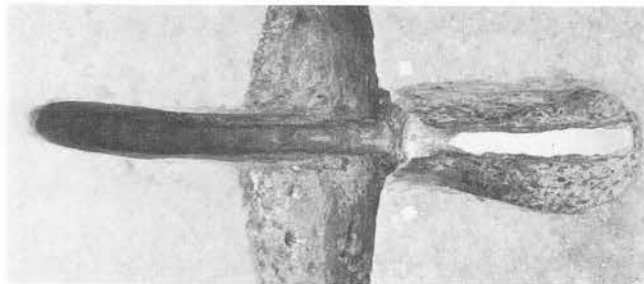




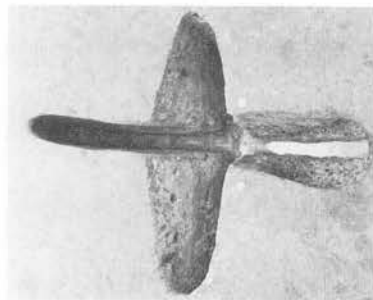
14 VB14陥し穴



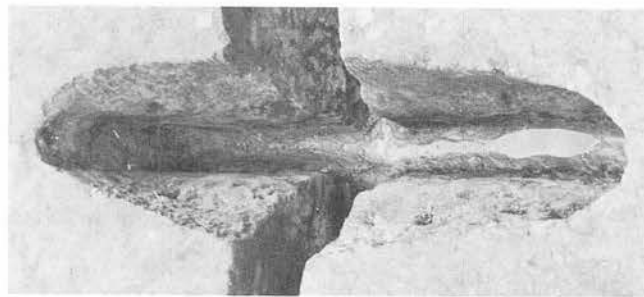
13 VB7陥し穴



11 VA11-2陥し穴



VA11-1・2陥し穴  
(完掘状況)



10 VA11-1陥し穴



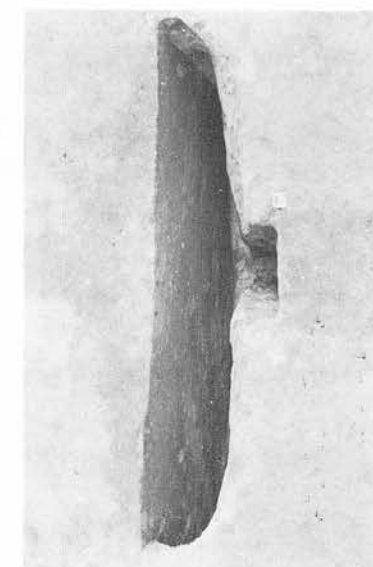
14 VB14陥し穴



13 VB7陥し穴

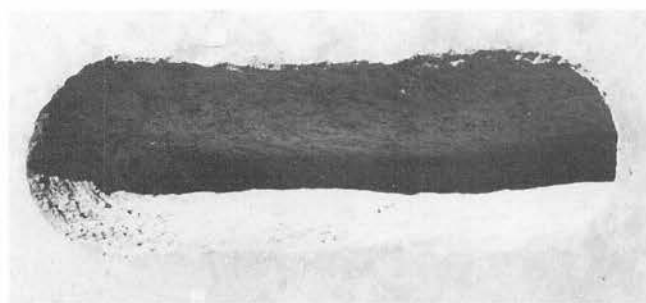


11 VA11-2陥し穴

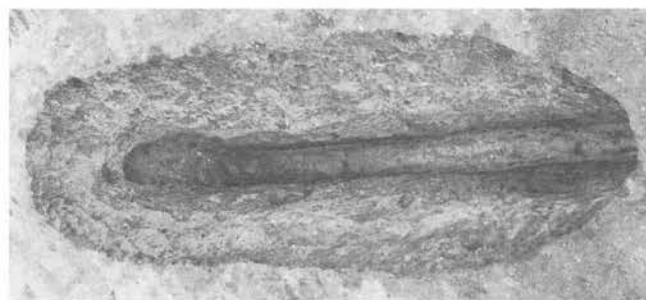


10 VA11-1陥し穴

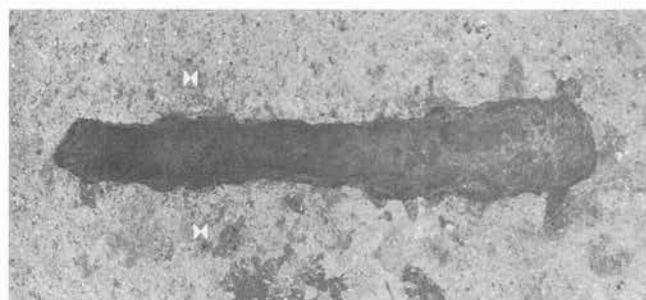
図版31 陥し穴状遺構—溝状(10・11・13・14)



15 VJ15陥し穴



16 VJ16陥し穴



17 VIA11陥し穴



18 VII E17陥し穴



28 VII D25陥し穴

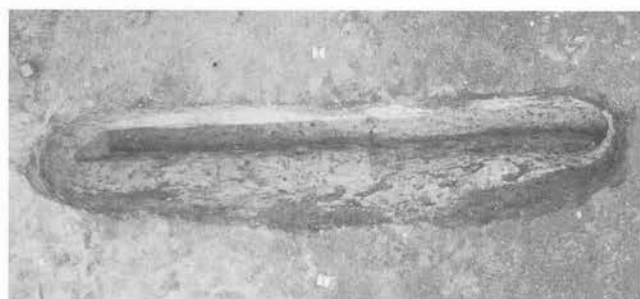
図版32 陥し穴状遺構—溝状(15~18・28)



20 VI H19陥し穴



19 VI H18陥し穴



21 VI H20陥し穴



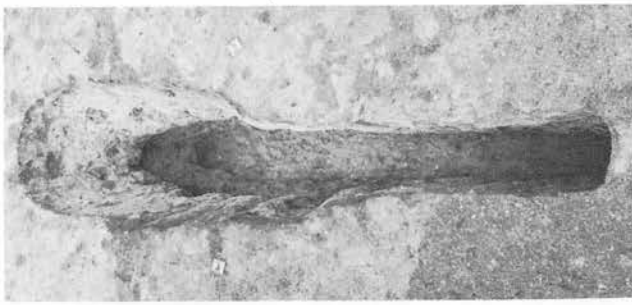
22 VI H21陥し穴



23 VI J21陥し穴

図版33 陥し穴状遺構—溝状(19~23)

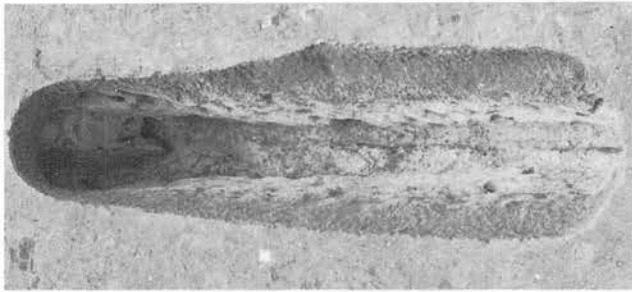




24 VII B 22陥し穴



25 VII C 13陥し穴



26 VII D 23-1陥し穴



27 VII D 23-2陥し穴



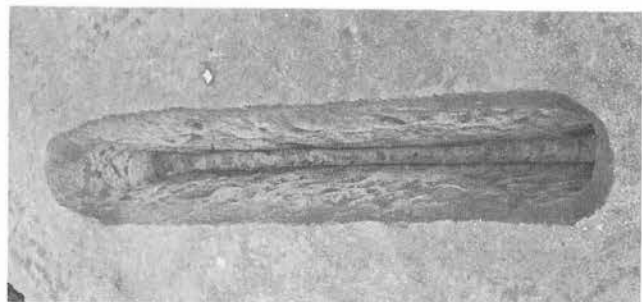
29 VII E 11陥し穴



30 VII E 12陥し穴



図版34 陥し穴状遺構—溝状(24~30)



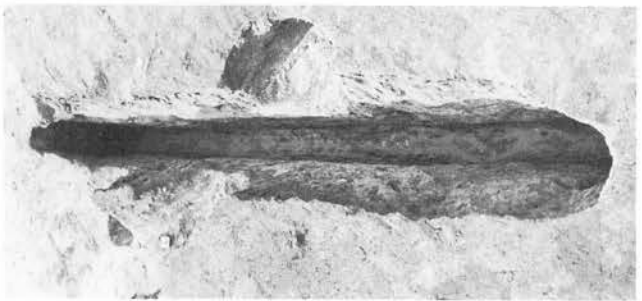
31 ⅦE20陥し穴



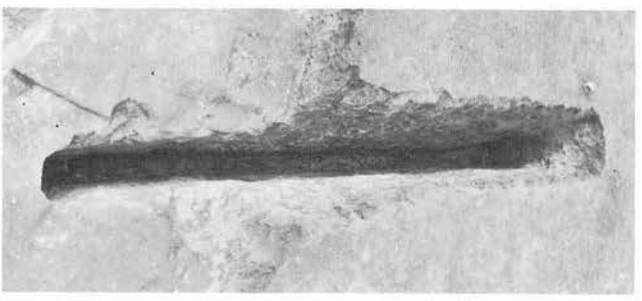
32 ⅦE25陥し穴



33 ⅦE26陥し穴



34 ⅦF17陥し穴



35 ⅦF18陥し穴

図版35 陥し穴状遺構(31~35)



36 VII F 24陥し穴



37 VII F 26陥し穴



38 VII G 22陥し穴



39 VII G 23陥し穴



40 VII G 26陥し穴

図版36 陥し穴状遺構 (36~40)





1 ⅢJ11陥し穴(平面)



1 ⅢJ11陥し穴(断面)



2 ⅣB11陥し穴(平面)



2 ⅣB11陥し穴(平面)



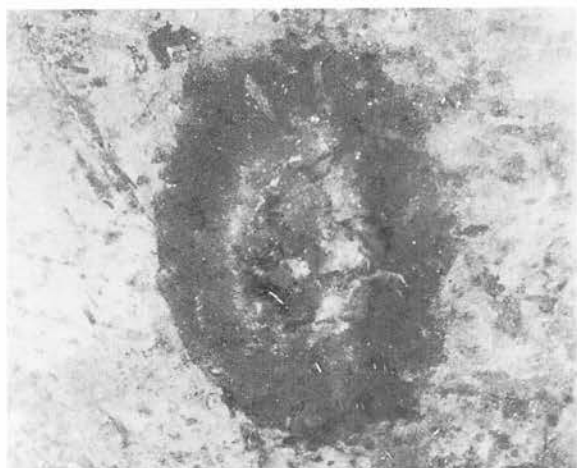
4 ⅤI17陥し穴(平面)

副穴(左P<sub>2</sub>,右P<sub>1</sub>)平面

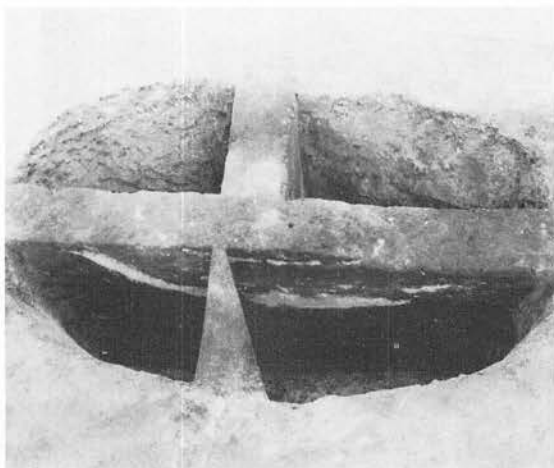


4 ⅤI17陥し穴(断面)

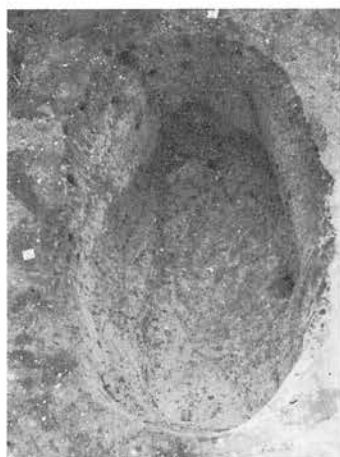
図版37 陥し穴状遺構—長方形(1・2・4)



3 VF16陥し穴検出状況



3 VF16陥し穴(長軸断面)



3 VF16陥し穴(平面)



副穴(P<sub>3</sub>)平面



副穴(左P<sub>2</sub>,右P<sub>1</sub>)平面



3 VF16陥し穴(短軸断面)

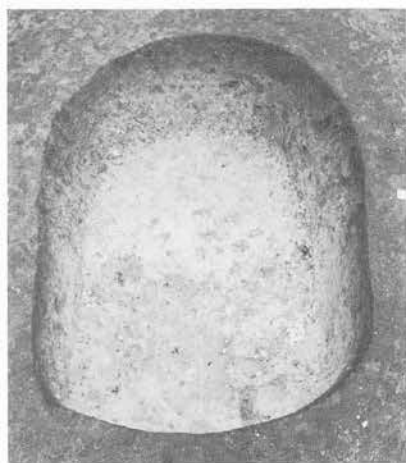


5 VIA17陥し穴(平面)



5 VIA17陥し穴(断面)

図版38 陥し穴状遺構一長方形(3・5)



6 VII F19陥し穴(平面)



6 VII F19陥し穴(断面)

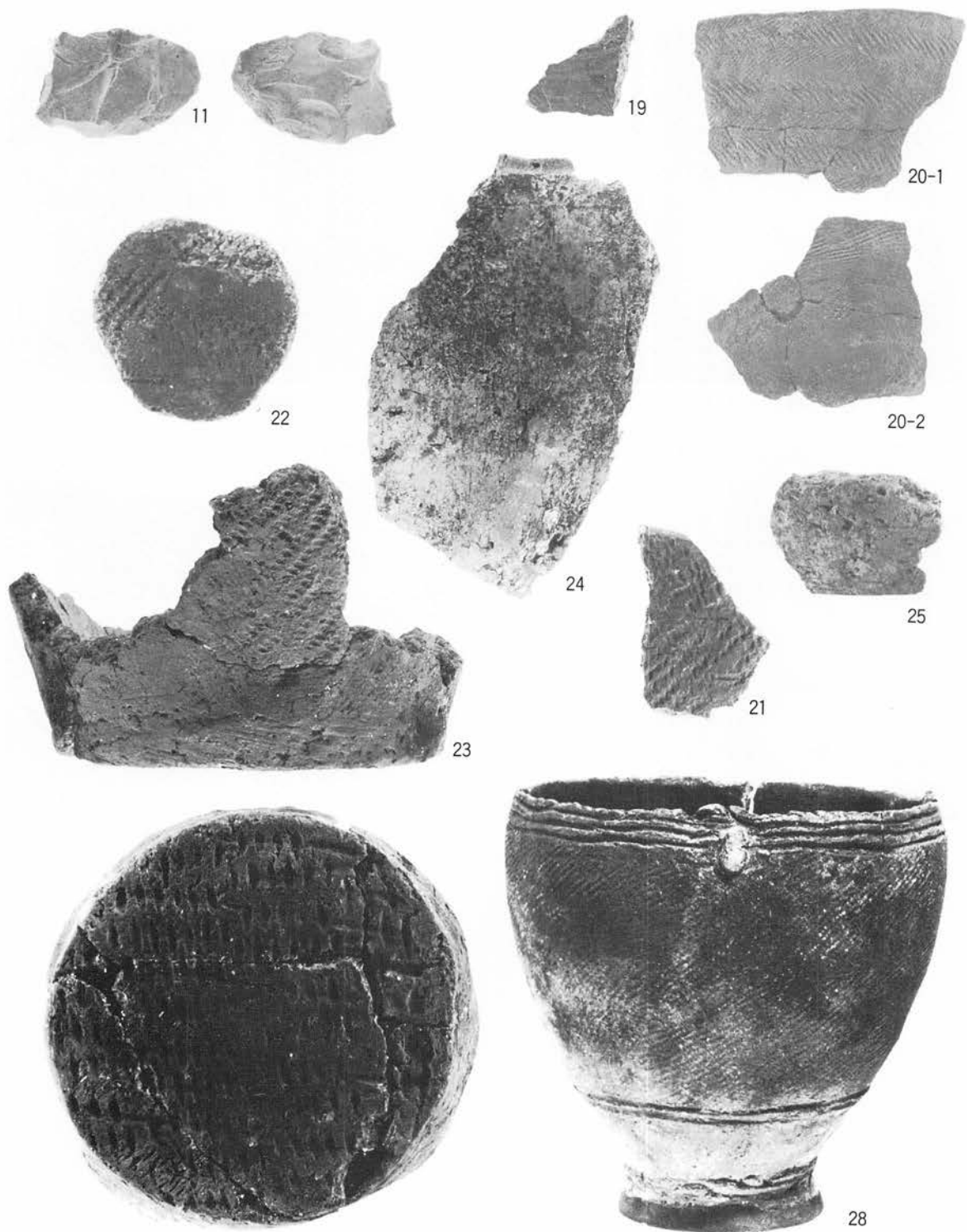


7 VII G25陥し穴(平面)

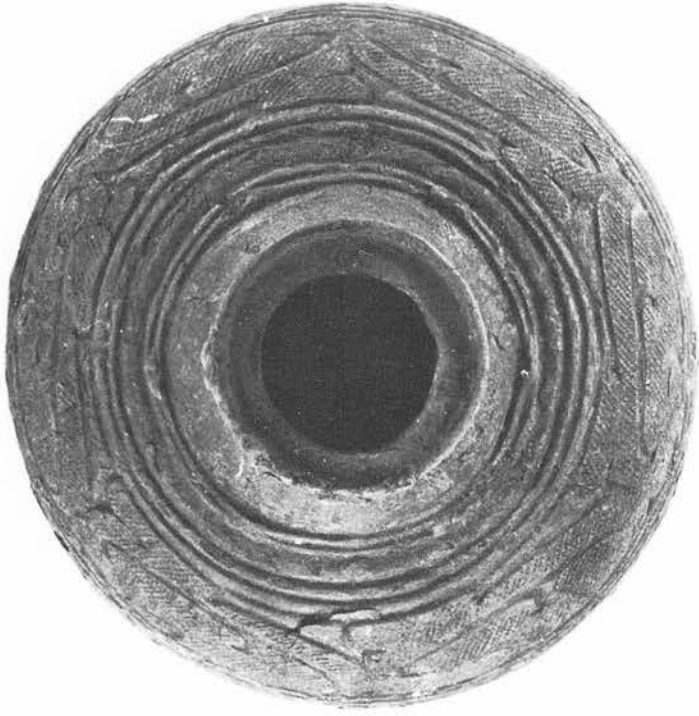


7 VII G25陥し穴(断面)





図版40 土壙(皿形・フラスコ形)出土遺物(1)



26



出土狀況

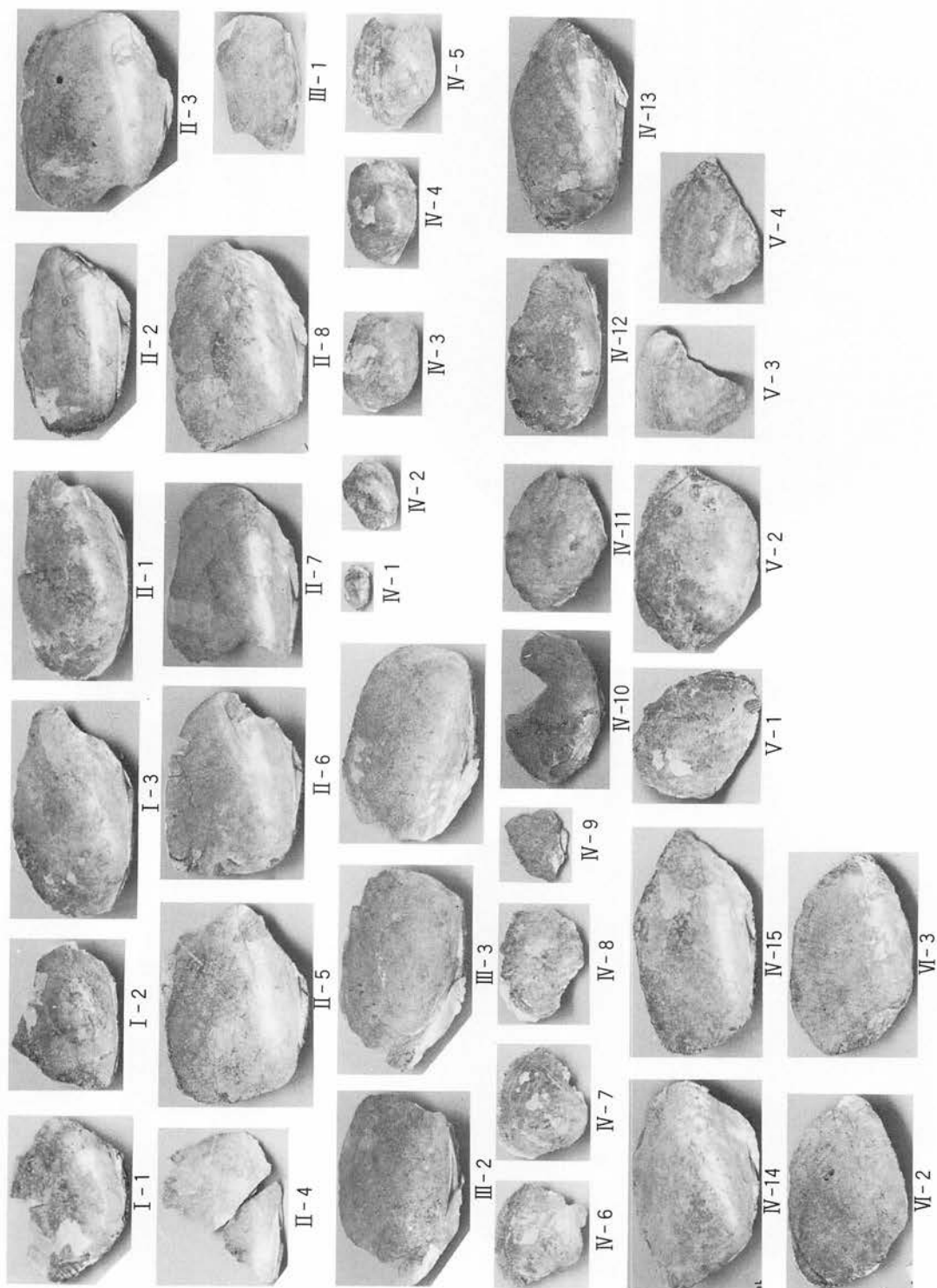


27



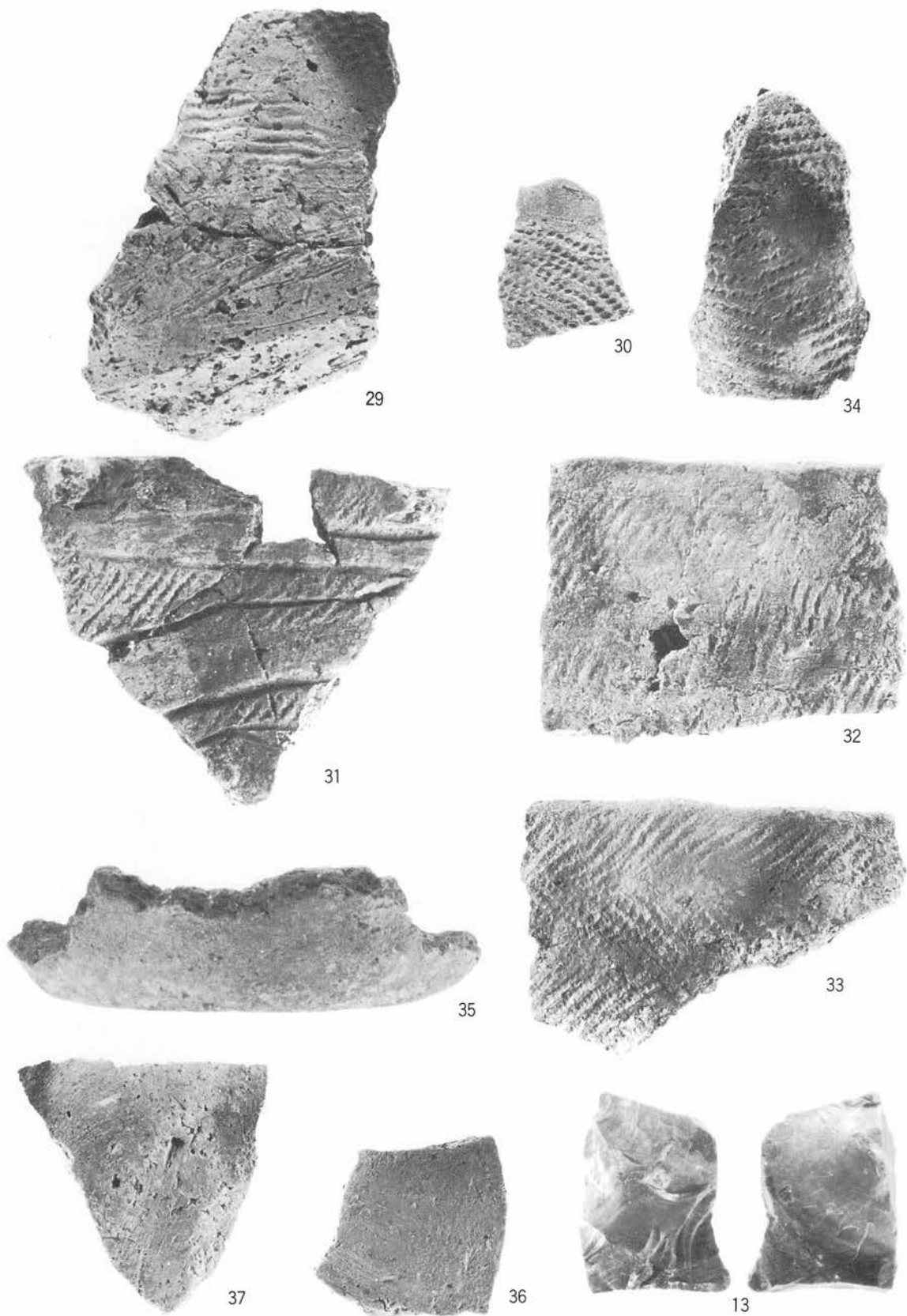
12

图版41 VII H 25土壙出土遺物(2)



図版42 9 (VII H 25-2) 土壙出土 カラス貝(3)





図版43 陥し穴状遺構(溝状・長方形)出土遺物(4)



38



39



40

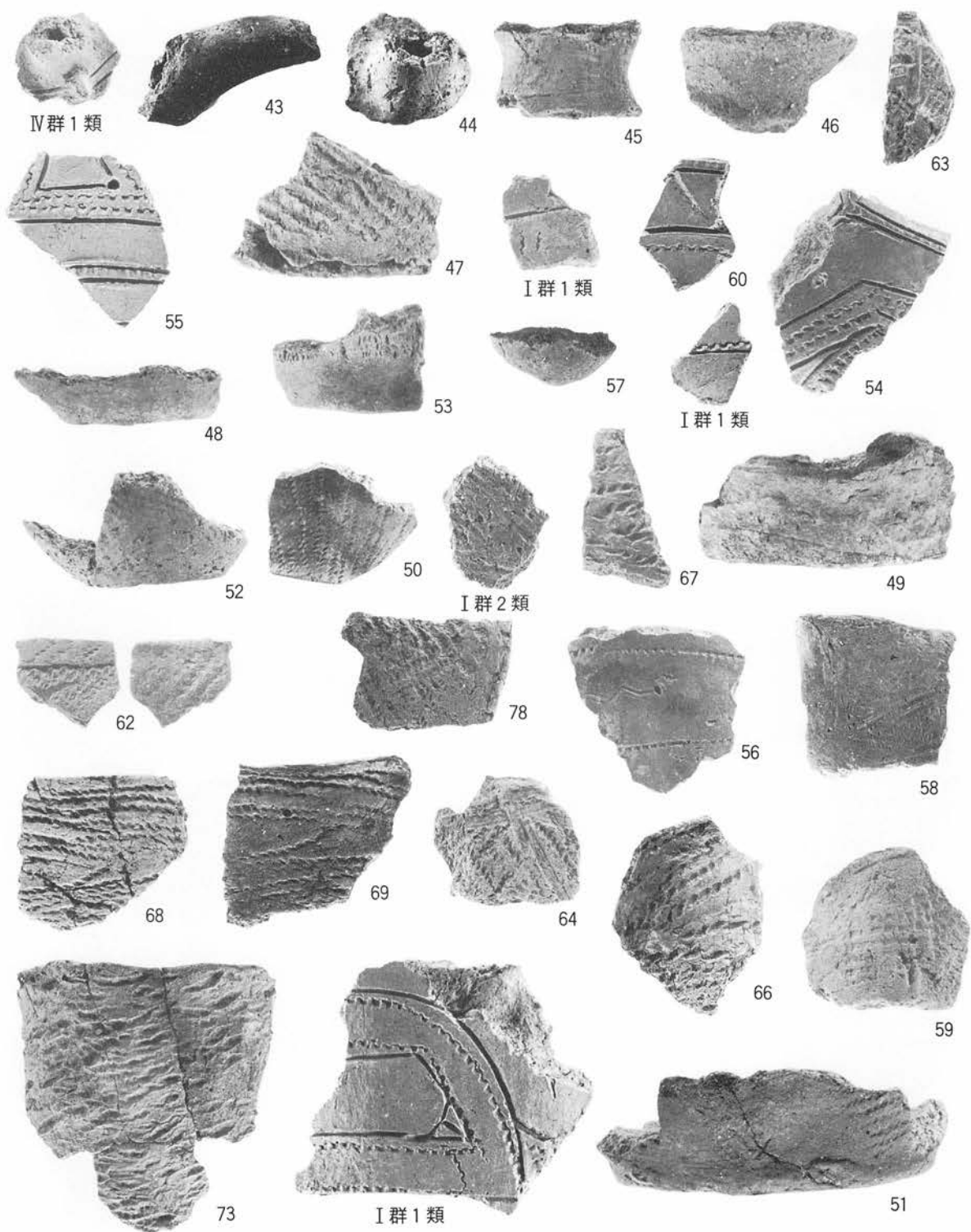


42



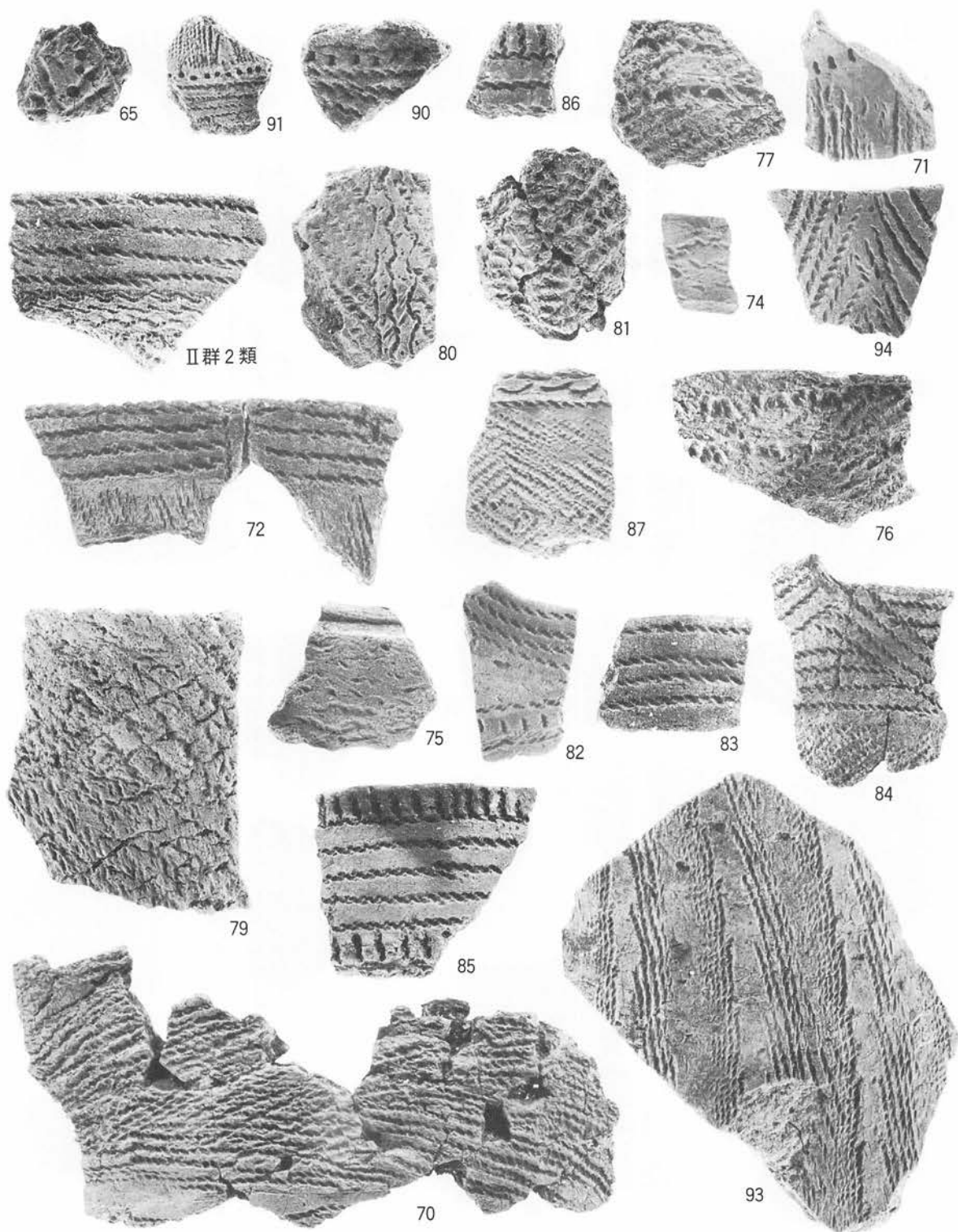
41

図版44 遺構以外の遺物(土器1)

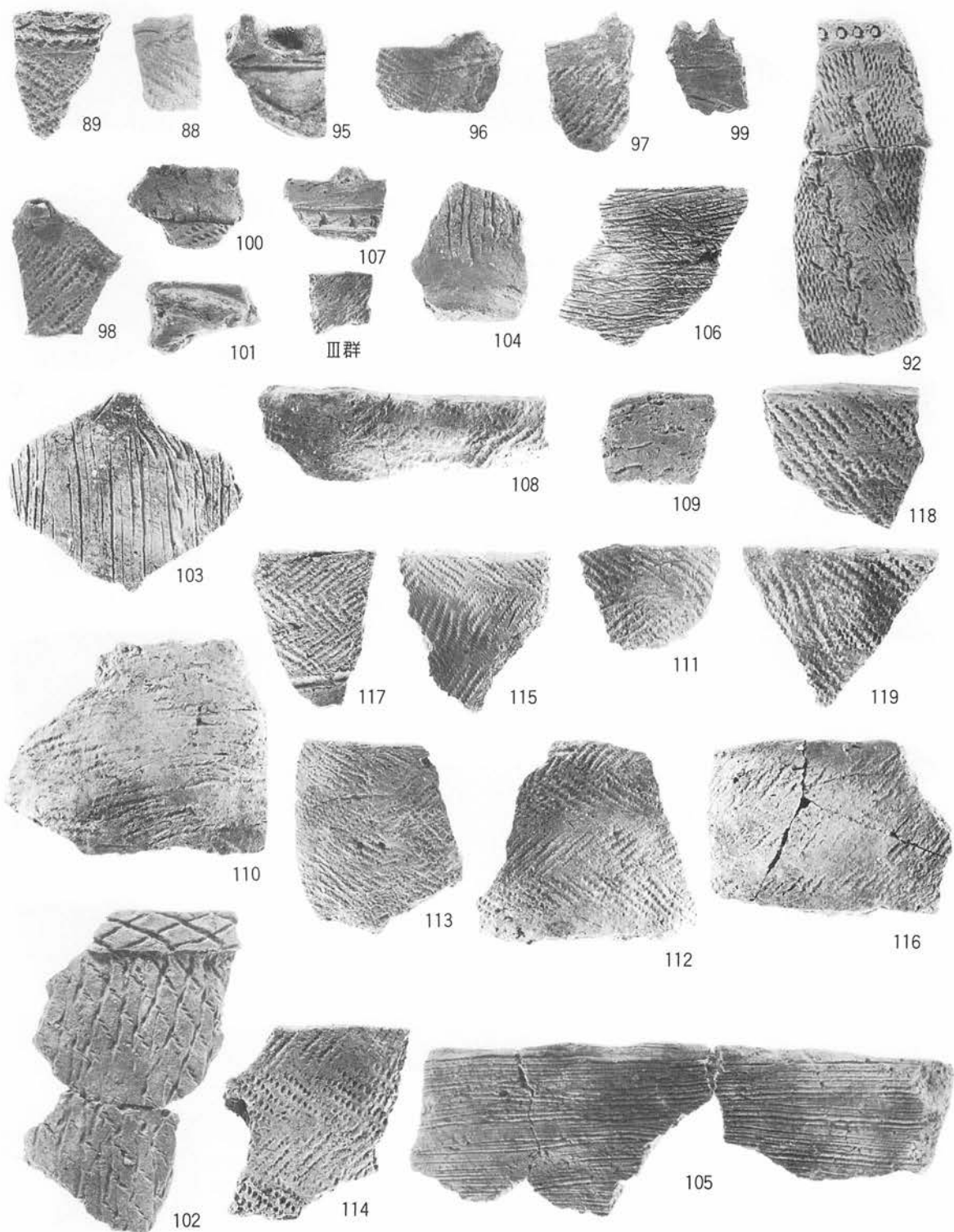


図版45 遺構以外の遺物(土器2)

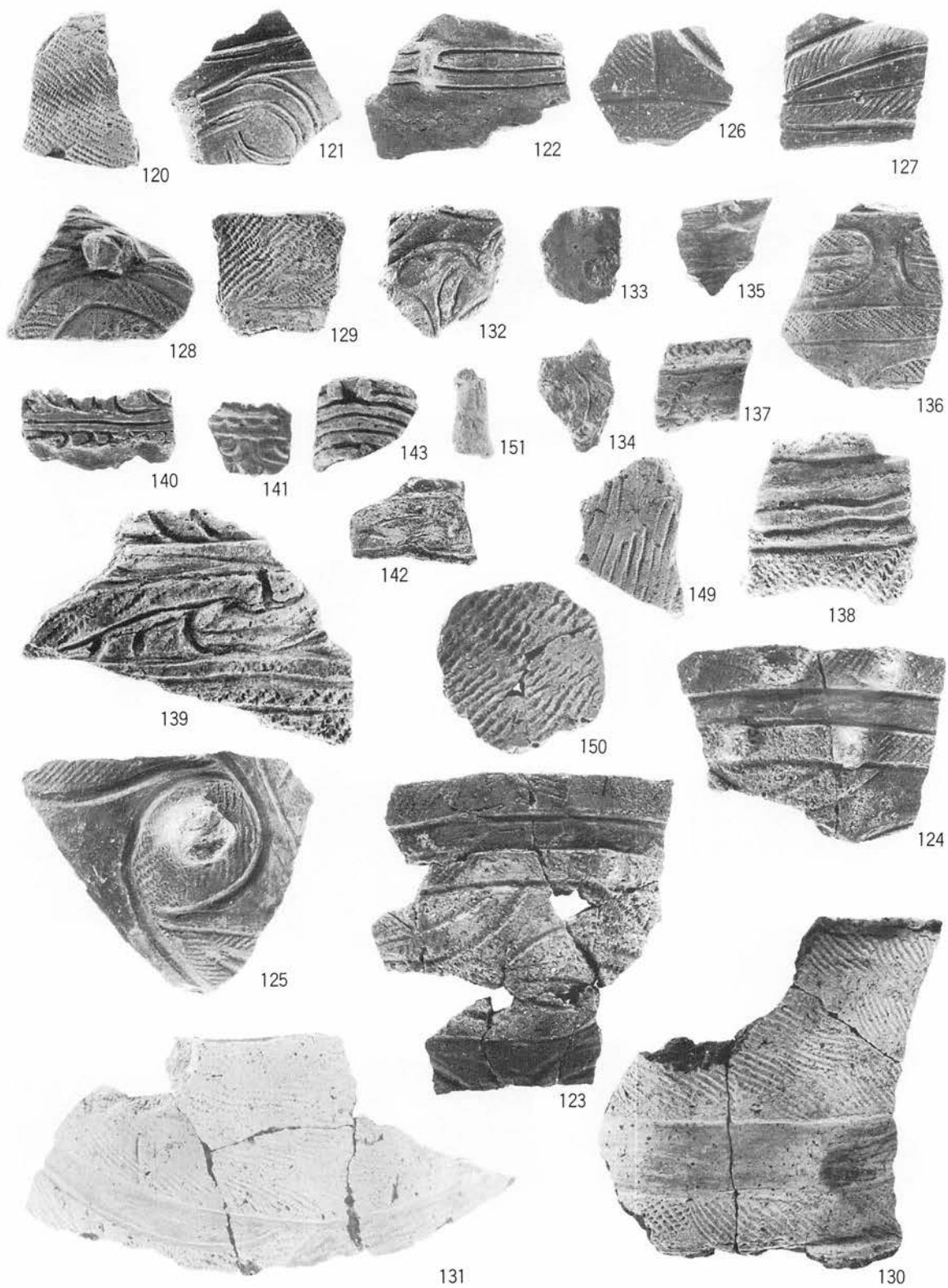




図版46 遺構以外の遺物(土器3)

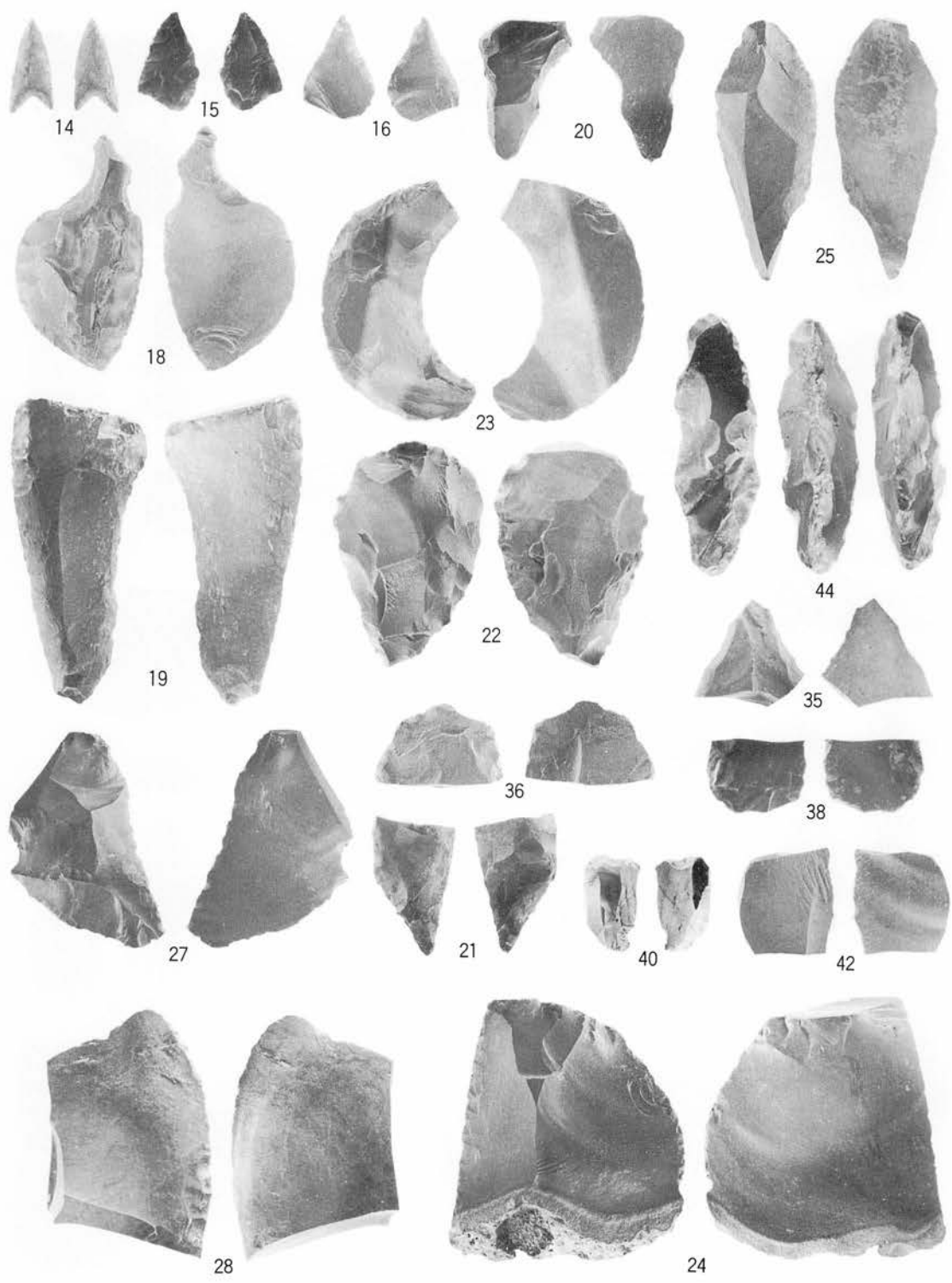


図版47 遺構以外の遺物(土器4)

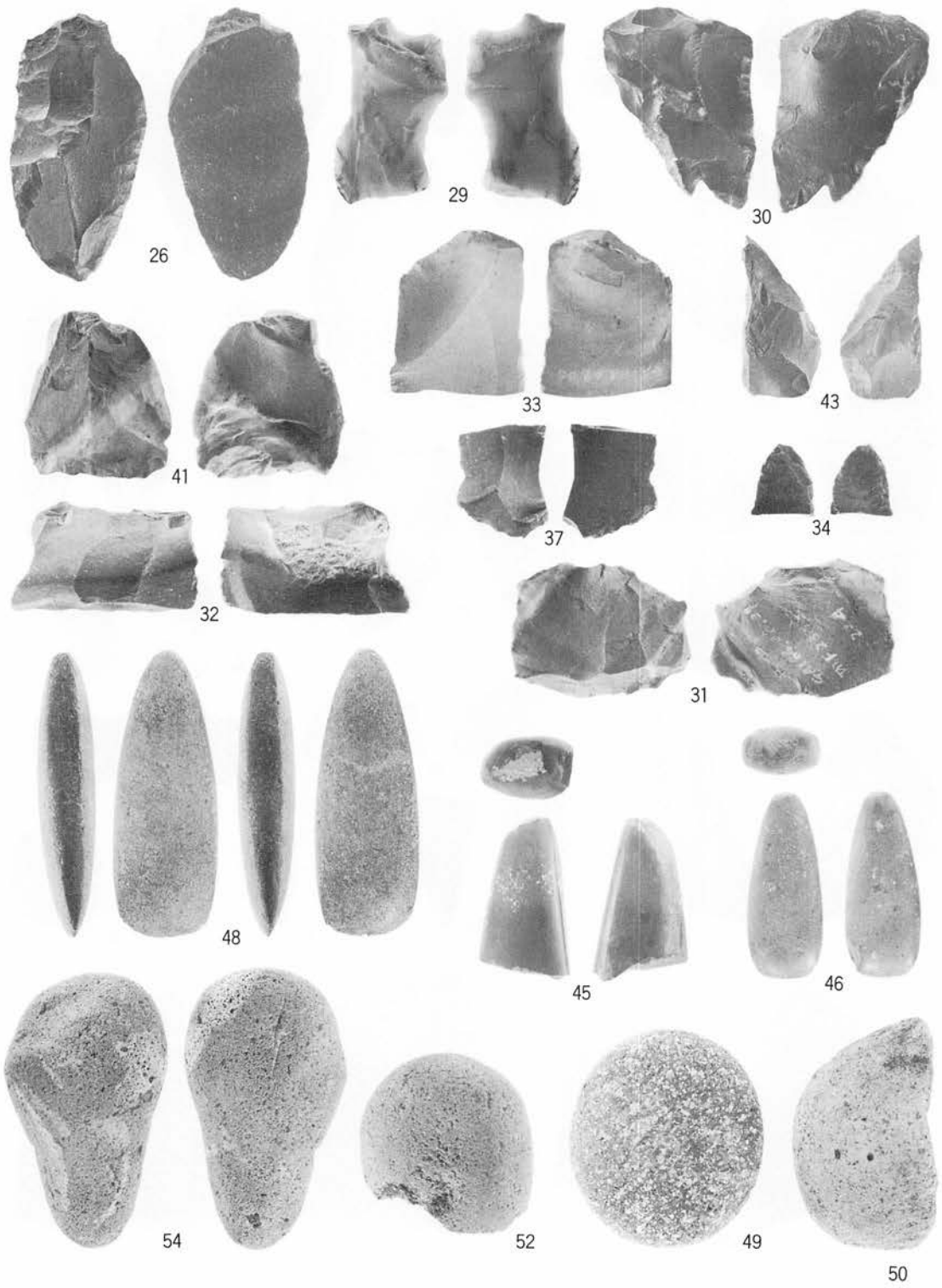


図版48 遺構以外の遺物(土器 5)





図版49 遺構以外の遺物(石器 1)

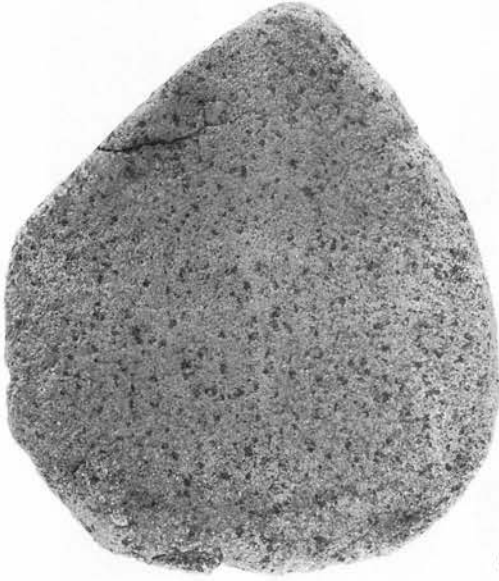


図版50 遺構以外の遺物(石器2)

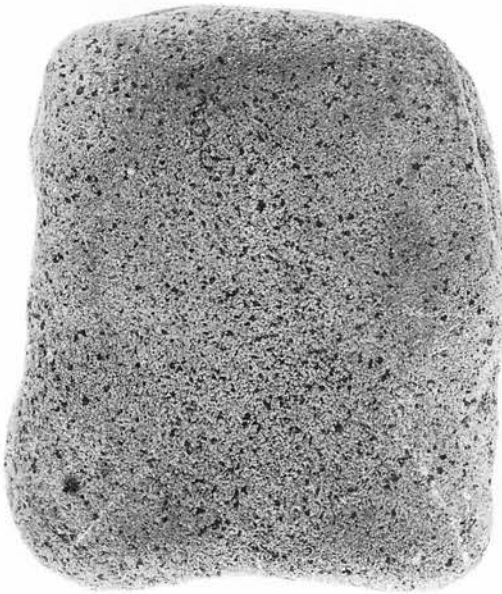
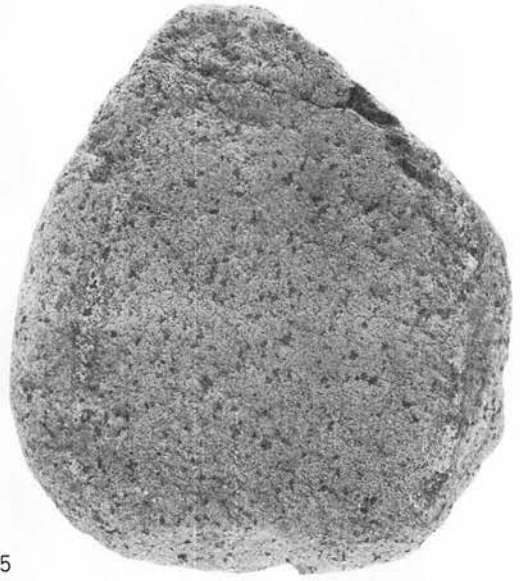


図版51 遺構以外の遺物(石器3)





95



96



97

図版52 遺構以外の遺物(石器4)



完掘



カマド



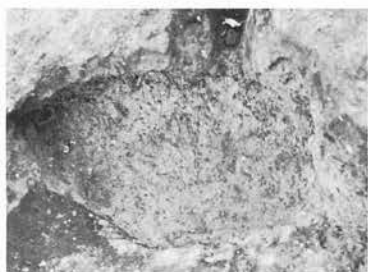
カマド断面



断面



炭化材出土状況



土壙 2.3



土壙 5



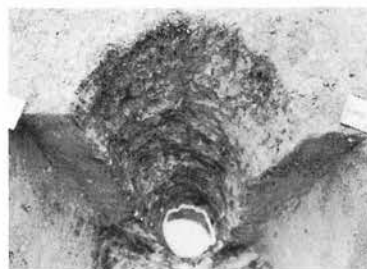
柱穴断面



土壙 4 断面



土壙 5 断面



柱穴完掘



完掘



検出状況



カマド



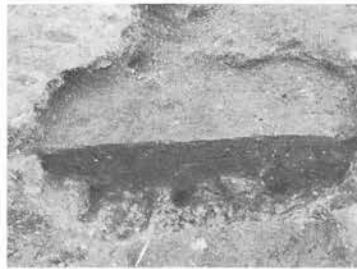
断面



土壌 1.2



土壌 3



土壌 4 断面



土壌 2 断面



土壌 3 断面



土壌 5 断面



土器出土状況





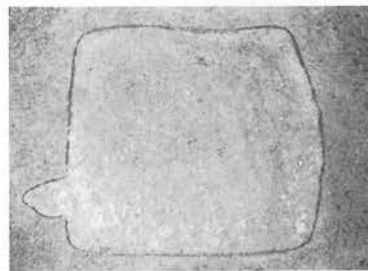
完掘



カマド



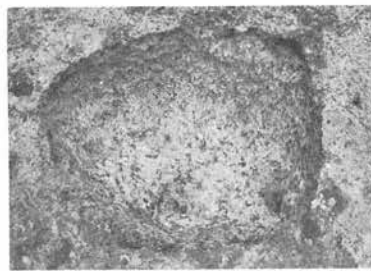
断面



検出状況



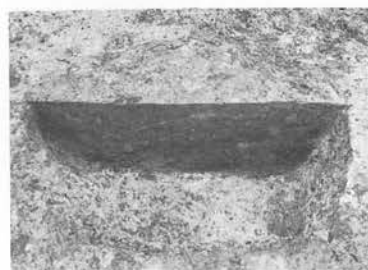
土壇 3



土壇 1



土器出土状況



土壇 3 断面



土壇 2 断面



土器出土状況



土器出土狀況



土器出土狀況



土器出土狀況



炭化材出土狀況全景



炭化材出土狀況



炭化材出土狀況



炭化材出土狀況



炭化材出土狀況



炭化材出土狀況



炭化材出土狀況

図版56 IV G 7 竪穴住居跡(炭化材)



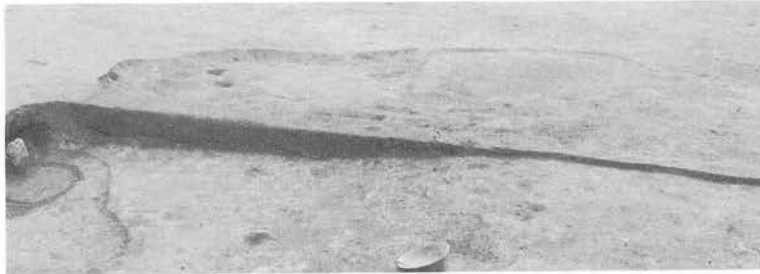
完掘



カマド



カマド断面



断面



土壙 3 断面



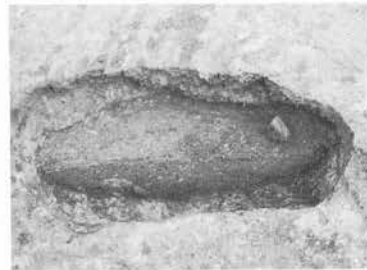
土壙 1



土壙 2



土器出土状況



土壙 1 断面



土壙 2 断面



土器(支脚)出土状況

図版57 IV J 2 竪穴住居跡





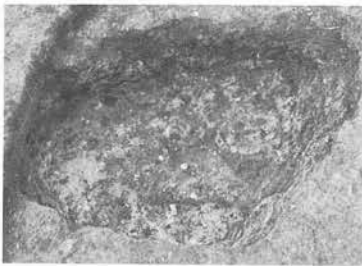
完掘



検出状況



カマド



土壇 1



土壇 4



カマド断面



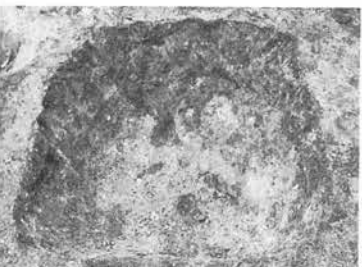
土壇 1 断面



土壇 4 断面



土器出土状況



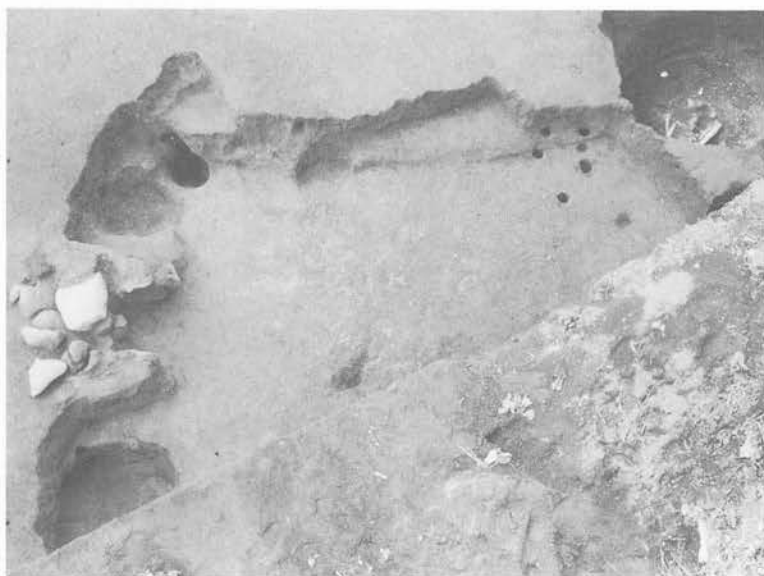
土壇 3



土壇 2



土器出土状況



完掘



カマド



カマド断面



断面



カマド



土壇 1



土壇 2



第2カマド検出状況



土壇 1 断面



炭化材出土状況



土器出土状況

図版59 V H 1 竪穴住居跡



完掘



検出状況



断面



カマド



土壇



カマド断面



カマド断面



土壇断面



炭化材出土状況



土器出土状況





全景



板材



板材



炭化材



板材



板材断面



板材と根太



板材と根太断面



板材断面

図版61 VI F 13 竪穴住居跡(炭化材)



完掘



検出状況



カマド断面



断面



土壙 4 断面



土壙 1



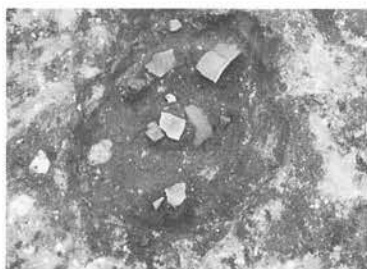
土壙 2



土壙 2 断面



柱穴断面



土器出土状況(土壙)



くるみ出土状況



炭化材全景



炭化材出土状況



炭化材・柱



根太



炭化材



板材・根太



根太



板材



板材・根太断面

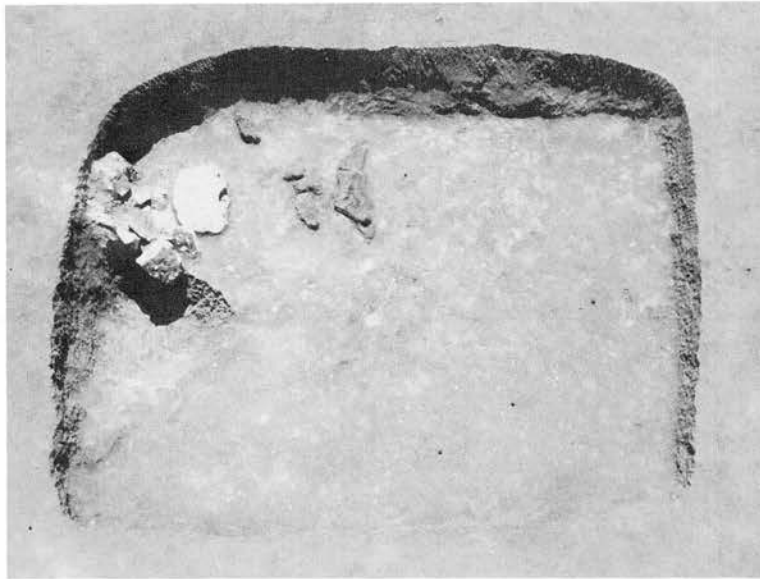


板材断面

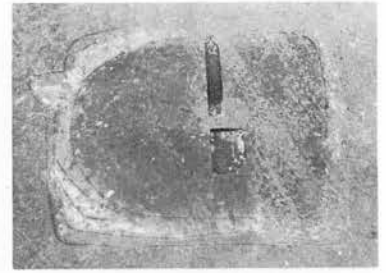


板材断面





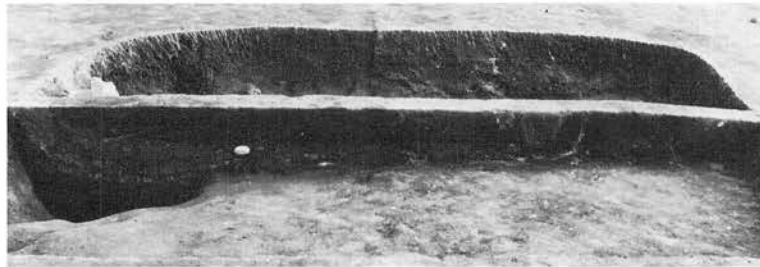
完掘



検出状況



カマド



断面



カマド



投込焼土



土壇断面



炭化材出土状況



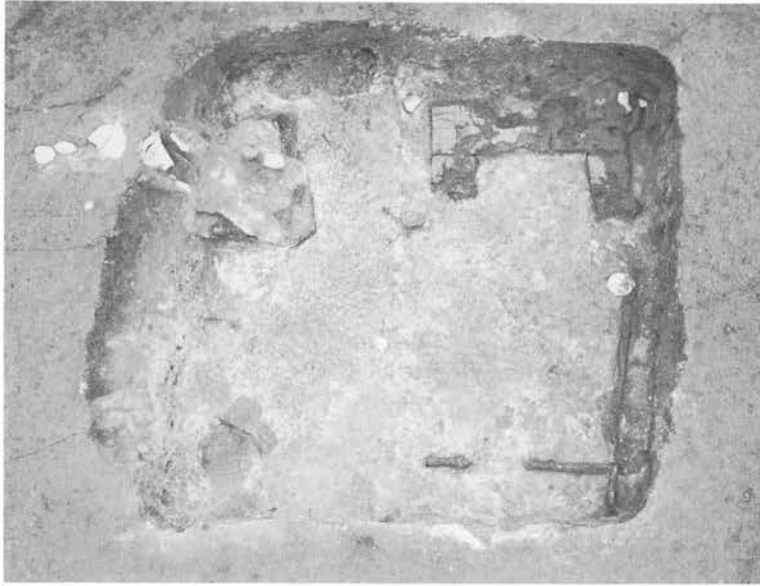
投込焼土断面



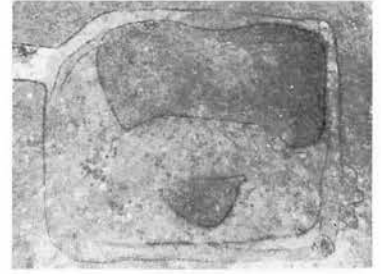
土器出土状況



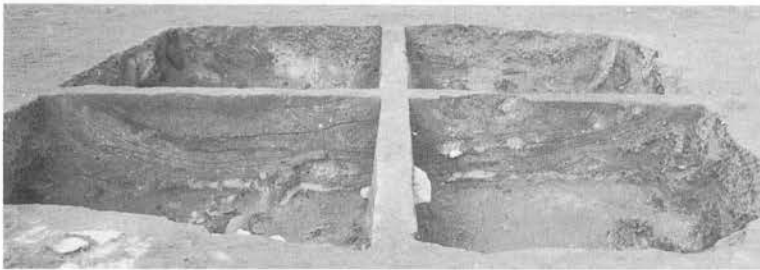
土器出土状況



完掘



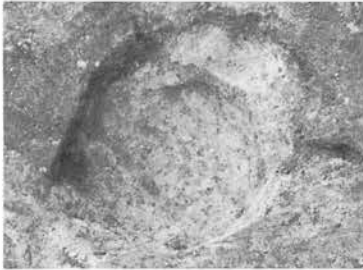
検出状況



断面



カマド



土壇



土器出土状況



カマド断面



土壇断面



土器出土状況



木製品出土状況



全景



板材



板材



板材検出状況



板材



板材断面



板材と根太



板材と根太



炭化材断面

図版66 VII A 16 竪穴住居跡(炭化材1)





板材断面



根太



根太



周溝



根太



板材と根太断面



板材と根太断面



根太



丸太と根太



根太と支石

図版67 VII A 16 竪穴住居跡(炭化材 2)



完掘



検出状況



カマド



断面



土壇



カマド検出状況



カマド断面



土壇断面



柱穴断面



柱穴断面



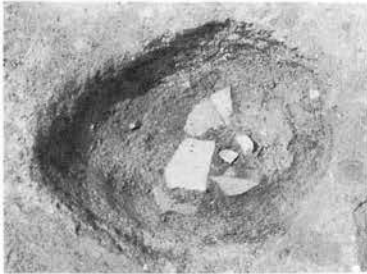
炭化材(柱)



炭化材



炭化材



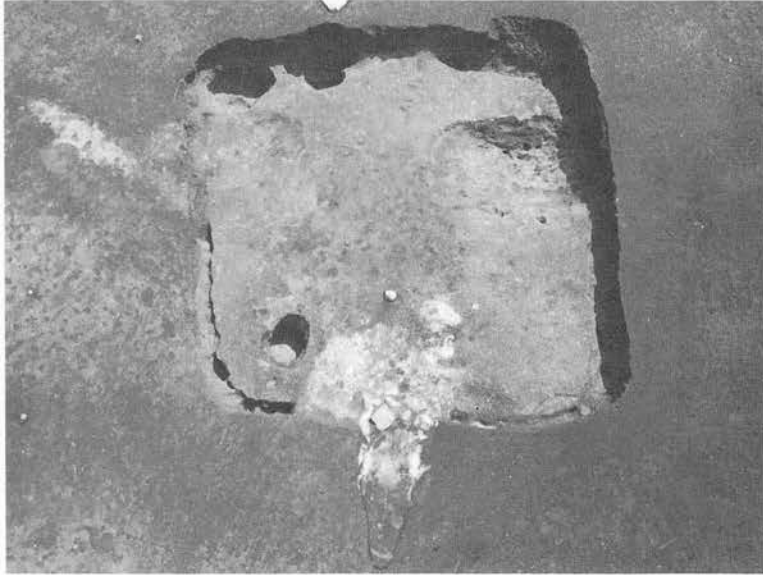
土器出土状況(土壇)



土器出土状況



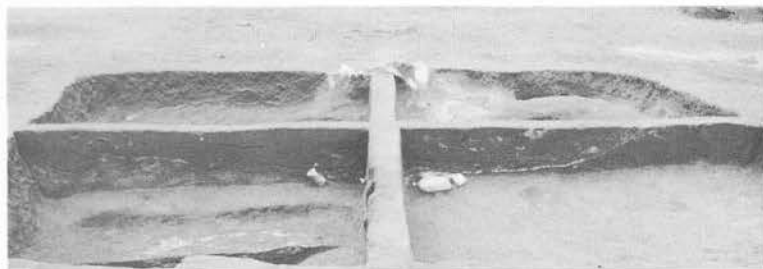
土器出土状況(支脚)



ⅦE16竪穴住居跡完掘



第1カマド



断面



第1カマド

図版69 ⅦB21・ⅦE16竪穴住居跡





第1カマド断面



第1カマド断面



投げ込み土断面



土壌2・3・4



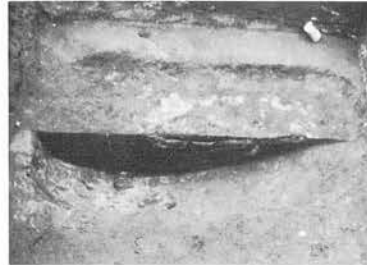
柱穴断面



第2カマド



土壌9・10



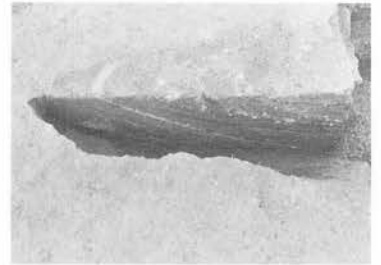
土壌1断面



炭化材出土状況



第2カマド煙道断面



第2カマド煙道断面



土壌5・6・7



土壌5・7断面



土器出土状況

図版70 VII E 16 竪穴住居跡



完掘



検出状況



カマド



断面



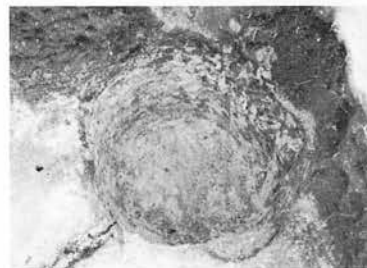
カマド断面



土壇 1



土壇 2



土壇 3



土壇 1 断面



土壇 2 断面



土壇 3 断面



土壙 4



土壙 5



土壙 6.7



土壙 4 断面



土壙 5



土壙 7 断面



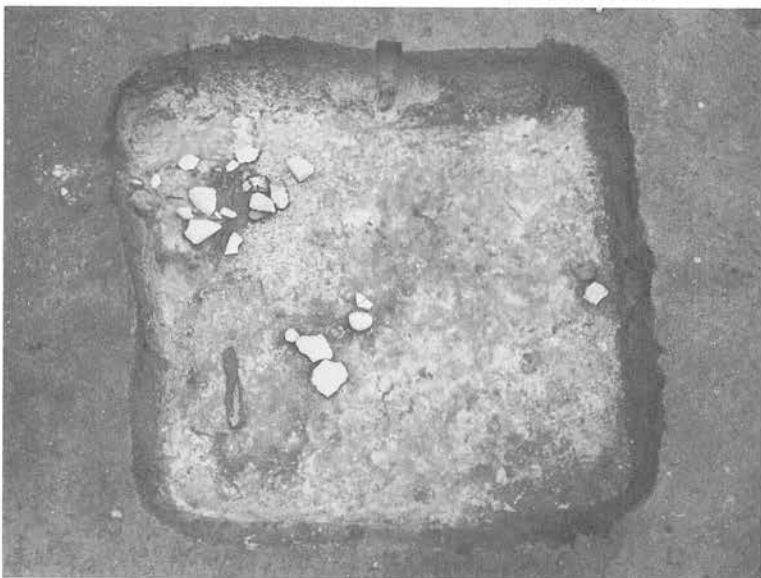
炭化材出土状況



炭化材出土状況



土器出土状況



VII F 23 豎穴住居跡完掘

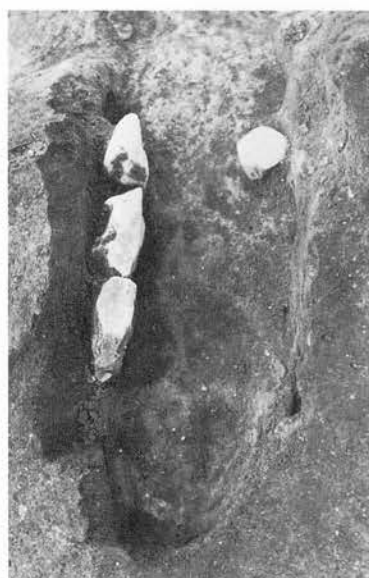


カマド





断面



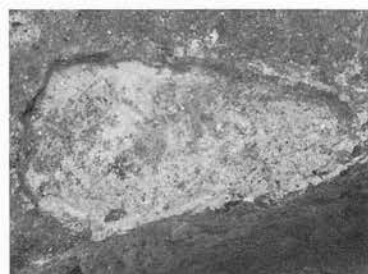
カマド



煙道断面



カマド断面



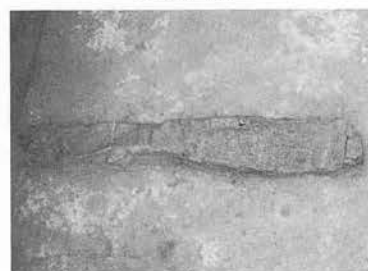
土壙 1.2



土壙 4



カマド



炭化材出土状況



土器・鉄滓・炭化材出土状況



鉄滓出土状況



炭化材出土状況



土器・鉄滓出土状況



土器出土状況



完掘



カマド



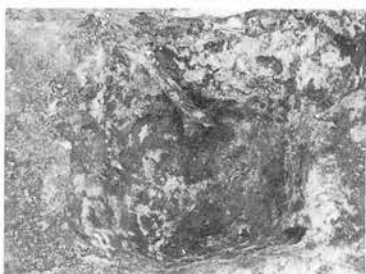
カマド断面



煙道断面



支脚



土壙 1



土壙 2



炭化材出土状況



土壙 1 断面

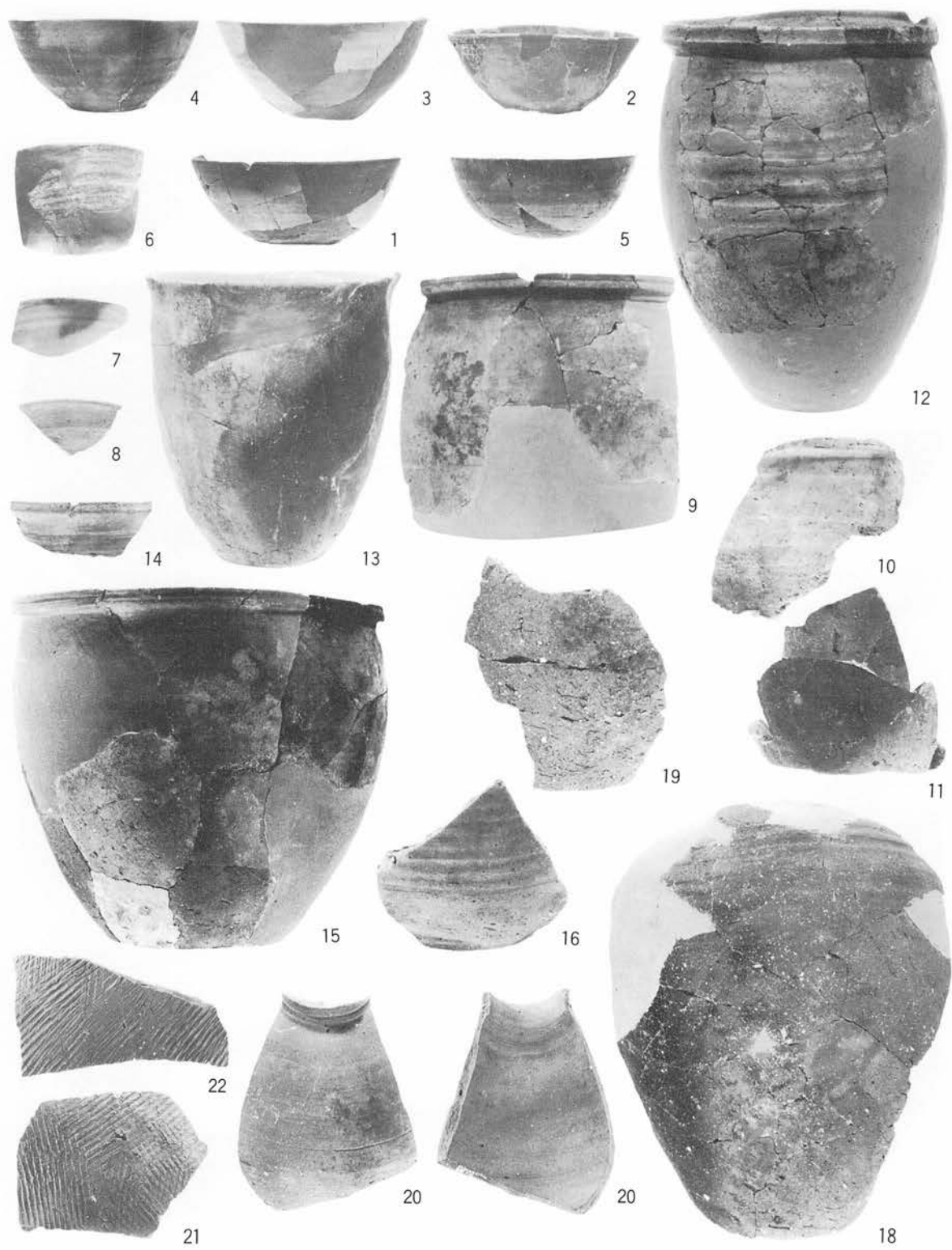


土壙 2 断面



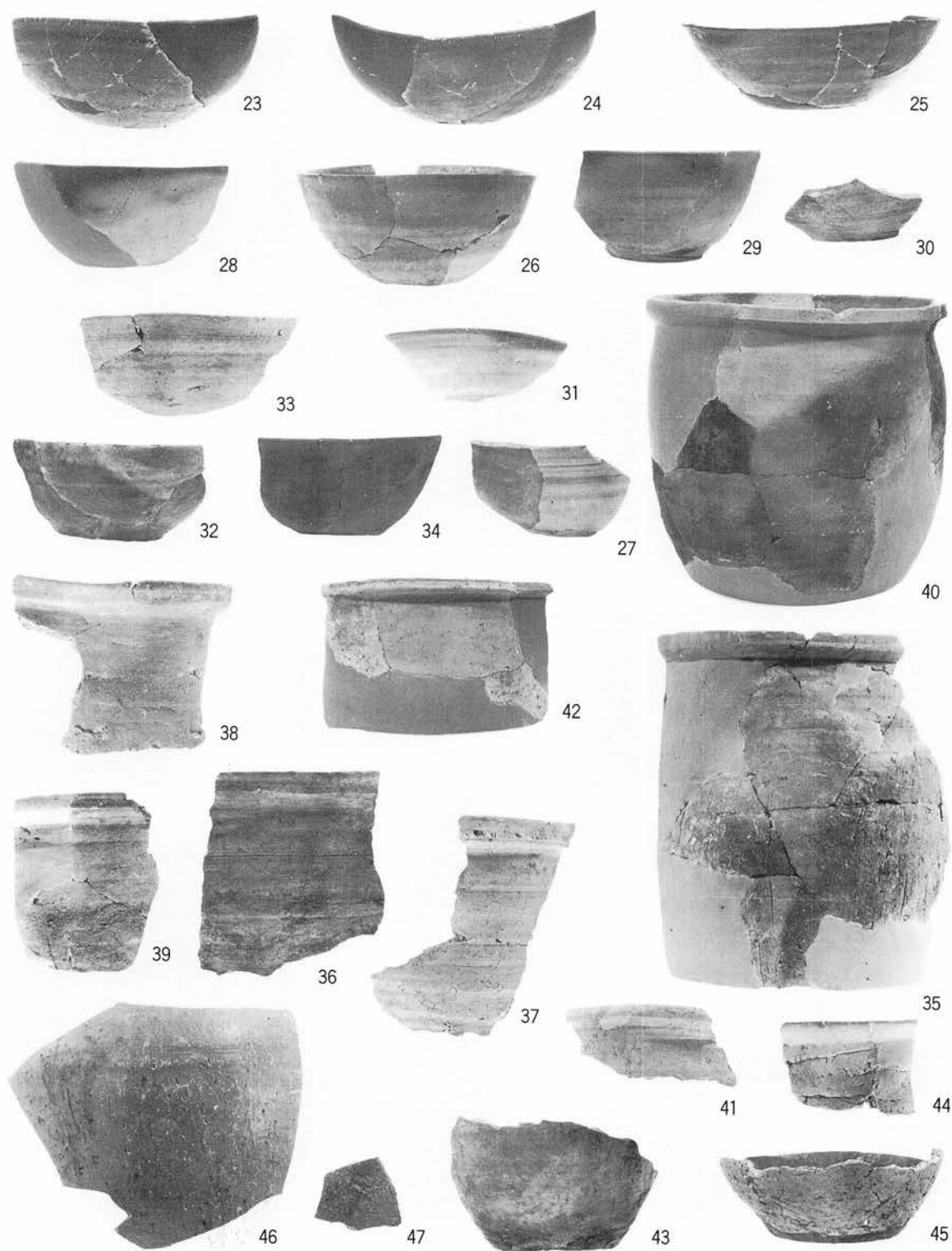
土器出土状況

図版74 VII G 8 竪穴住居跡

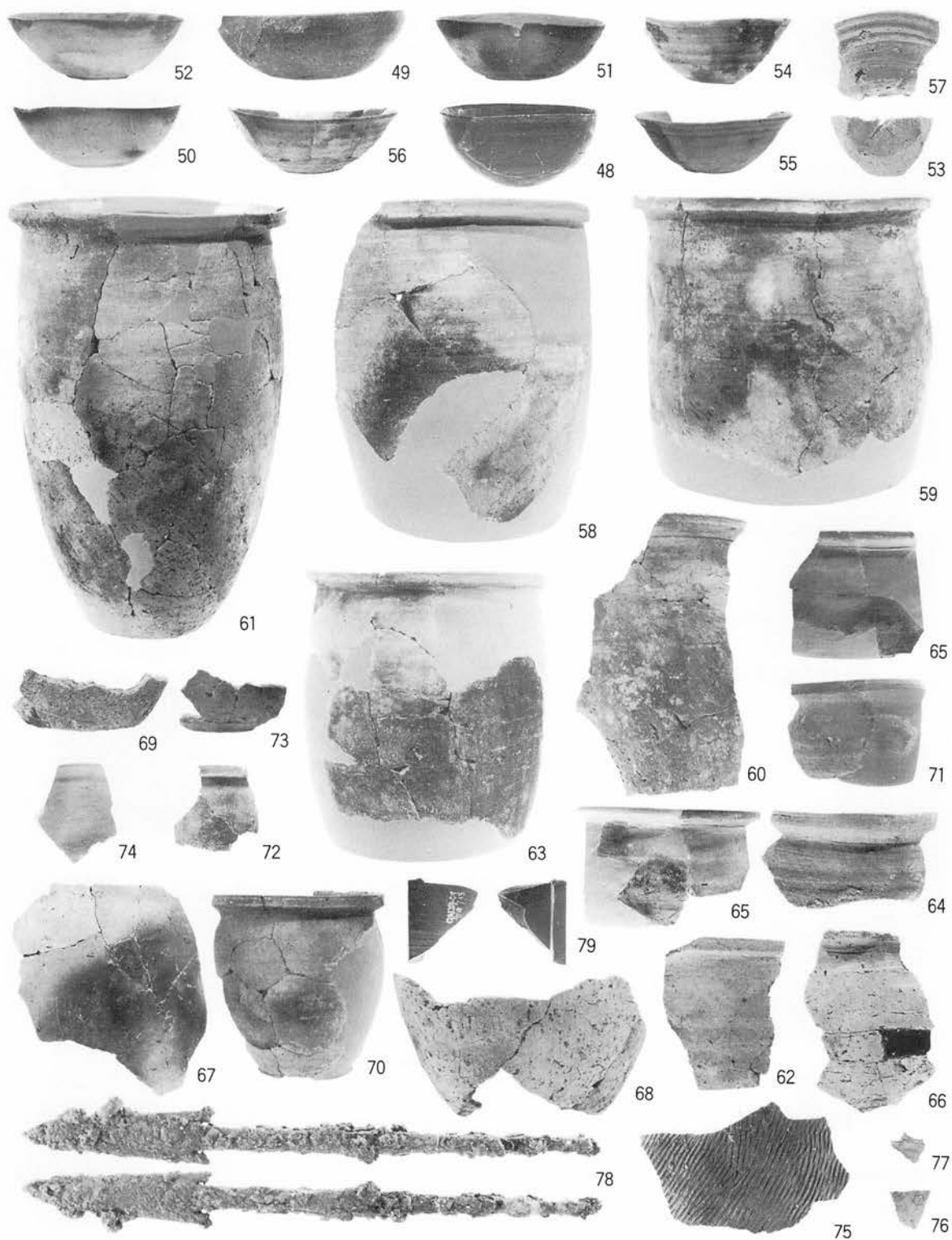


图版75 I C 4 竖穴住居跡出土遺物





图版76 IV G 4 竖穴住居跡出土遺物

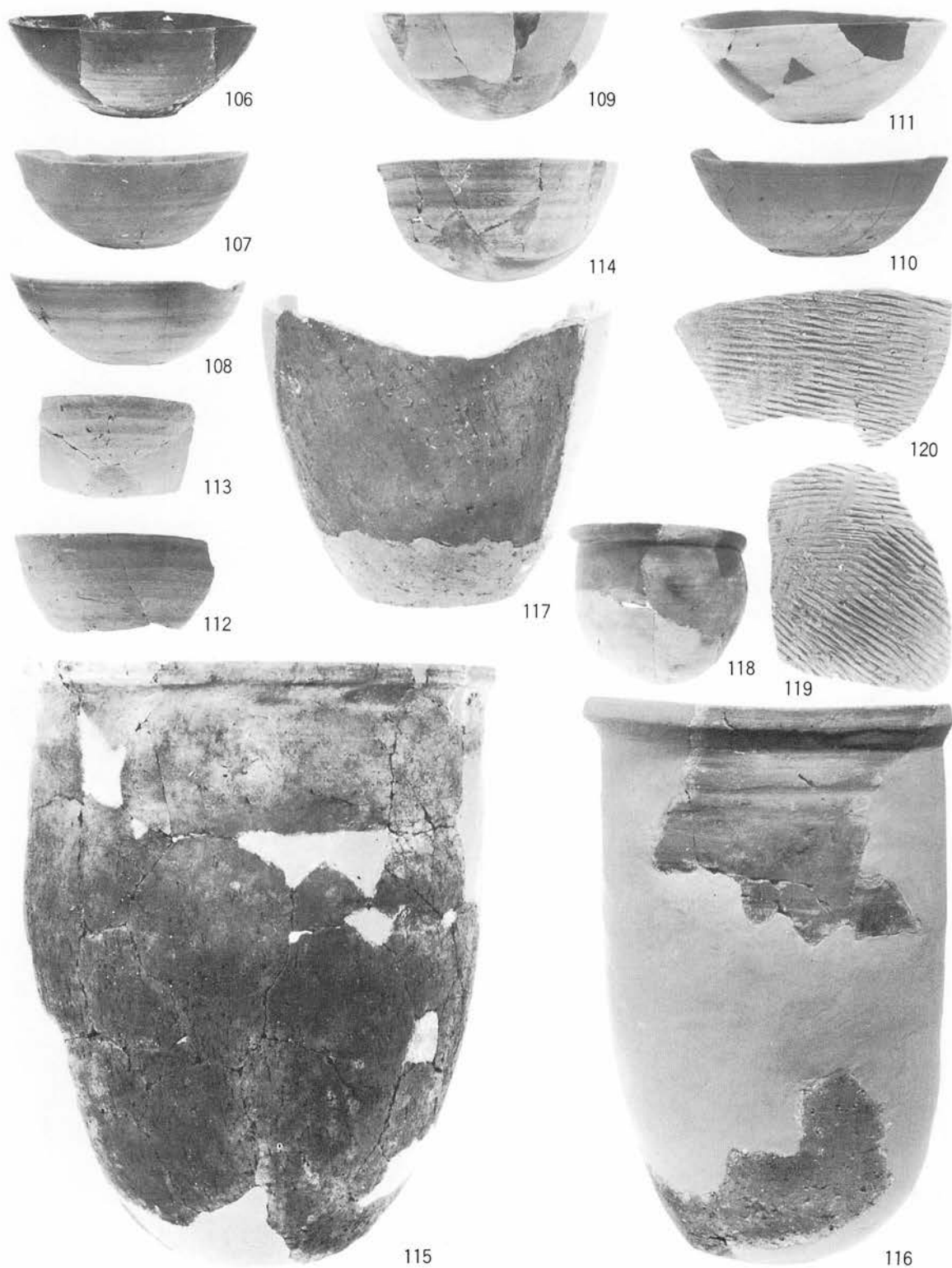


図版77 MG 7 竪穴住居跡出土遺物

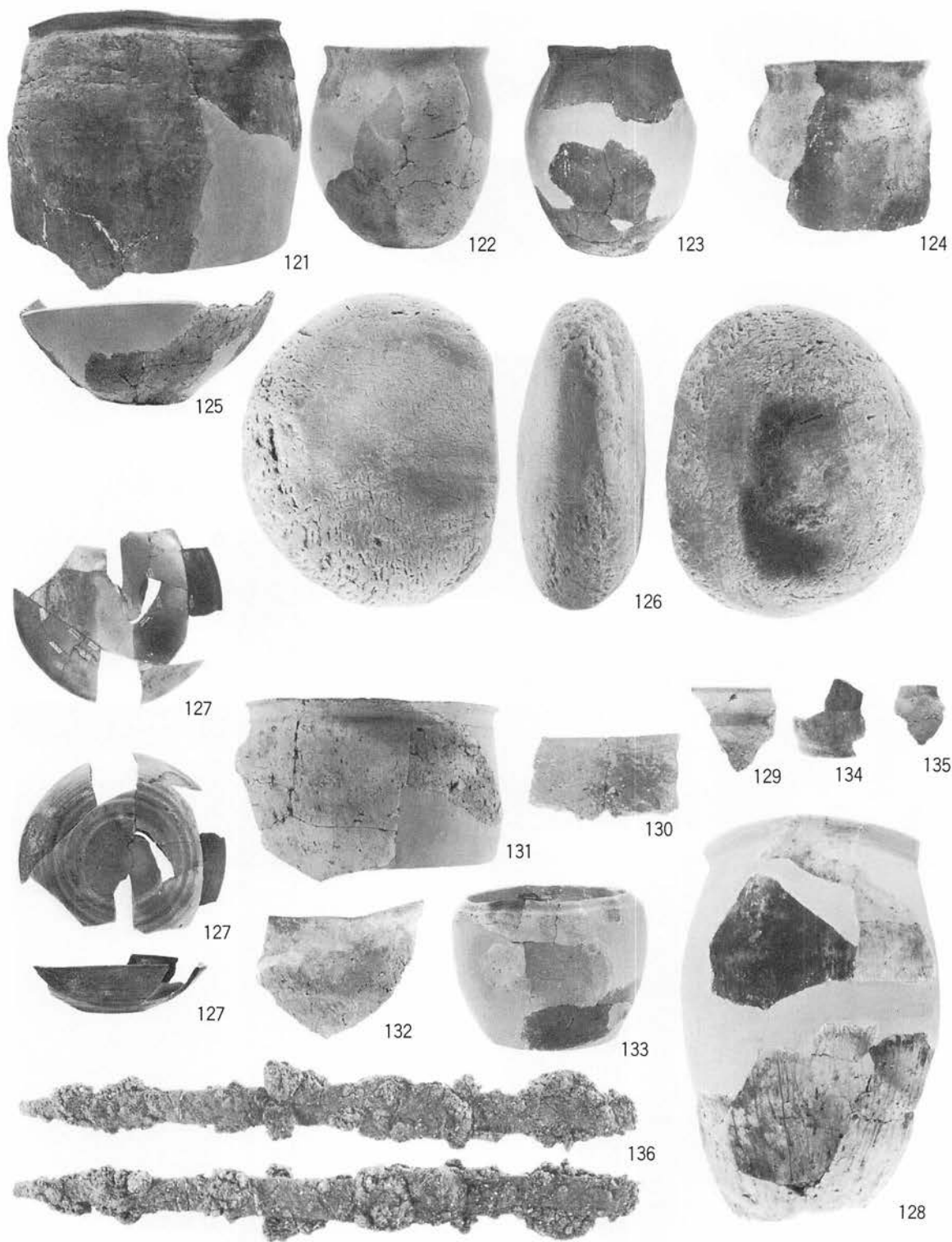


図版78 IV J 2・VA 4 竪穴住居跡出土遺物

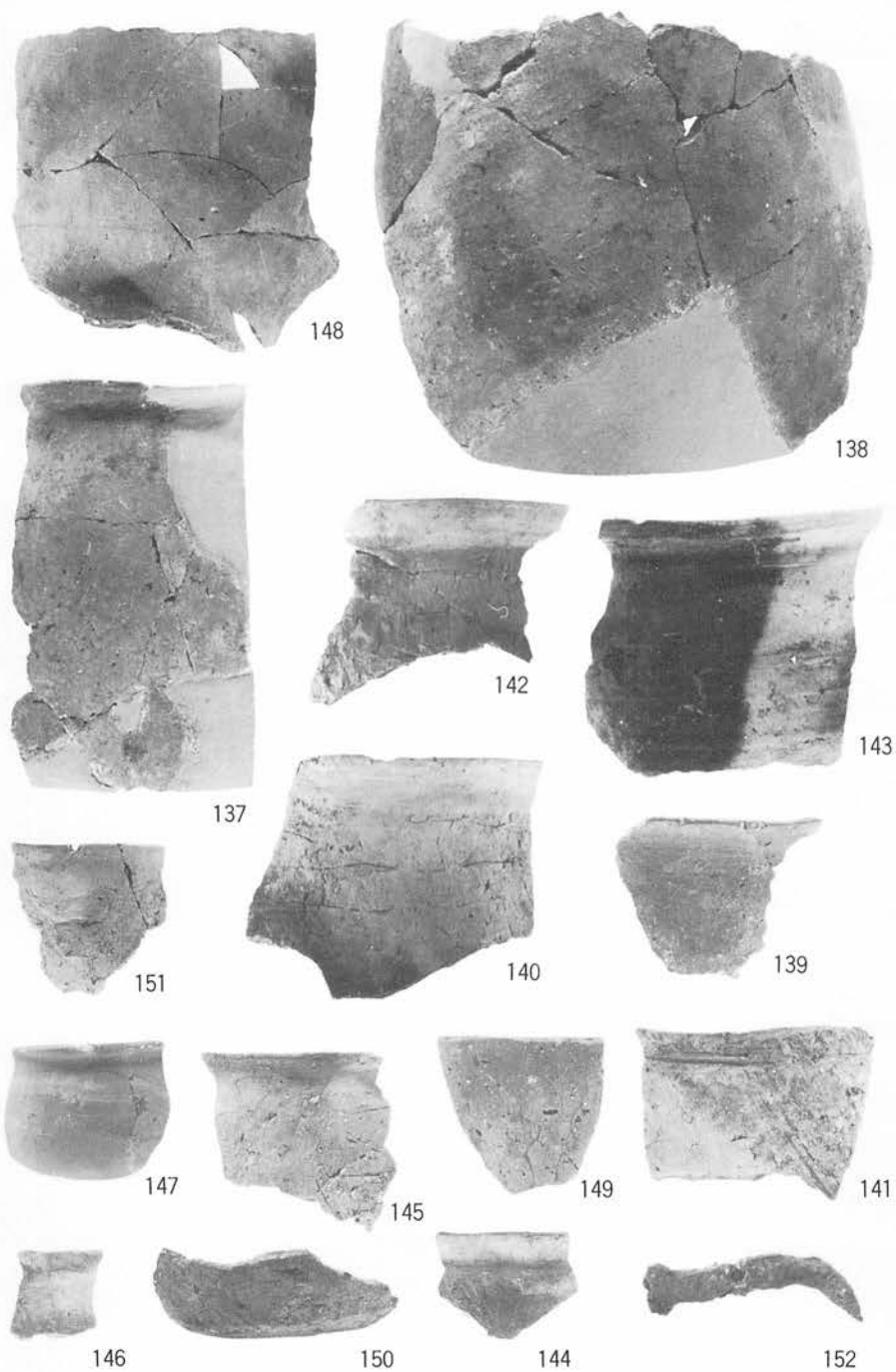




图版79 V H 1 竖穴住居跡出土遺物

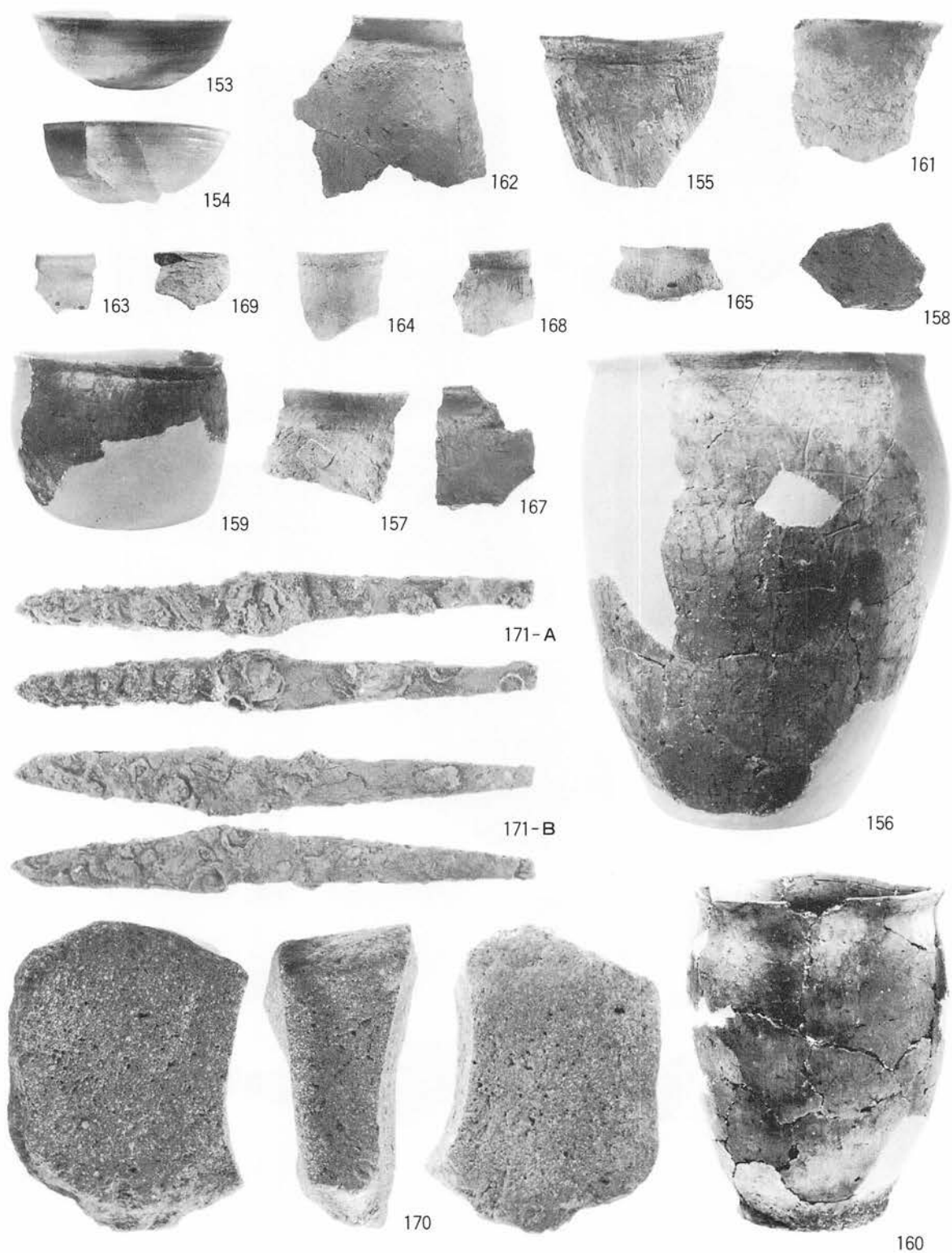


图版80 VI F 13 · VI E 19 竖穴住居跡出土遺物

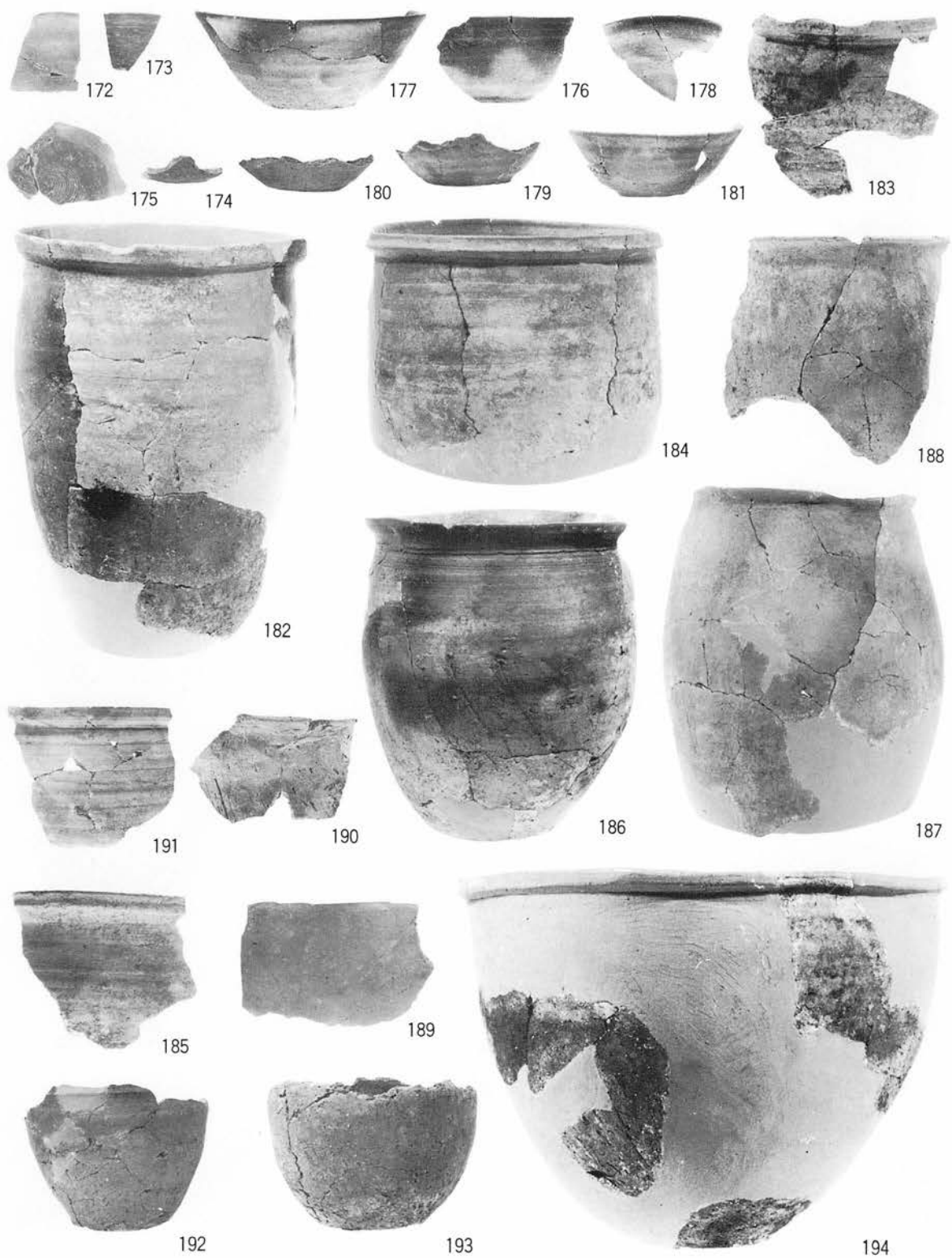


图版81 VI 16竖穴住居跡出土遺物

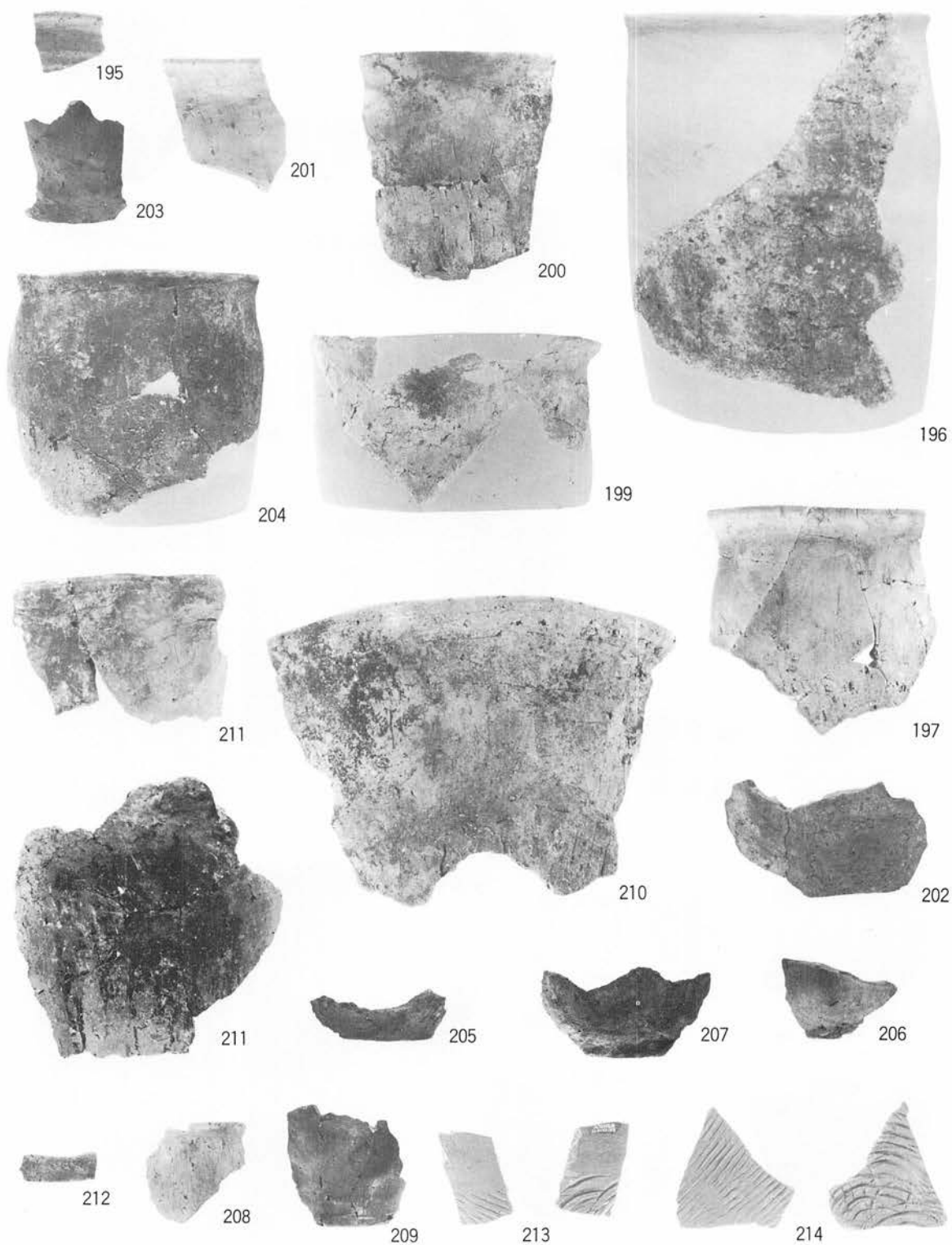




图版82 VII A 16竖穴住居跡出土遺物



图版83 VII B21竖穴住居跡出土遺物



图版84 VII E 16 竖穴住居跡出土遺物





215



216



217



220



222



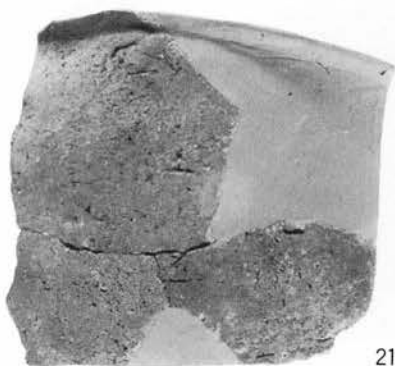
225



221



219



218



224



223

图版85 VI F 18竖穴住居跡出土遺物



图版86 VII F 23竖穴住居跡出土遺物



247



248



249



252



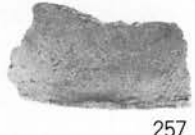
253



250



251



257



258



256



254



255

图版87 VII G 8 竖穴住居跡出土遺物





I H 7 烧土遺構断面



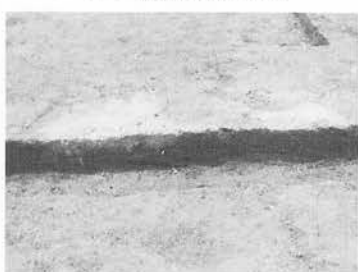
I J 7 烧土遺構断面



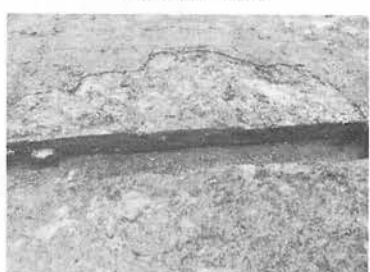
II A 9 烧土遺構



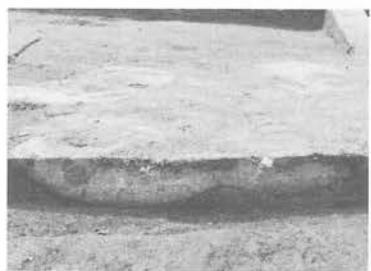
VI H 6-1 ~ 3 烧土遺構



VI H 6-3 烧土遺構断面



II A 9 烧土遺構断面



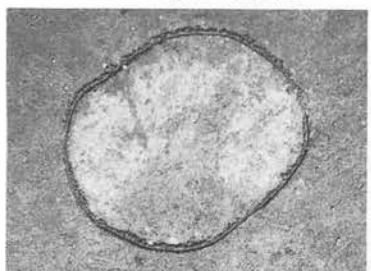
VI H 6-2 烧土遺構断面



VI H 6-4 烧土遺構断面



VII E 19 烧土遺構



VII B 20 烧土遺構



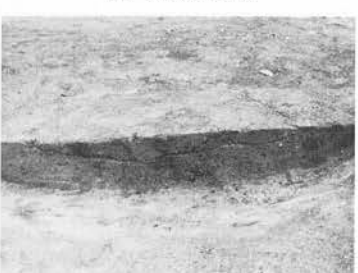
VII F 21 烧土遺構



VII H 24 烧土遺構



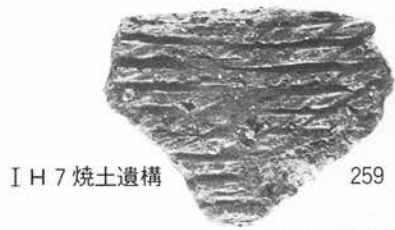
VII B 20 烧土遺構断面



VII F 21 烧土遺構断面



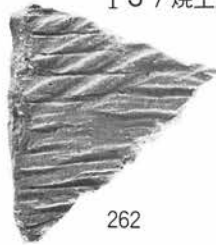
VII H 24 烧土遺構断面



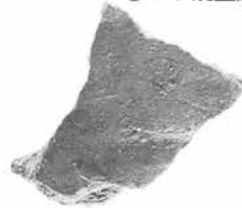
I J 7 烧土遺構



I J 7 烧土遺構

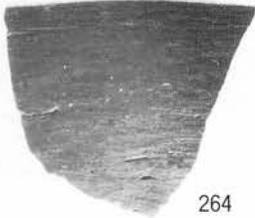


I J 7 烧土遺構



I J 7 烧土遺構

II A 9 烧土遺構



II A 9 烧土遺構



II A 9 烧土遺構



II A 9 烧土遺構



II A 9 烧土遺構

II A 9 烧土遺構



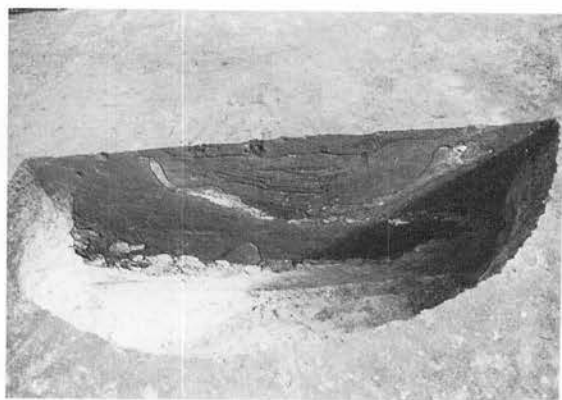
II A 9 烧土遺構



図版89 烧土遺構出土遺物



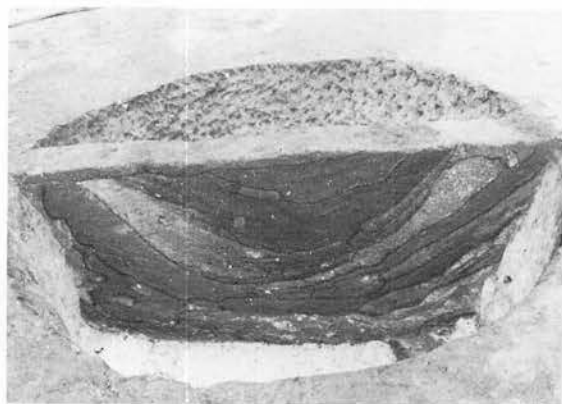
1 IV G13土壙(平面)



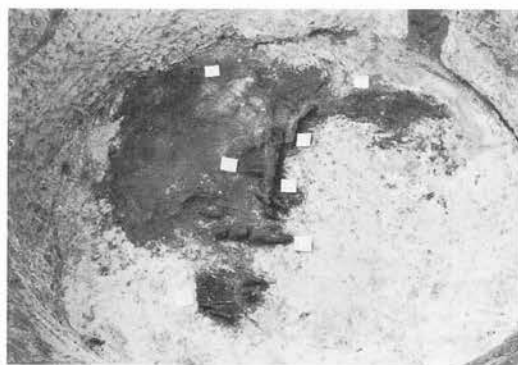
1 IV G13土壙(断面)



2 VII D24土壙(平面)



2 VII D24土壙(断面)

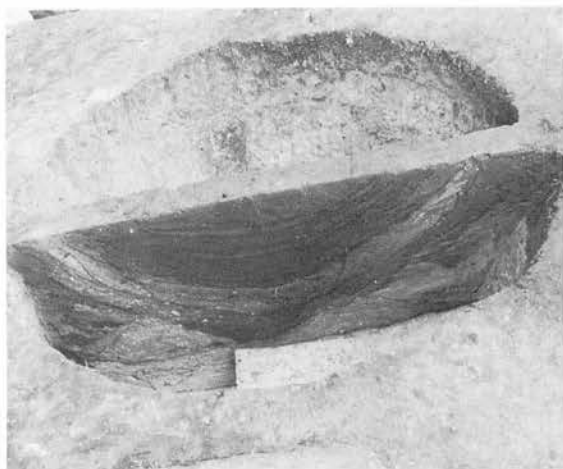


2 VII D24土壙(炭化材等  
出土状况)





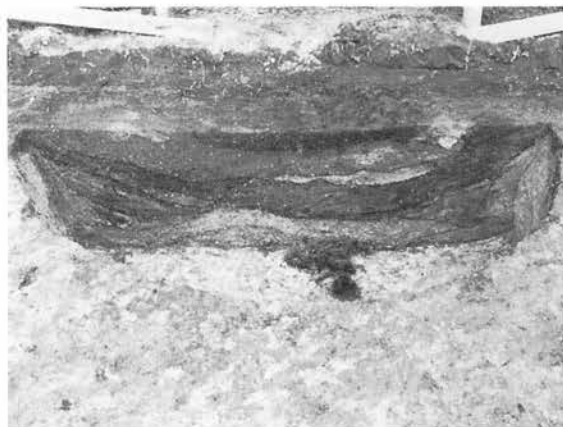
3 VII E 26土壙(平面)



3 VII E 26土壙(断面)



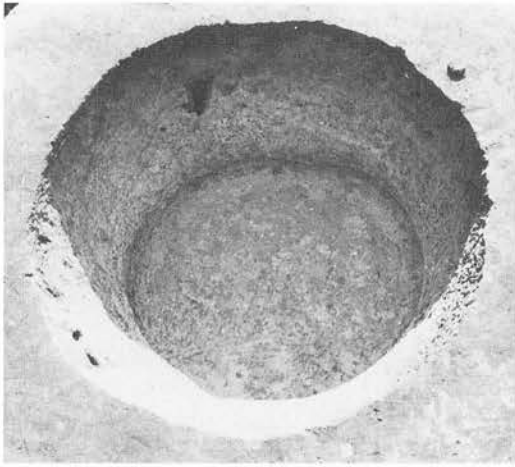
4 VII F 8土壙(平面)



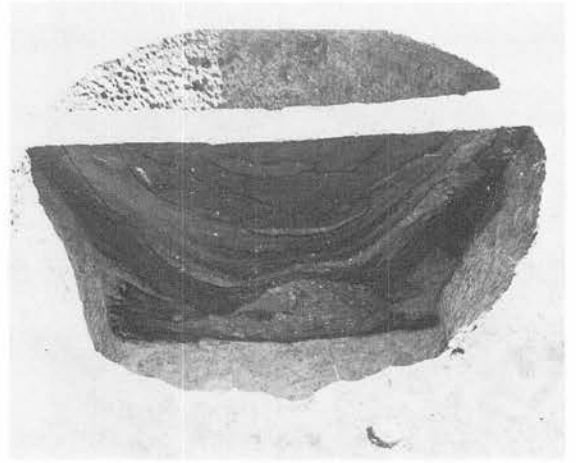
4 VII F 8土壙(断面)



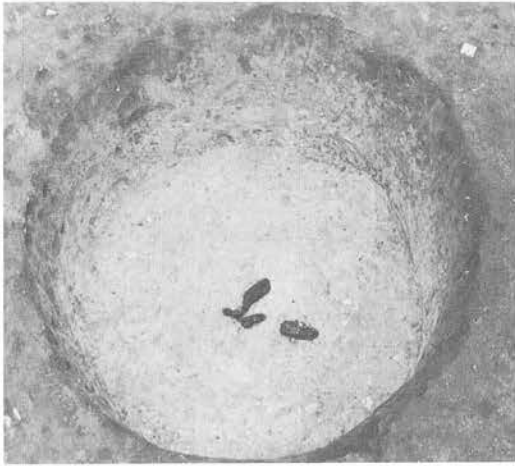
4 VII F 8土壙(炭化材  
等出土狀況)



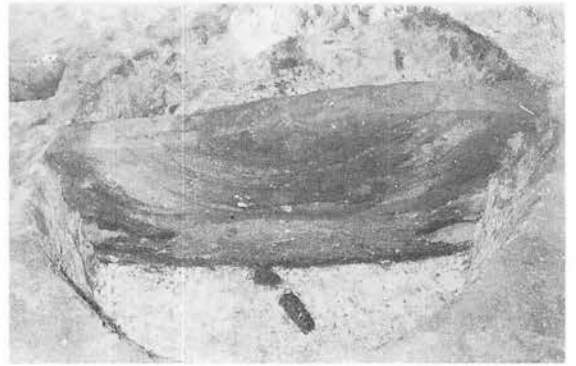
5 VII F 21土壤(平面)



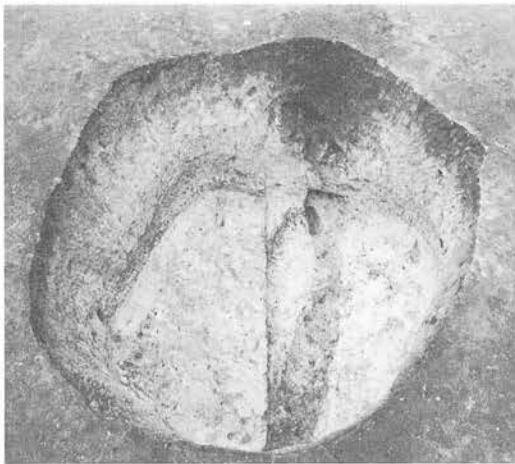
5 VII F 21土壤(断面)



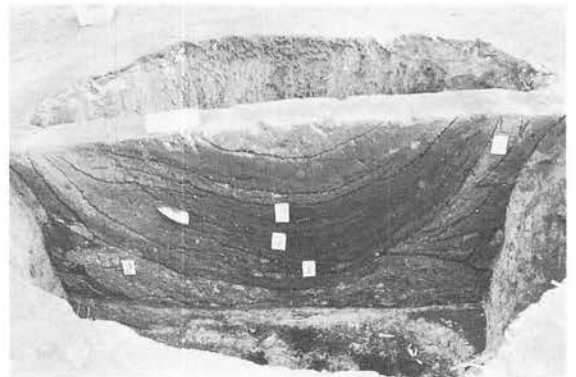
6 VII F 22土壤(平面)



6 VII F 22土壤(断面)



7 VII G 22土壤(平面)



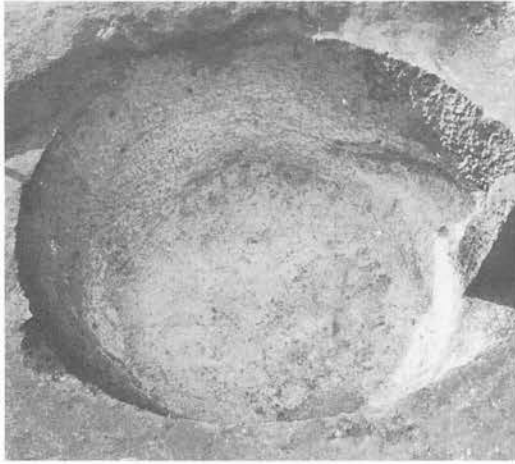
7 VII G 22土壤(断面)



8 VII G25土壙(平面)



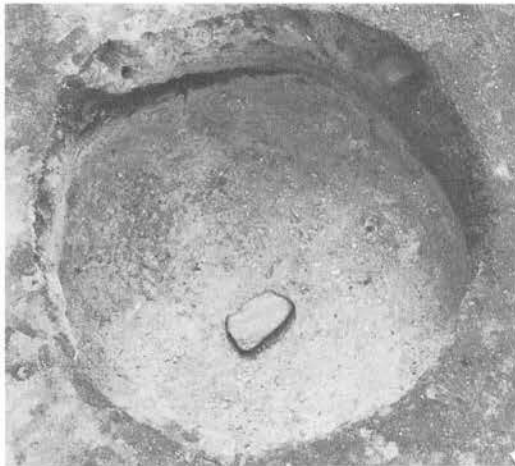
8 VII G25土壙(断面)



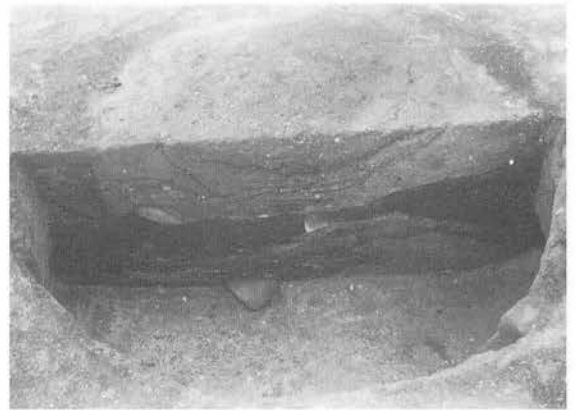
9 VII H18土壙(平面)



9 VII H18土壙(断面)

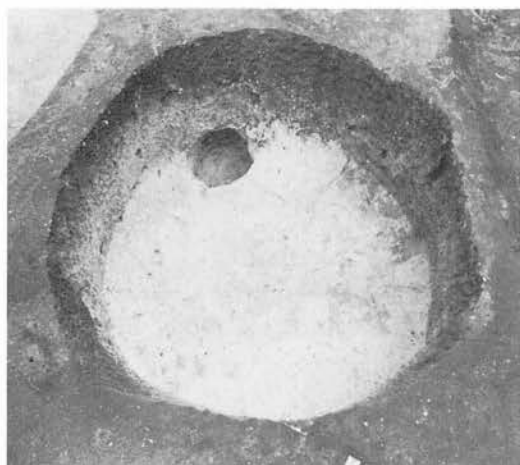


11 VII H24土壙(平面)

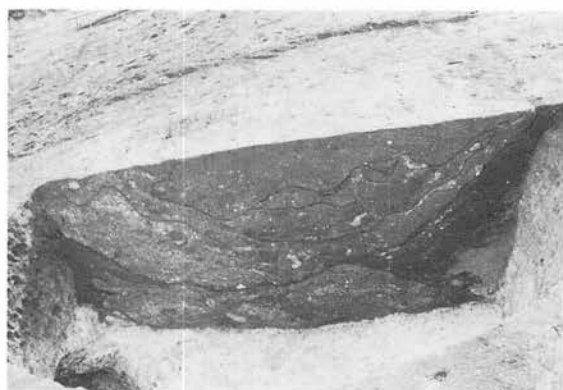


11 VII H24土壙(断面)





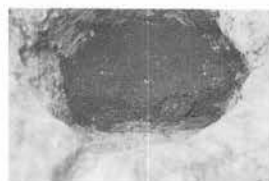
10 VII H19土壙(平面)



10 VII H19土壙(断面)



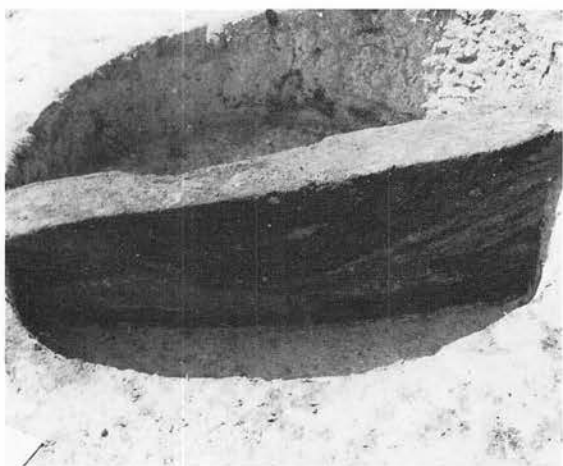
10 VII H19土壙—小土壙(断面)



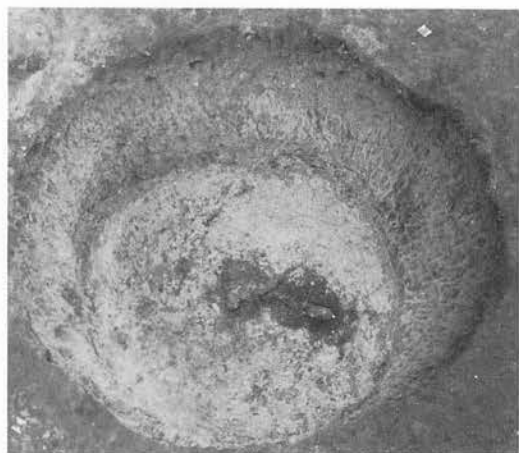
10 VII H19土壙—小土壙(断面)



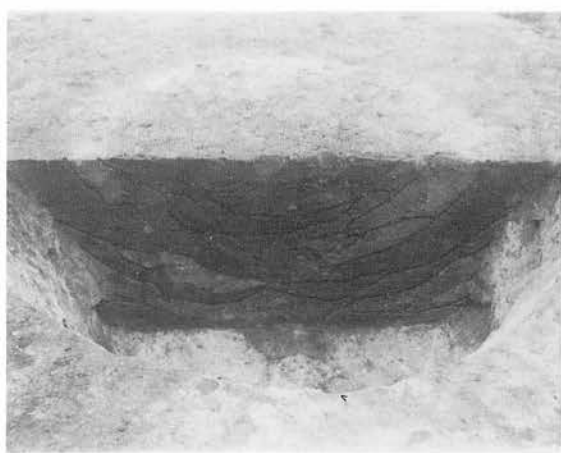
12 VII H26土壙(平面)



12 VII H26土壙(断面)



13 VII I 25土壙(平面)



13 VII I 25土壙(断面)



13 VII I 25土壙—烧土  
(断面)



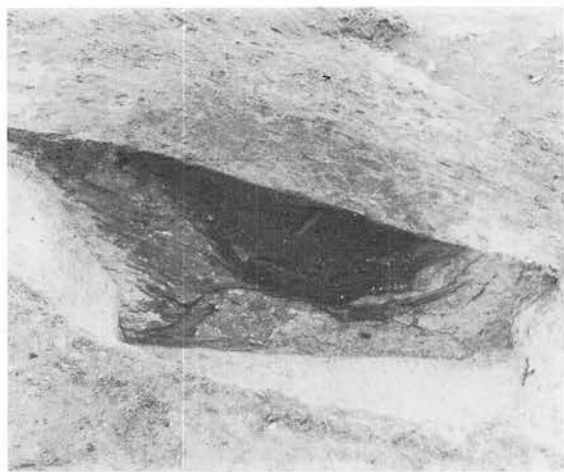
14 VII I 26土壙(平面)



14 VII I 26土壙(断面)



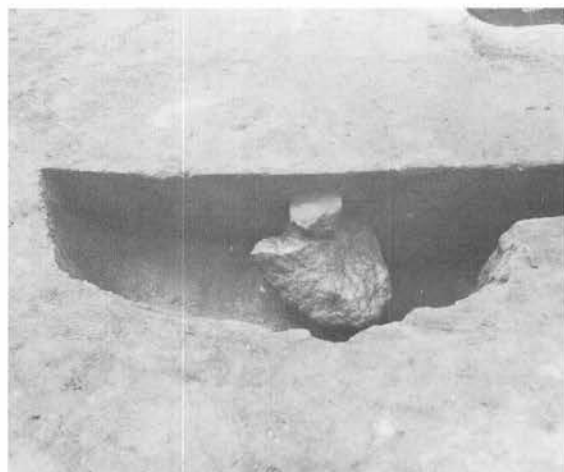
15 VII A 24土壙(平面)



15 VII A 24土壙(断面)

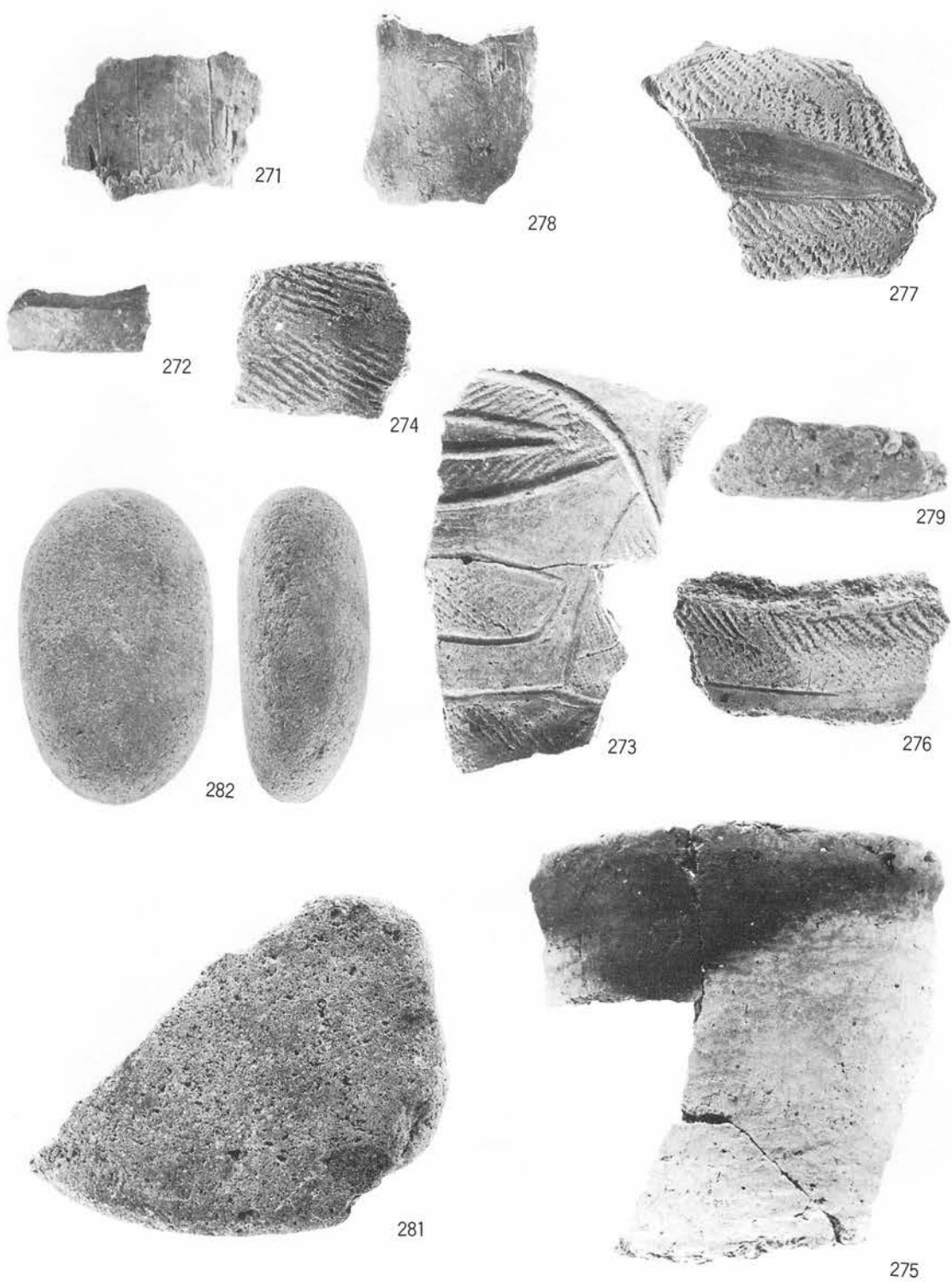


16 VII B 22土壙(平面)

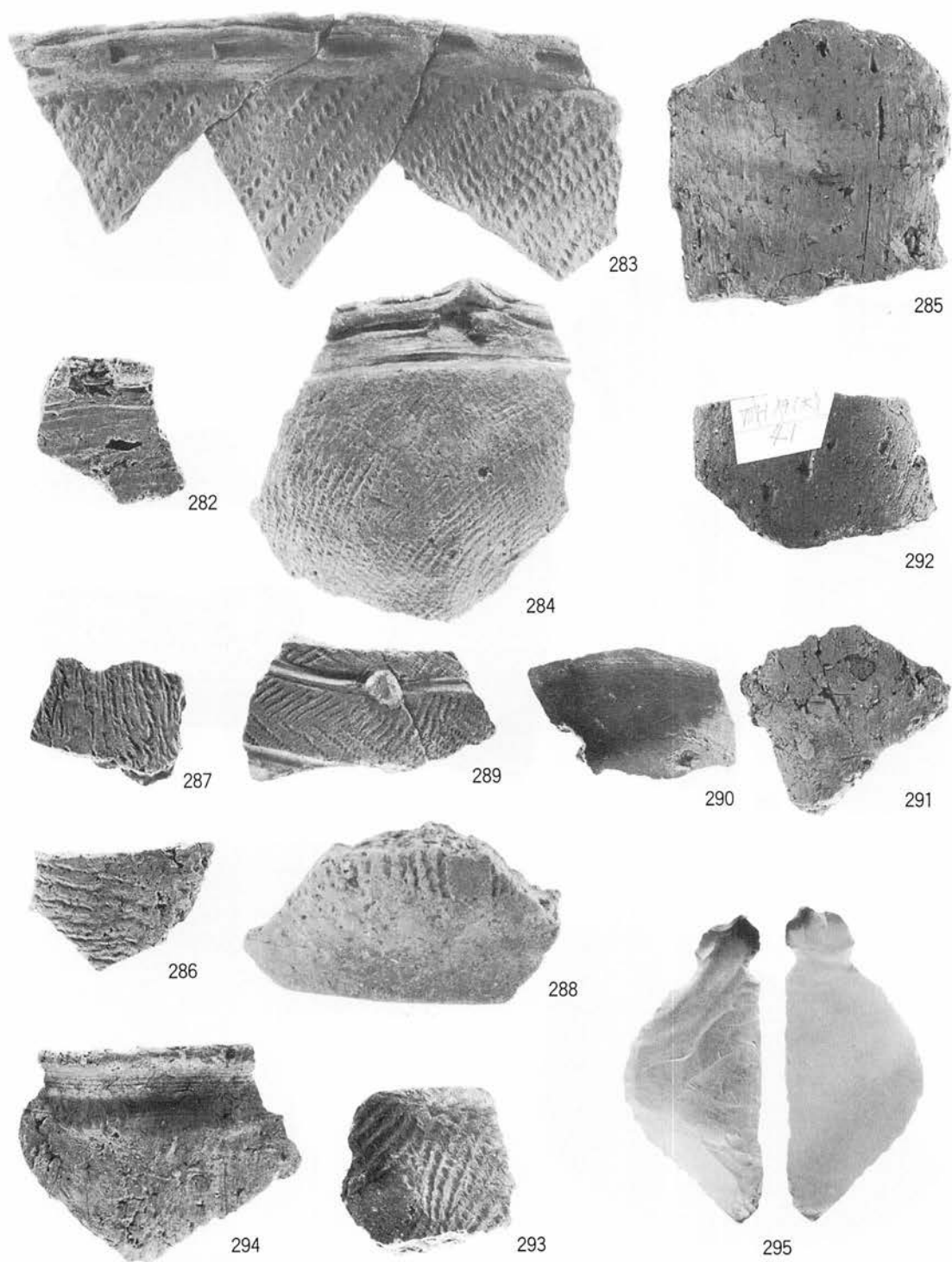


16 VII B 22土壙(断面)

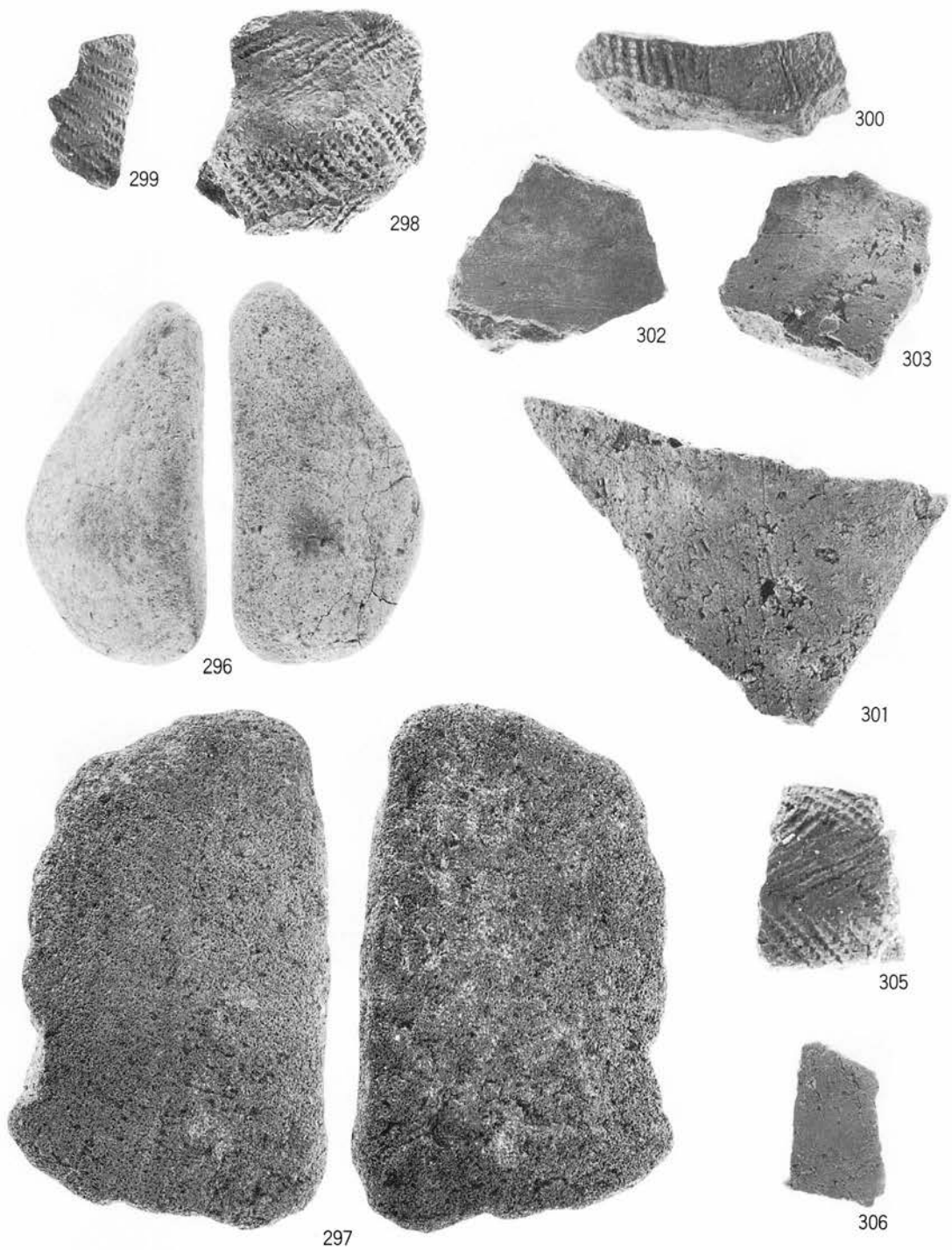




图版97 土壤出土遺物(1)

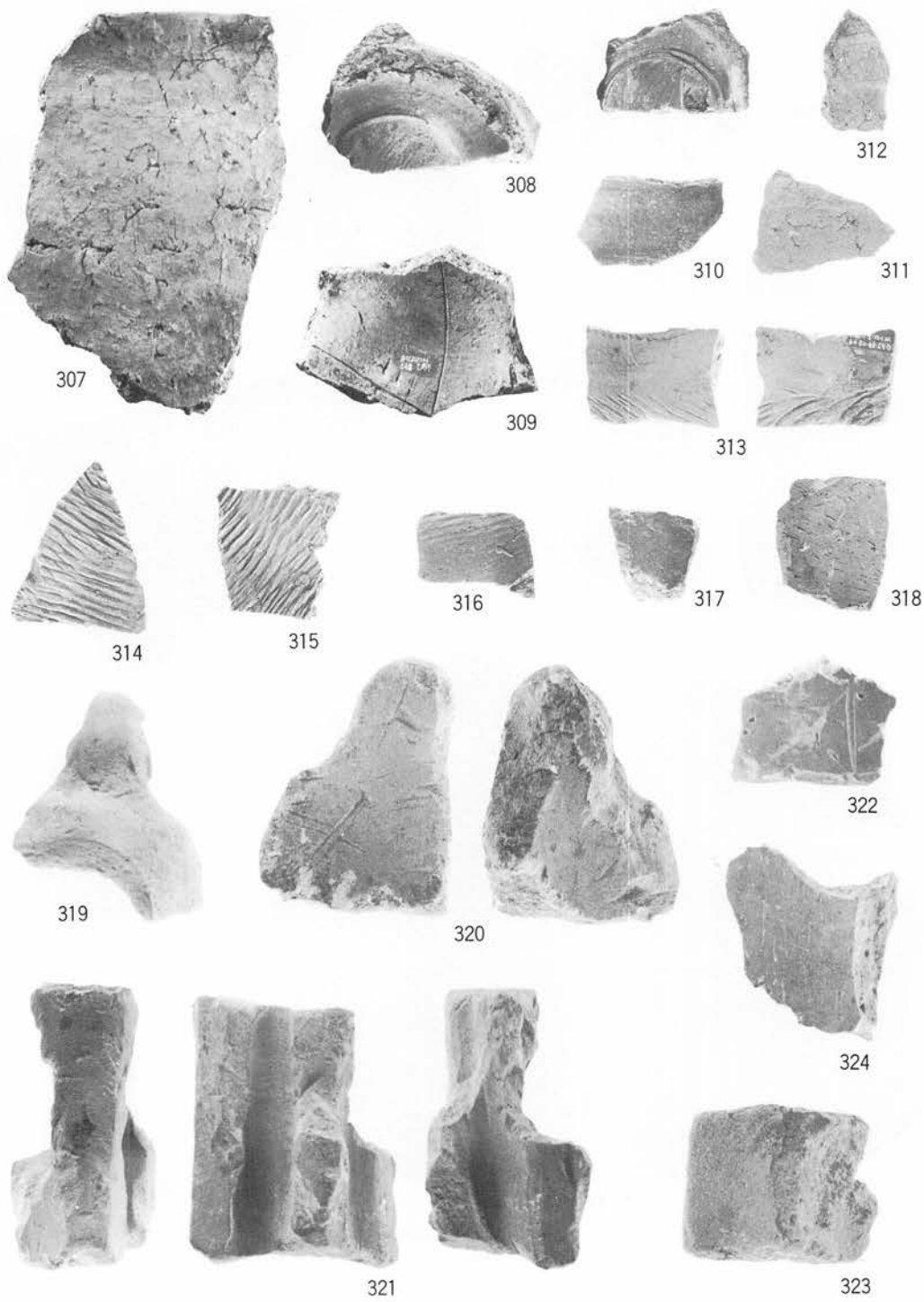


图版98 土壤出土遺物(2)



图版99 土壙出土遺物(3)

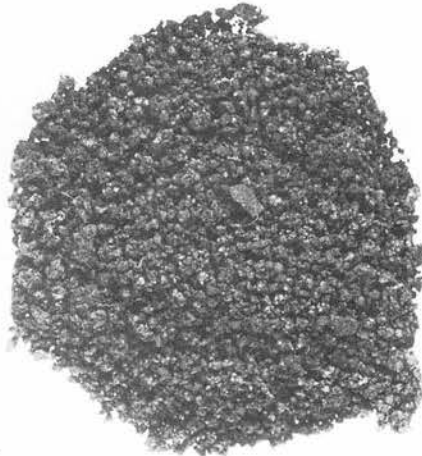




図版100 遺構外の遺物(土師器・須恵器・砥石)



VI G 5 竪穴住居跡 オオムギ・ムギ?



IV G 7 竪穴住居跡 アワ



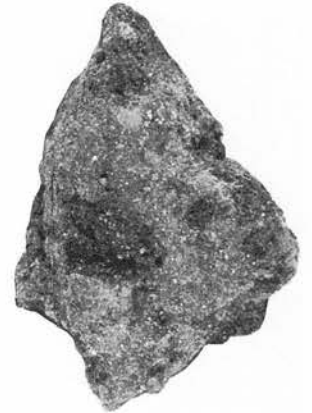
IV G 7 竪穴住居跡 アワ



VII F 23 竪穴住居跡 アワ  
No158



VII F 23 竪穴住居跡 アワ  
No158



VII F 23 竪穴住居跡 アワ  
No162



VII F 23 竪穴住居跡 アワ  
No161



VII F 23 竪穴住居跡 アワ・ヒエ  
No160



VII F 23 竪穴住居跡 アワ  
No159



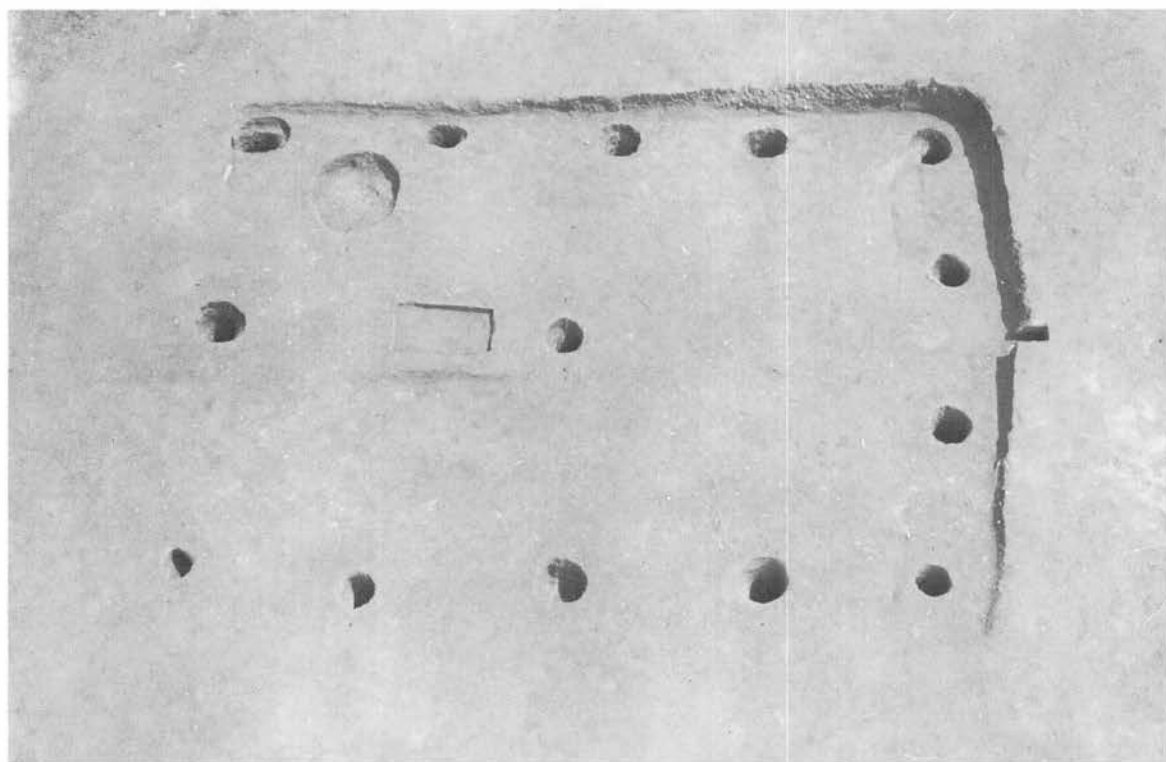
VII A 16 竪穴住居跡  
栃の実



VI E 19 竪穴住居跡 胡桃

VII A 16 竪穴住居跡  
胡桃

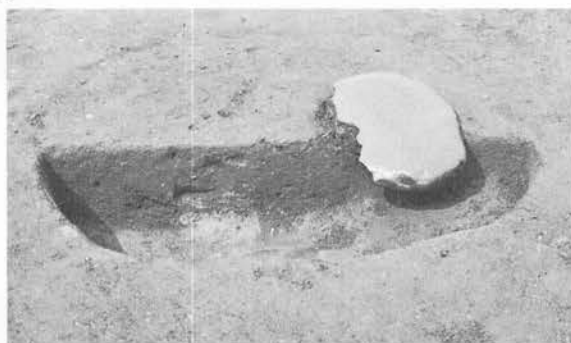
図版101 その他の遺物(炭化穀類・堅果類)



完掘



検出状況



土壌



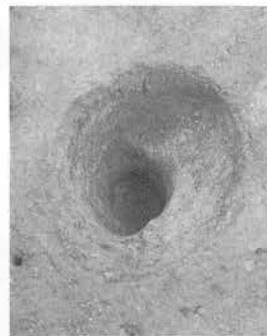
柱穴



柱穴



柱穴

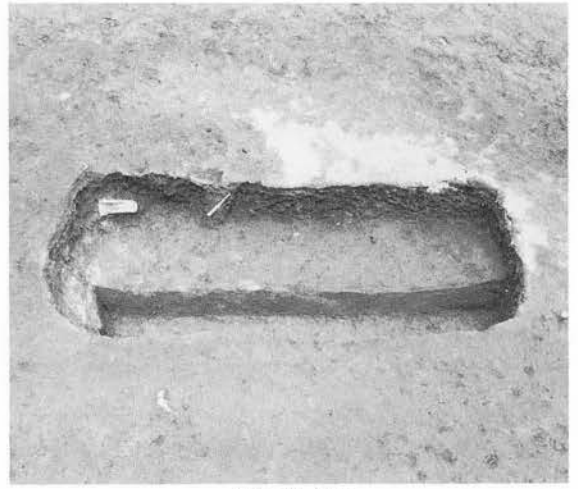


柱穴

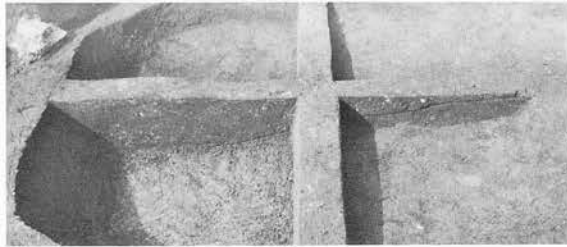




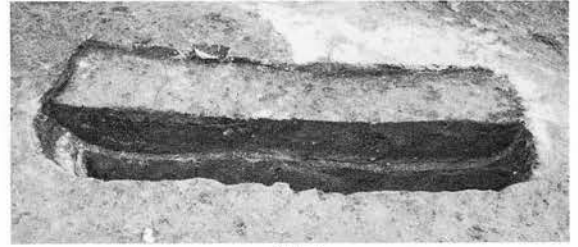
VIII B 28 土坑



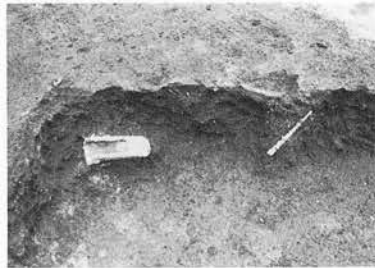
VIII C 27 土坑



断面



断面



遺物出土狀況



手斧出土狀況



鏃出土狀況



手斧

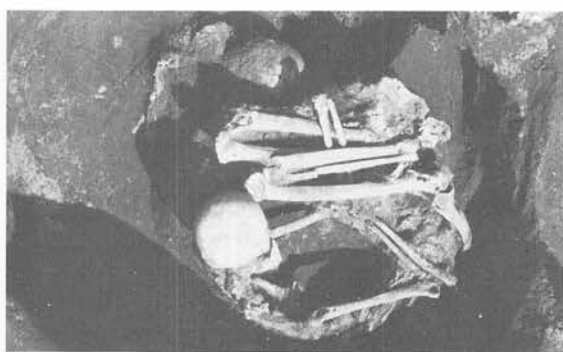


鏃

图版103 土坑



VG 1-1.3 土葬墓全景



VG 1-1 土葬墓 人骨



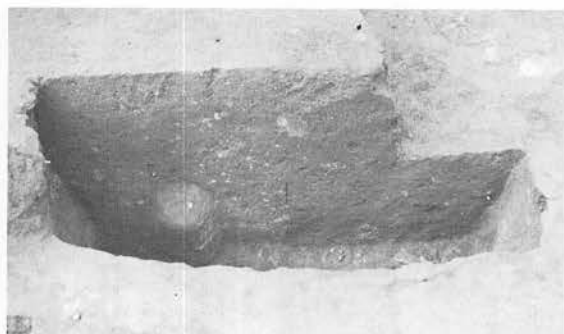
VG 1-1 土葬墓 漆



VG 1-2.4 土葬墓 完掘



VG 1-2 土葬墓 人骨



VG 1-2.4 土葬墓断面



VG 1-2 土葬墓 金具



VG 1-2 土葬墓 煙管



VG 1-3 土葬墓 人骨



VG 1-4 土葬墓 人骨



VG 1-3.6 土葬墓 完掘

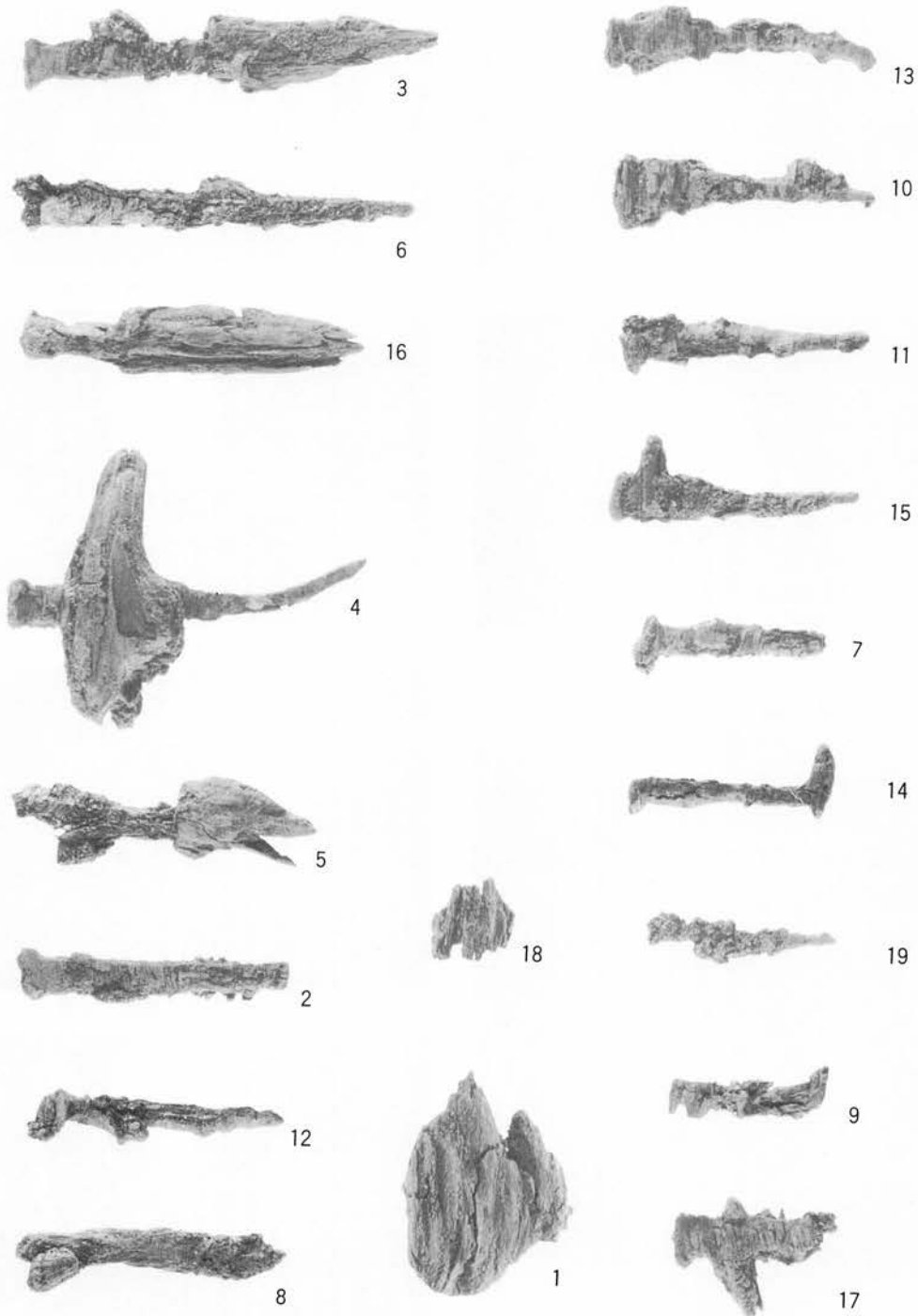


VG 1-5 土葬墓 人骨

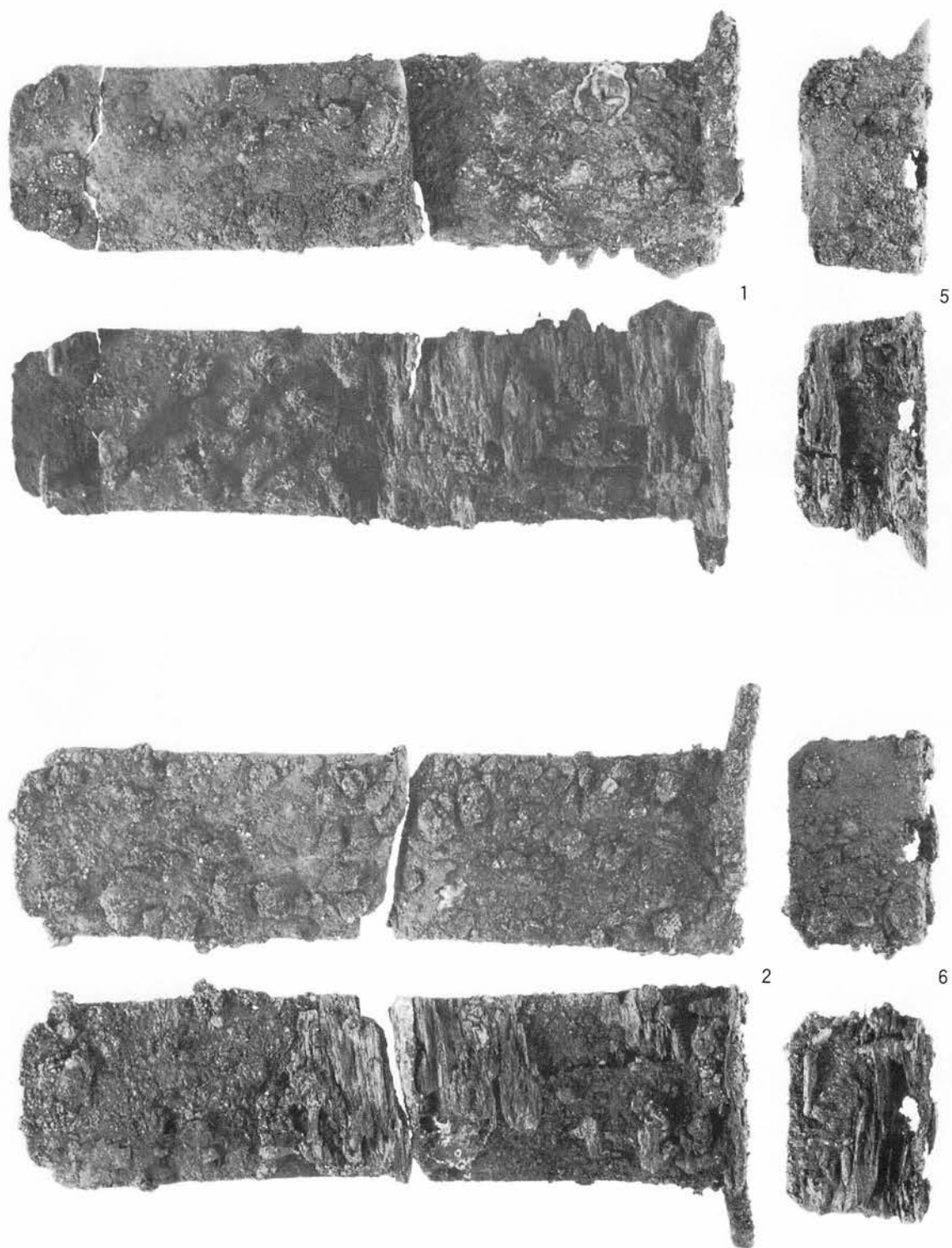


VG 1-6 土葬墓 人骨

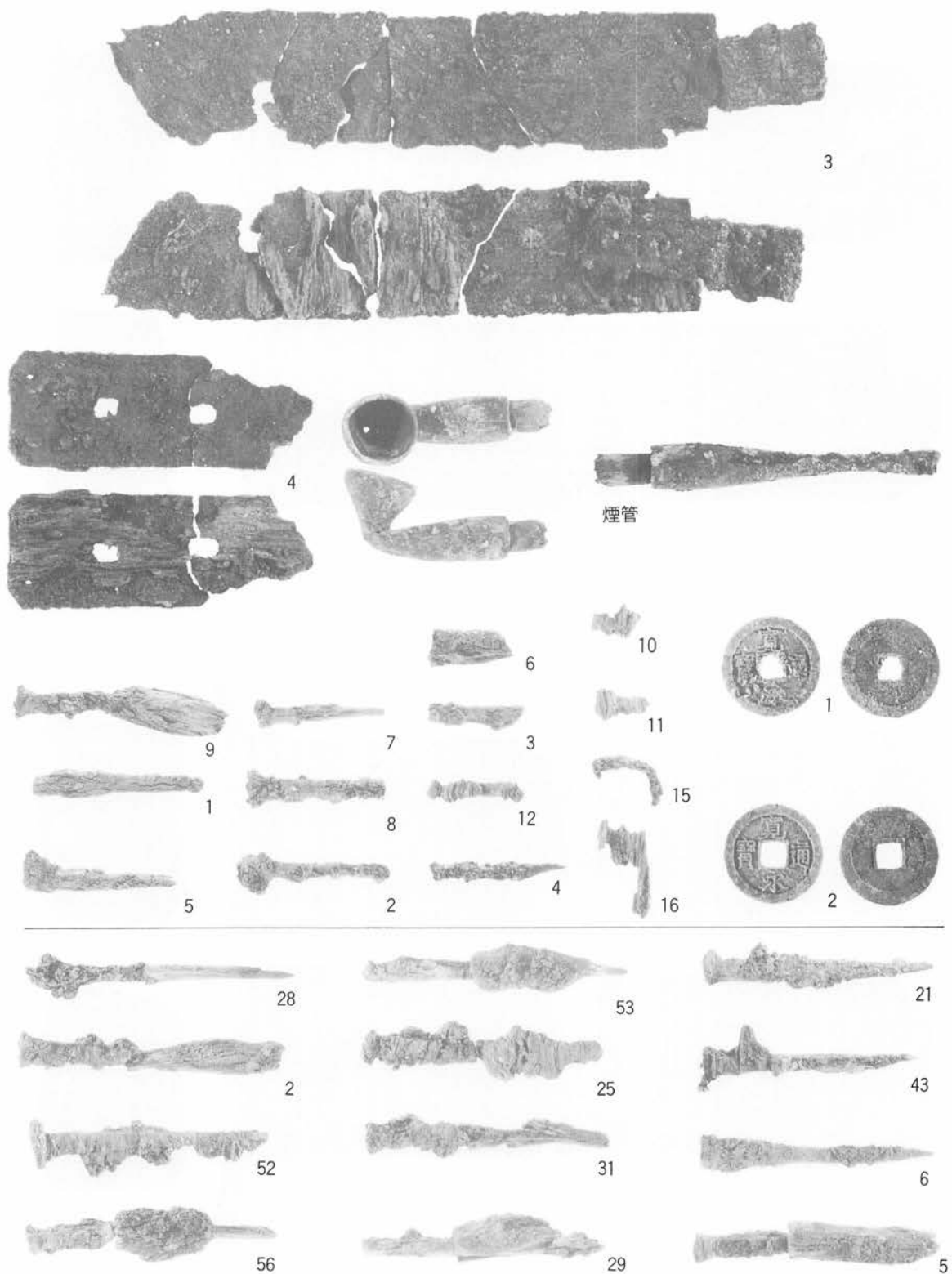




图版106 VG 1-1 土葬墓出土遗物

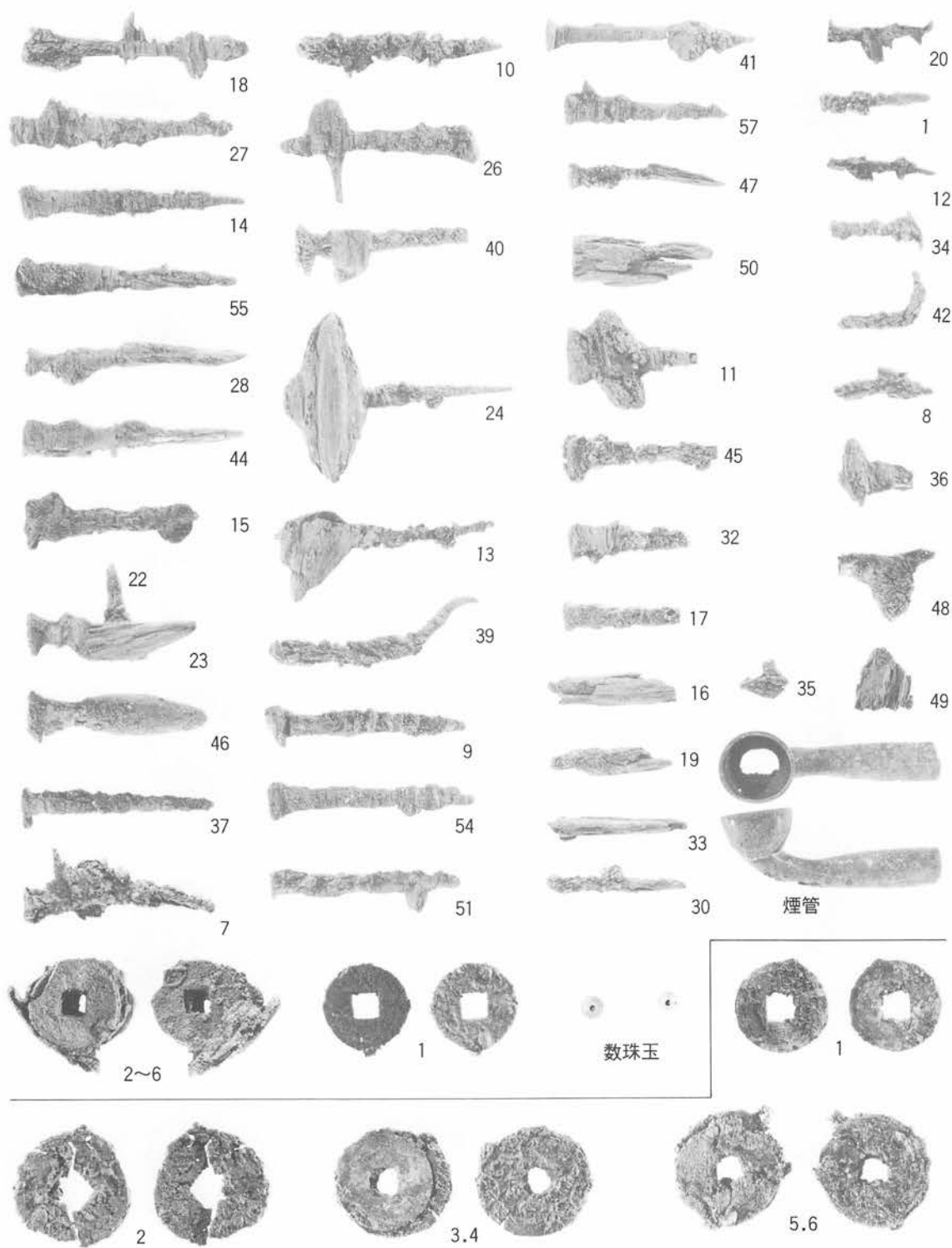


图版107 VG 1-2 土葬墓出土遗物

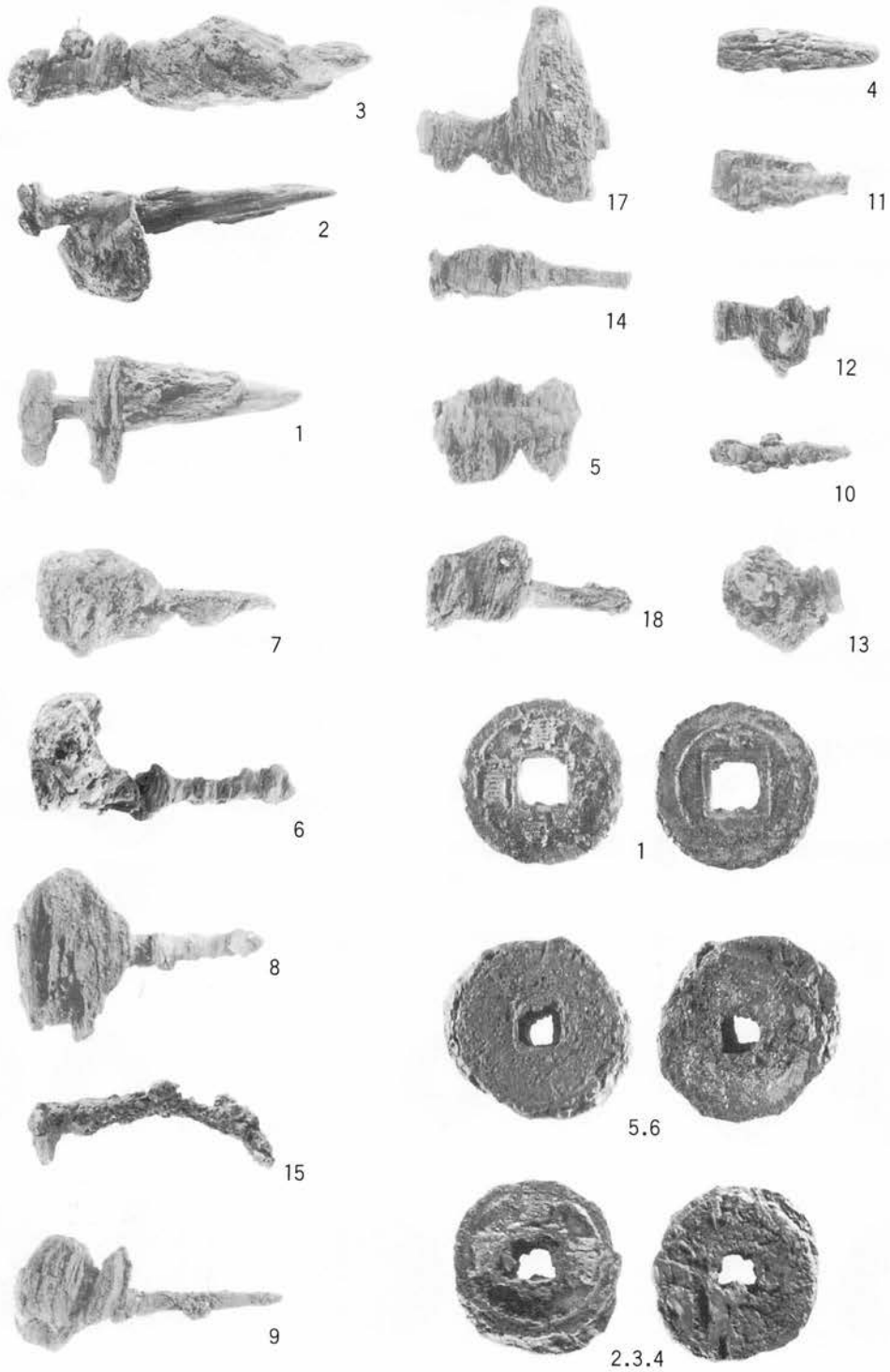


图版108 VG 1-2·3 土葬墓出土遺物

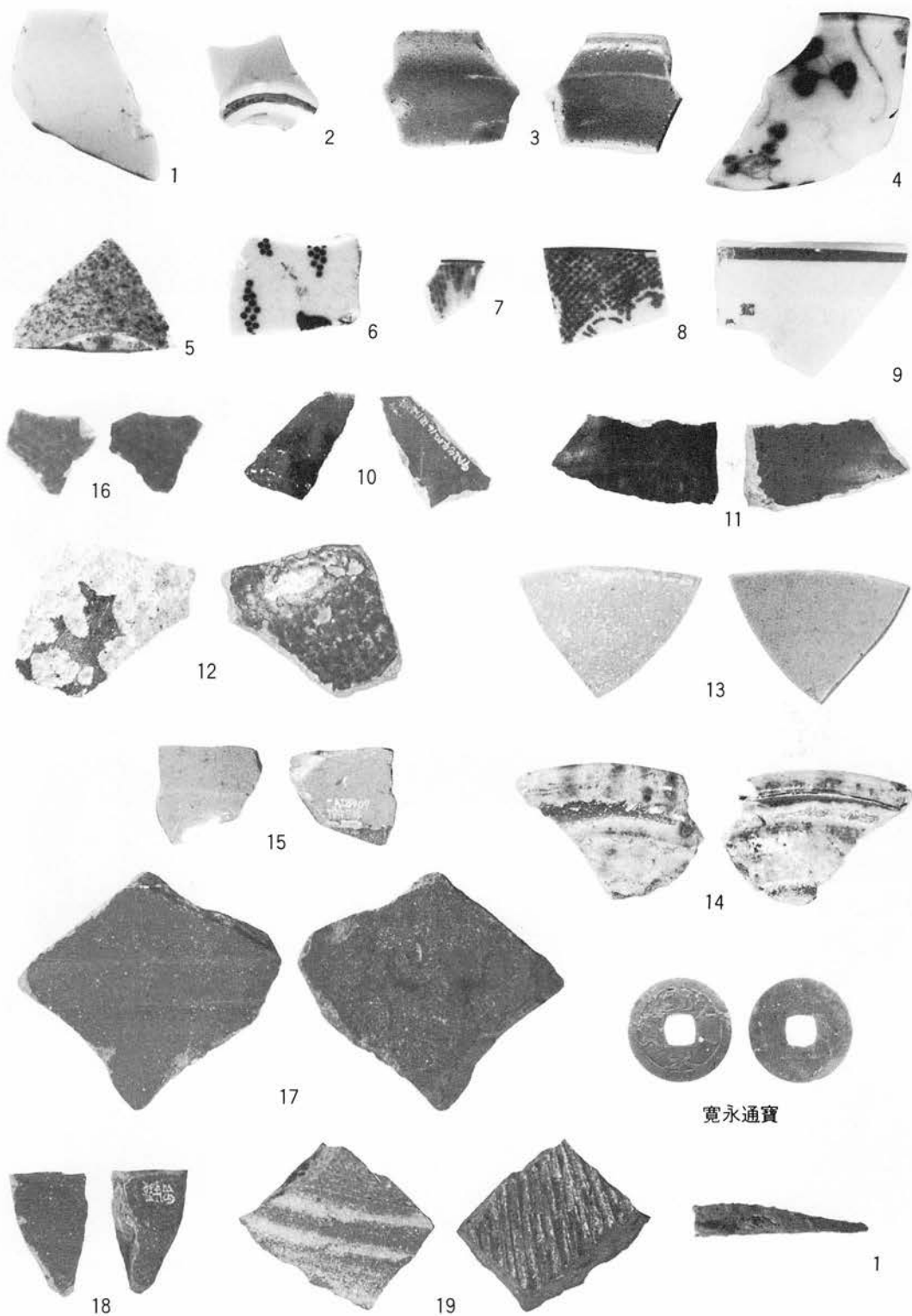




図版109 VG 1-3・4 土葬墓出土遺物



图版110 VG 1-6 土葬墓出土遗物



図版111 その他の遺物(1)

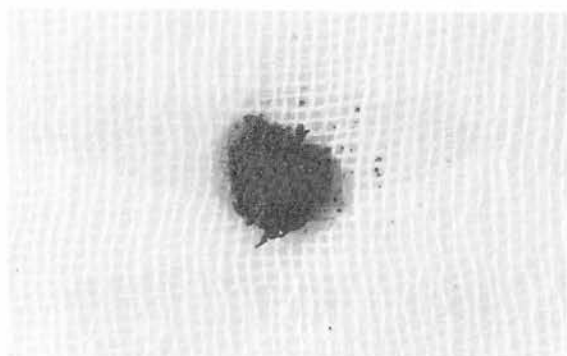




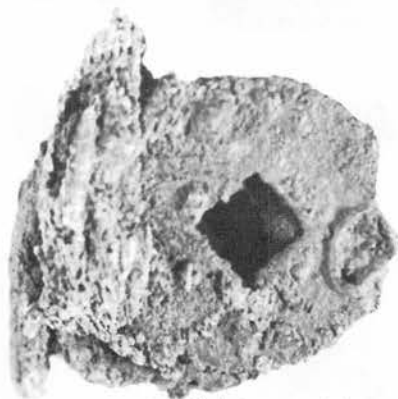
VG 1-2 土葬基金具 2 (布)



VG 1-2 土葬基金具 2 (布)



布



VG 1-3 土葬墓古銭 2~6 (布)



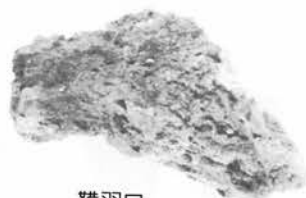
VII F 23 竪穴住居跡 (鉄滓)



VG 1-3 土葬墓古銭 2~6 (布)



VII F 23 竪穴住居跡 (鉄滓)



鞆羽口



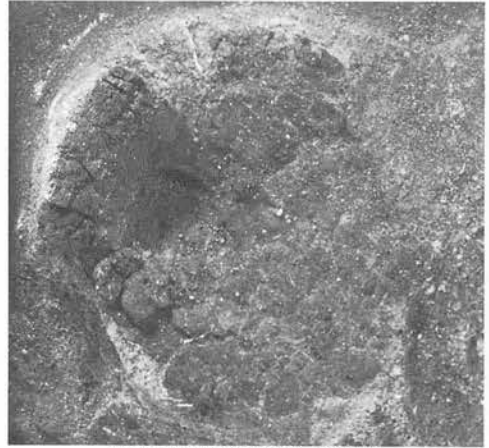
VI F 13 豎穴住居跡(敷板)



VII A 16 豎穴住居跡(敷板一部分)



V G 1-3 土葬墓(木片)



VII A 16 豎穴住居跡(木製品)



V G 1-2 土葬墓(木片)



VII A 16 豎穴住居跡(木製品)



V G 1-2 土葬墓(漆)



V G 1-1 土葬墓(漆)



V G 1-4 土葬墓(漆)

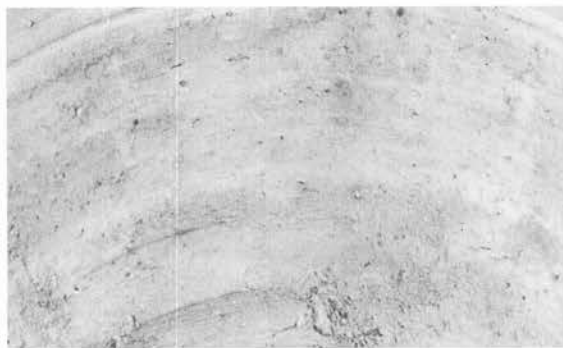


V G 1-1 土葬墓(定盤)

図版113 その他の遺物(3)



1 ロクロ成形痕



2 ロクロ成形痕



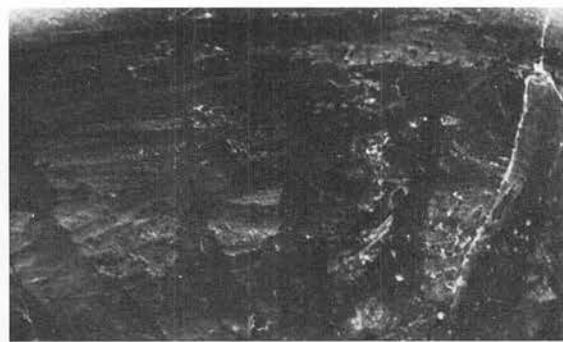
3 ヘラケズリ



4 ヘラケズリ



5 ミガキ



6 ミガキ



7



8



## V まとめ

今回の調査は、東北縦貫自動車道の建設に伴う緊急発掘調査である。調査対象地は東西 300 m、南北120mであり、その面積は16,114㎡であつた。調査地は標高2110～251mで、谷底平野からの比高が20～30mの洪積世低位段丘上に立地している。調査地内は3段の段状の畑からなり、各段ごとに削平と堆積が繰り返されて平坦となつていた。

調査の結果、竪穴住居跡20棟、焼土遺構12基、土城40基、陥し穴状遺構81基、土葬墓6基、1本柱列1列、溝状遺構1条などを検出し、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、土製品、石器、石製品、古銭、鉄製品、銅製品、鉄滓、炭化材、木製品、炭化穀類、堅果実、人骨、獣骨、貝殻などを発見した。これらは、それぞれ縄文時代、古代、中・近世に属しており、以下各時代ごとに遺構と遺物を分けてまとめることにする。

### 1. 縄文時代

縄文時代に属する遺構は竪穴住居跡4棟、土城21基、陥し穴状遺構81基であり、遺物は縄文土器、土製品、石器である。

#### (1) 竪穴住居跡

発見された竪穴住居跡はⅥH20住、ⅦB18住、ⅦF22住、ⅧA23住の4棟である。これらの竪穴住居跡は洪積低位段丘の最高位（山地寄り）に占地し、調査地の中では東区に属している。分布範囲は50m以内であり、集中していると言えよう。住居跡間で重複するものはないが、ⅥH20住は溝状の陥し穴状遺構によって切られている。保存状態は前2者が比較的良好で、後2者は斜面下位の壁が削平されている。特に急斜面のⅧA23住では壁のみならず下半の床面も削平されていた。

検出面はⅦB18住、ⅦF22住が基本土層のⅢb層（南部浮石相当層）で、ⅥH20住、ⅧA23住は削平されたこともあつてⅣa層（八戸火山灰層）である。

平面形は若干歪んでいるがⅥH20住、ⅦB18住が長方形を基調とし、ⅦF22住、ⅧA23住が円形を基調としている。規模は前者が4.0～4.2×2.9～3.4m、3.1×2.0～2.7mである。長軸方向はN74°E、N94°Eで等高線にほぼ平行している。後者は3.5m、3.0mであり、小型に属する。

埋土は前3者が黒褐色混土の単層で、ⅧA23住は急斜面に立地していることもあつて、極暗

褐色混土のほか、暗褐色混土、褐色混土などからなる。いずれも自然堆積状況を示している。

床面は幾分凹凸あるものの、ほぼ平坦である。ⅧA23住では貼床され、ⅥH20住では堅く踏み締められた部分（北西部）があり、ⅦB21住では柱穴を結んだ内側が僅かに窪んで堅くなっていた。壁は崩落している部分も認められたが、比較的急激に立ち上がる。壁高は削平されたこともあって、12~60cmと幅がある。風倒木の跡に構築されたⅧA23住では壁際に2個の立石を立てて土止めとしていた。

柱穴はⅥH20住では四隅とその中間の8個からなり、中央の柱穴が外側に張り出す形を呈していた。それらは壁外に位置するもの（北東隅、南西隅）、壁に接するもの（北西隅、南東隅）、壁際から壁外に及ぶもの（他）である。ⅦB21住は対角線に4個配置され、他は2柱穴であった。平面形は基本的には直径20~30cmの円形であるが、ⅦF22住は12cm、18cmと小さく、ⅥH20住では46×26cmと長方形のものも認められる。深さは25~52cmで、埋土は褐色~暗褐色混土である。なお、柱痕は確認されたⅦB21住のP1、P2によると直径12cm、13cmであった。

炉はⅥH20住を除く3棟から発見されている。3者とも住居跡のほぼ中央部に位置し、ⅦF22住が石囲い炉、ⅦB18住、ⅧA23住が石囲い埋設土器炉である。石囲いの部分は直径24cmの円形か、57×55cm、80×60cmの長円形を呈する。炉縁石はⅦB18住が拳大の円礫を13個用い、他は15×10cmの扁平な円礫を10個、7個用いて間隙なく側縁を上にして埋設されている。ⅦF22住では東側の1個が高さ28cmの立石となっており、石囲い埋設土器炉では土器よりも若干高く設置されていた。

土器は両者とも完形の深鉢形土器、鉢形土器を石囲い部分の中央に正立位に設置されている。口縁部は床面から僅か出ており、土器の上半は二次加熱のため赤変し、脆弱である。焼土の厚さはⅦF22住によると6cmである。

土壌はⅦF22住の炉の南側の1例のみである。深さが10cmの不整な長円形で、埋土は炭化物を含む暗褐色混土の単層である。土壌北端には円礫が存在し、先行する炉跡ではないかと考えられる。周溝は確認されていない。

発見された遺物は縄文土器、石器で、このうち堅穴住居跡に伴う形で発見された遺物はⅦB18住の炉の埋設土器、ⅧA23住の炉の埋設土器、床面出土の深鉢形土器、小型鉢形土器である。ⅥH20住は埋土出土の碎片1点のみであり、ⅦF22住は埋土出土遺物のみである。

堅穴住居跡の年代については次のように考えられる。ⅥH20住は伴出遺物がなく判然としなが、形状埋土などから早期から前期にかけてのものとして推定され、ⅦB18住、ⅧA23住は伴出遺物から前期末葉（円筒下層D式）、晚期中葉（大洞C<sub>2</sub>式）に比定される。ⅦF22住については埋土遺物が前期前葉、後期初頭、後期中葉などであり、後期中葉（十腰内Ⅱ~Ⅲ式）に比定してほぼ誤りなからうと思われる。



## (2) 土壙

土壙は、その断面形状から、皿形（1～7）とフラスコ形（1～14）とに分けられる。

### 〈皿形土壙〉

東区中央部の1土壙を除き、東区東南部の斜面上位に位置する。時期決定の遺物を欠くが、平安時代の8土壙に切られていることや、埋土状況から、縄文時代に属すると思われる。

### 〈フラスコ形土壙〉

西区と中央区の間、斜面下位に位置する1土壙を除き、東区東部の斜面上位に位置する。当該土壙の形状をよく表わすのは、2・5・9各土壙である。

時期決定ができる土壙は、床面から遺物の出土した9・11各土壙である。その時期は9土壙が縄文時代晩期中葉（大洞C<sub>2</sub>式）、11土壙が同じく晩期中葉（大洞C<sub>2</sub>式）である。2土壙が4土壙に、10土壙が、7陥し穴状遺構（長方形）にそれぞれ切られるものの、埋土状況等から、縄文時代に属するものと思われる。

特別な出土状況を示した土壙は、9（ⅦH25-2）土壙（フラスコ形）である。その壁際床面から出土した完型の赤彩された壺（大洞C<sub>2</sub>式）とその両側には入子状に重ねられた貝殻（カラス貝）を配する。このように遺構から土器と貝がセット状態で出土する例は、筆者の見解では県内では、九戸村滝谷Ⅲ遺跡のBC30ピット（開口部径135cm・頸部径100～120cm・底部径185～190cm・深さ80～70cm）がある。南壁際の底面に口径20cm・高さ25cmの深鉢が伏せた状態で出土し、その鉢の中には埋土はなく、口径12cm・高さ11cmの高台付浅鉢（縄文時代晩期）と貝殻（カキと思われるが風化しており詳細はわからない）が並んで伏せて出土した。と報告している。直立する完型の赤彩された壺と貝殻、深鉢で覆われた高台付浅鉢と貝殻、両例とも少ない例故に貴重である。

9土壙のカラス貝を更に観察すると、右の貝のⅠ・Ⅱ群（11点）は左殻のみ、左の貝はⅢ群（4点）が右殻、Ⅳ群（15点）が左殻、Ⅴ群（4点）が右殻、Ⅵ群（3点）が左殻となり、入子状に重ねる際、左右の殻を混用していない。そして左右の殻の点数は、全点数37点中左殻が29点と、左殻が圧倒的に多い。またⅡ群③の貝には人為的に穿孔されたと思われる円孔がある等々赤彩された壺と共に興味深い出土例である。



### (3) 陥し穴状遺構

陥し穴状遺構（81基）を円形タイプ（34基）・溝状タイプ（40基）・長方形タイプ（7基）に分類した。以下その概略をまとめる。

#### 〈陥し穴状遺構（円形）〉

##### ①形状

平面形は、開口部が崩落があるものの、ほぼ円形、底部は円形、断面形は細長いピーカー形を基調とする。この形状から若干はずれるのは33遺構であり、底部が楕円形を呈する。しかし断面形が細長いピーカー形であることから、当該遺構とした。底部に副穴をもつものが多い。

##### ②規模

開口部は崩落により形状の変化が著しい。記述にあたっては構築時の形状を残す底部径（短軸長）、それに深さにより述べる。

##### （A）底部径

平均値は約69cmである。占地別にみると、西区の1～9当該遺構の平均値は70cm、東区の10～34当該遺構は66cmと西区が若干大きい。個別にみると、25当該遺構の102cmや、1・24各当該遺構の約50cmなどの一部バラツキもみられる。

##### （B）深さ

検出面からの深さの平均値は129cmである。占地別にみると、西区の1～9当該遺構の平均値は114cm、東区の10～34当該遺構の平均値は134cmである。西区の当該遺構が浅いのは近年の削平による。個別にみると、最も深いのは18遺構の166cmであり、これに次ぐのが14遺構の156cm、25遺構の155cm、26・34各遺構の150余cmと続く。

##### ③埋土

埋土は、南部浮石と八戸浮石を中心とする、黒色～黒褐色～褐色混土からなり、下位はクサビ状に互層をなし、上位はレンズ状に堆積する自然堆積を基調とする。33遺構は埋め戻しをされたかに思われる。

##### ④出土遺物

出土していない。

##### ⑤副穴

34基中27基に副穴を確認している。副穴は底部のほぼ中央にある。1基を基調とする。その大きさは5cm前後が多くほぼ円形、その深さは4～21cm、多くは10cm前後である。先端形状はV字を呈するものが多い。

その副穴が埋土まで立ち上がっている例を6基確認している。その底面からの立ち上がりではっきり確認できた高さは17遺構（巻頭カラー）の28cmである。他に3遺構では48cmあるが不確定な部分がある。その先端形状はΠ字形が多いが、現存の際の形状であるかは確認できなかった。

これら副穴の状況を見ると、太さ5cm前後の先端を鋭くした40cm弱の杭状のものを底部中央に1本突きさした（あるいは打ち込んだ）状況がうかがえる。

#### ⑥ 占地・配列

34基中西区に9基位置し、他は東区の西部から中央部にかけて位置する。

西区の当該遺構は、2～9遺構が斜面下位に2～7mの間隔で位置し、1遺構は斜面中位に単独で位置する。その配列は3・4・7・8と2・5・6・9の2列が等高線に平行している。

東区の当該遺構で明確な配列を示すのは、約5m間隔で等高線に平行に直線的に並ぶ10～16遺構（14を除く）である。34遺構を除く他は明確な配列を呈しないが、全体を見ると、東区の西部から中央部の斜面下位を囲むように配列されているかに思われる。

当該遺構の存在しない地区は、中央区・東区斜面下位・東区南東部、そして斜面上位である。溝状タイプの陥し穴状遺構の占地に比較し、当該遺構は限定された地区に存在する。

#### ⑦ 時期

平安時代住居跡に切られる例があり、その時期よりさかのぼる。埋土状況を溝状タイプと比較すると古い。縄文時代のいずれかの時期に属し、溝状タイプや長方形タイプより古いと考えられる。

### 〈陥し穴状遺構（溝状）〉

#### ① 形状

平面形は、開口部が溝状、中端が溝状～帯状、底部が帯状を基調とする。断面形は、短軸断面形がV字（15基）、U字（12基）、Y字形（10基）、長軸断面形が平坦あるいは若干弧状となる底面から、内彎あるいは内傾して立ち上がる形状を基調とする。この形状から若干はずれるのは、17・19・20遺構である。いずれも浅く、19・20遺構は底部短軸長が長く、断面形もピーカー形と、他当該遺構と異なる。

#### ② 規模

各部位の平均計測値は、開口部は長軸長が279cm・短軸長が61cm、底部は長軸長が310cm・短軸長が18cmである（中端の短軸長は46cmである）。深さは111cmである。

#### （A）開口部・底部長軸長

前述の17・19・20遺構を除くと、開口部長軸長の最大は389cm（6遺構）、最小は、205cm（29

遺構)である。底部長軸長の最大は454cm(13遺構)、最小は210cm(29遺構)である。その多くが開口部より底部の長軸長が大きい。

#### (B) 開口部・底部短軸長

前述の17・19・20遺構を除くと、開口部短軸長の最大は162cm(39遺構)、最小は40cm(29遺構)、底部短軸長の最大は38cm(4遺構)、最小は9cm(15・38遺構)である。また一部(25基)計測した中端の短軸長は46cmである。開口部から中端にかけては、埋土の観察からも崩落が観察される。底部は崩落土により充填されていることから、構築時の形状を残していると推定される。

#### (C) 深さ

前述の17・19・20遺構を除くと、その最大は203cm、最小は91cm(24遺構)である。

#### ③埋土

埋土は、上位は黒色～黒褐色混土、下位は黄褐色混土を基調とし、自然堆積状況を示す。埋め戻しされた遺構はない。

#### ④出土遺物

40遺構から縄文土器片が埋土上位から出土している。時期決定資料にはならない。

#### ⑤占地・配列

西区を除き、中央区から東区の斜面中位から上位にかけ占地する。2基単位で並列し、それが連続する例(4と6、7と8、9と12各遺構など)があるが、大部分は連続して配列しない。

#### ⑥時期

遺物が出土したのは1基のみであり、時期決定資料とならない。平安時代住居跡及び平安時代土壌に切られる例があり、この時期よりさかのぼる。埋土状況から縄文時代のいずれかの時期になるものと思われる。

### 〈陥し穴状遺構(長方形)〉

#### ①形状

平面形は、開口部が小判形、中端及び底部は長方形を呈し、断面形は平坦な底面からほぼ真っ直ぐ立ち上がる形状を呈する。平面形は長方形、断面形は平坦な底面から真っ直ぐ立ち上がる形状が基調と考えられる。

#### ②規模

各部位の平均計測値は、開口部は長軸長が241cm・短軸長が141cm、底部は長軸長が216cm・短軸長が97cm、深さは118cmである。

この計測から若干はずれるのは6遺構である。開口部は平均計測値を示すが、底部短軸長は



150 cm、深さは70cmである。付近の遺構の状況から、本遺構だけが削平をうけた状況がないことから、当該遺構として特異な例である。

### ③埋土

埋土は、上位に、また一部は中位まで十和田 a 降下火山灰と苫小牧火山灰を暗褐色混土の間にレンズ状に堆積し、下位に黄褐色～暗褐色の地山崩落土や、暗褐色混土がクサビ状に堆積する、自然堆積状況を示す。

### ④出土遺物

遺物は5遺構の埋土中位から縄文土器、7遺構の埋土上位から縄文土器、土師器が出土している。

### ⑤副穴

7基中4基に副穴を確認している。底面の斜面上位壁際中央に1基、斜面下位壁際に2基が基調と思われる。その3基の副穴軸線を延長してみると、検出面より上で結合するか、遺構内部で結合することが考えられる。

### ⑥占地・配列

中央区の2基、東区西部の3基は対をなすものと考えられる。これらは7遺構を含め長軸が等高線にはほぼ直交する。いずれも斜面中～上位にかけ位置する。

### ⑦時期

出土遺物は埋土の上位からの出土であり、時期決定の資料とはならない。埋土の上位～中位に十和田 a 降下火山灰や苫小牧火山灰が混入するものの、下位に至る例はない。しかし、円形や溝状タイプの陥し穴状遺構埋土とは異なる。平安時代よりさか上り、縄文時代後半から末に至ると考えられる。

## (4) 遺物

### 〈縄文土器〉

出土した縄文土器の時期は次のとおりである。

- 遺構以外出土の第Ⅰ群第1類に属する土器は、早期中葉の物見台式に比定される。
- 遺構以外出土の第Ⅰ群第2類に属する土器は、早期中葉の吹切沢式に比定される。
- 遺構以外出土の第Ⅰ群第3類及び遺構埋土出土の283は早期後葉の赤御堂式に比定される。
- 遺構以外出土の第Ⅱ群第1類及び遺構埋土出土の2・3・4・8は前期前葉である。4は初頭にさかのぼるものと思われる。63～65は春日町式に比定される。
- 遺構以外出土の第Ⅱ群第2類及び遺構出土（炉埋設土器）の2は前期後葉である。2は円筒下層D式に比定される。

○遺構以外出土の第Ⅲ群は、中期である。

○遺構以外出土の第Ⅳ群第1類は、後期前葉である。121・122は十腰内Ⅰ式の特徴をよく示す。

○後期中葉（第Ⅳ群第2類）に属するのは、遺構埋土出土の6・7・16～18・273・297である。遺構以外出土の130・131は当類に属するかもしれない。

○遺構以外出土の第Ⅳ群第3類及び遺構埋土出土の27・31・289は、後期後葉である。39以外は所謂瘤付土器である。39は新地4式に比定される。130・131は中葉にさかのぼることも考えられる。

○遺構埋土出土の15は後期と思われる。

○遺構以外出土の第Ⅴ群第1類は、晩期前葉の大洞B-C式に比定される。

○遺構以外出土の第Ⅴ群第2類及び遺構から出土した12～14・26・28・284は、晩期中葉である。141・142・28は大洞C式に、40・12～14・26・283は大洞C式に比定される。

○遺構以外出土の第Ⅴ群第3類は、晩期後葉の大洞A式に比定される。

○遺構以外出土の第Ⅶ群及び遺構埋土出土の13は、時期を特定しがたい。53は前期後葉と思われる。41・13は後期か晩期のいずれかと思われる。

遺構内・遺構以外出土の土器の多くは東区東部からで、次に多いのは東区中央部である。他地区は少ない。東区の東部及び中央部に多く出土することは、同地区に土器が伴出することの多い住居跡及び土壌が位置することと符合する。これら遺構の時期が伴出遺物、及び形状・埋土から、住居跡は、早～前期、前期末葉、後期中葉、晩期中葉、土壌は時期が決定できる2基はいずれも晩期中葉であることから、遺構外出土のものと時期的にはほぼ符合する。

出土する土器の分布を時期別にみると、縄文時代早期（Ⅰ群）および前期（Ⅱ群）に属するのは、中央区からⅠ群2類が1点（60）出土するものの、他は東区東部の斜面中～上位から出土する。後期（Ⅳ群）に属するのは中央区および東区中央部から少量出土するものの、他は東区東部のⅦF22住居跡（縄文時代）から出土する。晩期（Ⅴ群）に属するのは東区中央～東部に散在するが、遺構からの出土例が多い。

#### 〈石器〉

東区中央部～東部の斜面中位から上位にかけて出土する。その多くは遺構以外からの出土であるが、当地区には縄文時代住居跡及び土壌があることから、出土することは矛盾しない。器種別にみると調理用と考えられるものが多い。時期を特定できるものはないが、早期から前期にかけて多いとされる棒状擦石が10点出土している。

## 2. 古代

古代に属する遺構は竪穴住居跡15棟、焼土遺構12基、土壙16基であり、遺物は土師器、須恵器、土製品、石製品、鉄製品、鉄滓、炭化材、炭化穀類、堅果類である。

### (1) 竪穴住居跡

#### 〈分布〉

発見された竪穴住居跡は15棟である。15棟の竪穴住居跡は分布状況から

1. 西群 1棟 IC 4住
2. 中央群 5棟 IV G 4住、IV G 7住、IV J 2住、VA 4住、VH 1住
3. 東群 9棟 VIF 13住、VIE 19住、VI I 16住、VII A 16住、VII B 21住、VII E 16住、VII F 18住、VII F 23住、VII G 8住

の3群に分けることができる。

西群は1棟のみの検出であるが、IC 4住は調査区の北端に位置しており、西北に続く可能性がある。中央群とは120 m離れている。

中央群の5棟は斜面中位から下位にかけて散在し、北端のVH 1住は北半が調査区外に続いている。この群の東には埋没谷が形成されており、東群とはこの埋没谷によって区画されている。

東群は9棟からなり、今調査では最大の規模をなす。調査区外に続く可能性は全くなく、集落全体を調査したとみることができる。9棟は斜面上位から中位にかけて分布し、斜面上位では8棟が扇状に密集し、斜面中位の1棟は30m離れて配置されている。中央群とは70m離れている。

#### 〈検出面、保存状況〉

検出面は基本的には基本土層のII b層（黒色シルト）である。ただし、削平などによってII b層、II a層（赤褐色浮石）、III b層（黒褐色浮石混土）の消滅している地域ではIV a層（黄橙色シルト）、IV b層（明黄褐色シルト）が検出面となっている。中央区斜面下位のIV G 4住、IV J 2住、VA 4住と東区斜面上位のVIE 19住の4棟はIV a層で、東区斜面中位のVII G 8住がIV b層である。

保存状況はIC 4住、IV J 2住、VIE 19住、VII G 8住を除いて良好である。IC 4住等4棟は斜面下位の壁と床面が削られていた。また、IC 4住は南東隅から北壁中央にかけて水道管の埋設溝によって破壊されていた。



〈重複〉

15棟のうち重複関係の捉えられるものは5棟8例である。住居跡間で重複するものはなく、縄文時代の陥し穴状遺構（溝状4例、円形2例）を切っているものが4棟で、古代の土塼（皿形）と近世の土葬墓に切られているものが各1棟である。

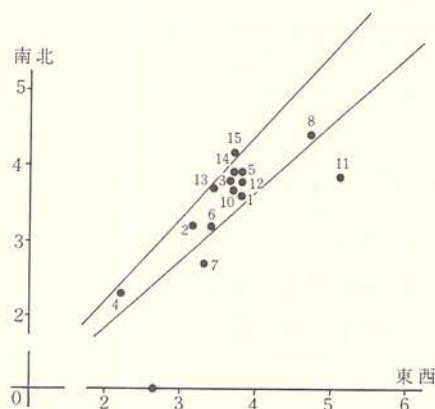
- |         |  |
|---------|--|
| Ⅶ B 21住 | Ⅶ B 21陥し穴状遺構（円形）を切っている。                            |
| Ⅶ E 16住 | Ⅶ F 17陥し穴状遺構（溝状）を切っている。                            |
| Ⅶ F 18住 | Ⅶ F 18陥し穴状遺構（溝状）を切っている。<br>Ⅶ G 18陥し穴状遺構（円形）を切っている。 |
| Ⅶ F 23住 | Ⅶ F 24陥し穴状遺構（溝状）を切っている。<br>Ⅶ G 23陥し穴状遺構（溝状）を切っている。 |
| V H 1住  | V G 1—2土葬墓に切られている。                                 |
| Ⅶ B 21住 | Ⅶ B 22土塼（皿形）に切られている。                               |

全体的に拡張、縮小されたものは発見されていないが、内部施設の造り替えられたものがある。建て替えられた1棟（柱穴によるⅠ C 4住）とカマドの造り替えの3棟（V H 1住、Ⅶ B 21住、Ⅶ E 16住）である。

〈平面形、規模〉

平面形は方形を基調とするもの12棟（Ⅰ C 4住、Ⅳ G 4住、Ⅳ G 7住、Ⅳ J 2住、V A 4住、V F 13住、Ⅵ E 19住、Ⅶ A 16住、Ⅶ E 16住、Ⅶ F 18住、Ⅶ F 23住、Ⅶ G 8住）と、長方形を基調とするもの2棟（Ⅵ I 16住、Ⅶ B 21住）とがある。ただし、方形を基調とするものでも正方形のものは少なく、幾分長短がある。その差異は10%未満である。また、同一方向でも壁によって若干長さの異なるものがあり（7棟）、その差の最大は40cmである。（Ⅶ B 21住、Ⅶ G 8住）

規模は各壁によって若干異なるが、方形を基調とするものがⅣ J 2住の2.2×2.3mを最小とし、Ⅵ E 19住の4.7×4.4mを最大とする。一辺の長さが、2 m代が1棟（8.3%）、3 m代が10棟（83.3%）、4 m代が1棟（8.3%）であり、大多数のものが3 m代である。長方形を基調とするものは3.2~3.4m×2.6~2.7m、4.9~5.3m×3.8~3.9mであり、前者が中型、後者が大型に対比されよう。これらをまとめると、2 m代の小型の住居跡が2棟（13.3%）、3 m代の中型住居跡が13棟（73.3%）、4~5 m代の大型住居跡が2棟（13.3%）という比率になる。



第 142 図 竪穴住居跡相関図

注(1) V H 1住は北半が調査地外に続いていて正確な規模は不明であるが、南壁の長さが2.6 mであり、小型住居跡の中に加えた。

〈方向〉

竪穴住居跡の方向はN14°W～N51°Eであり、次の3群に分けられる。

1群 N14°W～N3°E 6棟 I C 4住、IV

G 4住、IV G 7住、VA 4住、V H 1

住、VII G 8住

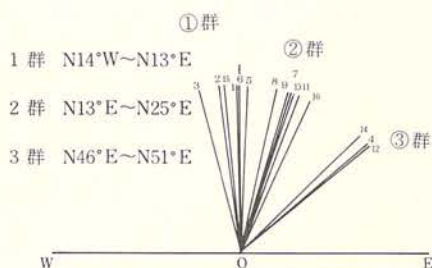
2群 N13°E～N25°E 6棟 VI F 13住、VI

E 19住、VI I 16住、VII A 16住、VII B 21

住、VII F 18住

3群 N46°E～N51°E 3棟 IV J 2住、VII

E 16住、VII F 23住



第143図 竪穴住居跡の方位

1群は西群と中央群、東群の1棟からなり、IV、V区のほとんどの住居跡が含まれている。これは斜面中位から下位にかけてのものに限定されている。2群は東群の大多数が含まれ、斜面上位のものに限定されている。

〈埋土〉

埋土は黒褐色混土を主体とする自然堆積である。黒褐色混土には、中位あるいは下位に十和田a 降下火山灰、苫小牧火山灰が粒状やブロック状、または薄い層となって堆積している。この鍵層の堆積状況による二次の4群に大別される。

①苫小牧火山灰が床面に堆積しているもの 2棟 IV G 4住、VII I 16住

②苫小牧火山灰が床面に達せず、埋土中位に堆積しているもの 3棟 VII B 21住、VII E 16住、VII F 18住

③十和田a 降下火山灰が床面に堆積しているもの 5棟 IV G 7住、VA 4住、V H 1住 VII F 23住、VII G 8住

④十和田a 降下火山灰が床面に達せず、埋土中位に堆積しているもの 3棟 I C 4住、VI F 13住、VII A 16住

⑤その他 2棟 IV J 2住、VI E 19住

なお、IV G 7住は中位に地山に近い明黄褐色砂質土が厚く堆積しており、洪水などによって一度に流入堆積したものと考えられる。また、VII E 16住では西壁中央に明黄褐色土(地山土)が投入されているが、完全に埋め戻されたものはない。不用土の廃棄の場として凹地(実は竪穴住居跡)が利用されたもののようである。

埋土下位には炭化材が大量に含まれており(12棟)、焼土が層をなしていた(5棟)

注 IV J 2住とVI E 19住の2棟は住居跡全体が削平されており未確認である。ただし、IV J 2住はカマドに十和田 a 降下火山灰が使用されている。

#### 〈壁・床面〉

壁は若干外側に脹むものも認められる（3棟）が、ほとんどの住居跡は直線的である。VII F 23住の西壁は中央部が1 mにわたって10cm内側にせり出し、南半では逆に20cmほど外側に張り出し、特異な形状となっている。また、VII A 16住の東壁は長さ1.2 mにわたる幅45cmのテラスをもっている。高さは床面から30cm、検出面から20cmで壁高の中間に位置している。

隅は基本的に角ばるものようである。中には隅丸となるものもあって識別困難である。強いて分けるならば、隅丸方形8、角ばるもの2、中間形態5となる。

壁の立ち上がりは直に近く、壁高は14～75cmである。20～40cmのものが大多数を占める。低いものは削平されたものであり、本来の高さはVI F 13住、VII F 23住の60cm、75cmほどであったと推定される。

床面は幾分凹凸あるものの平坦である。貼床されているものは7棟（IV G 4住、IV J 2住、V A 4住、V H 1住、VII I 16住、VI F 13住、VII B 21住）であり、前5者が全面貼床で、後2者は北半部に限られている。

床面はVII A 16住など4棟は北半が堅く締まっており、VII F 18住など2棟はカマドの前が堅くなっていた。また、IV J 2住など3棟はカマドの前が若干凹んでいた。

#### 〈柱穴〉

柱穴の精査は床面下20cmまで掘り下げて確認しているが、検出された柱穴数は1個が3棟、2個が4棟、3個が2棟、5個・6個が各1棟で、全く確認されないものが4棟であった。15棟で28穴であり、極めて少ない。

柱穴検出数	0	4棟	V H 1住、VI I 16住、VII A 16住、VII F 18住
〃	1	3棟	IV G 4住、IV G 7住、IV J 2住
〃	2	4棟	V A 4住、VI F 13住、VI E 19住、VII G 8住
〃	3	2棟	VII B 21住、VII E 16住
〃	5	1棟	VII F 23住
〃	6	1棟	I C 4住

このうち主柱穴と考えられるものはI C 4住のP 1～P 4、IV G 4住、IV G 7住、IV J 2住のP 1、VII B 21住P 1・P 2、VII E 16住P 2・P 3、VII G 8住P 2の12柱穴である。他は規模が小さく補助的なものと推定される。

主柱穴の柱配置はI C 4住によると、東側列が東壁に接し、西側列が壁の内側1.0m、1.2m内側に位置し、東に片寄る配置となっている。VII B 21住の2柱穴を除いた他の柱穴はI C 4住



のP3・P4の位置にあたっており、同様のものと推定される。

ⅦB21住ではP1・P2が短軸方向の中央で、長軸方向の西 $\frac{1}{2}$ とほぼ中央に位置しており、棟持柱と考えられる。P1の真上には炭化した柱穴が立ったままの状態で見えされており、P2が先行するものと思われる。

補助柱穴の柱配置はⅦE19住、ⅦF13住によると、壁と壁の中央部か $\frac{1}{2}$ 付近で、壁に接する位置に当たっている。ⅦF23住では西側列の3柱穴が壁外に接し、若干外傾していた。なお、ⅦE19住のP1の真上には炭化した柱材が立っており、直径8cmと幾分小さくなっていた。

注 直径25cm前後で、深さが20cm以上の比較的大きいものを支柱穴とする。

#### 〈カマド〉

カマドは15棟から17例検出されている。造り替えを含めると20例となる。カマドの位置は北壁4例（東端3、中央1）、東壁10例（南端8、北端2）、南壁3例（西端2、東端1）である。なお、ⅠC4住とⅦE19住は燃焼部と考えられる焼土から推定したものである。

カマドは焚き口部、燃焼部、側壁、天井部、煙道、煙出しから構成される。焚き口部は堅く踏み固められ（6例）、ⅦA16住では若干窪地となっている。

燃焼部は壁に接するもの3例、壁の10cm内側2例、内側20cm1例、内側30cm3例、内側40cm4例、内側50cm2例であり、ほとんど壁の内側に位置している。ⅣJ2住は一部壁外に及ぶものである。焼土は直径30～60cmの円形と53×35cm～20cm×1.1mの長円形のものがあり、その厚さは5～20cmである。燃焼部の幅は20～50cmである。

側壁は崩壊してはつきりしないものも認められるが、いずれも礫を芯としてシルトで固めているようである。構成礫は扁平な円礫を縦位に並べたものが一般的であるが、その上に扁平な礫を横位に載せたものも認められる（ⅦG8住）。なお、ⅤH1住のカマド2によると礫は床面に小穴を掘り込んで設置しているようである。

天井部はほとんどのものが崩落して原位置を保っていないが、ⅣF13住によると支脚部を除いて扁平な礫を載せている（6例）。

煙道はⅦE16住カマド2の割り貫きのものを除いて溝状を呈し、側壁と同様に礫を立て並べて構築している。（ⅦI16住を除く）。煙道の長さは削平されたものを除いて壁外部分が20cm～1.8mである。20～65cmと短いもの（5例）と、95cm×1.8mと長いもの（5例）とがある。前者は燃焼部から急激に立ち上がり、後者はⅦA13住を除いて燃焼部から緩やかに立ち上がるもの、燃焼部から幾分上がり、煙出しに向かって若干下り勾配となるもの、燃焼部から一段上がった後、僅かに上り勾配となるものなどがある。

煙出しはⅦB21住カマド2、ⅦE16住カマド2、ⅦG8住の3例を除き、煙道がそのまま緩く立ち上がる。ⅦB21住カマド2など3例は直径35～50cmの煙出しをもち、直に立ち上がって

いる。

支脚は燃焼部の中央に位置している。礫を用いるものがⅣG 7住、ⅥF 13住、ⅦB 21住カマド 2 の 3 例、土器を用いるものがⅣJ 2 住（小型甕）、ⅤH 1 住カマド 1（礫の上に坏 2 個）、ⅦB 21 住カマド 2・3（小型甕の底部）の 4 例である。

重複の認められるものはⅤH 1 住、ⅦB 21 住、ⅦE 16 住の 3 棟である。カマドの造り替えには場所を移動するものと、同一の場所で造り替えるものがある。前者はⅤH 1 住、ⅦE 16 住の 2 棟で、南壁東端から東壁南端、東壁南端から北壁中央に移動している。ⅦE 16 住によると刳り貫き煙道から素掘り煙道に変わっている。

後者はⅦB 21 住、ⅦE 16 住の 2 棟で、ⅦB 21 住では 2 回の造り替えが認められる。2 期では全体的に 50cm ほど東に移動し、深い煙出しを伴うものとしている。3 期では 2 期と同位置で、燃焼部と煙道の内側に礫を入れて狭くし、燃焼部底面は 10cm ほどかさ上げし、新たに小型甕を支脚として上載せしている。この時煙出しは煙道がそのまま緩く立ち上がるものに変化している。

ⅦE 16 住カマド 1 は煙道の幅が狭く深いものから、幅が広く浅いものになり、これに伴って燃焼部を 5cm ほど上げている。

#### 〈土壌〉

15 棟の竪穴住居跡内から大小の土壌が 60 基発見されている。平面形は円形 25、長円形 24、長方形 9、L 字形 1、方形 1 である。円形、長円形の中には底部が壁外に張り出して袋状をなすものが 8 例ある。ほとんどのものが南壁東端に位置している。規模は円形が直径 25cm～1.3m で、ほとんど 40～50cm である。深さは 7～78cm で、ⅠC 4 住土壌 5、ⅦF 18 住土壌 6 を除いて 20～30cm の比較的浅いものが多い。

長円形は不整なものが多いが、48×32cm～1.5m×64cm で、大多数のものは 60～90cm×30～60cm である。深さは 7～43cm である。長方形は 80×55cm～1.6×1.0m と大型で、深さも 23～80cm と深いものが多い。

埋土は褐色～黒褐色混土、赤褐色混土などで、焼土、炭化物を含むものが多く、ほとんど人為的に埋め戻されている。上面に貼床されている例もあり、一般的には常時使用されていたものではないようである。自然堆積状況を示し、廃棄時に開口していたとみられるものはⅠC 4 住土壌 1・2・4、ⅣG 4 住土壌 3、ⅤA 4 住土壌 1、ⅤH 1 住土壌 1、ⅦA 16 住土壌 2、ⅦE 16 住土壌 1、ⅦF 18 住土壌 5、ⅦG 8 住土壌 1・2 の 11 例である。

位置的には住居跡全体に散在するもの（3 棟）と、カマド近くに集中するもの（12 棟）とがあり、カマドの脇に位置するものがⅣG 7 住土壌 2、ⅣJ 2 住土壌 3、ⅤA 4 住土壌 4、ⅤH 1 住土壌 1・2、ⅥE 19 住土壌 3・5、ⅥI 16 住土壌、ⅦF 18 住土壌 5、ⅦG 8 住土壌 1 の 10

例である。

これらの土壌のうちカマドの脇やカマド近くに位置するもの、袋状を呈するもの、廃棄時に開口していたものなどは貯蔵穴が推定される。他はⅦF18住のように配置から柱穴の想定されるものもあるが不明である。なお、ⅤA4住土壌2はカマドの下に構築された特異な例である。

#### 〈周溝〉

周溝の確認された竪穴住居跡はⅥE19住、ⅦA16住、ⅦE16住、ⅦF23住、ⅦG8住の5棟である。いずれも全体形を確認したものではないが、ⅥE19住等4棟は壁に添って全周するものようである。周溝の幅は10~20cmで、深さが3~11cmである。削平されて痕跡の部分では小ピットの連続として検出されている。

これに対しⅦA16住は住居跡の西半でのみ確認されている。その配置は住居跡を2分する位置と西壁際に平行する2本の溝と、これに直交する南壁際と北壁の南30cmの2本の溝からなる。溝の底には煤の付着や、帯状の焦付き、焼土化など根太の痕跡をそのまま残している。根太に対応する配置となっている。

#### 〈炭化材〉

炭化材の検出された住居跡は11棟である。炭化材の分布は遺存状況によるが住居跡全域に及ぶもの(6棟)と、一部分に限定されるもの(4棟)とがある。炭化材には丸太材、板材が放射状を呈するもの(ⅠC4住、ⅣG7住、ⅦB21住の3棟)と、板材が整然と並んでいるもの(ⅥE19住、ⅣF13住、ⅦA16住の3棟)とがあり、上屋構造材と推定される。

上屋構造材は対角線をなす太い丸太材(叉首)と、その間のやや細い丸太材(垂木)からなり、クリ・ケヤキ・タモなどの広葉樹が使用されている。ⅣG7住はほとんどクリ、ⅠC4住はクリとケヤキが半々、ⅦB21住はケヤキ・不明広葉樹でクリは全く使用されなく、住居跡によって差がある。

床材は1.5m(ⅥE19住)、1.7m(ⅦA16住)間隔に渡された丸太材(根太)と間隙なく並べられた板材(敷板)からなり、敷板は3棟とも全てクリで、根太はケヤキ・ホウ・不明広葉樹などでクリは使用されていない。(詳細は「敷板住居跡について」を参照)

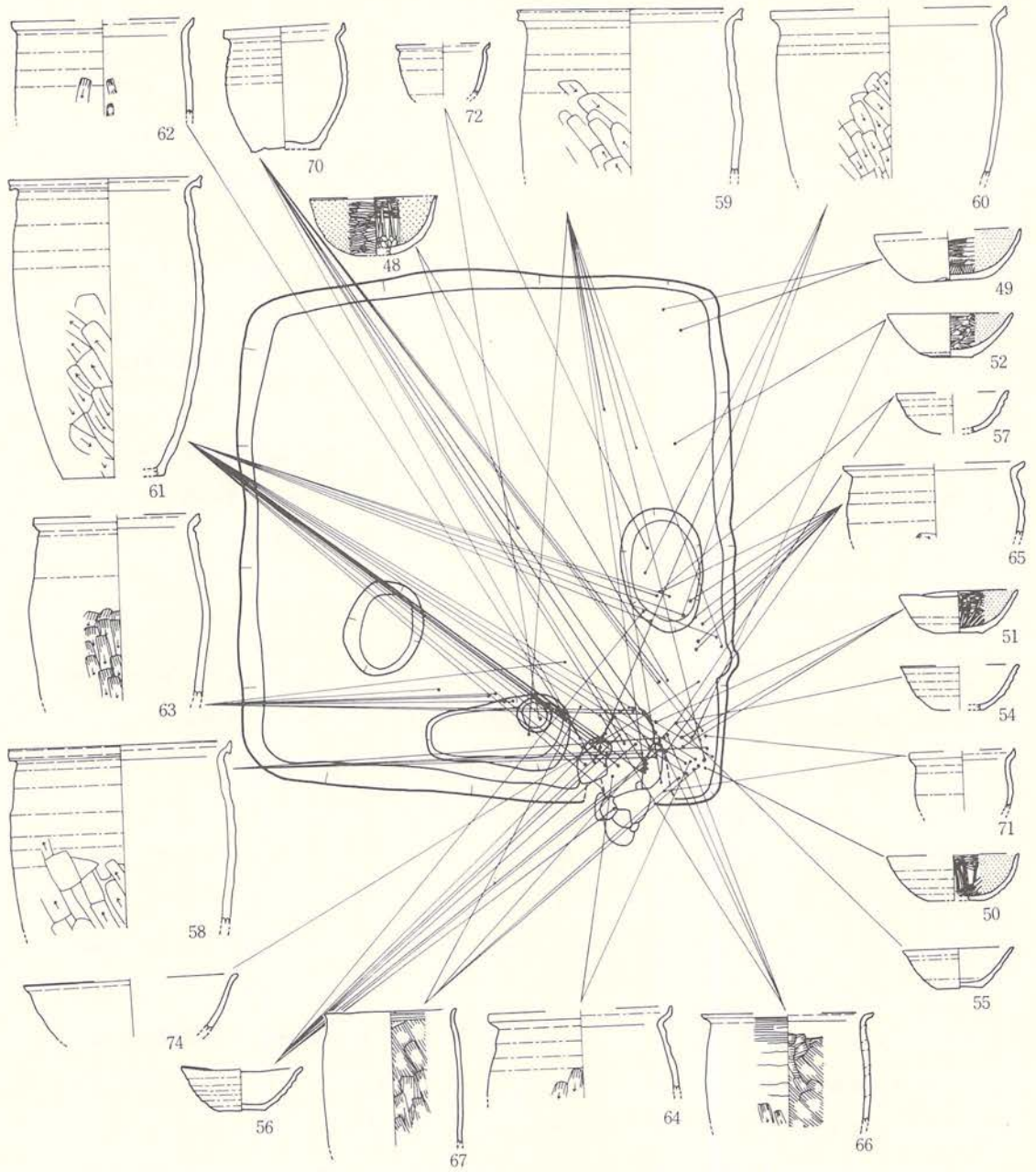
なお、ⅥF13住では壁材に使用されたとみられるクリの割板材(断面三角形)が発見されている。壁に対して横位に使用されている。

#### 〈出土遺物〉

竪穴住居跡から発見された遺物総数は2035点である。住居跡別出土数は下表のとおりで、25点から267点と住居跡によって多寡があり、また、大型破片を多く含むもの、細片のみのものなどがあって一様ではない。

遺物の大多数は土師器(76.3%)で、須恵器は3.6%と極めて少ない。須恵器を伴う住居跡

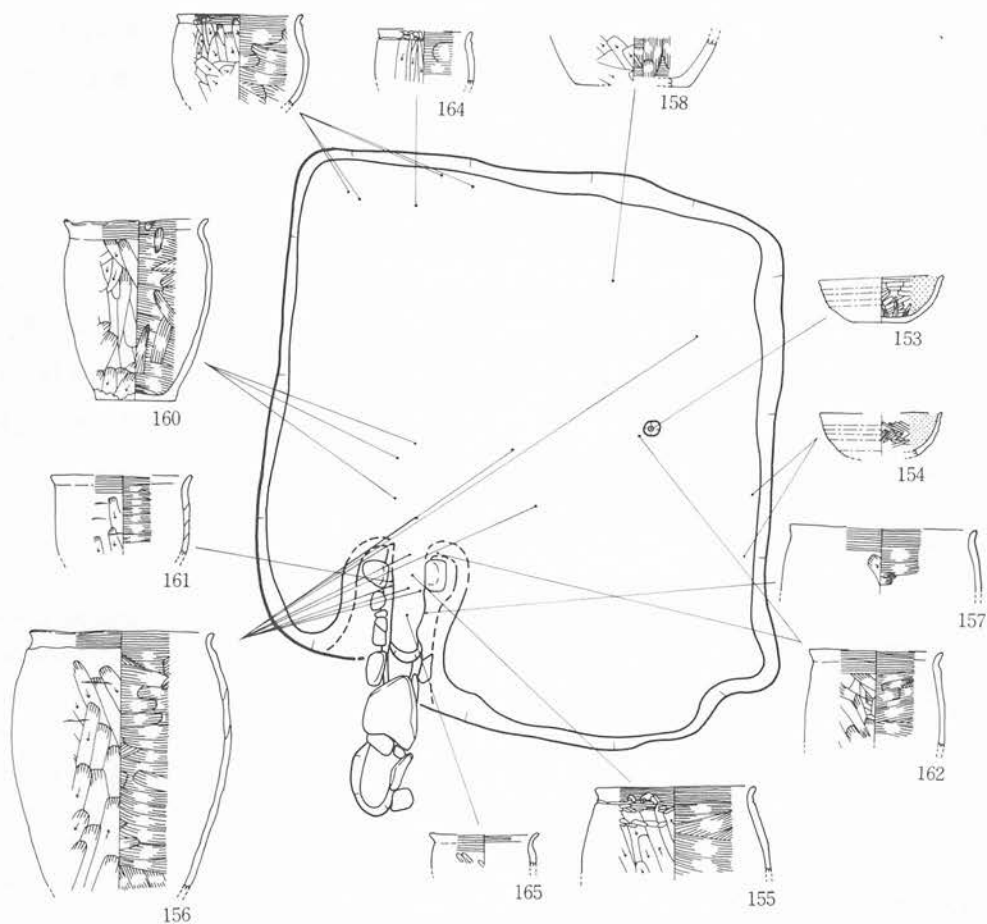




第144図 IV G 7 竪穴住居跡遺物分布図

は、半数の8棟であるが、I C 4 住を除いてほとんど細片である。この他には鉄鏃3点、刀子3点、釘1点など鉄製品が0.3%、砥石5点、硯1点など石製品(0.3%)、炭化穀類がある。また、縄文土器(361)、石器類(25)など縄文時代の遺物(19.0%)がある。

縄文土器、石器は住居跡埋土から発見されたもので、いずれも細片である。時期的には縄文時代早期中葉、前期前・中葉、後期、晩期の粗製土器などである。



第145図 VII A 16竪穴住居跡遺物分布図

	坏			甕		その他		坏			甕		その他
	両黒	内黒	赤焼	ロクロ使	ロクロ不用			両黒	内黒	赤焼	ロクロ使	ロクロ不用	
I C 4住		7	1	4	1(1)	鉢3	VI I 16住				2	8(1)	壺、鉢3
VI G 4住	2	7	1	9	2		VII A 16住		2		1	13	鉢
VI G 7住	1	5	4	12	2(1)	鉢、埴	VII B 21住	4	5	1	8	4	鉢
VI J 2住		1	2	2			VII E 16住			1		14	埴甎、皿
V A 4住		2	2	3	7(2)		VII F 18住		2	1	1	7	
V H 1住		4	5	3	(2)		VII F 23住		2	3		9	鉢
VI F 13住					4	鉢	VII G 8住		4	3	4		
VI E 19住		1			8								

( )は不明

土師器、須恵器は全体的にカマドの反対側が少なく、主にカマドの周辺の床面や土壌埋土から発見されている。掲載遺物による器種別の出土状況は、ⅣG 7住、ⅦA 16住（第145図）では坏がカマドに向って左側の壁際に散在し、甕がカマド周辺に密集していた。土壌出土遺物にはカマド近くの貯蔵穴とみられるものと、埋め戻された土壌のものがある。

刀子及び鉄鏝はカマド近くから発見され、砥石はカマドに向って右側の壁際に位置していた。

〈年代〉

竪穴住居跡を土器のセット関係で分けると次のようになる。①内面黒色処理を施した坏が主体をなすもの5棟（ⅠC 4住、ⅣG 4住、ⅥE 19住、ⅦA 16住、ⅦB 21住）。②内面黒色処理を施した坏と黒色無処理の坏がほぼ同数存在するもの7棟（ⅣG 7住、ⅣJ 2住、ⅤA 4住、ⅤH 1住、ⅦF 18住、ⅦF 23住、ⅦG 8住）。③内面黒色無処理の坏が主体をなすもの1棟（ⅦE 16住）。④坏を伴わないもの2棟（ⅥF 13住、ⅥI 16住）。

	土師器	須恵器	その他	縄文土器	石器類		土師器	須恵器	その他	縄文土器	石器類
ⅠC 4住	156	21				ⅥI 16住	85		釘	6	1
ⅣG 4住	107	2				ⅦA 16住	85		刀子、砥石	38	3
ⅣG 7住	98	6	鏝、硯、穀類			ⅦB 21住	267			49	1
ⅣJ 2住	25					ⅦE 16住	154	3		14	
ⅤA 4住	75	34		2		ⅦF 18住	86			32	1
ⅤH 1住	67	5		3		ⅦF 23住	176	1	砥石、鏝、穀類	186	18
ⅥF 13住	28		砥石	25	1	ⅦG 8住	60	1		6	
ⅥE 19住	74		刀子								

土師器1,553、須恵器73、鏝3、刀子3、釘1、硯1、砥石5、縄文土器361、石器類25

①群では、ロクロ使用甕が主体をなすものが3棟で大多数を占め、②群では、ロクロ使用甕を主体となすものが4棟、ロクロ不使用甕が主体をなすものが3棟とほぼ半数であり、③群ではロクロ不使用甕が主体をなしている。このことから内面黒色処理を施した坏はロクロ使用甕と密接な関係にあり、逆に内面黒色無処理の坏はロクロ不使用甕と供伴関係にあると言えよう。

なお、内外両面とも黒色処理された坏は①群に限られている。

直接年代を決定する資料はないが、埋土に鍵層となる十和田 a 降下火山灰、苫小牧火山灰を伴うものがある。十和田 a 降下火山灰が A D 900 年代、苫小牧火山灰が平安時代末期頃が考えられている。上記の群を埋土との関連で見ると、①群のうち2棟は十和田 a 降下火山灰が床面に堆積し、1棟は苫小牧火山灰が床面に、1棟は埋土中位に堆積している。②群のうち5棟は十和田 a 降下火山灰が埋土中位に、1棟が床面に堆積し、1棟が苫小牧火山灰が埋土中位に、1棟が床面に堆積している。③群は苫小牧火山灰が床面に堆積していた。したがって年代は、①群は十和田 a 降下火山灰の降下以前の極く近い時期から、苫小牧火山灰の降下以前の極く近



い時期（10世紀中頃から11世紀中頃）が想定でき、同様に②群は十和田 a 降下火山灰の降下以前（埋土がある程度埋まる期間）から、苫小牧火山灰の降下以前の極く近い時期（10世紀初め頃から11世紀中頃）が考えられる。また、③群は苫小牧火山灰が降下以前の極めて近い時期（11世紀中頃）が推定される。

注(1)VI E 19住は坏が1点の出土しかなく、しかも、住居跡が全体的に削平されてははっきりしない。

(2)「東北地方北部の遺跡と火山灰の検討」高橋与右エ門、鈴木克彦、小林克『考古風土記 8』1983

### 敷板住居跡について

敷板住居跡については、以前から床面の堅さの違いや、間仕切溝の存在などによってある程度推定されていた。しかし、板材が敷かれて出土する例が少なく、はっきりしなかった。中には敷板住居ではないかと報告されたものもあったが、転根太？と板材が逆転しているものや、壁材と混同しているもの<sup>(注1)</sup>などがあって、必ずしも明確ではなかった。壁に対して直角方向をなす板材のほとんどは壁に遺存する板材に対応し、下には転根太を伴わず、壁材が倒壊したとみられる<sup>(注2)</sup>。

ところが、今回の調査では転根太の上に敷かれた状態で板材が発見され、床板として機能していたことが明らかとなった。その後、桂平遺跡、飛鳥台地 I 遺跡でも同様の根太の上に敷き並べた板材が発見され、敷板住居の存在がより明確となった。今のところ敷板住居ではないかと考えられる遺構は11遺跡14例<sup>(注3)</sup>である。この中で、五庵 I 遺跡の炭化板材は保存状態が良好なため、その構造をある程度復元することができる。そこで、敷板住居跡について若干詳述することにしよう。

なお、ここでは転根太を伴い、規則的に敷き並べられて明らかに敷板住居とみられる五庵遺跡 VII A 16住、同 VI E 19住、上平沢新田遺跡 Ag30住<sup>(注4)</sup>、桂平遺跡 IV D-1 住<sup>(注5)</sup>、下乳牛遺跡 S I 01住<sup>(注6)</sup>、飛鳥台地 I 遺跡 H III-9 住<sup>(注7)</sup>の6例に限定して使用する。

注(1)小平高砂遺跡 B H-18は床板が存在し敷板住居であるという。しかし、①床板としている中に方向の異なる長い板材があって、他の床板の上あるいは下になっている。長い板材が転根太であるならば、下の床板ははたして「床板」であろうか？。②床板と土止め板の幅がほぼ一致し、しかも対応関係が捉えられる。などのことから、壁材が倒壊したものである<sup>(注8)</sup>ではないかと考えられる。

(2)大平遺跡 H-23号竪穴住居跡では「床面に同一方向をもって整然とみられ」、「板敷であった可能性」があるという。しかし、断面図（B-A）では壁材が倒れた状況を示している。

(3)永野遺跡土師第11号竪穴住居跡など。

(4)第147図の6例以外には上の山Ⅶ遺跡BⅣ-1住、同EⅡ-3住、江刺家遺跡HⅡ-1住、大平遺跡H25住、同37住、源常平遺跡第18号住、和野前山遺跡第2号住、山内遺跡H-23号住などがある。

(5)「上平沢新田遺跡」吉田努、千葉周秋『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』岩手県教育委員会。1980、3

(6)昭和60年度調査、未報告（現在報告書作成中）、平井進文化財専門調査員から資料提供を受けた。

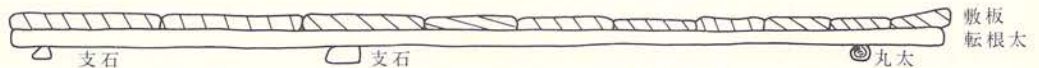
(7)「下乳牛遺跡」熊谷太郎『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅺ』秋田県教育委員会1984、12。

(8)昭和59・60年度調査、未報告（現在報告書作成中）、三浦謙一・玉川英喜文化財専門調査員から資料提供を受けた

#### (1)敷板床の構造

敷板床の構造は、中には転根太を伴わないものもあるようであるが、基本的には転根太を渡した上に敷板を整然と並べる構造となっている。

なお、五庵Ⅰ遺跡ⅦA16住では、転根太の下に支石と丸太材を入れており、高さを一定に保っている。転根太の下には対応する位置に溝があり、配水と湿気除けを目的としたものである。支石、丸太は床面から約3cmほど上っており、その上に6・7cmの転根太が載り、さらに6cmの敷板が載っており、敷板床の高さは床面（土間の面）から少なくとも15・6cm高くなっていたと推定される。



第146図 敷板床模式図

根太には直径12・3cmの丸太材か、丸太の割材を使用している。転根太の幅は1.2~1.9mで、11例のうち5例が1.7m、1.8mであった、上平沢新田遺跡例では2.7cmであったが、あるいは桂平遺跡例のように2分されたものかもしれない。転根太は敷板に対して直交するが、中には幾分傾くものもある（下乳牛遺跡例）。敷板の方向に左右されるが、壁に対して直交するものが多い傾向にある。

転根太の設置には不明な点も多いが、下乳牛遺跡では下半を土中に埋めている。<sup>(注2)</sup>五庵Ⅰ遺跡ⅦA16住では周溝が対応しており埋められたとも解釈されるが、転根太の下に支石と丸太が伴っており、むしろかさ上げされている。

根太の材質は五庵例によるとホウ、ケヤキ、不明広葉樹である。

注(1)上の山Ⅶ遺跡BⅣ-1住、山内遺跡H-23住など。

(2)報告書によると、根太と敷板の間に褐色土を入れているというが、構築時における行為であろうか疑問である。

敷板は割材を使用している。幅は17~52cmで、30cm前後のものが多い。長さは、住居跡によって若干異なるが、2.0~3.4mである。厚さは遺存状況にもよるが、ほとんどの場合は表面の一部に限定され極めて薄い。ただし、燻焼状態となった五庵Ⅰ遺跡では最大6cmのものがみられ2寸前後の板材を使用していたと推定される。

敷板の範囲は、全面敷かれたとみられるものもあるが、住居跡の $\frac{1}{2}$ あるいは $\frac{1}{3}$ 、 $\frac{1}{4}$ である。

①床面の約 $\frac{1}{2}$ を占めるもの2例（五庵Ⅰ遺跡ⅦA16住、同ⅥE19住）

②床面の約 $\frac{1}{3}$ を占めるもの1例（飛鳥台地Ⅰ遺跡HⅢ-9住）

③床面の約 $\frac{1}{4}$ を占めるもの3例（上平沢新田遺跡Ag30住、下乳牛遺跡SⅠ01住、桂平遺跡ⅣD-1住）

敷板の幅は1.8m、2.3m、1.5m、1.2m、1.8m（根太によると2.1cm）、1.7mである。

材質は五庵Ⅰ遺跡ではほとんど栗であり、上平沢新田遺跡では松、他が使用されていた。

注(1)大平遺跡H-37住、同H-25住、山内遺跡H-23住など。

(2)東西方向、南北方向共に約 $\frac{1}{2}$ である。

## (2)敷板床の配置

敷板床の竪穴住居跡における位置は、大多数のものはどちらか1辺に片寄っている。これを地形によってみると、斜面上位に位置するものが5例で、桂平遺跡例のみが斜面上位から下位にかけてに位置していた。しかし、斜面下位に位置するものはない。方位では、西が3例、南、北、北から東にかけてが各1例であり、方位にはあまり左右されないものようである。

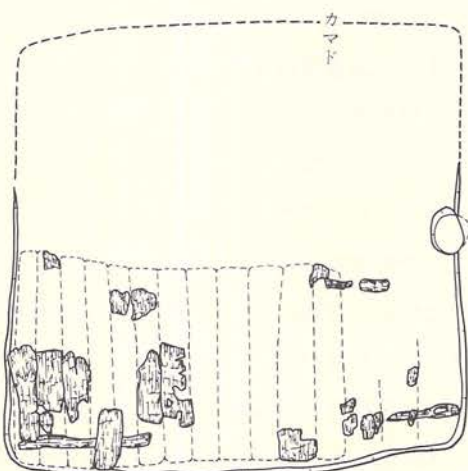
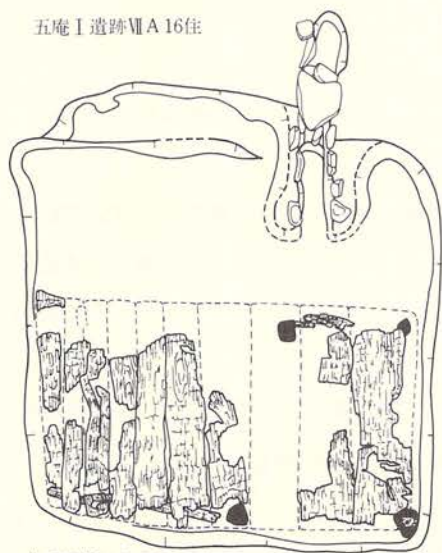
カマドに対しては、①反対側に位置するもの4例（五庵Ⅰ遺跡ⅦA16住、同ⅥE19住、上平沢新田遺跡Ag30住、下乳牛遺跡SⅠ01住）、②左側に位置するもの1例（桂平遺跡ⅣD-1住）③反対側から右側に位置するもの1例（飛鳥台地Ⅰ遺跡HⅣ-9住）であり、反対側に位置するものが多い。

入口との関係では、入口そのもののはっきりせず断言できないが、入口の判明している上平沢新田遺跡、下乳牛遺跡例では、入口の右側がカマド、左側が敷板床となっている。五庵Ⅰ遺跡ⅦA16住では、カマドをもつ壁に段をもっており入口と考えられ、正面が敷板床となっている。また、敷板床は五庵Ⅰ遺跡の2例を除き、主桂穴の外側に位置し、室内空間の利用の仕方が異なるようである。

注(1)以上の他には、和野前山遺跡第2号住のように、右、左両側に位置するものがある。

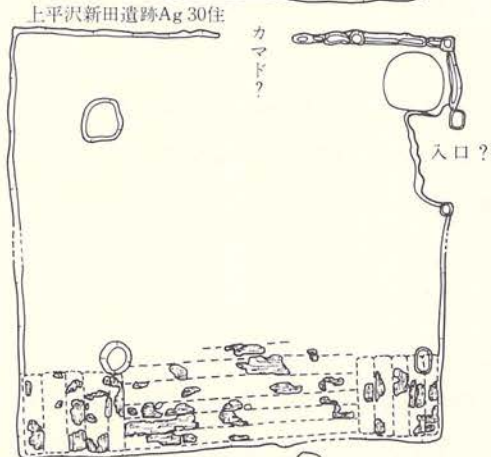


五庵 I 遺跡ⅦA 16住

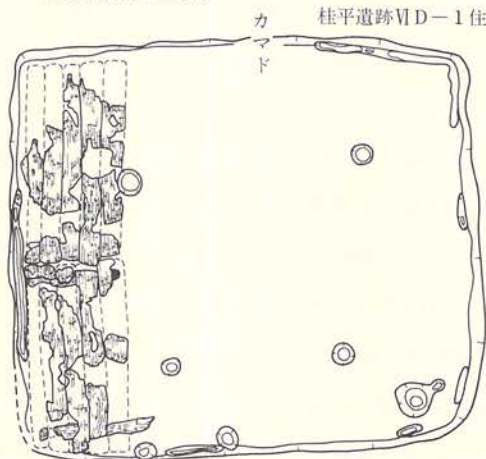


五庵 I 遺跡ⅥE 19住

上平沢新田遺跡Ag 30住



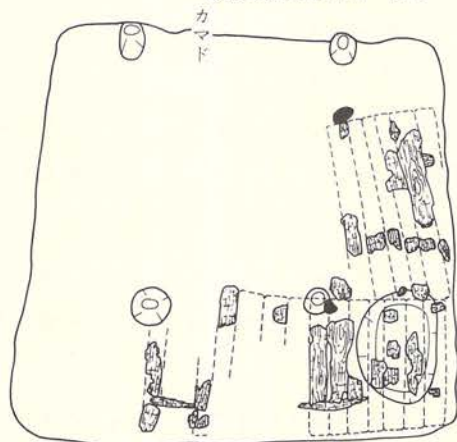
桂平遺跡ⅥD-1 住



下乳牛遺跡SIO 1 住



飛鳥台地 I 遺跡HⅢ-9 住



第 147 図 敷板をもつ住居跡例 (模式図)

(2)報告書では第4図の入口とした部分がカマドではないかとしているが、スロープ状に下がっていることなどから入口とした。

なお、飛鳥台地Ⅰ遺跡では、敷板が土壌に落ちた状態で発見されており、床下貯蔵庫が考えられる。また、五庵Ⅰ遺跡ⅦA16住、上平沢新田遺跡では、坏が敷板床の上で発見されており使用時形態を示している。

## (2) 焼土遺構

検出された焼土遺構は西区3基、東区7基の10基と、第2次調査区2基の12基である。西区の3基は5～7mm間隔にあってややまとまりを示し、焼土遺構のみで構成されている。近くか

	遺構名	大きさ	平面形	厚さ		遺構名	大きさ	平面形	厚さ
1	ⅠH7 焼土遺構	30×24cm	不整形	3cm	7	ⅦB20焼土遺構	48×42	円形	4
2	ⅠJ7 "	63×40	不整三角形	4	8	ⅦH19 "	30×25	円形	3
3	ⅡA9 "	1.45m×95cm	不整長円形	6	9	ⅦF21 "	65×50	円形	7
4	ⅥH6-1 "	1.13m×63cm	不整楕円形	8	10	ⅦH24 "	40×38	円形	6
5	ⅥH6-2 "	36×27	不整楕円形	3	11	ⅦA28 "	58×-	円形	6
6	ⅥH6-3 "	54×45	不整長円形	5	12	ⅦC27 "	60×52	不整形	14

ら土師器、須恵器が発見されており、古代（平安時代）に属するものと思われる。

東区の7基のうちⅥH6-1 焼土遺構等3基は隣接しており、同時に形成された可能性がある。この中には近くから土師器の発見されたものもあるが、所属時期については中世の竪穴住居跡の埋土上位に構築されたこともあって、中世以降が想定される。

ⅦB20焼土遺構等4基は古代の集落の中に10～14m間隔に点在している。ⅦB20、ⅦE19の2焼土遺構は古代の検出面で発見されたものであり、帰属する時期に疑問はないが、ⅦF21、ⅦH24の2遺構については、全体的に削平されて判然としない。ただ、焼土の下に掘り込みをもつという共通した構造をもっており同時期のものとみなしてほぼ誤りなからう。これらの焼土遺構は竪穴住居跡との関連で見ると、下のように住居跡からの方向は異なるが、いずれも3・4m離れた場所に位置しており、何らかの関連が想起される。

ⅦB20焼土遺構	ⅦB22竪穴住居跡の北方4m
ⅦE19焼土遺構	ⅦE16竪穴住居跡の南方4m
ⅦF21焼土遺構	ⅦF18竪穴住居跡の南方4m
ⅦH24焼土遺構	ⅦF23竪穴住居跡の東方3m

第2次調査区の2基は10m離れている。中世の土壌などの中に含まれているが、近くには竪穴住居跡はない。ⅦC27焼土遺構は十和田a降下火山灰の上位に形成されており、中世以降に

属するものと考えられる。

焼土遺構の平面形はⅡA9、ⅥH6-1焼土遺構の1.45m×95cm、1.13m×63cmの長大なものを除いて、ほとんど30~60cmの不整であるが、円形に近い形状をなしている。焼土はいずれもレンズ状を呈する現地性焼土で、厚さは3~14cmである。

### (3) 土壌

平安時代とした15基は、時期決定資料となる土器を欠くものの、平安時代住居跡と共通の埋土(十和田a降下火山灰やススキの混入)・偏在はするがまとまり、住居跡との結びつきを強く感じさせる占地・斉一性のある形状等から該当時期とした。以下その概略をまとめる。

#### 〈形状〉

調査から、開口部の崩落・削平があり、更に個々の遺構に度合いの差異が観察される。幸い後述するように、開口部形状が底部形状と差異がないので、底部の形状、規模を中心に記述することにする。深さは残存する最深部で記述する。

平面形は円形、断面形は底面からほぼ真っ直ぐ立ち上がるピーカー形を基調とするが、他に長い円形(1)、やや長い円形(3・10)、長い隅丸方形(7)のタイプもある。崩落は1・3・9・10の大型タイプに著しい。削平が顕著であるのは4・8・12である。

#### 〈規模〉

計測値の単純な平均値は、底部長軸長211cm・底部短軸長189cm・深さ103cm・底部面積3.09㎡・最大容量(底部面積×深さ)である。以下計測部位ごとに記述する。

#### (A) 底部径

長軸長の長い1(短軸長175cmに対し、長軸長302cm)を除くと、長軸長の平均が204cmと短軸長189cmに対して差が少なく、ほぼ円形あるいは円形に近い形状を示している。

1を除く底部径は、大型グループ(3・4・7・9・10・15)と、小型グループ(2・5・6・8・11・12・13・14)に分けられる。更に大型グループは4・9と3・7・10・15(前者が大きい)に、小型グループは2・8・11・14と5・6・12・13(前者が大きい)とに分けられる。

#### (B) 深さ

底部径が大きい土壌は深く、底部径が小さい土壌は浅いという傾向がある。しかし5のように底部径が小型グループに入るが深い土壌、4のように底部径が大型グループに入るが、削平された分を考慮しても浅い土壌がある。斜面部に位置する12と15の深さは、12が最も深い部分で60cm、浅い部分で36cm、15が最も深い部分で112cmと、斜面下位部分が浅い。

#### (C) 底部面積



底部面積は、3.7㎡以上、平均4.08㎡の大型グループ（1・3・4・7・9・10）と2.82㎡以上・平均2.34㎡の小型グループ（2・5・6・8・11・12・13・14）、これら二者の中間にある15（3.24㎡）とに分かれる。小型グループは更に、2.42～2.82㎡・平均2.57㎡のグループ（2・5・8・11・14）と、1.82～2.13㎡・平均1.94㎡のグループ（6・12・13）に分かれる。

#### （D）最大容量

削平されて浅い4・8・12は少ない。特に4は底部面積が当該遺構で最大であるが、浅いため少ない。逆に底部面積に対し深さがある5は多い

#### 〈ⅦH19土壌の小土壌について〉

当該土壌に、小土壌を有するのはⅦH19土壌だけである。

この小土壌は、形状と埋土に特徴がある。形状は円筒状であるが、斜面下位の壁際の開口部から真っ直ぐ下に掘り込まず、斜面下位方向に約15度傾いて構築される。底面はほぼ水平である。埋土は、土壌埋土が自然堆積で普通のしまり方であるのに対し、小土壌の埋土は柔らかくしまりがなく、ほぼ単層である。

これら形状・埋土から推定されることは、小土壌の開口部を覆う蓋の役目を果たす施設があり、土壌が埋没する際、小土壌に多量に埋土が入らなかったと考えられる。機能的には貯蔵穴と考えられる。

#### 〈埋土〉

当該土壌を平安時代とした根拠の一つに埋土をあげたことは既に述べた。以下概略を述べる。

11を除く他は、下位壁際には地山崩落土がクサビ状に、下位中央から上はレンズ状に堆積する自然堆積状況を示す。

鍵層となるのは十和田 a 降下火山灰である。観察できなかった3基（4・6・15）を除く12基に混入する。混入する層位は、ほぼ中位であるが、1・9・11・14は、下位または床面直上（11）である。いずれも小ブロック状、あるいは散在して混入する。

炭化したススキからなる、あるいは炭化したススキを含む埋土は、13を除く14基に入る。レンズ状に堆積するが、弓状に細く堆積する土壌もある。いずれも自然堆積状況を示す。

十和田 a 降下火山灰はこのススキより下位に混入することが多いが、直上（10）や上下（9）に混入する土壌もある。

当該土壌の十和田 a 降下火山灰と炭化したススキの堆積状況が、土壌付近の平安時代住居跡埋土と酷似している。

なお、11では下位中央部分に異地性の焼土が小ブロックで混入する。埋土中に焼土が混入するのは当該土壌だけである。

#### 〈床面から出土する植物遺体と被焼成シルト質土について〉

床面から植物遺体が出土する当該遺構は3基（2・4・6）ある。2からは丸木・ススキ、4からは炭化材（タモ）・ススキの集合体、6からは丸木（エンジュ）がそれぞれ出土する。これらはいずれも床面からの出土であり、埋土から出土する例はない。

植物遺体とともに2では、焼成を受けたシルト質土（被焼成シルト質土）が底一面を覆う。被焼成シルト質土の下位には、他堆積土は観察しなかった。また底面・壁面が焼成をうけた痕跡はなかった。したがってこの被焼成シルト質土および植物遺体は、当土壌が開口中に床面を覆う状況があったものと推定される。

このような2および4・6のような床面からの出土状況は単なる投げ込みではなく、上屋構造材にかかわるものと考えられる。

#### 〈床面に形成された現地性焼土—13土壌の例〉

床面の焼土は現地性であり、土壌が開口中に形成されたと考えられる。しかし、そのまとまらない形状・薄い焼土は炉などによる長時間の焼土形成とは異なり、短時間に形成されたと考えられる。また埋土は自然堆積状況を示し、炭化材等自然遺物は出土していないことから、開口時焼土形成後再使用し、その後埋土が堆積したと考えられる。

#### 〈出土遺物〉

遺物が出土する当該土壌は10基（3・4・6・7・9・10・11・12・13・14）ある。縄文土器だけ出土する土壌は6・7・11・12、土師器だけ出土した土壌は3・4・13・14、縄文土器と土師器の双方が出土する土壌は9・10である。石器は7と11から出土している。

時期が比定できる遺物は、6土壌から出土する273・297が縄文時代後期中～後葉、9土壌の283が縄文時代早期後葉、284が縄文時代晩期中葉（大洞C<sub>2</sub>式）、10土壌の289が縄文時代後期後葉の各土器があり、土師器は平安時代と考えられる。

これら遺物は7土壌の石皿（281）を除き、自然堆積した埋土中からの出土であり、流れ込みによるものと考えられる。7土壌の石皿（281）は床面の中央からの出土であり、当土壌に直接かかわる遺物と考えられるが、その直上に異地性焼土が混入する状況から、当遺構の埋土の堆積が始まる時点での流れ込みか投げ込みによると考えられる。

いずれにしても当該遺構の時期決定資料はない。

#### 〈立地〉

1土壌は中央区斜面中位、4土壌は東区中央部斜面中位にそれぞれ位置し、他の13基は東区東部の平坦部および段丘崖寄りに位置する。これら土壌を同時期と考えられる平安時代住居跡と距離関係でみると、1土壌は北方向23mにあるⅣG7住居跡を含む5棟に近く、4土壌は東方向3mにあるⅦG8住居跡に近い。東区東部に位置する13棟は、一番近い例はⅦF18住居跡と10土壌間の2m、一番遠い例はⅥF13住居跡と15土壌間の67m（5土壌では42m）である。

また1と4土壙を東区東部の13基と距離関係で見ると、1は71m(ⅥE19住居跡)、4は31m(ⅦE16住居跡)ある。

このように当該土壙同士や当該土壙と平安時代住居跡の位置関係を形状・規模の特異性と合わせみると、1土壙はⅣG7住居跡を含む5棟、4土壙はⅦG8住居跡の付属施設としての関係が考えられるが、ただし、1土壙と対応する5住居跡は更に斜面下位にその棟数を増すことも考えられ、その点で1土壙と5住居跡の関係は不明確部分をもつ。

東区東部の13基は、東区中央区から東部にかけて位置する住居跡8棟とは占地を異にする。つまり、8棟からなる住居跡群はその東端に土壙群を段丘崖寄りに沿って意識的に位置させているように考えられる。しかし、ⅦE16・ⅦF18・ⅦF23各住居跡のように当該土壙と隣接する例は、4土壙の例のように住居跡と近接する例なのか、それとも両者に時期差があるために結果的に近接したのかははっきりしない。ただ、当該土壙同士の切り合いがないことは、その構築時期に大きな隔たりがないことを推定させる。

このように当該土壙は、4土壙のように住居跡1棟に土壙1基がセットになる例と、住居跡群と土壙の占地を異にする例がある。後者は更に1土壙のように大型土壙1基を住居跡群から離して位置させる例と、住居跡群の一方に偏在、隣接して土壙群を位置させる例がある。特に偏在する土壙群の例は段丘崖に寄って位置する特徴があり、興味ある。

#### 〈機能〉

機能を明確に示す資料は得られていないが、①平安時代住居跡に対し、偏在し、まとまって位置する。②斉一性ある形状・埋土を示す。③上屋があったと考えられる例(2・4・6土壙)などから、住居跡に付属し、上屋をもつ施設と考えられる。その機能としては、炉・焼土等もなく住居としては狭いことから、何らかを貯蔵・安置する目的をもった施設と推定される。

#### 〈構築時期〉

当該土壙は〈埋土〉〈立地〉〈機能〉の各項で述べたように平安時代住居跡との関係が深い。構築時期については、埋土や立地から土壙間に若干の時期差は推定し得るが大きな隔たりはないと考えられ、ほぼ住居跡の時期に比定すると考えられる。

#### 〈他遺跡における当該期の土壙〉

当該時期とする土壙を東北地区に限ってみると、二戸市中曽根・中曽根Ⅱ・火行塚、長瀬A一戸町田中4・子守A、九戸村川向Ⅲ・江刺家、安代町上の山Ⅶ、等各遺跡で報告されている。その機能としては、倉庫(中曽根Ⅱ・田中4各遺跡)、小屋址(上の山Ⅶ遺跡)、住居址状遺構(川向Ⅲ遺跡)、墓(火行塚遺跡)、屋外炉(中曽根Ⅱ・中曽根・田中4・子守A各遺跡)等を紹介している。機能面は紹介していないが長瀬A・江刺家各遺跡の検出例は当該時期としている。形状は、方形・長方形を基調とし、全般に浅いものが多い(火行塚・川向Ⅲの一部を除く)。



では当遺跡の土壌と比較するとき、平面形が円形、断面形がピーカー形の形状を呈するのは火行塚〔E24土坑一(1)・(2)〕と川向Ⅲ〔J-35・37〕各遺跡の例があるが、その類例は少ない。しかし、当遺跡が位置する浄法寺町内での最近の調査で、当土壌に類似する検出例（飛鳥台地Ⅰ・桂平・海上Ⅰ・海上Ⅱ・五庵Ⅱ各遺跡）を知見している（報告書作製中）。また隣接する青森県においては、八戸市売場・六ヶ所村発茶沢各遺跡が当土壌に類似する例を紹介しており、売場遺跡ではその機能、性格について、貯蔵庫、もしくは墓塚の可能性を指摘している。

#### (4) 遺物

古代に属する遺物は土師器、須恵器、土製品、石製品、鉄製品、鉄滓、炭化材、木製品、炭化穀類、堅果類などである。大多数のものは堅穴住居跡出土の土師器である。

##### 土師器

発見された土師器は2588点である。このうち1553点が堅穴住居跡出土で、46点が焼土遺構周辺出土、23点が土壌出土である。また、958点が遺構外遺物であり、2点が縄文土壌、6点が陥し穴状遺構の出土遺物である。器種は坏、甕以外には鉢、塙、甗、皿などであり、坏・甕が圧倒的に多く、他は極めて少ない。

坏には①内外両面とも黒色処理されたもの、②内面のみ黒色処理されたもの、③黒色無処理のもの（いわゆる赤焼き土器）とがある。②が過半数を占めている。

内外両面とも黒色処理された坏は、比較的大型で器高の低いもの（23、24）と、器高が高く碗に近いもの（48）とがある。口縁部形態では、前者は端部がそのまま丸く納まり、後者は僅かに外反し細まる形をなす。両者とも外面が横方向、内面は上半が横方向、内底部が方射状のヘラミガキ調整である。口縁部が外反して細まる坏には、内底部の方射状ミガキ調整が口縁部近くまで及ぶものがある（48、172、173）。底部は回転ヘラ切無調整のもの（24）と、回転糸切後周縁部をヘラケズリ調整したもの（23、174、175）とがある。

内面のみ黒色処理された坏は、器高が低く大きく開いて皿に近いもの（3点、9.7%）、器高が高く内彎して碗に近いもの（6点、19.3%）、その中間のもの（22点、71.0%）の3形態があり、中間形態の坏が多い。大きさは口径が11.4cmを最小とし、17.0cmを最大とする。15.0cm以上の大型のものが10点（28.8%）、11・12cm代の小型のものが3点（8.3%）、13・14cm代の中間のものが23点（63.9%）で、中間のものが大多数を占めている。

器形は底部から内彎しながら立ち上がって口縁部に続くが、中には底部から直線ぎみに立ち上がるもの（25・176・177）も見られる。口縁部形態には丸味をもってそのまま納まるものと、外反し端部の細まるものとがある。底部はほとんどベタ底であるが、中には付高台のように若干高まるものもある（52・106など）。

いずれも内面は黒色処理後、上半が横方向、内底部が方射状のヘラミガキ調整されている。中には方射状ミガキ調整が口縁部近くまで及ぶものがある。また、外面がヘラミガキ調整されたもの(25)、体部下端がヘラケズリ調整されたもの(176など6点)が認められる。底部はほとんど回転糸切無調整であるが、回転糸切後周縁部をヘラケズリ調整したもの(49など4点)や、ヘラケズリ調整されて切離し技決の不明なもの(226)も混在している。

なお、①、②の中には、二次火熱のため黒色処理が消滅したものや、破片の色調が異なるものがある。巻頭写真3は黒色、赤褐色、青灰色を呈し、あたかも黒色処理土器、黒色無処理土器(いわゆる赤焼き土器)、須恵器が接合した如くである。

黒色無処理の坏は、大きさにバラツキがなく定形化されている。器形は、体部が内彎ぎみのものと、外傾ぎみのものがあり、口縁部には外反するものと、そのまま納まるものがある。しかし、口縁端部は両者とも細まる形をなす。体部外面にはロクロ成形痕が顕著であり、底部は全て回転糸切無調整である。この中には「寺」あるいは「吉」と書かれた墨書土器が1点含まれている。

高台付坏は発見されていない。がしかし高台の剥落痕をもつものが1例存在する。破片のため全体形は不明であるが、底部は回転糸切無調整である。内面は黒色処理されているようである。また、高台内を蛇の目状に窪め、反対にその周囲に高まりを造って高台としたものがある。

甕にはロクロ使用によって成形されたものと、ロクロ不使用のものがある。掲載遺物ではロクロ使用49点、ロクロ不使用82点で、ロクロ不使用甕が多くなっている。

ロクロ使用甕は、口径が18cm以上を大型、12.4~18cmを中型、9~12.4cmを小型、7cm以下をミニチュアとすると、大型26点(53.1%)、中型12点(24.5%)、小型4点(8.2%)、ミニチュア1点(0.2%)となる。

大型甕は器高が口径の約1.5倍(30~34cm)で、長胴形をなす。中には23cmと低く中型甕に近いものもある(186)。また、器高の割合には口径、底径が大きく、安定感をもつものもある(115)。底径は10~12cmであり、口径のほぼ $\frac{1}{2}$ をなす。器形は体部最大部を中頃から若干上にもち、細まりながら頸部に続く。口緩部は強く外反し、口縁端部が上方に挽き出されて受口状をなす。中には下方にも挽き出されているものもある。調整は外面下半が縦方向及び斜め方向のヘラケズリ調整、内面が縦方向、横方向、斜め方向のヘラナデ調整である。底部はヘラケズリ調整されたもの(2点)と、砂粒の付着している砂底(4点)とがある。

中型甕は器高が15cm前後で、口径と器高がほぼ等しく安定感がある。中には25cmと大型甕に近いものもある(12)。底径は7~8cmであり、口径のほぼ $\frac{1}{2}$ である。全面ロクロ成形され、底部は回転糸切無調整である。

小型甕、ミニチュア甕は破片のため全体形の把握できるものがない。器形は中型甕に類似するが、若干体部の脹らむものもある（118・147）。両者とも全面ロクロ成形されている。

ロクロ不使用甕は大型32点（50.8%）、中型20点（31.7%）、小型4点（6.3%）、ミニチュア7点（11.1%）である。

大型甕は器高が口径の約1.5倍の33cmで、長胴形をなす。底径は10cmで、口径のほぼ $\frac{1}{2}$ である。口縁部に最大径をもつもの（219・231）と、体部中頃に最大径をもつ体部の脹らむ甕とがある。口縁部形態には緩やかに外反するもの、短く強く外反するものがあり、口縁端部が細まるものが多いようである。口縁部が短く強く外反するものの中には肩部に僅かな段をもつもの（156など）があり、155では頸部に沈線が巡っている。器壁は体部下端から底部にかけて肥厚するもの（128など）も認められるが、ほぼ一定である。

調整は口縁部が横ナデ、外面が縦方向、斜め方向のヘラケズリ調整であり、内面は縦方向、横方向、斜め方向のヘラナデ調整である。なお、ヘラケズリ調整には、ヘラミガキ調整のように弱いものと、俗にナタケズリと言われる粗いものがある。底部はヘラケズリ調整である。

中型甕は器高が13～19.2cmであり、口径と器高がほぼ等しいもの（122・235）と、器高が口径の約1.5倍のもの（123・160）とがある。器形は最大径を①口縁部にもつもの（160・235）、②体部中ごろにもつもの（122・123）、③口縁部にもつもの、鉢形に近いもの（13・98）とがある。①、②は大型甕の小さなものであろう。口縁部形態は①、②が口縁端部が細まって短く外反し、③は口縁部が緩く外反している。なお、大型甕と同様に肩部に僅かな段をもつもの（144など）、頸部に沈線の巡っているもの（159）が含まれている。また、133は口縁部が体部から内彎したままで、外面が段状に薄くなって蓋受状をなしている。

調整は口縁部、外面は大型甕と同様であるが、内面は主に横方向のヘラナデ調整である。底部はヘラケズリ調整2点、木葉底1点である。

小型甕は破片のため全体形の捉えられるものはない。器形は中型甕①、②に類似する。

ミニチュアは器高が6.5cm、6.0cmであり、口径より僅かに小さい。底径は4.8cmであり、口径の $\frac{1}{2}$ 強である。器形は体部下端に段をもち、上半が直線的に立ち上がり、頸部がかすかに窪み、口縁部が僅かに外反している。全体的に肉厚で、特に底部は肥厚している。外面は弱い縦方向のヘラケズリ調整で、内面は粗い横方向のヘラナデ調整である。底部はヘラケズリ調整のようであるがはっきりしない。なお、212は周縁部を摘まみ上げた程度の皿である。口縁部が尖りぎみである。底部はヘラケズリ調整である。

以上の他には壺（いわゆる球胴甕）がある。口縁部は欠損しているが、頸部から大きく外反するものようである。頸部から上が横方向、下半が縦方向にヘラミガキ調整されている。

鉢は11点で、ロクロ成形されたもの（8点）と、ロクロ不使用のもの（3点）とがある。口



クロロ成形された鉢には内面黒色処理されたもの（3点）と、黒色無処理のもの（5点）とがある。口径は22.5cm、29cmと大型で、口径と器高がほぼ等しく、底径は口径の $\frac{1}{2}$ か $\frac{1}{3}$ である。口縁部は短く強く外反し、口縁端部が上方に挽き出されて受口状をなす。調整はロクロ成形された大型甕と同様に、外面下半が斜め方向の粗いヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ調整である。前者は内面が黒色処理後丁寧にヘラミガキ調整されている。底部は前者が砂底で、後者はヘラケズリ調整である。

ロクロ不使用の鉢は、口径が21cmの大型と、11cmほどの小型とがある。口縁部は両者とも直線的に立ち上がってそのまま納まる直口縁である。外面が粗いヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ調整である。

埴は形の異なる2点の出土である。74は口径24.8cmのロクロ成形された埴で、体部が緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部が僅かに外反している。210は口径35cmのロクロ不使用の埴で、体部下半に丸味をもち、口縁部が大きく外反している。外面が縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ調整である。

甗は1点である。口縁部下6cmに耳をもっている。器形は耳の下に最大径をもち、幾分細まって直行しそのまま口縁部に続く形をなす。耳は器壁に添うように貼付されている。調整は甕などと同様であるが、内面は上部が横方向、下半が縦方向のヘラナデ調整である。

#### 須恵器

発見された須恵器は87点である。このうち73点は竪穴住居跡出土で、3点は焼土遺構周辺出土である。また、11点は遺構外遺物である。器種は壺（28点、32.2%）、甕（59点、67.8%）で、坏は含まれていない。壺には長頸壺、小型壺が各1点が含まれている。

壺は口縁部が緩やかに外反し（101）、肩部がなで肩で体上部に最大径をもち、下半が直線的に小さくなる器形をなす（18・19）。上半がロクロ成形で、下半は縦及び斜方向のヘラケズリ調整である。底部は19によると、ヘラケズリ調整されている。

長頸壺も同様になで肩で、頸部下端に環状の段が付いている。体部最大部から下半がロクロ回転を利用してヘラケズリ調整されている。内面を転用硯として利用している。色調は青灰色であり、胎土は僅かに砂粒を含むが、木目が細かくしっとりとしている。

小型壺は口縁部が「く」の字状に屈折している。土師器小型甕（118）に類似している。

甕はいずれも破片であり、全体形の把握できるものはない。外面が平行線状、斜格子状の叩き目文をもち、内面は円礫による当具痕とみられる凹凸や、青海波文を強く押捺したものなどがある。

これらの須恵器は一部のものを除いて色調が褐色～灰白色、あるいは青灰色を呈し、中には胎土中央が黄褐色、灰白色などサンドイッチ状をなすものが含まれている。胎土はいずれも緻

密で白色砂粒を多く含むものが多い。また、鉄の吹き出しの認められるものもある。焼成は良好なもの、半焼成のもの、半焼成のものが混在している。なお、これらの中には二次火熱のため器壁がザラザラしているものが含まれている。

#### その他

鉄製品は鉄鏃3点、刀子3点、釘1点、鉄滓2点である。鉄鏃は腹挾形となって逆刺をもつ身の幅の狭い平根と、先端部が鏝のように平らで薄くなる尖根とがある。鏃被ぎまでの長さが9.0cm、11.4cmと長い。刀子は峯区で、区の部分が一番広がっている。刃部は使い減りによるものか狭くなっており、切先が丸くなっていた。中には茎よりも狭いものがある(1716)。なお、136、1716は折損後接合されており、大事に使用されたもののようである。鉄滓は中央部が厚い椀形鉄滓である。鍛冶滓とみられる。

土製品は土鈴と羽口であり、石製品は砥石10点、硯1点である。砥石は長さ、幅が10cm、17cmと大型のもの、5cm以下の小型のものがある。前者は表裏2面と側面の3面使用で、側面の使用面は幅が6cm、長さが11cm、15cmで、三日月状に中央が凹んでいた。横方向の使用痕が観察される。後者は3面あるいは4面使用で、幅が1.3~2.5cmと狭くなっている。

炭化材は桂、又首、垂木などの上屋構造材と、根太、敷板などの床材とがある。炭化穀類は鑑定によるとアワ、ヒエであり、堅果類は胡桃、栃の実であった。

#### (5) まとめ

古代に属する主な遺構は竪穴住居跡と土壙であり、集落を形成している。竪穴住居跡は埋没谷によって西群、中央群、東群に分けられている。西群は単独1棟の発見であるが、丘陵が迫っており北に広がる可能性が大であり、中央群は竪穴住居跡自体が調査区外に続いており、やはり北に広がる可能性がある。これに対し東群は東が急崖、南は丘陵が迫って広がる可能性は全くなく、集落全体を調査したと言える。

集落のあり方を東群によってみると、竪穴住居跡は9棟が斜面上位から中位にかけて分布し、斜面上位では8棟が扇状に密集し、斜面中位の1棟は30m離れている。住居跡は出土遺物によると3期に区分され、同時に存在した住居跡は3棟前後となる。その占地は段丘中央→段丘崖→段丘中央と変遷しているようである。

一方、土壙は1例を除いて住居跡同様に斜面上位から中位にかけてより段丘崖の近くに集中している。土壙には大型のもの、小型のものがある。大型土壙のⅦF8土壙はⅦG8住の西3mに位置しており、周囲には該時期の遺構が存在せず(30m離れている)セットと捉えることができる。他の大型土壙をみるとⅦF18住の東方3mのⅦH18、ⅦH19土壙、ⅦF23住の北方5mのⅦG22土壙、南方4.5m、5mのⅦD24・ⅦE26土壙となっている。ⅦG8住、Ⅶ



F18住、ⅦF23住の3棟は土器のセット関係ではいずれも内面黒色処理の坏と黒色無処理の坏がほぼ同数存在する②群に属している。このことから土器のセット関係の②群（内面黒色処理の坏と黒色無処理の坏が半数存在するもの）の時期に住居跡と大型土壇がセット関係にあって住居跡の近くに構築された可能性がある。なお、小型の土壇は大型のものより東端に位置して、土壇群を形成している。この小型の土壇群は土器のセット関係のどの時期に属するものかは不明であるが、竪穴住居跡に伴うことはほぼ誤りなからう。

竪穴住居跡と土壇は、遺構ごとにセットをなすものと、住居域と土壇群域とが離れているものがあるようであるが、ともに集落を構成していると理解される。古代の五庵Ⅰ遺跡の性格は、竪穴住居跡と貯蔵穴と考えられる土壇からなる集落と捉えられる。

集落の年代は、土器のセット関係（①、②、③群）と鍵層となる十和田a降下火山灰、苫小牧火山灰の堆積状況から10世紀中頃から11世紀中頃と推定される。

また、竪穴住居跡はいずれも火災にあった焼失住居である。中には敷板の遺存するものがあり、敷板住居が明確となった。敷板床の構造は、転根太を渡した上に敷板を整然と並べたもので、中には転根太の下に支石や丸太材を入れて高さを一定に保ったものもある。それによると敷板床の高さは少なくとも土間から15・6cm高くなっていたとみられる。

敷板床の配置は、主にカマドの位置する反対側にあって、住居跡の $\frac{1}{2}$ に及ぶものである。居住空間を2分して使用したものようである。なお、周溝の中には根太に対応するものがあり、周溝、礫の中には敷板床に関連する施設が含まれている可能性がある。今後の検討によっては、竪穴住居跡はいずれも敷板床を伴う構造であったと証明されるかもしれない。

出土遺物は大多数が住居跡出土の土師器、須恵器であり、いずれも生活用具である。その中には墨書土器や転用碗が含まれている。律令体制外に位置する当遺跡における性格は不明であるが、当時の生活の一端を窺い知ることができる。



### 3. 中・近世

中・近世に属する遺構は竪穴住居跡1棟、土壙2基、土葬墓6基である。ただし、竪穴住居跡と土壙は年代決定資料がないためその所属は明らかでない。遺物は陶磁器、古銭、鉄製品、銅製品、炭化穀類、人骨、獣骨である。

#### (1) 竪穴住居跡

住居跡は洪積世低位段丘の中ごろに占地し、駒ヶ嶺館の南掘（現状は沢）の南70mにあたる。調査地の中では下位に位置する単独1棟である。平面形は5.1×3.9mの長方形で、埋土は焼土を含む黒褐色混土の単層である。焼土は壁際が高く、中央に向かって傾斜しており焼失に伴う焼土と考えられる。壁は比較的急激に立ち上がり、壁高は最大10cmである。

柱穴は壁際の13個と中央の1個の14個からなる。北西隅が30cm東に寄り、北東隅は15cm南に片寄っているが、桁行4間（平均1.18m、1.12m）、梁間は両側3間（平均1.1m）、東側2間（平均1.575m）の東西棟である。桁行方向は南側列によるとN63°Eで、等高線に並行している。柱穴は21×19cm～43×31cmの円形か長円形で、深さは18～68cmである。棟持柱は60cmと深くなっている。柱痕はP11、P13によると直径10cm、12cmであり、比較的細目の丸太材である。

当住居跡はカマド、炉の施設を伴わず、炭化穀類の発見から倉庫として使用されたものではないかと推定される。

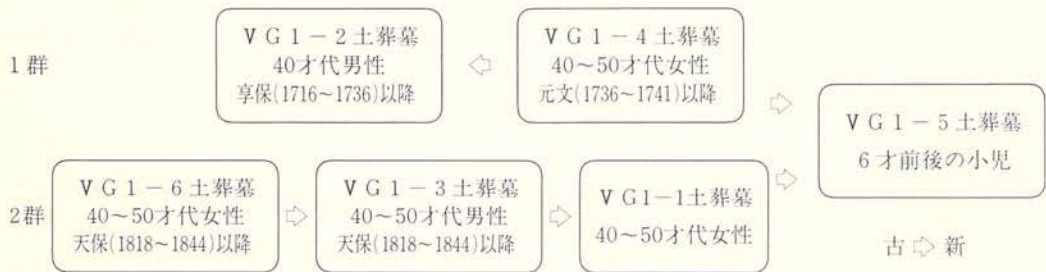
#### (2) 土壙

発見された土壙はⅧB28土壙、ⅧC27土壙の2基である。両者とも調査区の南東端に位置し、第2次調査で検出したものである。十和田a降下火山灰層を切って構築されていることから、一応中世に属する遺構としている。ⅧC27土壙は1.9m×75cmの長方形で、深さが20cmほどである。長軸方向はN10°Eで、ほぼ南北方向を指す。土壙の西壁際から手斧と鑿と思われる鉄製品が底面から浮いた状態で、しかも立て掛けた状態で発見されている。遺物が立った状態で出土したことは埋設段階に埋土の中に入れられたことを示しており、人骨の出土はなかったが、土葬墓と推定される。埋土の中に入れられたとなれば木棺の使用が推測される。

副葬品は棺外に埋設されたとみられる手斧と鑿の2点である。手斧は着柄部が「コ」の字状を呈しており、袋状を呈する古代のものとは異なるようである。刃部は丸味をもち、外側が彎曲しており、抉りものに使用された手斧と考えられる。

### (3) 土葬墓

検出された土葬墓は6基である。調査地の北端に位置し、調査地外に続いている。重複が著しく、次の2群に大別される。



1群は2基からなり東に位置し、VG 1-4土葬墓の東半をVG 1-2土葬墓が破壊している。2群は4基からなり1群の西に位置する。VG 1-6土葬墓の北部を破壊してVG 1-3土葬墓が構築され、VG 1-6土葬墓のほぼ真上で、VG 1-3土葬墓の南部を破壊してVG 1-1土葬墓が構築されている。さらにVG 1-4土葬墓の西部、VG 1-3土葬墓の東部、VG 1-1土葬墓の北部に渡ってVG 1-5土葬墓が構築されている。

1群は享保・元文年間（1716～1741前）に鑄造された寛永通寶を伴い、2群は文政・天保年間（1818～1844年）に鑄造された寛永通寶を伴っており、1群が先行するものと推定される。

平面形は直径1.0m前後の円形で、深さが54～80cmである。ただし、子供用のVG 1-5土葬墓は直径70cm、深さ20cmと小さくなっている。

人骨は比較的保存状況が良好で、鑑定の結果、別表のとおり年令・性別・身長等が判明した。

	平面形	規模	深さ	年令・性別・身長	副葬品	年代	備考
VG 1-1土葬墓	円形	94-100	54	40~50才代・女・150	釘19、定盤	————	3・5を破壊 5に破壊される
1-2	円形	104×100	80	40才代・男・154	釘16、金具6、煙管、古銭2、漆	享保(1716~1736) 以降	4を破壊
1-3	円形	直径110	84	40~50才代・男・144	釘57、煙管、古銭6、漆	天保(1818~1844) 以降	5に破壊される
1-4	円形	直径100	80	40~50才代・女・—	古銭6、数珠玉2、漆	元文(1736~1741) 以降	2・5に破壊される
1-5	円形	直径70	20	6才前後・小児	————	————	1・3・4を破壊
1-6	円形	直径105	70	40~50才代・女・145	釘18、古銭6	天保(1818~1844) 以降	1・3に破壊される

人骨の出土状況はVG 1-1土葬墓を除いて、膝を立てた上に頭蓋骨が載る形をなしている。VG 1-1土葬墓は頭蓋骨が骨盤の反対側にあつて両膝に接し、背骨が大腿骨の反対側に位置して、側臥屈葬状態をなしていた。前者は蹲踞の姿勢をとっており、座棺が想定でき、後者は座棺の横倒し状況と理解される。なお、小児骨は遺存状況が悪く断言できないが、頭骨と四肢



骨から、仰臥屈葬と推定される。

出土遺物は鉄釘110点、金具6点、煙管3点、古銭20点、数珠玉2点、漆被膜4点である。釘は4遺構110点で、VG1-3土葬墓が57点と多いが、他は19点・16点・18点で20点未満である。大きさは2.4~2.7cm(8・9分)が9点、3~3.5cm(1寸前後)が16点、3.6~6.5cm(1寸2分~2寸前後)が67点で、2寸前後が圧倒的に多い。VG1-2土葬墓によると、8分の釘は金具止めに使用され、1寸前後、2寸前後は四隅から発見されており、棺箱を止めたもののようである。

ほとんどの釘には木質部が付着しており、木材の厚さが推定できる。5・6分のものと、7・8分のもののが使い分けられている。VG1-2土葬墓によると金具の固定されたものは3・4分と薄い板材のようである。

金具はVG1-2土葬墓の北西隅(4例)、北東隅(2例)から発見された6例である。蝶番の肘金具と壺金具とみられるが、必ずしも対応する位置になく、また、使用できる状態になく(壺金具がみられない)、隅金具として転用されたものと推定される。

煙管は2遺構3例(吸口1、火皿2)で男性に限定され、数珠玉は1遺構2例で女性に限られている。

古銭は4遺構20例で、いずれも寛永通寶である。基本的には6枚である(3遺構)。VG1-2土葬墓出土の寛永通寶は享保年間(1716~1736年)に仙台藩の石巻で鑄造されたものに酷似し、VG1-6、VG1-3土葬墓出土の寛永通寶は天保年間(1818~1844年)に八戸藩の葛巻で鑄造されたものに酷似している。VG1-4土葬墓出土の寛永通寶は元文年間(1736~1741年)以降に鑄造された寛永通寶鉄銭である。

漆製品は4遺構から発見されているが、被膜の一部であり、器種不明なものが多い。判明したものはVG1-1土葬墓の定盤とVG1-4土葬墓の椀?である。定盤は漆器製作に使用する机で、表面に赤漆、黒漆などが不規則に付着して凹凸を呈している。大きさは長さ45cm、幅15cmである。

以上の他には性格不明であるが、VG1-1土葬墓、VG1-4土葬墓の底面から川砂が発見されている。また、先行する土葬墓を破壊して構築された土葬墓では人骨や「あたま石」が埋め戻され、埋土に鉄釘か漆被膜片が混入していた。

土葬墓の年代は決定資料が乏しいが、古銭から1群が18世紀中頃(享保・元文)以降、2群が19世紀中頃(文政・天保)以降の2時期が想定される。

今回調査した土葬墓は隣接する調査地外に墓標が立っており、畑地の中に形成された墓域の一部と推定される。その構造は直径1m前後の土壌に釘を使用した箱棺(座棺)に遺体を安置し立位に埋葬したものである。副葬品には古銭・煙管・漆製品などがあり、18世紀中頃から使



用された家族墓と考えられる。

#### (4) 遺物

中・近世に属する遺物は竪穴住居跡の炭化穀類、土壌の鉄製品、土葬墓の古銭、鉄製品、銅製品、ガラス製品、漆器と、耕作土出土の陶磁器、鉄製品である。

炭化穀類はオオムギ、ムギで、中には焼けて密着しているものが含まれる。鉄製品は手斧、鏝？、和釘、金具（蝶番）、鑄造製品（鍋？）などであり、銅製品は煙管である。古銭はいずれも俗に新寛永と呼ばれ、寛文8年（1668）以降に鑄造された貨幣で、享保年間（1716～1736年）に仙台藩の石巻で鑄造された銅銭、天保年間（1818～1844年）に八戸藩の葛巻で鑄造された小型の鉄銭、元文年間（1736～1741年）以降に鑄造された鉄銭などが含まれている。

ガラス製品は数珠玉であり、漆器は被膜片で、定盤と椀とみられるものである。陶磁器は近世中頃から明治時代にかけての、白磁の端反りの小皿、小盃の底部、青磁の小皿、伊万里系染付の端反りの小盃、銅板絵付の碗、皿、向付、天目茶碗、美濃の灰釉小皿、産地不明の大甕体部片、須恵質の播鉢などである。

#### (5) まとめ

中世の五庵Ⅰ遺跡を取りまく還境は、北に沢（駒ヶ嶺館の南堀？）を隔てて浄法寺氏の一族駒ヶ嶺氏の居館跡、駒ヶ嶺館があり、沢を隔てた東には五庵Ⅱ遺跡が位置している。駒ヶ嶺館は上館、下館の2部からなり、下館が本郭跡と伝えられている。五庵Ⅱ遺跡は空堀などの防禦施設が確認されず館そのものではなかったようであるが中世の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出され、舶載陶磁器や茶器、鉄砲の玉（弾丸）などが発見され、館に関連した施設と考えられている。上館、下館、五庵Ⅱ遺跡には「三八幡」と呼ばれる八幡宮がそれぞれ祀られており、密接な関係が推測される。

今回調査した竪穴住居跡は単独1棟の検出であったが、駒ヶ嶺館の南堀の南方70mに位置しており、関連する施設と考えられる。とりわけ炭化穀類が発見されており、倉庫として利用されたと思われる。

近世から明治にかけては陶磁器類が散在するが、遺構は検出されていない。遺物は耕作土出土であり、遺構に伴ったものではないようであり、畑地に持ち込まれた遺物と理解される。近世には大部分が畑地として利用され、一部調査地外に続いて家族墓が構築され墓域となっている。

#### 4. まとめ

今回の調査では、主に竪穴住居跡、焼土遺構、土壙、陥し穴状遺構、土葬墓などの遺構が検出され、土器、石器、金属器など多種多様な遺物が発見されている。これらの遺構遺物は、時期別では縄文時代、古代、中・近世に分けることができ、五庵Ⅰ遺跡をまとめると、縄文時代～中・近世の長期にわたる複合遺跡であると言える。

縄文時代には早期～前期、前期末葉、後期中葉、晩期中葉と断続的に集落が営まれ、時には狩猟の場として活用されていた。

集落は竪穴住居跡と土壙から構成されている。発見された竪穴住居跡は4棟であるが、その所属時期は各時期1棟であり、極めて小規模な集落であったと言えよう。これらの住居跡のあり方は東区東部の斜面上位に限定されており、ある程度位置が決まっていたようである。しかし、細かく観察すると、古い時代のものから段丘崖に近づく傾向があり、晩期末葉では段丘崖の急斜面に営まれていた。

土壙は2、3の例を除いて住居跡の占地する東区東部の斜面上位に限定されており、集落を構成する土壙と考えられる。これらの土壙は、位置的には住居跡よりも段丘崖の近くにあっており、土壙群を形成している。このうち時期の判明するものは晩期中葉の2例である。他は遺物を伴わずはっきりしないが、ⅦB18住とⅦG18-1・2、ⅦF19土壙のように住居跡に対応するものようである。

なお、土壙の中にはあたかも安置されたかのように、中央に赤彩土器（完形）、その両側にカラス貝を配置したものもある（巻頭写真）。宗教的色彩の強いものと推定される。

また、同様に断続的に狩猟の場として活用されている。

陥し穴状遺構を占地・配列からみると、円形タイプは西区斜面下位及び東区斜面中位、溝状タイプは中央区斜面下位から上位及び東区斜面中位から上位、長方形タイプは中央区及び東区の斜面上位に占地する。異なるタイプが切り合う例はない。なんらかの理由により占地・配列を異にしたと考えられる。また西区と中央区の間や東区西部と中央部の斜面下位には当該遺構が存在しない。埋没開析谷の存在が占地・配列に影響していると考えられる。

時期については、その埋土状況から円形タイプが古く、長方形タイプは新しい。溝状タイプはその間の時期と考えられる。

機能としては、第一に、貯蔵を目的とするには形状的にそぐわないこと、第二に、各タイプとも狭く深いことや杭状施設が存在が推定されることなどから、陥し込み、身動きしにくい状態や、ダメージを与えたりする形状・施設の陥し穴と考えられる。



古代の五庵Ⅰ遺跡は竪穴住居跡と貯蔵穴と考えられる土壌からなる集落跡である。集落は埋没谷によって3群に分かれ、西群と中央群は調査区外に続くと推定される。

集落は東群によると、住居跡9棟と土壙15基から構成されている。竪穴住居跡は斜面上位の8棟が扇状に密集し、中位の1棟が30m離れている。住居跡は出土遺物によると3期に区分され、同時に存在した住居跡は3棟前後と考えられる。その占地は段丘中央→段丘崖→段丘中央と変遷しているようである。

土壌は主に斜面上位の段丘崖近くに集中していた。土壌には群を形成するものと住居跡とセットをなすものがある。小型の土壙が前者の例で、段丘崖に近い東端に群をなしている。また、大型の土壙は後者の例で、土器の供伴関係の②群（内面黒色処理の坏と黒色無処理の坏が半数存在するもの）の住居跡に隣接している。

集落の年代は土器の供伴関係と鍵層となる十和田a降下火山灰、苫小牧火山灰の堆積状況から10世紀中頃から11世紀中頃と推定される。

なお、竪穴住居跡はいずれも火災にあっており、上屋構造材や敷板の遺存するものがある。敷板の中には保存状態の良好なものがあって敷板床の構造が明らかになった。敷板床は転根太を2本渡した上に、板材を整然と敷並べたものである。中には転根太の下に支石や丸太材を入れて高さを一定に保っているものもある。敷板床の高さは少なくとも15cm高くなっていたと推定される。

今回発見された敷板床はカマドの反対側で、住居跡の $\frac{1}{2}$ に及ぶものである。住居空間を2分して使用したものようである。

五庵Ⅰ遺跡は中世には、浄法寺氏の一族駒ヶ嶺氏の居館跡、駒ヶ嶺館の南に位置しており、また、同館に関連する施設と考えられる五庵Ⅱ遺跡とは沢を隔てた西に当たっている。本調査区の中では、中世に属する建物跡（竪穴住居跡）は単独1棟の発見であるが、駒ヶ嶺館の南堀の南方70mに位置しており、関連する施設（倉庫）と考えられる。

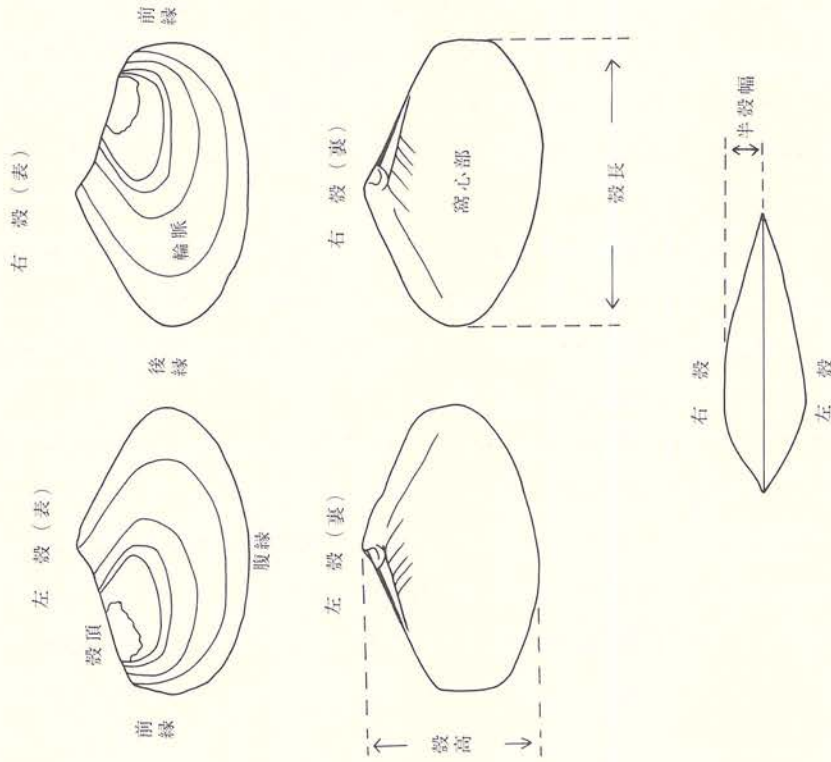
近世から明治にかけては、耕作土から陶磁器が採集されるが、遺構は検出されない。遺物は耕作に伴って畑地に持ち込まれたものと理解され、大部分が畑地として利用されたものようである。ただ、一部調査区外に続いて家族墓が構築され、墓域となっていた。



9 (VII H25-2)土壇出土カラス貝一覽表

群	No.	殻	殻高 cm	殻長 cm	半殻幅 cm	表を	韌帯を	韌帯を	備考
I	1	左殻	75	100	21	上	右		
	2	"	75	90	22	"	"		
	3	"	75	130	25	"	"		
	1	"	70	120	22	"	"		
	2	"	65	120	18	"	"		
	3	"	95	120	24	"	"		
	4	"	85	90	20	"	"		
	5	"	90	120	26	"	"		
II	6	"	85	110	22	"	"		
	7	"	85	110	25	"	"		
	8	"	80	130	22	"	"		
	1	右	50	90	17	"	"		
	2	"	80	110	21	"	"		
	3	"	75	120	24	"	"		
	4	"	80	120	24	"	"		
	1	?	17	30	5	下	左? 左	欠失	
III	2	左殻	30	45	12	"	左		
	3	"	50	60	14	"	"		
	4	"	45	65	15	"	"		
	5	"	50	70	16	"	"		
	6	"	60	65	13	"	"	欠失	
	7	"	60	70	16	"	"		
	8	"	55	75	15	"	"	欠失	
	9	?	40	40	5	"	"	欠失	
IV	10	左殻	60	95	22	"	"		
	11	"	65	90	17	"	"	欠失	
	12	"	60	150	25	"	"		
	13	"	70	130	23	"	"		
	14	"	80	130	22	"	"		
	15	"	70	140	23	"	"		
	1	右	70	95	13	"	右	欠失	
	2	"	85	115	17	"	"	"	
V	3	"	40	70	10	"	"	"	
	4	"	65	90	10	"	"	"	
	1	左	40	70	6	上	?	"	
	2	"	75	120	18	"	右	"	
VI	3	"	80	130	17	"	"	"	

カラス貝：部分の名称



第148図 カラス貝：部分の名称

土 壙(皿形・フラスコ形)一覧表

No.	遺構名	断面形状	位置	開口部 cm		中 端 cm		底 部 cm		深さcm	備 考
				長軸長	短軸長	長軸長	短軸長	長軸長	短軸長		
1	VI H 16	皿形	中央区	152	131	—	—	128	107	28	
2	VII E 25	"	東区東部	151	151	—	—	138	138	47	
3	VII G 25-1	"	"	(141)	(141)	—	—	(134)	(134)	(22)	VII G 25土壙(新)に切られる。
4	VII G 25-2	"	"	(130)	(130)	—	—	(115)	(115)	(17)	"
5	VII H 24	"	"	142	128	—	—	132	128	30	VII I 24土壙(新)に切られる。
6	VII H 25	"	"	129	129	—	—	125	125	22	
7	VII I 26	"	"	68	68	—	—	65	65	18	縄文土器
1	III F 4	フラスコ形	中央区	154	140	—	—	162	155	38	
2	VII G 18-1	"	東区東部	102	102	—	—	170	155	130	縄文土器、円盤状土製品、石器
3	VII G 18-2	"	"	125	110	114	104	135	117	78	
4	VII G 19	"	"	130	130	—	—	114	114	64	縄文土器、土師器
5	VII G 22	"	"	168	157	147	125	206	182	102	
6	VII G 26-1	"	"	107	107	—	—	112	102	30	
7	VII G 26-2	"	"	88	82	63	60	76	70	38	
8	VII G 27	"	"	142	138	—	—	139	124	38	
9	VII H 25-2	"	"	85	85	—	—	132	122	63	縄文土器、石器、カラス貝
10	VII H 25-3	"	"	107	107	—	—	110	110	37	
11	VII I 24	"	"	117	110	—	—	114	113	30	縄文土器
12	VII J 24	"	"	164	123	—	—	194	186	86	
13	VII J 24-2	"	"	124	120	—	—	140	132	61	
14	VII D 27	"	"	160	160	—	—	150	150	55	

陥し穴状遺構(円形)一覧表

No.	遺構名	位置	開口部 cm		中 端 cm		底 部 cm		深さcm	副 穴 ・ 杭 痕						
			長軸長	短軸長	長軸長	短軸長	長軸長	短軸長		軸	基数	太さcm	深さcm	形状	立ち上がり cm	形状
1	I H 9	西区	120	103	—	—	94	83	100	—	—	—	—	—	—	—
2	II D 4	"	92	92	56	53	62	50	130	1	7×4	10	V字形	—	—	
3	II E 4	"	111	109	—	—	82	77	116	1	5	—	—	49	円字形	
4	II F 4-1	"	123	120	—	—	85	80	109	1	7×5	7	V字形	—	—	
5	II F 4-2	"	105	100	70	69	66	57	126	1	6×5	7	"	—	—	
6	II G 4	"	113	89	—	—	77	76	109	1	6×5	12	"	—	—	
7	II H 4	"	125	120	—	—	90	80	117	—	—	—	—	—	—	
8	II I 3	"	117	100	—	—	73	73	116	—	—	—	—	—	—	
9	II I 5	"	81	77	—	—	60	56	106	—	—	—	—	—	—	
10	V G 14	東区西部	157	151	74	71	81	78	147	2	4 5	4 8	V字形	—	—	
11	V I 14	"	186	173	144	87	86	72	146	2	3 3	4 10	"	—	—	
12	V J 14	"	147	140	105	87	79	75	132	1	5	13	"	—	—	

No.	遺構名	位置	開口部 cm		中端 cm		底部 cm		深さ cm	副穴・杭痕					
			長軸長	短軸長	長軸長	短軸長	長軸長	短軸長		基数	太さ cm	深さ cm	形状	立ち上がり cm	形状
13	VI B 15	東区西部	108	107	67	57	56	49	112	1	4	10	U字形	—	—
14	VI C 14	"	152	150	101	82	84	73	156	1	5	21	"	—	—
15	VI C 15	"	112	109	83	83	62	62	106	1	4	10	V字形	20	—
16	VI E 16	"	91	80	58	57	64	63	102	1	5	15	"	—	—
17	VI F 18	東区中央区	99	94	—	—	63	55	135	1	4	10	"	28	U字形
18	VI G 17	"	170	156	131	126	71	64	166	1	7	10	"	—	—
19	VI H 14	"	136	129	77	77	66	62	132	1	5	12	"	15	—
20	VI H 17	"	109	104	86	81	67	61	118	1	4	9	U字形	—	—
21	VII C 18	"	116	113	75	63	63	60	132	1	4	4	V字形	—	U字形
22	VI I 14	"	124	117	67	66	73	67	142	1	4	17	"	7	—
23	VI I 16	"	120	110	92	85	83	76	132	1	5	18	"	—	—
24	VI J 17	"	104	95	73	68	61	51	126	1	9×7	15	U字形	—	—
25	VII B 13	"	142	132	106	102	105	102	155	1	7×5	10	V字形	—	—
26	VII B 20	"	117	105	74	70	80	71	151	1	5	11	"	17	—
27	VII B 21	"	80	78	—	—	70	68	147	—	—	—	"	—	—
28	VII C 13	"	114	112	—	—	65	62	122	1	4	10	V字形	—	—
29	VII D 12	"	106	101	84	73	76	66	136	1	5	20	"	—	—
30	VII D 15	"	110	99	82	76	68	64	124	1	9	20	"	—	—
31	VII E 14	"	113	107	87	87	73	68	145	1	5	19	"	—	—
32	VII F 10	"	93	85	—	—	60	57	100	1	4	13	"	—	—
33	VII G 18	"	—	—	—	—	83	55	145	—	—	—	—	—	—
34	VII I 2	"	144	140	—	—	80	68	152	—	—	—	—	—	—

陥し穴状遺構(溝状)一覧表

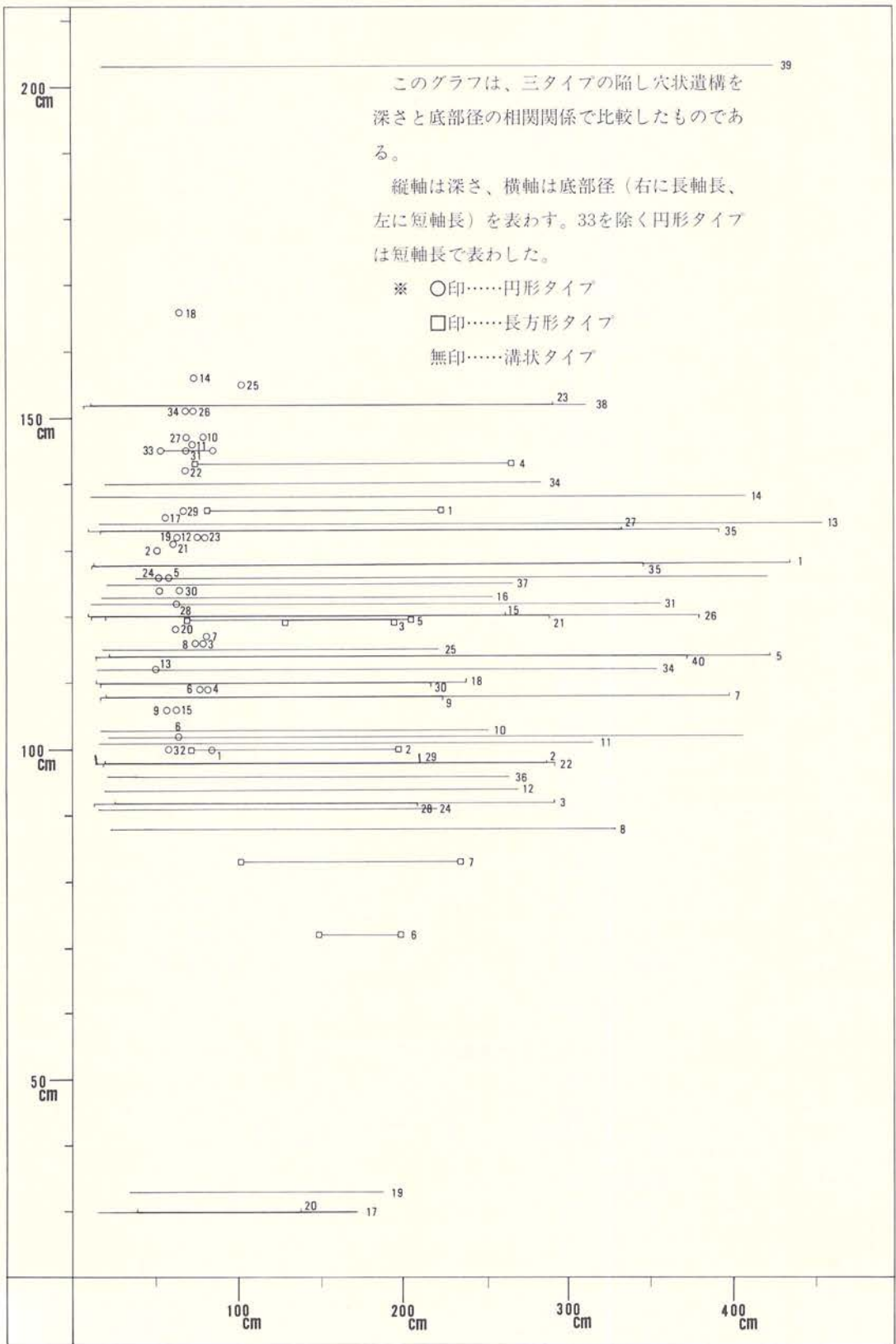
No.	遺構名	位置	長軸方向	等高線と	開口部 cm		中端 cm		底部 cm		深さ cm	短軸断面形	備考
					長軸長	短軸長	長軸長	短軸長	長軸長	短軸長			
1	II J 10	西区	N-65° E	平行	369	52	403	22	437	13	128	U字形	
2	III B 7	"	N-42° E	斜交	277	46	—	—	287	19	98	Y字形	
3	IV A 3	中央区	N-56° E	平行	293	48	—	—	292	24	92	U字形	
4	IV B 6	"	N-57° E	"	334	65	317	48	424	38	126	Y字形	
5	IV B 9	"	N-39° E	斜交	336	56	336	30	422	23	114	Y字形	
6	IV C 7	"	N-56° E	平行	389	57	—	—	407	21	102	V字形	
7	IV E 9	"	N-12° E	直交	344	70	—	—	397	20	108	V字形	
8	IV E 10	"	N-23° E	"	265	52	—	—	319	22	88	V字形	
9	IV J 13	"	N-49° W	斜交	230	63	193	49	224	17	108	Y字形	
10	V A 11-1	"	N-2° E	直交	212	62	212	28	252	16	103	Y字形	V A 11-2(古)と切り合う
11	V A 11-2	"	N-88° W	斜交	287	43	—	—	315	15	101	V字形	V A 11-1(新)と切り合う
12	V A 13	"	N-49° W	"	235	46	—	—	270	19	94	U字形	



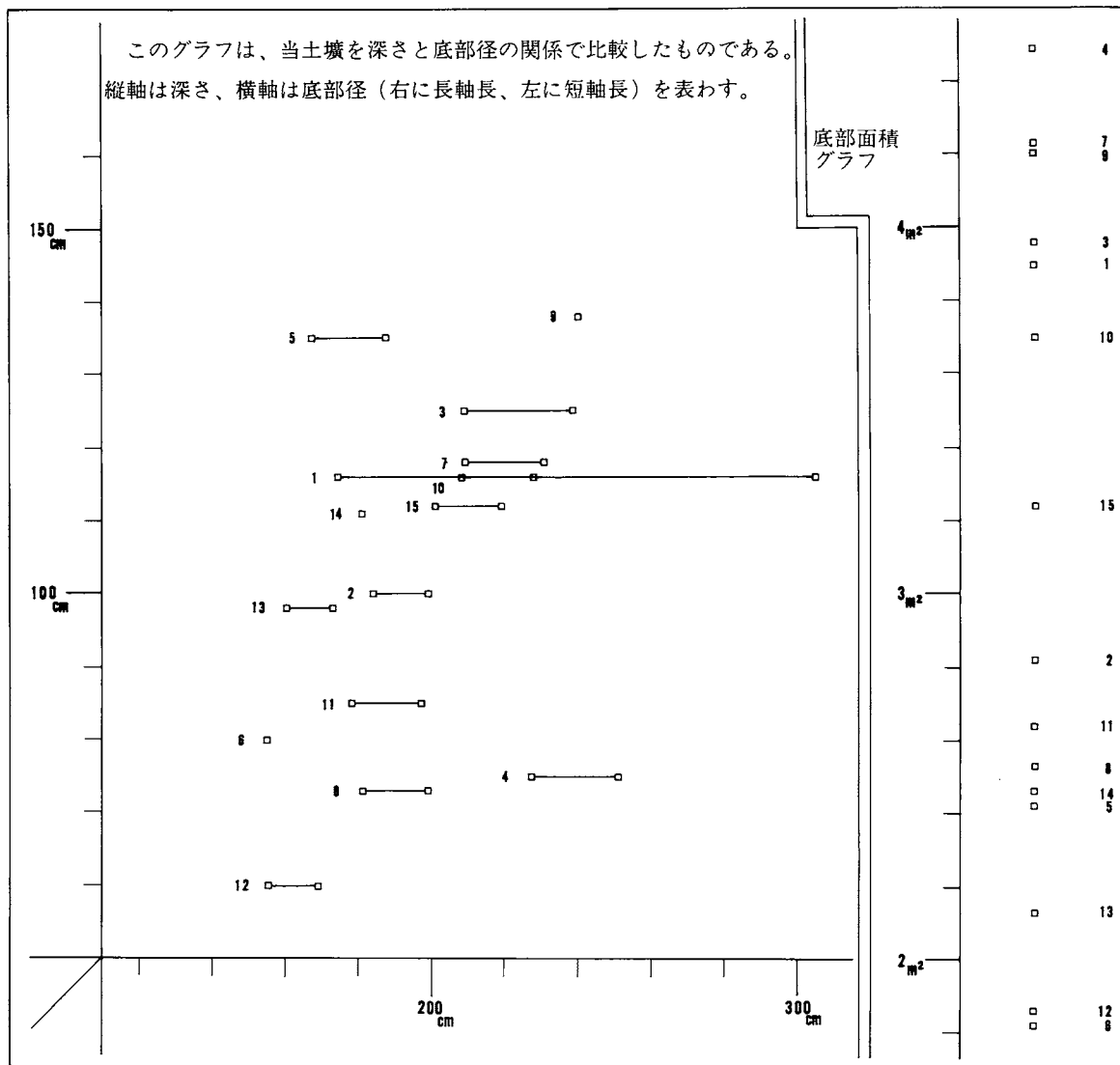
No.	遺構名	位置	長軸方向	等高線と	開口部 cm		中端 cm		底部 cm		深さ cm	短軸断面形	備考
					長軸長	短軸長	長軸長	短軸長	長軸長	短軸長			
13	V B 7	中央区	N-86°E	平行	366	59	357	14	454	16	134	Y字形	
14	V B 14	"	N-72°W	斜交	330	72	345	40	407	10	138	V字形	
15	V J 15	"	N-84°W	平行	208	57	218	35	262	9	120	V字形	
16	V J 16	"	N-79°W	平行	206	76	188	36	252	16	123	V字形	
17	VI A 11	東区西部	N-67°W	斜交	183	22	-	-	173	14	30	U字形	
18	VI E 17	"	N-8°W	直交	227	74	215	45	238	14	110	U字形	
19	VI H 18	東区中央部	N-80°W	平行	200	56	-	-	188	45	33	ヒール形	
20	VI H 19	"	N-83°W	"	153	50	-	-	137	38	30	"	
21	VI H 20	"	N-75°E	"	258	55	-	-	289	11	120	V字形	
22	VI H 21	"	N-69°E	"	268	47	266	27	292	18	98	U字形	
23	VI J 21	"	N-75°E	"	244	50	233	32	292	11	152	U字形	
24	VII B 22	"	N-17°E	直交	245	45	-	-	221	15	91	U字形	
25	VII C 13	"	N-62°W	平行	208	52	218	30	222	17	115	U字形	
26	VII D 23-1	"	N-82°E	"	325	80	317	47	380	20	120	V字形	VII D 23-2(古)と重複
27	VII D 23-2	"	N-82°E	"	-	-	317	47	332	9	133	箱薬研堀形	
28	VII D 25	"	N-54°E	"	-	(19)	-	-	-	13	(92)	U字形	
29	VII E 11	"	N-86°E	"	205	40	-	-	210	13	98	V字形	
30	VII E 12	"	N-72°E	斜交	207	50	-	-	217	17	110	V字形	
31	VII E 20	"	N-55°W	"	358	54	336	29	356	10	122	V字形	
32	VII E 25	"	N-64°E	"	270	(70)	274	34	283	20	140	Y字形	
33	VII E 26	"	N-80°W	直交	352	75	352	33	392	18	133	V字形	
34	VII F 17	東区東部	N-85°E	平行	(335)	50	320	25	354	14	112	U字形	
35	VII F 18	"	N-87°E	"	-	55	321	24	346	11	128	Y字形	
36	VII F 24	"	N-77°E	斜交	264	55	266	32	264	20	96	U字形	
37	VII F 26	"	N-65°E	"	272	85	266	28	266	20	125	V字形	
38	VII G 22	"	N-60°E	"	348	115	382	33	419	9	152	V字形	
39	VII G 23	"	N-86°E	平行	380	162	343	108	424	18	203	Y字形	
40	VII G 26	"	N-74°W	直交	345	60	373	24	373	13	114	Y字形	縄文土器片

陥り穴状遺構(長方形)一覧表

No.	遺構名	位置	長軸方向	等高線と	開口部 cm		中端 cm		底部 cm		深さ cm	副穴	備考
					長軸長	短軸長	長軸長	短軸長	長軸長	短軸長			
1	III J 11	中央区西部	N-3°W	直交	235	146	215	115	222	82	136	3基	
2	VI B 11	"	N-4°W	"	218	116	-	-	196	72	100	-	
3	V F 16	東区西部	N-6°E	"	220	135	-	-	194	128	120	3基	
4	V I 17	"	N-41°W	斜交	280	133	275	83	265	75	143	3基	
5	VI A 17	"	N-13°W	直交	225	140	208	80	203	70	120	-	縄文土器
6	VII F 19	東区東部	N-80°W	平行	240	160	-	-	197	150	72	-	
7	VII G 25	"	N-34°E	"	270	160	240	103	232	103	133	1基	縄文土器、石器、土師器



第149図 各陥し穴状遺構関連グラフ

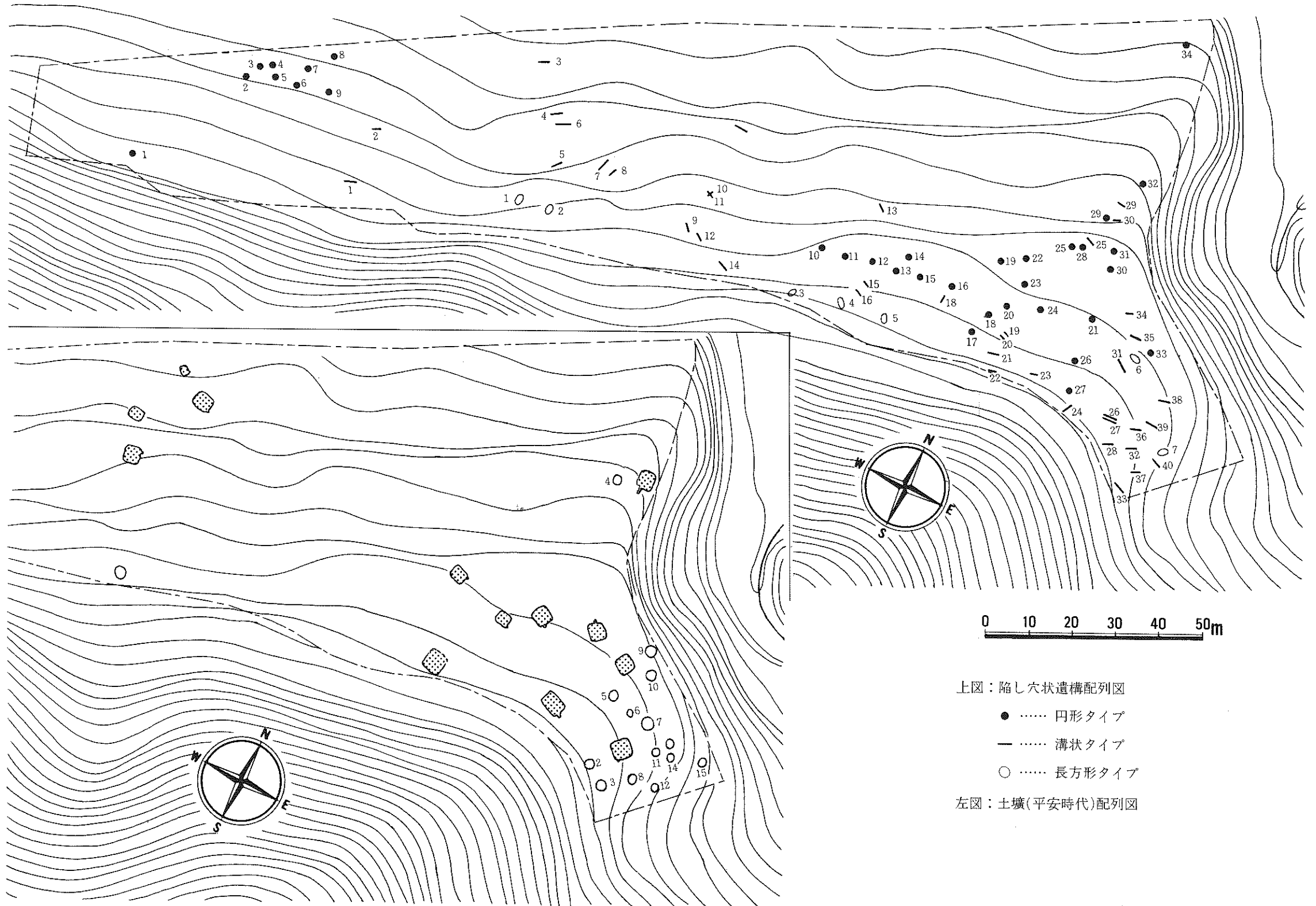


第150図 土壌(平安時代) 関連グラフ

土壌(平安時代)一覽表

No	遺構名	平面形	開口部 m		底部 m		深さ m	底部面積 m <sup>2</sup>	最大容量 m <sup>3</sup>	内部施設	出土遺物	備考
			長軸長	短軸長	長軸長	短軸長						
1	Ⅶ C13	長い円形	(3.20)	(2.64)	3.02	1.75	1.16	3.90	4.52			
2	Ⅶ D24	円形	(2.20)	(2.20)	1.98	1.85	1.00	2.82	2.82			ススキ、丸木、被焼成シルト質土
3	Ⅶ E26		(2.80)	(2.60)	2.38	2.10	1.25	3.96	4.95		土師器片	
4	Ⅶ F8		(2.76)	(2.62)	2.50	2.28	0.75	4.49	3.37		縄文土器片、土師器片	ススキ、丸木
5	Ⅶ F21		(2.44)	(2.44)	1.87	1.68	1.35	2.42	3.27			
6	Ⅶ F22		(1.80)	(1.80)	1.55	1.55	0.80	1.82	1.46		縄文土器片	丸木
7	Ⅶ G22		(3.15)	(2.56)	2.30	2.10	1.18	4.23	4.99		縄文土器片、土師器片、石器	
8	Ⅶ G25		(2.10)	(1.95)	1.98	1.82	0.73	2.53	1.85			
9	Ⅶ H18		(3.08)	(3.08)	2.40	2.40	1.38	4.20	5.80		縄文土器片、土師器片	
10	Ⅶ H19		(2.74)	(2.24)	2.28	2.08	1.16	3.70	4.29	小土壌1基	縄文土器片、土師器片	
11	Ⅶ H24		(1.88)	(1.72)	1.96	1.79	0.85	2.64	2.24		縄文土器片、土師器片、石器	異地性焼土
12	Ⅶ H26		(1.77)	(1.73)	1.68	1.56	0.60	1.86	1.12		縄文土器片	
13	Ⅶ I25		(2.32)	(2.12)	1.72	1.61	0.98	2.13	2.09		土師器片	
14	Ⅶ I26		(2.25)	(2.25)	1.81	1.81	1.11	2.46	2.73		縄文土器片、土師器片	
15	Ⅷ A24		(2.50)	(2.30)	2.18	2.02	1.12	3.24	3.63			
平均値			(2.47)	(2.28)	2.11	1.89	1.03	3.09	3.48			





上図：陥し穴状遺構配列図

- …… 円形タイプ
- …… 溝状タイプ
- …… 長方形タイプ

左図：土壇(平安時代)配列図

第151図 土壇(平安時代)・陥し穴状遺構配列図

# 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二

副 所 長 宮 英 一

〔管理課〕

課 長 千 葉 久 夫

課長補佐 阿 部 詔 夫

主 事 立 花 多加志

技 能 員 佐 藤 春 男

〔調査課〕

課 長 近 藤 宗 光

主任文化財専門調査員 昆 野 靖

文化財専門調査員 片 方 宗 明 文化財専門調査員 光 井 文 行

“ 長 沼 彬 “ 玉 川 英 喜

“ 菊 池 利 和 “ 石 川 長 喜

“ 渡 辺 洋 一 “ 三 浦 謙 一

“ 佐々木 嘉 直 “ 工 藤 利 幸

“ 平 井 進 “ 中 川 重 紀

“ 中 村 良 一 “ 高 橋 与 右 門

“ 田 村 壯 一 “ 高 橋 義 介

“ 岩 渕 久 “ 酒 井 宗 孝

〔資料課〕

課 長 名 須 川 溢 男

文化財専門調査員 田 鎖 寿 夫

“ 佐々木 清 文

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第97集

## 五庵 I 遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷 昭和61年3月20日

発行 昭和61年3月25日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 熊谷印刷

〒020 盛岡市上田一丁目6番49号

TEL (0196) 53-4151

---

---